

八	ヶ	奥	遺	跡
八	ヶ	奥	製鉄	遺跡
岡		遺		跡
小	坂	古	墳	群
才	地	古	墳	群
才	地		遺	跡

主要地方道佐伯長船線(美作岡山
道路)道路改築に伴う発掘調査 2

2004

序

本報告書には、赤磐郡熊山町岡遺跡と和気郡佐伯町八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡・小坂古墳群・才地古墳群・才地遺跡の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、県東部の発展に資するために計画された、南北を結ぶ美作岡山道路の建設に伴い平成9年度から実施しています。平成9年度から同11年度にかけて発掘調査を実施しました遺跡については、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174として、平成15年3月に刊行しました。

今回、報告する表記の遺跡は、平成11年度から同13年度に実施した第一次調査と全面調査にかかるとのもので、関係する発掘調査報告書としては、2冊目の刊行になります。

弥生時代の佐伯町は、これまで顕著な遺跡の分布が認められていない地域でありました。しかし、今回の調査において、予想をはるかに超える遺跡の規模であることを確認しました。特に、遺跡の中心時期となる弥生時代中期後葉では、多くの土器・石器・鉄器などが出土し、その遺物のなかには県南部や県北さらには県域を越えた搬入土器も認められています。そして、隣接する熊山町岡遺跡と共に弥生時代中期の集落を考える上で貴重な資料を得ることができました。

古墳時代には、調査された古墳群では箱式石棺・横穴式石室・土壙など多様な埋葬施設を伴うことが明らかになりました。そして、出土した遺物には渡来系と考えられる遺物などもあります。また、製鉄関係からは、炭窯と想定される遺構を伴うなどこの地域の製鉄の実態の解明にも寄与するものと考えられます。

以上のように、今回の調査で居住域として不適と思われる北西急斜面に集落が形成されていたことは、これからの遺跡の立地を考える上で、貴重な資料を得ることができました。

この報告書が学術研究に寄与できるばかりでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の研究のための資料として広く役立つならば幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書作成にあたって、岡山県東備地方振興局、熊山町および佐伯町の教育委員会をはじめ、関係各位ならびに地元の方々から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成16年1月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡睦夫

例 言

- 1 本書は、主要地方道佐伯長船線(美作岡山道路)道路改築に伴い、岡山県東備地方振興局から岡山県教育委員会が依頼を受けて、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、八ヶ奥遺跡、八ヶ奥製鉄遺跡、岡遺跡、小坂古墳群、才地古墳群、才地遺跡の報告である。
- 2 岡遺跡、小坂古墳群、才地古墳群、才地遺跡の発掘調査は平成11年度に実施した第一次調査の後、平成12年度から調査を行った。八ヶ奥遺跡、八ヶ奥製鉄遺跡については、工事中発見に伴うものである。調査担当者は、下澤公明・浅倉秀昭・二宮治夫・光永真一・澤山孝之・室山博文・下垣豪・松村さを里・馬路晃洋である。
- 3 発掘調査および報告書作成にあたっては、美作岡山道路改築に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、土居徹・野崎貴博・間壁忠彦・松木武彦の各氏に委員を委嘱した。対策委員各位からは、終始有益な御指導とご助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
- 4 自然科学分野における鑑定、同定については次の諸氏、機関に依頼し有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただき、付載に収載し、それ以外については本文中で用いた。記して深く感謝の意を表する次第である。
 - ・才地遺跡出土の銅線と微小破片 肥塚隆保・降幡順子
(独立行政法人奈良文化財研究所、埋蔵文化財センター)
 - ・才地遺跡出土のガラス勾玉 肥塚隆保
(独立行政法人奈良文化財研究所、埋蔵文化財センター)
 - ・才地遺跡、岡遺跡出土土器の胎土分析 白石 純(岡山理科大学自然科学研究所)
 - ・八ヶ奥製鉄遺跡の鉄滓 大澤正己(株)九州テクノリサーチ・TACセンター)
 - ・才地遺跡、岡遺跡出土の石材肉眼同定 妹尾 護(倉敷芸術科学大学)
 - ・八ヶ奥製鉄遺跡、
八ヶ奥遺跡、才地遺跡の樹種同定 環境考古研究会
 - ・八ヶ奥製鉄遺跡、
才地遺跡のC14年代測定 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 5 報告書の作成は、平成14年4月から同年7月まで1名、同年8月から平成15年3月まで2名で岡山県古代吉備文化財センターで行った。
- 6 本報告書の整理担当者は、下澤公明と玉木秀幸である。本文の執筆は、柳瀬昭彦・下澤公明・二宮治夫・浅倉秀昭・光永真一・澤山孝之が行い、章と節および項、または文末に文責を記した。
- 7 本文に掲載した遺構写真は、調査担当者が撮影した。遺物写真は整理担当者の指示により、江尻泰行の協力と援助を仰いだ。
- 8 本書の編集は、下澤公明が担当し玉木秀幸が援助した。
- 9 本報告書の関係する遺物・実測図・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)に保管している。

凡 例

- 1 報告書に記載された高度値は海拔であり、方位は特に示さない限り磁北である。
- 2 遺物番号は、章立ての各遺跡ごとに付した。土器以外のものについては材質・種別を示すため下記の略号を番号の前に付した。

石器・石製品－S 金属器・金属製品－M 玉類－O

- 3 掲載した遺構の縮尺率は必ずしも統一がはかれず、個別にスケールを付した。なお、遺物は土器が基本的に1/4である。鉄器・玉・石器は、スケールの表示ではなく数値で示した。
- 4 石器に示した線の表示は、以下の内容を表現とする。

使用痕 —————

敲打痕 — — —

自然面 — — — —

- 5 石器のドット表示は、下記の内容を表現した。

●サヌカイト ○スクレイパー ■水晶 □石鏃 ▲鉄器 △石包丁

- 6 火処の焼土表示は、下記のスクリーントーンを用いた。



- 7 遺構名を省略する場合の略称は、以下のとおりである。

竪穴住居－住 段状遺構－段 建物－建 土壙墓－墓 土器棺墓－棺 陥し穴－穴 土壙－土
土器溜り－土溜 また、遺物名については壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器、水差形土
器、器台形土器 などは、壺、甕、高杯、鉢、水差、器台のように略称して用いている。

- 8 遺物図版は、遺構に伴うものと埋土のものとを分けて掲載した。
- 9 第1章第1図および第2章第2図は国土交通省国土地理院発行「万富」「周匝」の2万5千分の1地形図を複製し、加筆した。

本文目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 発掘調査および報告書作成の経緯	1
第1節 調査に至る経過と対象遺跡	1
第2節 第一次調査	2
第3節 発掘調査および報告書作成の体制	11
第2章 地理的・歴史的環境	15
第3章 八ヶ奥遺跡	17
第1節 調査区の概要	17
第2節 調査の概要	17
第4章 八ヶ奥製鉄遺跡	31
第1節 調査区の概要	31
第2節 調査の概要	32
第3節 小結	39
第5章 岡遺跡	40
第1節 調査区の概要	40
第2節 調査の概要	40
第6章 小坂古墳群	70
第1節 調査区の概要	70
第2節 調査の概要	71
第7章 才地古墳群	80
第1節 調査区の概要	80
第2節 調査の概要	81
第8章 才地遺跡	105
第1節 調査区の概要	105
第2節 調査の概要	107
第9章 結語	301
付載1 才地遺跡出土金属製遺物の調査	321
付載2 才地遺跡出土の胎土分析	324
付載3 八ヶ奥製鉄遺跡出土製錬滓の金属学的調査	327
報告書抄録	

目 次

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

第1図 道路予定路線と対象遺跡(1/80,000)	土層断面図(1/100)
第2図 岡遺跡トレンチ配置図(1/300)	第8図 小坂古墳群・才地遺跡T7(NE-SW)・8(NE-SW)・9(NE-SW)・11(N-S)・17(NE-SW)土層断面図(1/100)
第3図 第一次調査トレンチ位置図(1/4,000)	第9図 小坂古墳群・才地遺跡T21(NE-SW)・22(N-S)土層断面図(1/100)
第4図 調査遺跡位置図(1/4,000)	第10図 小坂古墳群・才地遺跡T23B(W-E)・25(W-E)土層断面図(1/100)
第5図 小坂古墳群・才地遺跡T24(NW-SE)土層断面図(1/100)	第11図 才地遺跡調査区設定図
第6図 小坂古墳群・才地遺跡T26(NW-SE)土層断面図(1/100)	
第7図 小坂古墳群・才地遺跡T1(E-W)・4(E-W)・6(NE-SW)	

第2章 地理的・歴史的環境

第1図 遺跡位置図(1/1,500,000)	第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)
------------------------	-----------------------

第3章 八ヶ奥遺跡

第1図 調査区遺構配置図(1/300)	第11図 竪穴住居6(1/30)・出土遺物(1/4)
第2図 竪穴住居1(1/60・1/30)	第12図 竪穴住居7(1/60)・出土遺物(1/4)
第3図 竪穴住居1出土遺物1(1/4)	第13図 竪穴住居8(1/60)・出土遺物(1/4)
第4図 竪穴住居1出土遺物2(1/4・1/2)	第14図 竪穴住居9(1/60)
第5図 竪穴住居2(1/60)	第15図 土壇1(1/30)・出土遺物(1/4)
第6図 竪穴住居2出土遺物(1/4・1/3)	第16図 土壇2(1/40)・出土遺物(1/4)
第7図 竪穴住居3(1/60)・出土遺物(1/4)	第17図 土壇3(1/40)
第8図 竪穴住居4(1/60)	第18図 土壇4(1/40)
第9図 竪穴住居4出土遺物(1/4)	第19図 土壇5(1/40)
第10図 竪穴住居5(1/60)・出土遺物(1/4)	第20図 土壇6(1/30)

第4章 八ヶ奥製鉄遺跡

第1図 八ヶ奥製鉄遺跡全体図(1/160)	第6図 製鉄炉3(1/60)
第2図 製鉄炉1(1/60)	第7図 炭窯(1/80)
第3図 製鉄炉1地下構造(1/30)	第8図 土壇1・2(1/40)
第4図 製鉄炉1炉底西半(1/6)	第9図 出土遺物(1/4)
第5図 製鉄炉2(1/60)	

第5章 岡遺跡

第1図 調査区遺構配置図(1/500)	第8図 竪穴住居5(1/60)
第2図 竪穴住居1(1/60)・出土遺物1(1/4)	第9図 竪穴住居5出土遺物(1/4・1/3・1/2)
第3図 竪穴住居1出土遺物2(1/2・1/3)	第10図 竪穴住居6(1/80)
第4図 竪穴住居2(1/60)・出土遺物1(1/4)	第11図 竪穴住居7(1/60)
第5図 竪穴住居2出土遺物2(1/3)	第12図 竪穴住居8・9(1/60)
第6図 竪穴住居3(1/60)・出土遺物(1/4)	第13図 竪穴住居10(1/60)・出土遺物(1/4)
第7図 竪穴住居4(1/60)	第14図 竪穴住居11(1/60)・出土遺物(1/4)

- 第15図 段状遺構1(1/60)
- 第16図 段状遺構2(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第17図 段状遺構3(1/60)・出土遺物(1/4・1/3)
- 第18図 段状遺構4(1/60)
- 第19図 段状遺構5(1/60)
- 第20図 段状遺構6(1/60)
- 第21図 段状遺構7(1/60)
- 第22図 段状遺構8(1/60)
- 第23図 段状遺構9(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第24図 段状遺構10(1/60)
- 第25図 段状遺構11(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第26図 段状遺構12(1/60)・出土遺物(1/4・1/3)
- 第27図 建物(1/60)・出土遺物(1/2)
- 第28図 柱穴列(1/60)
- 第29図 陥し穴1(1/40)
- 第30図 陥し穴2(1/40)
- 第31図 陥し穴3(1/40)
- 第32図 陥し穴4(1/40)

- 第33図 土壙1(1/40)
- 第34図 土壙2(1/40)
- 第35図 土壙3(1/40)
- 第36図 土壙4(1/40)
- 第37図 土壙5(1/40)
- 第38図 土壙6(1/40)
- 第39図 土壙7(1/40)・出土遺物1(1/3・1/4)
- 第40図 土壙7出土遺物2(1/4)
- 第41図 土壙8(1/40)
- 第42図 土壙9(1/40)
- 第43図 土壙10(1/40)
- 第44図 土壙11(1/40)
- 第45図 土壙12(1/40)
- 第46図 土壙13(1/40)
- 第47図 溝(1/60)
- 第48図 古墳(1/40)
- 第49図 古墳石室(1/40)

第6章 小坂古墳群

- 第1図 調査区全体図(1/300)
- 第2図 1号墳(1/120)
- 第3図 1号墳横穴式石室(1/60)
- 第4図 1号墳横穴式石室出土遺物配置図(1/40)
- 第5図 1号墳横穴式石室出土遺物1(1/4)

- 第6図 1号墳横穴式石室出土遺物2(1/3)
- 第7図 1号墳周溝内石槨(1/60)
- 第8図 4号墳(1/150)
- 第9図 4号墳石室(1/40)・出土遺物(1/4)

第7章 才地古墳群

- 第1図 調査区遺構配置図(1/400)
- 第2図 1号墳地形測量図(1/150)
- 第3図 1号墳墳丘土層断面図(1/150)
- 第4図 1号墳横穴式石室(1/60・30)
- 第5図 1号墳石室内遺物配置図(1/40)
- 第6図 1号墳出土遺物1(1/4)
- 第7図 1号墳出土遺物2(1/4)
- 第8図 1号墳出土遺物3(1/3)
- 第9図 1号墳出土遺物4(1/3)
- 第10図 1号墳出土遺物5(1/3)
- 第11図 1号墳出土遺物6(1/3)
- 第12図 1号墳出土遺物7(1/3・1/2)
- 第13図 2号墳(1/80)・出土遺物(1/4)

- 第14図 3号墳(1/80)・出土遺物(1/2)
- 第15図 4号墳(1/30)
- 第16図 4号墳石室1(1/30)
- 第17図 4号墳石室2(1/30)
- 第18図 4号墳出土遺物(1/4・1/3・1/2)
- 第19図 5号墳(1/80)・出土遺物(1/3)
- 第20図 6号墳(1/60)
- 第21図 6号墳石室(1/30)・出土遺物(1/4)
- 第22図 土壙墓1(1/30)・出土遺物(1/4)
- 第23図 土壙墓2(1/30)
- 第24図 土壙墓2出土遺物1(1/4)
- 第25図 土壙墓2出土遺物2(1/3)

第8章 才地遺跡

- 第1図 調査区全体図(1/1,000)
- 第2図 I区遺構配置図(1/300)
- 第3図 竪穴住居1~3(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第4図 竪穴住居4~6(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第5図 土壙1(1/30)

- 第6図 土壙2(1/40)
- 第7図 土壙3(1/40)・出土遺物(1/4)
- 第8図 IIa区遺構配置図(1/300)
- 第9図 竪穴住居7(1/60)
- 第10図 竪穴住居7出土遺物(1/4・1/2・1/3)

- 第11図 竪穴住居8～10(1/60)
- 第12図 竪穴住居8～10土層断面図(1/60)
- 第13図 竪穴住居8出土遺物(1/4)
- 第14図 竪穴住居9出土遺物(1/4)
- 第15図 竪穴住居10出土遺物(1/4・1/2)
- 第16図 竪穴住居11(1/60)
- 第17図 竪穴住居11出土遺物(1/4)
- 第18図 竪穴住居12・13(1/60)
- 第19図 竪穴住居12出土遺物(1/4)
- 第20図 竪穴住居13出土遺物(1/4)
- 第21図 竪穴住居14(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第22図 竪穴住居15・16(1/60)・竪穴住居15出土遺物(1/4)
- 第23図 竪穴住居17・18(1/60)・竪穴住居17出土遺物(1/4)
- 第24図 段状遺構1(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第25図 建物(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第26図 土壌5(1/40)
- 第27図 土壌6(1/40)・出土遺物(1/4)
- 第28図 土壌7(1/30)・出土遺物(1/4)
- 第29図 土壌8(1/30)
- 第30図 土器棺墓(1/20)・出土遺物(1/4)
- 第31図 II b区遺構配置図(1/300)
- 第32図 竪穴住居19(1/60)
- 第33図 竪穴住居19a(1/60)
- 第34図 竪穴住居19b(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)
- 第35図 竪穴住居20(1/80・1/60)
- 第36図 竪穴住居20土層断面図(1/60)
- 第37図 竪穴住居20出土遺物1(1/4)
- 第38図 竪穴住居20出土遺物2(1/2)
- 第39図 竪穴住居21(1/80・1/60)
- 第40図 竪穴住居21土層断面図(1/60)
- 第41図 竪穴住居21出土遺物1(1/4・1/2)
- 第42図 竪穴住居21出土遺物2(1/3)
- 第43図 竪穴住居22・23(1/60)
- 第44図 竪穴住居22出土遺物(1/4・1/2・1/3)
- 第45図 竪穴住居23出土遺物(1/4・1/3)
- 第46図 竪穴住居24(1/60)
- 第47図 竪穴住居24土層断面図(1/60)
- 第48図 竪穴住居24出土遺物(1/4)
- 第49図 竪穴住居25～27(1/60)
- 第50図 竪穴住居25出土遺物(1/4)
- 第51図 竪穴住居28(1/60)
- 第52図 竪穴住居28出土遺物(1/4・1/2・1/3)
- 第53図 竪穴住居29(1/60)
- 第54図 竪穴住居29出土遺物(1/4)
- 第55図 炉1(1/30)
- 第56図 炉2(1/30)
- 第57図 土壌9(1/30)
- 第58図 柱穴1出土遺物(1/4)
- 第59図 II c区遺構配置図(1/300)
- 第60図 竪穴住居30・31(1/60)
- 第61図 竪穴住居30出土遺物(1/4・1/3)
- 第62図 竪穴住居31出土遺物(1/4)
- 第63図 竪穴住居32(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第64図 竪穴住居33(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)
- 第65図 竪穴住居34(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第66図 竪穴住居35(1/60)
- 第67図 竪穴住居35関係図(1/60)
- 第68図 竪穴住居35出土遺物1(1/4)
- 第69図 竪穴住居35出土遺物2(1/4)
- 第70図 竪穴住居35出土遺物3(1/4・1/2)
- 第71図 竪穴住居36～38(1/60・1/80)
- 第72図 竪穴住居36～38土層断面図(1/60)
- 第73図 竪穴住居36出土遺物1(1/4)
- 第74図 竪穴住居36出土遺物2(1/4)
- 第75図 竪穴住居36出土遺物3(1/2)
- 第76図 竪穴住居37出土遺物1(1/4)
- 第77図 竪穴住居37出土遺物2(1/4・1/3・1/2)
- 第78図 竪穴住居38出土遺物(1/4・1/2)
- 第79図 竪穴住居39(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第80図 竪穴住居40・41(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)
- 第81図 竪穴住居42～44(1/60)
- 第82図 竪穴住居42・44出土遺物(1/2)
- 第83図 竪穴住居45(1/60・1/30)
- 第84図 竪穴住居45土層断面図(1/60)
- 第85図 竪穴住居45出土遺物(1/4・1/3)
- 第86図 竪穴住居46(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第87図 段状遺構2(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)
- 第88図 段状遺構3(1/60)
- 第89図 段状遺構3出土遺物(1/4・1/2)
- 第90図 段状遺構4(1/60)・出土遺物(1/2)
- 第91図 段状遺構5(1/60)・出土遺物(1/4)
- 第92図 炉3(1/30)
- 第93図 焼土壌1(1/30)
- 第94図 焼土壌2(1/30)
- 第95図 焼土壌3(1/30)
- 第96図 土壌10(1/30)・出土遺物(1/4)
- 第97図 土壌11(1/30)
- 第98図 土壌12(1/30)
- 第99図 土壌13(1/30)
- 第100図 土壌14(1/30)
- 第101図 土壌15(1/30)
- 第102図 土壌16(1/60)
- 第103図 土壌17(1/30)
- 第104図 土壌18(1/30)
- 第105図 土壌19(1/60)
- 第106図 土壌20(1/30)
- 第107図 土壌21(1/30)
- 第108図 土壌22(1/30)
- 第109図 土壌23(1/60)
- 第110図 土壌24(1/60)

- 第111区 柱穴2(1/30)・出土遺物(1/4)
第112区 柱穴3(1/30)
第113区 溝1出土遺物(1/4)
第114区 石組(1/30)
第115区 III a区遺構配置図(1/300)
第116区 竪穴住居47・48(1/60)
第117区 竪穴住居47出土遺物(1/4)
第118区 竪穴住居48出土遺物(1/4)
第119区 竪穴住居49(1/60)
第120区 竪穴住居49出土遺物(1/4)
第121区 竪穴住居50-1(1/120・1/60)
第122区 竪穴住居50土層断面図(1/60)
第123区 竪穴住居50-2(1/120・1/60)
第124区 竪穴住居50出土遺物1(1/4)
第125区 竪穴住居50出土遺物2(1/4・1/2・1/3)
第126区 竪穴住居51(1/60)
第127区 竪穴住居51出土遺物1(1/4)
第128区 竪穴住居51出土遺物2(1/2・1/3)
第129区 土壙25(1/30)
第130区 土壙26(1/30)
第131区 土壙27(1/30)
第132区 溝2(1/60)
第133区 III b区遺構配置図(1/300)
第134区 竪穴住居52(1/60)
第135区 竪穴住居52出土遺物1(1/4)
第136区 竪穴住居52出土遺物2(1/2・1/3)
第137区 竪穴住居53(1/60)
第138区 竪穴住居53出土遺物1(1/4)
第139区 竪穴住居53出土遺物2(1/4・1/2・1/3)
第140区 竪穴住居54(1/60)・出土遺物(1/4・1/2・1/3)
第141区 竪穴住居55(1/60)
第142区 竪穴住居55出土遺物(1/4)
第143区 竪穴住居56・57(1/60・1/30)
第144区 竪穴住居56出土遺物1(1/4・1/3)
第145区 竪穴住居56出土遺物2(1/3)
第146区 竪穴住居56内集石遺構(1/6)・出土遺物1(1/3)
第147区 竪穴住居56内集石遺構出土遺物2(1/3)
第148区 竪穴住居57出土遺物1(1/4)
第149区 竪穴住居57出土遺物2(1/2)
第150区 土壙28(1/30)・出土遺物(1/4)
第151区 土壙29(1/40)
第152区 土壙30(1/60)
第153区 土壙30出土遺物(1/4・1/2・1/3)
第154区 土壙31(1/40)・出土遺物(1/4)
第155区 土壙32(1/30)
第156区 土壙33(1/30)
第157区 土壙34(1/30)
第158区 土壙35(1/30)
第159区 土壙36(1/30)
第160区 土壙36出土遺物1(1/4)
第161区 土壙36出土遺物2(1/4)
第162区 III c区遺構配置図(1/300)
第163区 竪穴住居58(1/60)
第164区 竪穴住居59(1/60)
第165区 竪穴住居59出土遺物1(1/4)
第166区 竪穴住居59出土遺物2(1/4・1/2・1/3)
第167区 竪穴住居60(1/60)
第168区 竪穴住居61(1/60)・出土遺物(1/4)
第169区 竪穴住居62~66(1/120・1/60)
第170区 竪穴住居62(1/60)
第171区 竪穴住居62出土遺物(1/4・1/2・1/3)
第172区 竪穴住居63・66土層断面図(1/60)
第173区 竪穴住居63・64・66土層断面図(1/60)
第174区 竪穴住居63出土遺物(1/4・1/2)
第175区 竪穴住居64出土遺物(1/4)
第176区 竪穴住居65(1/60)
第177区 竪穴住居65出土遺物1(1/4)
第178区 竪穴住居65出土遺物2(1/4)
第179区 竪穴住居65出土遺物3(1/4・1/2・1/3)
第180区 竪穴住居66出土遺物1(1/4)
第181区 竪穴住居66出土遺物2(1/4)
第182区 竪穴住居66出土遺物3(1/4)
第183区 竪穴住居66出土遺物4(1/4)
第184区 竪穴住居66出土遺物5(1/4)
第185区 竪穴住居66出土遺物6(1/4)
第186区 竪穴住居66出土遺物7(1/4・1/2・1/3)
第187区 竪穴住居66出土遺物8(1/2・1/3)
第188区 竪穴住居66出土遺物9(1/4・1/2)
第189区 竪穴住居67・68(1/60)・出土遺物(1/4)
第190区 段状遺構6(1/60)
第191区 段状遺構6出土遺物(1/4)
第192区 土壙37(1/30)
第193区 土壙38(1/40・1/60)
第194区 土壙38出土遺物1(1/4・1/6)
第195区 土壙38出土遺物2(1/4)
第196区 土壙38出土遺物3(1/4)
第197区 土壙38出土遺物4(1/4)
第198区 土壙38出土遺物5(1/4)
第199区 土壙38出土遺物6(1/4・1/2)
第200区 土壙39(1/30)
第201区 土壙39出土遺物(1/4)
第202区 土壙41(1/30)
第203区 土壙42(1/30)
第204区 土壙42出土遺物(1/4・1/2)
第205区 火葬墓(1/30)・出土遺物(1/4)
第206区 溝3出土遺物(1/4)
第207区 溝4(1/30)・出土遺物(1/2)
第208区 IV a区遺構配置図(1/300)
第209区 竪穴住居69(1/80)・出土遺物(1/4・1/3)
第210区 竪穴住居70(1/60)・出土遺物(1/4)

第211図 竪穴住居71・73(1/60)
 第212図 竪穴住居71土層断面図(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)
 第213図 竪穴住居72(1/60)・出土遺物(1/4)
 第214図 竪穴住居73出土遺物(1/2)
 第215図 竪穴住居74(1/60)
 第216図 土壙43(1/80)
 第217図 土壙44(1/40)
 第218図 柱穴4出土遺物(1/4)
 第219図 柱穴5出土遺物(1/4)
 第220図 土壙墓1(1/30)
 第221図 土壙墓2(1/40)
 第222図 土壙墓3(1/30)・出土遺物(1/4)
 第223図 IVb区遺構配置図(1/300)
 第224図 竪穴住居75(1/60)・出土遺物(1/4)
 第225図 竪穴住居76(1/60)・出土遺物(1/4・1/3)
 第226図 土壙45(1/40)
 第227図 IVc区遺構配置図(1/300)
 第228図 竪穴住居77・78(1/60)・出土遺物(1/4)
 第229図 竪穴住居79(1/60)
 第230図 竪穴住居80(1/60)・出土遺物(1/4)

第231図 土壙46(1/40)
 第232図 土壙47(1/40)
 第233図 土壙48(1/40)
 第234図 土壙49(1/40)
 第235図 土壙50(1/40)
 第236図 土壙51(1/40)
 第237図 土壙52(1/40)・出土遺物(1/4)
 第238図 土壙53(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)
 第239図 土壙54(1/40)
 第240図 土壙54出土遺物(1/2)
 第241図 土壙55(1/40)
 第242図 土壙56(1/40)
 第243図 土壙57(1/40)・出土遺物(1/4)
 第244図 土壙58(1/40)・出土遺物(1/4)
 第245図 V区遺構配置図(1/300)
 第246図 段状遺構7・8(1/60)
 第247図 段状遺構7出土遺物(1/4)
 第248図 段状遺構8出土遺物(1/4)
 第249図 土壙59(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)
 第250図 遺構に伴わない遺物(1/4・1/3・1/1)

第9章 結 語

第1図 岡遺跡重複遺構出土遺物
 第2図 才地遺跡重複遺構出土遺物1
 第3図 才地遺跡重複遺構出土遺物2
 第4図 才地遺跡重複遺構出土遺物3
 第5図 才地遺跡重複遺構出土遺物4

第6図 才地遺跡重複遺構出土遺物5
 第7図 才地遺跡重複遺構出土遺物6
 第8図 才地遺跡重複遺構出土遺物7
 第9図 接合遺物関係図

表 目 次

表 美作岡山道路(本報告書関係)遺跡一覧

写真図版目次

写真図版 1

- 1 八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡調査前全景(東から)
- 2 八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡調査後全景(北東から)
- 3 八ヶ奥遺跡竪穴住居1(南から)
- 4 八ヶ奥遺跡竪穴住居2(南東から)
- 5 八ヶ奥製鉄遺跡製鉄炉1炉底検出状況(北から)
- 6 八ヶ奥製鉄遺跡製鉄炉2(北から)
- 7 八ヶ奥製鉄遺跡炭窯(北から)
- 8 八ヶ奥製鉄遺跡炭窯(西から)

写真図版 2

- 1 岡遺跡陥し穴(南東から)

2 岡遺跡土壙7(南から)

- 3 岡遺跡竪穴住居10(南東から)

写真図版 3

- 1 小坂古墳群1・4号墳調査前全景(北東から)
- 2 小坂古墳群1号墳(東から)
- 3 小坂古墳群1号墳石室(南東から)
- 4 小坂古墳群1号墳石室(北西から)
- 5 小坂古墳群1号墳周溝土層断面(南から)
- 6 小坂古墳群1号墳石室掘り方(南東から)
- 7 小坂古墳群1・4号墳調査前全景(北東から)
- 8 小坂古墳群4号墳主体部(北から)

写真図版 4

- 1 才地古墳群調査区遠景(北西から)
- 2 才地古墳群1号墳(南から)
- 3 才地古墳群1号墳石室掘り方(北西から)
- 4 才地古墳群1号墳石室(北西から)
- 5 才地古墳群1号墳石室内遺物出土状況(北西から)
- 6 才地古墳群1号墳奥壁(北西から)
- 7 才地古墳群1号墳奥壁掘り方(南東から)
- 8 才地古墳群1号墳(南東から)

写真図版 5

- 1 才地古墳群4号墳石室検出状況(西から)
- 2 才地古墳群4号墳石室(南から)
- 3 才地古墳群土壙墓2下層(南東から)

写真図版 6

- 1 才地遺跡Ⅰ・Ⅱ区全景(空撮)
- 2 才地遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全景(空撮)

写真図版 7

- 1 才地遺跡Ⅲa区全景(空撮)
- 2 才地遺跡Ⅲb・c区全景(空撮)

写真図版 8

- 1 才地遺跡竪穴住居35A-A'土層断面(北から)
- 2 才地遺跡竪穴住居65(北から)
- 3 才地遺跡竪穴住居75炭化材検出状況(西から)

写真図版 9

- 1 八ヶ奥遺跡出土遺物
- 2 八ヶ奥製鉄遺跡製鉄炉1炉底

写真図版10

岡遺跡出土遺物

写真図版11

小坂古墳群1・4号墳出土遺物

写真図版12

才地古墳群1号墳出土遺物

写真図版13

才地古墳群1・4号墳出土遺物

写真図版14

才地古墳群6号墳、土壙墓1・2出土遺物

写真図版15

才地遺跡出土遺物1

写真図版16

才地遺跡出土遺物2

写真図版17

才地遺跡出土遺物3

写真図版18

- 1 才地遺跡出土遺物4
- 8 才地遺跡出土の痕跡
- 3 才地遺跡出土の凹線文

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

第1節 調査に至る経過と対象遺跡

岡山県は、県政の最重要課題の一つである県内循環高速道路の形成を積極的に取り組むなかで、既存の中国縦貫自動車道・山陽自動車道・岡山横断自動車道岡山米子線に、主要地方道佐伯長船線道路



*遺跡名の後の()内は、本事業報告書シリーズ番号

第1図 道路予定路線と対象遺跡(1/80,000)

改築及び美作岡山道路建設を加え、瀬戸町(山陽自動車道)から勝央町(中国縦貫自動車道)区間の整備計画を策定した。

県教育庁文化課は、路線計画段階の平成4年に熊山～吉井間の関係町の詳細分布調査等を実施し、路線決定に備えた。そして、両間の路線決定の後、用地買収等の条件整備がある程度整った平成8年度から、熊山～吉井間の埋蔵文化財の取り扱いについて、県東備地方振興局との本格的な協議が始まった。具体的には、県教育委員会が平成8年度末に文化財保護法第57条の3の通知を受け、道路用地内の周知の遺跡については発掘調査を実施し、さらに調査の結果重要な遺構などが発見された場合は別途協議することなどを条件に、記録保存の措置をとることとなった。

調査は平成9年度から開始し、当年度は予定地内の前内池墳墓群を主に、熊山町(可真下、稗田、岡・佐古)と吉井町(光木、二軒屋)内の遺跡確認を実施した。平成10年度の調査は前内池遺跡群と佐古遺跡の一部、来光寺跡・立道遺跡、同11年度には佐古遺跡、来光寺跡・立道遺跡の残部、平岩古墳、ハヶ奥遺跡・同製鉄遺跡(工事中発見)、さらに熊山町可真上・佐伯町小坂内などの確認調査を実施。同12年度は慶運寺跡、岡遺跡、小坂古墳群、才地遺跡、同古墳、同13年度は才地遺跡の残部と慶運寺遺跡・谷の前遺跡、同14年度は慶運寺遺跡の一部と土井遺跡の約2/3を実施した。

なお、調査対象遺跡の位置、本書所収遺跡等については左図を参照願いたい。(柳瀬)

第2節 第一次調査

岡遺跡 (第2図)

岡遺跡は東方向に延びた丘陵上に位置し、佐古遺跡が存在する丘陵から北西に約150mの場所にあたる。当初、平成5年度の分布調査では、「岡散布地」として同丘陵から北側に開口する谷部の農道上で中世の須恵質土器を採集していたことから、確認トレンチをこの遺物採集地点周辺に6本(T1~4・10・11)設定した。また、路線予定地内の地形を考慮して、遺跡の存在の可能性がある尾根部にも7本(T5~9・12・13)のトレンチを設定し、合計13本の調査を行った。担当は調査員3名があたり、調査期間は平成11年7月22日から9月27日で、調査面積は270m²であった。なお、この調査期間内に熊山町佐古遺跡の発掘調査と佐伯町小坂地区の確認調査を並行して実施した。

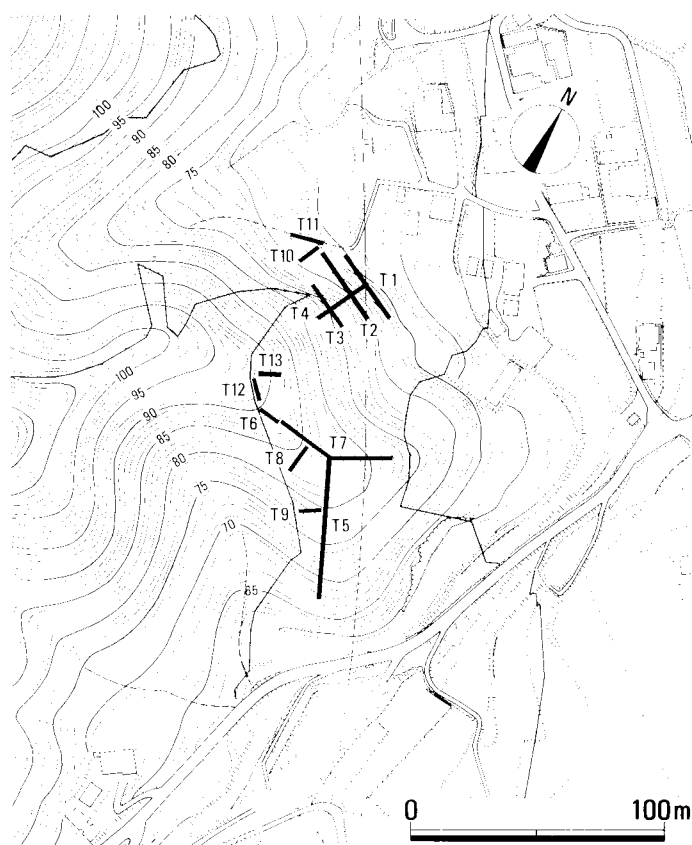
遺物採集地点周辺のトレンチ断面は基本的に同一の層序を示しており、表土下には約30~80cmの褐色系の斜面堆積土が存在した。このうち、T1~4の表土直下には、約5~20cm程度を測る果樹園あるいは植林用通路の造成土が一部に間層としてみられた。また、T1・2の東側とT10の北端の3ヵ所には現代の攪乱穴が認められた。結果的にこの範囲では遺構、遺物は検出されず、当初想定していた中世期の集落の存在は確認できなかった。

一方、尾根部ではT5・6・8・12・13の表土下10~30cmにおいて竪穴住居、段状遺構、土壇、柱穴などの遺構が検出された。このうち、T5の段状遺構からは弥生時代中期と考えられる土器が認められ、T5~9の包含層からも同期の遺物の出土をみた。加えて、T6・7・9・12の包含層からは古代から中世の時期と思われる土師質土器、須恵質土器などが確認された。丘陵上方からの流れ込みの可能性もあるが、同期の遺構の存在も考えられた。

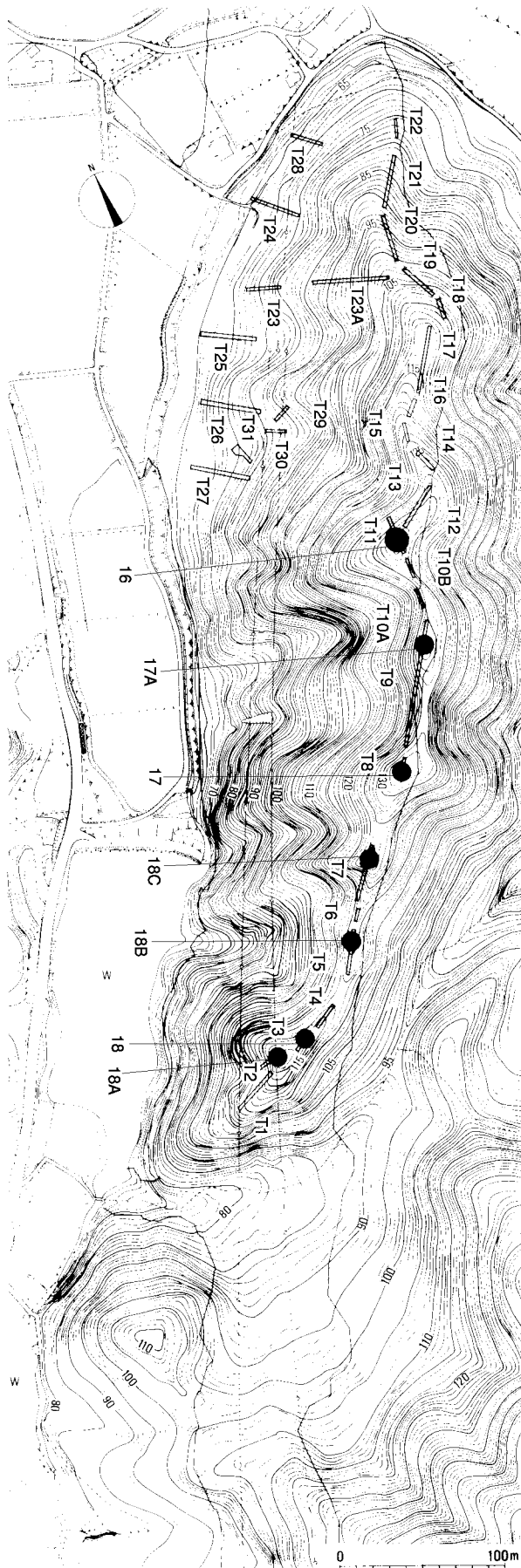
以上の調査結果から、この丘陵尾根部には弥生時代中期を主体とする集落の存在が明らかとなり、さらに古代から中世にかけての集落が存在する可能性も指摘された。よって、工事により削平を受ける範囲について全面調査を実施することになった。遺跡名は今回新規発見となるこの遺跡について、岡遺跡と称することとした。

才地遺跡・小坂古墳群 (第3~10図)

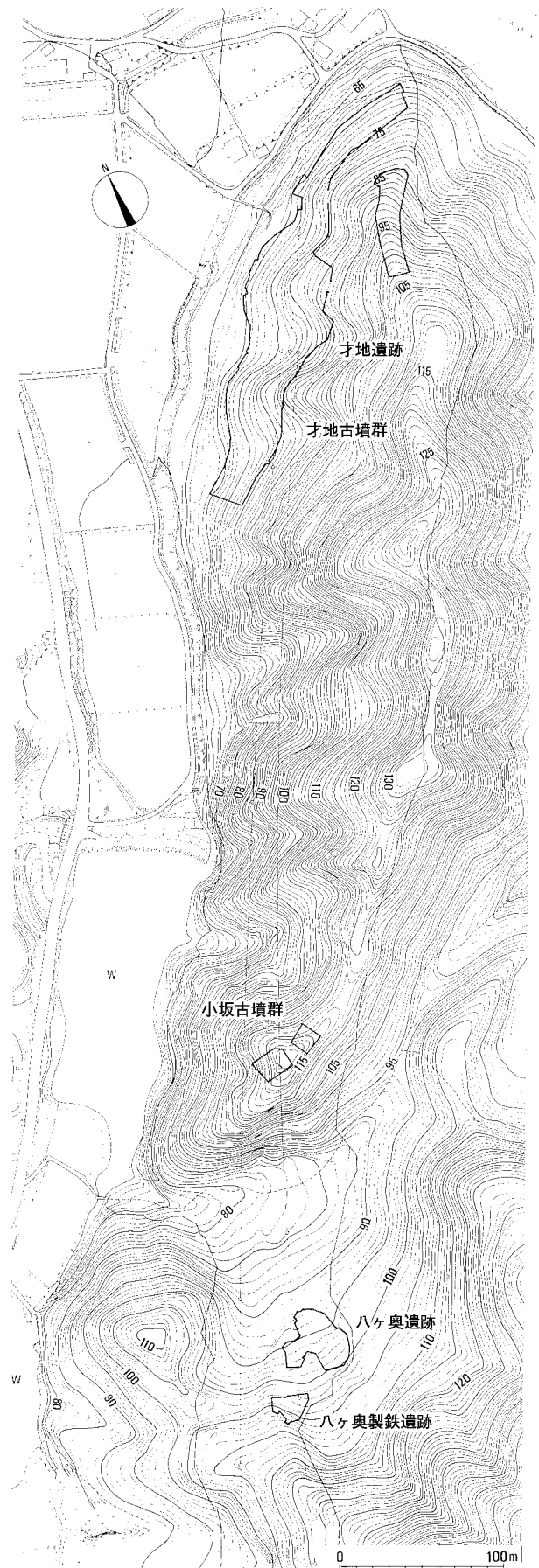
佐伯町小坂地区の確認調査は、南北方向に延びる独立丘陵上に存在する小坂1(No.18)号墳、2(No.17)号墳、3



第2図 岡遺跡トレンチ配置図(1/300)



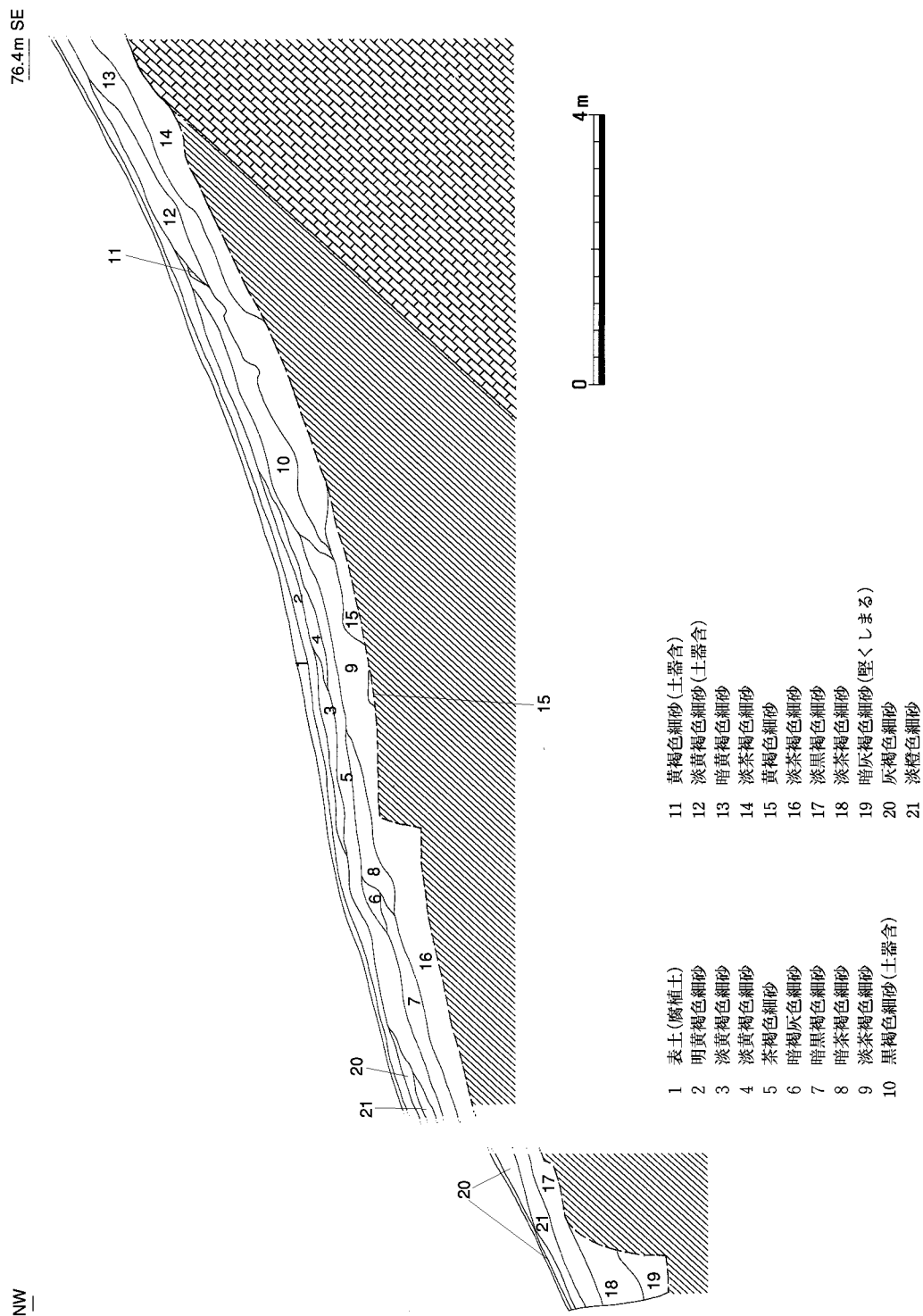
第3図 第一次調査トレンチ位置図(1/4,000)



第4図 調査遺跡位置図(1/4,000)

(No.16)号墳およびNo.18A号墳、No.18B号墳、No.18C号墳、No.17A号墳とされる7基(地点)と路線予定地内の地形を考慮して、集落が立地する可能性が考えられる丘陵北側を対象とし、トレンチは合計28本を設定した。

調査期間は平成11年8月23日から平成12年2月16日で、調査面積は874m²であった。担当は平成11年9月までが調査員3名、その後は2名であった。なお、この調査期間内に熊山町佐古遺跡、佐伯町八ヶ奥遺跡、八ヶ奥製鉄遺跡の発掘調査と熊山町境ヶ鼻遺跡、土井遺跡の確認調査を実施したが、八ヶ奥

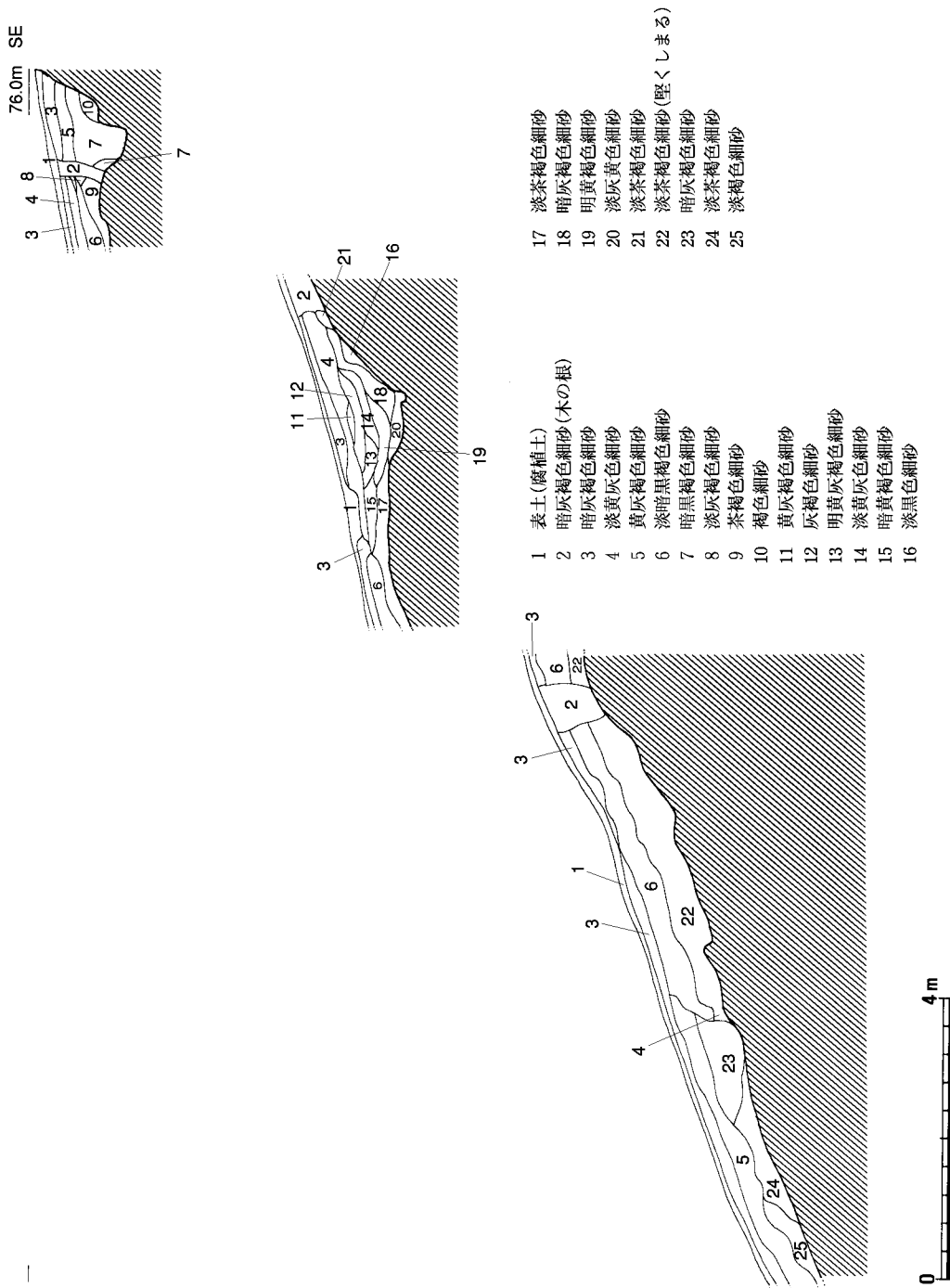


第5図 小坂古墳群・才地遺跡T24(NW-SE)土層断面図(1/100)

遺跡、ハヶ奥製鉄遺跡の発掘調査期間は作業を完全に中断している。

丘陵南側に存在する古墳と推定された7基(地点)は、これらが位置している尾根筋に沿ってトレンチ12本(T1~12)を設定し、調査を行った。その結果、小坂1 (No.18) 号墳は径約8m、高さ0.8~1mを測る石室を有する円墳であると想定され、周溝肩口あるいは旧地表面では須恵器の甕片が出土した。また、No.18A号墳は土層断面からは状況が判然としないため、頂部付近の表土(腐植土)を一部除去して精査したところ、箱式石棺を用いた主体部を確認した。盛土などはほとんど流出している。

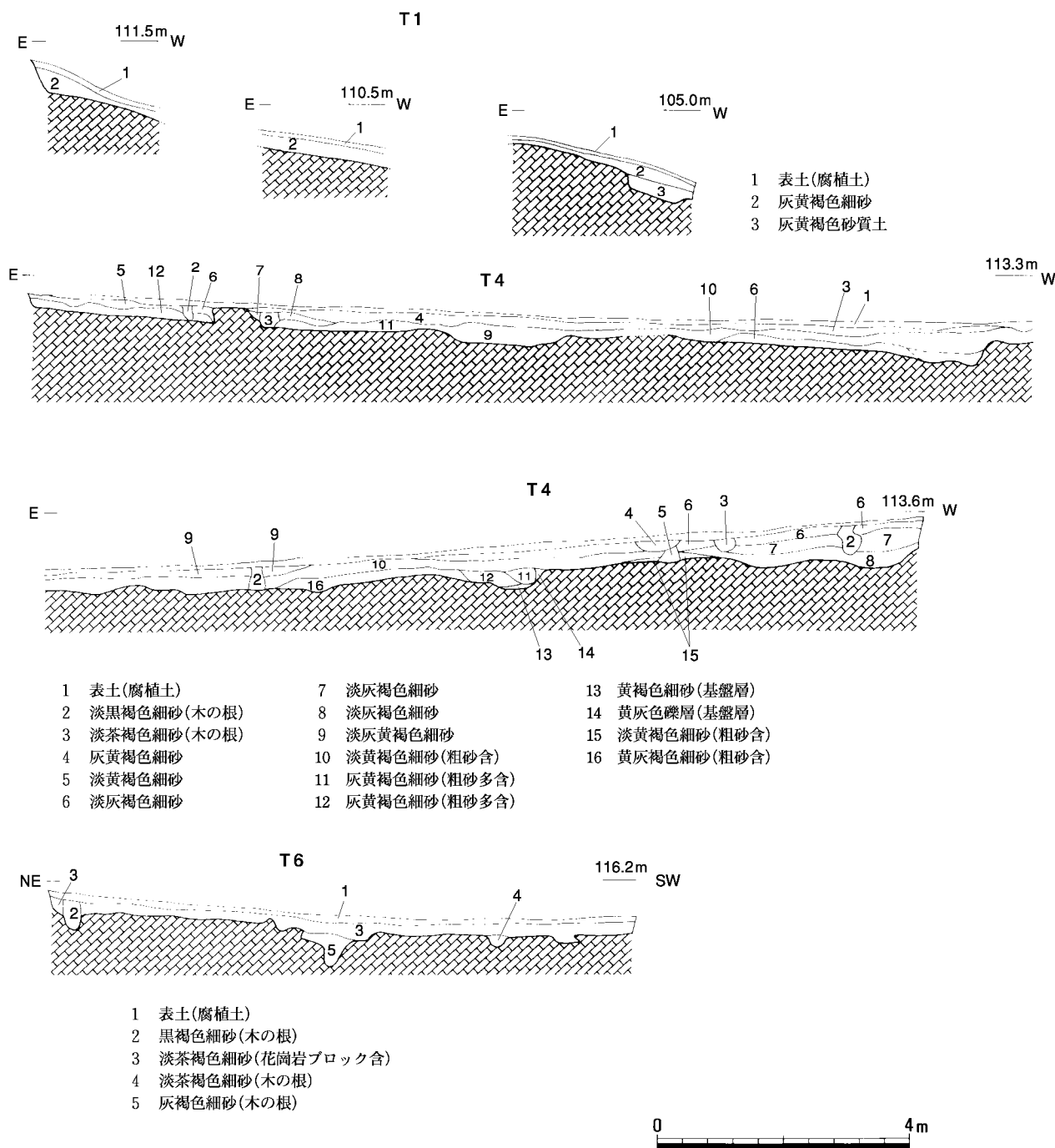
一方、他の5基(地点)については、土層観察や一部掘削によって平面的な確認を行ったが、古墳であることを明確に実証できなかった。なお、T1~12からは他の遺構、遺物は認められなかった。北方



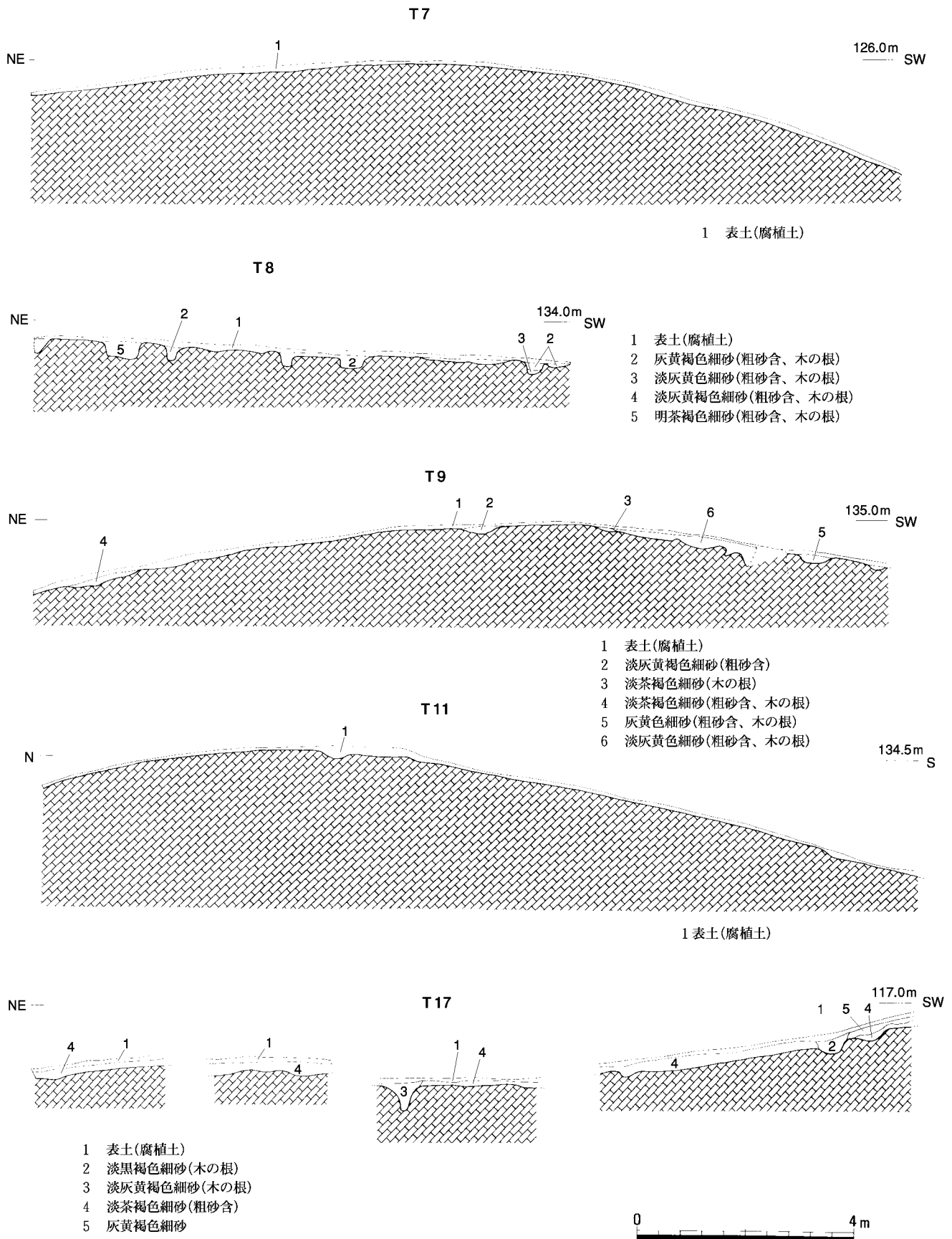
第6図 小坂古墳群・才地遺跡T26(NW-SE)土層断面図(1/100)

に平野を望む丘陵北側は、尾根筋に沿うかたちでトレンチを10本（T13～22）、北東斜面側にトレンチを6本（T23～28）設定して調査を行った。その結果、T13～19からは、遺構、遺物は確認されなかったが、T20～28からは、弥生時代中期～後期を主体とする集落の存在が明らかとなり、特にT23B、T25、T26、T28周辺は遺構、遺物の密度が濃いようであった。

加えて、T26の上方からは6世紀後半の須恵器の杯が出土した。その後に設定したT29～31のトレンチで、この周辺で古墳群が形成されることが明らかとなった。T27では明瞭な遺構は認められず、遺物の出土量もわずかであった。また、T27以南から丘陵部の斜度がさらに増して、この付近が集落域の境界と判断した。加えて、丘陵裾部は墓地造成によって地山が表出していたり、植林によっての地



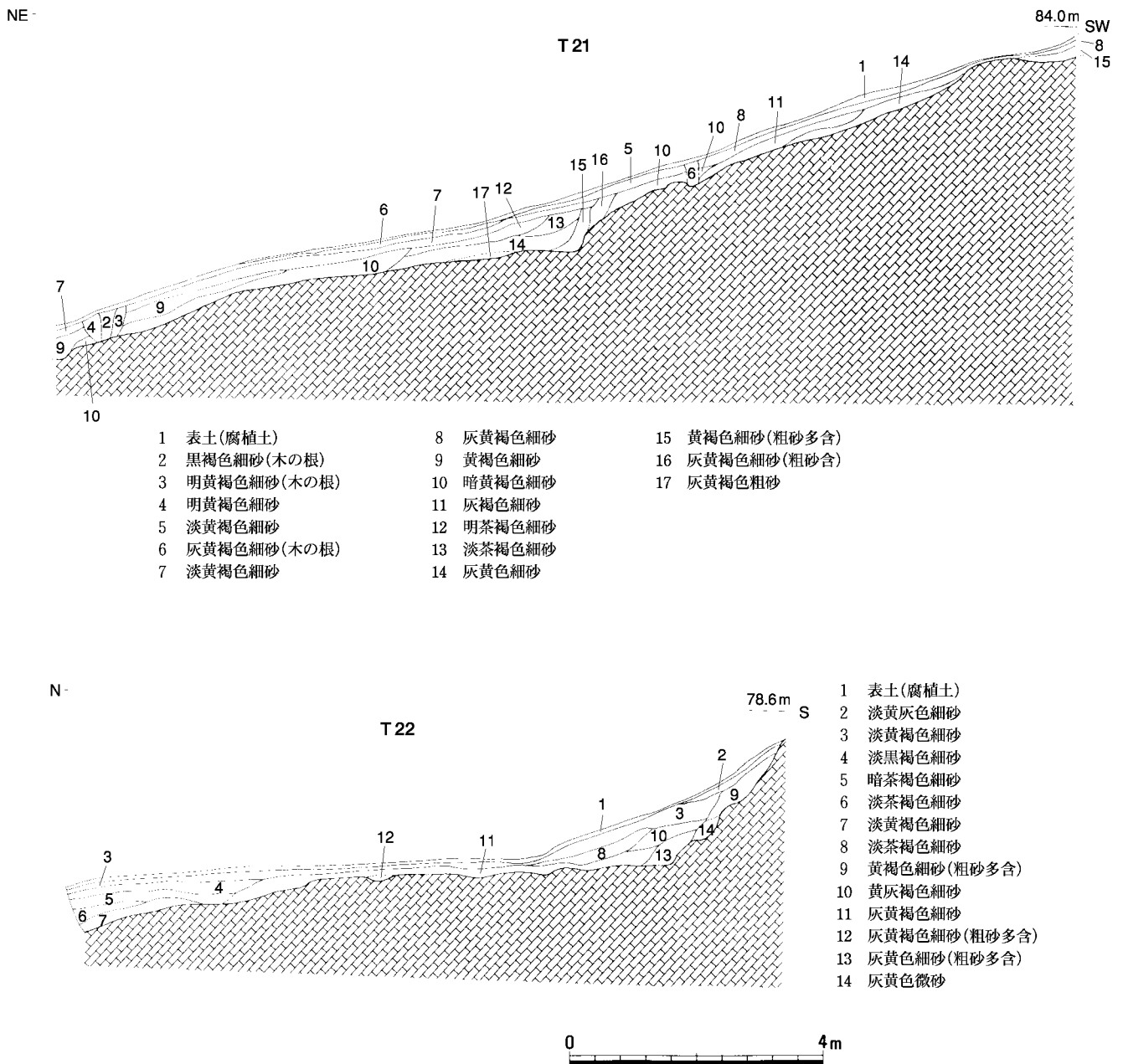
第7図 小坂古墳群・才地遺跡T1(E-W)・4(E-W)・6(NE-SW)土層断面図(1/100)



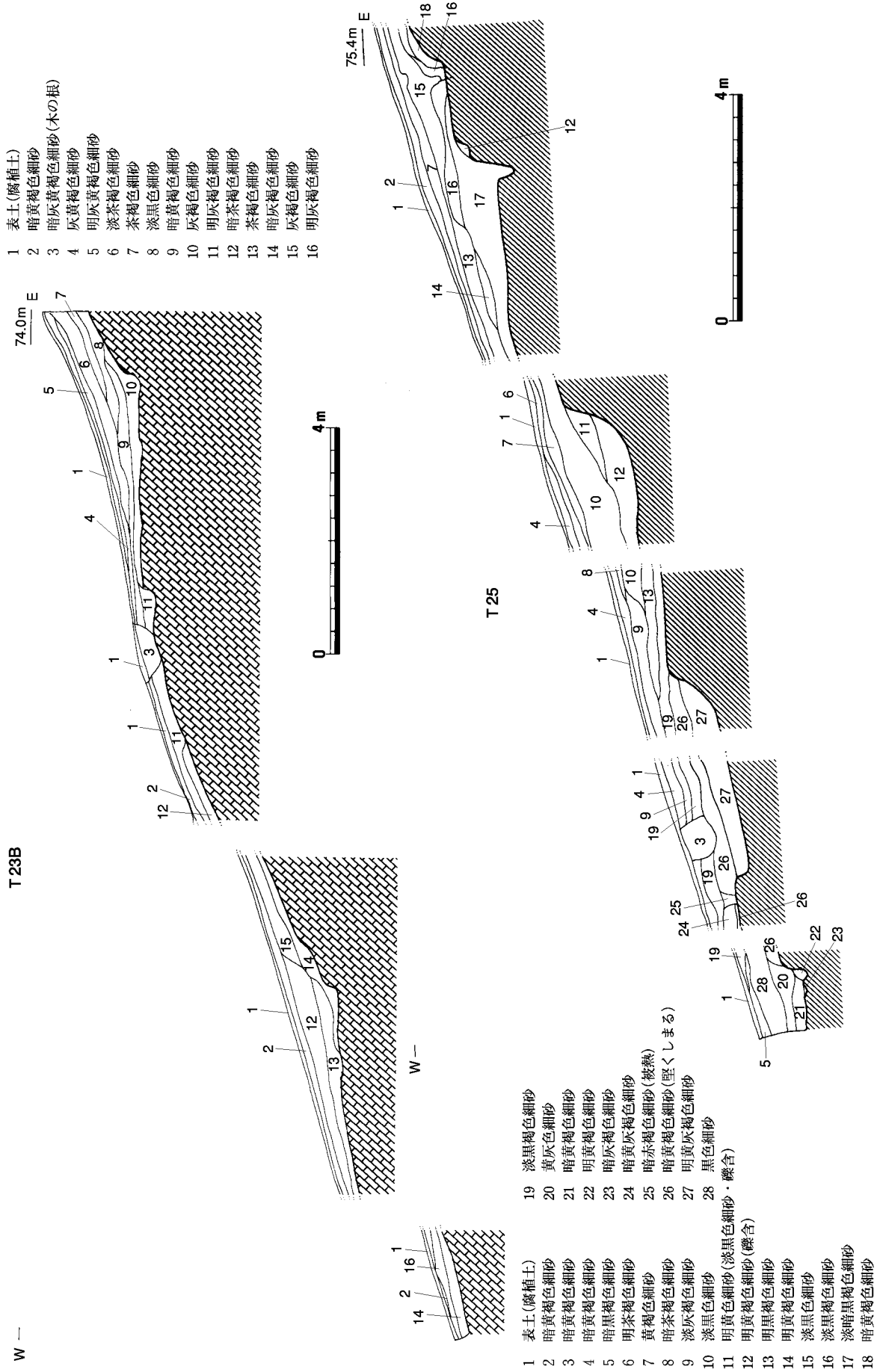
第8図 小坂古墳群・才地遺跡 T7(NE-SW)・8(NE-SW)・9(NE-SW)・11(N-S)・17(NE-SW) 土層断面図(1/100)

形改変がなされていたりすることなどから遺構の残存状況は極めて低いと推測した。

以上のことから工事により削平を受ける範囲について、小坂1(No.18)号墳とNo.18A号墳の2基の古墳と丘陵北側および北東斜面側で確認された弥生時代中期から後期の集落などが全面調査の対象となった。遺跡名については、小坂1(No.18)号墳は小坂1号墳に、No.18A号墳は小坂2(No.17)号墳、3(No.16)号墳としたものが古墳ではないとする知見を得たが、混乱を避けるために小坂4号墳と改称し、それらの総称として小坂古墳群と称することとした。また、今回新規発見となる集落については小字名から才地遺跡と称することとした。



第9図 小坂古墳群・才地遺跡T21(NE-SW)・22(N-S)土層断面図(1/100)



第10図 小坂古墳群・才地遺跡T23B(W-E)・25(W-E)土層断面図(1/100)

八ヶ奥遺跡・製鉄遺跡（第4図）

美作岡山道路の工事の一部として、熊山町酌田から佐伯町小坂へ通じるトンネル工事が平成11年9月から実施されていた。掘削は酌田側から進められており、小坂側に平成12年2月頃に貫通する予定であった。そうした工期計画に合わせて小坂側も全体の切り下げ(7~8m)およびトンネル開口部の工事が行われていた。

こうしたなか、先述の小坂地区の古墳、集落等の確認調査に担当者2名が入ったところ、平成11年10月末頃に眼下となる先の工事現場の地形から、この付近に遺跡が存在する可能性が高いと判断し、トンネル開口部付近の踏査を試みた。その結果、周辺にまとまった弥生土器と鉄滓が散布していることが認められ、集落と生産(製鉄)遺跡が存在する可能性があることが明らかとなった。このため、業者に周辺の工事を一旦中断させ、今後どのような対応をするかを振興局・業者・文化課・センターの4者で協議した。

振興局・業者側の要望として、トンネルが貫通するまでに周辺工事を予定期日までに終了させる必要があり、それには少なくとも2ヶ月の工期が必要なので、11月中をメドに速やかに発掘調査を終了させてもらいたいというものであり、作業には全面的に協力するというものであった。また、24時間稼働する重機を使用するトンネル掘削工事は中断することができないので、他地区の確認調査より優先して、この箇所の発掘調査を実施してほしいというものであった。

文化課・センター側の見解として、現地の目視により少なくとも対象面積が1,000㎡近くはありと思われ、その場合は現体制では最低2ヶ月を要することになるので、遺跡推定範囲のうち重機により確認トレンチを数本入れて、その結果から調査対象範囲を確定し、調査体制を検討するとした。

以上の協議の結果、振興局はすべての計画に優先してこの発掘調査の終了を目指しているため、センターの小坂地区の確認調査以降の計画にずれが生じることとなるが、それについては局内で調整することになった。調査方針としては、トレンチ調査の結果をみて必要な部分から順に調査していき、また、諸処の調査条件の整備も合わせて実施することが合意事項としてまとまった。なお、こうした経緯に伴い、文化財保護法に基づいて岡山県東備地方振興局局長名で遺跡発見の通知(第57条の6)が平成11年11月1日に提出された。

調査は平成11年11月4日から開始したが、小坂地区の古墳、集落等の確認調査は一旦中断することとなった。対象範囲は才地遺跡・小坂古墳群が存在する独立丘陵や熊山町北西部からの山塊などで、周囲をほとんど囲まれた北向きの緩斜面の地形であった。確認トレンチは遺物が散布するこの斜面地で等高線が直交となる南北方向に2本設定した。

その結果、弥生時代後期の竪穴住居・段状遺構の検出および該期の遺物の出土を確認した。また、鉄滓や炉壁片の流れ込みの上部にあたる人工的な平坦面に対して表土除去後に精査した結果、製鉄炉が2基以上存在することが明らかとなった。

以上のことから工事により削平を受ける範囲について、弥生時代後期の集落と生産(製鉄)遺跡の2ヶ所が全面調査の対象となった。なお、この新規発見となる遺跡名については、小字名から集落は八ヶ奥遺跡に、生産(製鉄)遺跡は八ヶ奥製鉄遺跡と称することとした。全面調査はこうした確認調査の知見を基に、引き続き実施することとなった。(澤山)

第3節 発掘調査および報告書作成の体制

1 調査の経緯

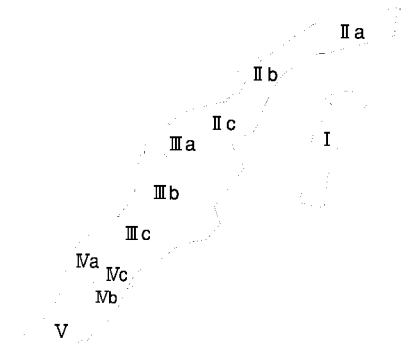
平成11年度の発掘調査は年度当初3名が入り、10月以降は2名が担当することになった。この年度では、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174に報告された佐古遺跡の調査も実施されているが、このほかに岡遺跡、小坂古墳群、才地古墳、才地遺跡の第一次調査と八ヶ奥遺跡および同製鉄遺跡の全面調査にも着手した。なお、岡遺跡は佐古遺跡の発掘調査中に実施した。その結果、面積が2,500㎡の弥生時代中期から平安時代を主体とする遺跡が存在することを確認した。八ヶ奥遺跡と同製鉄遺跡は、小坂古墳群及び才地遺跡の第一次調査中に第2節で記したように、工事中発見と言うことで調査に入った。したがって、調査中の遺跡の調査を中断させることにより対応した。両遺跡の所在する位置は、周辺の山塊に囲まれた北向きの緩斜面で、集落の立地としては条件の悪い所である。すでに一部の工事が行われていたことから、遺構の状態が心配された。しかしながら、意外と遺構の遺存がよく、調査区の1,260㎡に弥生時代後期の集落と製鉄遺跡の内容が把握できた。この両遺跡の終了後、小坂古墳群及び才地遺跡の第一次調査を再開させた。小坂古墳群は、南北方向に伸びる丘陵上の北端側に2基の古墳を確認する。才地遺跡は、丘陵北斜面の8,000㎡にわたり弥生時代中期から後期の集落が展開することが明らかとなる。

平成12年度は、昨年度の第一次調査の結果をふまえ2班5人の体制で調査に入った。岡遺跡の調査は、1班2人で調査に入り、調査区を設定せずに全面を遺構検出面まで一度に排土した。その結果、新たな知見として墳丘の消失した古墳1基を検出した。他の1班3名は、小坂古墳群の調査から入ったが、才地遺跡について、さらに詳細な遺構の広がりと地元の聞き取りで得られた旧地権者の話から古墳の存在の有無を確認する必要が生じた。小坂古墳群終了後追加のトレンチを入れ、これらを追及した。その結果、遺跡はさらに南西に広がり、才地古墳とされた横穴式石室を確認したのである。このような経緯から、当初の体制では、予定の1年間で完了することが困難となり、才地古墳については、新たに1班2名が調査を担当した。調査区は、北東から調査着手順に大区画として大文字のローマ数字を用い、必要に応じアルファベットの小文字を付した。

平成13年度は、1班2名で担当し、昨年度の遺跡の内容から調査期間を12月の年末までとした。しかし、調査がⅢ区以降に進むに従い、遺構の密度が格段に濃くなったことから、さらに10月から1班2名を増員して、調査を終了させることができた。(下澤)

表 美作岡山道路(本報告書関係)遺跡一覧

年度	遺跡名	調査担当者	調査期間	面積(㎡)	遺物箱数
H11	岡遺跡(一次)	澤山・室山・下垣	7.22~9.27	270	1
	小坂古墳群(一次)				
	才地古墳(一次)	澤山・室山・(下垣)	8.23~2.16 (~9.30)	939	4
	才地遺跡(一次)				
H12	八ヶ奥遺跡・同製鉄遺跡	澤山・室山	11.4~12.4	1,260	20
	岡遺跡	二宮・下垣	4.1~8.31	2,500	16
	小坂1号墳	下澤・澤山・松村	4.1~7.4	200	6
	小坂4号墳			314	
	才地遺跡	下澤・澤山・松村	5.8~3.31	4,250	43
H13	才地古墳	浅倉・下垣	2.1~3.31		
	才地遺跡	二宮・下垣	9.1~11.30	350	13
	才地遺跡	下澤・松村	4.1~12.31	4,150	110
		光永・馬路	10.1~12.31		
		計		確認(1,209) 全面 13,024	213



第11図 才地遺跡調査区設定図

2 日誌抄

八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡

11月4日～6日—調査開始、トレンチの掘り下げ
11月8日～13日—遺構検出と遺構掘り下げ
11月15日～20日—遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。
製鉄炉検出掘り下げ、実測、写真撮影。
11月22日～27日—遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。
製鉄炉検出掘り下げ、実測、写真撮影。
11月29日～12月4日—遺構の掘り下げ、実測。製鉄炉
検出掘り下げ、実測、写真撮影。
両遺跡の地形測量を行い、調査終了。

岡遺跡

平成11年9月2日～30日—第一次調査の伐開作業、写
真撮影と断面実測、埋め戻し。
平成12年4月3日～28日—機械による表土掘削。遺構
検出作業
5月1日～31日—遺構検出、掘り下げ写真撮
影、実測。
6月1日～30日—遺構検出、写真撮影、実測。
7月3日～31日—遺構検出、写真撮影、実測。
埋蔵文化財保護対策委員会開催。
8月3日～31日—遺構検出、写真撮影、実測。
石室の写真撮影、実測。地形測量。

小坂古墳群・才地古墳群・才地遺跡

平成11年8月10日—小坂現地踏査。
8月23日～26日—調査開始(立木伐採)。
9月3日～14日—立木伐採。
10月14日～28日—立木伐採。
11月1日～2日—トレンチ調査開始。
12月15日～24日—掘り下げ。
平成12年1月5日～31日—掘り下げ、写真撮影、実測。
2月1日～16日—掘り下げ、写真撮影、実測。
4月2日～7日—小坂古墳群と才地遺跡の伐開
作業、小坂1号と4号墳の表土除去。
5月1日～31日—小坂4号墳の主体部検出、
小坂1号墳の周溝検出と石室内埋土除
去、才地遺跡の伐開作業

6月1日～29日—小坂1号墳の実測と遺物取
り上げ、才地遺跡の表土除去
7月2日～31日—小坂古墳調査終了。才地遺
跡Ⅰ区の遺構検出とⅡ区の機械での表
土掘削。
8月1日～31日—Ⅰ区下半全景写真、Ⅱa区の
遺構検出、掘り下げ、写真撮影。
9月3日～28日—Ⅱa区の遺構検出、掘り下げ、
実測、写真撮影。1班2名が新たに才地
古墳の調査に入り、周溝の確認と掘り
下げ。
10月1日～31日—Ⅱb区の遺構検出と掘り下
げ、実測、写真撮影。才地古墳主体部
検出、実測、写真撮影。
11月1日～30日—Ⅱb区の遺構検出と掘り下
げ、実測、写真撮影、Ⅱc区遺構検出、
掘り下げ。才地古墳実測、遺物写真撮
影。埋蔵文化財保護対策委員会。才地
古墳調査終了。
12月3日～27日—Ⅱb、c区の遺構検出と掘り
下げ、実測、写真撮影。Ⅴ区トレンチ掘
り下げ。
平成13年1月5日～28日—Ⅱb区の遺構検出と掘り下
げ、写真撮影。Ⅱc区掘り下げ。
2月1日～29日—Ⅱc区遺構検出と掘り下げ、
実測、写真撮影、1班2名が入りⅣ区
の調査を行う。
3月1日～31日—Ⅱc区遺構検出と掘り下げ、
実測、写真撮影。Ⅳb区遺構検出、掘り
下げ。Ⅰ区、Ⅱa～Ⅱc区、Ⅳa区の空中
写真撮影。実績報告作成。
4月3日～28日—2名1班で調査に入る。Ⅱc区、
Ⅲa区の遺構検出と掘り下げ、実測。
5月1日～31日—Ⅱc区、Ⅲa区の遺構検出と
掘り下げ、写真撮影。Ⅲb区遺構検出。
6月1日～30日—Ⅲa、b区遺構検出と掘り下

げ、実測、写真撮影。
 7月3日～31日—Ⅲb区遺構検出と掘り下げ、
 実測、写真撮影。
 8月1日～31日—Ⅲb、c区遺構検出と掘り下
 げ、実測、写真撮影。Ⅲc区遺構検出。
 9月1日～29日—Ⅲb、c区の遺構検出と掘り
 下げ、実測、写真撮影。
 10月2日～31日—Ⅲb、c区の遺構検出と掘り
 下げ、実測、写真撮影。2名1班がⅣ、
 Ⅴ区の調査に入る。

11月1日～30日—Ⅲb区、Ⅲc区の遺構検出と
 掘り下げ、実測、写真撮影。Ⅳc区遺構
 検出、掘り下げ、実測、写真撮影。Ⅴ
 区掘り下げ。
 12月1日～27日—Ⅲb区、Ⅲc区の遺構検出と
 掘り下げ、実測、写真撮影。Ⅳc区遺構
 検出、掘り下げ、実測、写真撮影。Ⅴ
 区掘り下げ、実測。空撮。地形測量。
 才地遺跡の調査を終了。

3 調査の体制

発掘調査 平成11年度	主 事	平成12年度	
岡山県教育委員会		岡山県教育委員会	
教育長	黒瀬 定生	教育長	黒瀬 定生
岡山県教育庁		岡山県教育庁	
教育次長	宮野 正司	教育次長	宮野 正司
文化課		文化課	
課 長	松井 英治	課 長	松井 英治
課長代理	佐々部和生	課長代理	佐々部和生
参 事	正岡 睦夫	課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本 和男	文化財保護主査	福本 明
文化財保護主任	大橋 雅也	主 任	奥山 修司
主 任	奥山 修司	岡山県古代吉備文化財センター	
岡山県古代吉備文化財センター		所 長	正岡 睦夫
所 長	葛原 克人	次 長	能登原 巧
次 長	大村 俊臣	〈総務課〉	
〈総務課〉		総務課長	小倉 昇
課 長	小倉 昇	課長補佐(総務係長)	安西 正則
課長補佐(総務係長)	安西 正則	主 査	山本 恭輔
主 査	山本 恭輔	〈調査第三課〉	
〈調査第三課〉		課 長	柳瀬 昭彦
課 長	柳瀬 昭彦	(調査担当)	
(調査担当)		課長補佐(第一係長)	浅倉 秀昭
課長補佐(第二係長)	二宮 治夫	課長補佐(第二係長)	下澤 公明
文化財保護主任	澤山 孝之	文化財保護主幹	二宮 治夫
文化財保護主事	室山 博文	文化財保護主任	澤山 孝之

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

主 事	下垣 豪	主 事	松村さを里
主 事	松村さを里	報告書作成	
	平成13年度	平成14年度	
岡山県教育委員会		岡山県教育委員会	
教育長	宮野 正司	教育長	宮野 正司
岡山県教育庁		岡山県教育庁	
教育次長	國貞 忠克	教育次長	三浦 一男
文化課		文化課	
課 長	松井 英治	課 長	西山 猛
課長代理	藤井 守男	課長代理	宮田 正彦
課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男	課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男
主 任	奥山 修司	文化財保護主任	尾上 元規
文化財保護主事	尾上 元規	主 事	浜原 浩司
岡山県古代吉備文化財センター		岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	正岡 睦夫	所 長	正岡 睦夫
次 長	能登原 巧	次 長	藤川 洋二
〈総務課〉		〈総務課〉	
課 長	安西 正則	総務課長	安西 正則
総務係長	田中 秀樹	課長補佐(総務係長)	田中 秀樹
主 任	小坂 文男	主 任	小坂 文男
〈調査第三課〉		〈調査第三課〉	
課 長	柳瀬 昭彦	課 長	柳瀬 昭彦
(調査担当)		(報告書担当)	
課長補佐(第二係長)	下澤 公明	課長補佐(第一係長)	下澤 公明
文化財保護主幹	光永 真一	主 事	玉木 秀幸
主 事	馬路 晃洋		

4 報告書の作成

報告書の体制は、4月に調査員1名、8月から1名増え2名となる。復元作業には4名、実測作業に2名をあてた。報告書の作成は、平成11年度から同13年度に発掘調査された遺跡のうち、今回、6遺跡について実施した。なお、才地古墳群については、発掘調査時に横穴式石室1基であったが、同古墳と地点を同じくする才地遺跡の発掘調査が進むにつれ、新たに当該古墳と相前後する時期の古墳及び土壙墓が検出された。このようなことから、報告においては才地古墳群として報告した。各遺跡は、出土遺物が比較的多く検出されている。しかし、整理作業は、12月末段階でほぼその作業を終え、残されたトレース、割り付け、原稿も何とか終了することができた。

第2章 地理的・歴史的環境

報告する遺跡は、赤磐郡と和気郡に所在する。両郡は、岡山県の三大河川である高梁、旭、吉井の内の最も東を流れる吉井川の中流域に位置する。吉井川は、熊山町において南東部を南北に、佐伯町では町の中央を東西に分けるように貫流する。

岡遺跡の所在する地区は、平坦な広がりを見せていた小野田川低地の埋積谷的な形態が終わる地点にあたり、ここから酌田地区のやや深い谷となる小野田川の源流部となる。遺跡は、この埋積谷の前面に営まれる。周辺遺跡の分布は、岡遺跡よりも新しくなる弥生時代後期の竪穴住居、袋状土壇、土壇墓、土器棺墓などが検出された佐古遺跡を南東方向に望む。古墳時代に入ると、南東丘陵上には古墳群が形成されている。空古墳群は、横穴式石室を主体とするものであるが、鴨尾坂古墳群のなかには箱式石棺が認められている。中世になると酌田廃寺や赤尾山廃寺のほか、岡城等の山城が所在している。また、生産遺跡として、古墳から室町期の窯を確認されているのである。

八ヶ奥遺跡、八ヶ奥製鉄遺跡、小坂古墳群、才地古墳群、才地遺跡の所在する地区は、岡遺跡の位置する酌田丘陵をあとに、低い掘割の峠を北に抜けると佐伯岬に達する。この岬は、赤坂町と佐伯町を結ぶ県道御津佐伯線が越えて、丘陵部を出ると矢田の低地になる。この低地は、吉井川の水面より高く、明治末に機械揚水で水田化されたが、それ以前は綿、カンピョウ、ソバなどの畑作が行われていたのである。遺跡は、この低地に出る前の細い谷に沿うように張りだす丘陵の北斜面と谷の奥側に所在するのである。

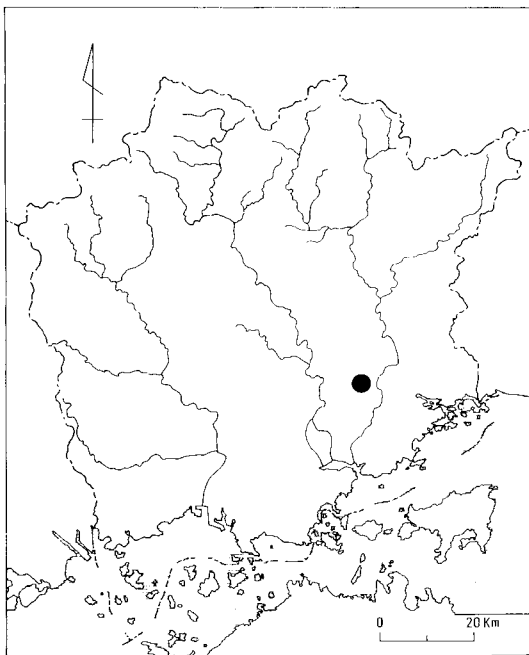
当該遺跡の周辺で最も遡る遺物を出土しているのは、縄文晩期の土器片を検出している宇生(向)遺跡である。弥生時代になると、矢田部の低地に接する丘陵縁辺部に認められるようになる。一方、熊山町と境を接する殿谷の北上方の標高187mの高所に竪穴住居の検出された大方遺跡や柱穴が認めら

れた加三方(清門・穴尾)遺跡などが所在している。古墳時代には、谷沿いに横穴式石室を有する古墳が展開していくのである。このうち、加三方地区に所在する新林古墳は、石室が造り付けの組み合わせ式石棺に、それを被うような形の羨道を設けた特異なもので、また、土師質亀甲形陶棺片が採取されている。(下澤)

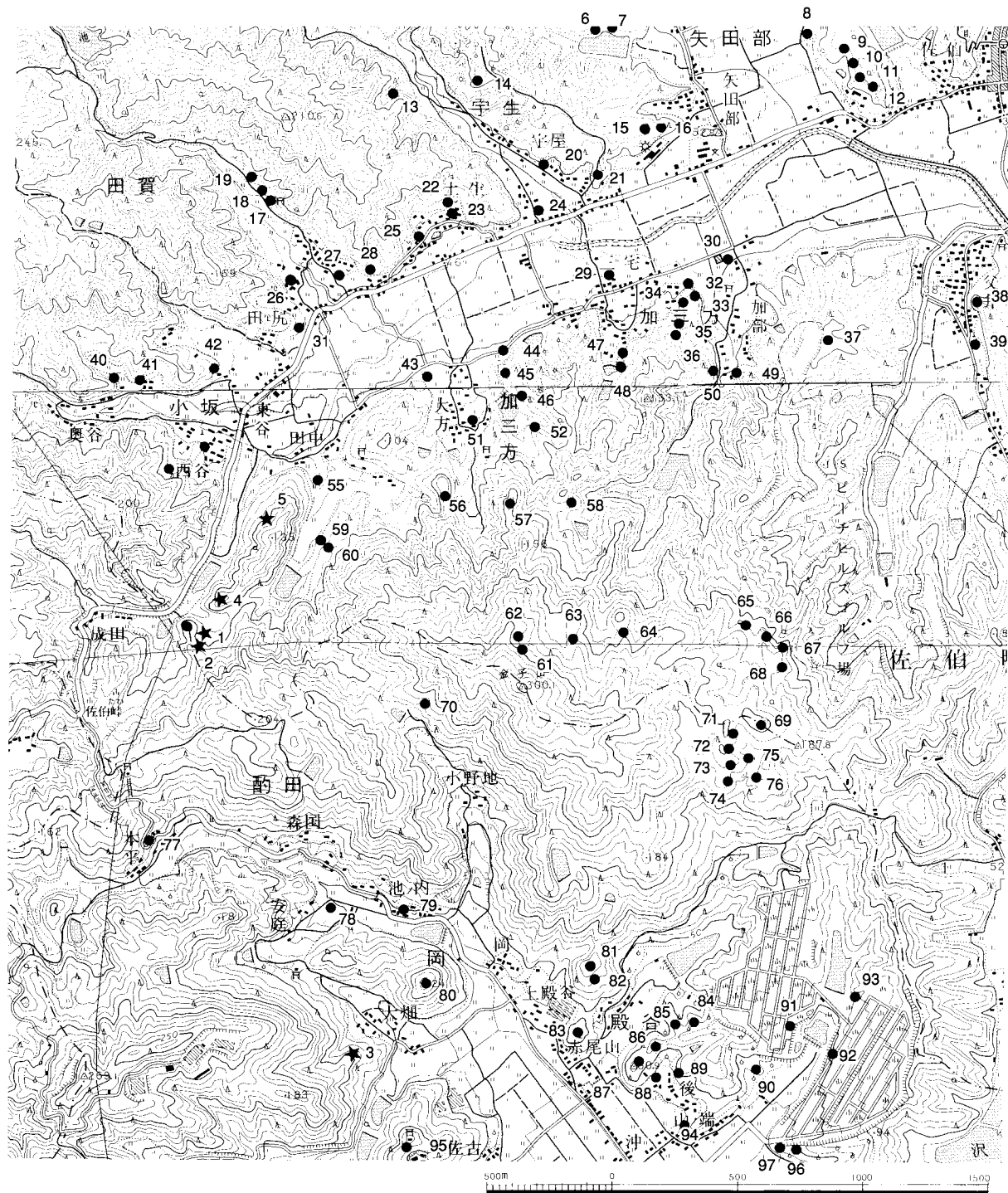
参考文献

『熊山町史』通史編上巻 熊山町史編纂委員会 1994年

『改定岡山県遺跡地図』〈第9分冊東備地区〉岡山県教育委員会 2003年



第1図 遺跡位置図(1/1,500,000)



- | | | | | | | | | | | | |
|----|------------|----|-----------|----|-----------|----|----------|----|---------|----|---------|
| 1 | 八ヶ奥遺跡 | 18 | 宮の後2号墳 | 35 | 東の上1号墳 | 52 | 大方池南古墳 | 69 | めげ塚5号墳 | 86 | 鴨尾坂3号墳 |
| 2 | 八ヶ奥製鉄遺跡 | 19 | 芝下古墳 | 36 | 東の上2号墳 | 53 | 散布地 | 70 | 金子古墳 | 87 | 鴨尾坂4号墳 |
| 3 | 岡遺跡 | 20 | 散布地 | 37 | 矢口城跡 | 54 | 天神様下古墳 | 71 | 空山1号墳 | 88 | 散布地 |
| 4 | 小坂古墳群 | 21 | 宇生空谷古墳 | 38 | 松洋古墳 | 55 | 尼屋敷遺跡 | 72 | 空山2号墳 | 89 | 殿田C竊跡 |
| 5 | 才地遺跡・才地古墳群 | 22 | 土生上古墳 | 39 | 大日墳丘・若宮墳丘 | 56 | 王子古墳 | 73 | 空山3号墳 | 90 | 散布地 |
| 6 | 戸瀬池竊跡 | 23 | 土生上遺跡 | 40 | 散布地 | 57 | たいち墓 | 74 | 空山4号墳 | 91 | 馬が谷竊跡 |
| 7 | 戸瀬池古墳 | 24 | 宇生(向)遺跡 | 41 | 散布地 | 58 | 新林古墳 | 75 | 空山5号墳 | 92 | 亀目郷地東竊跡 |
| 8 | 堂の元古墳 | 25 | 金光時跡 | 42 | 稲荷山古墳 | 59 | 金子池1号墳 | 76 | 空山かなな流し | 93 | 亀目郷地池竊跡 |
| 9 | 新田山1号墳 | 26 | 田賀(寺坂)散布地 | 43 | 大方遺跡 | 60 | 金子池2号墳 | 77 | 酌田廃寺 | 94 | 散布地 |
| 10 | 新田山2号墳 | 27 | 名倉遺跡 | 44 | 加三方遺跡 | 61 | 金子山下1号墳 | 78 | 池ノ内遺跡 | 95 | 佐古遺跡 |
| 11 | 新田山3号墳 | 28 | 田尻散布地 | 45 | 清門池東1号墳 | 62 | 金子山下2号墳 | 79 | 散布地 | 96 | 殿谷A竊跡 |
| 12 | 新田山4号墳 | 29 | 三宅町田遺跡 | 46 | 清池東2号墳 | 63 | 金子山鉄塔下古墳 | 80 | 岡城跡 | 97 | 殿谷B竊跡 |
| 13 | 塚奥3号墳 | 30 | 加部遺跡 | 47 | 三宅池尻古墳 | 64 | 磐座山古墳 | 81 | 殿谷城跡 | | |
| 14 | 宇屋古墳 | 31 | 寺坂遺跡 | 48 | 藤山古墳 | 65 | めげ塚1号墳 | 82 | 赤尾山廃寺 | | |
| 15 | 向山古墳 | 32 | 三宅(尾崎鼻)遺跡 | 49 | 鍛冶屋谷1号墳 | 66 | めげ塚2号墳 | 83 | 城? | | |
| 16 | 散布地 | 33 | 三宅開坂古墳 | 50 | 鍛冶屋谷2号墳 | 67 | めげ塚3号墳 | 84 | 鴨尾坂1号墳 | | |
| 17 | 宮の後1号墳 | 34 | 三宅開坂下古墳 | 51 | 散布地 | 68 | めげ塚4号墳 | 85 | 鴨尾坂2号墳 | | |

第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

第3章 八ヶ奥遺跡

第1節 調査区の概要

八ヶ奥遺跡は、才地遺跡や小坂1・4号墳が存在する独立丘陵や熊山町北西部の山塊などでほとんど囲まれた標高約91～100mを測る北向きの緩斜面に存在する。そのため、北東に広がる平野から隔絶されたようになっており、開口部と呼べる場所もわずかに北東および北西方向に認められる程度で、日照時間も十分に得られないような立地である。以上のことから、集落の選地としては必ずしもよいとはいえないと思われる。また、調査区の周りをみると南側は急斜面地、西側は谷地形、北側には湧水がみられることから、今回の調査対象外となった東側に遺跡がわずかに広がっている可能性がある程度といえ、かなり狭い範囲で展開した小規模集落であったと考えられる。

遺構概要をみると竪穴住居9軒、土壇6基、柱穴数個などを確認した。このうち竪穴住居1・2は平面形態が円形であり、主柱は前者が5本柱、後者が4本柱であった。また、竪穴住居1は焼失住居であり、竪穴住居2は建て替えが認められた。竪穴住居3～9はいわゆる段状遺構とも称せられる遺構の特徴をもつ。規模には差異があるが平面形態は隅丸方形で、各隅部付近に柱穴が確認された。土壇の性格は不明である。遺物は弥生土器とわずかに古代前半の須恵器などが出土している。須恵器については、当遺跡上方にある製鉄遺跡との関連に示唆を富む。弥生土器は弥生時代後期後葉を主体とするものであり、短期間であるが近接する才地遺跡の後続集落の一つであったと考えられる。

第2節 調査の概要

1 竪穴住居

竪穴住居1（第2・3・4図・図版1—3・9）

調査区中央北側の斜面地に位置している遺構である。検出状況から焼失住居と思われる。掘り方の平面形態は北東側に削平を受けているが円形を呈しており、直径約615cmである。床面の平面形も同形で、直径約532cmを測り床面積は約22.2m²である。床面の貼り床はみられなかったが、水平で堅くよくしまっていた。壁面に沿っては壁体溝が確認された。

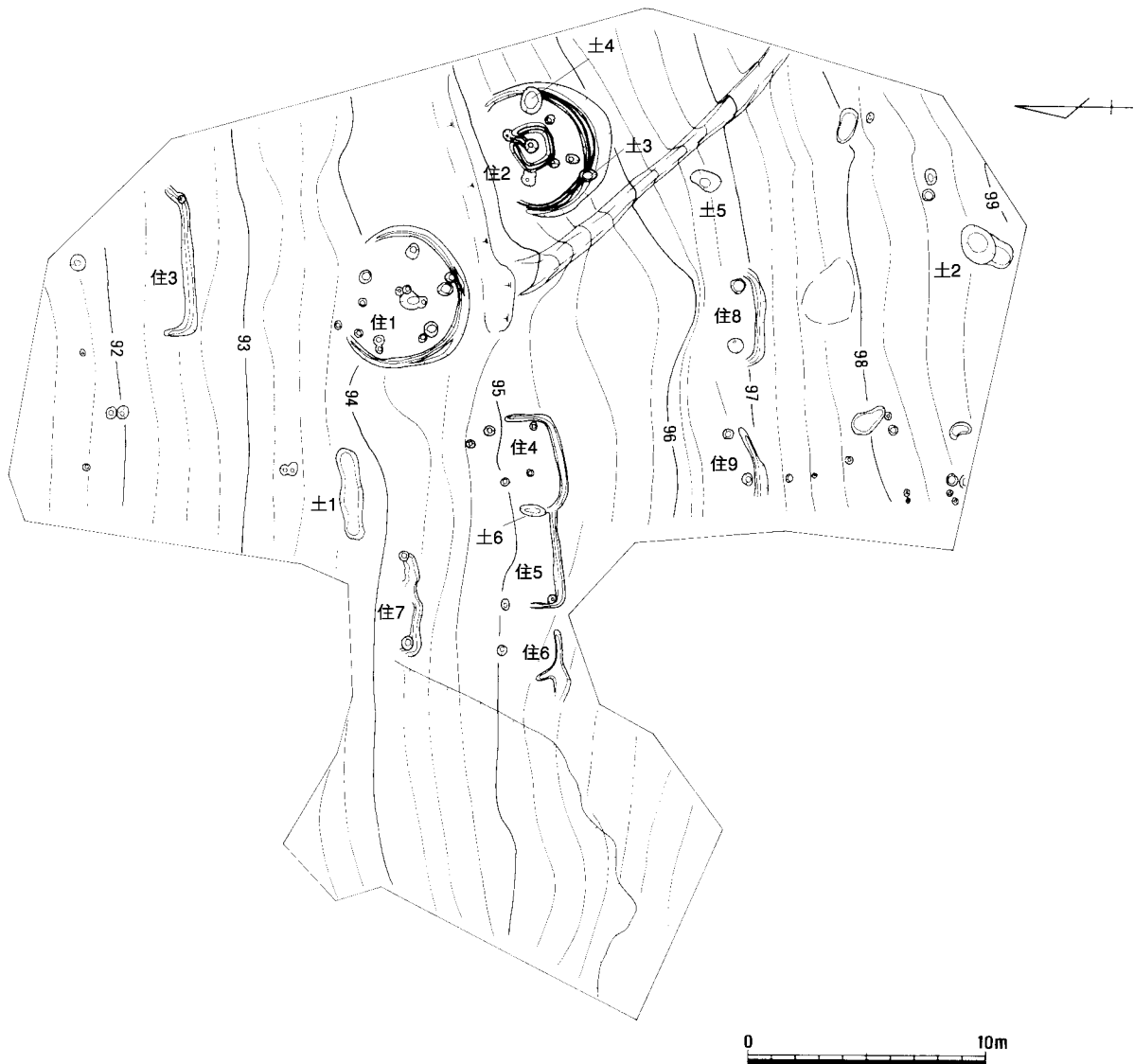
断面形態は床面からやや外方気味に立ち上がり、深さは現状で45cmを測る。柱構造は主柱が5本柱であり、山側方向に位置する主柱穴3個にはそれらの規模より小形の浅い柱穴がそれぞれ付属している。主柱柱間は190～273cmで、山側方向の南西側が短く、谷側の北西側が長くなっている。主柱と側壁の距離は20～50cmとされ、山側が狭く、谷側が広がっている。こうした構造や規模の差異は立地条件と上屋構造によって生じたものと思われる。

主柱掘り方はいずれも円形を呈し、直径40～65cmで、深さ61～68cmを測る。また、すべての主柱穴では柱痕跡が見て取れ、それらから直径約30～40cm程度の柱材を使用していたと推測される。床面の

中央では長径84cm、短径79cm、深さ29cmを測る楕円形の中央穴が検出され、その両端部には小形の浅い柱穴を一对確認した。埋土の堆積状況をみると、床面直上には黒色炭層が約10cm程度認められ、その上面に焼土粒、焼土塊や炭片を多量に含む土層がみられる。

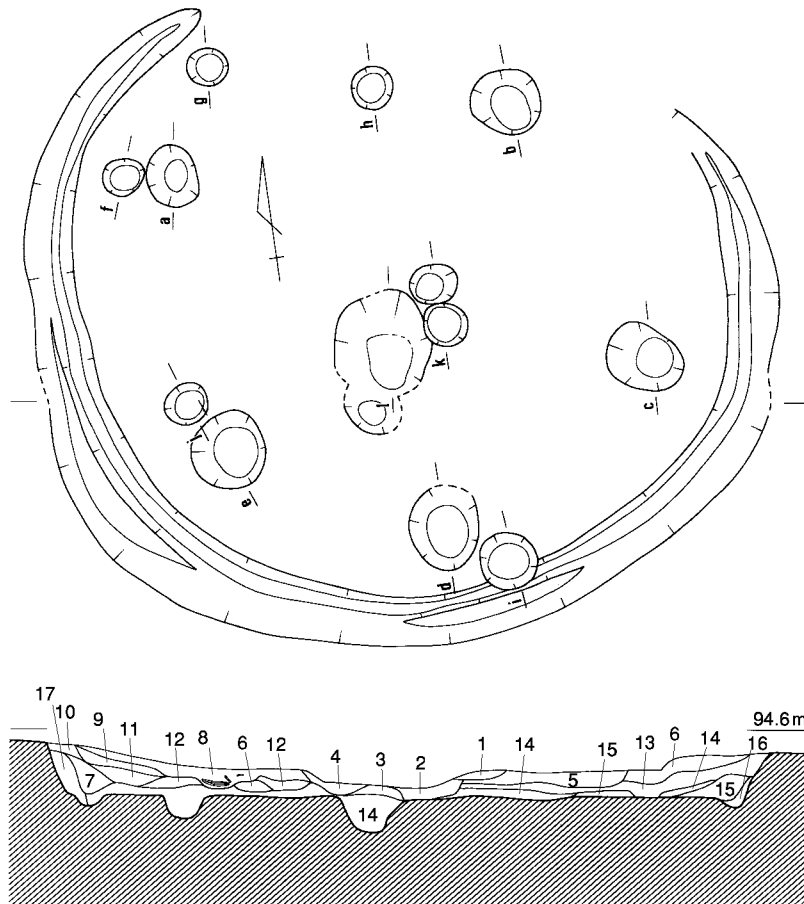
遺物はこれらの土層堆積後に流入している層に比較的まとまって出土しており、壺1～9、甕10・11、高杯12～14、鉢15・16および壺ないし甕の底部17～24、石鏃S1などが認められた。壺1の口径は16.8cmであり、球形状の体部から外方に立ち上がった頸部に単線6本の凹線文を施し、頸胴部には刺突文を巡らす。口縁部は外上方に延ばし、肥厚気味に拡張した端部外面には2本の凹線文を行う。外面は頸部、体部をヘラミガキ、口縁部はヨコナデを行い、内面は体部にヘラケズリ、頸部にヘラミガキ、口縁部にヨコナデがみられる。

壺2は口径18.0cmを測り、体部から頸部にかけて外湾して立ち上がり、外上方に立ち上がった口縁部の端部外面には3本の凹線文を行う。外面は体部がハケメの後、ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、内面は体部にヘラケズリ、頸部にハケメの後にヘラミガキ、口縁部にヨコナデが認められる。

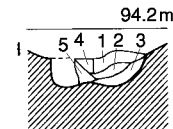
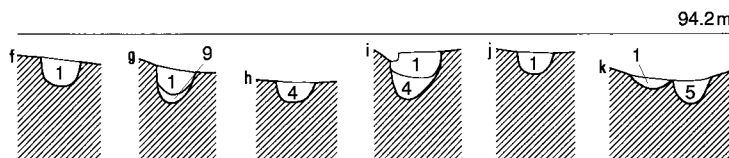
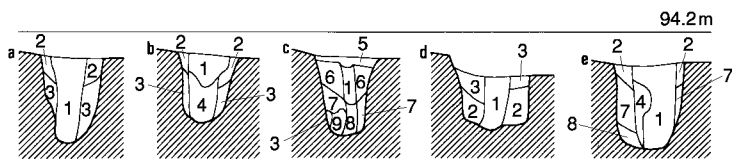


第1図 調査区遺構配置図(1/300)

壺3は口径18.8cmであり、球形状の体部から垂直気味に立ち上がった頸部をもち、頸胴部には刺突文を巡らす。口縁部は外上方に延ばし、肥厚気味に拡張した端部外面には3本の凹線文を行う。外面は頸部ヨコナデ、体部にヘラミガキを行い、内面は体部にヘラケズリ、頸部にヘラミガキ、口縁部にヨコナデがみられる。壺4は口径17.0cmであり、体部から直立する頸部をもち、外上方に延びる口縁部の拡張した端部外面には、工具の使用が考えられる強い凹線状のヨコナデを行う。外面は体部がハケメの後、ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、内面は体部にヘラケズリ、頸部にハケメがみられ、口縁部にヨコナデが認められる。壺5の口径は15.4cmであり、壺4と類似した形態・調整を持つ。頸胴部には刺突文が巡る。

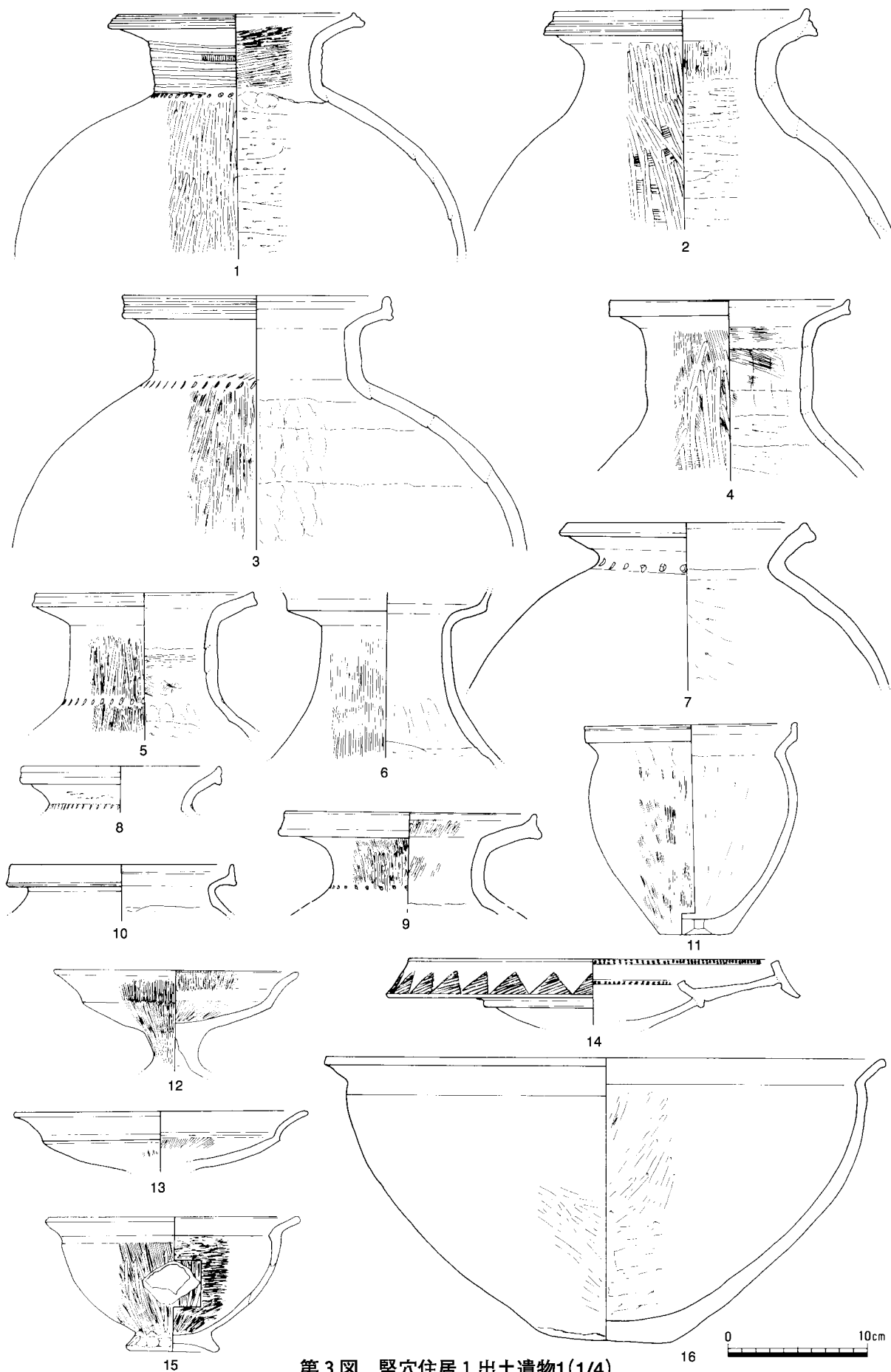


- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 灰黄色細砂 | 10 黄灰色細砂 |
| 2 灰青色細砂(鉄分沈着・硬化) | 11 赤橙色細砂(焼土多含) |
| 3 黄灰褐色細砂(炭含) | 12 暗黄灰色細砂(焼土少含) |
| 4 暗黄灰色細砂(炭含) | 13 淡黒灰色細砂(炭・焼土含) |
| 5 黒灰色細砂 | 14 淡黒灰色細砂 |
| 6 淡灰黄色細砂 | 15 黒色炭層(淡黒灰色細砂・焼土含) |
| 7 暗橙色細砂(焼土多含) | 16 淡黒灰色細砂(炭含) |
| 8 淡黄灰色細砂(土器多含) | 17 淡黄褐色細砂 |
| 9 暗黄色細砂 | |

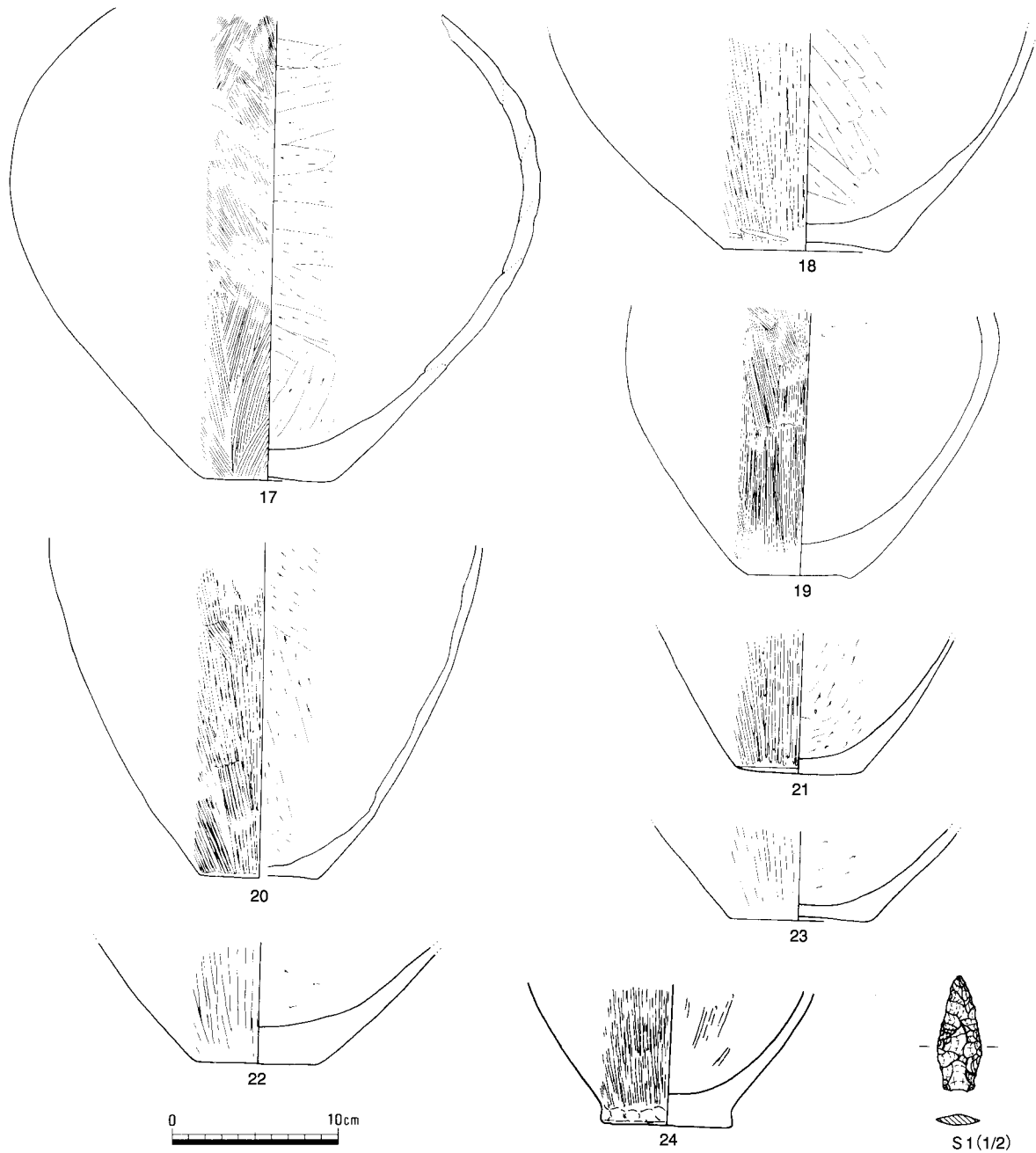


- | | | |
|------------------|---------------|----------------------|
| 1 暗灰褐色細砂(炭含) | 6 黄褐色粗砂 | 1 暗灰褐色細砂(粗砂・焼土少・炭多含) |
| 2 淡灰黄褐色細砂 | 7 暗灰黄褐色粗砂 | 2 淡灰黄褐色粘質粗砂 |
| 3 暗灰黄褐色細砂(粗砂含) | 8 暗灰褐色粗砂 | 3 淡黄褐色細砂 |
| 4 暗灰褐色細砂 | 9 暗灰褐色細砂(粗砂含) | 4 淡黄色細砂(粗砂含) |
| 5 暗灰黒褐色細砂(炭・焼土含) | | 5 黒色粘質細砂 |

第2図 竪穴住居1 (1/60・1/30)



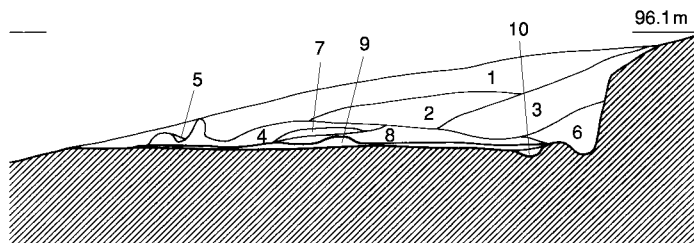
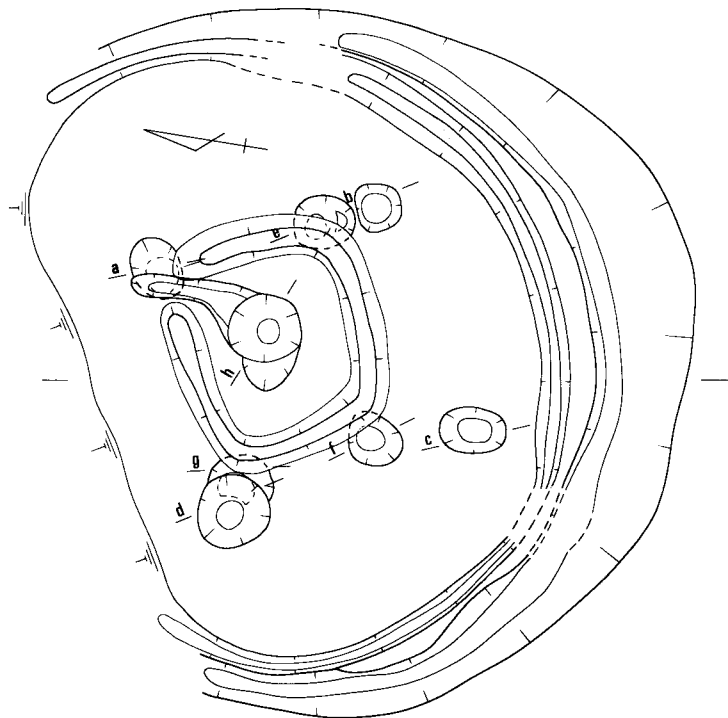
第3図 豎穴住居1 出土遺物1(1/4)



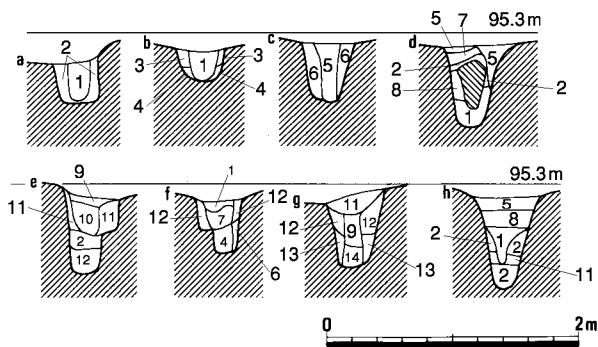
第4図 竪穴住居1出土遺物2(1/4・1/2)

っている。現状では頸胴部は不明瞭である。外面はヨコナデとハケメ、内面は体部にヘラケズリ、口縁部にヨコナデがみられる。壺7は口径17.0cmを測る短頸広口壺である。球形状の体部から口縁部が短く外方に屈曲し、肥厚した端部外面に凹線状のヨコナデを残す。また、頸胴部には刺突文が巡る。外面にはヨコナデ、ヘラミガキ、内面にはヨコナデ、ヘラケズリがみられる。壺8は口径14.0cmであり、「く」の字状に外反した口縁部から、肥厚気味に上下に拡張した端部外面には凹線状のヨコナデを残す。また、頸胴部には連続刺突文が認められる。壺9は口径17.8cmであり、体部から外方に短く立ち上がった頸部から外上方に口縁部が伸び、肥厚気味に拡張した端部外面には工具の使用が考えられる強い凹線状のヨコナデを残す。調整は外面が口縁部ヨコナデ、頸部ハケメの後ヘラミガキ、内面が口縁部ヨコナデ、頸部にヘラミガキが施され、頸胴部には刺突文が巡る。

甕10の口径は15.8cmであり、「く」の字状に外反する肥厚した口縁部に内傾気味に立ち上がる端部をもつ。外面はヨコナデ、内面はヨコナデとヘラケズリがみられる。甕11の口径は15.0cm、底径は5.1cm、器高15.0cmであり、「く」の字状に外反した口縁部から直口する端部をもつ。平底で穿孔がみられる。



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 茶褐色細砂 | 6 淡黄色細砂 |
| 2 暗黄褐色細砂 | 7 明黄灰色細砂 |
| 3 暗灰黄褐色細砂 | 8 暗灰黄色細砂(炭・焼土多含) |
| 4 灰黄色細砂(炭・焼土多含) | 9 暗黄赤褐色粘質砂 |
| 5 黒色炭層 | 10 暗黄灰色粘質砂 |



外面はヨコナデとハケメがみられ、口縁端部は沈線状を呈する。内面は体部にヘラケズリ、口縁部にヨコナデがみられる。

高杯12の口径は17.2cmを測る。杯部は深い内湾を呈し、口縁部との変換点ではやや稜をもちながら、大きく外湾して端部は丸く納めている。内外面ともに丁寧なヘラミガキがみられる。高杯13の口径は17.6cmであり、杯部は浅い皿状を呈し、口縁部との変換点では稜をもつ。口縁部は大きく外湾して引き出され、端部は丸く納めている。内外面にはヘラミガキがみられる。

高杯14の口径は26.4cmを測り、装飾性に富む。杯部は浅い椀状を呈し、口縁部との変換点では強い稜と内外面に突帯をもちながら大きく外上方に開口する。口縁端部は内傾しながら上下に拡張し、端部外面には鋸歯文を施している。また、口縁上端部および杯部内面突帯上端部には円形の竹管文がそれぞれ二重に巡っている。内外面

- | |
|-------------------|
| 1 暗灰褐色細砂(炭多含) |
| 2 淡灰黄褐色粗砂 |
| 3 黄褐色細砂 |
| 4 暗灰褐色細砂(粗砂多含) |
| 5 暗灰黒褐色細砂(焼土・炭多含) |
| 6 暗灰黄褐色粘質細砂 |
| 7 暗灰褐色粘質細砂 |
| 8 暗灰褐色細砂(粗砂多・炭少含) |
| 9 淡灰褐色細砂(焼土・炭多含) |
| 10 淡灰黄褐色細砂(炭少含) |
| 11 淡灰黄褐色細砂 |
| 12 暗灰黄褐色細砂(粗砂含) |
| 13 灰黄褐色細砂 |
| 14 淡灰褐色細砂(粗砂含) |

第5図 竪穴住居 2 (1/60)

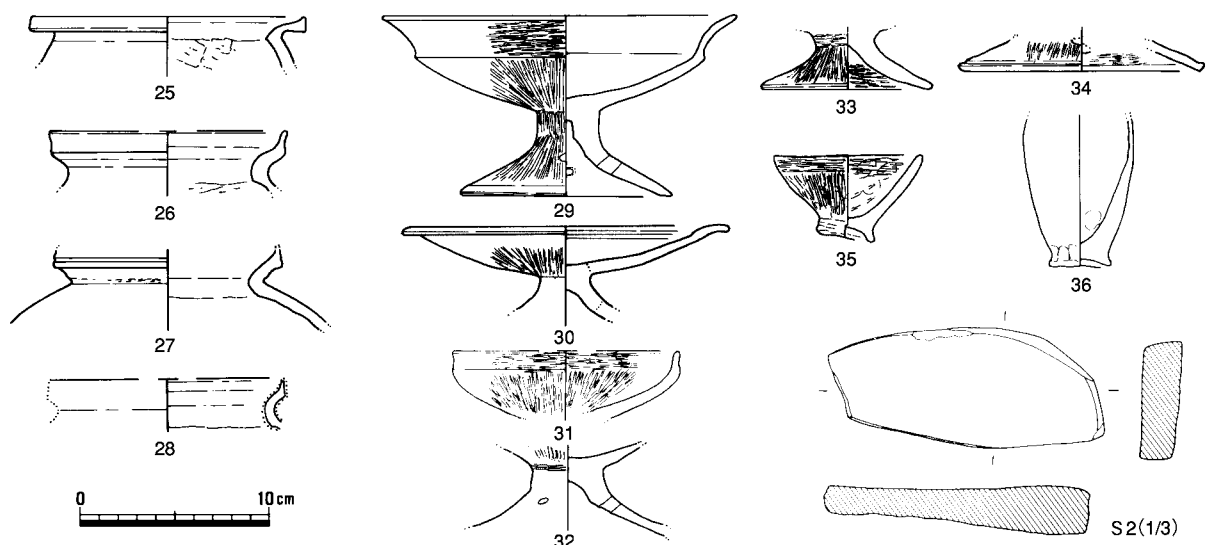
ともにハケメの後ヘラミガキが認められる。

鉢15の口径は17.8cm、底径は6.2cm、器高10.6cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外方に開口し、端部は丸い。底部は「ハ」の字に開く低脚である。外面がヨコナデとハケメの後、ヘラミガキ、内面がヨコナデとヘラミガキを行い、体部中央には焼成後穿孔がみられる。鉢16の口径は39.5cm、底径は9.5cm、器高20.2cmを測る大形品で底部は平底である。外面はヨコナデとヘラミガキ、内面は体部下半でヘラケズリ、上半はヨコナデとヘラミガキがみられる。壺ないし甕底部17～24は外面がハケメないしヘラミガキ、内面はヘラケズリを行うが、19の内面にはハケメ、24はヘラミガキがみられる。17の底面には葉脈の痕跡がある。石鏃S1は凸基式で、最大長34.5mm、最大幅13.5mm、最大厚3.5mmを測り、重さは1.6gである。これらの時期は弥生時代後期後葉と思われる。

竪穴住居2（第5・6図・図版1-4・9）

調査区東側の斜面地に位置する遺構であり、住居1から北西に約3m上方で確認された。検出状況から最低一回の建て替えが行われたと思われる。新段階にあたる掘り方の平面形態は北側に削平を受けているが円形を呈しており、直径約550cmである。床面の貼り床はみられなかったが、水平で堅くよくしまっていた。壁面に沿っては二重の壁体溝が確認され、これは断面状況と支柱穴の配置から山側に拡張されたことが窺える。床面の平面形も新・古段階とも円形と思われ、新段階は直径約505cmを測り、床面積は約20.0㎡であり、古段階は直径約485cmを測り、床面積は約18.5㎡であった。深さは現状で90cmを測る。新段階の断面形態は床面からやや外方気味に立ち上がり、上面は広く開口した状況を呈しており、古段階も同様であったと思われる。

柱構造は支柱が4本柱であり、支柱柱間は古段階が200×140cmで、新段階が200×198cmを測る。これは山側方向に住居を拡張した際に、谷側の支柱穴2個は再利用し、山側の支柱穴2個は全体的に約60cm程度南側に移動させたことによるためである。支柱と側壁の距離は約100cmとされる。支柱掘り方は新・古段階のいずれも円形を呈し、直径40～50cmで、深さ25～65cmを測る。また、すべての支柱穴ではそれらから直径約30cm程度の柱材を使用していたと推測される。また、新段階の北西支柱穴では抜き取り後に大形の石が混入していた。床面の中央付近をみると、新段階の支柱穴で囲まれた内側では、平面形が隅丸方形を呈した高さ5～10cm程度の土堤が確認された。さらにその中央では、掘り



第6図 竪穴住居2出土遺物(1/4・1/3)

方の平面形態が西側に浅いたわみを有する直径61cm、深さ71cmを測る円形の中央穴が検出され、その北側からは浅く舌状に細長く延びる溝が付属していた。以上のことから、住居1とは床面構造が大きく異なっていたといえる。埋土の堆積状況を見ると、床面直上には黒色炭層が約5cm程度認められ、その上面中央付近に焼土粒、焼土塊や炭灰を多量に含む土層がみられる。

出土遺物は甕25～28、高杯29～34、鉢35、製塩土器36、砥石S2などが認められた。甕25の口径は14.2cmで、「く」の字状に強く外反する口縁部の端部外面に強い凹線状のヨコナデを行う。甕26の口径は12.6cmを測り、「く」の字状に外湾した口縁部からヨコナデによって短く直立する丸く納めた端部をもつ。甕27の口径は11.6cmで、球形状の肩部から「く」の字状に外反する口縁部にヨコナデによる内傾する端部をもつ。甕28の口径は12.2cmであり、基本的に甕26と形態は類似する。全体に器面の剝離が著しい。

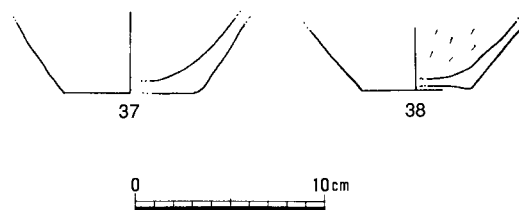
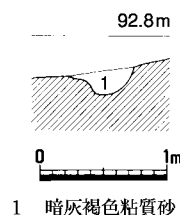
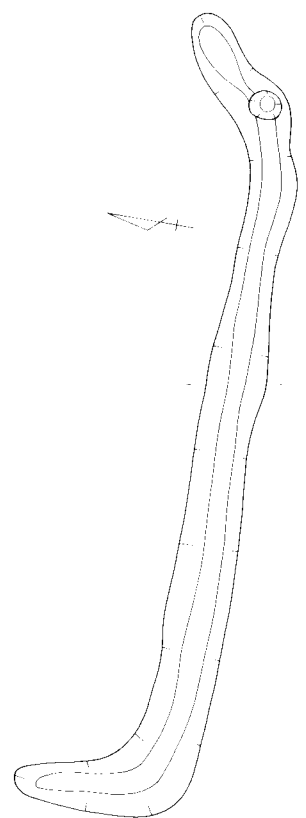
高杯29の口径は18.5cm、底径は11.1cm、器高は9.6cmを測る。杯部は深い内湾を呈し、口縁部との変換点では稜をもち、外湾して大きく開口する端部は丸く納める。短い脚柱部で脚裾部には円孔を4個配し、端部はやや尖り気味ながら丸く納める。外面に丁寧なヘラミガキを施している。高杯30の口径は15.6cmであり、杯部は浅い皿状を呈し、口縁部は外湾して大きく引き出されて端部は丸く納めている。また、杯部へ短い脚柱部を挿入しており、脚裾部には円孔を4個配する。外面にはヘラミガキがみられる。

高杯31の口径は11.8cmで杯部は深い碗状を呈し、口縁部との変換点ではやや稜をもちながら、ヨコナデにより直立気味に仕上げ、端部は丸く納めている。内外面ともに丁寧なヘラミガキがみられる。高杯32は内外面に粗いヘラミガキを行い、短い脚柱部で脚裾部には円孔を4個配している。高杯33の底径は8.8cmであり、内外面ともにヘラミガキがみられる。脚柱部の状況から直接受け部をもつ形態と思われる。高杯34の底径は12.6cmで脚裾部には円孔を配し、端部には面取りがなされている。内外面にヘラミガキがみられる。

鉢35は口径7.6cm、底径2.9cmの小形品であり、上げ底で低脚部から外湾する体部をもち、口縁端部は丸く納めている。内外面ともにヘラミガキが施されている。製塩土器36の底径は3.1cmであり、剝離が著しい。このうち、高杯29・32と砥石S2は新段階の壁体溝埋土中から確認している。これらの時期は弥生時代後期後葉と思われる。

竪穴住居 3 (第7図)

調査区北側の斜面地に位置する大形の段状遺構である。掘り方の北側部分は大きく削平を受け、



第7図 竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物(1/4)

壁体溝とわずかに床面を残す程度である。掘り方の平面形態は隅丸長方形を呈すると推測され、現状で長さ620cm、壁体溝の幅は45cm、深さは18cmを測る。断面形態は床面から外傾して立ち上がると思われ、壁体溝内の東側隅付近で1個の柱穴を確認したが、用途は不明である。出土遺物は壺ないし甕底部37・38などが認められた。これらの時期は弥生時代後期後半と思われる。

竪穴住居 4 (第8・9図)

調査区中央西側の斜面地に位置する段状の遺構である。掘り方の北側部分は大きく削平を受け、壁体溝と一部に床面と柱穴が確認できる程度である。掘り方の平面形態は隅丸長方形を呈していたと推測され、現状で長さ420cm、壁体溝の幅は35cm、深さは19cmを測る。断面形態は水平な床面から外傾して立ち上がり、深さは12cmを測る。柱穴は合計6個確認しており、埋土には炭片を含むものを有し、一部に柱痕跡がみてとれるものもある。掘り方はいずれも円形を呈し、直径約30cm、深さ15～45cmを測る。この柱穴の深さの差異は立地状況に反映されていると思われる。上部構造については不明であるが、壁体溝の東側隅と壁体溝東辺延長上にある柱穴a・cは、この遺構の支柱穴と想定され、柱間は189cmである。また、この2個では柱痕跡がみて取れ、直径約20cm程度の柱材を使用していたと推測される。

遺物は壺39・40が壁体溝から、甕41が柱穴から出土している。壺39は倒卵形の体部から「ハ」の字状に立ち上がる頸部を有し、頸胴部に円形竹管文を施している。外面に細かいハケメ、内面体部にヘラ

ケズリ、頸部にユビオサエがみられる。

壺40は外湾する口縁部にやや肥厚した口縁端部に面取りを行っている。

甕41の口径は18.0cmであり、ゆるく外湾しながら立ち上がる体部から、口縁部

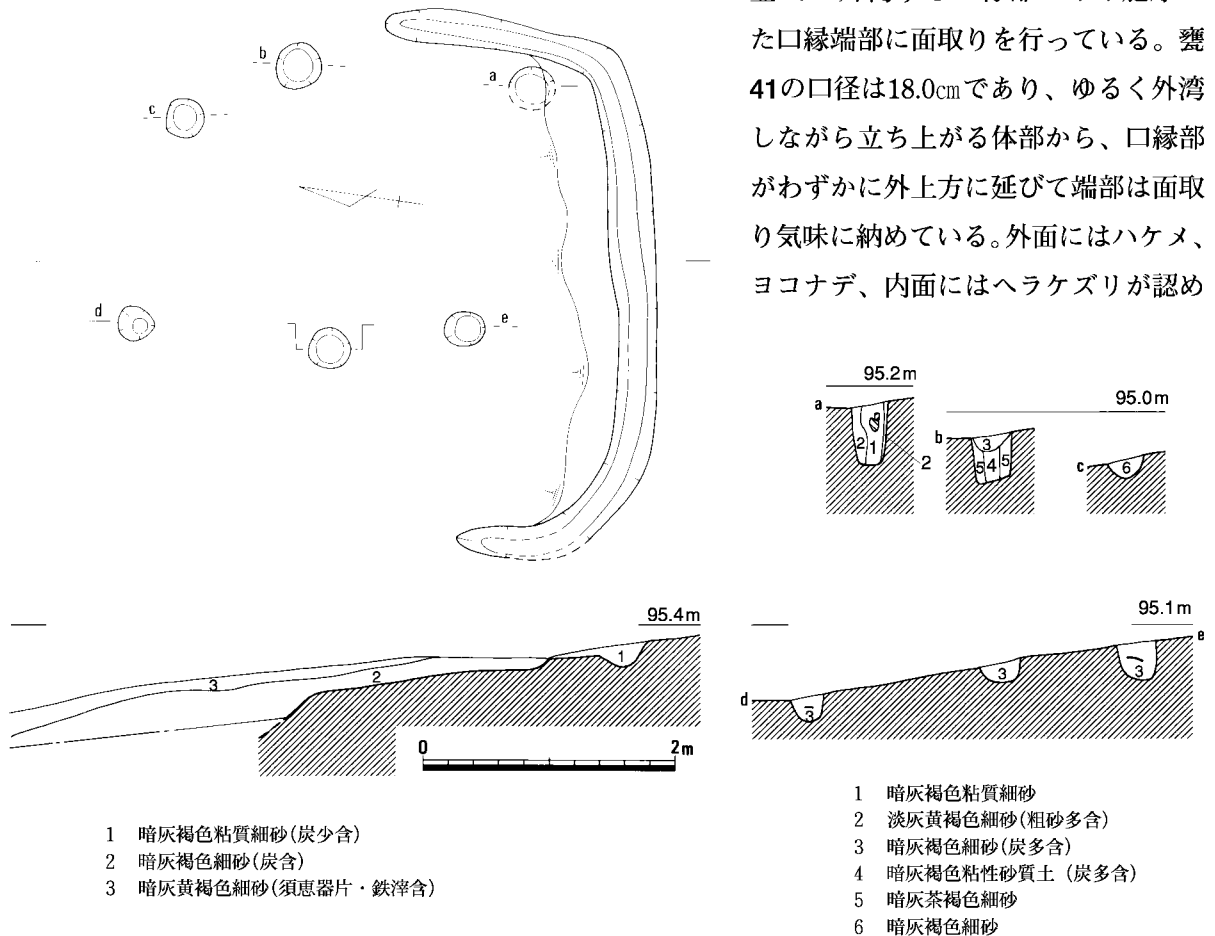
がわずかに外上方に延びて端部は面取り気味に納めている。外面にはハケメ、

ヨコナデ、内面にはヘラケズリが認め

られる。

られる。

られる。



第8図 竪穴住居 4 (1/60)

られる。これらの時期は弥生時代後期後葉と思われる。

竪穴住居 5 (第10図)

調査区中央西側の斜面地に位置する段状の遺構である。掘り方の北側部分は削平を受け、壁体溝と柱穴が確認できる程度である。

住居4とは土壌6をはさんで東側で切り合い関係を有する。掘り方

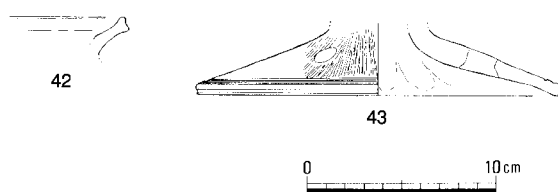
の平面形態は隅丸長方形を呈していたと推測され、現状で長さ379cm、壁体溝の幅は40cm、深さは12cmを測る。断面形態は床面から外傾して立ち上がると思われる。

上部構造は不明であるが、壁体溝の西側隅と壁体溝西辺延長上にある柱穴a・bは、この遺構の主柱穴と想定され、柱間は195cmである。これは住居4の東辺の主柱穴の状況と類似する。掘り方はいずれも円形を呈し、直径約35cm、深さ29~35cmを測る。また、柱痕跡がみて取れ、直径約15cm程度の柱材を使用していたと推測される。

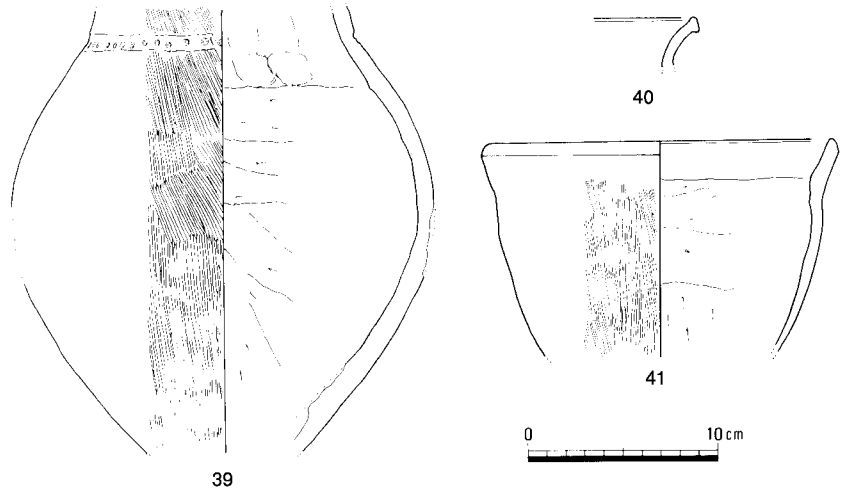
出土遺物は甕42、高杯43などが認められた。甕42は外上方に延びた口縁部の端部に強いヨコナデにより凹線文を施す。高杯43の底径は19.0cmであり、脚裾部には円孔を3個配している。端部には強いヨコナデにより面取りがなされ、外面は凹線状に3条の沈線文となっている。外面にはヘラミガキがみられる。これらの時期は弥生時代後期後葉と思われる。

竪穴住居 6 (第11図)

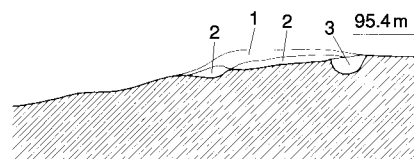
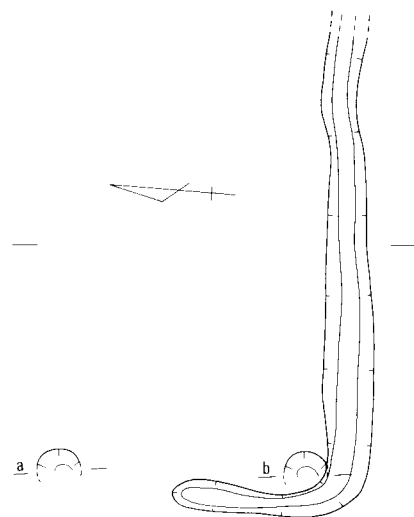
調査区中央西側の斜面地に位置する段状の遺構である。



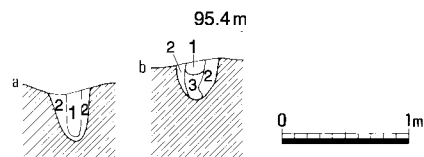
第10図 竪穴住居 5 (1/60)・出土遺物(1/4)



第9図 竪穴住居 4 出土遺物(1/4)



- 1 淡灰黒褐色細砂(粗砂含)
- 2 淡灰黒褐色細砂
- 3 灰黒褐色弱粘質細砂



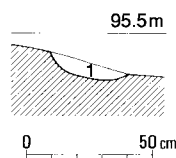
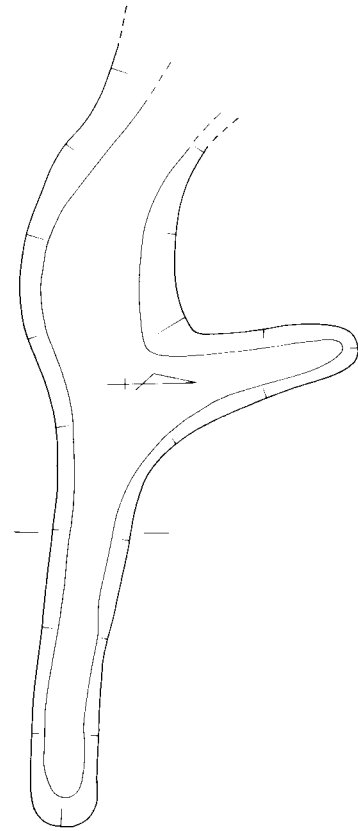
- 1 暗灰黄褐色細砂
- 2 淡灰黄褐色細砂
- 3 暗灰褐色粘質細砂

掘り方のそのほとんどが削平を受け、壁体溝のみ確認できる程度である。住居5とは東側で切り合い関係を有していた可能性が高い。掘り方の平面形態は隅丸長方形を呈していたと推測される。現状で長さ310cm、壁体溝の幅は30cm、深さは8cmを測る。断面形態は床面から外傾して立ち上がると思われる。上部構造については不明であるが、壁体溝に三叉状の場所が認められる。また、前述の住居4・5ともに標高95.3m周辺で等高線に対して平行する位置に立地していることから、これらは一連の構造物の可能性も高い。

出土遺物の高杯44は、杯部へ短い脚柱部を挿入して作られており、脚裾部には円孔を配し、外面にはヘラミガキがみられる。時期は弥生時代後期後葉と思われる。

竪穴住居7（第12図）

調査区中央北西側の斜面地に位置する段状の遺構である。掘り方のそのほとんどが削平を受け、壁体溝と柱穴を確認できる程度である。掘り方の平面形態は隅丸長方形を呈していたと推測されるが、やや湾曲している。現状で長さ431cm、



1 淡灰褐色細砂 (炭少含)

第11図 竪穴住居6 (1/30)・出土遺物(1/4)

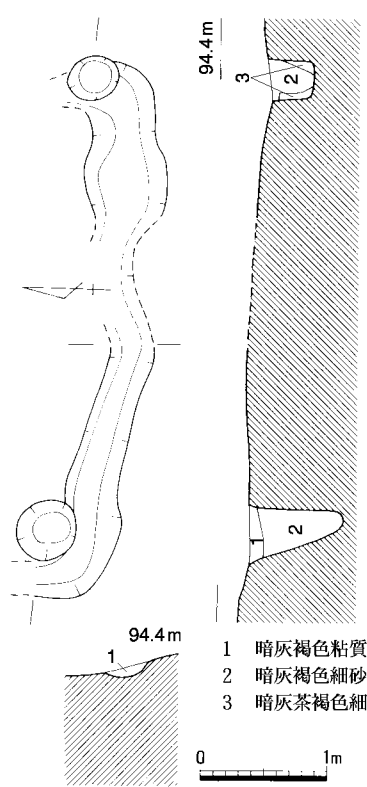
壁体溝の幅は34～65cm、深さは7cmを測る。断面形態は床面から外傾して立ち上がると思われる。

上部構造は不明であるが、壁体溝の東西側隅にある2個の柱穴は、この遺構の支柱穴と想定され、柱間は360cmである。これは他の段状の遺構の柱穴状況と類似する。掘り方はいずれも円形を呈し、直径約45cm、深さ38～75cmを測る。遺物は壺ないし甕底部45が出土し、時期は弥生時代後期後葉と思われる。

竪穴住居8（第13図）

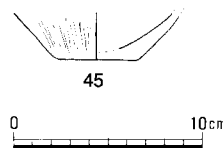
調査区中央南側の斜面地に位置する段状の遺構である。掘り方の北側は削平を受け、壁体溝と柱穴を確認できる程度である。

掘り方の平面形態は隅丸長方形を呈していたと推測される。現状で長さ414cm、壁体



1 明灰褐色粘質細砂

- 1 暗灰褐色粘質細砂 (炭多含)
- 2 暗灰褐色細砂 (粗砂・炭多含)
- 3 暗灰茶褐色細砂

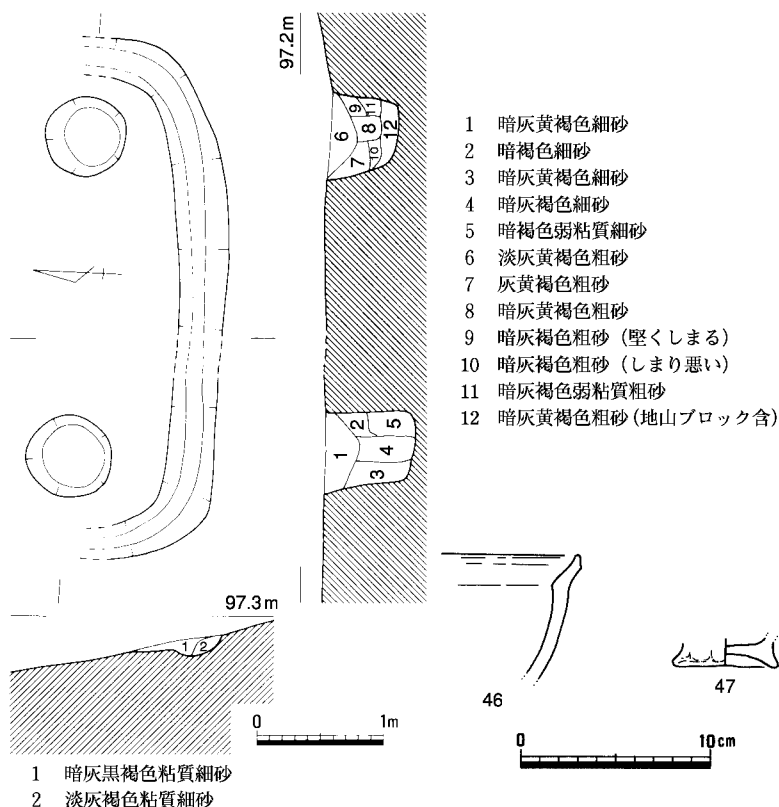


第12図 竪穴住居7 (1/60)・出土遺物(1/4)

溝の幅は35cm、深さは15cmを測る。断面形態は床面から外傾して立ち上がると思われる。

上部構造については不明であるが、壁体溝の東西側隅にある2個の柱穴は、この遺構の主柱穴と想定され、柱間は260cmである。これは他の段状の遺構の柱穴状況と類似する。掘り方はいずれも円形を呈し、直径約65cm、深さ58～69cmを測る。また、1個に柱痕跡がみて取れ、直径約20cm程度の柱材を使用していたと推測される。

出土遺物は鉢46・47などが認められた。鉢46はゆるく外湾する体部から短く外上方に開口縁部に、端部は面取り気味に納めて頂部が尖る。鉢47は上げ底である。これらの時期は弥生時代後期後葉と思われる。

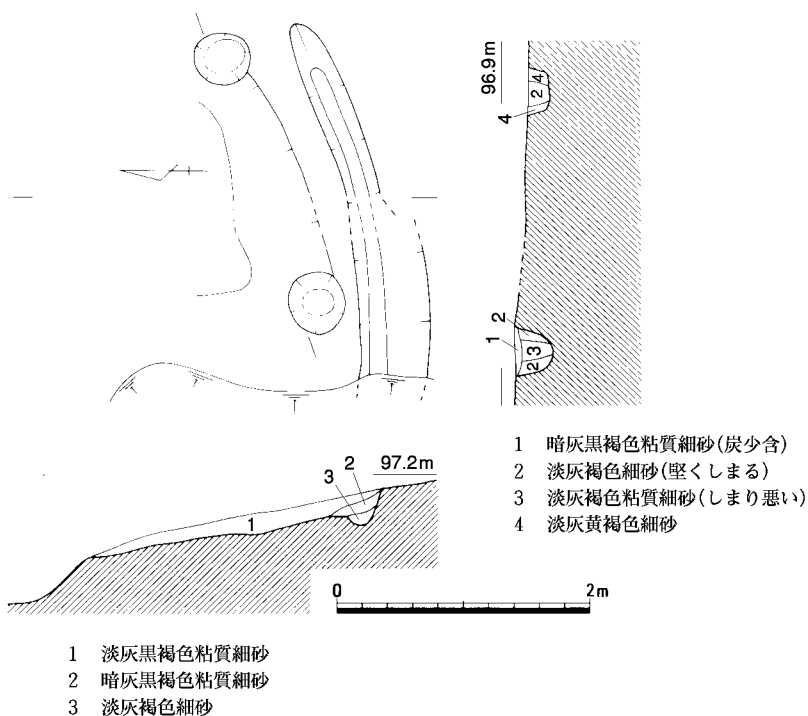


第13図 竪穴住居 8 (1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居 9 (第14図)

調査区中央南西側に位置する段状の遺構である。掘り方の北・西側は削平を受け、壁体溝と柱穴を確認できる程度である。掘り方の平面形態は隅丸長方形を呈していたと推測される。壁体溝の幅は28cm、深さは29cmを測る。断面形態は床面から外傾して立ち上がると思われる。

上部構造は不明であるが、壁体溝の東西側隅にある2個の柱穴は、この遺構の主柱穴と想定さ



第14図 竪穴住居 9 (1/60)

れ、柱間は210cmである。掘り方は円形を呈し、直径約50cm、深さ18~30cmを測る。また、柱痕跡がみとれ、直径約15cm程度の柱材の使用が推測される。

遺物は出土しなかったが、状況から弥生時代後期後半のものと考えられる。

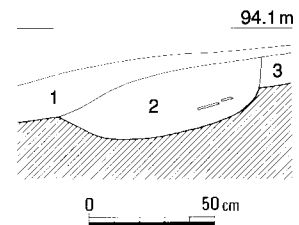
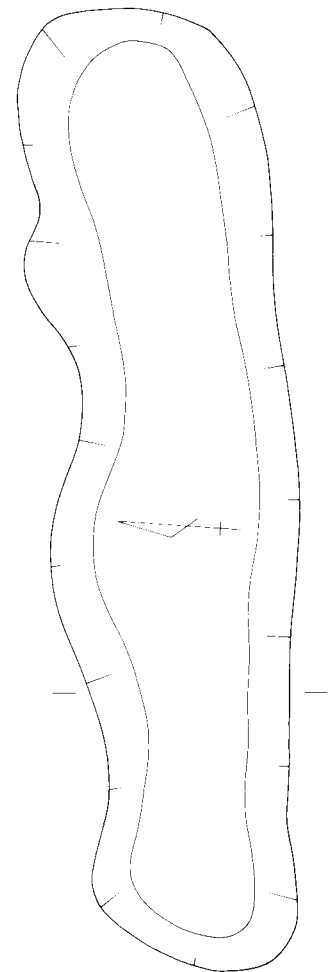
2 土壌

土壌1 (第15図)

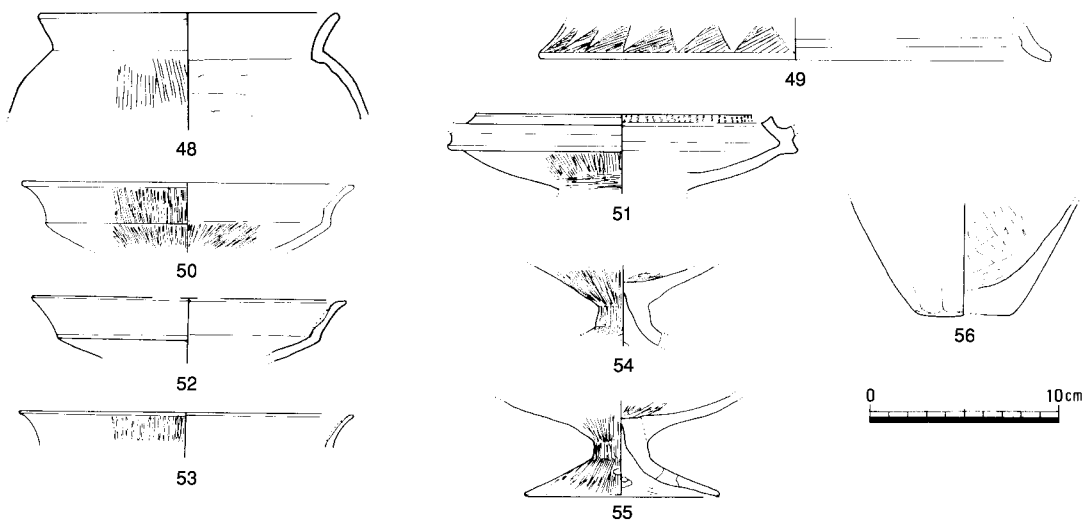
調査区中央北西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ383cm、幅98cm、深さは28cmを測る。埋土には炭を含む。

遺物は甕48・56、高杯49~55などが出土した。甕48の口径は15.5cmを測り、内湾する体部から「く」の字状に外反する口縁部をもち、丸く納めた端部をもつ。外面は体部がハケメ、口縁部がヨコナデ、内面は体部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデを行う。甕56の底部はやや丸みを帯びる。内面にはヘラケズリを行う。

高杯49は口縁端部外面に鋸歯文を施す。高杯50の口径は17.5cmであり、杯部は内湾を呈する。口縁部との変換点は稜をもち、外湾して立ち上がって端部は面を有する。内外面にヘラミガキを行う。高杯51の口径は15.5cmを測る。杯部は浅い皿状を呈し、「く」の字状に屈曲する口縁部との変換点では強い稜をもち、外面上部に突帯を巡らす。端部は面取りし、二重の円形竹管文を施す。外面にヘラミガキを行う。高杯52の口径は16.5cmであり、形態は高杯50と類似する。高杯53の口径は17.6cmで外反する口縁部に丸く納める端部をもつ。外面にヘラミガキを行う。高杯54は短い脚柱部に裾部に円孔を4個配



- 1 淡灰黄褐色細砂
- 2 暗灰褐色細砂(炭少含)
- 3 暗灰褐色細砂



第15図 土壌1 (1/30)・出土遺物(1/4)

する。内外面にはヘラミガキを行う。高杯55の底径は10.0cmであり、椀状を呈する杯部へ短い脚柱部が挿入される。脚裾部には円孔を配し、端部は丸く納める。外面にヘラミガキがみられる。時期は弥生時代後期後葉と思われる。

土壌 2 (第16図)

調査区南側に位置する。平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈し、長さ160cm、幅148cm、深さは68cmを測る。甕57の口径は16.0cmを測る。ゆるく内湾する体部に「く」の字状に外上方へ延びる口縁部をもち、端部外面は内傾気味に面を有する。時期は弥生時代後期後葉と思われる。

土壌 3 (第17図)

調査区中央南東側に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈し、長径69cm、短径51cm、深さは12cmを測る。出土遺物は確認できなかった。

土壌 4 (第18図)

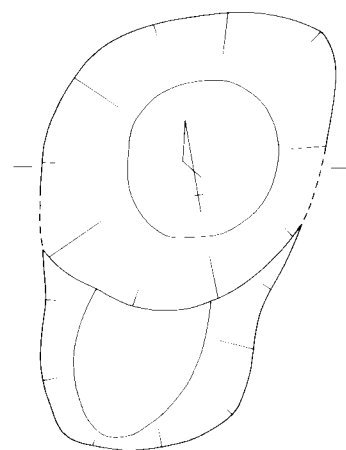
調査区中央南東側に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、長径108cm、短径92cm、深さは29cmを測る。出土遺物は認められなかった。

土壌 5 (第19図)

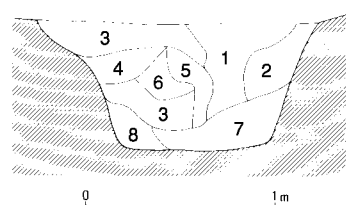
調査区中央南東側で確認された。平面形は不整隅丸方形、断面形は椀形を呈し、長さ126cm、幅77cm、深さ69cmである。弥生時代後期後半の土器が出土している。

土壌 6 (第20図)

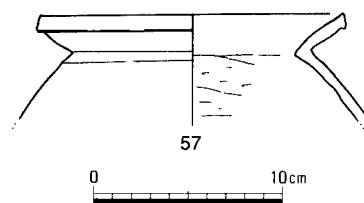
調査区中央西側に位置する。平面形は長楕円形、断面形は椀形を呈し、長径109cm、短径52cm、深さ20cmである。弥生時代後期後半の土器が出土している。(澤山)



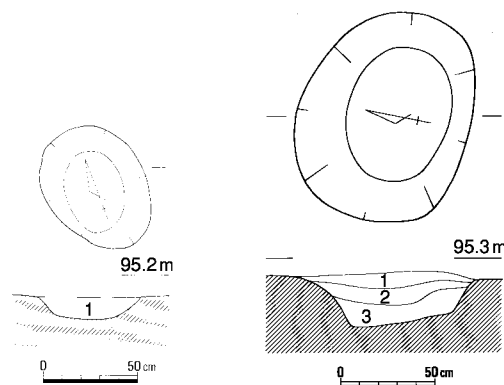
98.9m



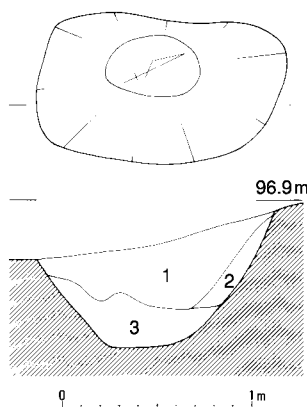
- 1 淡茶褐色細砂
- 2 灰褐色細砂
- 3 淡黒色細砂
- 4 淡黒色細砂(黄褐色粗砂含)
- 5 淡茶褐色細砂(粗砂含)
- 6 黒灰色細砂
- 7 灰黄色細砂
- 8 淡褐色細砂



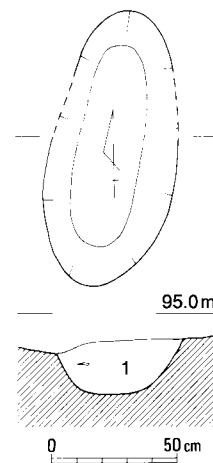
第16図 土壌 2 (1/40)・出土遺物(1/4)



- 1 暗灰黒褐色細砂(炭多含)
- 1 淡灰褐色細砂
- 2 淡灰褐色細砂(粗砂含)
- 3 暗灰褐色粘質細砂



- 1 暗灰褐色粘質細砂
- 2 淡灰褐色粘質細砂
- 3 淡灰褐色粗砂



- 1 暗灰褐色細砂(炭少含)

第17図 土壌 3 (1/40) 第18図 土壌 4 (1/40) 第19図 土壌 5 (1/40) 第20図 土壌 6 (1/30)

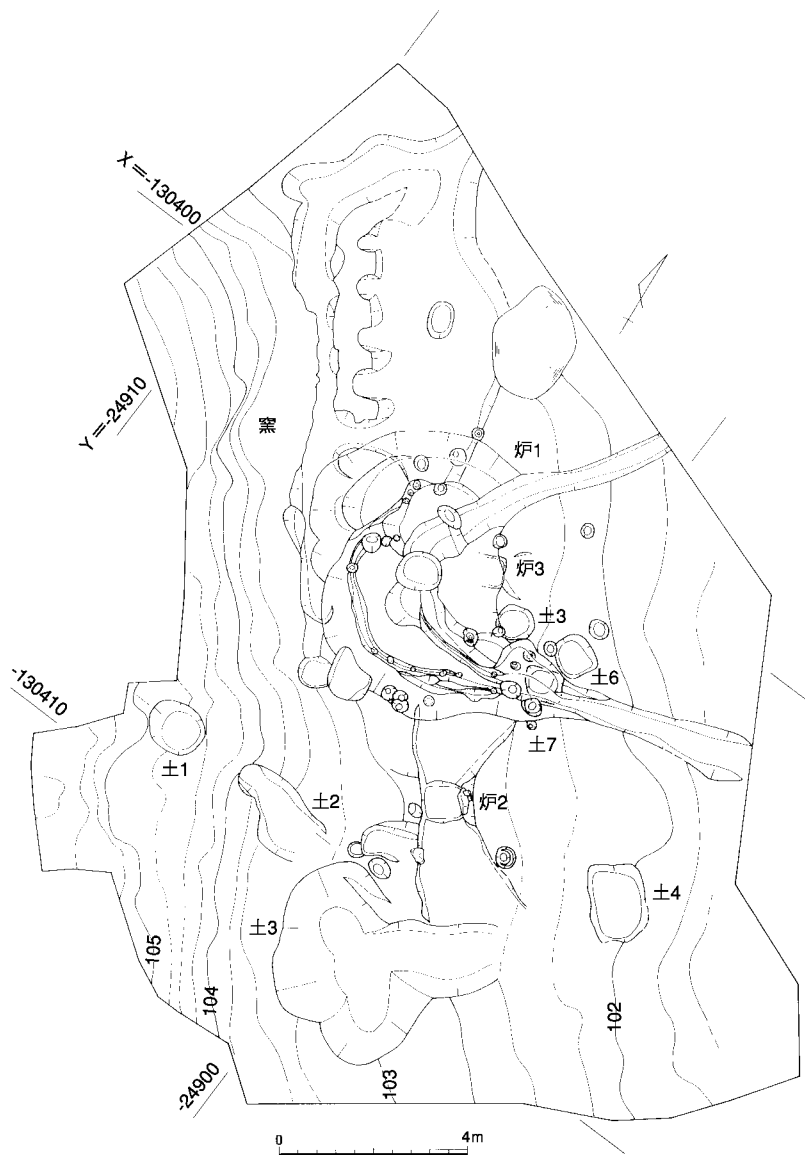
第4章 八ヶ奥製鉄遺跡

第1節 調査区の概要

遺跡発見の発端となったのは、工事により斜面に露呈した鉄滓の堆積層である。鉄滓は肉眼観察で容易に製錬滓と見分けられ、この堆積層より高いところに製鉄遺跡が存在すると判断されたが、これまで岡山县内で確認された製鉄遺跡の一般的な立地と比べて、斜面の高位に位置することになった。工事予定範囲内にかすかな傾斜変換点が認められたため、ここに3本のトレンチを入れたところ、鉄滓の堆積は山側へ7~8m続き、傾斜変換点辺りで途切れることが分かった。これにより、東西約20m、南北約15mの全面調査範囲を設定した。

表土を除去していくと、調査区の北西部で焼土が5m余りの長さで検出されたが、製鉄炉地下構造ではなく、横口付炭窯と判断された。調査区の中央やや南東寄りの地点では、製鉄炉地下構造が検出されたが、これと横口付炭窯の間に見られた径6m程の黒色土の堆積を除去したところ、別な製鉄炉が検出された。この製鉄炉には炉底部分が原位位置を保って遺っており、操業終了時の状態を留めていた。さらに、これに壊された今一つの製鉄炉も検出され、重複する製鉄炉3基と横口付炭窯の関係を調査することとなった。

これらに伴う遺物は、須恵器および土師器が計4点出土したのみである。



第1図 八ヶ奥製鉄遺跡全体図(1/160)

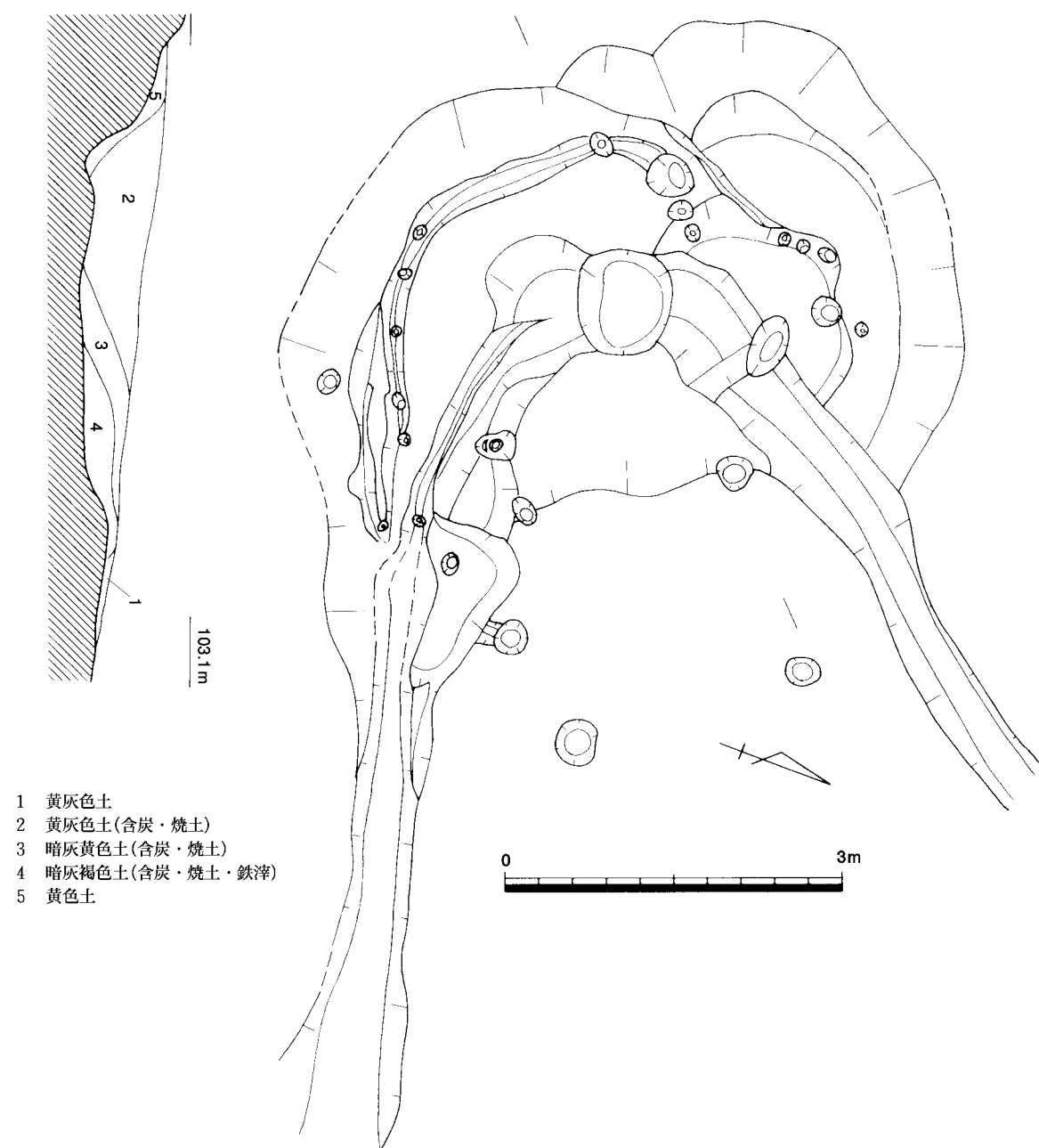
第2節 調査の概要

1 製鉄炉

製鉄炉1 (第1~4図、図版1-5)

調査区の中央部に位置し、製鉄炉2・3、炭窯を削って造られている。

作業場は、製鉄炉3および炭窯前庭部を埋めた製鉄炉2の排滓場を掘り窪めて造られており、平面形は約6×4mの楕円形を呈している。操業終了後の堆積土を第2図に示しているが、第4層には炭・焼土・鉄滓が含まれ、製鉄炉1操業時の堆積ないし製鉄炉1作業面の造成土と考えられる。作業場の西奥

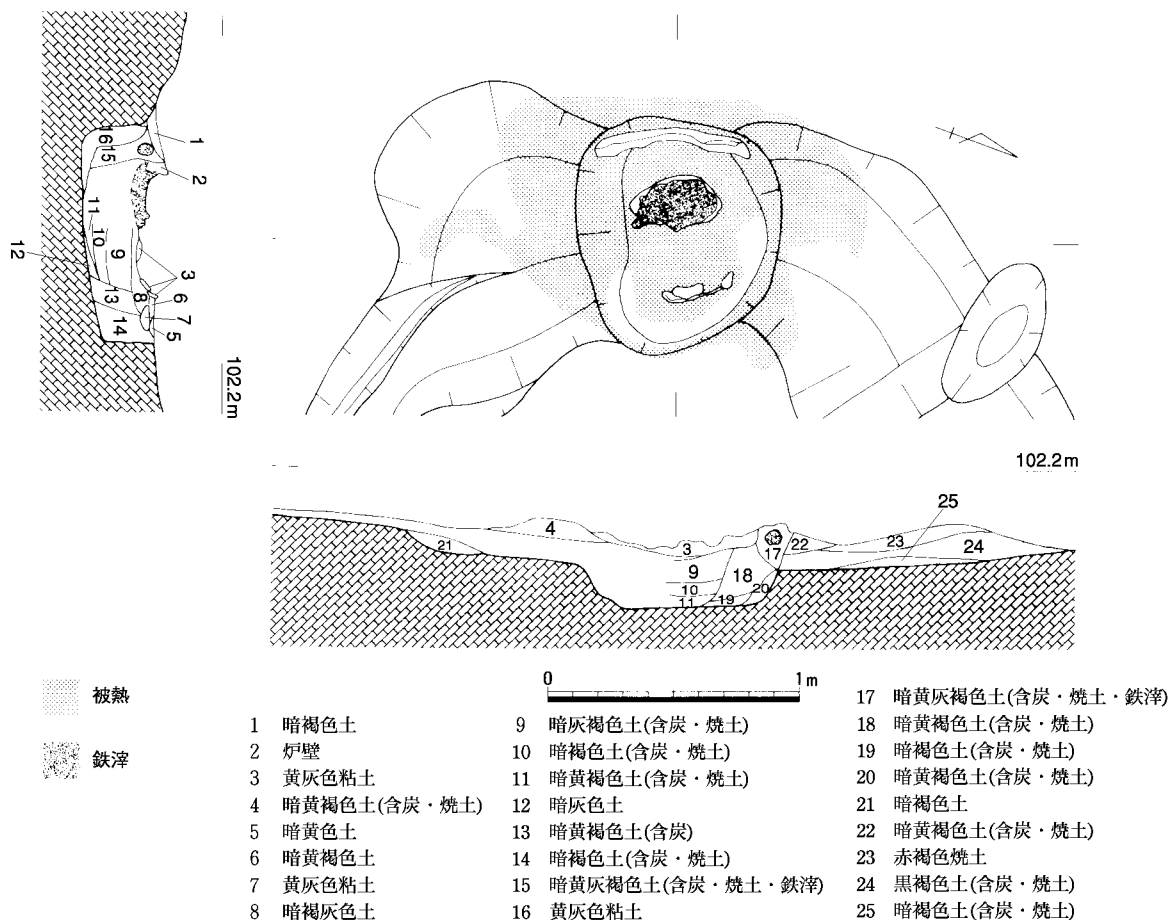


第2図 製鉄炉1 (1/60)

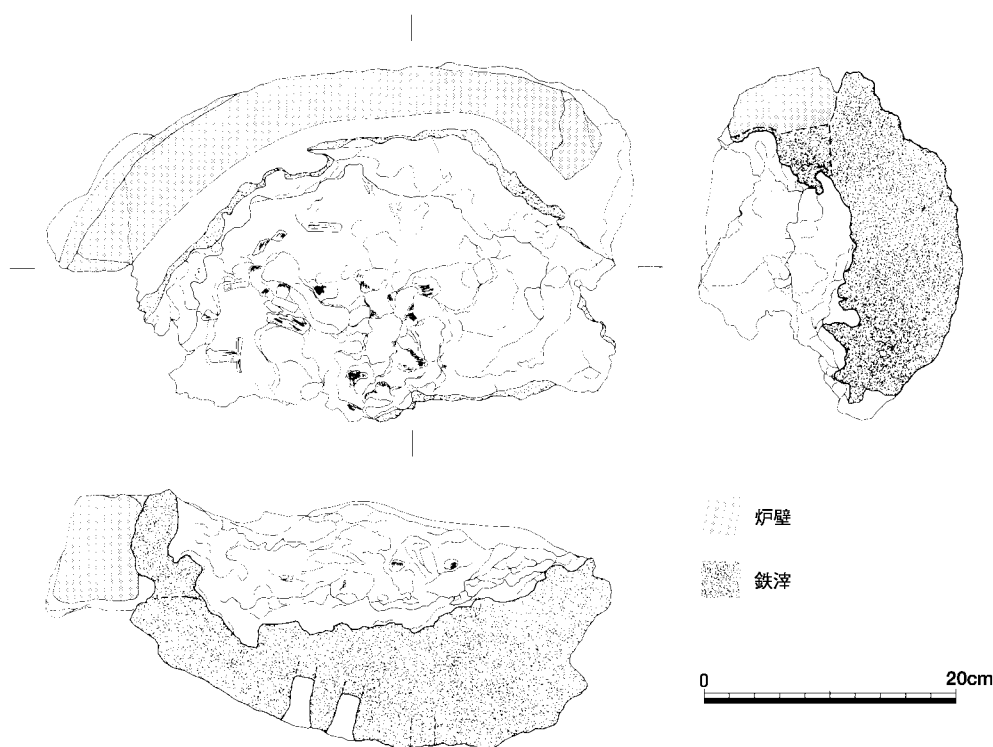
壁は60°程度の傾斜で掘られており、炉の南北4mの範囲と、北西部は別個に掘られたようで、北西部の作業面の方が一段高く仕上げられている。炉の周辺の作業面には側壁際に細い溝が巡らされ、南側ではその底部に杭が打ち込まれており、北側では溝が確認できないが杭の痕跡は認められる。炉・排滓溝と北西部の段も含めた作業面の広さは、約11m²である。炉および排滓溝より山側の作業面は、幅50~90cm程度であり、炉の東側は2×1m程の範囲が炉へ向かって緩く傾斜している。いずれも、輔置き場と想定される位置であるが、やや狭い空間と言わざるを得ない。作業場内外でいくつかの柱穴が検出されているが、炉を覆う上屋等の構造物は復元できなかった。また、原料・燃料の置き場と考えられるような木炭等の集積箇所も認められなかった。

排滓溝は、炉の南北両端から「ハ」字状に谷方向へ向かっており、作業場内では幅70cm、深さ10~15cm程度であるが、作業場外の斜面では幅30cm、深さ25cm程度に狭くなる。この規模からは、作業場内では通路としての利用も可能であるが、外部では掻き下ろすための溝としかみなせない。作業場外の溝には鉄滓が充満していたが、北側の溝内に赤褐色に錆を見せる鉄滓が詰まるのに対して、南側では黒褐色で鉄分を示さない鉄滓が詰まっており、両排滓溝、ひいては炉の両端において、使用時期の違い等の機能差を暗示する状態であった。

炉の地下構造は、長軸長96cm、短軸長80cmの隅丸台形を呈して、深さ30cm弱を測る壙内に造られている。85×55cmの底面はほぼ平坦で、周辺も含めて第3図に点描した範囲に空焼きの際の熱影響が見られる。西側壁には厚さ8cm程に粘土が貼られて焼き締められており、1回の補修が認められた。壙内には炭片や焼土粒を含む灰褐色土が充填されており、断面観察からは2回の改修が認められるが、そ



第3図 製鉄炉1 地下構造(1/30)



第4図 製鉄炉1 炉底西半(1/6)

の都度改修範囲は狭くなり、最終段階には長径40cm程度の規模で埋め直されている。後述する炉底残留滓底面には、径18mm程の木炭が立てられていたことを示す痕跡が3ヵ所見られ、地下構造の埋め土に木炭が遺っていたが、木炭を縦に並べて詰め込んだというほどの密度ではない。

炉は最終操業終了時の状態をよく留めており、炉の北側1.3×1mの範囲には炉壁が倒された状態で堆積していたほか、炉底部が原位置で遺っていた。炉底の西半は第4図に遺物として示したように、炉内残留滓と炉壁が遺り、炉内面の位置は地下構造掘り方から20cmに当たる。掘り方東肩から20cm内側には細い焼土の帯が長さ20cm強にわたって遺っており、これが炉底東端とみなされる。また、炉底の南北両辺が遺っていない状態は、排滓がこれらから行われたことを示すとともに、前述の炉壁堆積状況を合わせ考えると、炉が主に北側へ引き倒されたことが想定される。

炉底に遺る炉壁部分は、延長40cm強にわたって、厚さ6cm、高さ8cmを測り、この厚さ・高さは構築時の粘土塊の大きさを示すと考えられる。遺存する炉壁部分には送風口の痕跡は認められず、これより高い位置に設置されたと考えられる。堆積していた上位の炉壁片は厚さ5cm程で、送風口は確認できない。炉材には2cm程の礫が含まれ、長さ5cm以上のスサも混ぜられている。内面は操業に伴って侵食されており、珪酸質の溶着が認められる。前述の炉底西半の内面位置と東側焼土帯との距離は約45cmであり、東側焼土帯に炉壁の厚さ6cmを勘案すると、終業時の炉底附近の内法寸法は40cm弱となる。炉形については、炉底西半の状態は円筒形自立炉とも見えるが、上位の炉壁片には一部に直線を示す壁外面も認められ、四隅が丸く収められた可能性を残すものの、方形箱形炉と想定する。

炉内残留滓に相当する部分では表面に木炭の噛み込みが見られるなど、粘性の高い状況を示している。この炉内残留滓の端部は炉壁の底面下に位置しており、炉底残留滓そのものを上下2層に分割する観察はできなかったが、少なくとも最終操業の直前の操業で生成された残留滓の上に最終の炉が築かれたと理解される状況である。この場合、炉の底面には粘土等が貼られなかったと理解される。

製鉄炉 2 (第1・5図、図版1-6)

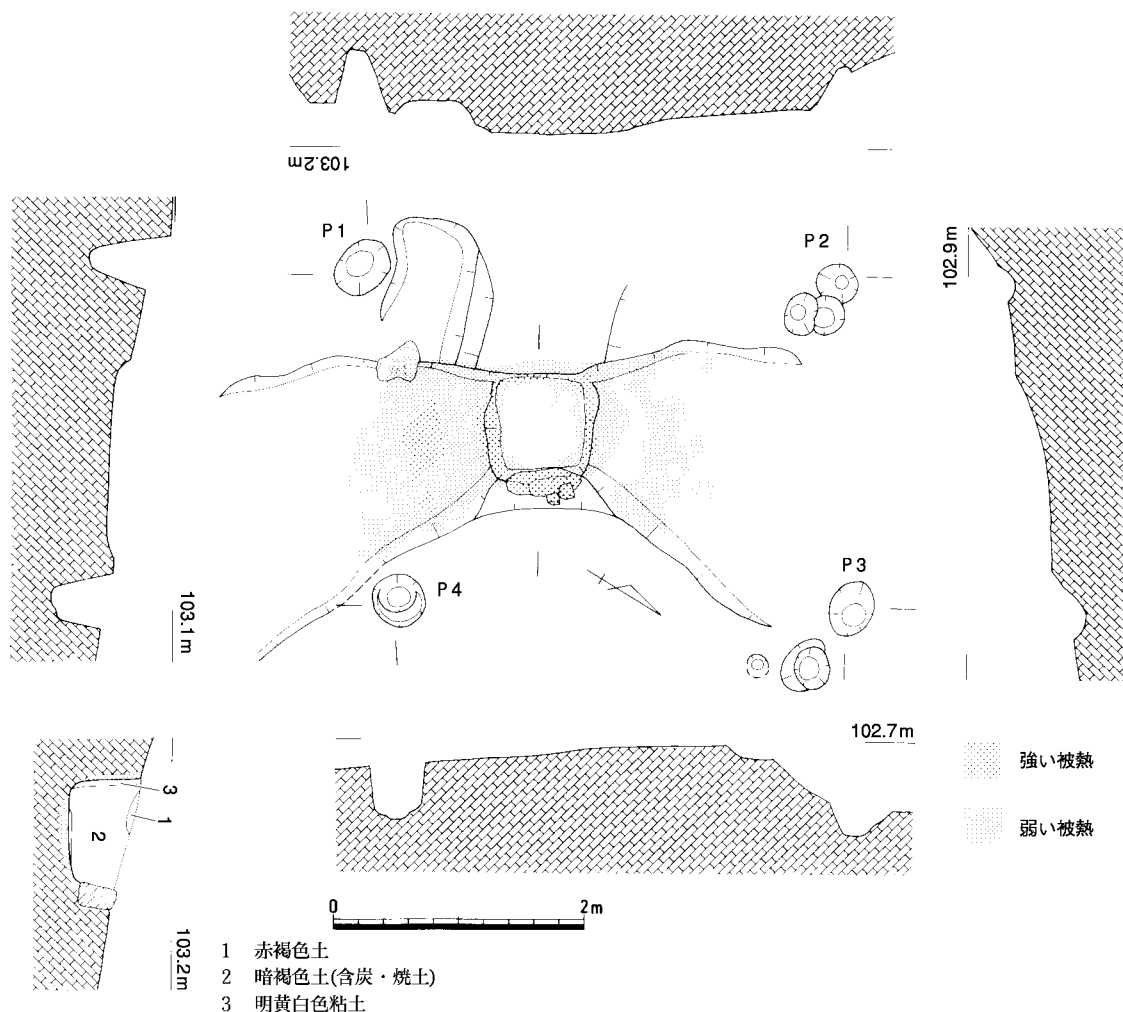
調査区の中央やや南寄りに位置し、北西を製鉄炉1に、南東を土壇3にそれぞれ削られている。

明瞭な作業場の造成は認められないが、山側については炉から約1.5m付近に傾斜変換点があり、谷側は盛り土の痕跡は認められないものの、傾斜は緩やかである。山側作業場の中央部は、幅約1mの高まりが削り残されており、鞆置き場とみなされる。その南側は、110×80cmの不整長方形範囲が深さ25cmに掘られているが、機能は不明である。

製鉄炉地下構造は、85×80×55cmのほぼ方形平面の壙内に造られている。東側面には60×30×10cmの石が立てられ、他の3面と底面には粘土が貼られており、空焼きによって第5図に点描した範囲が熱影響を受けている。壙内は炭・焼土を含む暗褐色土で埋められており、最上層の一部に熱影響が認められるが、炉内残留滓等は見られず、炉の規模を復元する手がかりは無い。

炉の南北両端には、幅1m強、深さ10cm程度の排滓通路が取り付いており、炉から1m以上離れるとその幅を2m弱まで広げている。それぞれ製鉄炉1、土壇3に削られているが、全体としては「ハ」字状に谷へ向かっている。

これらを覆う上屋については、排滓通路を挟んで掘立柱建物を復元させる柱穴が検出されている。P1・P4は約270cmの距離を持ち、炉地下構造南辺から85cmに想定される。西・北については複数の候補が有るが、P2・P3を使用すると距離約270cmとなり、建物の南北長は370～380cmとなる。



第5図 製鉄炉 2 (1/60)

製鉄炉3 (第1・6図)

調査区中央部で、製鉄炉1作業場の東肩口で検出された。

作業場等については、炭窯および製鉄炉1に削られて、手がかりが求められない。

地下構造は、南北長70cm、現存東西長60cmの方形平面で、深さ10cm弱の壙内が、炭・焼土を含む暗褐色土で充填されており、壙内から谷側の排滓通路状の窪みにかけて、底面に熱影響が認められる。

これらの地下構造および排滓通路とみなしうる構造から製鉄炉と想定したが、製鉄炉1・2とは炉と排滓通路の関係が異なることになる。製鉄炉1・2では排滓通路が等高線方向に両側で取り付くのに対して、製鉄炉3では直交する方向に取り付くだけでなく、山側の排滓通路が存在しなかった可能性も生じ、操作方法が製鉄炉1・2と異なることも考えられる。

考えられる他種の遺構としては、横口付炭窯の前庭部に所在する方形焼土壙がある。倉敷市菅生小学校裏山遺跡などで検出されているが、その場合には排滓通路状の熱影響を示す付属遺構は伴っていない。また、後述する炭窯の前庭部範囲に含めるには、ぎりぎりの位置にあるといえる。

2 炭窯

炭窯 (第1・7図、図版1-7・8)

調査区北半に位置し、遺構の南半を製鉄炉1に削られている。いわゆる横口付炭窯である。

前庭部は第7図土層断面に示す状態で埋まっていたが、第1～6層は製鉄炉2に起因する堆積土と考えられ、炭窯の終業後、時間をおいて製鉄炉2が築かれたと想定される。

窯体は花崗岩の基盤層をくり抜いて造られており、長さ約9m、最大幅90cm前後、復元高さ120cm程度に復元される。内部が山側からの流土等でほぼ埋まった後に天井が崩落した模様で、北側を中心に高い位置に天井の破片が堆積していた。

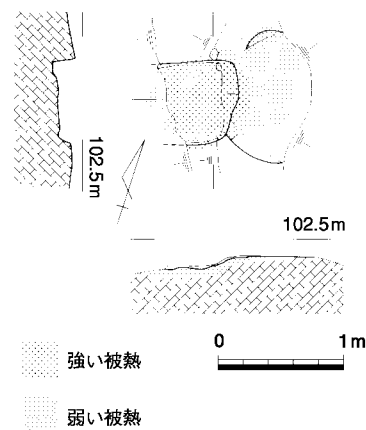
床面は幅75cm程度に平坦に造られ、焚き口から中央辺りまではほとんど平坦だが、これから南半は約7°の傾斜を持つ。北から2番目の横口の辺りから南の床面は、青灰色に還元状態を示している。

焚き口は北端に造られ、上幅1m、底幅50cmを測り、床面に長さ1mにわたって角礫が乱雑に積まれていた。焚き口の北3m程は、上幅1.1mの溝状を呈している。

横口は7個が確認でき、さらに1個が想定されて、8個に復元される。いずれも窯体同様に基盤層をくり抜いて造られており、幅40cm、高さ50cm、奥行き1m弱の規模を有して、心々で約1m間隔に並んでいる。側面図に示すように、横口開口部上端から天井部にかけて赤褐色の熱影響が見られる。

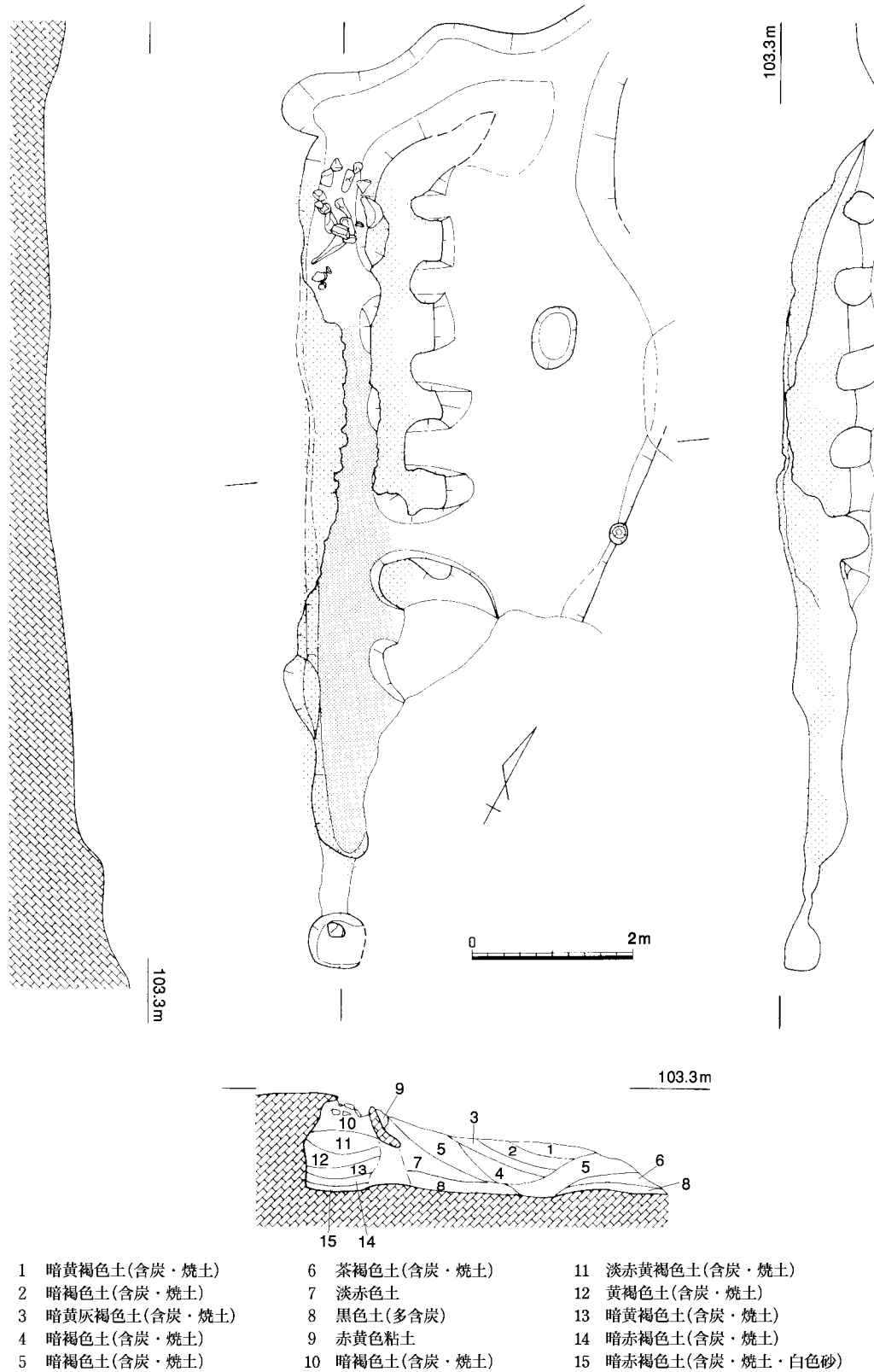
窯体南端から70cm南に煙り出しが造られている。煙道に相当する部分は削平されているが、窯体南端より40cm高い基盤層に弱い熱影響が認められ、煙り出しに取り付く部分では幅18cm程度の溝状を呈している。煙り出しは径70cm弱、深さ30cm程の規模で、煙道寄りに角礫1個が残されていた。

谷側にはほぼ平坦な前庭部が伴う。その東端は不明瞭であるが、横口から1.5～2mまで広がるようである。中央やや北寄りに80×50cm程の浅い窪みがあるが、被熱痕跡は無い。前庭部のほぼ全面にわたって炭を多量に含む黒色土が堆積しており(第7図第8層)、窯体に近い部分では厚さ20cmを測るところもある。



第6図 製鉄炉3 (1/60)

焚き口西側の調査区境の土層観察では、この西側に平坦面が造成されており、今一つの炭窯が所在する可能性もある。これらの炭窯から燃料供給を受けた製鉄炉については、事業予定地内にはその痕跡を見出せなかった。



第7図 炭窯(1/80)

3 土壙

土壙1・2 (第1・8図)

調査区の南西部で、製鉄炉2の斜面上方に位置する。

土壙2を掘り下げていくと、底面が比較的平坦で、山側の端部が幅・高さとも約50cmの規模で基盤層を横方向に掘り窪めていることが分かった。その延長方向に土壙1が所在したことから、土壙1を窯体、土壙2を煙り出しに見立てて、横口付の炭窯を造ろうとした痕跡かと考えたが、等高線との平行関係が成り立たないため、窯体が斜面から離れることになり、その可能性は非常に低いと言わざるを得ない。

遺物の出土は無く、他の遺構との切り合い関係も無いため、時期は不明である。

土壙3 (第1図)

調査区南東部に位置し、製鉄炉2の南排滓通路を削っている。

基盤層を、長径4.2m、短径3m強の楕円形に掘り窪め、谷側が幅1.5mの通路状に掘られている。山側で深さ1.2mを測る底面は比較的平坦で、そのまま溝状部分の底面につながっている。

製鉄炉2よりは新しいが、時期不明である。

土壙4 (第1図)

調査区南東部で、製鉄炉2の東斜面に位置する。

平面形は長方形を呈し、165×115×25cmの規模で掘られた土壙の内面に薄く粘土が貼られ、全体に弱い熱影響を受けている。遺構の内容は製鉄関連とみなせなくもないが、検出時に壙内が完全に埋まりきらない状況であり、新しい遺構とみなされる。

土壙5～7 (第1図)

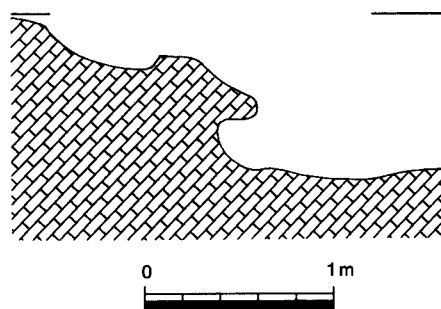
調査区の中央東寄り、製鉄炉1の作業場南東隅付近で検出され、いずれも製鉄炉1に先行する。また、製鉄炉2に対しても、その北側排滓通路の延長上に位置することになるが、これとの先後関係は不明である。いずれも平面形は不整な方形を呈し、一辺70～90cm、深さ25～30cmの規模で、底面が平坦なことなどに共通点を持つ。埋土にも粗密の差はあるが、炭・焼土・鉄滓を多く含んでいる。これらの状況から、製鉄炉操業時期の遺構と考えられるが、炉の地下構造とはみなせない。また、製鉄炉には先行するが、製鉄炉2・3との関係を個別に特定することは難しい。

4 遺物

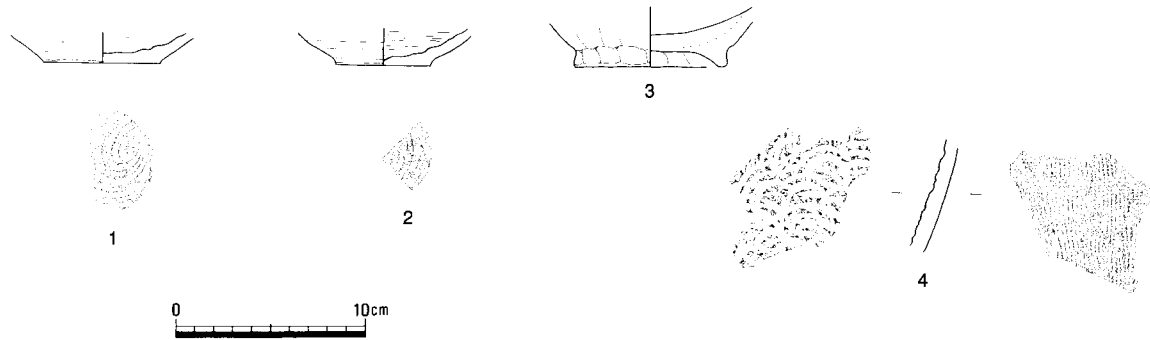
出土遺物は、第9図に示した4点の他に、表土中からの銅銭1点が有るのみである。

須恵器の椀1・2と土師器の高台付椀3は表土直下からの出土である。1・2はロクロによる成形で、糸切りされており、平安～鎌倉時代の所産と考えられる。3についても同様の時期に想定しうる。

須恵器の甕4は、炭窯の前庭部で、第7図第7層から出土した。外面に縦方向の平行タタキ、内面に深い同心円文が残っており、時期を限定できないが、古墳時代後半から古代にかけての所産と考えられる。



第8図 土壙1・2 (1/40)



第9図 出土遺物(1/4)

第3節 小 結

前述のように、この遺跡では製鉄炉3基と炭窯1基の製鉄関連遺構が検出された。それぞれの遺構の先後関係については、製鉄炉1が最も新しいことは間違いない。製鉄炉2と製鉄炉3については、直接の切り合い関係は無いが、製鉄炉3の位置は製鉄炉2の排滓場にあたり、基盤層を掘り込んで造られた製鉄炉3の地下構造の在り方からすれば、製鉄炉3が製鉄炉2に先行すると考えられる。炭窯の時期については、製鉄炉2との同時併存は距離的に想定できない。炭窯の前庭部上層に堆積する炭・焼土を含む土が製鉄炉2に起因すると考えられることから、炭窯が先行すると考えたい。このように見ていくと、製鉄炉3も含めて、調査区で製鉄が行われた段階と、製炭が行われた段階の2時期を設定できるようであり、後者が先行するものと考えられる。

遺物の出土状態からは、4が炭窯の終業時期と製鉄の開始時期を示し、1～3が製鉄終業時期の下限を示すと考えられる。もっとも、各遺物とも時期を限定しにくいものであり、全体として古墳時代後半から古代にかけて操業されたとしか言えない。

3基の製鉄炉については、それぞれ構造が異なっている。製鉄炉3については、全体の構造が不明であるが、少なくとも一方の排滓が炉の谷側側面から行われるという点は、今までに県内では類例が知られていない。製鉄炉2の構造は、県内の古墳時代後半から古代にかけての製鉄炉の典型を示すものである。製鉄炉1についても炉長の短い箱形炉として、類型に含めることができるが、製鉄炉2と比較すると、地下構造掘り方の形状が不整である点などに、総社市奥坂遺跡群で認められた構造の簡略化傾向を見ることができる。また、製鉄炉の立地としては、斜面の高位に位置する例として、少数派に属することになる。

本遺跡に近い製鉄遺跡としては、熊山町猿喰池製鉄遺跡、和気町石生天皇遺跡が挙げられる。前者は古墳時代後半に想定されて、5基の製鉄炉が連続して操業を続けており、地下構造も大きく丁寧な造られている。後者は9世紀初頭の操業で、一段深く掘られる地下構造は伴わないが、炉の想定規模は小さくない。本遺跡の遺構が示す内容は、両者の間に位置づけておかしくないものと思われる。

(光永)

第5章 岡遺跡

第1節 調査区の概要

岡遺跡の調査区は、北西から南東に延びる丘陵尾根部上に位置している。北東と南西は急傾斜面、または開墾によって地形は変貌しているが、かなりの遺構が検出され、高所での生活が営まれていたことが窺い知れる。遺構はこの丘陵のやせた尾根部および斜面部全体に広がっており、弥生時代の集落跡と古墳時代の墓地の存在を確認することができた。

調査区内では、弥生時代の竪穴住居11軒、段状遺構12基、掘立柱建物1棟、柱穴列3、陥し穴4基、土壇13基、溝と古墳1基を検出している。これらの遺構の時期は弥生時代が主体であり、この時期に限定されたかのように生活が営まれた集落である。竪穴住居の遺構は切り合い関係を認めるものの、さほど多くなかった。

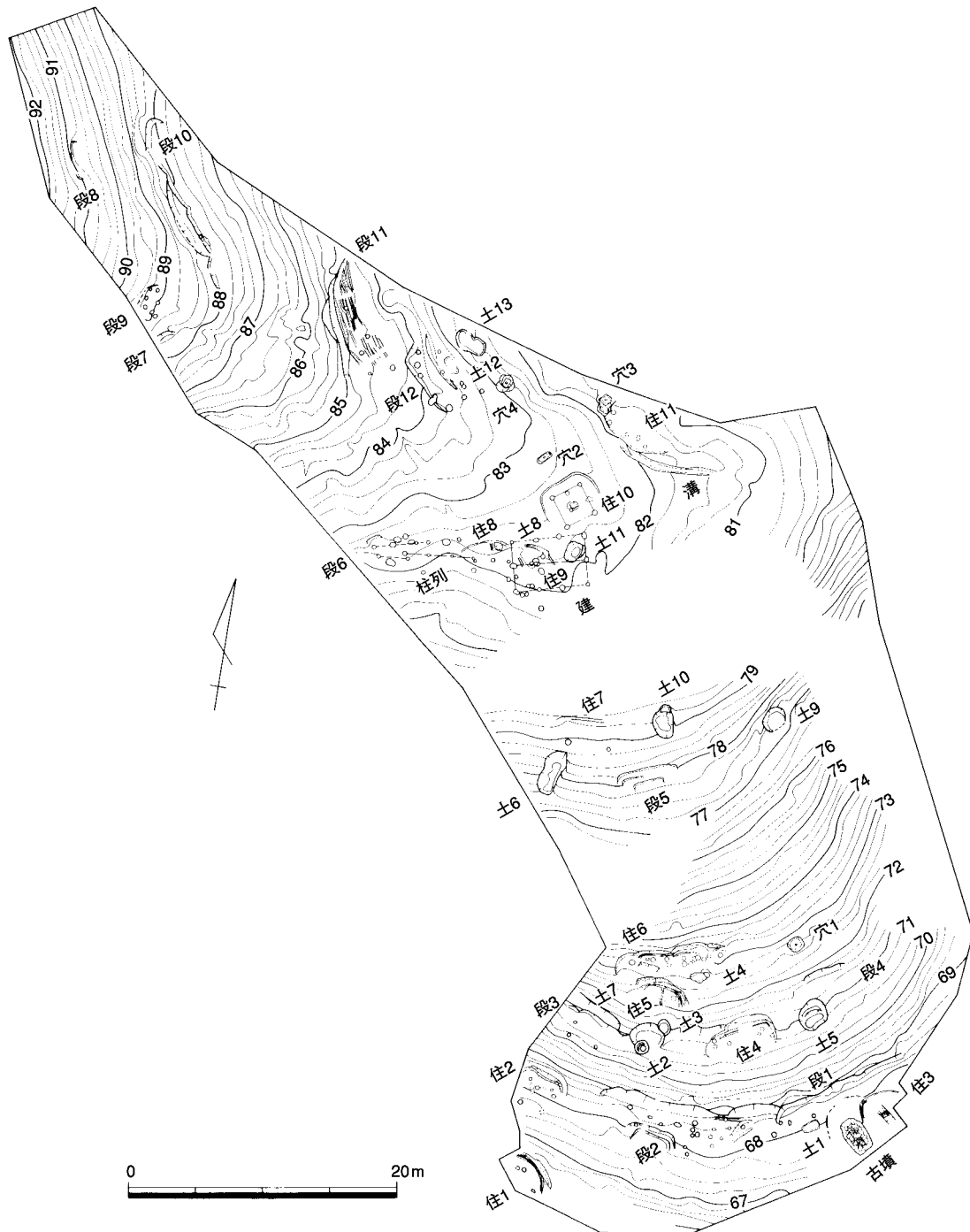
竪穴住居、ならびに段状遺構の立地は調査区全体におよんでおり、特に調査区の中央部付近と、南部に集中し最も密度の高い位置は、調査区南端の斜面の最もきつい位置である。この地区での遺構は等高線にそって営まれ、立地的には南向きと同時に谷に近いものではなかろうか。また上部で検出した段状遺構についても調査区の北東部の谷に面している。建物、柱穴列は地区の中程の比較的平坦な位置に存在。陥し穴は2ヵ所で検出されており、中程の区域では、鞍部の北よりに3基、南斜面の中程に1基が存在する。土壇についても中程の鞍部の周辺と地区の南端部に集中して存在している。溝については尾根の中程で鞍部から分岐した北東に面している。古墳の立地は、調査区の南東部で、調査区境い(すなわち近・現代の開墾で段落する境界地区)で全体的に造成された面を持った場所に存在している。また、土器を廃棄した土壇が僅かに1ヵ所確認されている。以上のような状況から定住期間は短期の集落であることが示唆される。古代の遺物が少量含まれているが、全体的に開墾が著しく行われているため、この時期の遺構の実体については明確に把握できなかった。

第2節 調査の概要

1 竪穴住居

岡遺跡は、調査区が北西部から南東部に延びた丘陵部に位置し、その丘陵が急斜面から一部で緩やかな平坦部的な地形を示し分岐して南へと下がり、この丘陵自体も終止する。

検出された竪穴住居は、おもに丘陵の傾斜が緩やかになった部分と急斜面の下位との2ヶ所に分かれて存在する。竪穴住居は11軒を確認し、立地場所より東側の平野部、南側の谷部を望む。遺構の平面形態はおおむね円形・隅丸方形を呈する。また壁体溝・中央穴の有無は構築時から常設していないことも窺え、開墾消滅も考えられるが、明確な判断はできなかった。

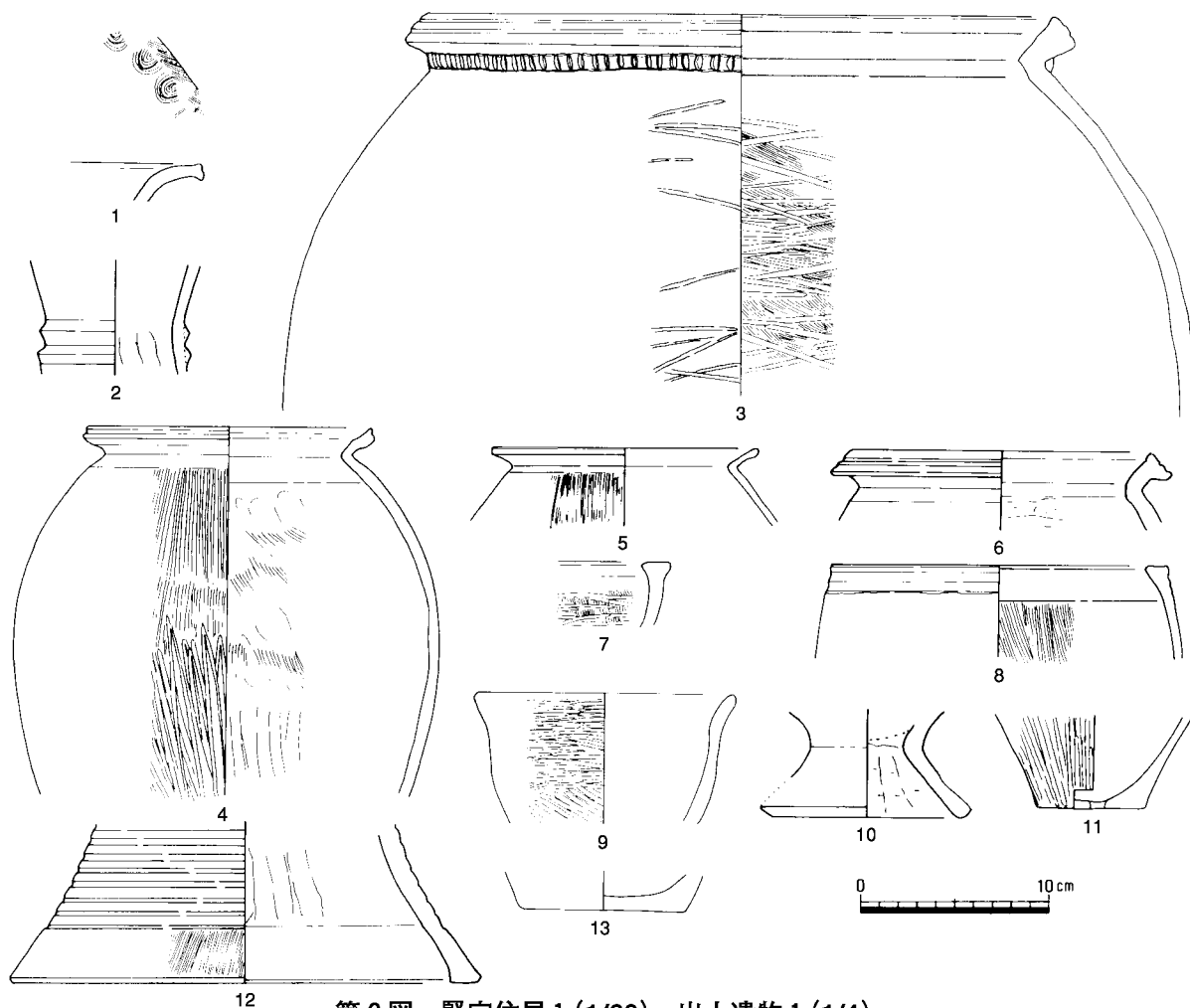
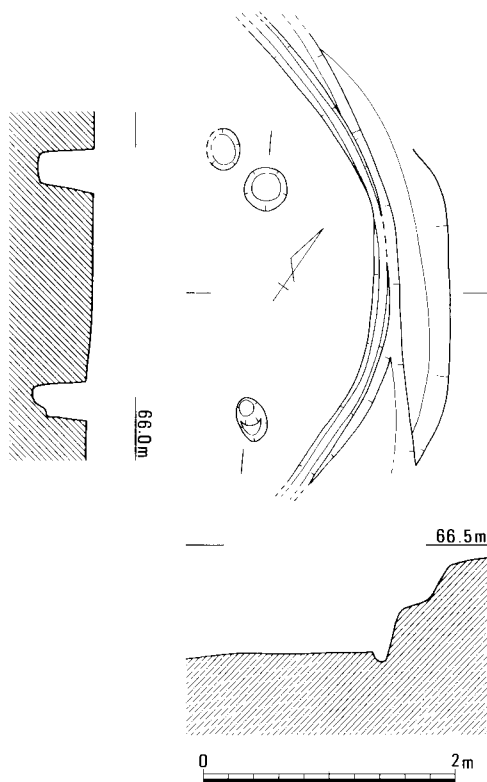


第1図 調査区遺構配置図(1/500)

竪穴住居 1 (第2・3図)

調査区南端の最下段の斜面部がゆるやかに移行する位置で検出された竪穴住居で、2軒が重複して確認することができた。

平面形態はいずれの住居も円形を呈すると考えられる。この住居は東西方向の尾根から南の谷部に向けた斜面部に立地している。遺構の大部分は開墾当時の削平を受け消滅し、約4分の1程度の残存であるため住居の正確な規模は把握することは不可能であるが、直径約5m程度と推測され、検出面から床面までの深さは75cmを測る。柱穴はほぼ円形の掘り方の平面形を示し、直径20～35cm、床面からの深さは45cmを測る。中央穴は認められなかったが、床面の一部に赤く変色した被熱痕跡らしき跡を認めることができた。壁体溝は幅15～20cmを測るものであった。



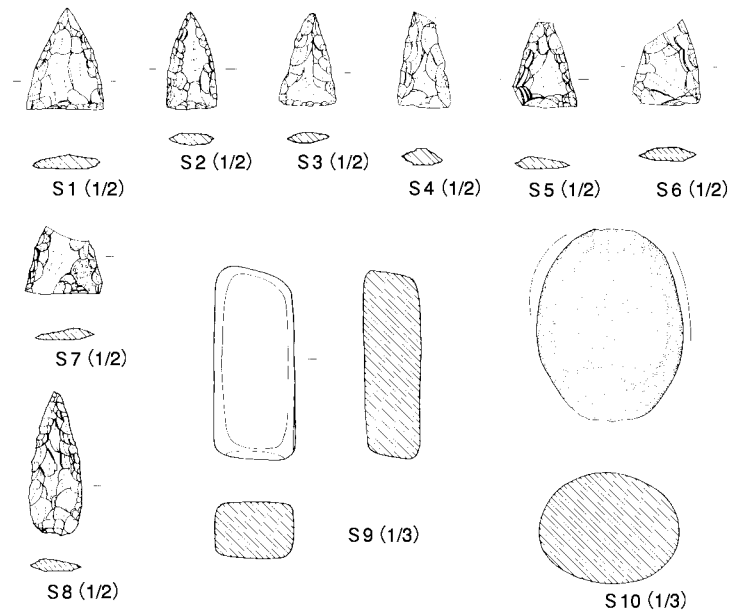
第2図 竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物 1 (1/4)

重複した一方の住居は残存部分から平面形態が隅丸方形を呈するものと推測される。検出された住居の深さは床面と考えられる位置まで35cmを測る。この住居に伴う柱穴・中央穴・壁体溝は確認されていない。

出土遺物については内側の埋土中からのみの出土であり、床面付着の遺物は認められていない。

遺物は、壺・甕・鉢・器台の土器の他に石製品としてサヌカイト製の石鏃・磨石が認められた。

時期は弥生中期の可能性もある。



第3図 竪穴住居1 出土遺物 2 (1/2・1/3)

竪穴住居 2 (第4・5図)

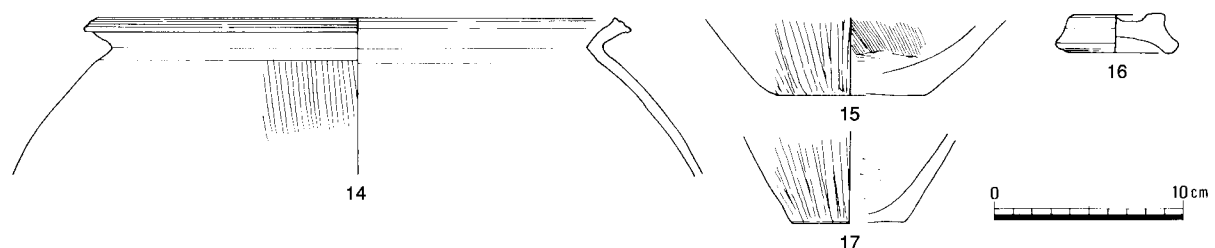
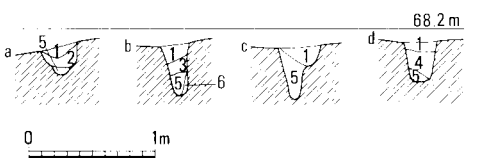
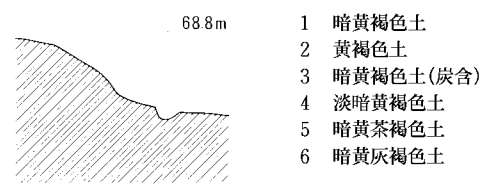
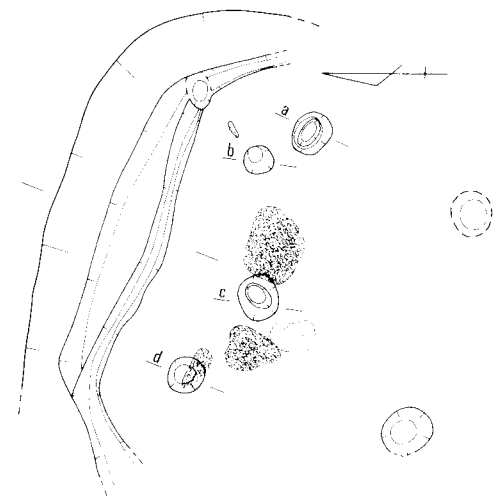
南向きの急斜面で住居1の上方に位置して検出された平面形態が隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居である。

住居の立地する地形は急勾配の傾斜地に位置しているため、遺構の造成された面はすべてが流出して消滅しているため正確な規模を計測することは不可能であるが、一辺約350cm程度と推測される。竪穴の掘り方は2段堀の形状を示しているが、現実には2軒の住居が重複していると考えられる。

住居の床面整地のために施されていたと考える貼り床の大部分が流失している。住居の屋内施設に伴う柱穴は痕跡を含めて6基を検出しているが、中央穴は存在していなかった様子である。

検出された柱穴すべての平面形態は円形で、直径25~40cm、検出面からの深さは25~40cmを測る。

検出された床面には炭化物と少量の焼土の部分の確認されているがこの部分が火処としての位置であるかは不明である。



第4図 竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 1 (1/4)

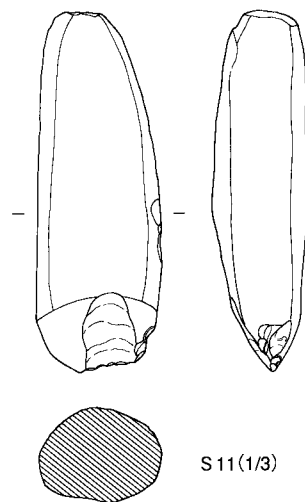
住居に併設されている壁体溝は1条を確認するのみであるが、丘陵の上部側に拡張したものでなく、検出した平面での観察から1回の建て替えが行われたのは、場所はほぼ同じながらも、北東隅と南東隅部の痕跡部分の3本の柱穴と、壁体溝を新しく作り替えていることに窺える。

出土遺物には甕14と15・17の底部、16の台、S11黒色片石製の太型蛤刃石斧などがある。S11の太型蛤刃石斧は使用中に刃こぼれをおこしたものであろう。

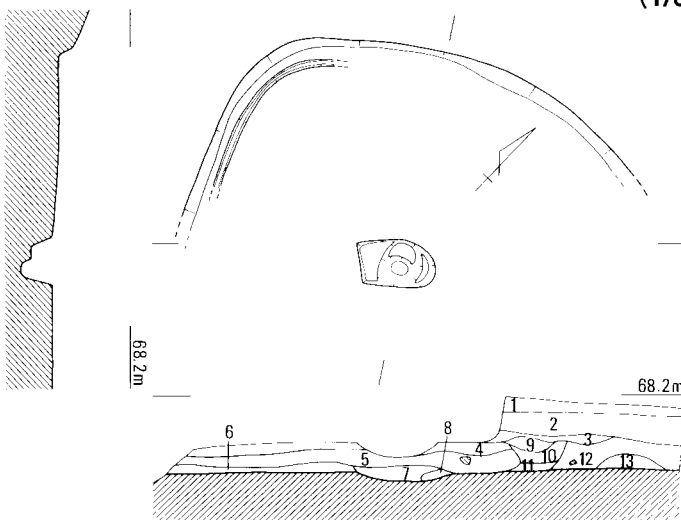
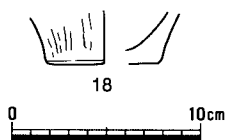
出土遺物から弥生時代中期が妥当であろう。

竪穴住居 3 (第6図)

調査区南東部の急斜面下の傾斜面が移行した部分に所在する。検出された平面形態は若干歪ではあるがほぼ隅丸方形状を呈すると推測される。検出面から床面までの深さは15cmを測るものである。柱穴は存在せず、中央穴は不整形の70×40cmの掘り方の中にほぼ円形の掘り込みを施したもので、床面から約25cmの深さである。また壁体溝も全周して検出されず北西部にのみ残存し、それ以外は不明確であった。出土遺物から弥生時代中期と考えられる。



第5図 竪穴住居 2 出土遺物 2 (1/3)



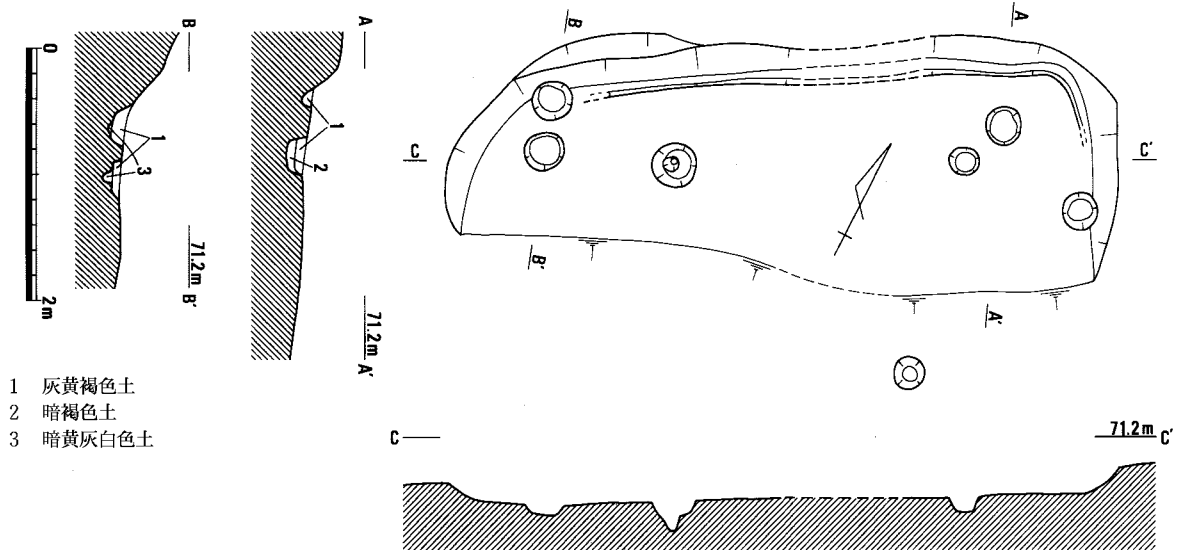
- | | | |
|----------|-----------|--------------|
| 1 表土 | 6 暗黄褐色微砂 | 11 淡暗灰黄褐色土 |
| 2 暗黄褐色土 | 7 暗褐色土 | 12 灰黄褐色土 |
| 3 暗黄褐色細砂 | 8 淡褐色土 | 13 暗黄褐色土(礫含) |
| 4 暗黄褐色粗砂 | 9 灰褐色土 | |
| 5 暗茶褐色土 | 10 暗灰黄褐色土 | |

第6図 竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居 4 (第7図)

調査区の南側の急斜面の中程よりやや下がった位置で、住居3の北西上方に検出している。検出された住居の約半分が流出しているため正確な規模は不明である。その平面形態は、若干隅に丸みを持っているが、方形状を呈すると推測され、規模は南西—北東で540cm、検出面から床面までの深さは壁体側で25cm、最も深い斜面部で床面が消滅する部分で40cmを測るものである。

住居床面、さらに傾斜部において検出された柱穴は7基である。中央穴は確認されず、存在していなかったと考えられる。このような状態から、場所はほぼ同じながらも柱穴を新しく作り替えていることが窺える。柱穴はすべて円形を20~35cm、深さは検出床面から15cm程度と非常に浅い掘り込みのものである。壁体溝については、尾根部分から両側の一部に認められたが、現状から推察して、全面に巡っていたものとは考えがたい。この住居の時期は、不詳である。



- 1 灰黄褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄灰白色土

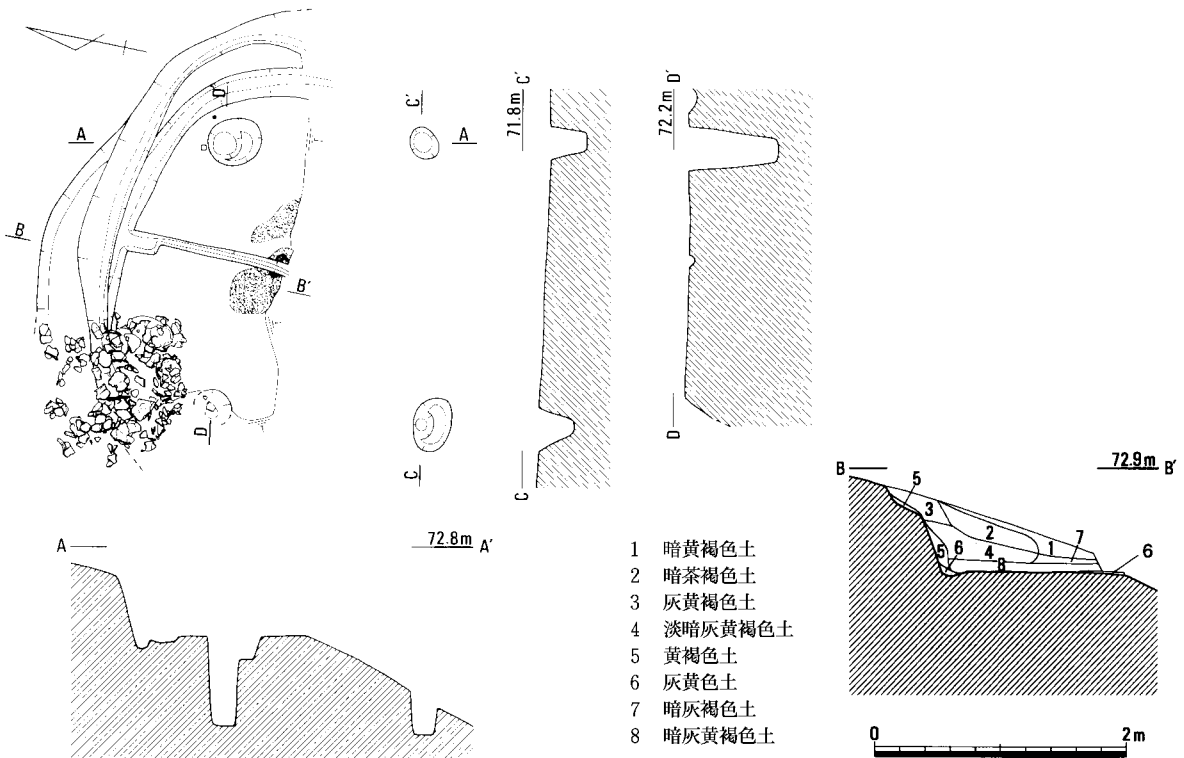
第7図 竪穴住居 4 (1/60)

竪穴住居 5 (第8・9図)

南向きの急斜面のほぼ中程において検出された住居で、遺構の存在する地形が急斜地であるため流失によりその残存状況はよいとはいえないものである。しかし斜面部に構築されていることから、約半分が残存検出されたものである。

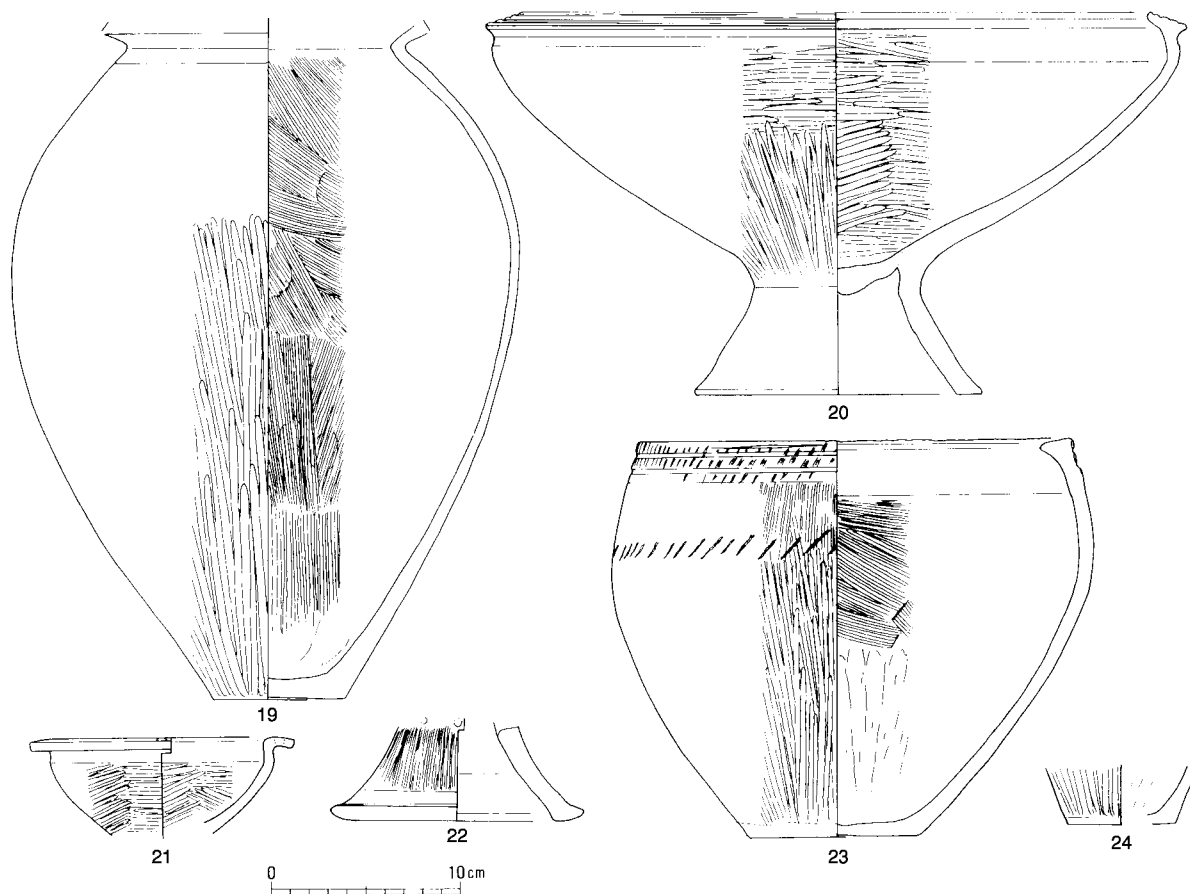
検出された住居は建て替えが行われているのが、いずれの住居の平面形態もほぼ隅丸方形を呈すると推測されるが正確な規模は不明である。

住居の屋内施設は、支柱穴を4基、中央穴(わずかに残存)、壁体溝、さらに壁体溝から中央へ延び



- 1 暗黄褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 灰黄褐色土
- 4 淡暗灰黄褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 灰黄色土
- 7 暗灰褐色土
- 8 暗灰黄褐色土

第8図 竪穴住居 5 (1/60)



第9図 竪穴住居5出土遺物(1/4・1/3・1/2)

る溝を確認している。

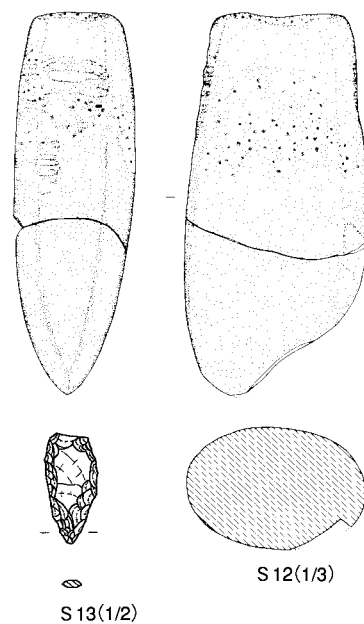
住居は、4基の支柱穴は同じく共有するものであり、床面を検出した時点で壁体溝の切り合い関係の存在が判明し、観察の結果から1回の建て替えが行われたことを明確に示している。

4基の柱穴の平面形態は円形、楕円形であり、大きさも円形のは痕跡も含め20~40cm、楕円形は30×45cmを測る。

住居の掘り方は、ほぼ垂直気味に掘り込みを行い床面となっている。壁側から140cm程度の位置より住居構築時の造成土があったものと考えられるが、流失により消滅している。しかしながら支柱穴となる柱穴は北辺側の床面での検出面からの深さが70cmを測り、南側の柱穴についても、斜面の地山面から35cmの深さを測ることができた。さらに中央部と考えられる位置には、かろうじて中央穴の一部が確認された。しかしながら規模は明確ではない。周辺には炭化物の層を認めることもできた。

住居の壁体溝から中央穴を貫通する形状の溝(幅10cm、深さ5cmを測る)は、傾斜地に立地する竪穴住居特有の気路(通気構)の可能性が考えられる。

住居の埋土中からは、甕19、高杯20・21、鉢23、太型蛤刃石斧S12、石鏃S13の出土がある。これらの遺物からこの住居の時期は弥生中期に比定されよう。



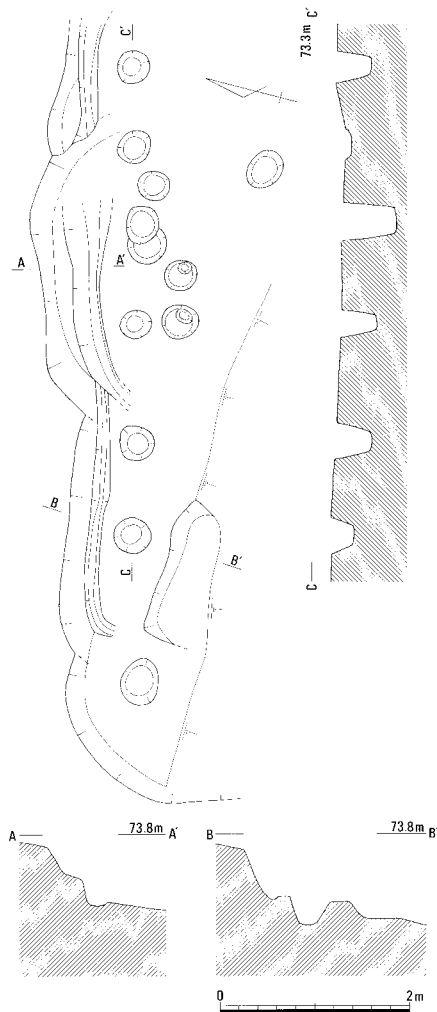
竪穴住居 6 (第10図)

南向き急斜面のほぼ中央で住居5の上位置に近接して検出された遺構である。

検出された遺構は東西方向に延びる長大なものであり、掘り下げ中で段状遺構の可能性をおびたように受けとめられた。しかしながら遺構内埋土の掘り下げが進行するにつれ、全様が明らかになり、最終的に数軒の住居が重複していたものと判明する。

いずれの竪穴の平面形態も隅丸長方形の形状を呈していたものと推測される。遺構は急斜面に立地していることから、南側(すなわち丘陵下位)は大きく流失し全体を測り得ることは不可能なものである。

遺構の前後関係には若干の不明瞭なところはあるが、大きく3回の建て替えが考えられる。この検出された遺構で、現状での最大長は650cm、最短長は160cm、検出面から床面までの深さは30cmから最も深いもので75cmを測る。壁体溝はすべてに有しているものではない。床面と思われる面において検出した柱穴は12基である。図示した柱穴断面は壁体溝を伴った建物と考えられる。切り合いはあるが時期差はあまりないものと考えられる。



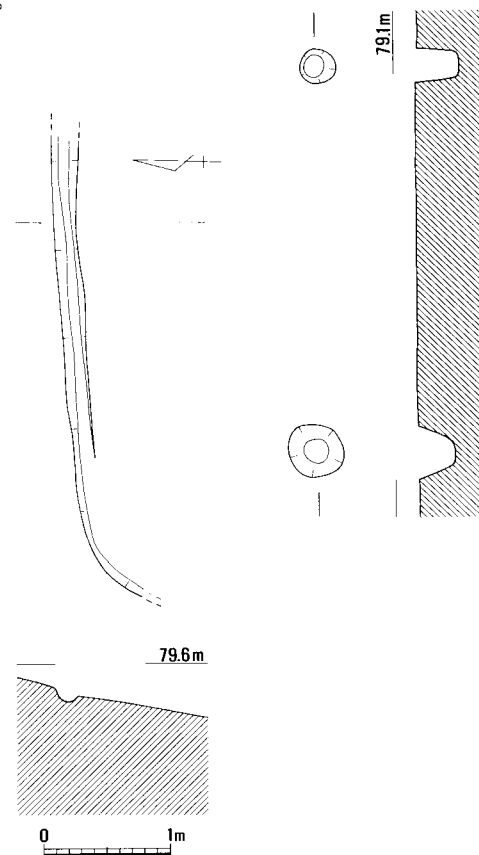
第10図 竪穴住居 6 (1/80)

竪穴住居 7 (第11図)

調査区中程の緩斜面から急斜面への移行する位置に存在する住居である。

検出された南向きの斜面部には、勾配は緩やかであるが、近現代の開墾で果樹園となり、大きく地形が変化している。その結果、遺構本体の残存状況も最悪となり、表土直下において壁体溝ならびに2基の柱穴を確認できたのみで床面すら検出されなかった。

住居の平面形態は、隅丸長方形を呈する住居であるが、正確な規模は不明である。現存する2基の柱穴から一辺が約540cm(東西辺)と推測される。ちなみに2基の柱穴の芯々距離は305cm、壁側から柱穴中心までが190cm、柱穴は円形で25~45cm、深さは30cm~40cmを測る。以上の壁体溝・柱穴以外の遺構は認められなかった。時期は、不詳である。



第11図 竪穴住居 7 (1/60)

竪穴住居 8 (第12図)

調査区の中央部の緩やかな尾根の南の谷部に傾斜する位置に所在する住居であり、検出面での平面形態は円形を呈すると推測されるが、近現代の開墾により地形が激しく変化しているため明確な規模は不詳である。直径約560cm程度であったと推測される。

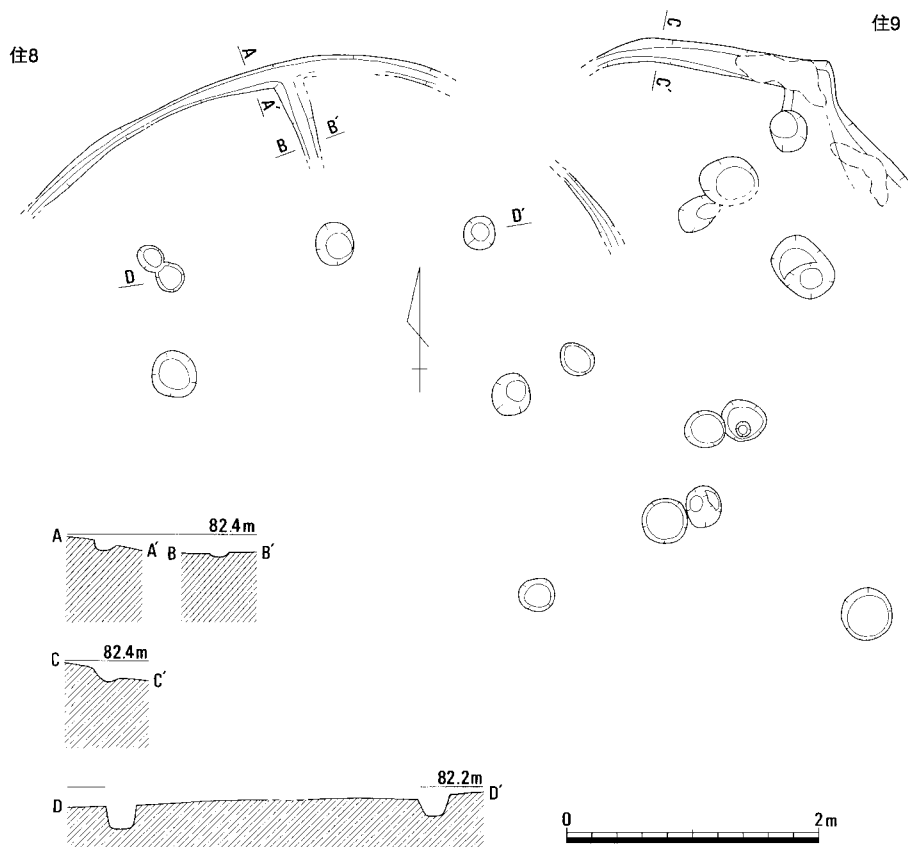
住居の壁体溝の内側には8基の柱穴を確認することができた。柱穴はほぼ円形で直径20~40cm、深さは20cm程度と極めて浅いものであった。さらに住居5と同様に壁体溝から中央方向に向けて溝(最大幅20cm)が延びている。機能的には同様の付属施設と考えられる遺構であろう。

壁体溝に囲まれた内側で検出された柱穴数、配列から同じ場所を利用しての建て替えられた可能性も窺えられる。出土遺物は少量の小片がある。時期は不詳である。

竪穴住居 9 (第12図)

住居8の東側で切り合い関係で検出された住居である。検出された住居は切り合い関係は、開墾時の耕作土直下の地山面にて確認されたため、既存している壁体溝の検出状況から判断し、住居8が住居9を切って構築されている。遺構の大部分は果樹園の開墾により消滅しているが、わずかに残存する壁体溝、柱穴からの平面形態は直径約400cm程度の円形の住居であったものと推測される。柱穴は変則的に検出されており、現状でまとめることはできなかった。

住居の壁体溝の北東部分には非常に残存状態の悪い土器(甕と思われる)が散在していたが、図化することがむずかしいものであった。住居の時期は弥生の範疇と考えられるが、住居8が構築される前に構築、生活していたものであろう。



第12図 竪穴住居 8・9 (1/60)

竪穴住居10 (第13図・図版2-3)

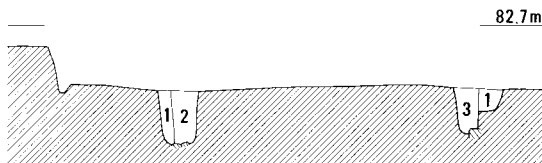
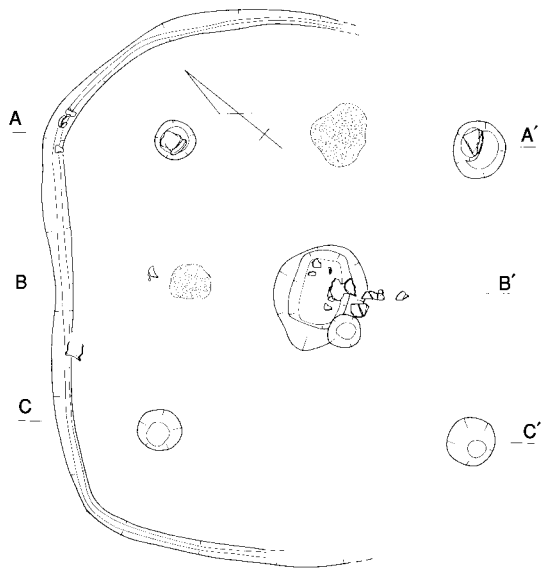
調査区のほぼ中央部の丘陵尾根部分で傾斜が最も緩やかに移行した位置で検出された住居であり、検出された平面形態は隅丸方形を呈する住居である。住居の北東辺と南西辺はわずかに胴張りが認められる。

検出住居の一带は開墾により地形の変貌が著しいため正確な規模は不明であるが、北東-南西の最大に張り出した部分で450cmを測る。

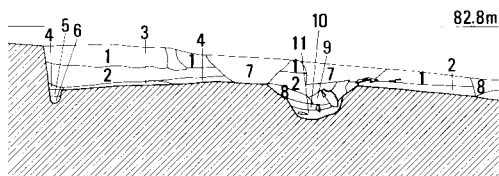
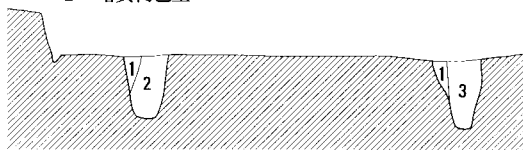
住居の掘り方は、ほぼ垂直に近い壁体を示した掘り込みをなし、若干の凹凸をした床面に掘り上げている。その深さは約30cmを測るが、現実に生活する上での床面にするため貼り床が施されていることが確認されている。

住居の屋内施設として4基の柱穴と中央穴、さらに壁体溝が存在しており、床面には2ヶ所に25×30cm、40×50cmの範囲で被熱痕跡を認め、中央穴とおぼしき穴、さらに北西辺の壁体溝の一部において、溝の掘り方が重複した部分を確認している。

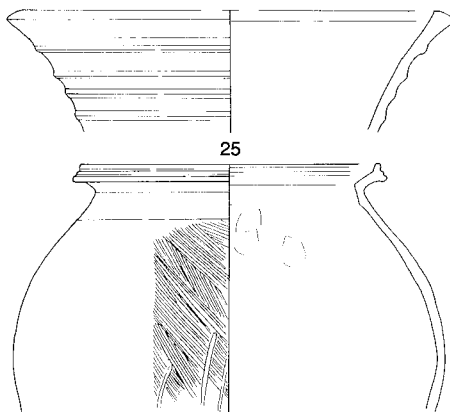
以上の調査結果から、場所、柱穴は同じながらも1回の建て替えが行われたことが窺える。



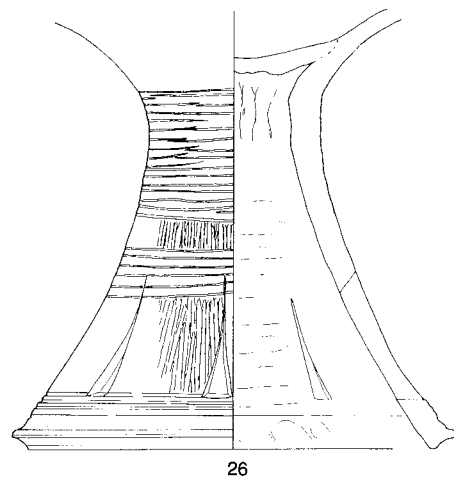
- 1 灰黄褐色土 3 暗黄褐色土(炭含)
- 2 暗黄褐色土



- 0 2m
- 1 灰黄褐色土 7 暗黄灰白色土
- 2 暗黄褐色土 8 褐灰色土(炭含)
- 3 暗黄灰褐色土 9 褐灰色土
- 4 暗灰褐色土 10 暗褐灰色土
- 5 灰黄白色土 11 暗褐灰色粘質土
- 6 暗褐色土



27



26



28

29



第13図 竪穴住居10(1/60)・出土遺物(1/4)

検出された4基の柱穴の北東辺の2基の柱穴底部に礎石を用いている。4基の柱穴はほぼ円形で径は30～45cm、床面からの深さは35～55cmと若干ばらつきが窺えた。中央穴については、75cmを測る隅丸方形の掘り方の下位に45×60cmの隅丸長方形の掘り込みが続いている。

出土遺物には25～29などがある。26の高杯は中央穴内に落ち込む状態で検出されている。また28の灯明皿・29の小皿は住居の埋没時に混入したものである。よって25～27の遺物から住居の時期は弥生中期の範疇と考えられる。

竪穴住居11 (第14図)

調査区の中央付近で尾根が分岐する部分で北側の谷部へと開口する緩やかな傾斜となる斜面から移行する位置に存在している住居で住居10の北東である。

竪穴住居の一带の地形は近現代の開墾により著しく変貌し、遺構の正確な規模を計測することは困難なものである。

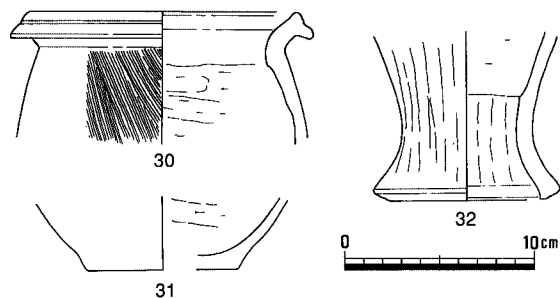
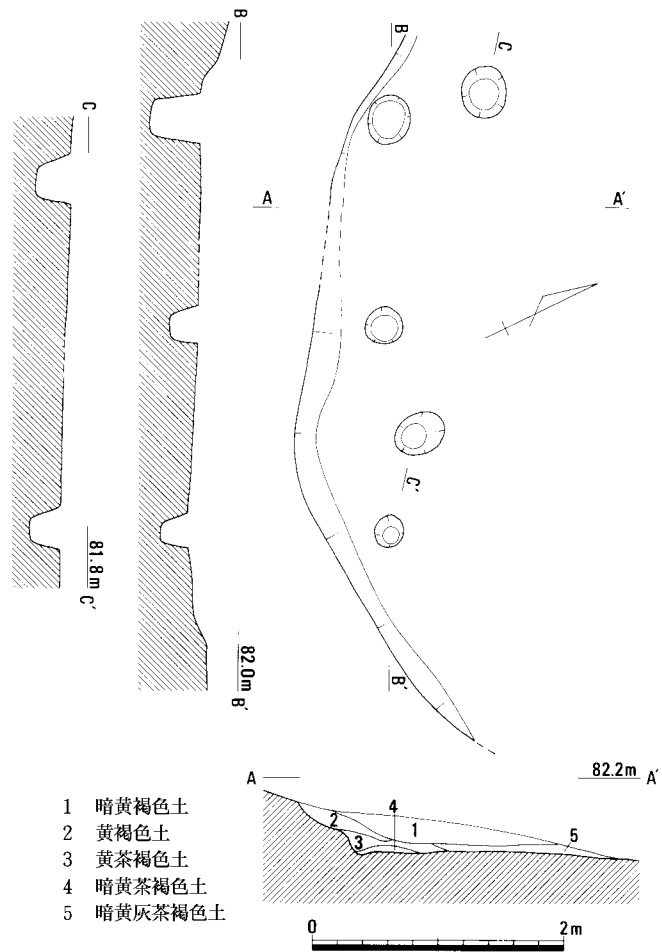
検出した住居の平面形態の掘り方は歪な形状を呈しているが、おおむね円形を呈していたものと推測される。北側の谷に面した部分は開墾が著しく行われ、その落差は200cm以上にも達する。

さらに住居が検出された面に関して、果樹園により掘削・造成を行い地形を変貌させ、そのため遺構は消滅し、規模の計測は不可能であった。

竪穴の掘り方は緩やかに丸みをもって掘り下げられ、平坦な床面へと続いている。検出された面から床面までの深さは35cmを測る。床面には若干の凹凸を確認したが、実際の生活面としての床面は水平に貼り床がなされていたと推測できる。

また、壁体溝といえる明瞭な痕跡は認めがたいが床面から壁体への立ち上がる部分において、部分的に溝とおぼしき落ち込みを呈する部分を断面観察で確認することができた。

しかし全面ではないため壁体溝を伴っていたとは断言できない。さらに床面検出後の面にて柱穴を5基確認、平面形態は円形で25～40cmの径、深さは25～40cmを測る。出土遺物には30・31・32などがある。これらから住居の時期は弥生後期に比定できよう。



第14図 竪穴住居11(1/60)・出土遺物(1/4)

2 段状遺構

調査区内の上段から下段、すなわち丘陵上部より最下部において検出された丘陵上部を掘り窪めて削り出しをなし、いかにも竪穴住居状の遺構と考えられそうな状態を呈したものである。

遺構は丘陵等高線に並行するものであり、それぞれの遺構においても壁側の下部には壁体溝を有するもの、あるいは柱穴を伴ったものが存在している。平面形態についてもすべての遺構がほぼ隅丸長方形形状を示す。建物跡と考えるのが妥当のようである。

段状遺構1 (第15図)

調査区の南東端の最下段の一段ゆるやかな面に移行する位置に存在する、大形の段状遺構である。

遺構の掘り方の南東側部分と北東部分は大きく削平を受けて消滅している。掘り方の平面形態は北東-南西方向に長い歪な隅丸長方形の形状を呈していたと推測され、現状での数値は、長さ10.7m、幅1.1~1.5mを測ることができる状況である。

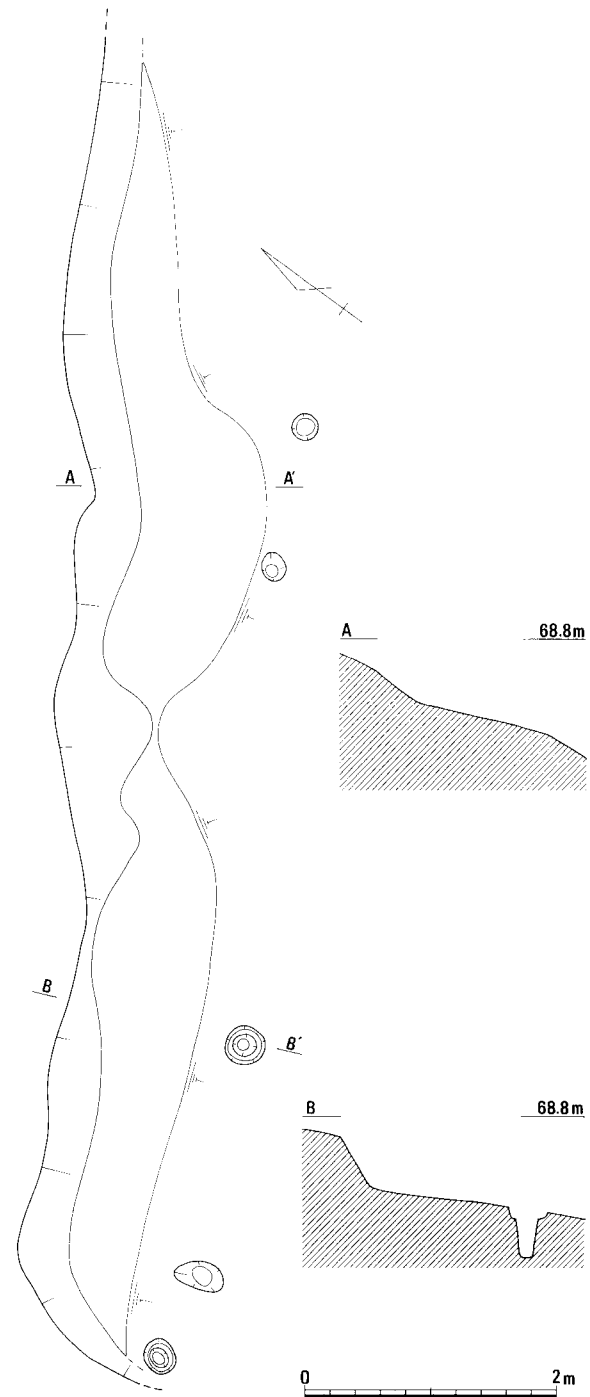
段状遺構の断面形態は、床面から外傾して立ちあがるが、その形状は中程より北東側と反対の南西側で異なっている。北東側ではゆるやかに外傾して立ちあがるのに対して、南西側はかなりの傾斜を呈している。検出された遺構の深さは50cmを測るが、床面は斜面にそって下がっており、当時は貼り床がなされていたものと推測される。

この段状遺構においては壁体溝と考えられる溝は確認できなかったが、この段状に伴うものと思われる柱穴を確認することができた。

確認できた柱穴は全体で5基である。柱構造上から段状に建物が2棟存在していたものであろう。そのうち南西側の壁面側に沿うものとして、柱間が115cm~250cm、柱穴と壁面との距離は25cm~140cmである。一方東北側の柱穴は不規則である。

柱穴の掘り方はいずれも円形を呈するもので、直径20cm~30cm、深さは35cmを測ることができた。

時期は弥生時代と考えられよう。



第15図 段状遺構1 (1/60)

段状遺構2（第16図）

調査区南端部の急斜面を下って傾斜がゆるやかに移行する南向きの斜面で、段状遺構1の西に位置して存在する。

段状遺構は等高線に沿った形で構築がなされ、掘り方の南側は斜面流失や開墾によって大きく削平を受けている。遺構は数基が重なっていたものであろうが、現状では斜面上部にほぼ東西方向に大形の段状を認める。さらに中央やや西よりに小形ではあるが2段の掘り込みを有した段状を認めた。掘り方の平面形態は大形のものは歪な長隅丸長方形を呈していたと推測され、現状で13.4m、最大幅310cmを測る。

断面形態は床面から外傾して立ちあがり、場所においては3段の掘り下げを認める。深さは80cmを測り、床面中央部に若干の溝状の窪みを残すところもみうけられる。床面には貼り床がなされていたものと思われる。さらに一部であるが壁体溝を確認することができた。

最終床面において柱穴を検出するに至った。この柱構造をみると数基の建物が建っていたことがうかがわれ、最小で3列の柱穴列が考えられることから構造物は3棟と思われる。壁面に沿うものとして、柱間が100～155cm、500～590cm、70～150cm、さらに柱穴と壁面との距離も0～140cmを測る。柱列にまとまらない柱穴も確認した。

この大形の段状遺構の西端部には小形の掘り方の平面形態が隅丸長方形を呈していたと推測される2段掘りの段状遺構で断面形態は床面から徐々に外傾して立ちあがる。床面はわずかに南に傾斜し、貼り床があったことがうかがわせている。柱穴・壁体溝等は検出されなかった。

段状遺構3（第17図）

段状遺構2の北西上方の南向きの急斜面部に等高線に沿った形状に位置し存在する大形の段状遺構であり、東側にかけて土壌と切り合いを示しながら数基が検出されている。遺構の掘り方の南側、すなわち下方は大きく流失している。掘り方の平面形態は東西双方とも隅丸長方形の形状を呈していたものと推測され、現状での規模は長さが400cm、780cm、幅は210cm、190cmを測る。

断面形態はいずれの段状遺構とも床面から徐々に外傾して立ちあがる。検出面からの深さは15cm、30cmを測る。床面は平坦に掘り上げがなされ、斜面下方部にかけて貼り床がなされていたものと思われるが、現状では貼り床部分は流失して認めることはできなかった。壁体溝が存在した痕跡すら検出、確認できなかった。すなわち構築時期から存在していなかったものと思われる。

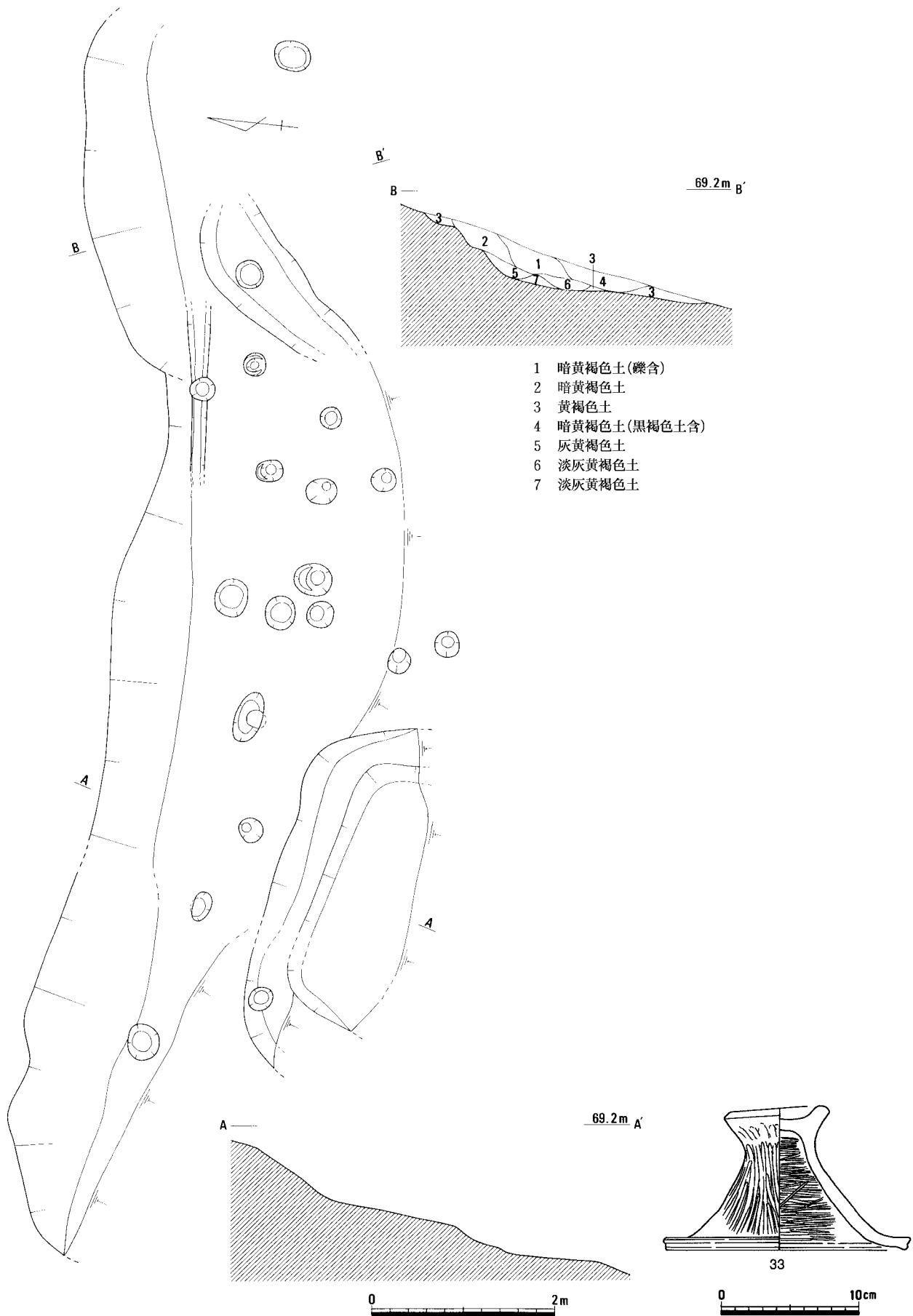
西側の段状遺構の屋内構造として柱構造があり、検出された柱穴は3基を確認することができ、北東側の壁面よりの1基は検出されなかった、検出された柱間は壁面に沿うもので、西側では110cm、柱穴と側壁の距離は80cmである。

柱穴の掘り方はいずれも円形を呈し、直径25～30cmを測る。この段状遺構は柱構造から推測し、建物として取り扱うのが妥当と考えられる。

出土遺物は甕34・石斧S14が認められている。S14は大型の太形蛤刃石斧で、未使用の可能性も考えられる。時期は弥生後期と考えられる。

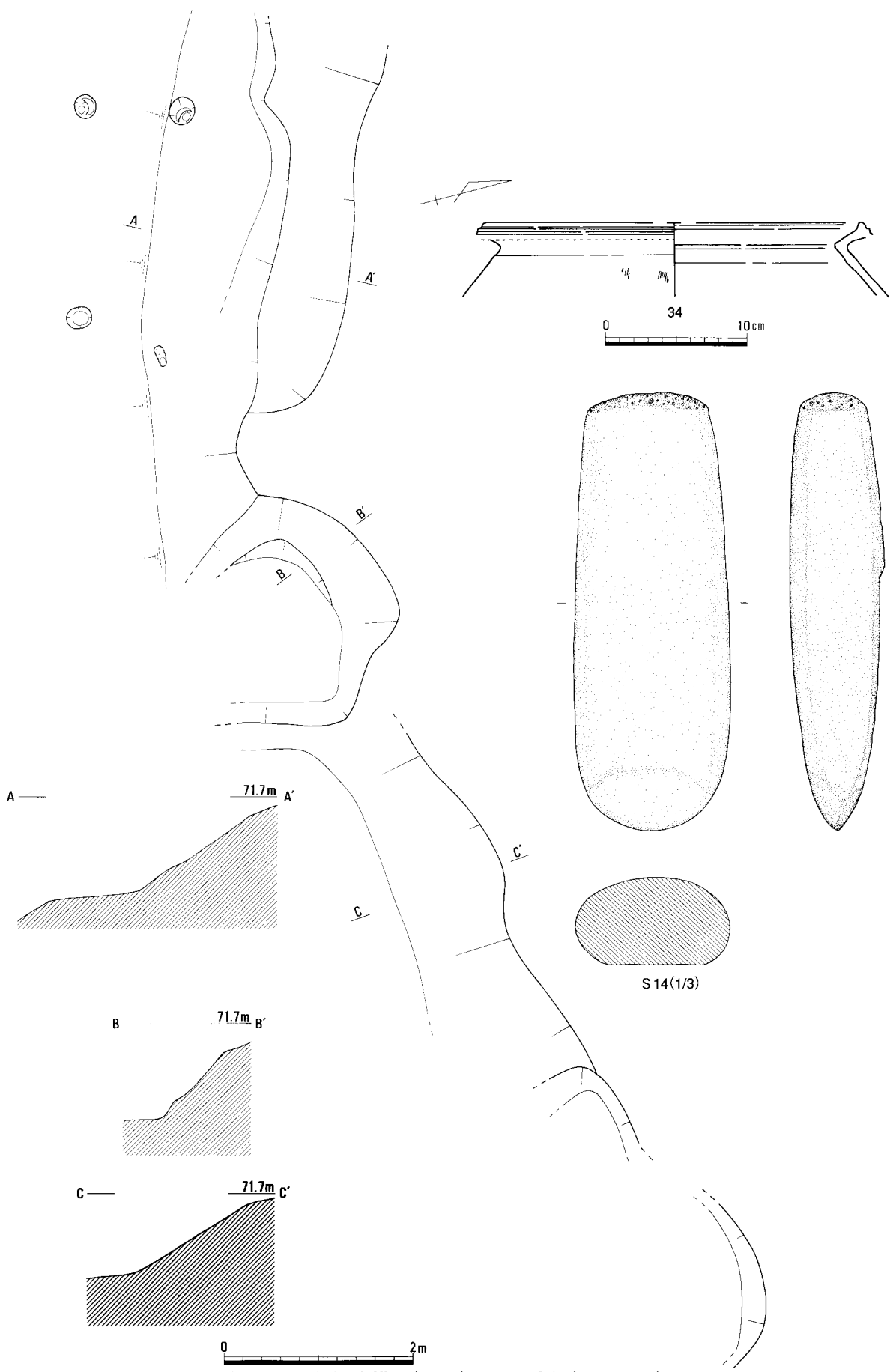
一方東側の段状遺構については、遺構の掘り方等は同様であるが、柱穴の存在は確認されなかったが、2基の段状が切り合いを示して検出することができた。いずれの掘り方の平面形態も歪ではあるが隅丸長方形を呈していたと推測される。

時期は西側の遺構と大差ないと考えられる。



- 1 暗黄褐色土(礫含)
- 2 暗黄褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 暗黄褐色土(黒褐色土含)
- 5 灰黄褐色土
- 6 淡灰黄褐色土
- 7 淡灰黄褐色土

第16図 段状遺構 2 (1/60)・出土遺物(1/4)



第17図 段状遺構 3 (1/60)・出土遺物(1/4・1/3)

段状遺構 4 (第18図)

段状遺構3の東に位置して存在し、ほぼ同じ高さの面で検出されている。掘り方の南東部分は大きく流失している。平面形態は隅丸長方形を呈していたと推測され、現状では310cm、幅140cmを測る。断面形態はゆるやかに掘り込み、平坦な床面に仕上げている。溝・柱穴等は確認できなかった。

段状遺構 5 (第19図)

段状遺構3よりさらに上方で、わずかに平坦部を示す丘陵から南斜面に移行した位置に存在する平面形態が隅丸長方形を呈すると推測される3基が重複して検出された。現状での長辺は225cm～460cm。幅60cm～75cmを測る。いずれも貼り床は流失しているものであろう。

段状遺構は下段の平坦な床面から外傾して立ちあがる。

どの段状遺構からも、壁体溝・柱穴は検出されていない。弥生後期が妥当であろう。

段状遺構 6 (第20図)

調査区のほぼ中央のわずかに平坦部と感じられる丘陵部から徐々に上方に移行する部分に位置し、非常に小形の段状遺構である。掘り方の南東部は流失し消滅、全容は不明。平面形態は隅丸長方形と推測される。床面から外傾して立ちあがる断面形態、弥生後期が妥当であろう。

段状遺構 7 (第21図)

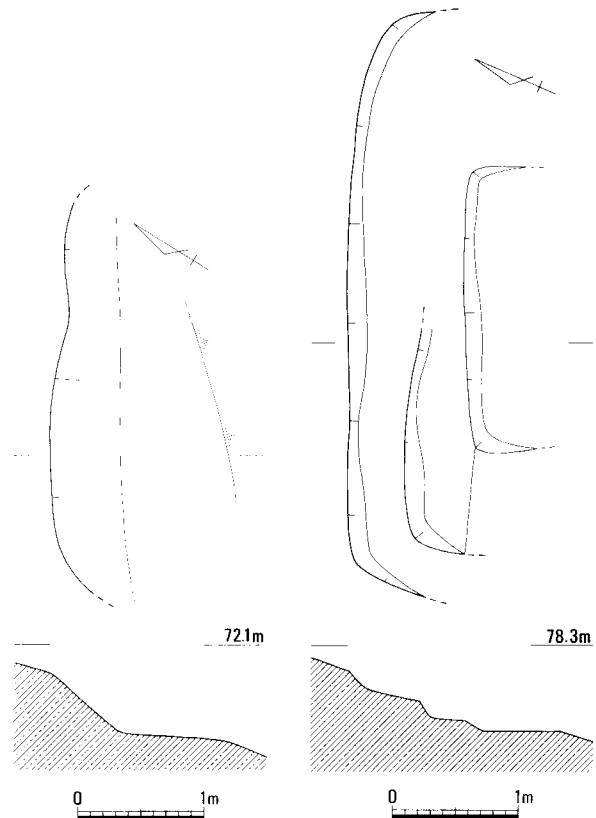
段状遺構6よりさらに北西上方において検出された段状遺構の一部である。

平面形態は隅丸を呈する。また断面形態は床面から外傾して立ちあがる。弥生時代後期と考えられよう。

段状遺構 8 (第22図)

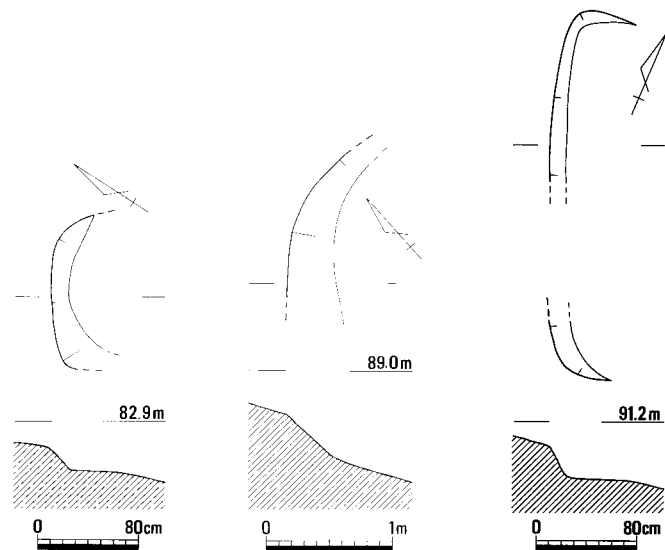
調査区の北西端の東向きの急斜面にへばりつく状況で検出された段状遺構である。掘り方は東側部分は大きく流失し、平面形態は長方形を呈していたと推測され、現状で290cm、幅70cmを測る。

断面形態は平坦な床面から外傾して立ちあがる。深さは25cmを測る。



第18図 段状遺構 4 (1/60)

第19図 段状遺構 5 (1/60)



第20図 段状遺構 6 (1/60)

第21図 段状遺構 7 (1/60)

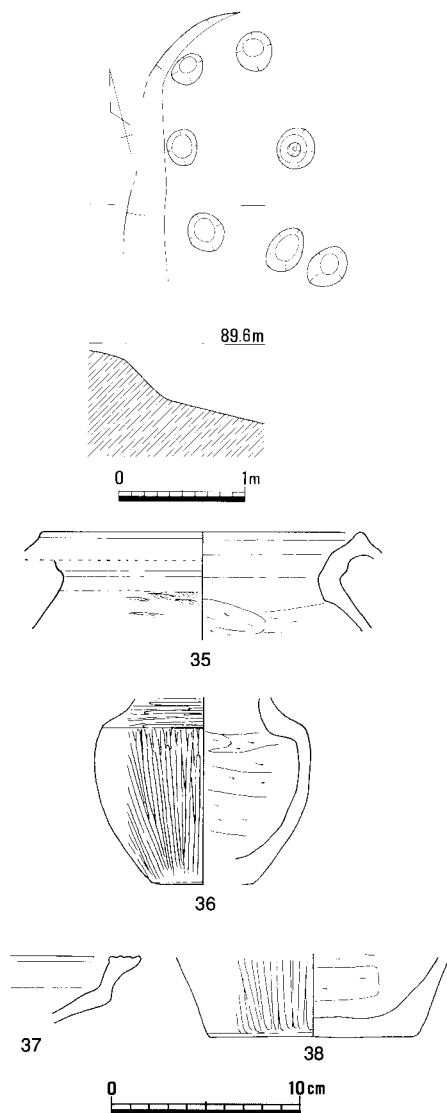
第22図 段状遺構 8 (1/60)

段状遺構9 (第23図)

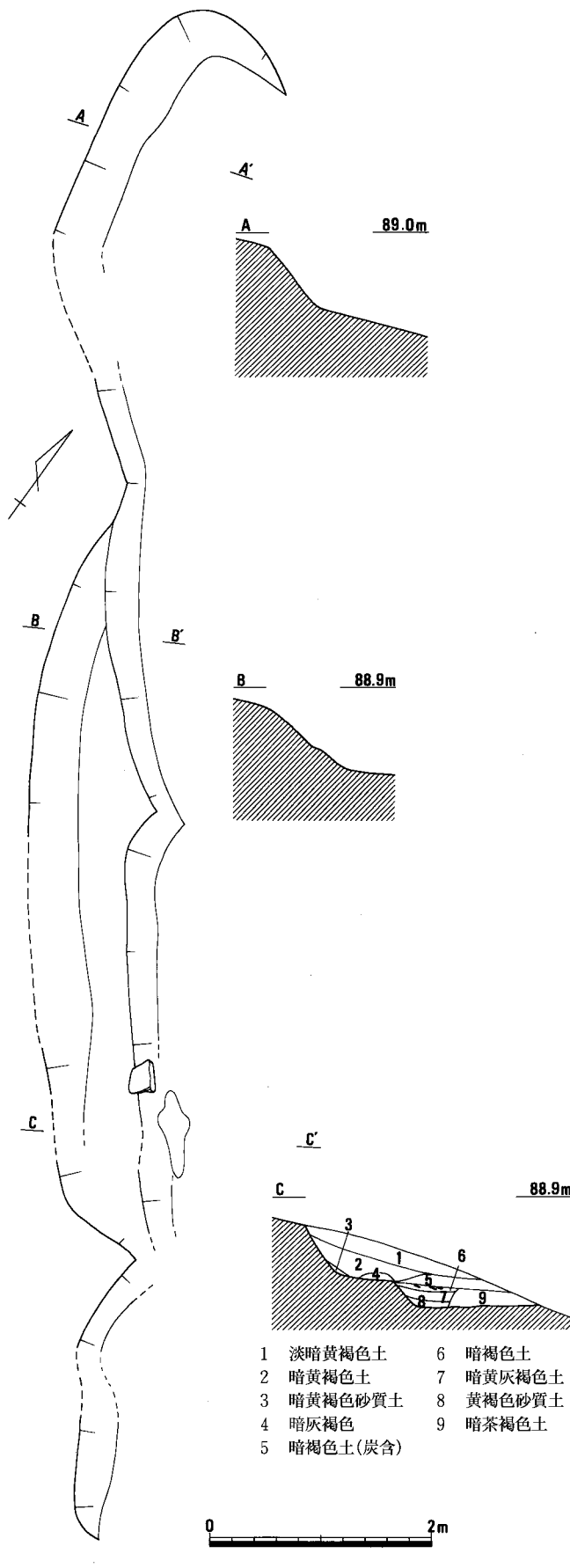
段状遺構7の北西に近接して検出された平面形態が隅丸長方形と推測される段状遺構である。

掘り方の東側は山側で削平を受けて消滅し、東側は開墾で削平を受けたものではなく自然流失の可能性が高いと考えられる残存状況である。

断面形態は床面から外傾して立ちあがり、深さ65cmを測る。現状での傾斜した床面から貼り床が存在していたものと考えられることができる。溝は不明確、柱穴は7基確認しているが規則性にかけている。これらの柱穴



第23図 段状遺構9 (1/60)・出土遺物(1/4)



第24図 段状遺構10(1/60)

はすべてがこの段状遺構に伴うものとは判断できない。壁体溝すら確認されることはなかった。

出土遺物から弥生後期と考えられる。

段状遺構10 (第24図)

当調査区の北端部で東向き急斜面で、検出された段状遺構8・9の下方に位置して存在する。大形の南東側部分は大きく流失し消滅している。掘り方の平面形態は、いずれも隅丸長方形の形状を呈していたと推測され、現状での長さは南東-北西で全長13.8mを測る。

断面形態は床面から外傾して立ち上がり、検出面からの深さも100cmを超える場所も確認できた。中程の重複した段状は、平坦な床面に掘り上げ、その後後方へと拡張し大形化した様子がC-C'の土層断面からうかがいしれる。一部に焼土面も認められた。

内部施設としての壁体溝、さらには柱穴については全く確認できなかった。

この段状遺構の埋土中からは、わずかではあるが遺物の確認ができ、これから弥生後期に比定されよう。

段状遺構11 (第25図)

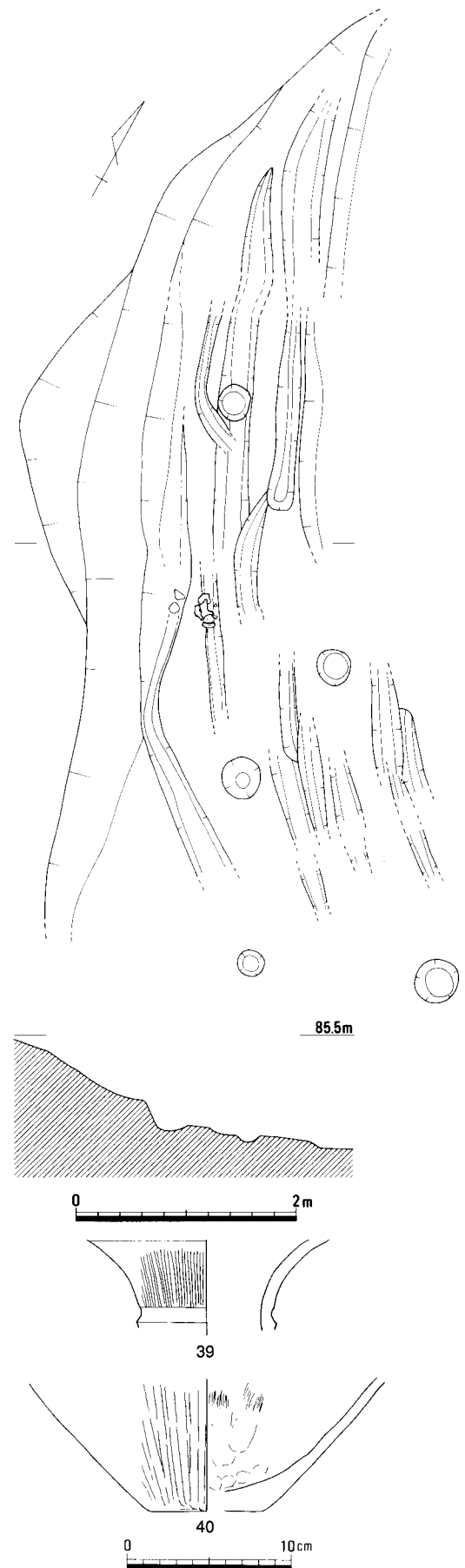
北東に開口した谷部に面し、段状遺構10の南東部で、丘陵の馬の背から北側で、等高線に沿って構築されている非常に大形の段状遺構である。しかもかなりの遺構が重複していたことがうかがえる。

掘り方の北東側、すなわち谷部に向いた部分は開墾で削平を受ける。掘り方の平面形態はおおむね隅丸長方形の形状を呈していたものと推測される。現状での長さは8.8m、幅2.8~3.2mを測る。

断面形態は壁体溝からほぼ真っ直ぐに立ち上がり、徐々に外傾して立ちあがる。深さは100cm以上の場所も存在していた。さらに床面には張り床が施されていたものである。数条の壁体溝と柱穴5基を確認したが、どの溝に伴う柱穴であるかは不明確である。

柱穴の掘り方はいずれもが円形を呈し、直径25~40cmとばらつきがある。

中程の側壁に近い床面より図示されている遺物が出土している。時期は弥生中期と考えられる。

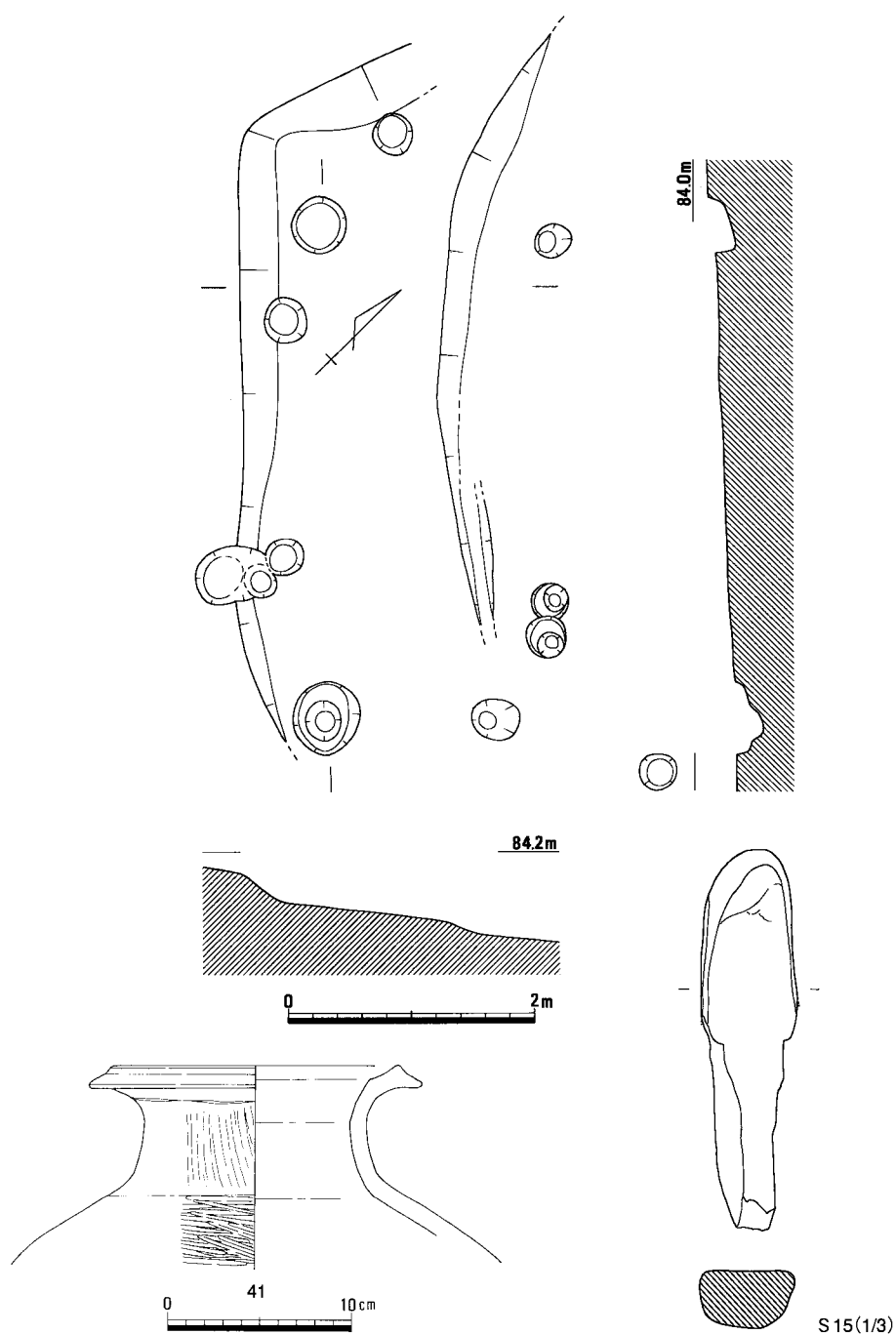


第25図 段状遺構11(1/60)・出土遺物(1/4)

段状遺構12 (第26図)

段状遺構11の東側に位置し、丘陵面がわずかではあるがゆるやかになった場所に存在する段状遺構である。掘り方の北東側は開墾・自然流失などにより消滅はしているが、比較的残存率のよい遺構である。掘り方の平面形態は方形状・楕円形の形状を呈していたと推測されるが規模は不確定。

断面形態はゆるやかな傾きを持って掘り込まれほぼ平坦な床面に仕上げている。床面は谷部に向けて傾斜していることから、張り床が施されていたものであろう。柱穴は12基を検出、断面図に示された柱穴が建物の一辺であり、柱間は400cmを測る。柱穴は円形の掘り方で直径30~55cm、深さは20cm前後である。S15は頁岩製の砥石か、壺41が出土。弥生時代後期と考えられる。



第26図 段状遺構12(1/60) ・ 出土遺物(1/4・ 1/3)

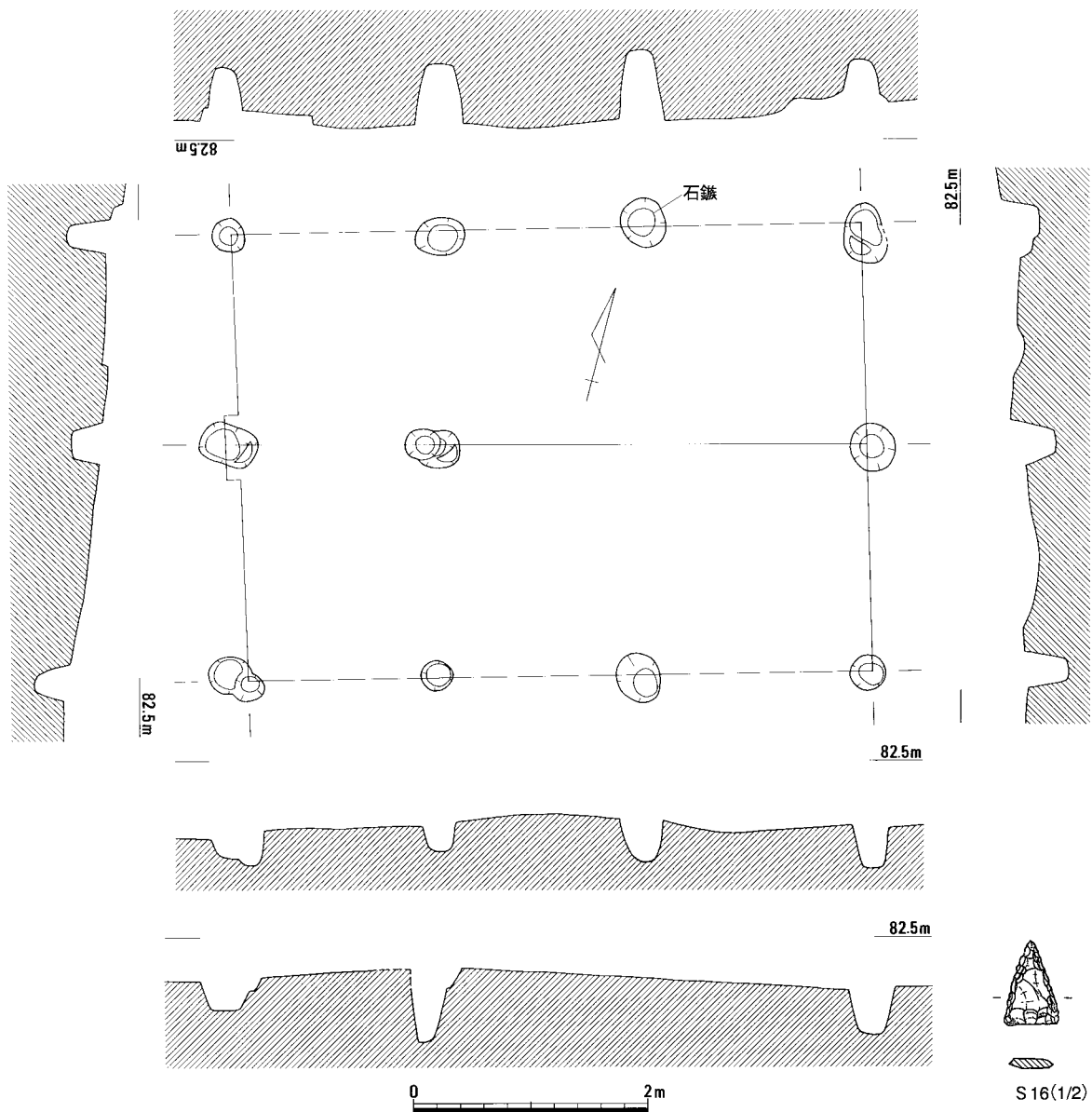
3 建物

石蓮寺山塊から南東に延びた丘陵で若干開墾により削平を受けているが平坦部分が存在し、その舌状に延びた丘陵上で一平坦部に南斜面部の傾斜しかけている部分で検出された遺構である。

他に同様の遺構は検出されていない。

建物（第27図）

舌状に延びた丘陵で南に傾斜する変換部に位置する。桁行3間×梁間2間の総柱で、面積20.4㎡を測る建物である。建物の主軸は、立地条件によるものであろうか、南南西―北北東にある。丘陵上側に雨落溝等の施設は検出されていないが、本来は存在したものと考えられる。柱穴は平面ほぼ円形で、現状では直径25～45cm、深さは25～65cmである。北西辺の柱穴内からS16の石鏃、他には弥生の土器片も数片確認されている。



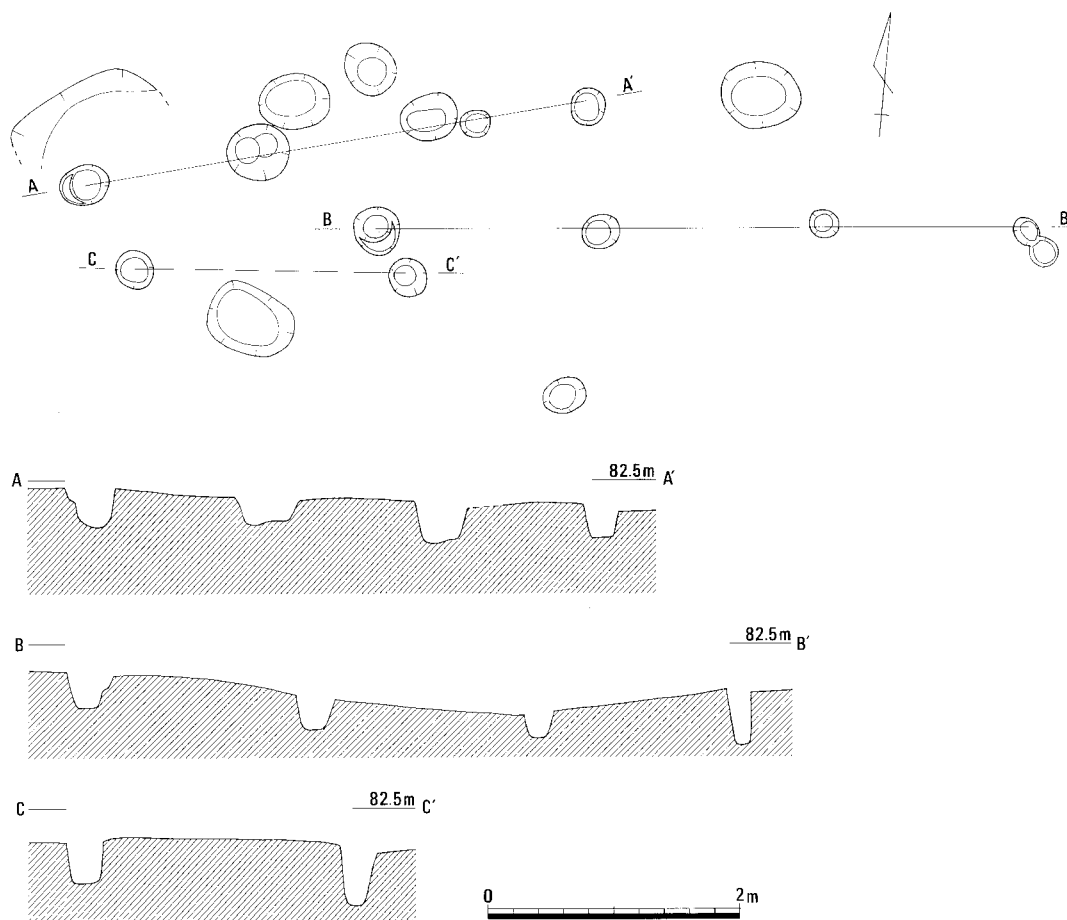
第27図 建物(1/60)・出土遺物(1/2)

4 柱列

建物の西側のわずかに窪みを有する地形に位置する。全体的に削平・流失等により地形の変化が激しいため本来の全様は不明。現状では、1間と3間の3列を検出している。柱列は西側に延びる可能性もある。

柱穴列 (第28図)

検出した柱列を上位よりA・B・Cとする。Aは4基の柱穴からなり直径20～50cm、深さ25～35cm、Bは20～40cm、深さ20～45cm、の4基の柱穴からなる。Cは2基の柱穴のみでほぼ30cmの円形、深さ30～50cmとしっかりしている。いずれの柱穴列も建物の可能性もある遺構と考えられる。



第28図 柱穴列(1/60)

5 陥し穴

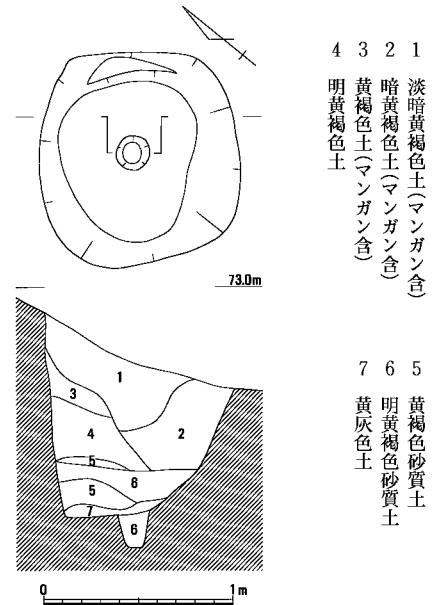
山塊から南西に派生した舌状の丘陵尾根部でわずかに平坦面的な緩斜面の北東に面した谷部の頭付近に3基、さらに尾根は南東に傾斜し、その中程あたりに1基が位置している。

検出した遺構の平面形態は隅丸方形を呈するもの3基・不整長方形1基があり、その掘り方も個々に異なった形状であるが、いずれの底面中央部には直径20cm前後のピットを認めることができた。

土壌の埋没土層は、この調査区内で確認できた4基に共通する点は、人為的に埋めもどされたものでなく、自然埋没の状況を呈している。時期は縄文時代が妥当であろう。

陥し穴1 (第29図・図版2-1)

丘陵変換部から南に傾斜する斜面のほぼ中央部で検出した土壌で、平面形態が隅丸方形を呈し、南東側が外湾気味に立ち上がる。底面は南東側に上がり、中央には直径18cm、深さ18cmのピットが確認されている。



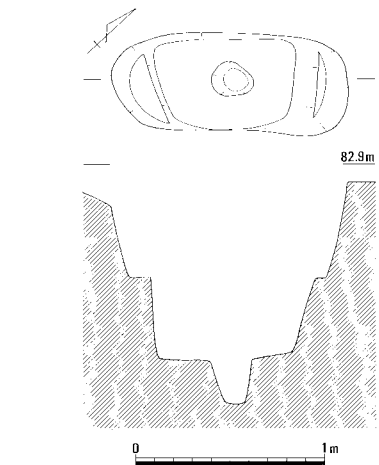
- 1 淡暗黄褐色土(マンガン含)
- 2 暗黄褐色土(マンガン含)
- 3 黄褐色土(マンガン含)
- 4 明黄褐色土

- 5 黄褐色砂質土
- 6 明黄褐色砂質土
- 7 黄灰色土

第29図 陥し穴1 (1/40)

陥し穴2 (第30図)

調査区のほぼ中央変換点上位に位置する平面形態不整長楕円形で125cm×52cmを測る。掘り方は長辺部のみが2段となり若干北東側が外湾気味に立ち上がる。底面中央部には径約20cm、深さ25cmのピットを有している。



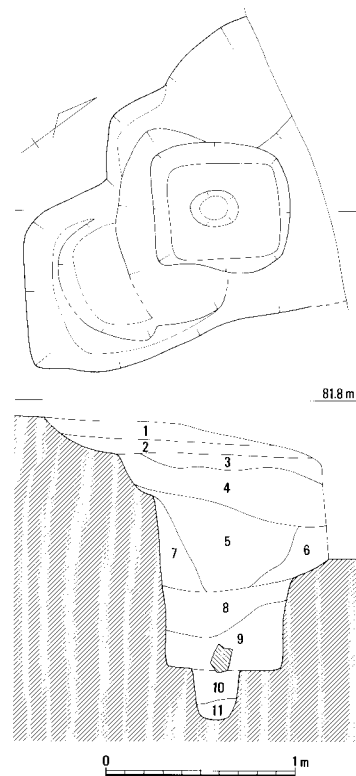
第30図 陥し穴2 (1/40)

陥し穴3 (第31図)

丘陵北東谷部の肩部に位置する。検出時の平面形態は不整長方形の形態を示し、掘り下げの結果においてはほぼ方形の形状を呈する。壁面はほぼ真っ直ぐ立ち上がり、底面は水平、中央に径20×25cm、深さ26cmのピットを有する。

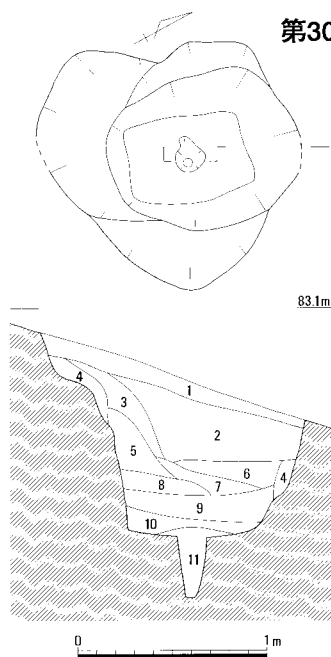
陥し穴4 (第32図)

陥し穴3の西上位に位置する。検出時の掘り方は、歪な円形を呈するが、最後は不整形形状の平面で断面形態は底面から外湾気味に立ち上がる。底面はほぼ水平で中央部に径15cm、深さ32cmのピットを有している。



- 1 淡灰褐色土
- 2 淡黄褐色土
- 3 淡褐灰色土
- 4 褐色粗砂
- 5 灰褐色土
- 6 淡赤褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 褐色土
- 9 淡黄褐色土
- 10 淡黄灰色砂質土
- 11 淡灰黄色砂質土

第31図 陥し穴3 (1/40)



- 1 暗黄褐色土
- 2 暗黄褐色土(炭含)
- 3 淡暗黄褐色土
- 4 淡黄褐色土
- 5 淡暗褐色土
- 6 黄褐色土(炭含)
- 7 暗黄灰色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗黄茶褐色土
- 10 黄褐色土
- 11 黄褐色粗砂

第32図 陥し穴4 (1/40)

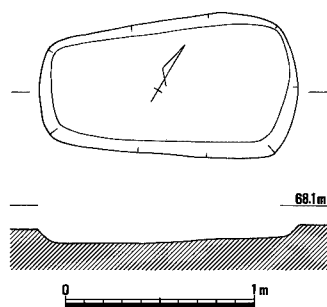
6 土壇

土壇の大部分は、南東に延びる急斜面に集中して検出されている。また、周辺には住居および段状遺構の存在も確認されている。確認された土壇は13基で形態も様々である。

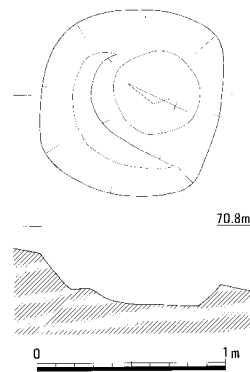
土壇 1 (第33図)

丘陵最下段の人工的に作られたテラス上に位置する。土壇は長軸を北東-南西に向けた隅丸長方形の平面形態を示し、北東側が広い形をする。土壇の掘り方は逆台形状をなし、底面は北東側にゆるやかに高まりをなしている。

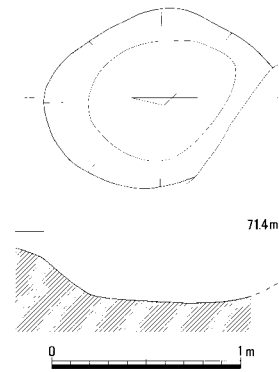
土壇墓の可能性を窺うことができる。



第33図 土壇 1 (1/40)



第34図 土壇 2 (1/40)



第35図 土壇 3 (1/40)

土壇 2 (第34図)

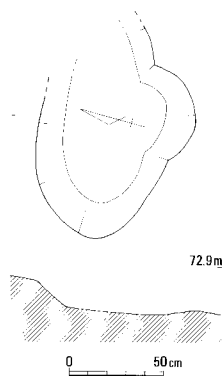
斜面下段に位置し、平面形態は円形に近い隅丸方形を呈している。土壇は北西側に三日月形の段を伴い、底面は円形に掘り上げられ、北西側にゆるやかに高まりをなしている。

土壇 3 (第35図)

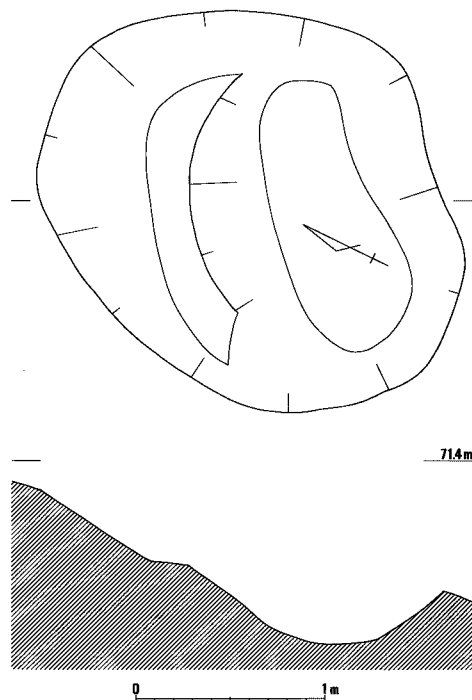
土壇2の上位に位置する不整形円形の底面が窪みを呈した土壇である。

土壇 4 (第36図)

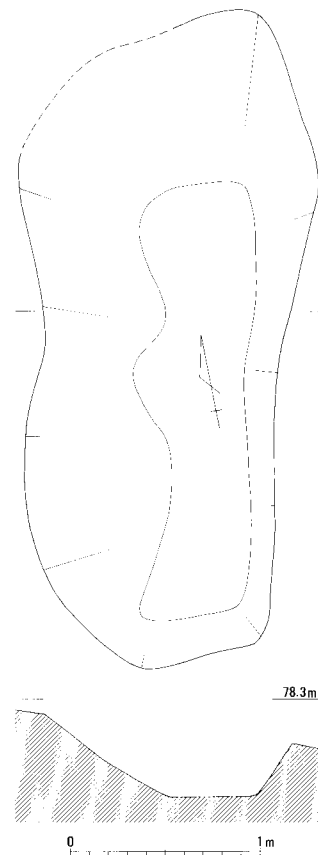
土壇3のさらに上位で、竪穴住居6の南東部の近い所に



第36図 土壇 4 (1/40)



第37図 土壇 5 (1/40)



第38図 土壇 6 (1/40)

位置する不整長楕円形と考えられる平面形の掘り方を呈する土壌で、長軸はほぼ東西を示している。断面形態から底面は丘陵上位がわずかに高いが、東西は平坦に掘り上げられている。土壌墓の可能性も考えられる。

土壌5 (第37図)

丘陵斜面下位で、竪穴住居4の東に位置している土壌で、平面形が不整円形状をし、掘り方は、丘陵上位にテラス状の段を有する2段掘りとなっている。断面形態は碗状を呈する。

土壌6 (第38図)

丘陵変換部から南に下がった斜面部に位置している土壌で、平面形は歪な不整長方形を呈し、長軸に沿って底面も丘陵上部に徐々に高く掘り上げられている。規模は長辺340cmを測った。

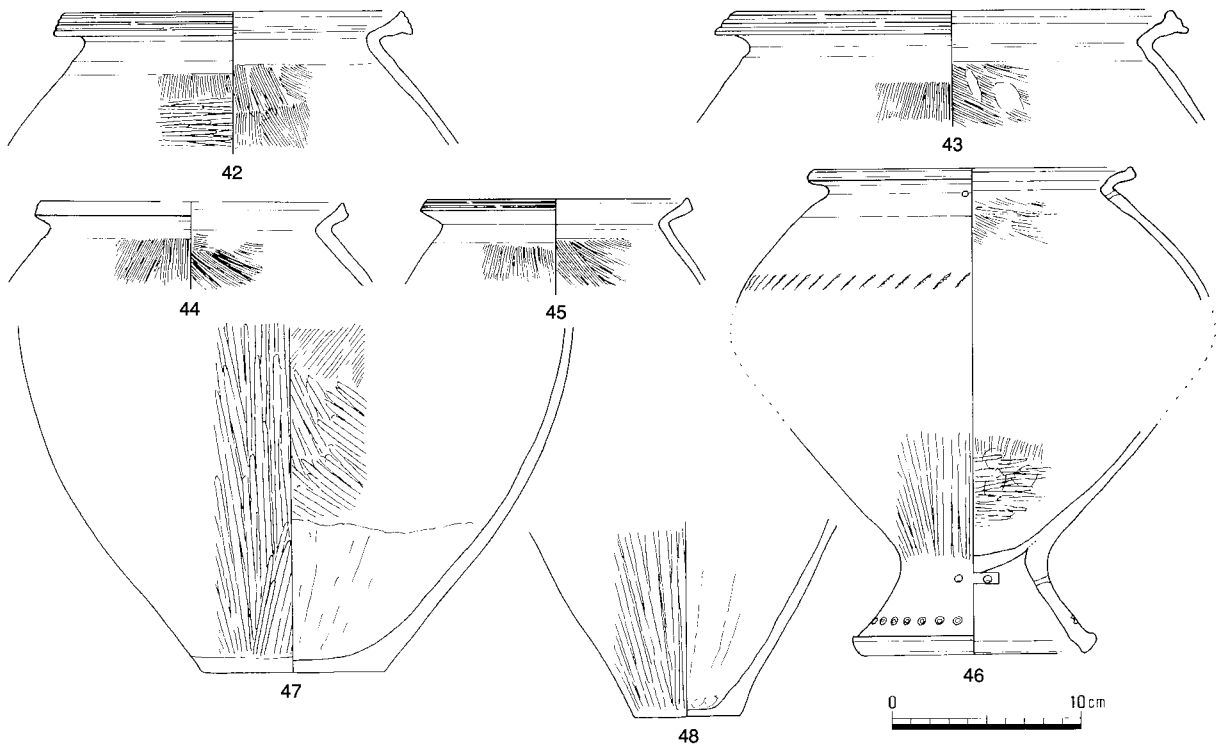
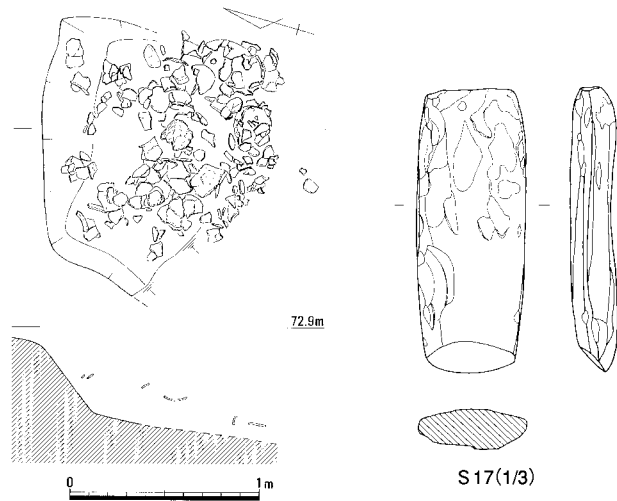
土壌7 (第39・40図、図版2-2)

丘陵変換部から南に下がった斜面部で、土壌4の西側に位置して検出された遺構である。

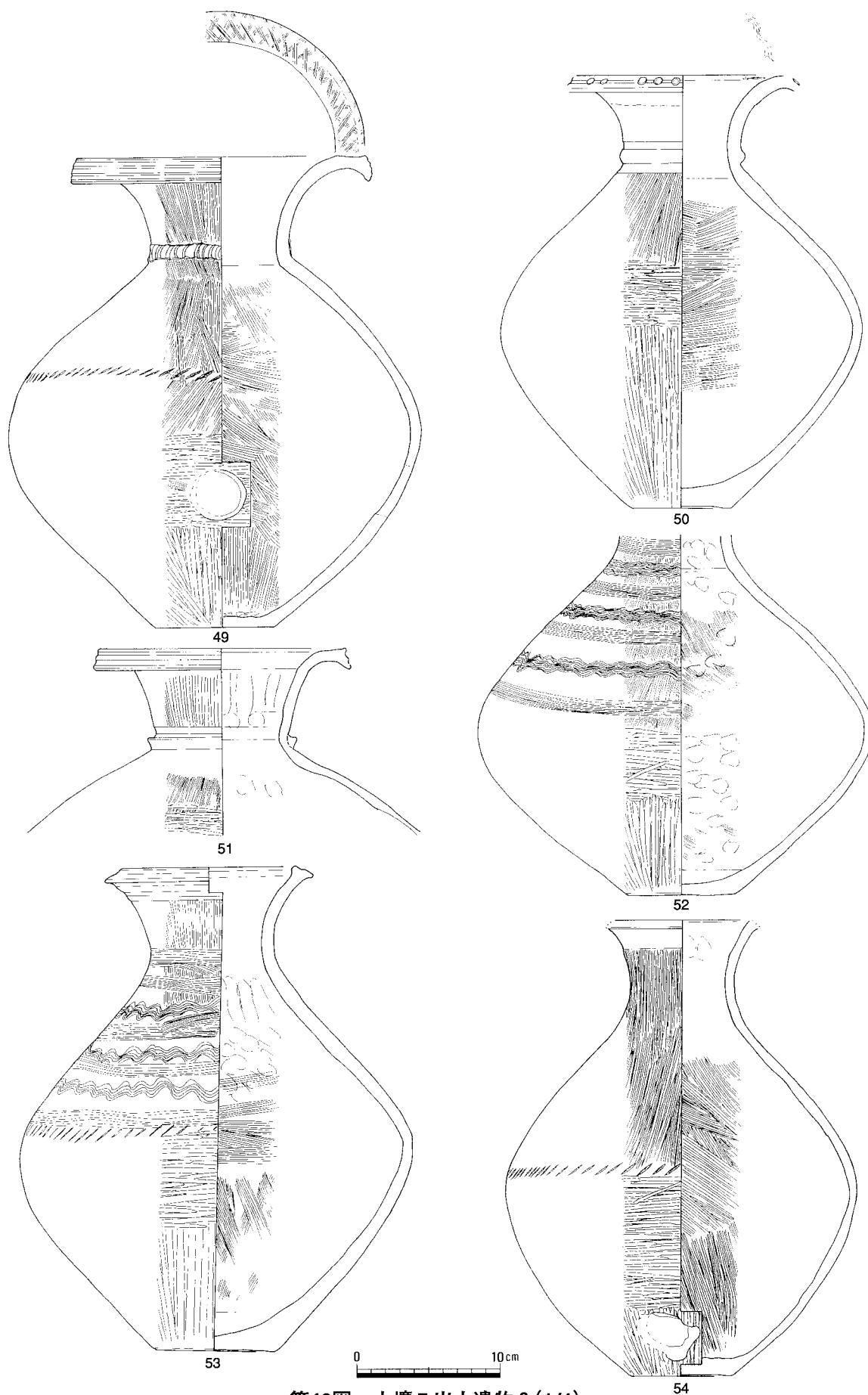
遺構検出時点では、竪穴住居5と重複した土器溜り考えられる状況であった。

出土遺物周辺を精査していく途中で、土器溜りの北側において不整形の掘り方とおぼしきラインを確認する。この遺構は、竪穴住居5の埋没後に掘り窪められた遺構であることが判明する。

土壌の規模は本来方形状であったであろうが、現状では不明であるが、東西方向で135cmを測ることができるが、南北は斜面



第39図 土壌7 (1/40)・出土遺物1 (1/3・1/4)



第40図 土壙7出土遺物2 (1/4)

の流失により不明である。断面形は逆台形状を呈している。また、底面は平坦というよりは、わずかに東側が高くなっている。

また土壌内には完形品から破片にいたるまで、多量の遺物が出土している。S17は流紋岩を用いた磨製石斧も含まれている。

出土した遺物は前述の磨製石斧S17のほかに甕42・43・44・45、台付鉢46、体部以下の47・48、さらに壺49・50・51・52・53・54、さらに図示されていない破片がかなり出土しているが、いずれの遺物も底面より上位で、遺構の埋没過程での堆積物と考えられ、土器溜りの可能性も考えられる遺構である。

甕の口縁部である42・43には各々2条、3条の凸線が見られ、42の体部外面にミガキが施されている。また44・45・46の口縁部を上方へ引き上げている。46の体部外面には刺突が施されている。

壺には外反気味で口縁端部を外側下方に引き下げた口唇部の広口長頸の口縁部を持った49・50・51がみられる。また53の口縁端部を上方につまみ上げた壺もみられる。第40図に図示した壺の49・54の体部下方には人為的な穿孔がみられる。この穿孔は内側から穿たれている。また口縁部に円形貼り付け浮文の土器50や49・51のように頸部に貼り付け突帯を伏したのものもある。

土壌8 (第41図)

調査区の中央付近の丘陵が平坦面を示す西向きの斜面で、掘立柱建物の北西部に位置し、竪穴住居8の内側に位置する。一見方形を呈した不整形の平面形をした遺構である。検出時点での土壌の規模は60×50cm、深さは35cmを測る。掘り方は逆台形状をなし、底面は平坦に掘り上げられていない。竪穴住居8より新しい時期と考えられる。

土壌9 (第42図)

調査区の南東向きの急斜面に位置する。土壌の規模は185cm×推定110cm、深さは斜面上部の北西部で50cmを測る不整形の形態を呈しているが、本来の平面形状は円形と思われる。現状は断面の流失により確認された形状となっている。土壌の掘り方は、ゆるやかに掘り窪められ、平坦な底面と作り上げていたものと思われる。明瞭な時期は不明である。

土壌10 (第43図)

土壌9の西側で斜面の傾斜が若干緩やかな場所に位置する。遺構の重複が想定されている平面形態を示すものである。規模は200cm×150cm、深さは40cmを測る。断面形は搗鉢状をなしている。平面形態は不整形の円形を呈する。土壌墓の可能性も考えられるが、それらしい痕跡は認められなかった。また明瞭な時期についても不明である。

土壌11 (第44図)

掘立柱建物の北東隅部に位置している。検出された土壌の規模は165cm×115cm、深さは50cm程度を測る。平面形態は北部が削られてはいるが楕円形を呈し、緩やかに掘り窪められて搗鉢状の掘り方の断面を有している。

土壌12 (第45図)

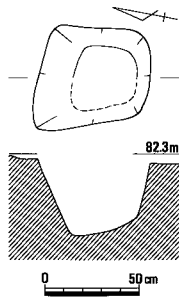
段状遺構12の北東側で北東に傾斜する斜面に位置する。遺構は北西―南東に長軸を持つものであり長方形の形状を示す。断面形は、北東側に段状に下がった形状を呈している。

土壌13 (第46図)

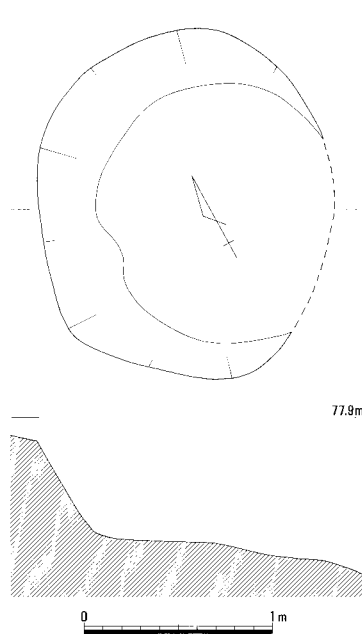
土壌12の下方に位置するほぼ東西方向に長軸を持つ不整形長方形を呈した土壌である。規模は

第5章 岡遺跡

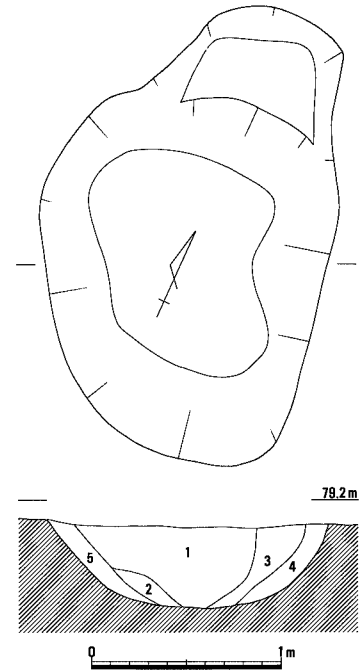
250cm×120cm程度、深さは検出面から最深で40cmを測り、播鉢状の断面をし、底面はほぼ平坦となっている。明確な時期は不明。



第41図 土壌 8 (1/40)

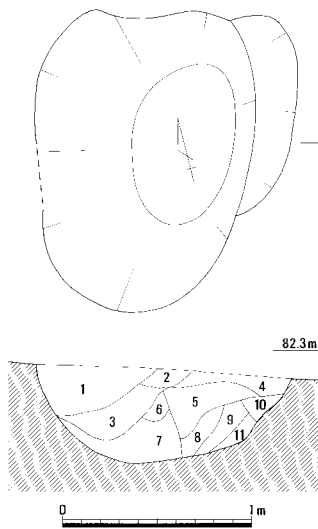


第42図 土壌 9 (1/40)



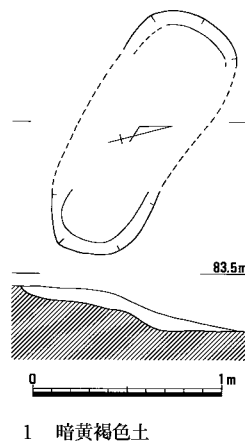
- | | |
|--------|---------|
| 1 暗褐色土 | 4 淡灰褐色土 |
| 2 灰褐色土 | 5 暗茶褐色土 |
| 3 褐灰色土 | |

第43図 土壌10(1/40)



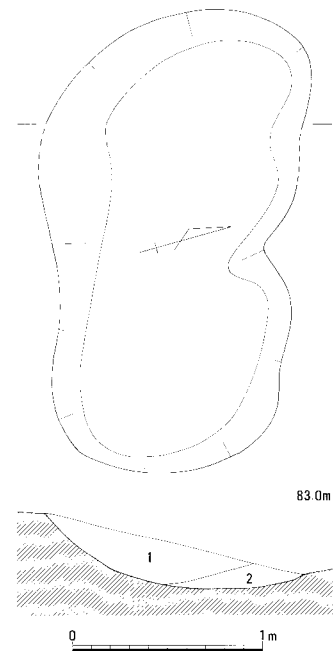
- | | |
|---------------|-----------|
| 1 暗灰黄褐色土 | 6 淡暗黄灰褐色土 |
| 2 灰白色土 | 7 暗黄灰褐色細砂 |
| 3 暗黄灰褐色土 | 8 暗黄灰色細砂 |
| 4 灰黄白色土 | 9 暗灰黄色細砂 |
| 5 暗黄灰褐色土(炭含む) | 10 暗褐色土 |
| | 11 暗褐色細砂 |

第44図 土壌11(1/40)



- 1 暗黄褐色土

第45図 土壌12(1/40)



- | |
|-----------|
| 1 暗黄灰褐色土 |
| 2 暗黄灰茶褐色土 |

第46図 土壌13(1/40)

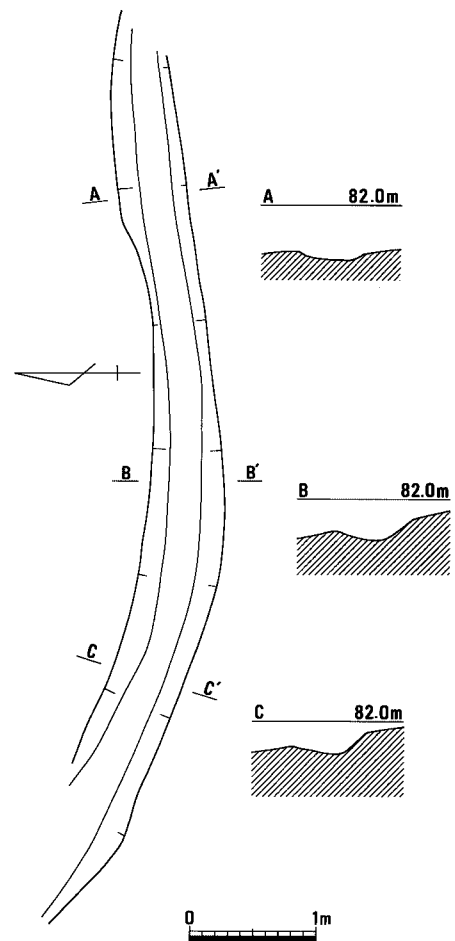
7 溝

調査区内で検出された溝とおぼしき遺構は数条認めるが、断定することはかなり困難なものであった。

溝（第47図）

調査区の丘陵に沿う状態で検出された遺構についても溝状に考えられるが、現状では調査前に山道・畑の開墾に伴う遺構等が考えられるため、調査区上位部では北東部の若干傾斜の緩やかな位置において丘陵の延びる方向にわずかに湾曲した形状の溝を1条検出、さらに南に下がった急斜面の最下段の段状遺構2と土壌1の中間における位置で検出されている「く」字状を呈する形状の遺構であるが、検出された遺構の状況・形状から考えられることは、斜面を削って段状に地形を整形し、段状遺構の奥側からの排水に係わる溝と判断するものが妥当と思われる遺構と考えてこの項には取り上げていない。

前述の溝の形態は、丘陵に沿い、北側の谷部方向への山崩れなどにより湾曲した内側に付随していた遺構は消滅し、わずかに現状で残存したにとどまっているものと思われる。現存する溝の規模は、全長が約7m、幅は45cmから最大で65cmを測り、深さは検出面から約7cmから最深で15cmである。溝の断面形態は基本的にU字状を呈するものである。



第47図 溝(1/60)

8 古墳

古墳は、平成11年度の確認調査で確認することができず、本調査の排土場所としての作業中の掘削時に石材を確認し、周辺を調査した結果、河原石を用いて作られた小型の石室の古墳であることがわかった。

古墳（第48・49図）

古墳は、調査区の最も下位に位置している古墳である。この古墳は、丘陵斜面に位置して築かれているため盛土等は流失し確認することはできなかった。石室の石材は後世の開発により数個が抜き取られている。

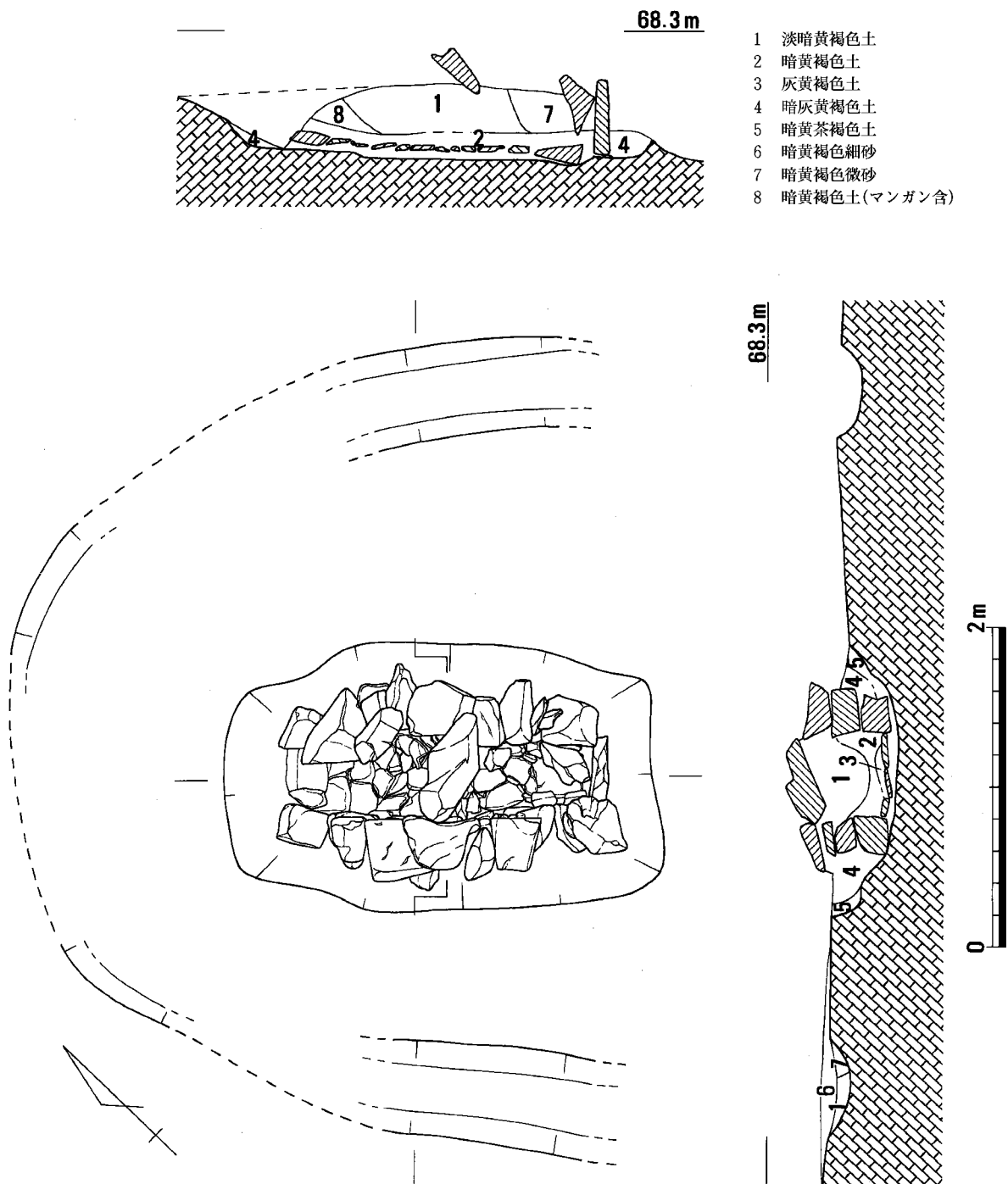
墳丘

墳丘は全体が後世の開墾により削平されているが約5mの円形を呈すると思われる古墳である。古墳は丘陵の斜面部の最も下位に築かれ南東側の約3分の1が消滅している。

墳丘の盛り土は開墾によりすべての盛土を除去されている様子であり調査時には確認することはできなかった。しかし東側の部分には、旧表土と思われる層を確認したがうたがわしい土層であった。よって、本古墳においての墳丘盛土は全く認めることができなかったのである。

主体部 (第48・49図)

主体部は丘陵斜面を段状に削平して、等高線に直交し、北西-南東に主軸を示した小型の竪穴石室である。丘陵上位にあたる北西部の小口石は掘削前までは存在していたものであったが、表土掘削時に重機に引っかかり消滅したものである。石室の天上部は開墾により取りさらされているが、両側壁は3段の横積みの構築でわずかに胴張りを呈した作りである。また南東部の小口石は板石を立てている。さらに石室の底面には両小口部側には石室の幅の石材を用い、その間は小さな石で床面を形成し、北西部、すなわち丘陵上部側に徐々に高く仕上げ、若干ではあるが枕石を兼ねるように一段高くなって



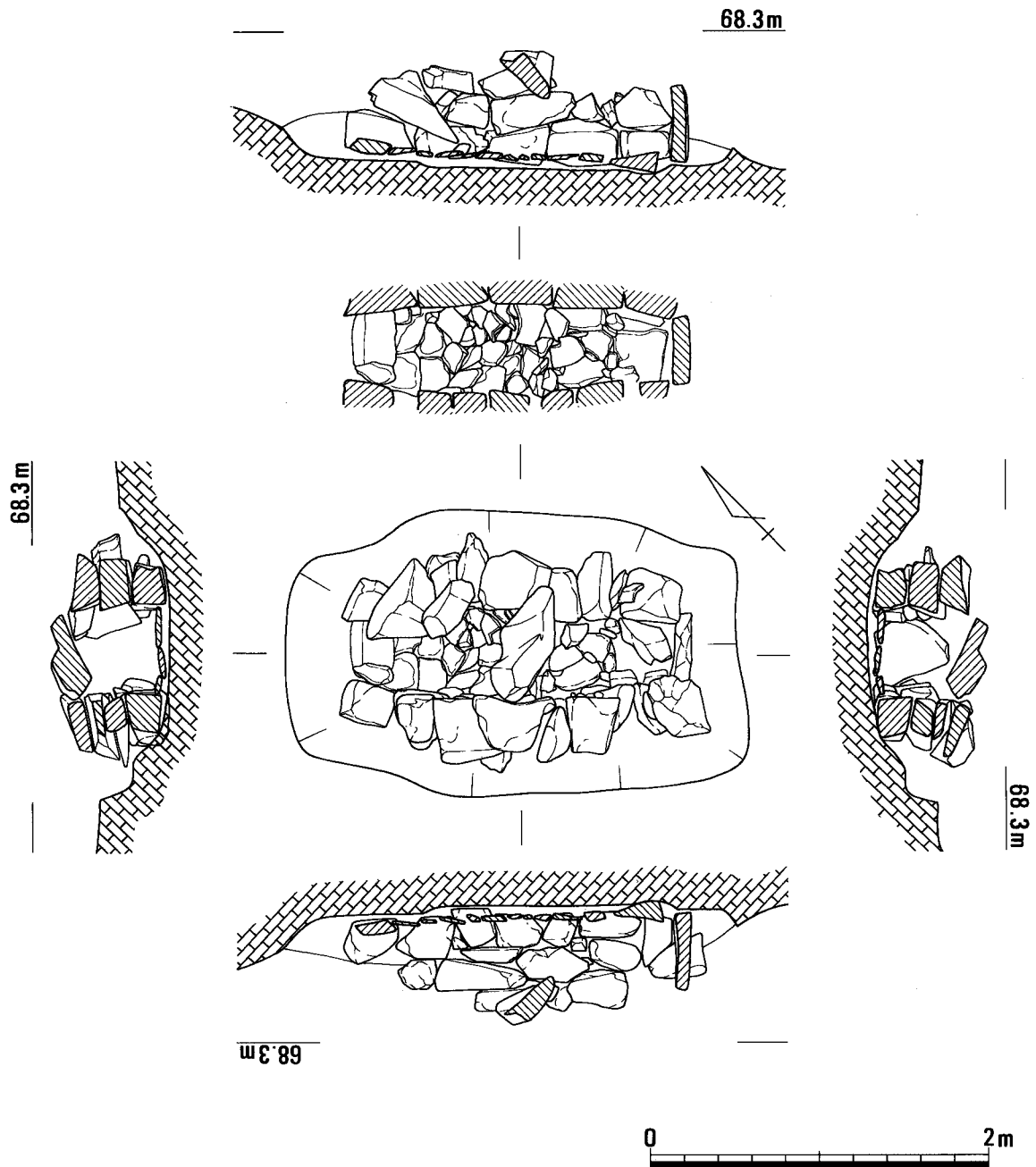
第48図 古墳(1/40)

いる。なお、石室掘り方の規模は長辺270cm、短辺は125cm～170cm、深さは地山面から40cmを測り、その断面形態は底面に向けて丸みを持った掘り方の土壌である。

またこの古墳の主体部等から遺構に伴う遺物は検出されていない。

周溝 (第48図)

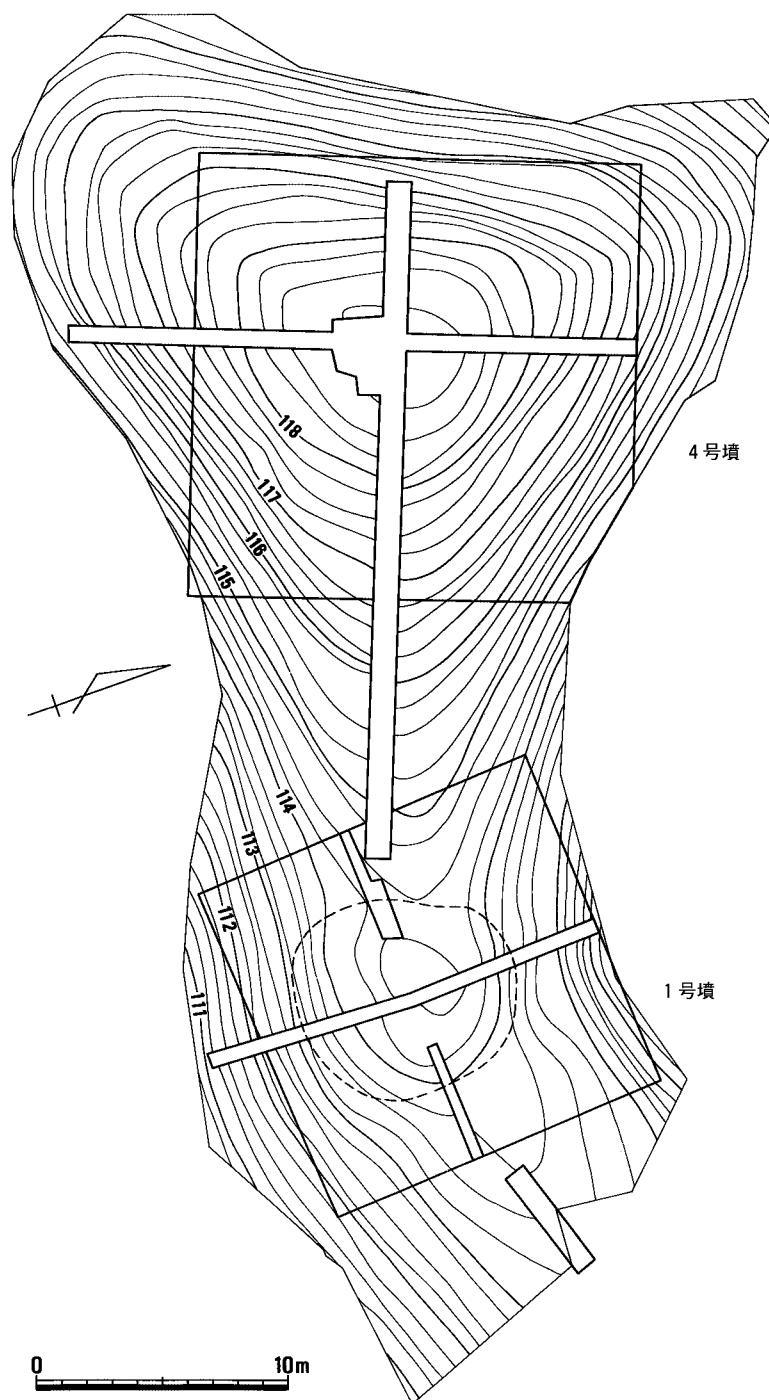
南東側は開墾の段差により消滅しているが、反対側(山側)は辛うじて残存はしている、この部分においても開墾の影響が及んでいることと、調査の段階での排水溝により消滅した部分もあるが、辛うじて主体部を取り巻く形状を呈している。周溝の平面形は若干歪であるが、馬蹄形を呈し、その形状から周囲を取り巻くのではなく、谷部に向けて開口しているものであろう。規模は確認できる場所で55～65cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは15cm前後を測る。周溝内からは古墳に伴うと考えられる遺物の出土は認められなかった。 (二宮)



第49図 古墳石室(1/40)

第6章 小坂古墳群

第1節 調査区の概要



第1図 調査区全体図(1/300)

小坂古墳群は北東—南西方向に延びる丘陵南西端上に位置する。調査対象はこの丘陵上に存在するとされた小坂1(No.18)、2(No.17)、3(No.16)号墳およびNo.18A、No.18B、No.18C、No.17Aの合計7地点のうち、確認調査により古墳であることが判明した小坂1(No.18)号墳とNo.18Aである。このうち、小坂1(No.18)号墳は小坂1号墳と、No.18Aについては小坂4号墳として調査を実施した。小坂1号墳は平坦部分から北西方向に高くなる斜面の変換地点に位置する。標高は約111～115mであり、対象面積は200m²である。小坂4号墳は丘陵頂部に位置する。標高は約114～119mで314m²である。(澤山)

第2節 調査の概要

1 1号墳

小坂1号墳は、北東—南西方向に延びる独立丘陵の尾根上南西端部に位置する。確認調査では尾根方向に設定したトレンチの断面観察によって周溝および石材の使用が認められ、石室を内部主体にもった古墳であることを想定した。全面調査では新たにこれと直交するトレンチを設定して、得られた知見を基に古墳の表土、被覆土などを除去し、掘り下げおよび精査を行った。その結果、この古墳は全長7.5mを測り、横穴式石室を有するやや不定形な円墳であることが明らかとなった。

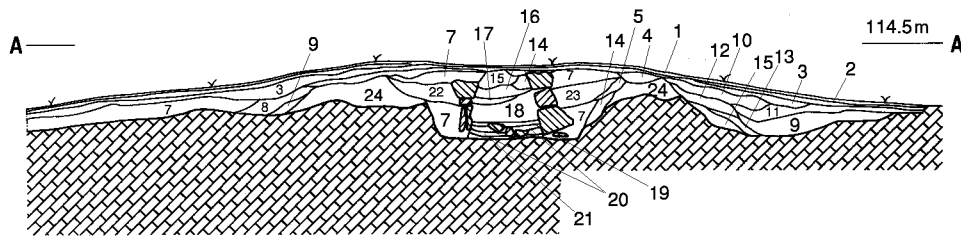
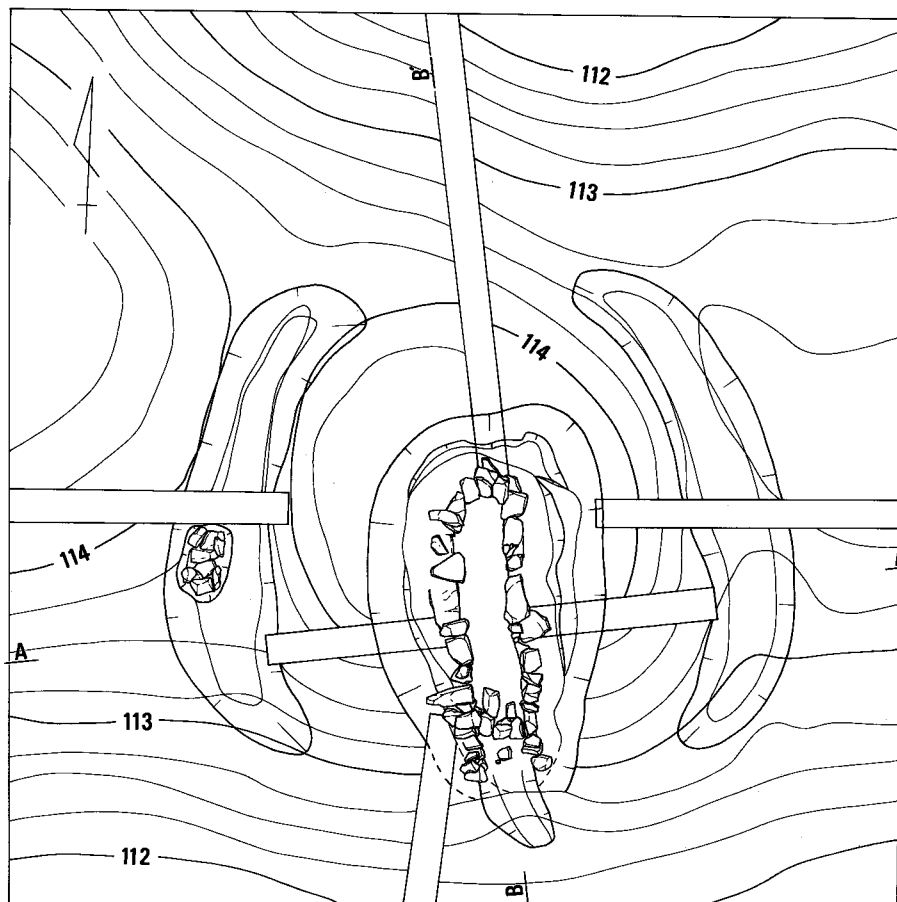
墳丘と周溝 (第2図、図版3-2・5・6)

墳丘は東側の平坦部分から西側方向に高くなる斜面の変換点付近で、また北・南側が急斜面となるような自然地形を利用して構築している。これは石室の掘り方を基盤層から深く掘削して、南側斜面部にあたる石室開口部を低く下げることによって、わずかな盛土で墳丘規模を大きく見せることができるようになる。つまり、見かけ上は東西方向での高さが0.8m程度であるのに対し、南北方向は石室床面を基準とすると高さが約2.1mになり、これは最小労力でいかに視覚効果を上げるかを考慮したものと思われる。

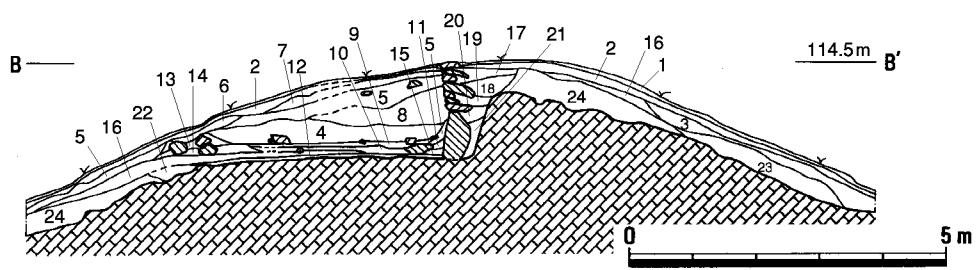
周溝もこうした地形を利用して、古墳を区画するための溝として構築されたと思われる。これらは墳丘の東側と西側にみられ、深さは東側が約0.3m、西側が約0.2mを測るが、尾根筋付近から斜面地となる北側と南側付近になるにつれて不明瞭となり、自然消滅している状況を呈する。断面形態は浅い逆台形状ないし鈍角の三角形を呈しており、崩落の影響もあるが墳丘内外側ともに明瞭な掘り方が認められない。なお、西側の周溝内には土壌内石槨が確認され、人骨が出土している。石室開口部付近をみると、やや南東方向に下るたわみがみられるが、明確な前庭部となるか判然としない。

石室掘り方は地山および基盤層から掘り込まれ、平面形態が倒卵形を呈し、長さ5.9m、最大幅3.8m、深さ1.1mを測る。断面形態は基本的に皿状を呈し、床面はほぼ水平である。ただし、奥壁側から東壁側にかけては一部で段掘り状になっており、これらの下位はやや直立気味になっている。一方、奥壁側については、直立気味の下位から上方に大きく開口している。

石室の東西壁からそれぞれの掘り方までの距離は、西壁側が最大幅1.6m、東壁側が最大幅1.4mで、掘り方が西壁側にやや寄っている。また、石室と石室掘り方の中心長軸が不一致である。これを示すように東壁側および奥壁側の基底石が、比較的掘り方底部で密着気味であったのに対し、西壁側ではわずかに空間を生じていた。これは、西壁側方向に高くなる斜面の自然地形と配石の作業工程により生じたものと思われる。また、東側壁の構築が直線的に積み上げられるのに対し、西壁側が開口側



- | | | | |
|--------------|---------------|----------------|-----------------|
| 1 表土(腐植土) | 7 暗黄褐色細砂(粗砂含) | 13 黄褐色細砂 | 19 暗茶褐色粘質細砂(炭含) |
| 2 淡黄灰色細砂 | 8 黄褐色細砂(粗砂含) | 14 明黄褐色細砂(粗砂含) | 20 暗灰褐色粘質細砂(炭含) |
| 3 淡黄褐色細砂 | 9 淡茶褐色細砂(粗砂含) | 15 暗黄褐色細砂 | 21 淡灰黄褐色細砂(粗砂含) |
| 4 黄褐色細砂(木の根) | 10 淡黄褐色細砂 | 16 淡茶褐色細砂 | 22 淡黑褐色細砂 |
| 5 黄褐色細砂(粗砂含) | 11 黄褐色細砂(粗砂含) | 17 灰黄色細砂 | 23 淡黑褐色細砂(粗砂含) |
| 6 明黄褐色細砂 | 12 暗黄灰褐色細砂 | 18 茶褐色細砂 | 24 明褐色微砂(粗砂含) |



- | | | | |
|-----------|-----------------|-----------------|----------------|
| 1 表土(腐植土) | 7 暗黄褐色細砂 | 13 明黄褐色細砂 | 19 暗褐色細砂(粗砂含) |
| 2 黄褐色細砂 | 8 灰黄褐色細砂 | 14 明褐色細砂 | 20 暗黄褐色細砂(粗砂含) |
| 3 明茶褐色細砂 | 9 暗茶褐色粘質細砂(炭含) | 15 暗灰褐色粘質細砂(炭含) | 21 暗灰茶色細砂 |
| 4 茶褐色細砂 | 10 暗灰黄色粘質細砂(炭含) | 16 暗黄褐色粘質細砂(炭含) | 22 暗茶灰色細砂(粗砂含) |
| 5 淡茶褐色細砂 | 11 淡黑褐色細砂 | 17 暗黑褐色細砂(粗砂含) | 23 黄褐色微砂 |
| 6 黄褐色細砂 | 12 暗灰黄褐色細砂(粗砂含) | 18 淡黑褐色細砂(粗砂含) | 24 暗黄褐色微砂 |

第2図 1号墳(1/120)

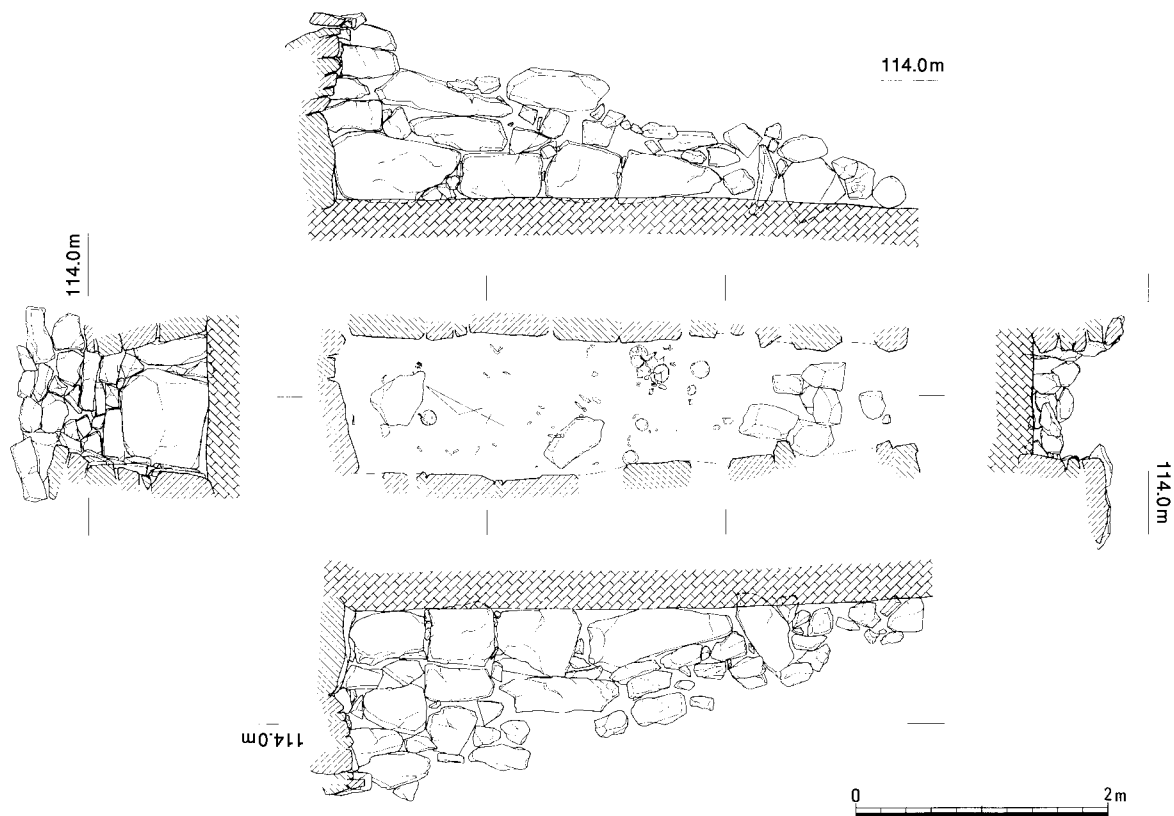
にやや湾曲して積み上げられていることとも関連するのであろう。

横穴式石室（第3図、図版3-2~4）

石室の主体部は南東方向に開口する無袖の横穴式石室であり、全長4.5m、玄室長3.5m、玄室幅1.5mを測り、奥壁幅1.1m、高さは奥壁部分で1.3mである。主軸線はN-27°-Wをとるが、これは立地に規制されたものと思われる。石室の残存度は天井石がほとんど全損していたが、基底層はほぼすべてが確認された。

A-A'・B-B'断面を参考に石室の構築方法をみると、地山およびA-A'断面の第24層、B-B'断面の第23~24層などで構成される基盤層を掘り込み、基底石を置いていく。ここで基盤層としたものを人為的な造成土ではないかとも考えたが、遺物の包含が認められなかったことと、周辺の地形の土質とからこのように判断した。石室の掘り方と基底石の位置関係は、西壁に比べてやや東壁が掘り方に近接している。また、石材の積み方は、東壁側はほぼ一直線になるが、西壁側は開口側にやや湾曲している。これは、先述のとおり西壁側方向に高くなる斜面の自然地形と配石の作業工程により生じたものと思われ、東壁側から築造された可能性が高い。

基底石は奥壁から東・西壁4石目までは基本的に横長に置いている。ただし、5ないし6石目は縦長に変わり、7石目以降はこれまでより小形の石を用いて乱積み気味となっている。この変換箇所は、床面図が示すように閉塞施設との境界部分にあたり、東・西壁の門柱状の袖石によって石室内外が分けられているのが見て取れる。この部分の裏込め層は、掘り方下位にあたるA-A'断面の第7・14層、B-B'断面の第21層などが対応するが、版築を示すような土層の交互の叩き締めは認められなかった。



第3図 1号墳横穴式石室(1/60)

基底部上部は、西壁で3石目まではやや大形の石を基本的には横長に使用するが、それ以外は乱積みとなっており横目地も不明瞭である。東壁は西壁以上に不明瞭である。これらの部分の裏込め層は、1列単位で充填されているようであり、掘り方上方位にあたるA—A'断面の第7・22・23層、B—B'断面の第18～21層などが対応するが、互層の叩き締めは認められなかった。なお、天井石はすべて認められず、盛土は石室や周溝を掘削した基盤層からの排出土を使用したと考えられるが、墳丘上位では確認できなかった。

A—A'断面の第1～7層、B—B'断面の第1・2層は、表土、被覆土にあたり、B—B'断面の第3・4層は盛土の可能性があるが、墳丘流出土となっていると思われる。なお、B—B'断面の第4・5・8・9・10層は石室内埋土ないし流入土であり、床面近くまでその堆積が達している。そのため、床面直上付近の遺物に攪乱がおよんでいる可能性が高い。

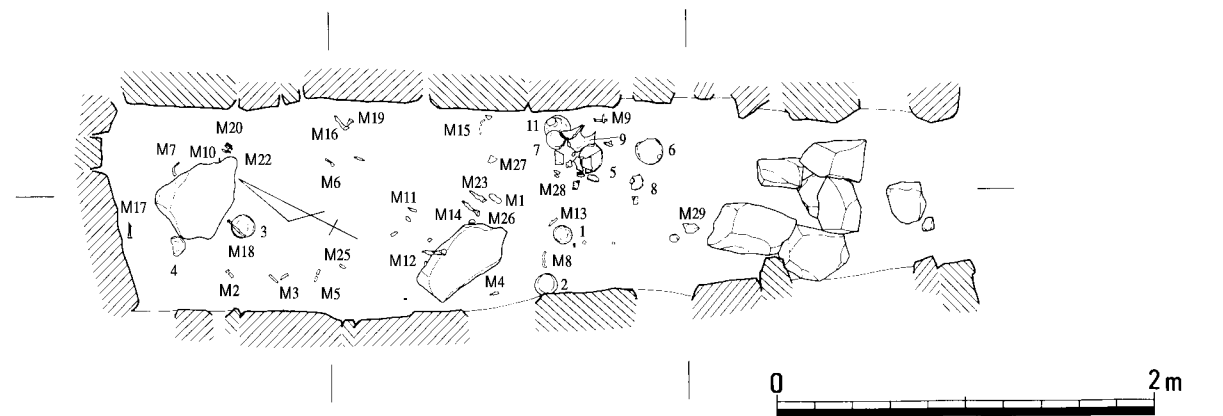
奥壁の基底部は2石を使用し、西側は高さ0.7m、幅0.8mを測る大形の石材が置かれている。東側の石材は小形で高さ0.6m、幅0.2mを測る。基底部上部は高さ0.2～0.3m、幅0.1～0.5mの小形の石材を横口または小口積みにしている。平面的にはやや南西側に入り込むようにみられる。

東西両側壁は石材の大小はあるが、床面状況からみるとおおよそ11石を使用している。東側壁は奥壁側をみると基本的に5段構築を示すが、その他の箇所は大小の石材の使用によってある一定の高さを優先する築造を取っていることから、構築が判然としない。西側壁も奥壁側をみると基本的に5段構築と認められるが、東側壁と同様に構築が判然としない。そのため横目地は1段目については通しているが、これより上段はそうした意識は認められない。持ち送りは東側壁が西側壁と比べてやや急になっているが、面は揃っている。

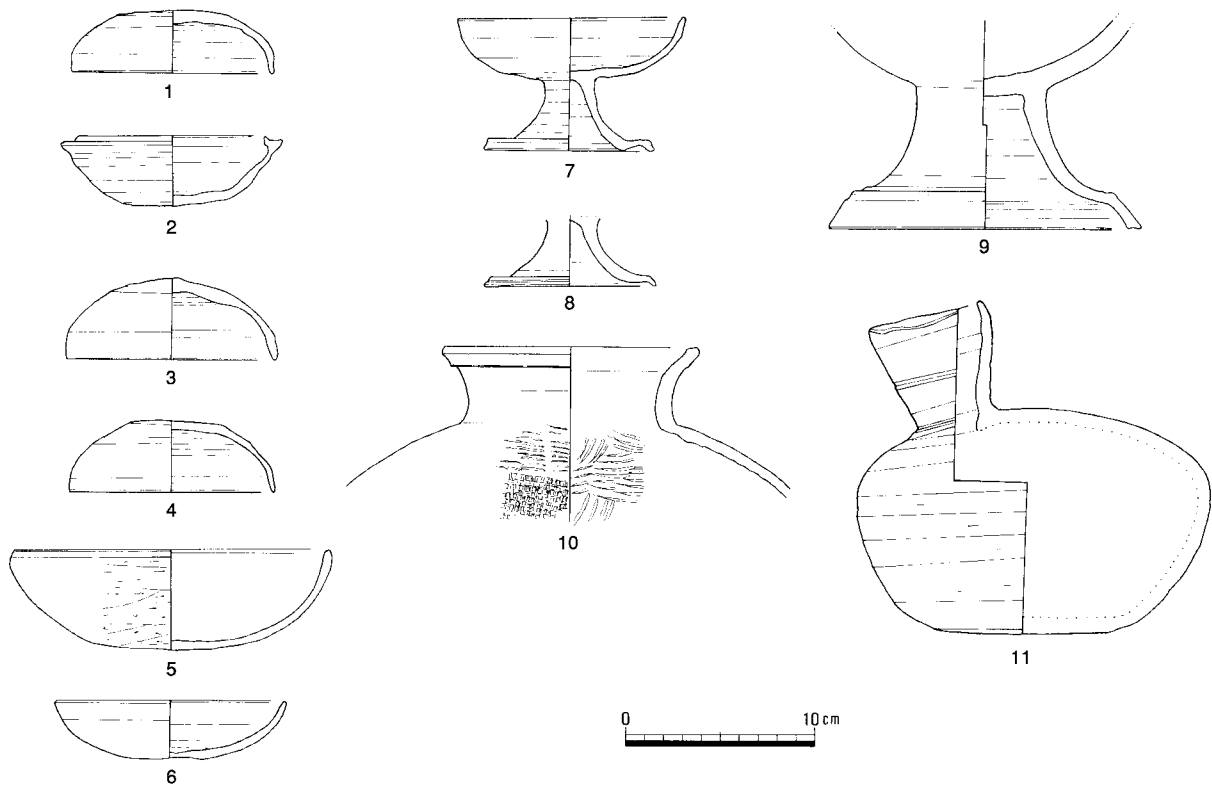
閉塞施設の残存度は良好ではなく、築造当時は現状より高く積み上げられていたものと思われる。残存している部分で石室南端部から約0.5m内側に入った所から確認され、おおむね長さ、幅ともに0.8mの範囲もつ。これは先述したように、閉塞施設との境界部分である基底石の奥壁から東・西壁の5ないし6石目の縦長の袖石によって分けられているといえる。

現状で最高地点は南端部から約0.9m離れたところであり、礫を数段積み上げ、明褐色または明黄褐色の土層と混ぜ合わせている。使用された石材は長さ0.2～0.4m、幅0.2～0.5m程度のものである。これらの石材は、特に面を形成しているわけではなく、任意の場所に充填されて置かれたようである。

遺物出土状況 (第4図)



第4図 1号墳横穴式石室出土遺物配置図(1/40)



第5図 1号墳横穴式石室出土遺物1(1/4)

は認められなかった。

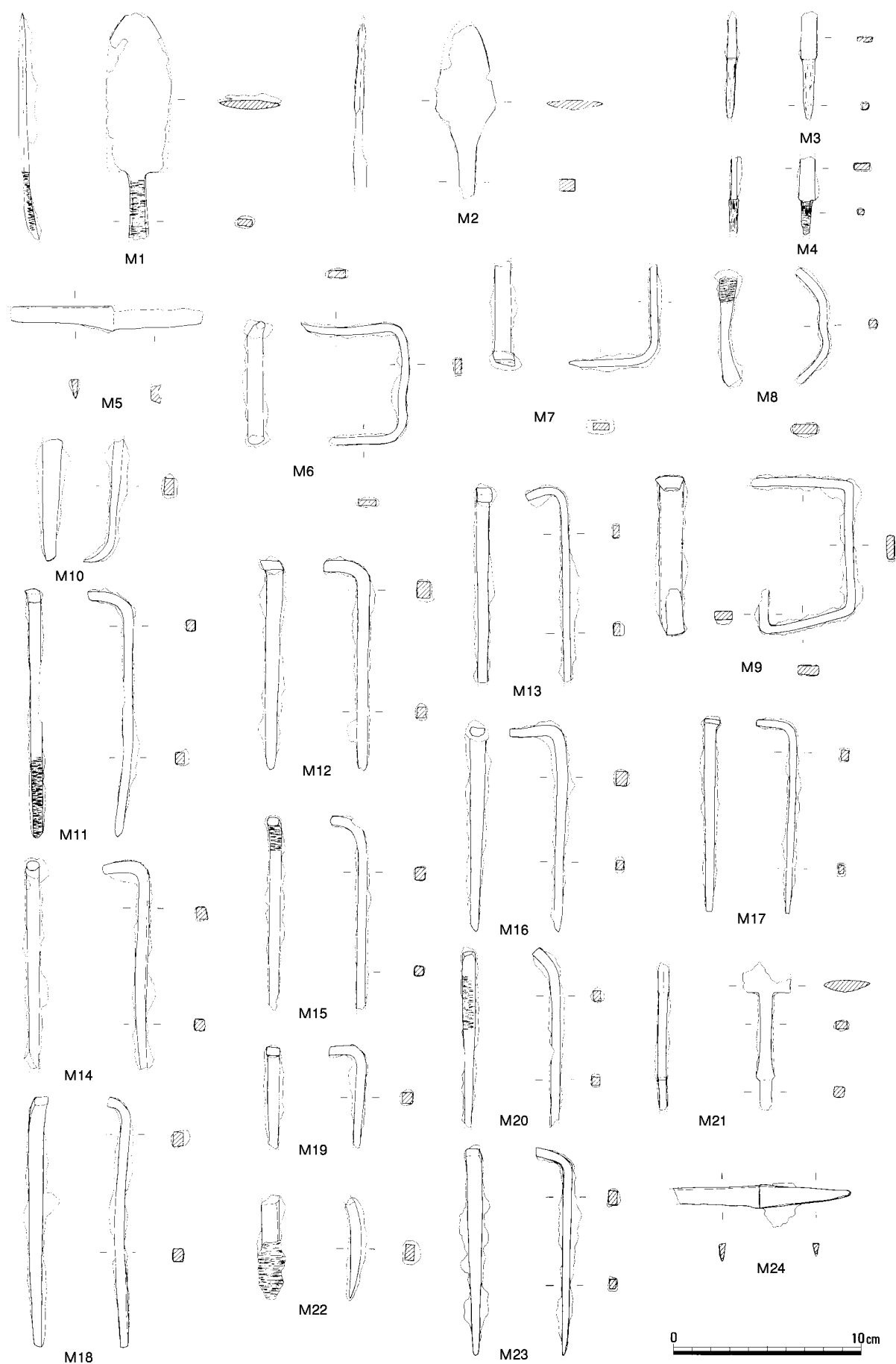
須恵器、土師器の出土状況を見ると、奥壁中心から約0.3～0.6m離れた付近で須恵器杯蓋3・4が、また、約2.3～2.8m前後離れた付近で須恵器杯蓋1、杯身2、高杯7・8、脚付壺9、平瓶11、土師器杯身5・6がややまとまりをもって検出された。特に東壁沿いでは遺物の集中がみられ、片付けがなされた可能性がある。一方、須恵器壺10は石室内や周溝内埋土から破片で出土している。

鉄製品も須恵器や土師器の出土範囲内で検出されており、図化し得たものとして、鉄鏃M1～M4・M21、刀子M5・M24、鏃M6～M10、釘M11～M20・M22・M23などがある。このうち、鉄鏃M1は約2.5m、鉄鏃M2は約2.1m離れた場所から出土した破片が接合したものである。また、M21は床面付近の石室内埋土と閉塞施設下層から、M24は床面付近の石室内埋土と石室内流入土から検出したものがそれぞれ接合した。鉄滓は奥壁から閉塞施設の内側でM25～28が、閉塞施設の外側でM29がそれぞれ確認された。これらは墓前祭祀として供献されていたものと思われる。人骨は石室奥側から約2.6m離れた付近で歯が検出されている。これは、想定される木棺配置からは大きく異なる位置関係となる。

遺物とともに石室内で検出された石材は、その配置から棺台の可能性が考えられる。棺痕跡は検出できなかったが、遺物の検出状況や棺台とみられる石材の配置から、木棺は長さ2m、幅0.7m程度の規模と考えられる。また、片付けを想定すれば、追葬は最低一回行われた可能性があるといえる。ただし、石室内埋土ないし流入土の堆積状況を考えると、すべての遺物が元位置を保っているとは限らない。

出土遺物（第5・6図）

須恵器では、杯蓋1は口径10.5cm、器高3.3cmである。杯身2は口径9.8cm、器高3.8cm、受部11.4cmを



第6图 1号墳横穴式石室出土遺物2(1/3)

測る。杯蓋3は口径10.9cm、器高4.3cmを測る。杯蓋4は口径10.7cm、器高3.8cmを測る。いずれもヘラ切り後、仕上げの差異はあるがナデを行う。高杯7は口径12.0cm、底径8.8cm、器高7.0cm、高杯8は底径8.8cm、器高7.0cmをそれぞれ測る。いずれも脚端部を下方に引き出すようにナデを行う。脚付壺9は底径16.3cm、脚付壺10は口径13.0cmをそれぞれ測る。平瓶11は口径6.1cm、底径8.0cm、器高17.5cmである。扁球形の体部に斜め上方に立ち上がる口縁部を有し、中位に沈線をもつ。

土師器では、杯身5は口径16.5cm、器高5.2cmで径高指数31.5である。外面は砂粒の動きが顕著であるが、基本的に器面を平滑にしている。内面は磨滅が進むが、ミガキないしナデにより平滑化がなされる。杯身6は口径12.1cm、底径3.5cm、器高3.0cmを測り、径高指数28.9である。内外面とも磨滅が激しい。

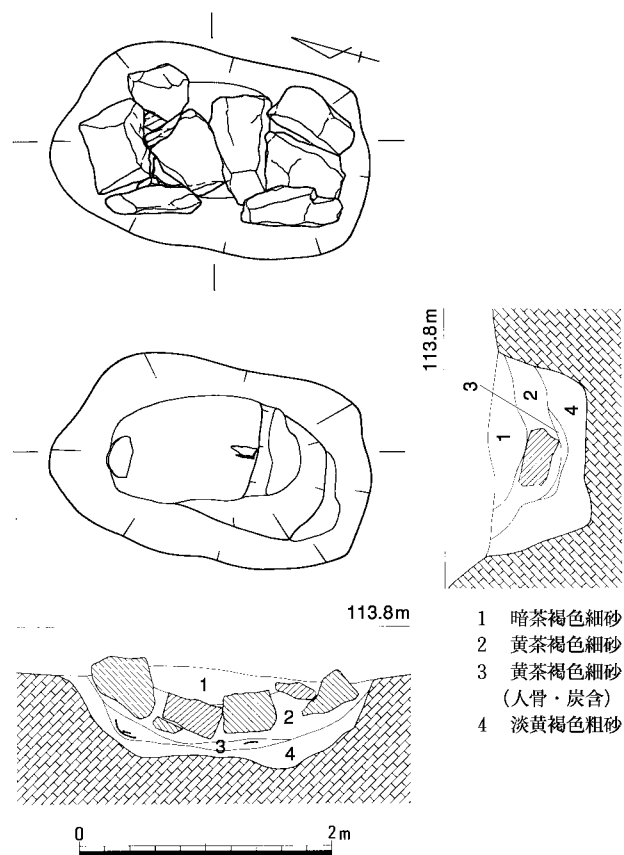
鉄製品は、鉄鏃M1は広鋒両丸造三角形式で木質痕がみられる。鉄鏃M2は形広根両丸造定形式である。鉄鏃M21は篋被広鋒片丸造三角形式で木質痕がみられる。釘M11は最大長12.4cm、最大幅0.6cm、最大厚0.5cmの完形品で木質痕がみられる。釘M12は最大長10.9cm、最大幅0.9cm、最大厚0.7cmの完形品である。釘M17は最大長10.3cm、最大幅0.7cm、最大厚0.4cmで完形品である。釘M23は最大長11.9cm、最大幅0.85cm、最大厚0.5cmで完形品である。また、鉄鏃M3・M4、刀子M5・M24、鏃M6、不明器種M8、鏃M9、釘M22ではそれぞれ木質痕が確認された。鉄滓はM25～29を含め8点出土し、総重量は257.7gを量る。以上のことから、この古墳は7世紀第1～2四半期頃の時期であると思われる。

周溝内石槨 (第7図)

1号墳の西側周溝内から石槨を主体部にもった埋葬施設を検出した。平面形は隅丸方形で、断面形は底面にやや凹凸があるが、逆台形状を呈する。規模は長さ252cm、幅155cm、深さ71cmを測る。

土層堆積から掘り方を掘削したのち、第4層の粗砂などで整地をしながら、掘り方の四隅に長さ約50～70cm大の石材を1石ずつ配する。そして、埋葬後に長さ80cm、幅40cm、厚さ30cm程度の石材4石を蓋石状に置いている。第3層は石槨内流入土にあたり、ここから炭化物に混じって頭位を北に取る人骨が出土した。全体に傷みが著しく、頭蓋骨の一部と部位不明の骨が認められる程度であった。

第2層は石槨覆土、第1層は墓室内流入土に相当するが、遺物の出土はみられなかった。時期は1号墳の周溝との切り合い関係から、古墳築造後のあまり時期差がないものと考えられる。(澤山)

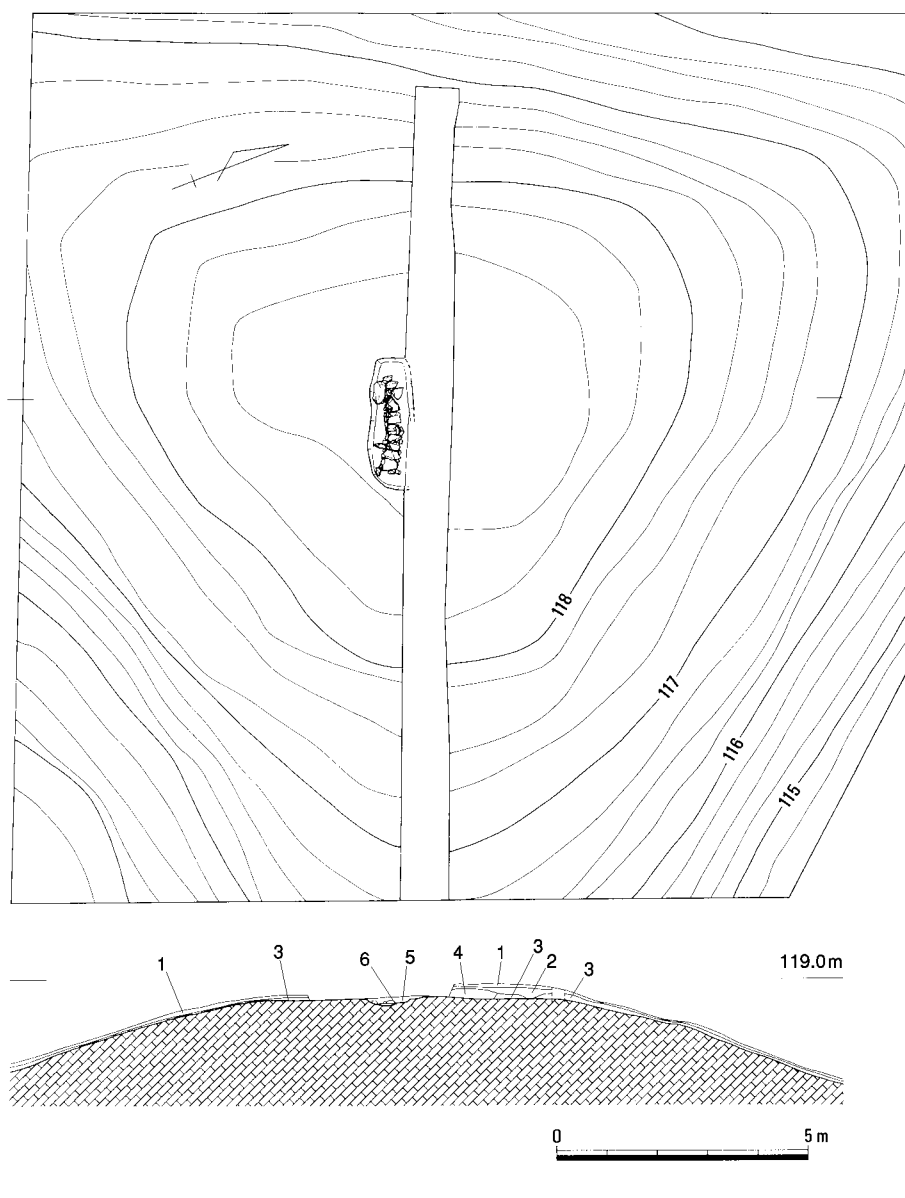


第7図 1号墳周溝内石槨(1/60)

2 4号墳

4号墳(第8図)は、1号墳から東に25mほど離れた丘陵先端部に位置する。1号墳から東側の丘陵の形状は、第一次調査に記したごとく細い鞍部となる。1号墳の西側周溝に相当する高さは114.50m前後で、この辺りから丘陵の高さを増し標高118.75mほどの頂部となる。また、北西側は傾斜がきつくなりさらに南側はややくびれ、北側もかなりの急斜面となり狭くなる。頂部から南東方向にかけては、T字状に広がる形状を呈する。このようなことから、位置的にはかなり奥まった占地になるが、比較的地立った立地が窺われるのである。

調査は、墳丘および墳端の把握のためトレンチを設定したが、すでに第一次調査において丘陵中央部に第1図に示すように幅1mのトレンチと若干の拡張部分から主体部を確認している。このようなことから、この南北方向のトレンチの他に新たに東西方向の幅50cmのトレンチを設けた。調査時における状態は、明瞭な墳丘は認められず、まして、墳端も把握できない現状であった。

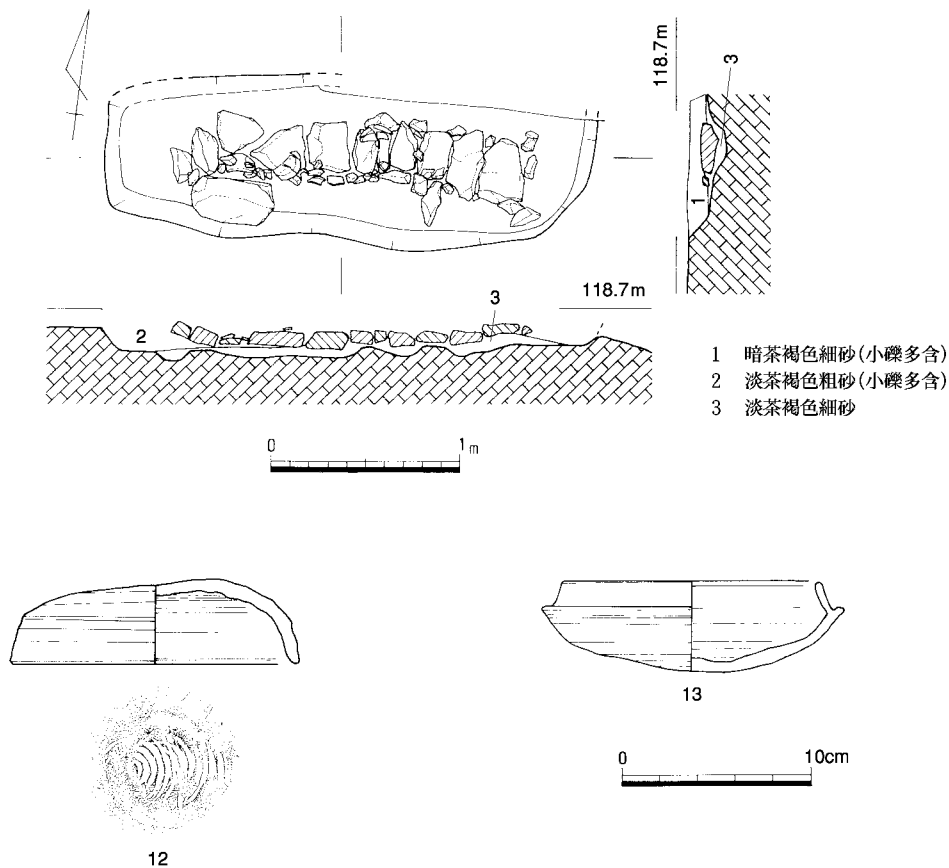


第8図 4号墳(1/150)

第8図に示した土層断面は、南北方向のものである。この付近の基本的な堆積状態は、花崗岩の基盤層上に表土である腐植土が堆積している。この間の堆積層は、ほとんど認められていない。第8図の3層は、花崗岩の基盤層としているが、表土下の花崗岩は風化してスコップなどの調査器材で掘削可能な状態にある。2層の淡灰褐色細砂と4層の茶褐色細砂は、盛り土の可能性はあるが主体部との層序の追及ができなかったため判断しがたいのである。このようなことから、墳丘が流失したと判断され古墳の規模を把握できなかった。

石棺 (第9図、図版3-8)

主体部は、丘陵頂部中央付近で検出され規模は260×85cm、深さ10cm前後で平面形態は方形を呈する土壇である。この土壇内に石組みの棺が認められた。石組みは、土壇底面に長さ24~35cm、幅7~20cm前後の表面が平坦な石を並べて据えている。この石敷きの両側部分は、明確な石組を認めることができなかった。しかしながら、従来の箱式石棺に見られるような明確な石組みではないが、それなりの意識を持って構築されたことを窺うことができたのである。明確に認識されたのは、南側部分である。この部分には、石敷きに沿わせるように拳大よりも大きい角礫(第9図および図版3-8)を並べているのである。この角礫の据えた状態は、作図で明確に表現できていないが適当にではなく、角礫の長さのある側面の方を立てて据えられていることが観察できたのである。北辺についても遺存の角礫が少ないが、ほぼ同様な内容が認められたのである。このようなことから、南辺と北辺さらに東小口部分においては、明確に石を立てるとか横に積むのではなく、このような角礫で囲いとしたと判断される。また、頭位置と考えられる西辺については、底面に細長い石を敷き、三方には大きい石を置いて頭を囲むように用い、やや立ち上がる内容を示しているのである。 (下澤)

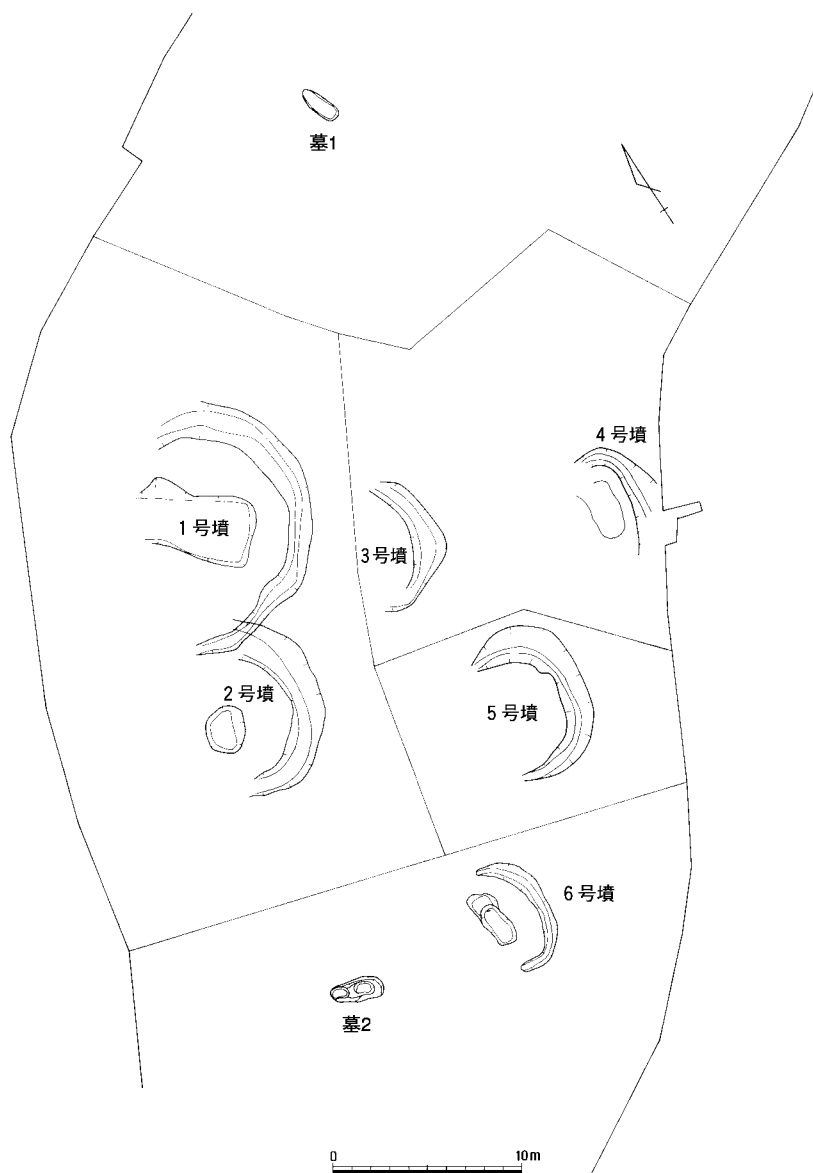


第9図 4号墳石室(1/40)・出土遺物(1/4)

第7章 才地古墳群

第1節 調査区の概要

才地古墳群としたのは、調査区名ではⅢ～Ⅴ区にあたる。第一次調査では、当初才地古墳(1号墳)1基と石棺1基(4号墳)を確認していた。1号墳の調査が終了し、Ⅳ区下層の弥生時代の遺構を検出中に、2号墳～4号墳の周溝を発見した。その後6号墳と土壘2はⅤ区、土壘1はⅢ区で検出された。それぞれの地勢はⅢ区の谷、Ⅳ区に急斜面、そしてⅤ区が緩斜面となっている。(下澤)



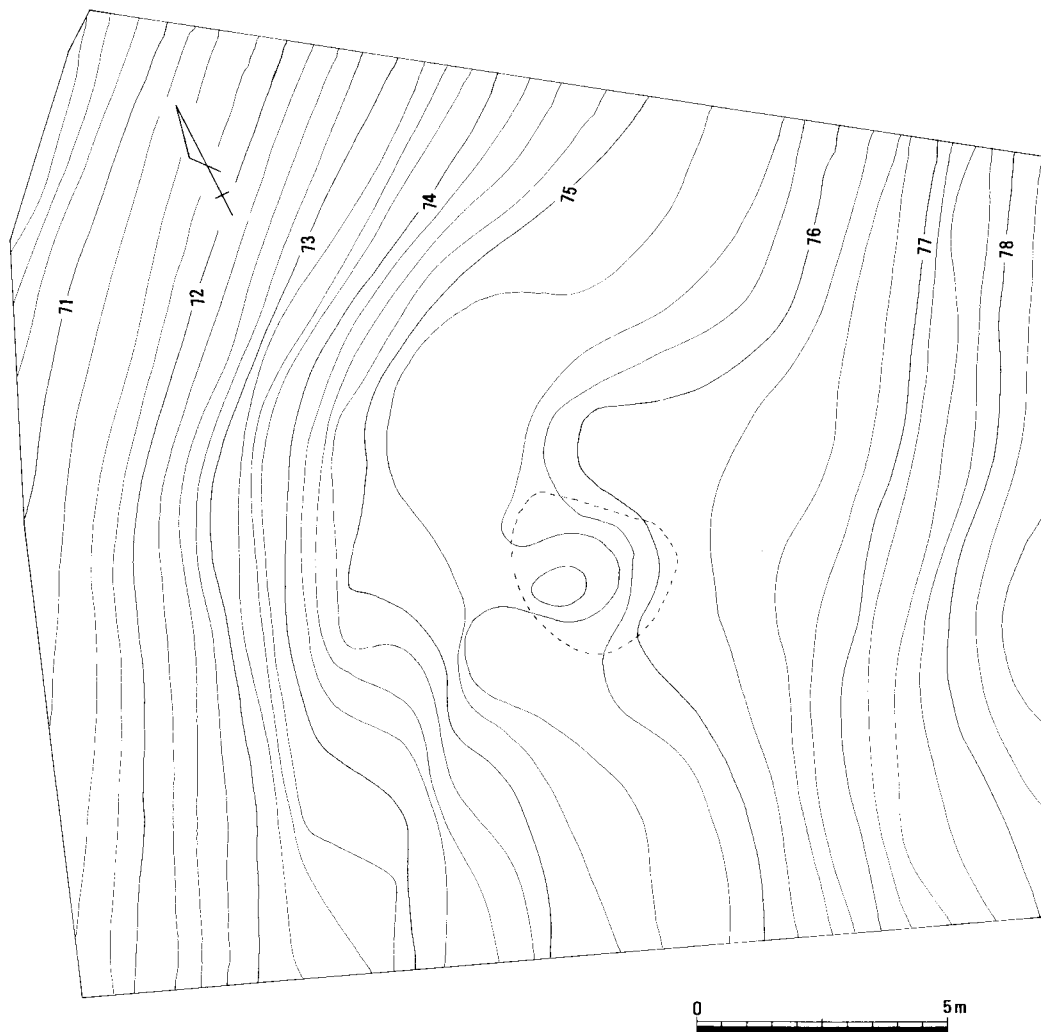
第1図 調査区遺構配置図(1/400)

第2節 調査の概要

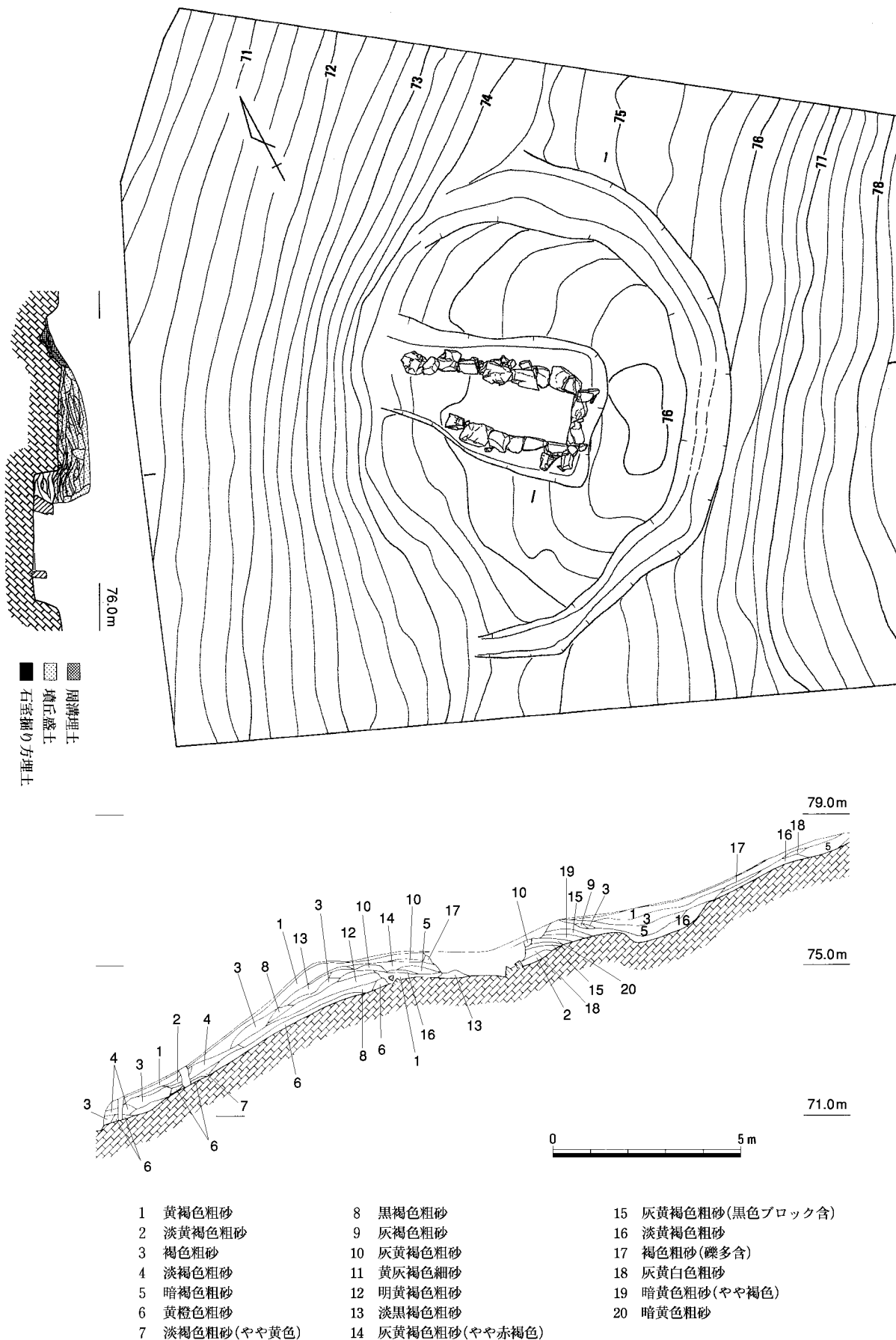
1 古墳

1号墳

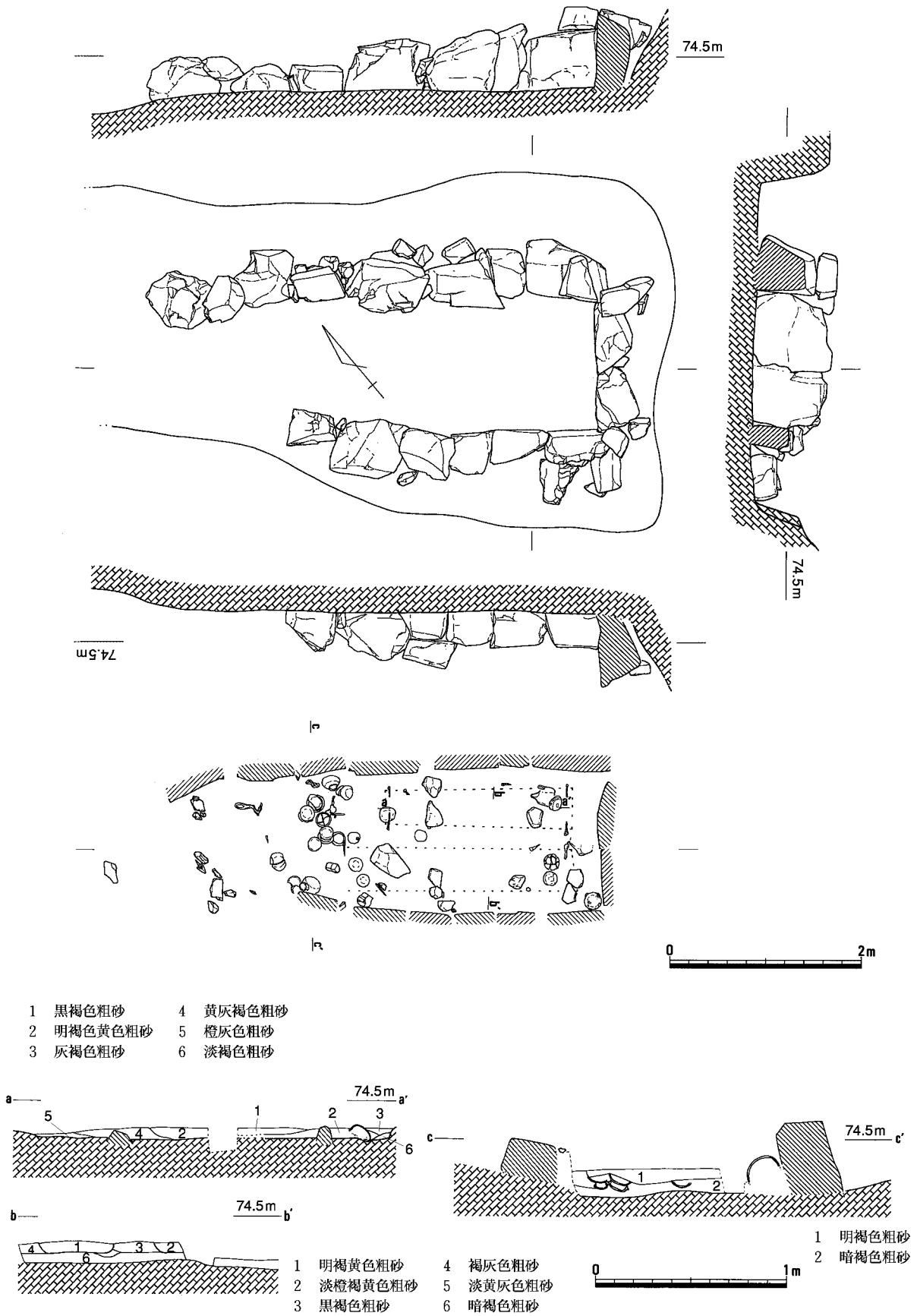
発掘前は、直径5m・高さ80cmの円墳に見えた。周溝の痕跡が墳丘の東西に谷状に残存し、南方斜面上部の周溝が埋まったと考えられる部分は幅2m程度のやや平坦な地形を呈していた。東側土層観察用土手と南北の土層観察用土手で、墳丘の盛り土と周溝の埋積土を確認している。盛り土は石室の石材の後方に厚さ5cm程度づつ版築状に積み重ねていることが見て取れる。しかし、石室床面から80cmより上方は後世に削平されているため、この古墳の墳丘の高さは不明であるが、土層の傾斜や石室の大きさ等から推定して2m程度の高さはあったものであろう。また、周溝の底部で内側の下端までの直径を東西で計測すると、12mである。したがって、この古墳の直径は12mとしても良いように思われる。周溝の外側まで墓域として考慮すれば、13.5mとも考えられる。



第2図 1号墳地形測量図(1/150)



第3図 1号墳墳丘土層断面図(1/150)



第4図 1号墳横穴式石室(1/60・30)

横穴式石室 (第4図)

石室の掘り方は、長軸を南東から北西に向けるやや北西部分が細い長方形を呈する。現存の長さは3m、最大の幅は1.8m、最小の幅は1.25m、現存の最大の深さは奥壁の立石の高さと同じ40cmを計測できる。床面は奥壁から2mまではほぼ水平である。

石室の内法は、最も奥で幅70cm、奥壁から80cmの位置では幅が最大になり75cm、奥壁から1.6mのところでは60cmを測る。玄室と羨道との区別があいまいな胴脹らみの石室である。あえて、区別すると、側壁の根石の大きさに差を認められるところが奥壁から両側壁ともに1.3mであるので、ここを境と考えたい。

奥壁は同じ大きさの2枚の角礫を横並びに据えている。2段目以降は残存していない。高さ40cm、幅40cm、厚さ20cmの茶褐色の流紋岩である。東側壁は玄室に当たる部分には4個、羨道部には3個の合計7個の角礫を横並びに据えている。2段目が2個残っていた。小口積みであろうか。西側壁は玄室に当たる部分には5個、羨道部には1個の合計6個の角礫を横並びに据えている。2段目が1個残っていた。小口積みである。奥壁・側壁ともに掘り方との間の裏込めにはほとんど石を詰めていないで、周囲の花崗岩が風化した真砂土を使っていることが判明した。

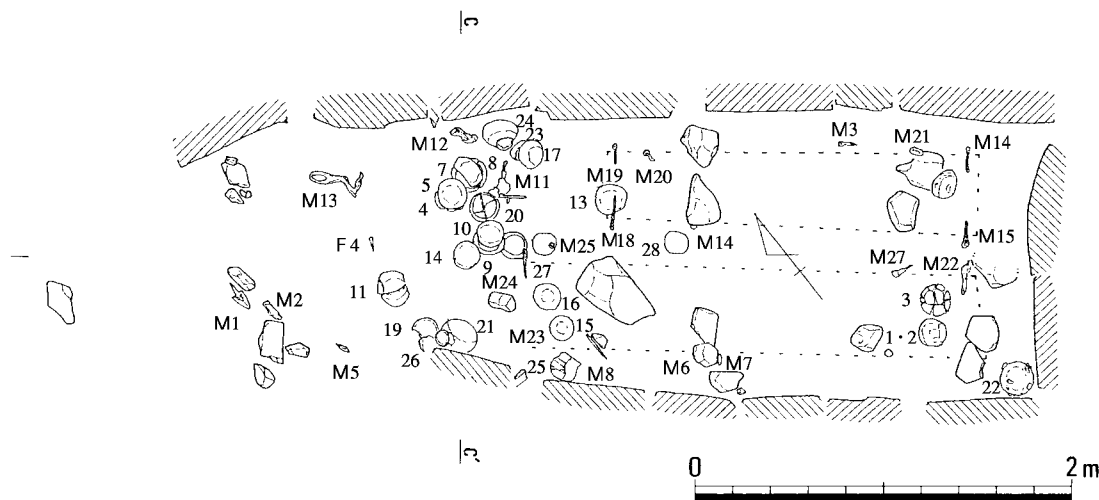
遺物出土状況 (第5図)

遺物の出土状況は、最も集中して土器が出土したのが奥壁から1.3mのところ、すなわち玄室の入り口に当たる云わば玄門の手前に出土している。棺釘は最終埋葬時のまま原位置を留めており、このことから、2棺の埋葬位置が判明した。馬具や鉄鏃は羨道部で出土している。

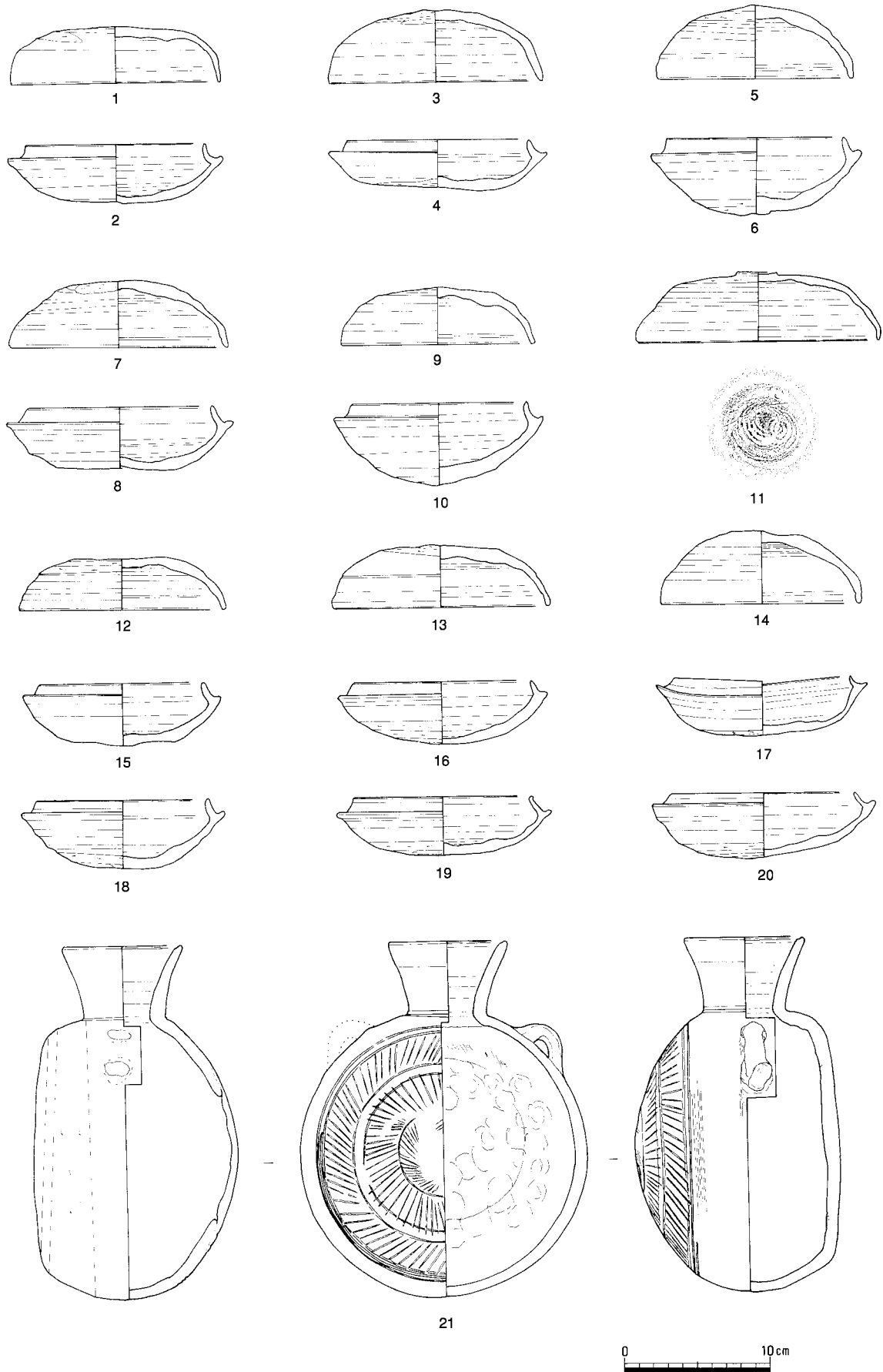
棺釘のM14・M15・M16・M19の4本で囲まれた部分には、人頭大の石が4個と須恵器杯蓋が2個入っている。その位置から考えて、石は棺台であり、須恵器は枕に転用されたものであろう。また、M3の鉄鏃は、棺外にあったものか棺内に副葬されていたものかは定かではない。この木棺の大きさは、長さ1m、幅25~20cmを計測できる。

棺釘のM22・M23・M24の3本で囲まれた部分には、須恵器杯蓋・杯身が4個入っている。その位置から考えて、須恵器は枕に転用されたものであろう。この木棺の大きさは、長さ1.2m、幅25cmを計測できる。

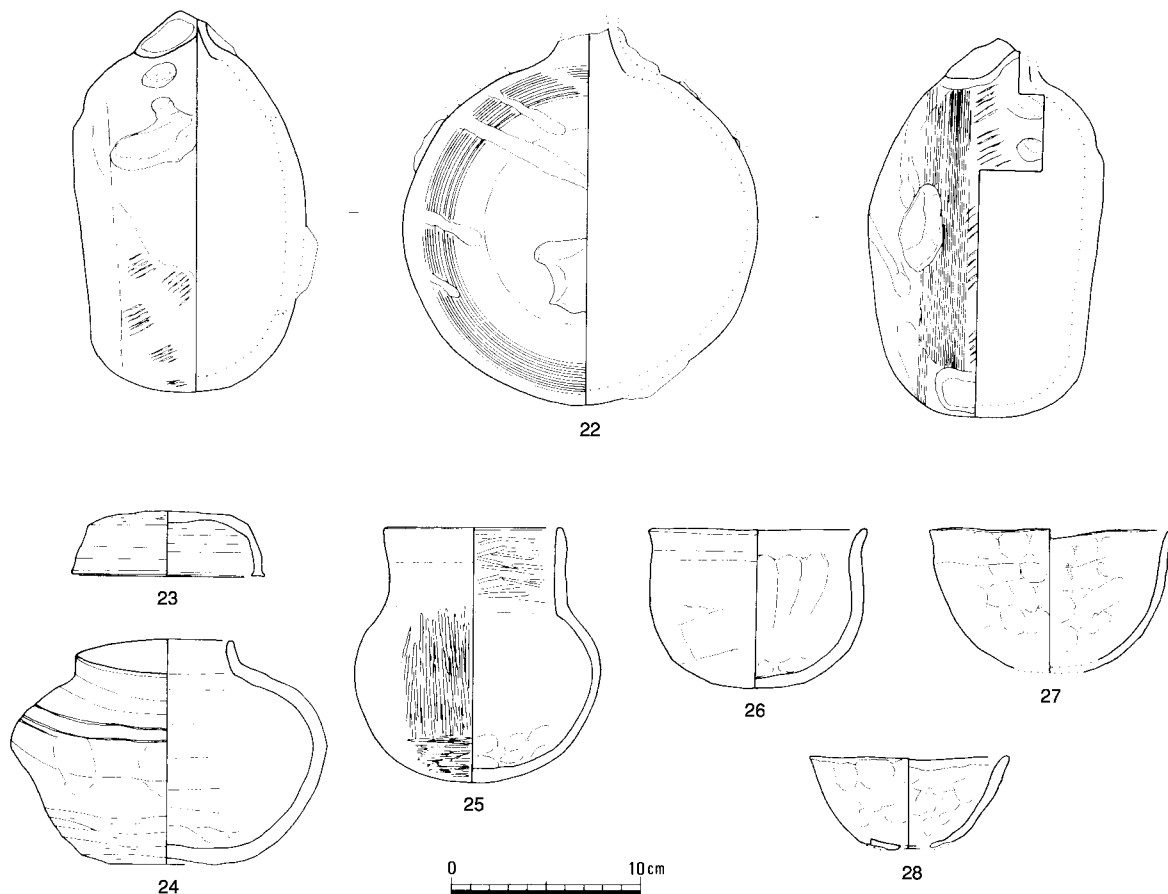
どちらの棺にしても枕が両端にあることから、2体が合葬されていたのであろうか。



第5図 1号墳石室内遺物配置図(1/40)



第6図 1号墳出土遺物1(1/4)



第7図 1号墳出土遺物2(1/4)

出土遺物(第7～12図)の須恵器は1～20の杯と21・22の提瓶、23・24の蓋付壺が出土している。

1は杯蓋で、南棺の枕に転用されていた。8ピースほどに壊れていた。口径14cm、器高4cm、天井部の厚さ8mmを測る。天井部のヘラケズリは2分の1以上施されている。

2は杯身で、南棺の枕に1とセットで転用されていた。完形品である。口径12cm、器高4cm、底部の厚さ5mmを測る。立ち上がりは一度内傾斜してから後垂直に立ち上がる。

5は杯蓋で、玄門付近で出土した。口径13cm、器高5mm、底部の厚さ9mmを測る。天井部と体部の境が不明瞭な浅い凹線になっている。

11の杯蓋は、羨道で出土した。口径16.5cm、器高4.8cm、天井部の厚さ4mmを測る。扁平なつまみ状の突起が削りだされている。内面には青海波が残存している。

21の提瓶は、玄門付近で出土した。片耳が欠損している。口径8cm、器高24.8cm、器壁の厚さ1.2cmを測る。凸面の外面にはヘラ書きで車輪文を描いている。

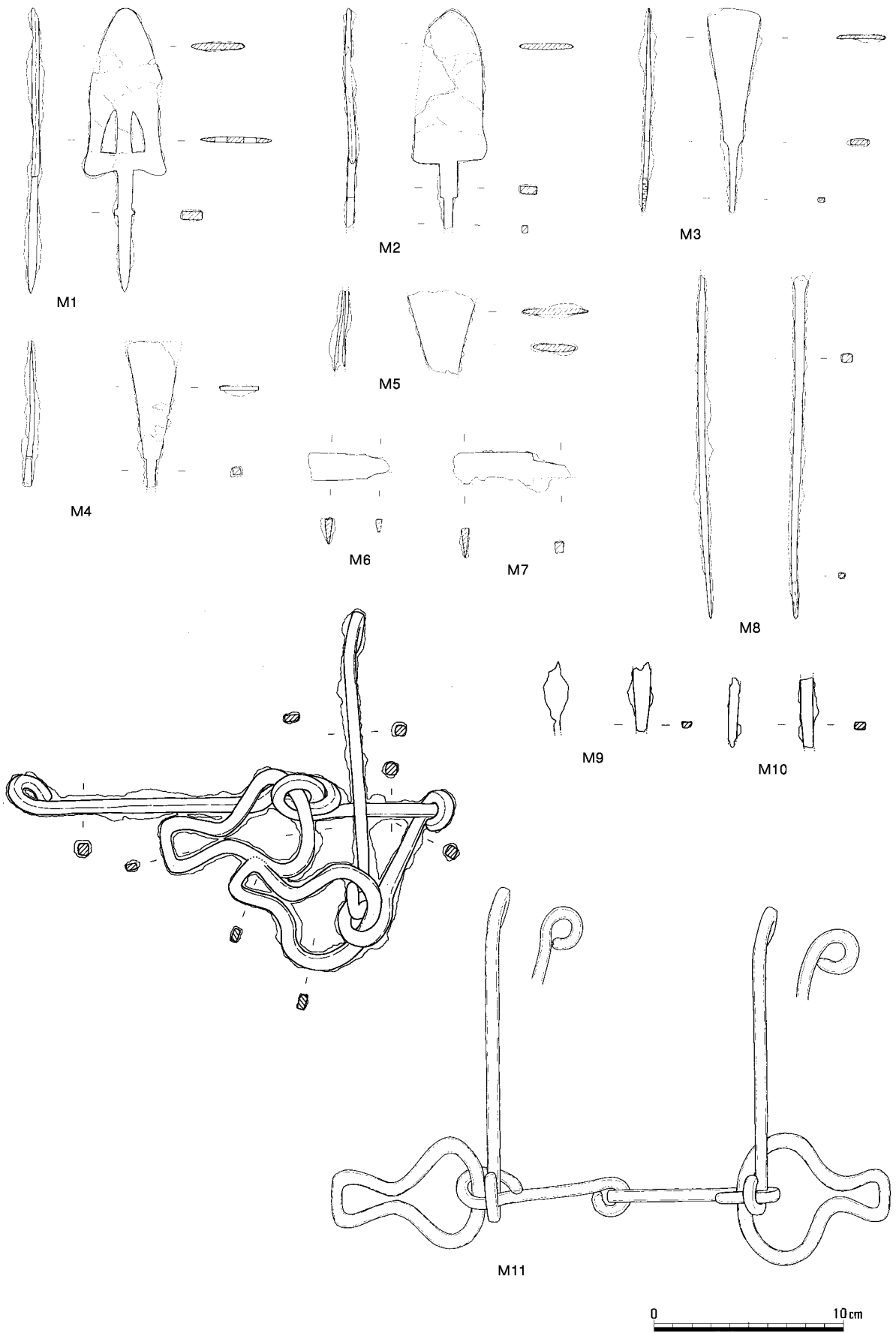
22の提瓶は、奥壁と西側壁とのコーナー部で出土した。口頸部と両耳が欠損している。

土師器は25～28の4点が出土している。

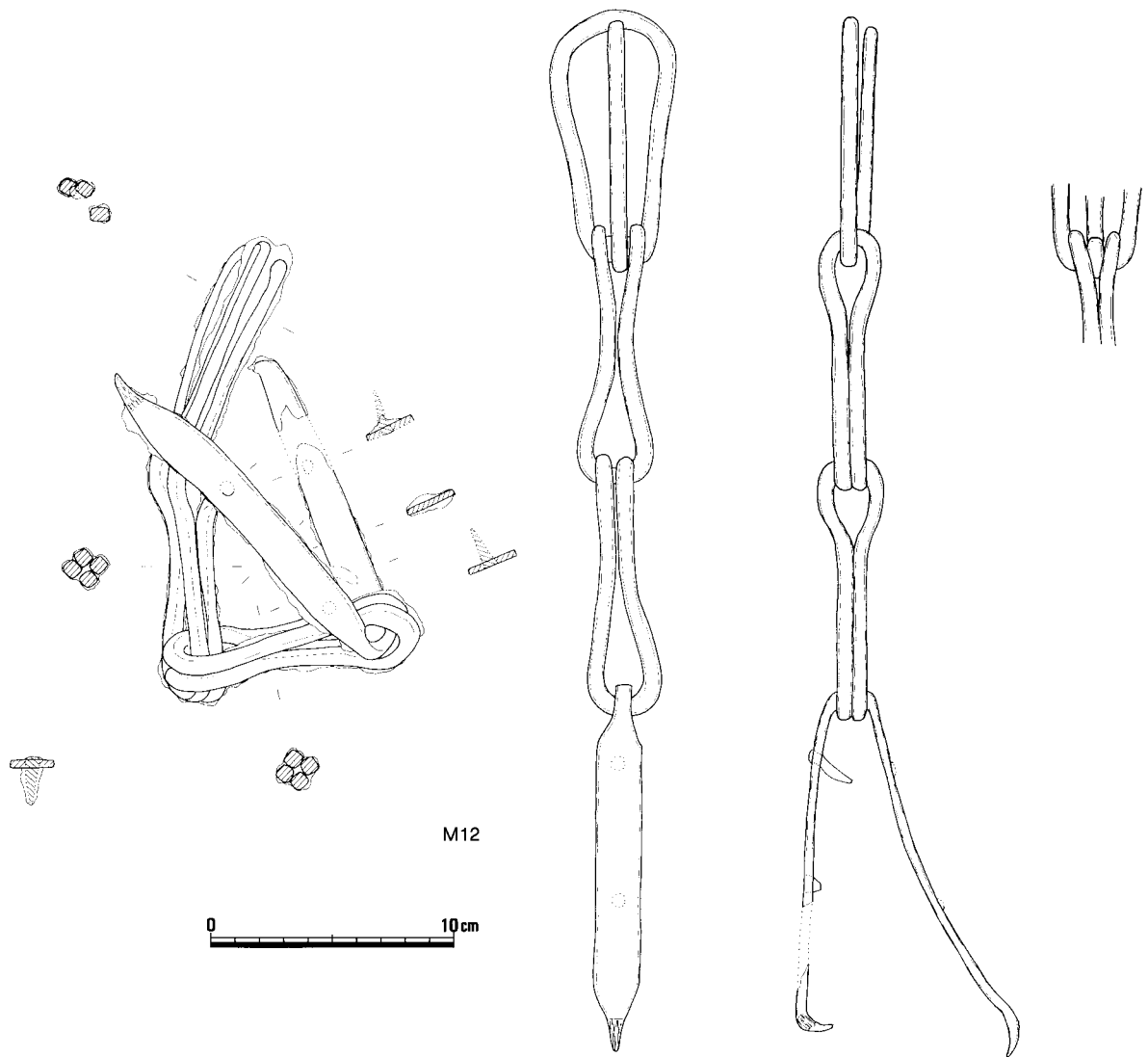
25の壺は、玄室入り口の西側壁に接して出土した小形丸底壺である。口径9cm、器高13.5cm、体部最大径は体部の中央にあり13cmを測る。

26～28は、小形の鉢で、27・28には指頭圧痕が顕著に残っている。28の底部は焼成前から穿孔されている。

鉄器は鉄鏃8点、馬具3点、鉄釘16点、刀子3点、その他不明鉄器8点が出土している。



第8図 1号墳出土遺物3(1/3)



第9図 1号墳出土遺物4(1/3)

M1の鉄鏃は、透根平根式鉄鏃である。鏃身部が9cmで、鏃身部下部には長三角形の透かし孔が開いている。頸部は短く2.5cmで、茎部は4cmで、茎部との境には突起を有する。M2・M30の鉄鏃は、広峰平造三角形式鉄鏃である。M2は、鏃身長が8cm、幅3cm、厚さ2mmある。頸部は短く2cmで、茎部は1.5cmで欠損している。茎部との境には段を有する。M3・M4・M5・M31の鉄鏃は、広根斧箭式鉄鏃である。M3は、鏃身部下部はきわめて細く、段で茎部に移行する。鏃身長が7cm、先端の幅3cm、関部の幅1cm、厚さ1mmである。茎部は3cmで欠損している。M32の鉄鏃は、平根の雁矢式鉄鏃である。

M6・M7・M33は、刀子と考えられる。M6・M7のいずれも関部の段が残存するが、刃部の先端と茎部の大半を欠損している。刃部の幅はM6が7mm、M7が8mmである。

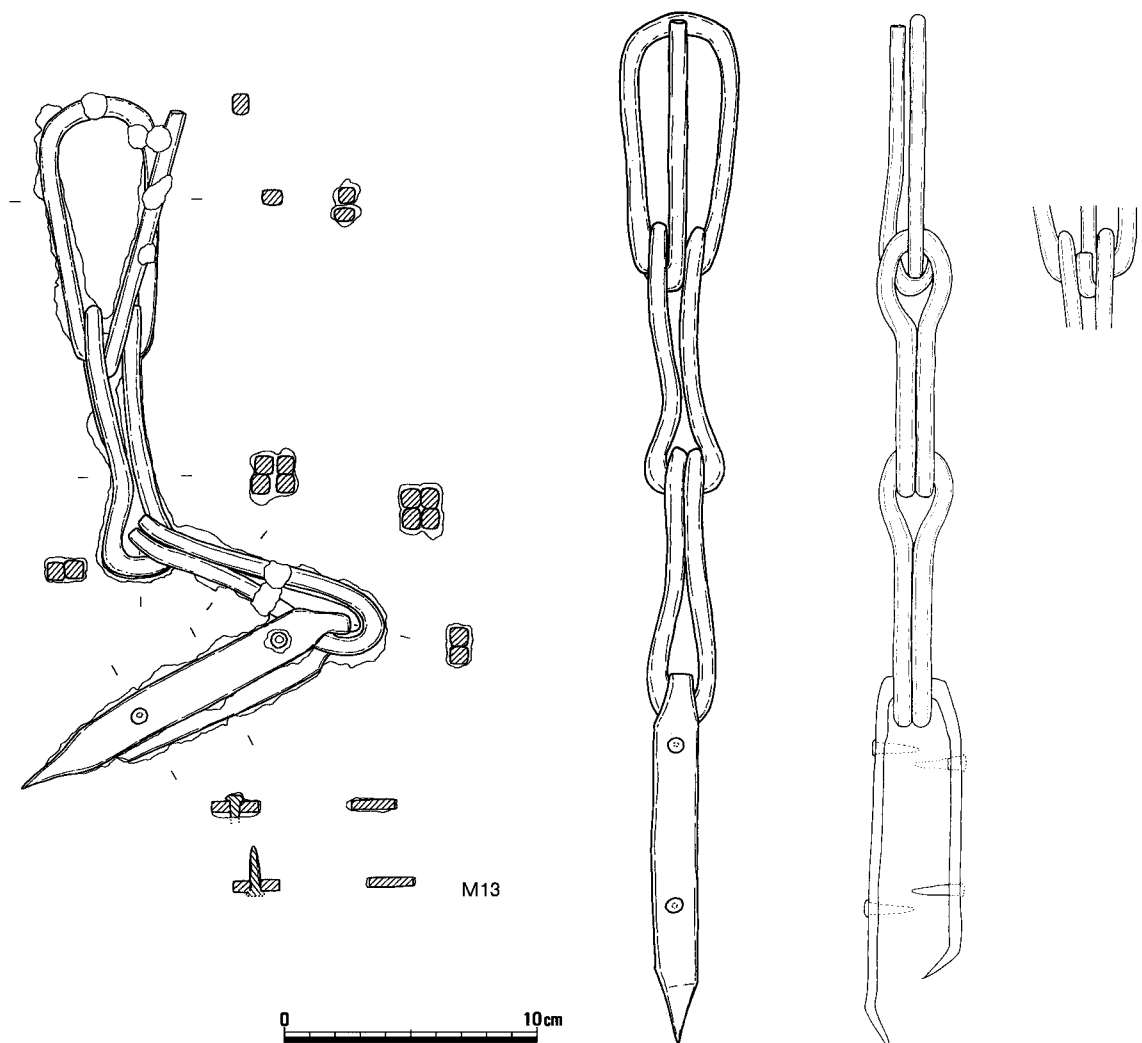
M11～M13は鉄製馬具である。

M11の馬具は、10の須恵器杯身の下層で検出された。左の図のようにL字状鉄塊となって出土した。右の図は図上で展開したものである。環状の鏡板を有する円環轡である。鏡板は断面形が長方形の鉄棒を曲げて瓢形に形成しており、上方に突出した部分を立聞として使用する型式である。左側の鏡板

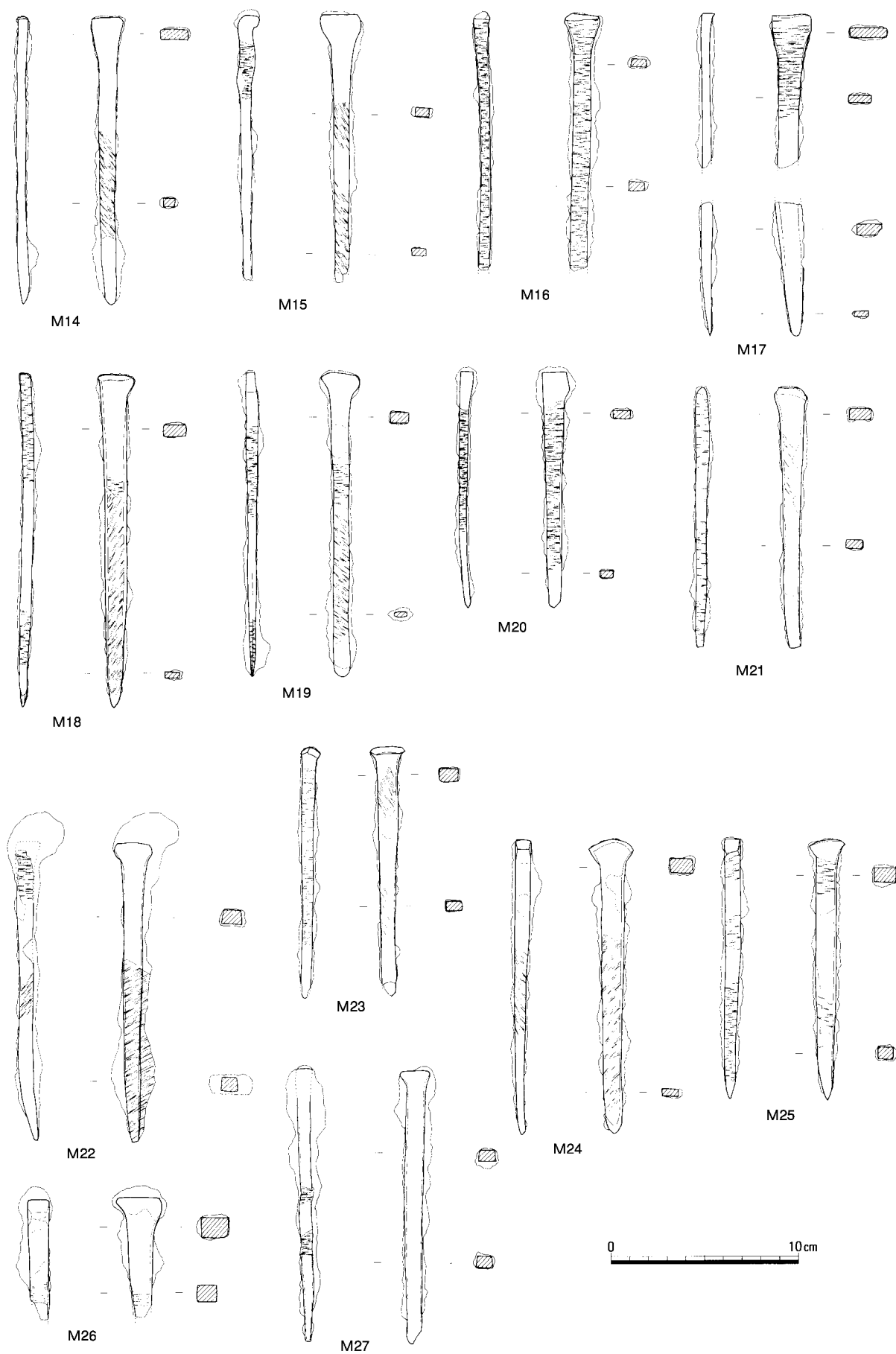
で最大幅5.8cm・高さ8.2cm、右側の鏡板で最大幅7.0cm・高さ8.0cmを測る。銜は鏡板に連結し、引手はその連結部の蕨手状円環に連結している。銜は二連式のものである。引手の端部に存在する環は、鍛造処理を行わない蕨手技法である。このことは、岡山市西山古墳群6号墳と久世町奥田古墳出土の轡との差異である。引手は、断面形が隅丸方形の鉄棒を使用し、左側の引手長17.5cm、右側の引手長16.5cmを測る。左右両側の引手とも、手元を「く」の字形に折り曲げている。

M12の馬具は、24の須恵器壺の北で検出された。左の図のようにL字状鉄塊となって出土している。右の図は図上で展開したものである。三角錐を呈する木製壺鐙に付属する完形品の鐙金具である。鐙を吊るための鉸具と兵庫鎖および壺鐙の縁を装飾する鉄製金具からなっている。鉸具は、兵庫鎖に連結する部分は直線的になっているものの、上端は曲線的で丸くなり、刺金が付属している。兵庫鎖は二連である。鐙本体に付属する金具は、幅1.8cmの帯金を用いて縁を装飾するものである。側縁がわずかに内湾する二等辺三角形を呈し、下端部は尖りかつ内側に直角ないし「く」の字状に折曲げている。帯金には笠釘が左右2本ずつ打たれている。この馬具の全長は43cm、鉸具の長さ10.6cm、兵庫鎖の長さ20cm、鐙本体に付属する金具の全長は30cmを測る。

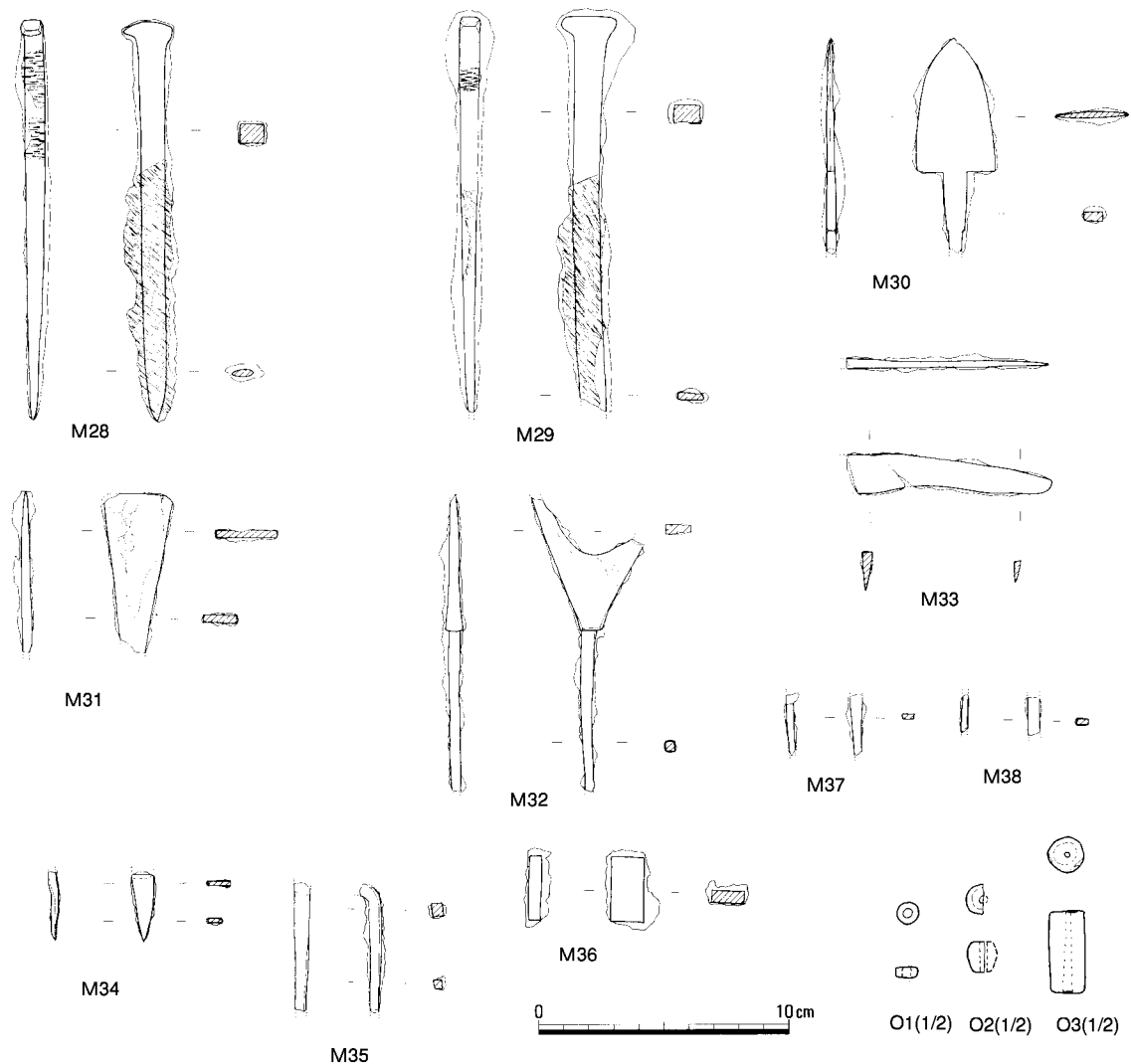
M13の馬具は、左の図のように鉤状の鉄塊となって出土している。右の図は図上で展開したもので



第10図 1号墳出土遺物5(1/3)



第11图 1号墳出土遺物6 (1/3)



第12図 1号墳出土遺物7 (1/3・1/2)

ある。三角錐を呈する木製壺鐙に付属する完形品の鐙金具である。鐙を吊るための鉸具と兵庫鎖および壺鐙の縁を装飾する鉄製金具からなっている。鉸具は、兵庫鎖に連結する部分は直線的になっているものの、上端は曲線的で丸くなり、刺金が付属している。兵庫鎖は二連である。鐙本体に付属する金具は、幅1.8cmの帯金を用いて縁を装飾するものである。側縁がわずかに内湾する二等辺三角形を呈し、下端部は尖りかつ内側に「く」の字状に折曲げている。帯金には笠釘が左右2本ずつ打たれている。この馬具の全長は41cm、鉸具の長さ10.6cm、兵庫鎖の長さ19.8cm、鐙本体に付属する金具の全長は29cmを測る。

M14～M29は鉄釘である。断面が長方形の棒状品である。ほとんど木質が付着しており、木棺に使用した釘であることが明らかである。

玉類は3点出土している。O1は、ガラス小玉で、少し濁った青色の完形品である。O2は、半分欠けたガラス小玉である。O3は、ほぼ完形の明緑色をした碧玉製管玉である。

石器は1点出土している。S1は、流紋岩質溶岩製の砥石である。3面の使用痕跡が認められた。

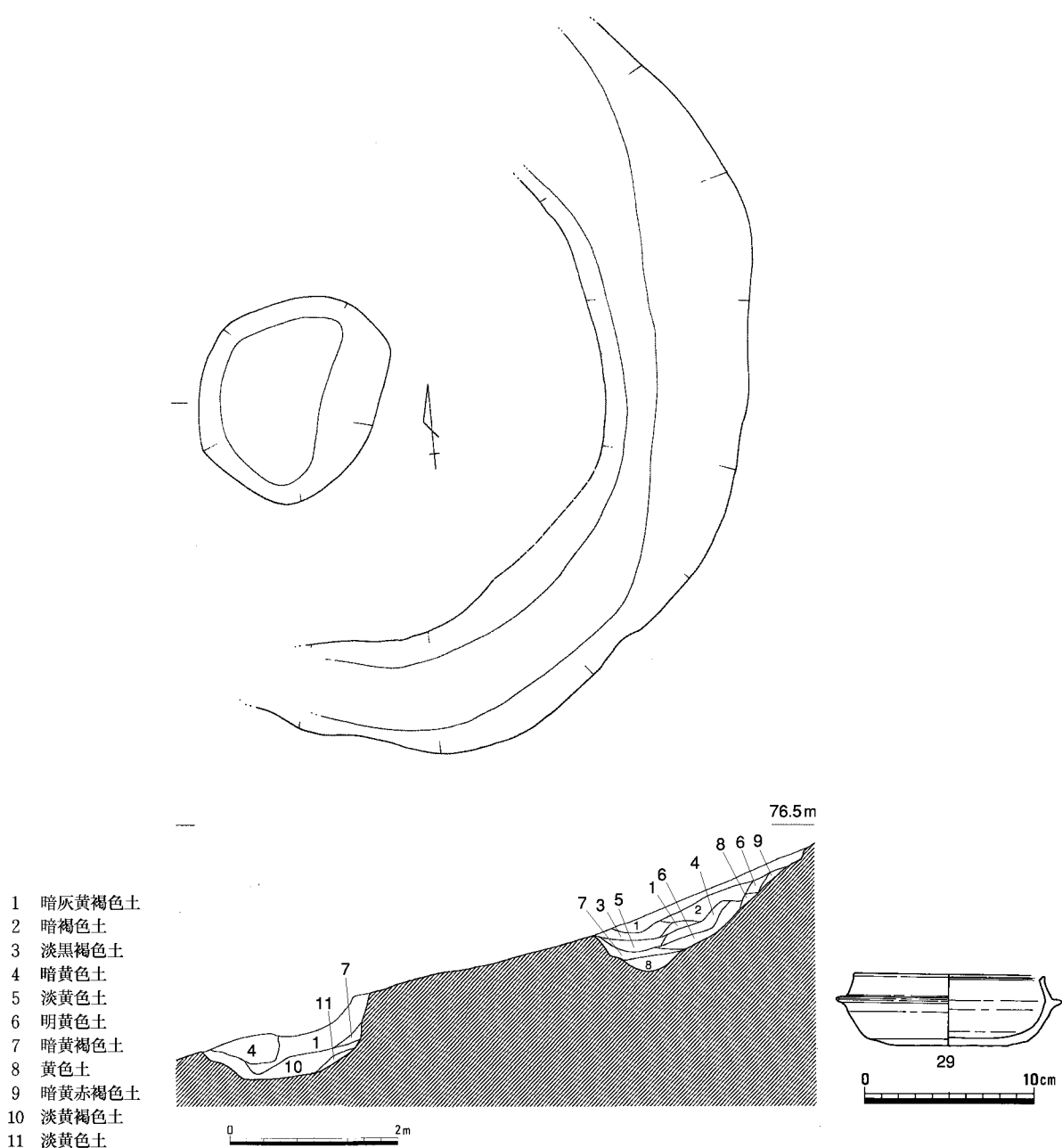
(浅倉)

2号墳 (第13図)

Ⅳ区にあって、1号墳の南に位置する円墳である。斜面上方すなわち東側のみ周溝が残存している。墳丘の盛り土は、完全に削平されて残っていない。わずかに残存する周溝の北の端は、1号墳の周溝により切り取られている。溝の長さは1060cm、幅は最大200cm、深さは最大160cmである。古墳の大きさは、溝の内側の下端で測った直径は、8.0mである。溝の埋土は、10層に分層している。図示している須恵器は、何層から出土したものか不明であるが、溝から出たものではある。

溝に囲まれた中央部分に不整形な土壇が1基検出された。位置から考えて古墳の主体部であろう。規模は、長さ260cm、幅220cm、深さ100cmである。埋土は、6層に分別できるが、遺物はまったく含まない。

29は、溝出土の須恵器で杯身である。口径は推定11.2cm、器高4.2cmを測る。5世紀末に属す。



第13図 2号墳(1/80)・出土遺物(1/40)

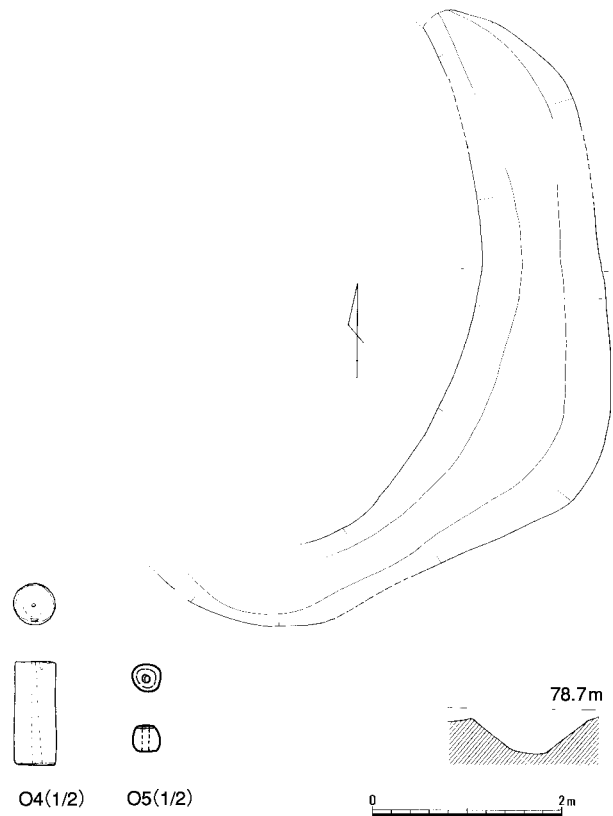
この古墳に伴う遺物は、この須恵器1点であり、1号墳より古いことから2号墳の造られた時期は、5世紀末以降6世紀後半までと考えられる。

3号墳 (第14図)

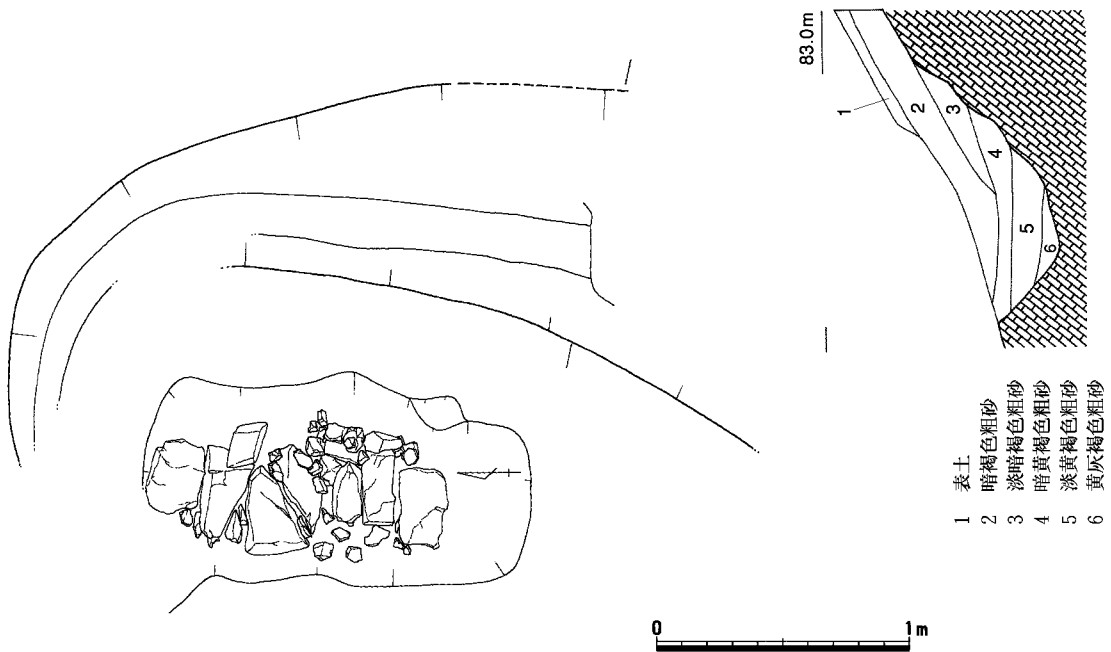
IV区にあり、1号墳の東斜面上方に位置する円墳である。主体部や盛り土は、完全に削平され、周溝の一部が弧の字状に残存しているにすぎない。溝の長さは8.0m、幅は最大180cm、深さは最大40cmである。溝の内側の下端で測った直径は、680cmである。遺物はガラス玉が1点と石製品が1点溝中央部東斜面から出土している。

O4は、暗緑色の碧玉製管玉である。完形であり、最大長28.2mm、最大幅11.3mm、重さ1.6gである。O5は、少し濁った青色のガラス製小玉である。完形であり、最大径0.75mm、最大厚0.8mm、重さ0.53gである。この古墳の時期は、古墳時代中期から後期

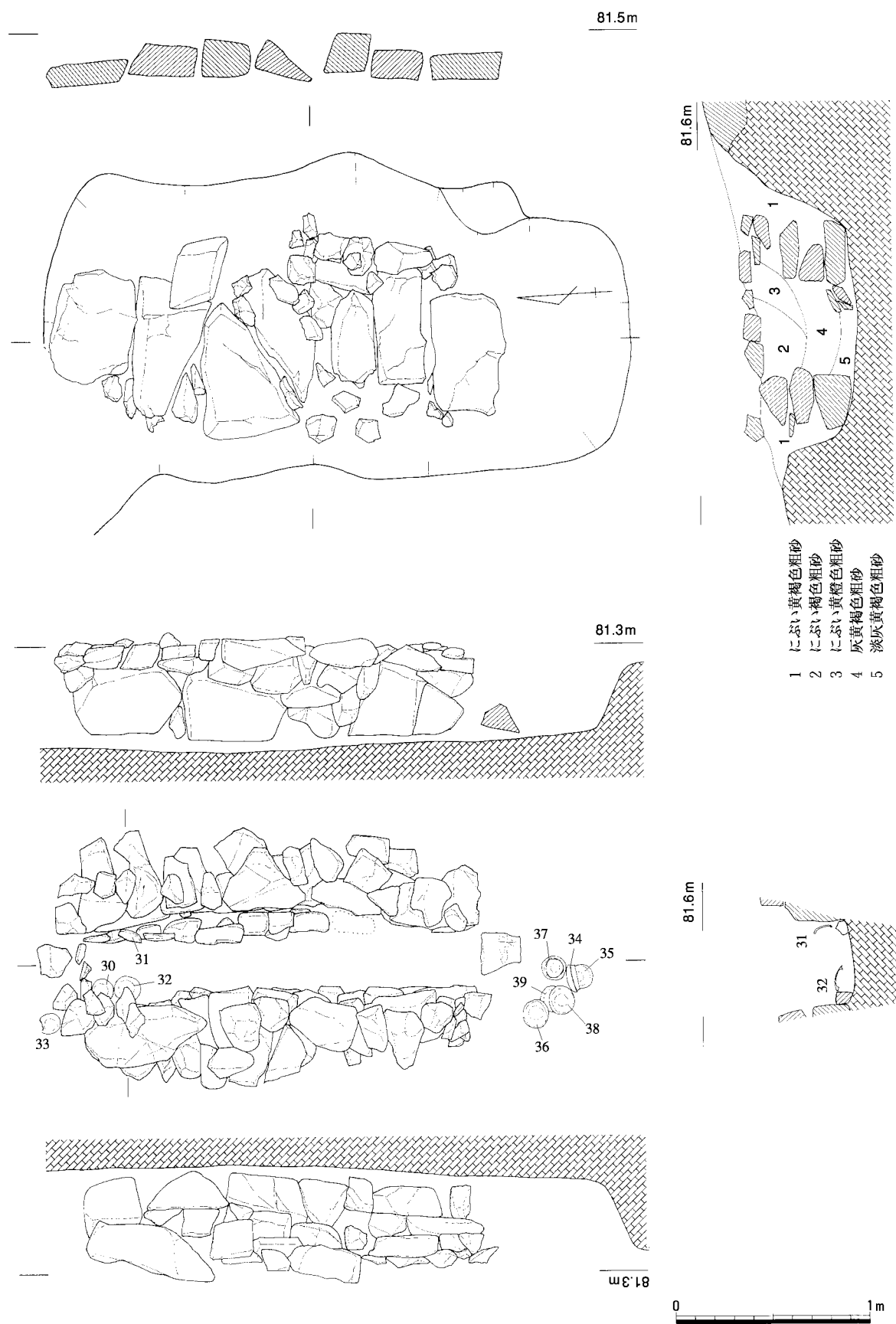
(浅倉)



第14図 3号墳(1/80)・出土遺物(1/2)



第15図 4号墳(1/30)



第16図 4号墳石室1 (1/30)

4号墳

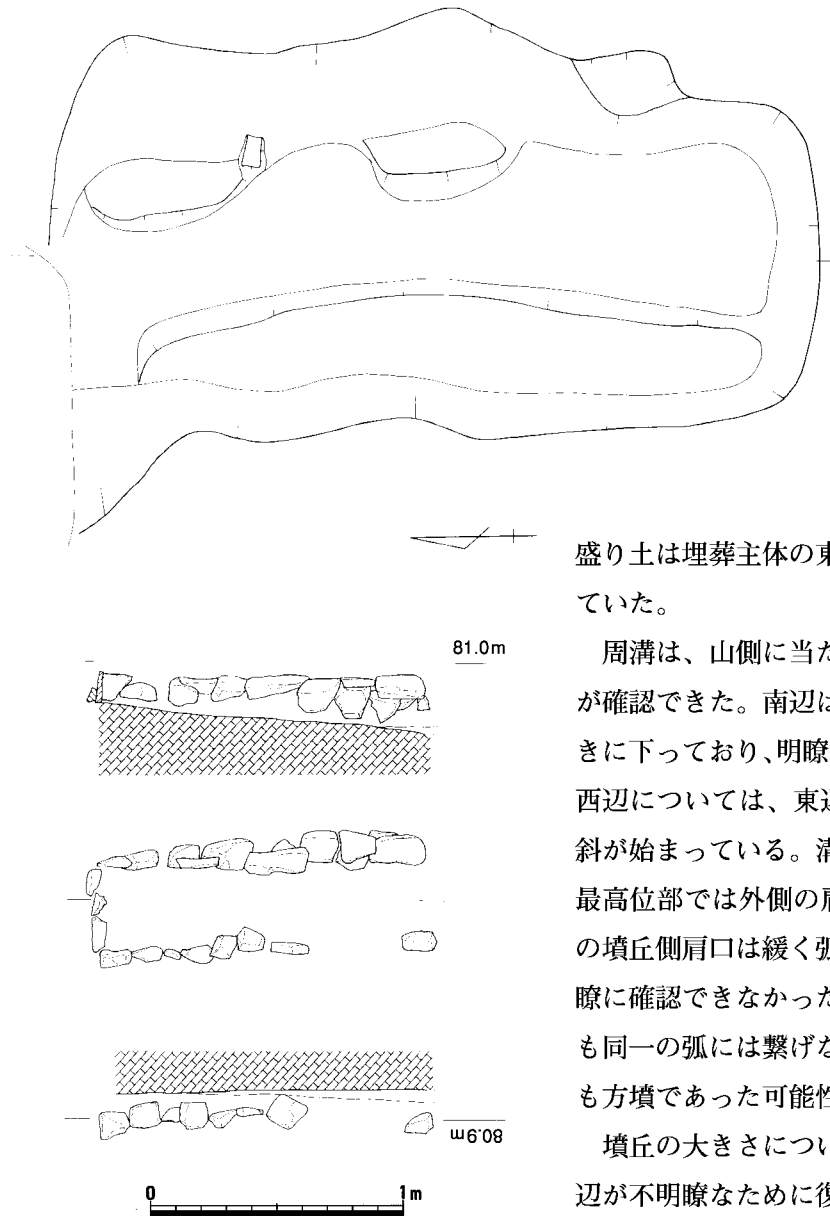
4号墳は古墳群中の最高所に位置し、石室検出面で海拔81.4m、周溝東辺の山側肩で82.5mを測る。残存部分での3号墳との平面距離は、約8mである。

遺構として検出されたのは、周溝の山側の部分と埋葬主体1基であり、

盛り土は埋葬主体の東側を除いて、ほとんど流出していた。

周溝は、山側に当たる東辺約5mと、北辺2m程度が確認できた。南辺は古墳の位置よりも斜面が南向きに下っており、明瞭な溝として検出できていない。西辺については、東辺の溝底から約5mで斜面の傾斜が始まっている。溝底の幅は40cm程度で、東辺の最高位部では外側の肩口から深さ1mを測る。東辺の墳丘側肩口は緩く弧を描くものの直線に近く、明瞭に確認できなかった北辺墳丘側の肩口を復元しても同一の弧には繋げないことから、墳丘は円墳よりも方墳であった可能性が高い。

墳丘の大きさについては、南辺と谷側に当たる西辺が不明瞭なために復元しづらいが、現状で埋葬主体を検出した平坦面は約5×3mの規模を有しており、前述のように東側の周溝から西へ5mで斜面と



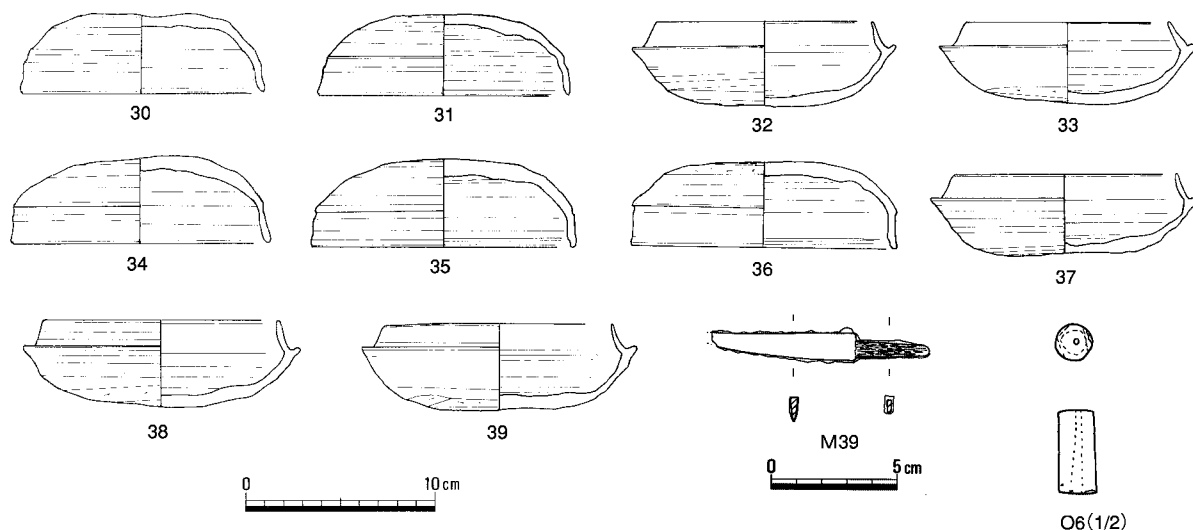
第17図 4号墳石室2 (1/30)

なることから、5×5m以上の規模を想定できる。

埋葬主体は、この範囲の北寄りで見出された。弥生時代の方形土壇と重複した北西隅について不明確だが、掘り方の平面形は不整長方形を呈し、南北長310cm、東西長125～170cm、深さは東辺で70cmを測って、基盤層まで掘り込まれている。280×100cmの底面は海拔高80.8mで、石室内部に当たる中央部の幅40cmほどが浅く一段窪んでいる。

この掘り方の北詰に竪穴式石室が造られている。

側壁の長さは約2mで、東西の側壁で石積みはやや異なっている。西壁は、厚さ20cm未満、長さ40cm未満程度の石を3段に小口積みしている南寄りの3分の2に対して、北端では不整形でやや大振りの石材が用いられている。東壁では第16図に示した位置では西壁と同様の小口積みになっているが、その両側では幅50cm以上、高さ40cm以上の石を立て、その上部および隙間に小振りの石を小口積みして高さを揃えて側壁としている。掘り方と側壁石材の間は10cm以上空いているが、裏込めの石はほと



第18図 4号墳出土遺物(1/4・1/3・1/2)

んど見られない。これら長辺の側壁はいずれも内面を直線に仕上げられておらず、東壁中央部が両端よりも15cmほど外側へ膨らみ、西壁が内側へ10cmほど膨らんで、中央部が軸線より東へ湾曲した形になっている。両小口については、それぞれ20cm大の石1個ずつが床面に置かれているが、壁ないし閉塞の形状をとっていない。蓋石は幅25～50cm、長さ50～80cm、厚さ10～20cmの板石7枚を並べ、隙間を10～20cm大の石で埋めている。前述のように側壁の上面には高さ調整のための石が置かれて、石室の天井に相当する面は、ほぼ高さを揃えられている。これらの構造によって造られる石室内の空間は、幅50cm、長さ220cm、高さ50cm程の規模になる。

この石室内の北詰に、南が開く「コ」の字状に石列が見られる。使われている石材は、1辺10～20cm程度の板石や角礫で、基本的には立てて並べられている。東列は1.3mにわたって直線的に置かれ、上面の高さも揃えられている。図化できなかつたが、掘り下げ時には南へもう1個続いていた。湾曲する石室東壁に沿って直線的に置かれているため、中央部ではやや幅のある石が用いられて側壁との隙間を造らず、石列内面が直線を呈する。北側の小口には3個の板石が立てられ、30cmの長さになる。西の列は、中央付近が内側へ膨らむ側壁の制約を受けて、南へ80cm程の辺りで一端途切れ、40cmほどの間隔を置いてもう1個が置かれている。東列ほど上面を揃えていない。南側には石が見られないが、石室は荒らされておらず、もともと置かれなかったものと考えられる。この石列の南端から石室南小口までの距離は50cmで、北端は石室北小口に接する。第16図第6層がこの石列より下層に堆積し、石室内から出土する遺物が高さを揃えられた石列上面より高い位置に在ることなどから、この石列は棺台と考えられる。石列上面から蓋石内面までの高さは30cm程度である。したがって、この棺台に置かれた棺の大きさは、長さ155cm、幅50cm、高さ30cmと想定できる。

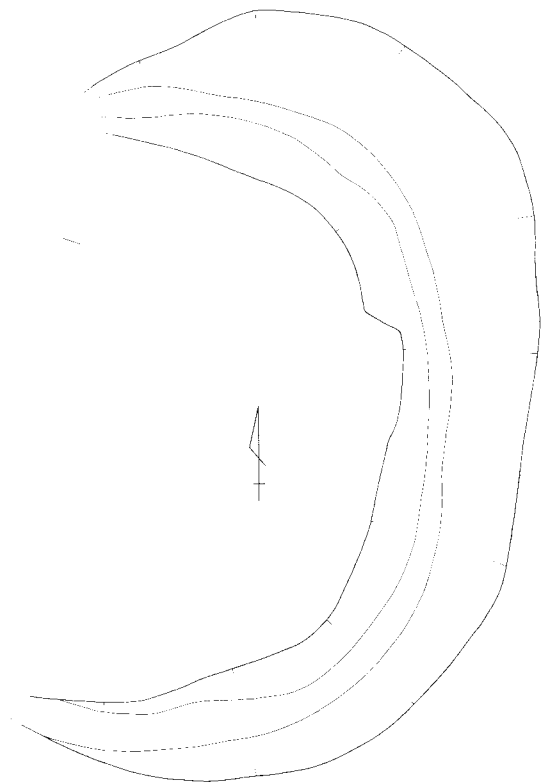
埋葬主体からは、第18図に示す須恵器の杯身・杯蓋が5組分と、刀子1点、管玉1点が出土している。須恵器のうち、30～32は石室北端で、34～39は石室外の掘り方南部で出土している。杯身33は石室北小口の外側で、西側壁の北端根元に下向きで出土している。杯蓋30、杯身32は棺台西列の北端に並んで下向きに出土し、杯蓋31は棺台東列上で、内面を内側に向けて立った状態で出土している。30・32については、本来31と同様に石室西壁際の棺台上に立てられていた可能性があり、33についても小口の側壁が無いことから、同様に石室内に立てられていたものが転落した可能性も残る。

一方、杯身37～39と杯蓋34～36は掘り方南端の石室が造られなかった部分から出土した。この部分は40×100cmほどの広さがあり、その中でも西寄りに位置する。杯身37は正位に置かれているが、38・39については転位しており、杯蓋はいずれも上向きである。遺物が出土しなかった掘り方南端の東寄りの空間は、意図的に空けられていたか、何らかの有機質が置かれていたものと考えられる。刀子および管玉は棺台列石の範囲内で、第6層上面からの出土であり、棺内に入れられたと考えられる。刀子M39は、刃部先端を欠損しているが、長さ90mm、刃渡り58mmで、柄には木質が残る。管玉O6は碧玉製で、長さ22mm、径10mmで、一方からの穿孔である。

出土した須恵器のうち、杯蓋36は明瞭な稜を残すが、30では稜が不明瞭となっている。また、杯身においては、32の立ち上がりが内傾気味になっているなど、やや時期差を感じさせるが、大きくは6世紀中頃の所産とみなすことができ、後述の6号墳に続く造営と考えられる。 (光永)

5号墳

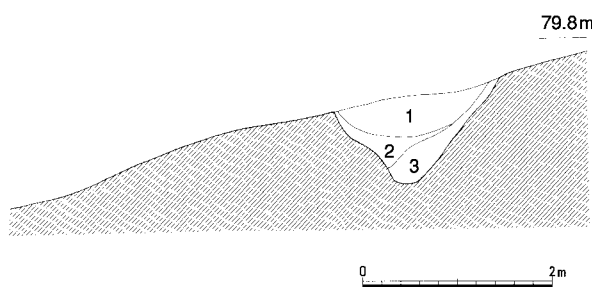
Ⅳ区にあり、3号墳の南に位置する円墳である。主体部や盛り土はなく、周溝のほぼ半分が弧の字状に残存している。溝の長さは12.0m、幅は最大2.0m、深さは最大1.2mで、溝の内側の下端で測った直径は、6.0mになる。溝の断面はV字状で、埋土は3層に分層できる。遺物は鉄器が1点出土している。この古墳の下層には周溝の中側に納まるように弥生中期末の焼失住居が検出できた。古墳を築造する時には、比較的平坦な地形が残っていたのであろう。主体部については周辺古墳からの推定であるが、小形の箱式石棺か木棺であろう。



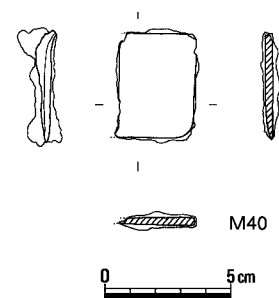
溝の長さは12.0m、幅は最大2.0m、深さは最大1.2mで、溝の内側の下端で測った直径は、6.0mになる。溝の断面はV字状で、埋土は3層に分層できる。遺物は鉄器が1点出土している。この古墳の下層には周溝の中側に納まるように弥生中期末の焼失住居が検出できた。古墳を築造する時には、比較的平坦な地形が残っていたのであろう。主体部については周辺古墳からの推定であるが、小形の箱式石棺か木棺であろう。

M40の鉄器は、板状鉄斧と考えられる。残存長8.4cm、最大幅1.1cm、最大厚3.0cm、重さ25.75gである。

この古墳の時期は、板状鉄斧から考慮して、古墳中期以前としたい。 (浅倉)



- 1 暗黄黑色土
- 2 淡黄黑色土
- 3 暗黄灰色土



第19図 5号墳(1/80)・出土遺物(1/3)

6号墳

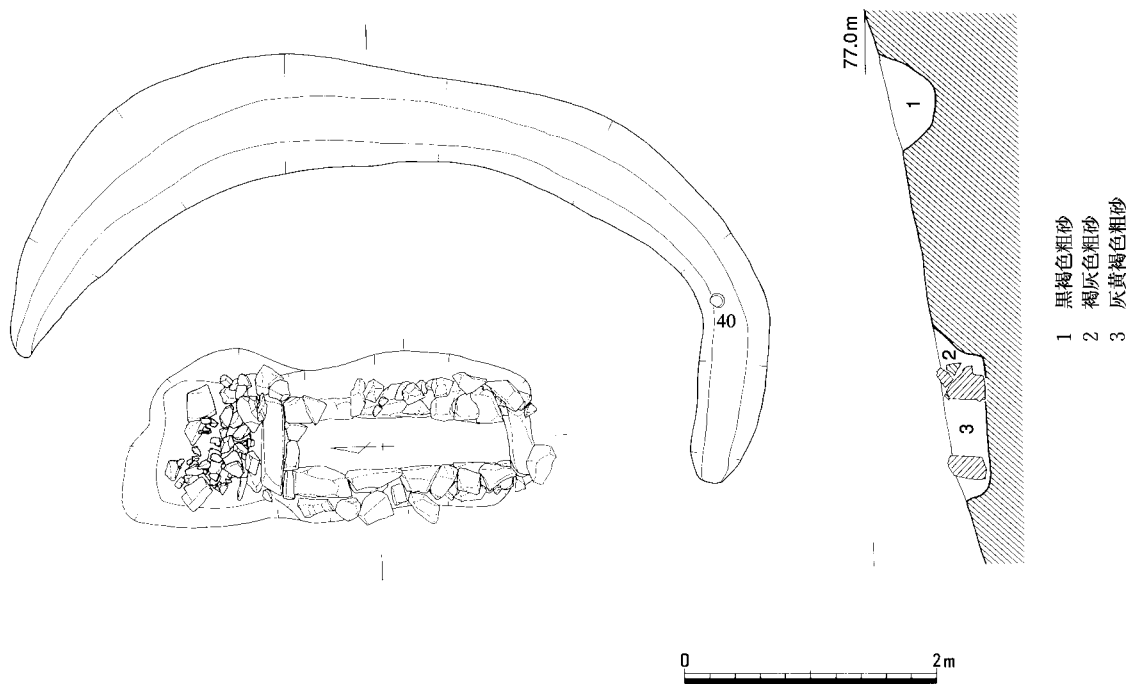
古墳群の南端に位置し、5号墳との距離は約7mを測る。周溝東辺の山側肩は海拔77mにあり、5号墳との比高は2m足らずである。1～5号墳が西へ張り出す尾根状の部分に造られているのに対して、6号墳の位置は谷部に当たる。検出されたのは、斜面の山側に掘られた周溝と埋葬主体1基で、盛り土は流出して認められなかった。

周溝は山側に弧を描いて検出された。最大上幅1m、下幅30cm前後で、溝底の海拔高は76.5m前後である。南北両端の距離は、溝底で約5.5m、両端を結ぶ線から東辺までの距離が約2mである。南東の屈曲部分は、北東のそれに比べて角をもつように見えるが、周溝から想定される墳丘の規模および形態は、径5m程度の円墳となる。

埋葬主体は、周溝両端を結ぶ線にかかって、長軸を南北に置いて検出された。掘り方は、3.2×1.4mの不整長方形を呈し、検出面からの深さ40cm程度の底面はほぼ平坦である。

掘り方の南端に接して、長さ2.15m、幅0.8mの石棺が組まれている。検出時には蓋石はすべて取り除かれており、棺内には灰黄褐色粗砂が堆積していた。南北両小口には、長さ70～80cm、厚さ15～20cmの板石が立てられ、両小口に挟まれる形で両側壁が立てられている。東側壁が比較的大きい石で1段に組まれているのに対して、西側壁は2段になっている部分もある。東側壁上面には、蓋石を置くための高さ調整用の石が積まれているが、西側壁には残っていない。北小口の内側に接して、2枚の板石が枕石として置かれている。断面形態においてV字状に置かれたその下端は、掘り方底面より数cm高く、これを棺の底面高とみなすと、棺としての内法規模は、長さ175cm、幅40cm、高さ40cm程度になる。棺内には遺物は残っていない。

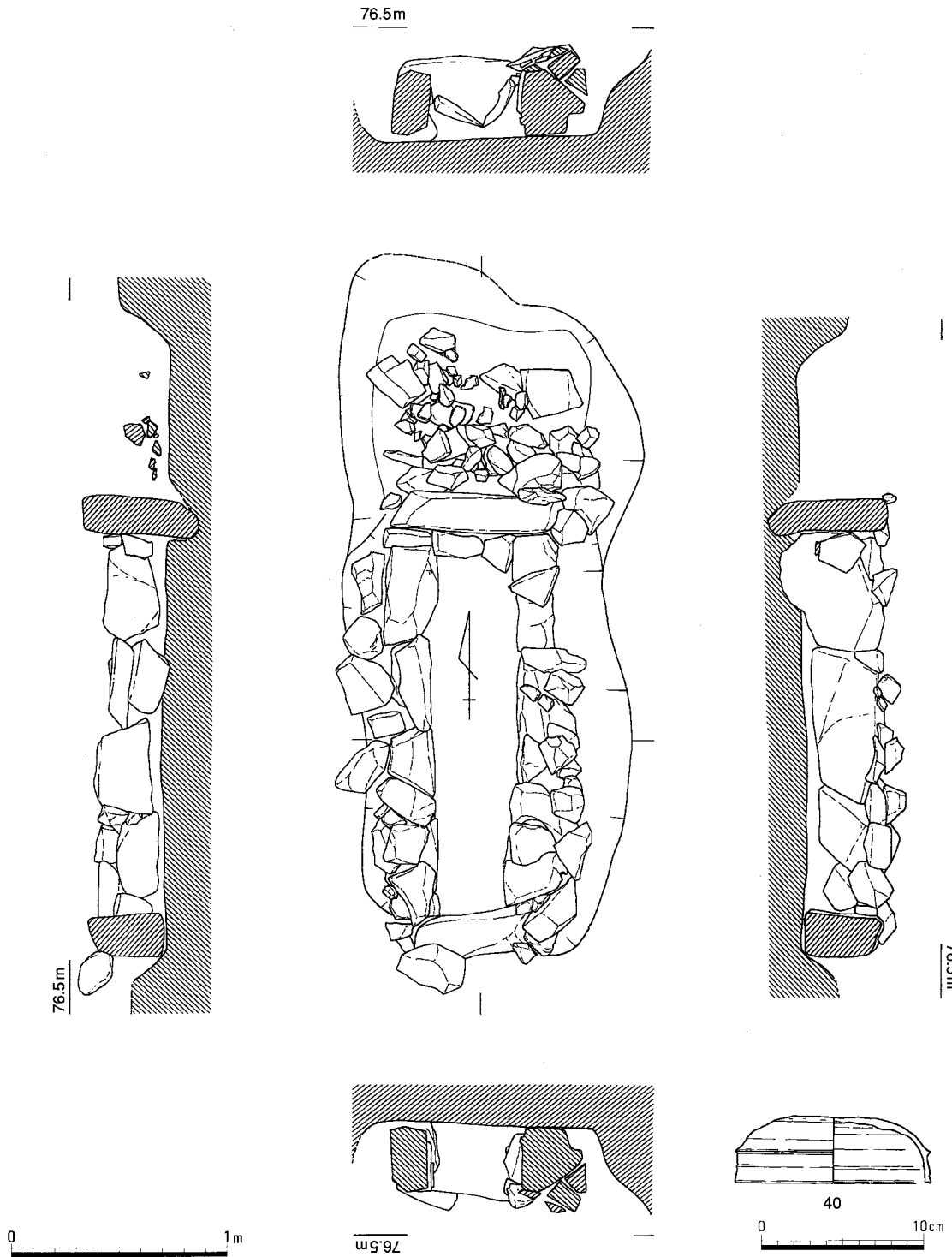
掘り方内の石棺北側部分は、底面で80×100cm程の空間となるが、ここには拳大から20cm大の石が乱雑に置かれていた。掘り方側壁と石棺の両側壁との間には10cm以上の隙間があるが、裏込めの石は無く、石棺北側の石にも石棺北小口の裏込め的な意識は認められない。4号墳の場合は、同様の空間



第20図 6号墳(1/60)

に杯身・杯蓋が3組分置かれていたが、6号墳では遺物の出土は無かった。もっとも、蓋石が無くなっている6号墳においては、この部分も原況を留めていない可能性はある。

周溝の南東屈曲部付近から、須恵器の杯蓋40が1点出土している。溝底からはやや浮いているものの、6号墳に伴うものと考えられる。明瞭な稜と端部の形状から6世紀の前半に比定できる。したがって、6号墳は4号墳および土壙墓2に先行して造営されたものと考えられる。 (光永)



第21図 6号墳石室(1/30)・出土遺物(1/4)

2 土墳墓

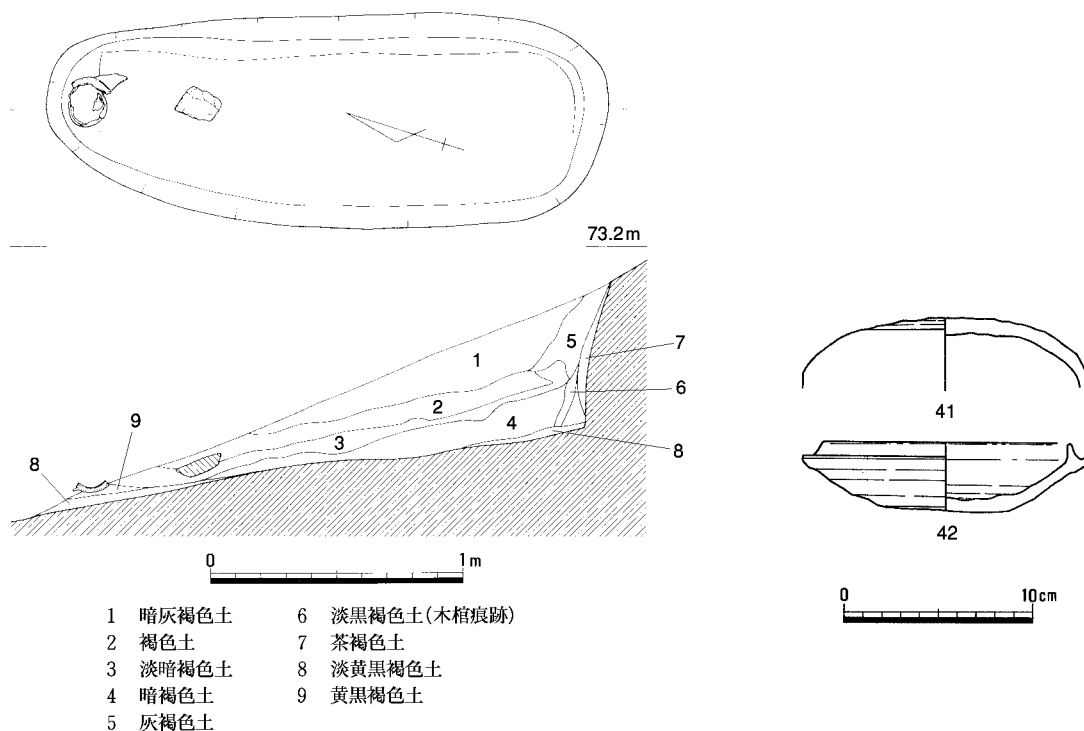
土墳墓1 (第22図)

才地1号墳から22mほど離れた北東側に位置する。土墳墓は、丘陵斜面に平行する住居60を直行する形で重複している。規模は南北で223cm、東西の上方で83cm下方で50cmを測り、深さは上方で58cmで下方はわずかの立ち上がりを認めたに過ぎず、その立ち上がりも木棺検出のおよび清掃の過程で消失している。平面形態は長楕円形を呈する。この平面形態は、傾斜のきつい丘陵斜面に直行して設けられているため後世の削平あるいは土砂の流出により下方よりが浅くなり、検出された形態になったと判断される。

平面での確認段階においては、木棺痕跡を認めることはできなかったが、土層断面の観察から第22図の第6層の淡黒褐色土が垂直な状況で認められた。このことから、土層断面に認められた淡黒褐色は、木棺の小口部分であると考えられた。この土層断面の観察から木棺痕跡は、土壌掘り方の中ほどで確認できるものと判断された。このことから、土壌掘り方の中ほどから木棺痕跡を検出するため徐々に掘り下げた結果、土壌底面から5cmほど上に見られる淡黒褐色土の木棺痕跡を確認したのである。なお、第22図で示したように木棺痕跡は、西側部分で検出されなかった。これは、土層観察のために土壌底面まで掘り下げた結果である。

土壌下方には、15×12cmほどの角礫が木棺上に認められた。この角礫は、土層観察から丘陵斜面から流入したのではなく、木棺上の埋土が角礫とともに落ち込む状況を観察できたことから土壌に伴うものである。

出土遺物は、土壌下方に41と42の須恵器が検出された。この須恵器は、木棺の外側に接して杯身の上に杯蓋を上向きに重ねた状態で検出された。(下澤)

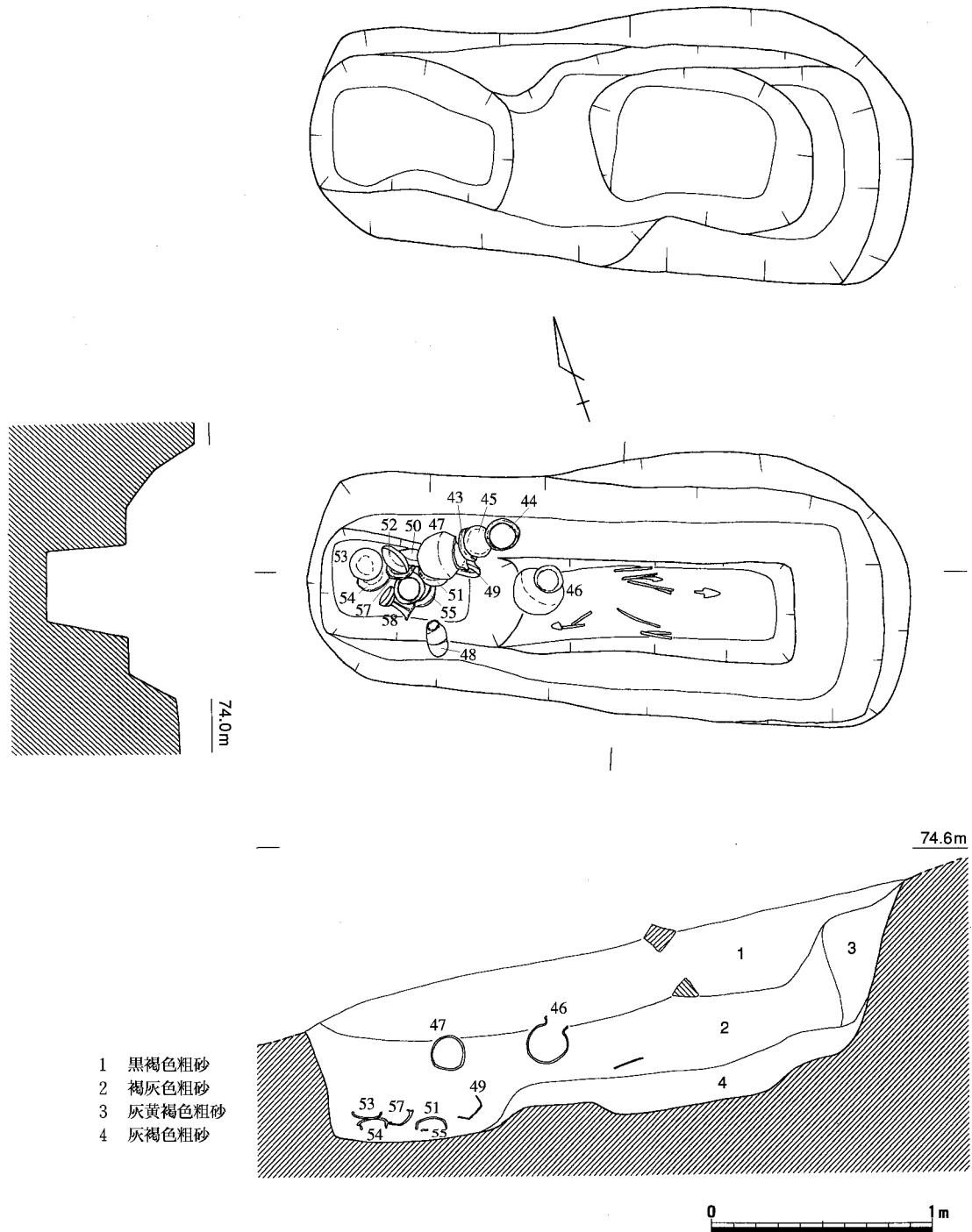


第22図 土墳墓1 (1/30) ・ 出土遺物(1/4)

土墳墓 2 (第23図)

古墳群が所在する西に張り出す尾根状部分の南側で、谷地形の箇所位置する。海拔75m付近での検出である。これを囲む溝や盛り土等の施設もなく、古墳の埋葬主体とは考えられない。

墓壇は長軸を斜面に直交させて検出された。掘り方の平面形は不整な長方形であるが、これは斜面上位に当たる東半の肩口が崩落したためで、本来は長方形に掘られ、その規模は長さ2.6m、幅1m程度に復元される。深さは検出面から80cmで底面に至り、底面の西端と東寄りの2ヵ所がさらに一段窪んでいる。調査の都合上、横断の土層断面図は作成できなかったため、第23図の縦断面図で基本的な



第23図 土墳墓 2 (1/30)

堆積状況を見ると、第4層は後述する木棺設置時の置き土で、第3層にもその可能性がある。第2層は棺を埋めた土で、後述するようにその性格からさらに細分できると思われるが、現地においては明瞭な違いを見出せなかった。木棺の腐朽後は棺内に崩落したと考えられる。第1層は第2層の崩落後にできた窪みに堆積した土である。第23図中段の平面図は、基本的に第4層上面の検出状況と、遺物の出土状況を示しており、左にこの段階での断面図を加えている。第4層上面で知られる棺の大きさは、幅40～50cm、長さ215cm、深さ35cmである。棺底は斜面の傾斜と同じく東から西へ傾斜しており、木棺の谷側3分の1強に相当する底面がさらに20cm程深くなっている。

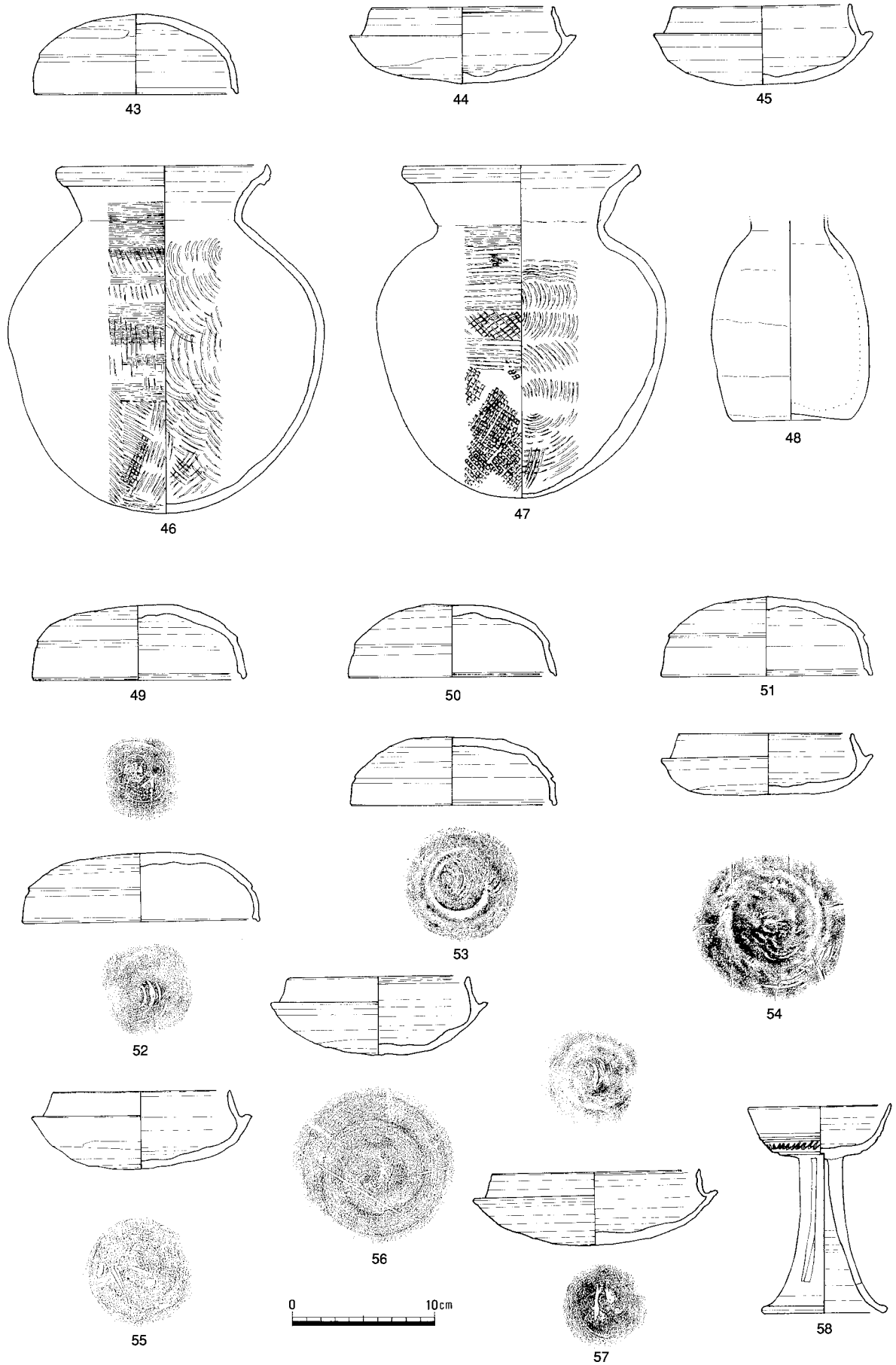
遺物はいずれも第2層からの出土であるが、大きく3群に分けられる。第1層を除去して現れる上層遺物として、須恵器の壺46・47、平底壺48、杯身44・45、杯蓋43がある。次に、棺の東半分の第2層でもより下層から、M41～M54の鉄鏃が出土している。棺の北辺に沿う一群は先端を東に向け、南の群の西端には西へ向くものも見られる。そして、西寄りの窪み部分から、須恵器の高杯58、杯身54～57、杯蓋49～53が出土している。

第4層上面での構造、基本的土層堆積状況、および遺物の出土状況から、埋葬時の在り方を考えてみたい。まず、6点の上層出土遺物であるが、これらは第2層の上位にあり、平面的にも木棺規模の外側にかかっていることから、木棺の上に置かれて埋められた、あるいは木棺を埋める途中で入れられたと考えられる。14本の鉄鏃については、平面的には木棺の範囲内に位置するが、想定される棺底より高い位置で、ほぼ同じ高さで出土しており、木棺の上に置かれたものと考えられる。問題は棺底西寄りの窪み部分から出土した須恵器である。平面的には想定棺内に収まり、やや北に偏って位置する。杯身・杯蓋は組み合わせではおらず、高杯も倒れている。いずれの下端も掘り方底面には接しておらず、上端の高さは前述の鉄鏃出土面よりは低い。層序としては第2層に含まれるが、この部分は下層に第4層は無い。これらの状況から、下層遺物については、二つの在り方を想定できる。一つはこれらが棺内に入れられた場合であり、今一つは棺の下に置かれた場合である。前者にあつては、棺の下に空間ができ、有機物等を置いた可能性が考えられ、棺内の空間は長さ150cm程になる。後者では、窪みの部分に下層遺物を並べた上に棺を置くことになり、棺内の空間は長さ200cmを超える。

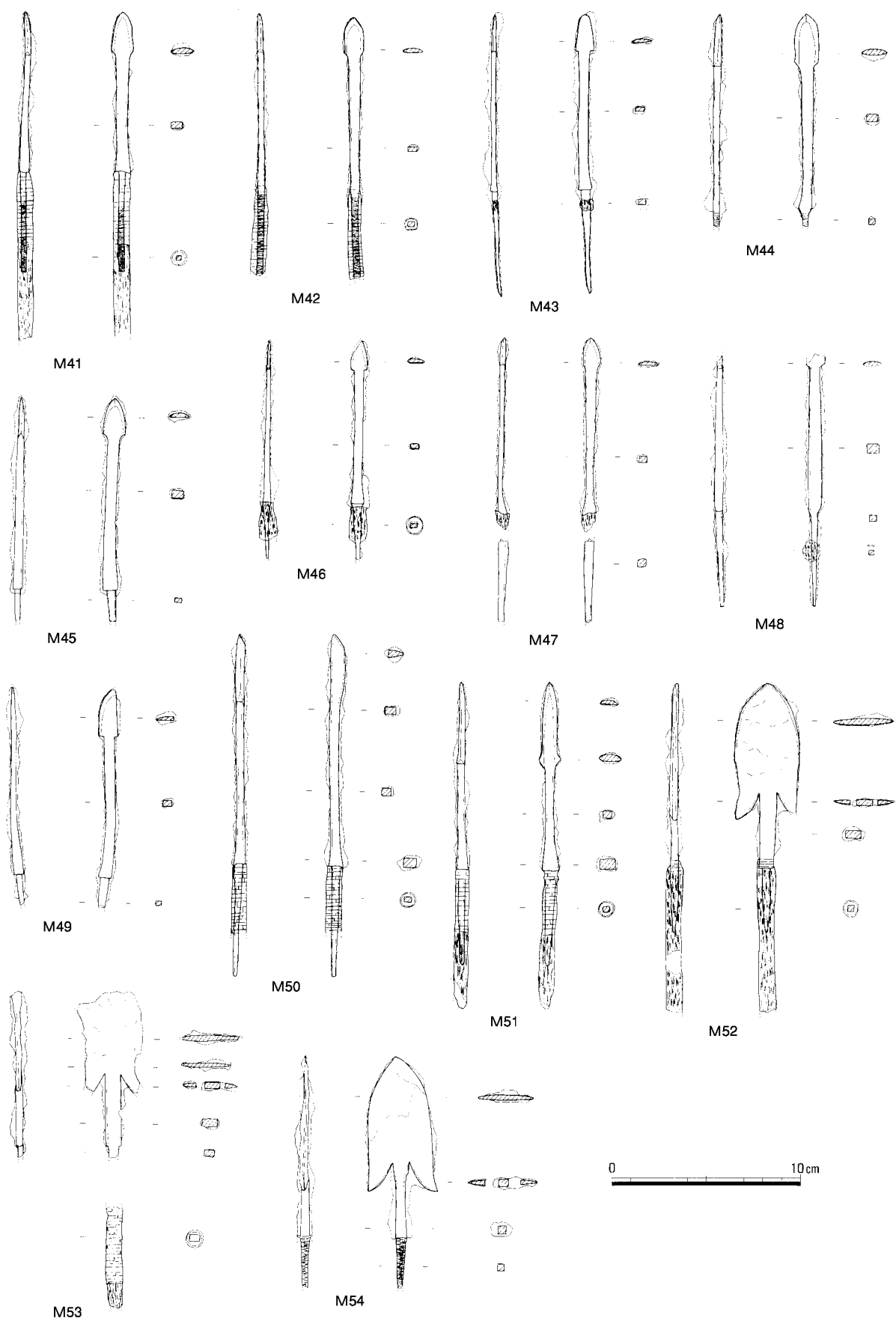
出土遺物のうち、須恵器については、杯身6点、杯蓋5点、壺3点、高杯1点がある。杯身45・55の口縁上端は面が見られず、杯蓋46の稜が鈍いなどの後出的要素もみられるが、おおむね6世紀前半とみなしうる。壺48については口縁部を欠いているが、やや上げ底気味ではあるものの平底に作られており、いわゆる百済系平底壺とみられる。県内では出土例が知られない。

鉄鏃14本は、比較的遺存状態が良好で、篋竹の装着状態を留めるものが多く、M41・M51・M52などでは8cm以上が残っている。M41～M51が長頸式、M52～M54が短茎式で、後者はいわゆる平根式の腸扶柳葉式である。長頸式のうち、M41～M47およびM51は柳葉式、M50は片刃箭式である。M49は片刃箭式として図示しているが、鏃身の関は両側にあり、先端部が錆で不詳なため、柳葉式となる可能性が残る。M48についても、両側に関があり、柳葉式の可能性が高い。M51は鏃身の関部を山形に図示しているが、形式としては山形関とまでは言い難い。また、M51は鏃身の関部は鏃身長2倍以下であるが、長頸式の他の10点はいずれも鏃身長3倍以上の頸部長を測る。

本古墳群の6基の古墳と2基の土壙墓については、その出土須恵器から2・6号墳→土壙墓2→4号墳→1号墳・土壙墓1の築造順となり、土器が出土しなかった3・5号墳についても、横穴式石室の採用は想定し難いことから、1号墳・土壙墓1には先行すると考えられる。(光永)



第24図 土墳墓2 出土遺物1 (1/4)



第25図 土墳墓2出土遺物2(1/3)

第8章 才地遺跡

第1節 調査区の概要

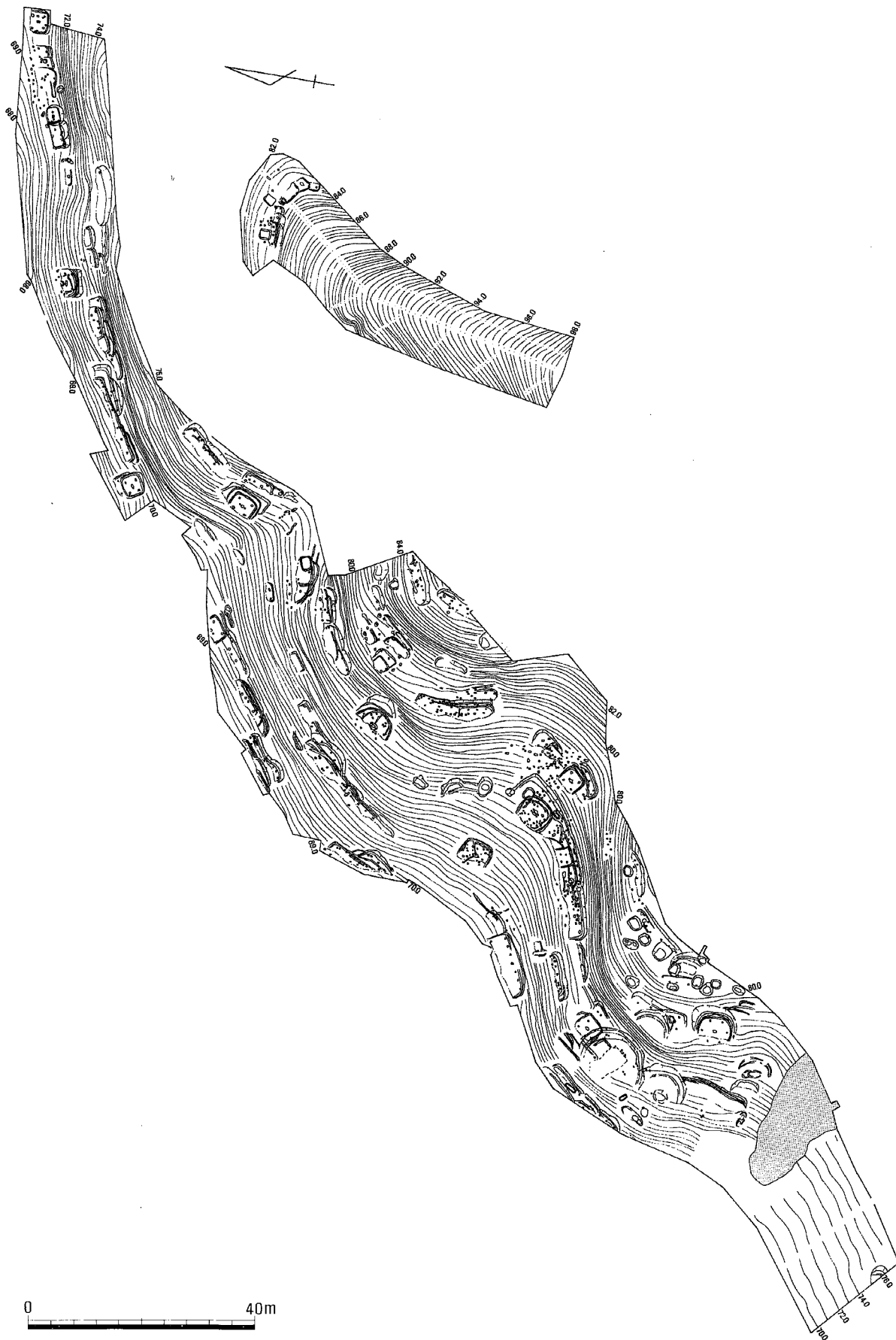
才地遺跡は、丘陵先端部の標高88m前後と北西斜面側の標高70～87mに展開し、当該遺跡で最も高い位置にあるのがⅠ区である。立ち木の伐採時における地表観察では、第1図に示した遺構が認められた部分において平坦面が観察できた。この平坦面は、これより下方においても形成されていることが認められたのである。しかしながら、これらの段は調査時の再度の確認により遺構がなく、また、地元の方の話から戦後の開墾によつて形成されたことが確認された。このことからⅠ区の遺構の広がり、調査された範囲より広がらないことが把握されている。

Ⅱ～Ⅴ区とした北西斜面には、長さ270m、幅15～50mにわたって遺構が認められている。この部分の遺構の広がり、第1章の第3図に示したトレンチ調査の結果に基づき、同図第4図の調査範囲を設定した。ⅡaとⅡb区は、調査区幅15m前後と狭くなっている。これらの区の丘陵斜面上方側は、傾斜角度がきつくこれ以上の遺構の広がりを想定できない。斜面下方側については、戦後の開墾と墓地造成による段が形成されている。特に、墓地との関係で遺構の広がりを把握できていないが、住居22と住居29から下方部分ではさらに遺構が広がると思われる。Ⅱc～Ⅳc区においても、同様な状況として判断される。なお、調査区東端部分は、これ以上の遺構の広がりを確認できていないが、南西端のⅤ区においてはさらに広がる内容を示している。

270mに及ぶ長い調査区においては、3ヵ所の谷部を確認することができた。谷部は、Ⅱc区の住居28とⅡb区の住居35の間とⅡc区とⅢb区の間、そしてⅤ区の段状遺構の部分に検出された。この部分においては、花崗岩風化土の再堆積土であり、調査時における降雨に伴う水みちがこの3ヵ所に集中し、後者の2ヵ所では数日は出水が止まらない状況が観察されている。谷部には、住居32と53そして段状遺構7と8などが検出された。

遺構内の住居は、等高線に沿うように形成され、丘陵斜面上方向と横方向の展開が認められている。また、住居内での拡張が認められるが、単独で構築されるものも認められる。Ⅱc区の住居28は、丘陵斜面上側に二段の平坦部を造成して構築されている。建て替えを想定させるものは、4本の主柱穴が何れも掘り直されているだけであり、壁帯溝などの重複は認められていない。このことから、竪穴部分の掘り直しではなく、上屋部分の再構築を想定することが可能であろうか。また、Ⅳb区の住居75は、数少ない火災を受けた住居であるが、再構築の内容が認められていない。Ⅰ区でも検出されている方形の土壇は、主にⅣc区において多く認められている。これらの土壇は遺跡の広がりの中で、南西よりの奥側になるが、高所に纏まって位置する。また、Ⅱc区の柱穴2と3も見晴らしの良い高所に認められている。柱穴2は、柱痕跡が残り、柱穴3は柱の抜取を想定される。この2個の柱穴は、建物を構成する一部と考え、周囲を精査したが確認することができなかったのである。このことから、この柱穴が単独で機能していたことが思考される。

各調査区は、住居の展開が主であるが、丘陵斜面上方の調査区境部分においては、住居以外の特殊な遺構の存在が認められるのである。



第1図 調査区全体図(1/1,000)

第2節 調査の概要

1 I区の調査

I区は丘陵北東尾根部に位置し、東方に平野を望む。遺構は調査区北東側で竪穴住居6軒、土塋4基などが検出されたが、上方に当たる南西側は皆無であった。

竪穴住居

竪穴住居1（第2・3図）

調査区北端南東斜面地に位置し、長辺369cm、深さ53cmを測る。壺1は口径15.4cmでゆるやかに開く外面頸部にハケメ後に凹線文、また肥厚する口縁部から上方に内傾する端部に3本の凹線文を施す。甕2は下方に肥厚する口縁端部に3本の凹線文を配す。弥生中期後半と思われる。

竪穴住居2（第2・3図）

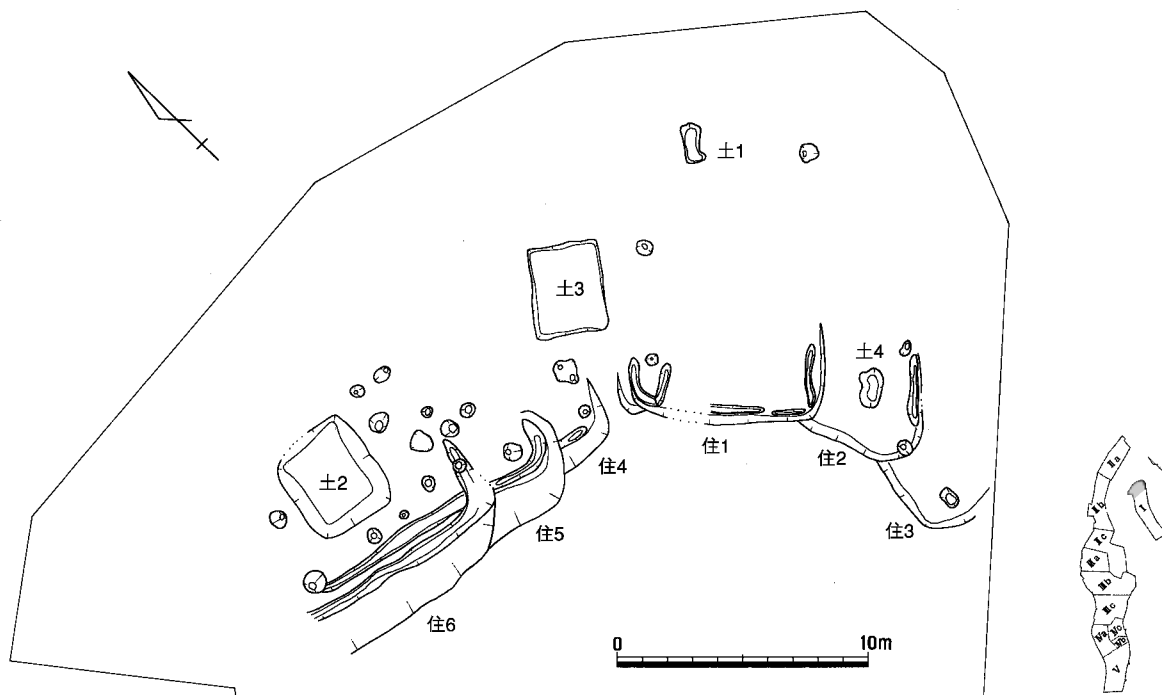
調査区北端南東斜面地に位置する。掘り方は長方形と思われるが、住居1に北東部を削平される。断面形は山側を掘削してL字形を取るが、床面の整地がみられる。深さは53cmを測る。出土遺物はないが、時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居3（第3図）

調査区北端南東斜面地に位置する。掘り方は長方形と推測されるが、住居2に北東部を切られる。断面形はL字形を取るが、床面の整地が認められる。深さは34cmを測る。遺物は甕3、壺ないし甕4などが出土した。時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居4（第4図）

調査区北端中央南西斜面地に位置し、深さは42cmを測る。柱構造は不明だが、柱穴a・1・mなどが

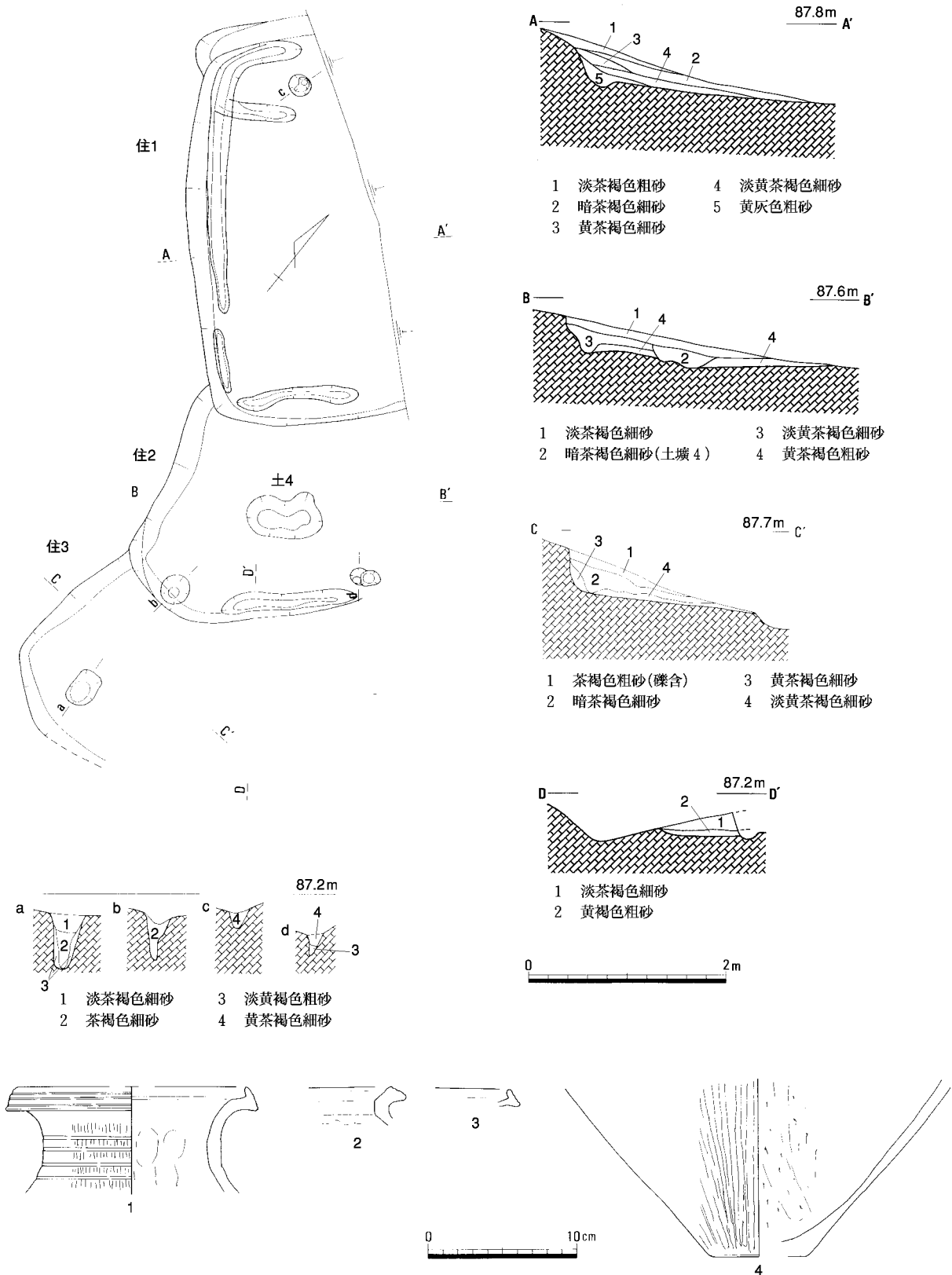


第2図 I区遺構配置図(1/300)

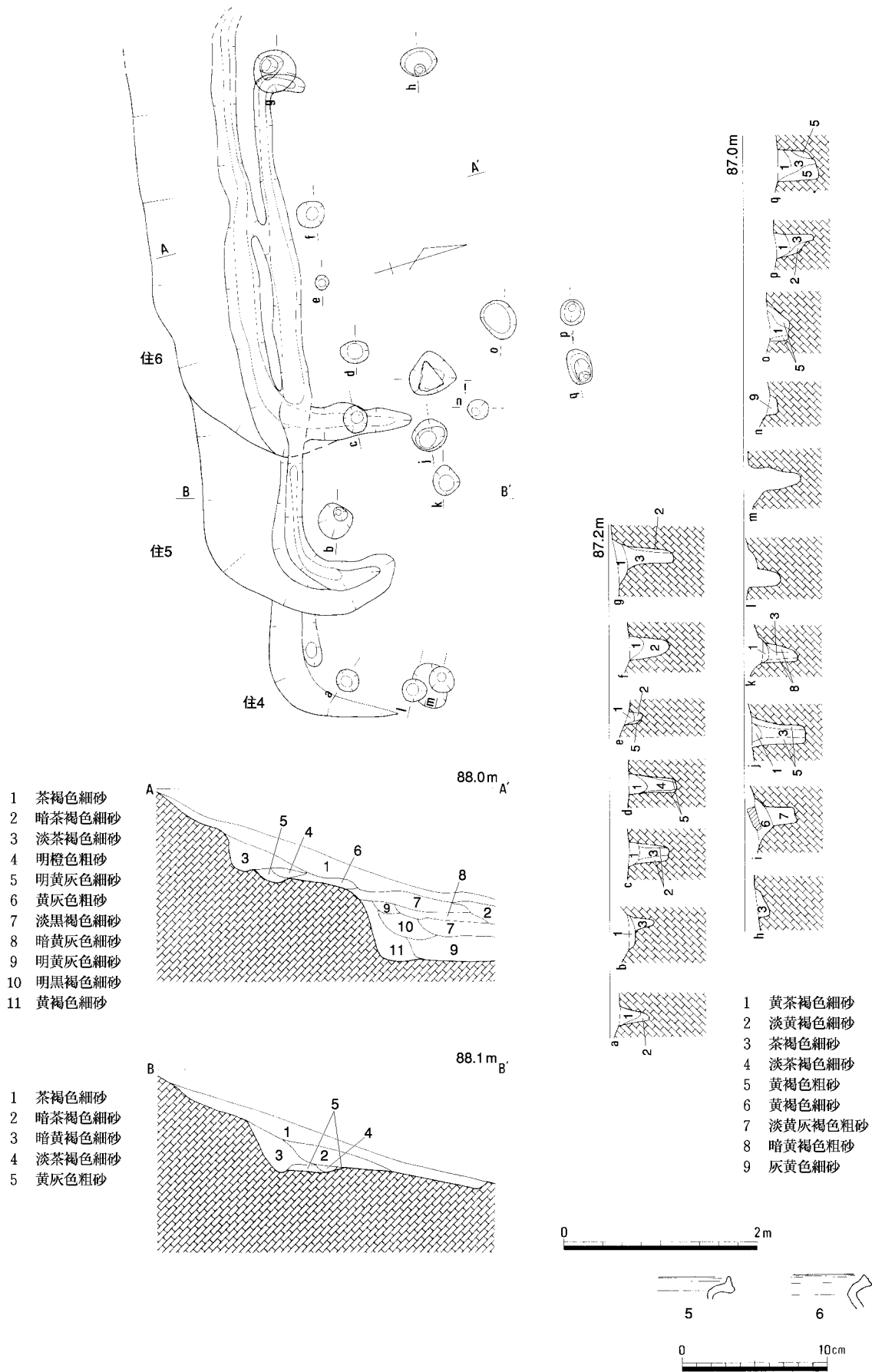
伴うと考えられる。出土遺物はないが、時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居5 (第4図)

調査区北端北西斜面地に位置し、深さは46cmを測る。壁体溝の状況から柱穴b・gなどが伴うと考え



第3図 竪穴住居1~3 (1/60)・出土遺物(1/4)



- 1 茶褐色細砂
- 2 暗茶褐色細砂
- 3 淡茶褐色細砂
- 4 明橙色粗砂
- 5 明黄灰色細砂
- 6 黄灰色粗砂
- 7 淡黑褐色細砂
- 8 暗黄灰色細砂
- 9 明黄灰色細砂
- 10 明黑褐色細砂
- 11 黄褐色細砂

- 1 茶褐色細砂
- 2 暗茶褐色細砂
- 3 暗黄褐色細砂
- 4 淡茶褐色細砂
- 5 黄灰色粗砂

- 1 黄茶褐色細砂
- 2 淡黄褐色細砂
- 3 茶褐色細砂
- 4 淡茶褐色細砂
- 5 黄褐色粗砂
- 6 黄褐色細砂
- 7 淡黄灰褐色粗砂
- 8 暗黄褐色粗砂
- 9 灰黄色細砂

第4図 竪穴住居4～6(1/60)・出土遺物(1/4)

られる。壁体溝内からは甕5が出土した。時期は弥生中期後半と思われる。

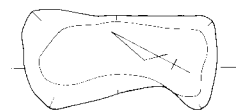
竪穴住居6 (第4図)

調査区北端北西斜面地に位置し、深さは51cmを測る。遺物は甕6が出土した。時期は弥生中期後半と思われる。

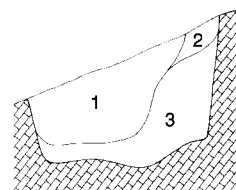
土壌

土壌1 (第5図)

調査区北端北東斜面地に位置する。掘り方は隅丸不整長方形で、長さ75cm、幅40cm、深さ58cmを測る。遺物は出土しなかった。



86.4m



- 1 暗赤褐色細砂(炭含)
- 2 淡黄灰褐色細砂
- 3 黄褐色粗砂

0 50cm

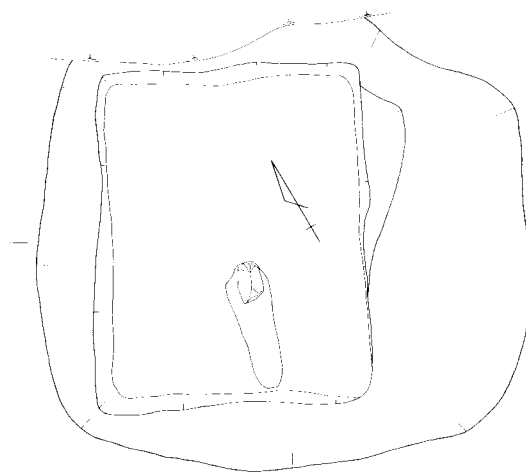
第5図 土壌1 (1/30)

土壌2 (第6図)

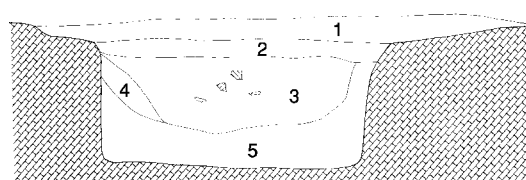
調査区北端中央斜面地に位置する。掘り方は長方形を呈し、長さ206cm、幅181cm、深さ74cmを測る。その形態から貯蔵施設の一種と思われる。遺物は出土しなかった。時期は土層断面から住居6以前のものと思われる。

土壌3 (第7図)

調査区北端中央斜面地に位置する。掘り方は長方形を呈し、上段は長さ258cm、下段は長さ176cm、幅142cmで、深さ79cmを測る。土壌2と類似しており、貯蔵施設の一種と思われる。壺7が出土した。時期は弥生中期後半と思われる。



87.0m



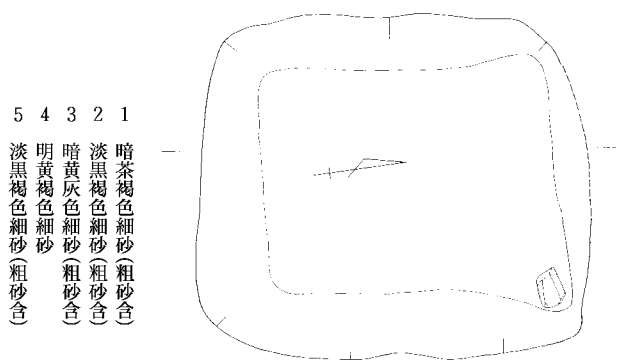
- 1 淡茶褐色細砂
- 2 茶褐色細砂
- 3 暗茶褐色細砂(炭・土器含)
- 4 淡黄茶褐色細砂
- 5 暗黄茶褐色粗砂

0 10cm

第7図 土壌3 (1/40) ・出土遺物(1/4)

土壌4 (第3図)

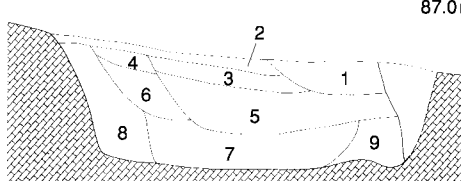
調査区中央南東側に位置する。不整楕円形で、長径74cm、短径40cm、深さ15cmを測る。遺物は出土しなかった。時期は土層断面から住居2埋没以降のものである。



87.0m

- 5 淡黒褐色細砂(粗砂含)
- 4 明黄褐色細砂
- 3 暗黄褐色細砂(粗砂含)
- 2 淡黒褐色細砂(粗砂含)
- 1 暗茶褐色細砂(粗砂含)

- 9 黄褐色細砂
- 8 明黄褐色細砂
- 7 暗黄褐色細砂(粗砂含)
- 6 明黒褐色細砂



0 1m

第6図 土壌2 (1/40)

2 II a区の調査

II a区は才地遺跡の北東端に位置する調査区である。基本的に南から北に急傾斜をもつ地形であり、遺構は竪穴住居12軒、段状遺構1基、建物1棟、土壇4基、土器棺墓1基などが検出された。

竪穴住居

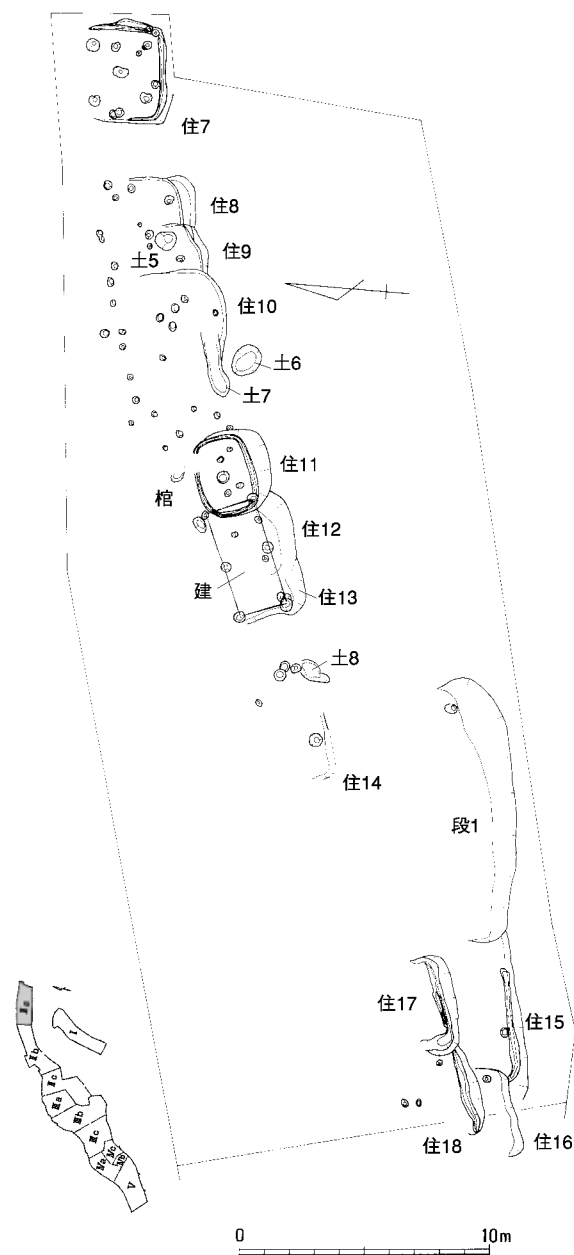
竪穴住居7（第9・10図、図版18）

調査区北東端の斜面地に位置する。掘り方の平面形は北側に削平を受けているが、ほぼ長方形を呈していたと思われ、東西長は385cmを測り、南北長は支柱穴の位置関係からこれよりやや短かったものと思われる。床面の平面形も同形で、東西長は359cmである。埋土の堆積状況を見ると約5cm程度の貼り床が認められ、水平で堅くよくしまっていた。壁面に沿っては壁体溝が確認され、山側からの土圧により壁が内傾している住居廃棄時の状況が認められた。また、住居東側には不整形形状の段が付属し、その上面には長さ40cm、幅25cm程度の平石が確認された。加えて住居南東隅にのみ小形の柱穴をもつことから、ここは何らかの機能を有する施設であったと考えられる。断面形態は床面からやや外方気味に立ち上がり、深さは現状で45cmを測る。

柱構造は支柱が4本柱であり、柱穴a・b・c・dが相当する。支柱柱間は東西方向が200cm、南北方向が220cmを測る。支柱と側壁の距離は30～55cmと推定され、やや西側が広がっている。支柱掘り方はいずれもほぼ円形を呈し、直径25～50cmで、深さ51～62cmを測る。また、支柱穴では柱痕跡がみてとれ、それらから直径約20cm程度の柱材を使用していたと推測される。

床面の中央では長さ60cm、幅36cm、深さ45cmを測る隅丸方形の中央穴が検出され、その土層上位では焼土粒を多く含む層が、中位では炭片や灰を多く含む層が確認された。また、その床面周辺でも炭片が厚く堆積していた。加えて、床面ではサヌカイトの剥片が多数散布しており、明らかに住居内で石器製作を行っていたと考えられる。

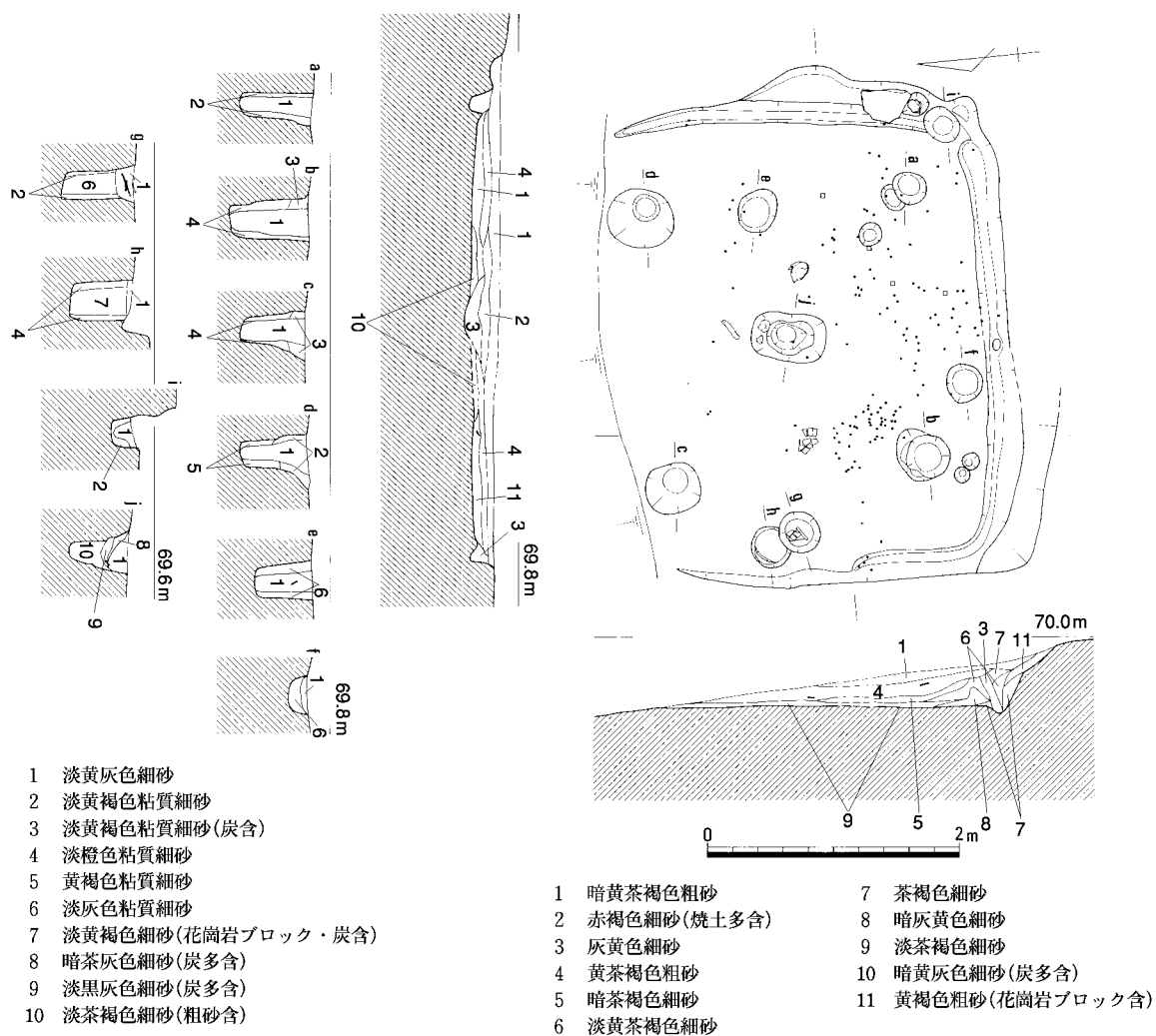
出土遺物をみると甕8・9・14、高杯10・11、鉢12・13・15、石鏃S1～S4、石錐S5・S6、釘M1などが出土した。石器はすべてサヌカイ



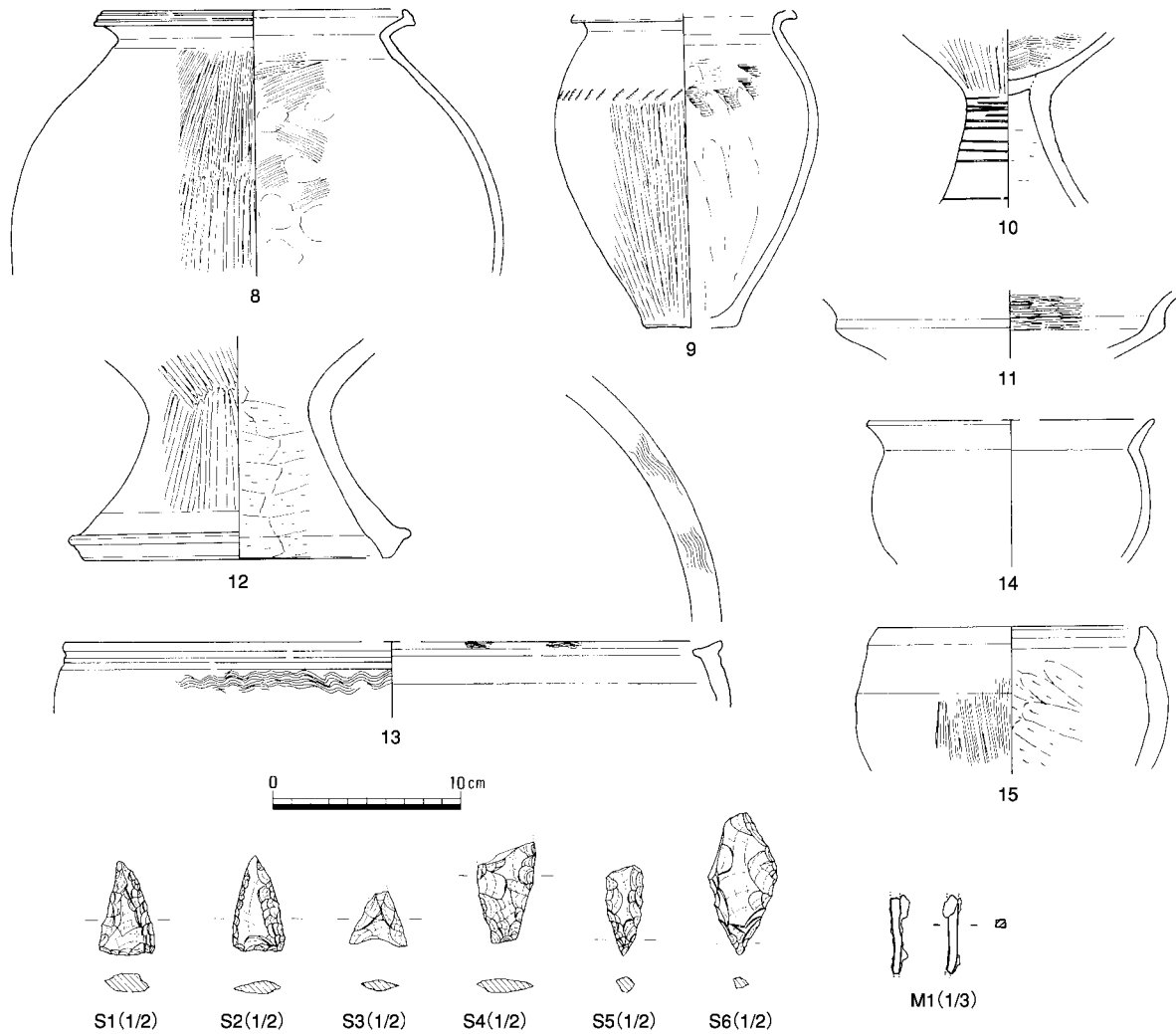
第8図 II a区遺構配置図(1/300)

ト製である。甕8は口径16.0cmを測り、やや球形状に近い体部から、「く」の字状に短く外反した口縁部から内上方に立ち上がって上下に拡張する端部を有する。外面には2本の凹線文を施す。調整は外面体部ではハケメの後、下半にヘラミガキ、内面には指頭圧痕やハケメが認められる。甕9は口径11.5cm、底径4.7cmを測る。平底を有し、体部上位付近で最大径をもって外面肩部には連続刺突文を施す。また、体部から「く」の字状に外反した口縁部から端部を上方に折り返しており、凹線文を施していると思われる。調整は外面体部下半ではヘラミガキ、内面下半はヘラケズリの後ユピナデ、上半はヨコナデでその境界部にハケメがみられる。甕14は口径15.0cmであり、球形状の体部から「く」の字状に短く外上方に立ち上がる口縁部をもち、端部は丸く納める。磨滅が進む。

高杯10は杯部から脚柱部の破片である。円盤充填法がみられ、杯部の内外面杯部はヘラミガキ、脚柱部の外面はヘラミガキの後、沈線文を施し、脚裾部にかけて縦位の未貫通の透かし孔を配す。内面はヘラケズリを行う。高杯11は杯部の破片である。浅い碗形を呈し、口縁部との変換点では稜をもちながら、大きく外湾している。内面にヘラミガキがみられる。台付鉢12は底径16.6cmを測る。脚部は「ハ」の字状に開き、脚裾端部は肥厚気味となる。脚柱部の外面はヘラミガキ、脚裾部は強いヨコナデ、内面はヘラケズリを行う。鉢13は口径34.8cmで、内湾気味に立ち上がる体部にやや内傾する上下に拡張した口縁部をもち、端部には6条1単位の波状文を施している。外面体部にも7条1単位の波状文を行



第9図 竪穴住居7(1/60)



第10図 竪穴住居7出土遺物(1/4・1/2・1/3)

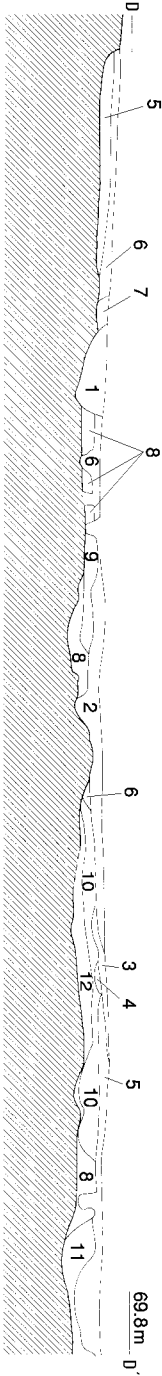
っている。鉢15は口径14.8cmで器壁がやや厚い。内湾気味に立ち上がる体部に内側に面をもつ口縁部を有する。外面下半にハケメ、上半にヨコナデ、内面ヘラケズリがみられる。

石鏃S1・S2は平基式の完形品で、前者は最大長25.0mm、最大幅15.0mm、最大厚5.3mm、重さは1.46gである。後者は最大長25.5mm、最大幅14.0mm、最大厚4.0mm、重さは1.23gである。石鏃S3は凹基式で一部欠損している。法量は最大長14.5mm、最大幅15.5mm、最大厚3.3mm、重さは0.47gである。石鏃S4は凸基式で一部欠損している。法量は最大長27.0mm、最大幅15.5mm、最大厚3.7mm、重さは1.52gである。石錐S5・S6は一部磨滅するが完形である。前者は最大長24.0mm、最大幅10.0mm、最大厚4.0mm、重さは0.92gである。後者は最大長37.5mm、最大幅18.5mm、最大厚6.0mm、重さは3.65gである。釘M1は覆土中から出土し、一部欠損している。最大長3.00cm、最大幅0.35cm、最大厚0.35cm、重さは1.22gである。時期は弥生中期後半と思われる。

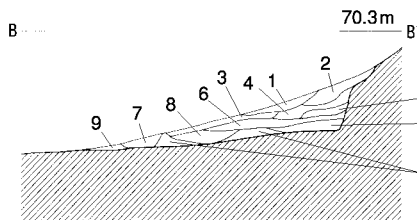
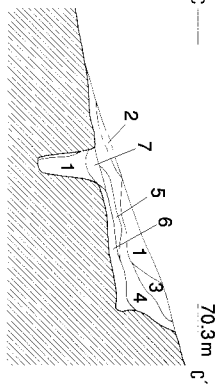
竪穴住居8 (第11・12・13図)

調査区東側斜面地に位置する。掘り方の平面形態は隅丸方形ないし長方形と推測されるが、北側および住居9で西側を大きく削平されている。断面形は山側をいずれも直立気味で二段に掘削してL字形を取り、深さは現状で55cmを測る。床面は現状で北側に傾斜しており、貼り床がなされたものと考えられる。壁体溝は確認できなかった。柱構造は不明であるが、柱穴g・h・r・sなどが住居に伴うもの

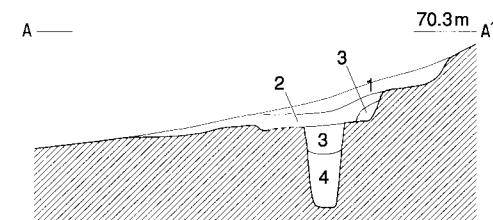
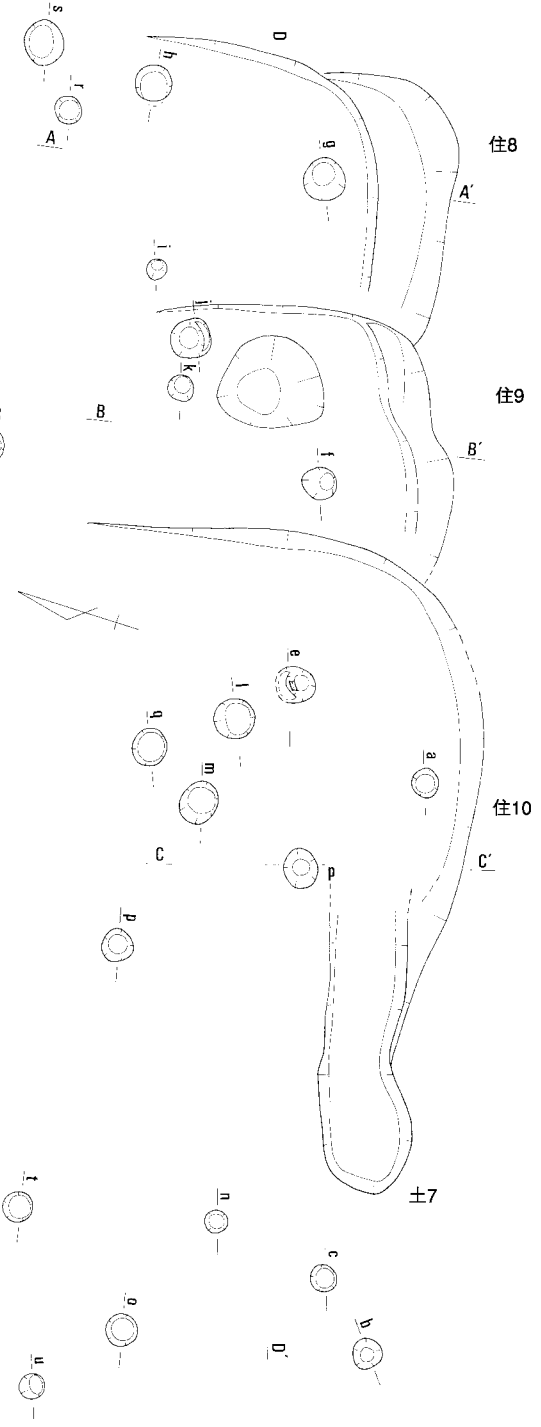
- 1 淡黑色細砂(土壤5)
- 2 淡茶褐色細砂
- 3 茶褐色細砂
- 4 明茶褐色細砂
- 5 淡茶褐色細砂
- 6 暗茶褐色細砂
- 7 暗黃茶褐色細砂
- 8 淡黃褐色細砂
- 9 暗黃褐色細砂
- 10 黃茶褐色細砂
- 11 明黃褐色細砂
- 12 黃褐色細砂



- 1 暗黃茶褐色細砂
- 2 黑褐色細砂
- 3 淡黃茶褐色細砂
- 4 淡茶褐色細砂
- 5 淡黑色細砂(土壤5)
- 6 暗黃褐色細砂
- 7 暗茶褐色細砂(炭含)



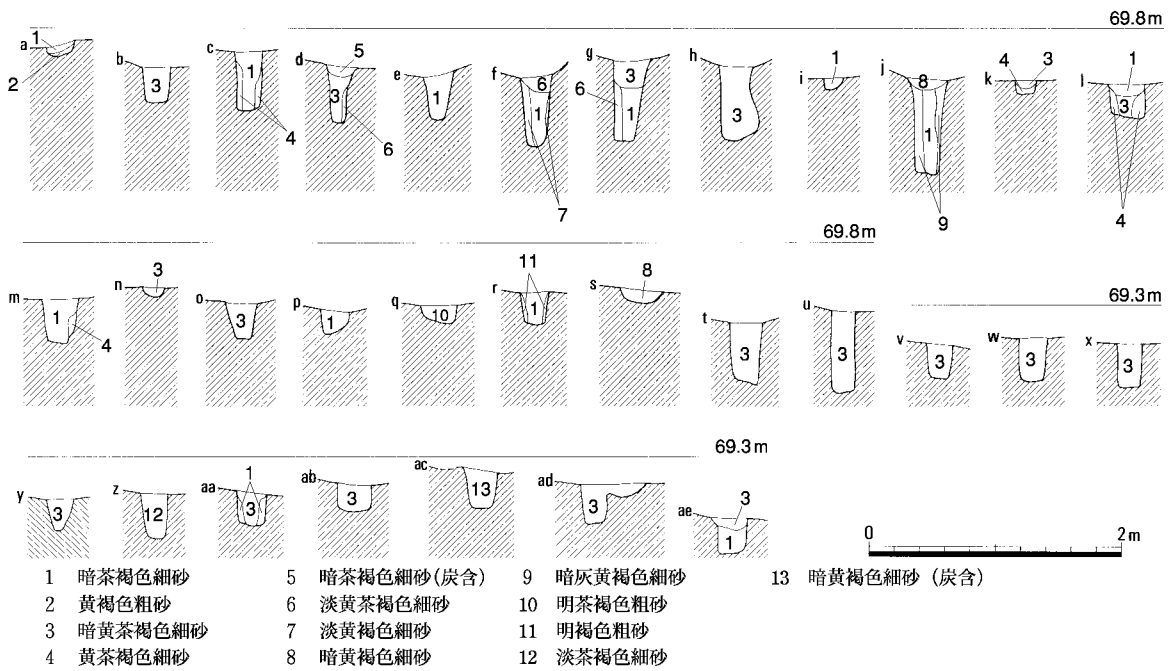
- 1 暗黃茶褐色粗砂
- 2 黃茶褐色粗砂
- 3 暗黃茶褐色細砂
- 4 淡黃茶褐色細砂
- 5 明黃褐色粗砂
- 6 黑褐色細砂
- 7 暗茶褐色細砂
- 8 淡黑色細砂(土壤5)
- 9 黃褐色細砂



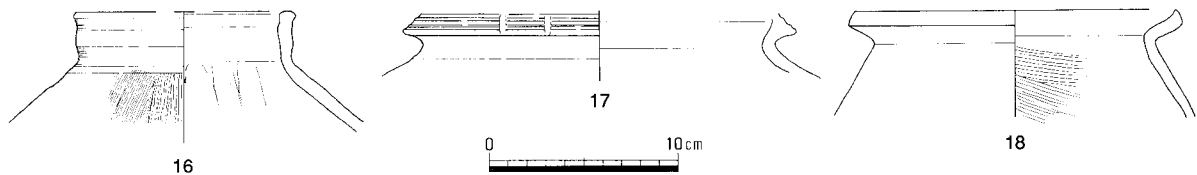
- 1 淡茶褐色細砂
- 2 黃茶褐色細砂
- 3 暗黃褐色細砂
- 4 暗茶褐色細砂



第11圖 豎穴住居 8~10(1/60)



第12図 竪穴住居8～10土層断面図(1/60)



第13図 竪穴住居8出土遺物(1/4)

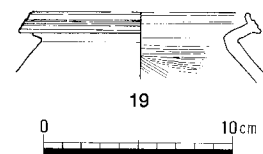
と思われる。これらの柱掘り方は直径21～35cmを測り、いずれもほぼ円形を呈する。深さ11～64cmと差がみられるが、これは、北側の傾斜地の影響であろう。

出土遺物は壺16、甕17・18などがみられる。壺16は口径11.4cmを測り、内傾気味に立ち上がる体部から短く直口する口縁部を有し、端部はやや肥厚して面をもつ。外面体部はハケメ、内外面口縁部は強いヨコナデ、内面体部はユビナデを行う。甕17は「く」の字状に短く屈曲した口縁部に上下に肥厚した端部を有し、外面には2本の凹線文と棒状浮文を施す。甕18は口径17.0cmで、内傾して立ち上がる体部から「く」の字状に外上方に延びる口縁部を有し、端部は面をもちながら上方に引き上げられている。体部内面にはハケメを残す。時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居9(第11・12・14図)

調査区東側斜面地に位置する。掘り方は隅丸方形ないし長方形と思われるが、北側および住居10に削平される。断面形は山側を直立気味に掘削してL字形を取るが、床面の整地は不明瞭で、現状で北側に傾斜しており、貼り床がなされたものと考えられる。深さは現状で53cmを測る。壁体溝は確認できなかった。検出状況から住居に伴うものと思われる柱穴の存在が想定されるが、柱構造は不明である。

出土遺物をみると、甕19は口径11.4cmを測り、「く」の字状に短く屈曲した口縁部に上下に拡張した端部を有し、外面には3本の凹線文を施す。内面体部にはハケメを残す。時期は弥生中期後半と思われる。



第14図 竪穴住居9出土遺物(1/4)

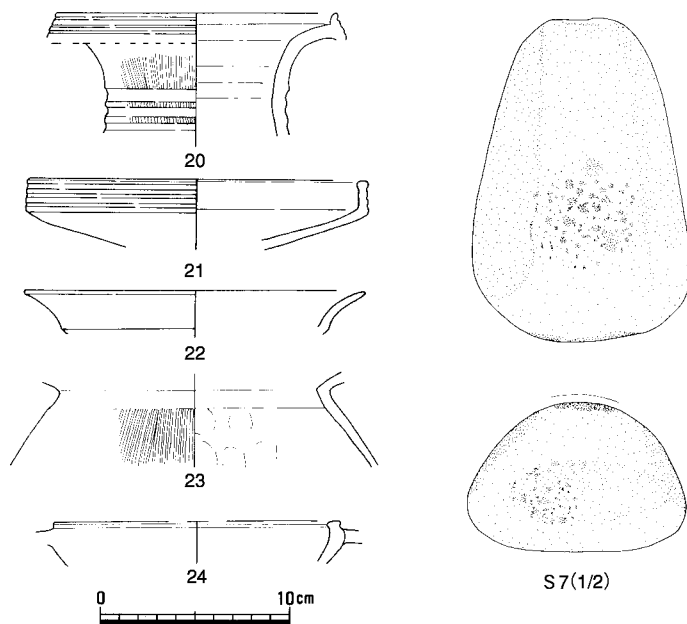
竪穴住居10 (第11・12・15図)

調査区東側斜面地に位置する。掘り方は隅丸方形ないし長方形と思われるが、北側および土壌7に西側を削平される。断面形は山側を下部は直立気味に、上部は外上方に掘削してL字形を取るが、床面の整地は不明瞭で、現状で北側に傾斜していることから、貼り床がなされたものと考えられる。深さは現状で65cmを測る。壁体溝は確認できなかった。検出状況から住居に伴うものと思われる柱穴の存在が想定されるが、柱構造は不明である。

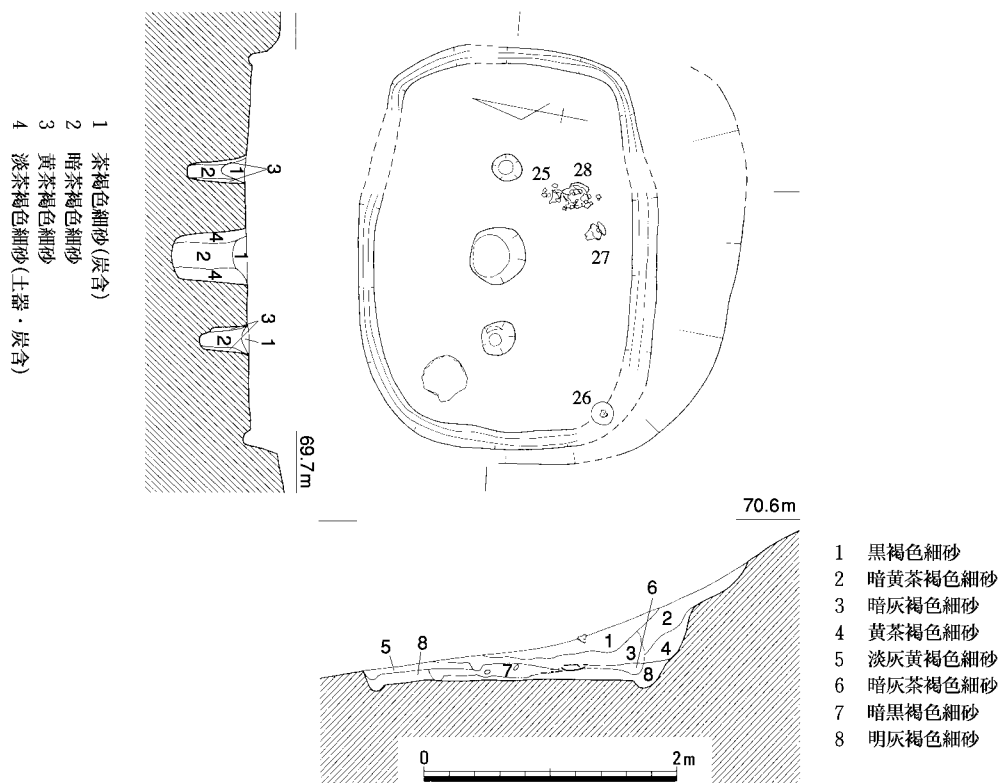
なお、前述の住居8・9とは床面の標高が69.8m周辺で等高線に対して平行する位置に立地していることから、これらは一連の構造体の可能性が高い。

出土遺物として、壺20、甕23、高杯21・22・24、敲石S7などがみられる。このうち壺20、高杯21・22は、この住居に伴うものと思われる柱穴cからの出土である。

壺20は口径14.8cmを測り、ゆるく立ち上がる頸部から外湾する口縁部



第15図 竪穴住居10出土遺物(1/4・1/2)



第16図 竪穴住居11(1/60)

にやや肥厚させて上下に拡張した端部を有し、外面には3本の凹線文を施す。外面頸部にはハケメの後、凹線文を施し、内面にはヨコナデを残す。甕23は頸胴部のみの残存であり、外面にハケメとヨコナデ、内面に指頭圧痕とヨコナデが認められる。高杯21は口径17.8cmを測り、皿状の杯部から直上方に立ち上がる口縁部をもち、端部は面取りがなされる。外面口縁部には3本の凹線文を施す。高杯22は口径18.0cmであり、稜をもって外上方に立ち上がる口縁部を有し、端部はやや尖り気味である。高杯24は口径15.0cmで椀形の杯部に鋳をもつ。敲石S7は完形品であり、法量が最大長85.0mm、最大幅58.0mm、最大厚39.0mmを測り、重さ269.45gである。石材は流紋岩である。

これらの時期は弥生中期後半になると思われる。

竪穴住居11（第16・17図）

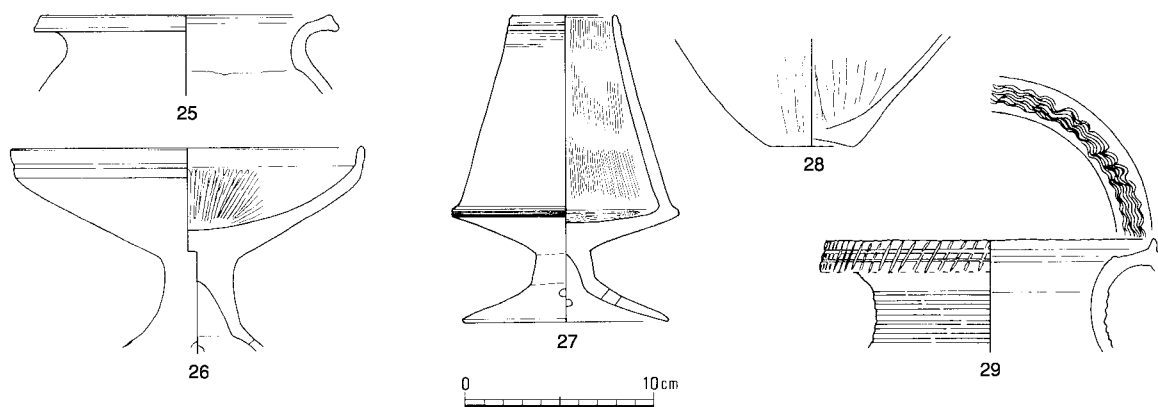
調査区中央付近の斜面地に位置する。掘り方の平面形は隅丸方形を呈しており、現状で東西長332cm、南北長305cmを測る。床面の平面形も同形であり、東西長320cm、南北長238cmである。埋土の堆積状況をみると貼り床は認められなかったが、水平で堅くよくしまっていた。また、壁面に沿って壁体溝が全周しているのが確認された。断面形態は山側の下部をやや直立気味に、上部は外上方に大きく掘削してL字形を取り、深さは現状で98cmを測る。

柱構造は主柱が2本柱であり、主柱柱間は189cmを測る。主柱と側壁の距離をみると、東西側では60～75cmで東側がやや広く、南北側では80～85cmとほとんど差がない。また、床面西側には長さ40cm、幅35cm程度の平石が確認され、何らかの台石として使用されたと思われる。

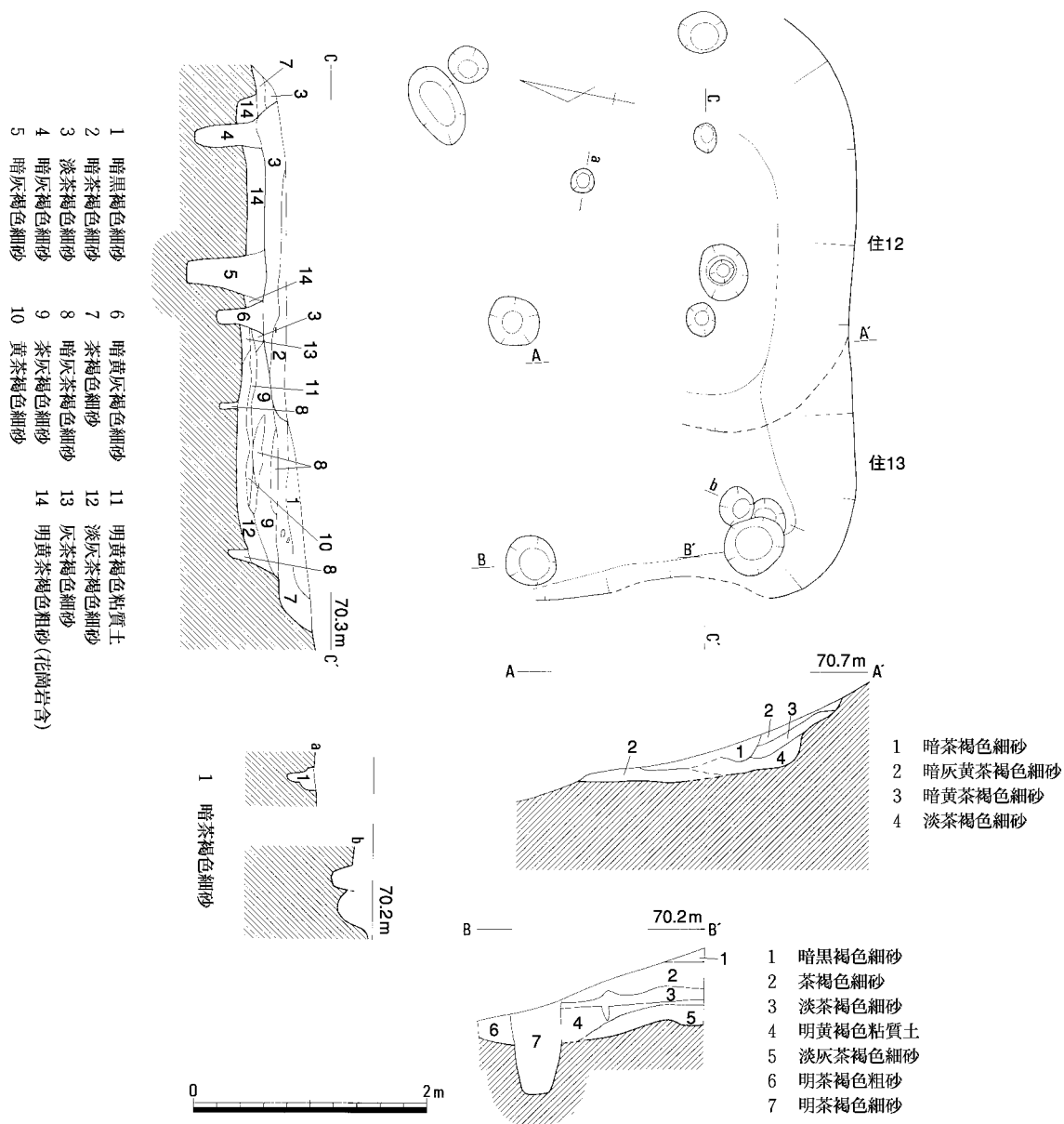
主柱掘り方はいずれも円形を呈し、直径25～27cmで、深さ39～45cmを測る。また、これらには柱痕跡がみてとれ、直径約20cm程度の柱材を使用していたと推測される。床面中央で主柱の間には、直径45cm、深さ58cmを測る円形の中央穴が検出され、その土層上位や初期流入土中に炭片を多く含む状況が確認された。

遺物は壺29、甕25、壺ないし甕28、高杯26、台付杯27などが認められ、甕25、壺ないし甕28、高杯26、台付杯27は床面直上から出土している。

壺29は口径17.4cmであり、ゆるく立ち上がる頸部から外湾する口縁部にやや肥厚させて上下に拡張した端部を有し、外面には2本の凹線文を行った後、右上方向の連続した刻目状の沈線文を配する。また外面頸部には多条の凹線文を施し、内面口縁部には8条1単位の波状文を配する。甕25は口径15.2cmを測り、体部から外湾する口縁部にやや下方に肥厚した端部を有する。口縁部には強いヨコナ

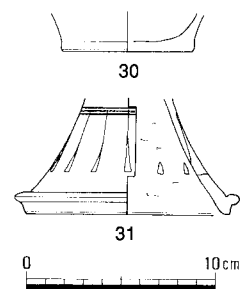


第17図 竪穴住居11出土遺物(1/4)



第18図 竪穴住居12・13(1/60)

デが認められる。壺ないし甕28の底径は4.4cmを測る。高杯26は口径18.5cmであり、深い碗形の杯部にゆるい稜をもって外上方に立ち上がる口縁部を有し、端部は丸く納める。外面口縁部には1本の凹線文が認められ、内面杯部にはヘラミガキがみられる。台付杯27は口径5.5cm、底径10.7cm、器高16.2cmを測る。浅い皿状の外面杯部の稜に2本の沈線文をもち、内傾して立ち上がる口縁部を有し、端部は丸く納める。口縁部上部には強いヨコナデが認められ、外面に2本の凹線文状の痕跡を残す。内面にはヘラミガキが認められる。また、脚柱部は短く、脚裾部は外方に広がって円孔を4個配しており、端部は丸く納めている。これらの時期は弥生後期後半と思われる。

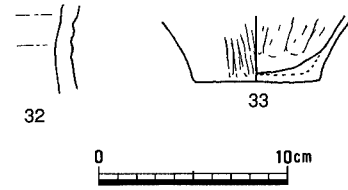


第19図 竪穴住居12 出土遺物(1/4)

竪穴住居12 (第18・19図)

調査区中央付近の斜面地に位置する。掘り方および床面の平面形は隅丸方

形を呈していたと思われるが、住居11により東側を切られている。現状で掘り方の東西長は495cm、床面の東西長は325cm程度を測る。断面形は山側を下部は直立気味に、上部は外上方に大きく掘削してL字形を取るが、床面の整地は不明瞭で、現状で北側に傾斜していることから、貼り床がなされたものと考えられる。ただし、建物による床面状況の改変も考慮しなければならないと思われる。深さは現状で69cmを測る。壁体溝は確認できなかった。



第20図 竪穴住居13出土遺物(1/4)

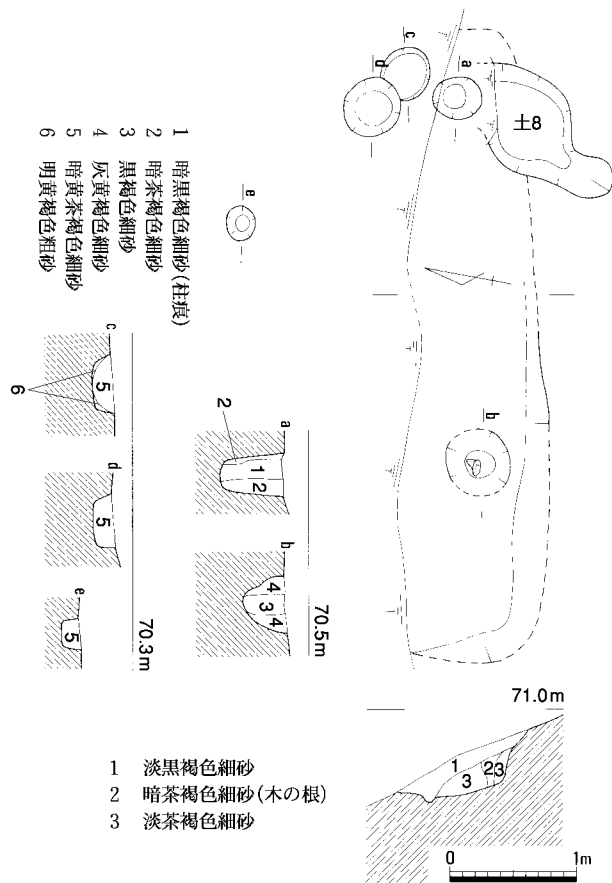
柱構造については判然としないが、住居南側の東西隅とそのほぼ中央付近で確認されたC—C'断面とb柱穴で表現されている3個の柱穴はこれに伴うものとして考えられ、柱間は157～166cmを測る。柱掘り方はいずれも円形を呈し、直径20～25cmで、深さ32～53cmを測る。

遺物は壺ないし甕30、高杯31などが出土している。壺ないし甕30は薄い器壁の平底で底径6.8cmを測る。高杯31は底径10.5cmで、脚柱部には沈線が施され、外方に広がる脚裾部には三角形の透かし孔が14個配している。端部は肥厚させて強いヨコナデを行い、内面で接地させている。時期は弥生中期後半と思われる。

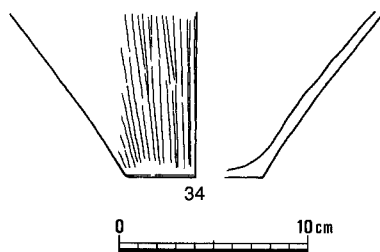
竪穴住居13 (第18・20図)

調査区中央付近の斜面地に位置する。掘り方および床面の平面形は隅丸方形ないし長方形を呈していたと思われるが、住居12により東側を大きく切られている。現状で東西長は推定495cm程度を測る。断面形は山側を掘削してL字形を取るが、床面の整地は不明瞭で、現状で北側に傾斜していることから、貼り床がなされたものと考えられる。また、住居12と同様に建物による改変も考慮しなければならない。深さは現状で86cmを測る。壁体溝は確認できなかった。

柱構造については不明であるが、住居南側西隅の位置で確認された柱穴bはこれに伴うものとして考えられる。住居12と建物の柱穴と切り合い関係がみられるが、柱掘り方は円形を呈し、現状で直径30cm、深さ25cmを測る。なお、前述の住居11・12とは床面の標高が69.8m周辺で等高線に対して平行する位置に立地していることから、これらは一連の構造体の可能性が高い。さらに、立地条件から住居8～10との関連も示唆に富む。



第21図 竪穴住居14(1/60)・出土遺物(1/4)



出土遺物は壺32と底径7.8cmを測る壺ないし甕33がみられる。時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居14 (第21図)

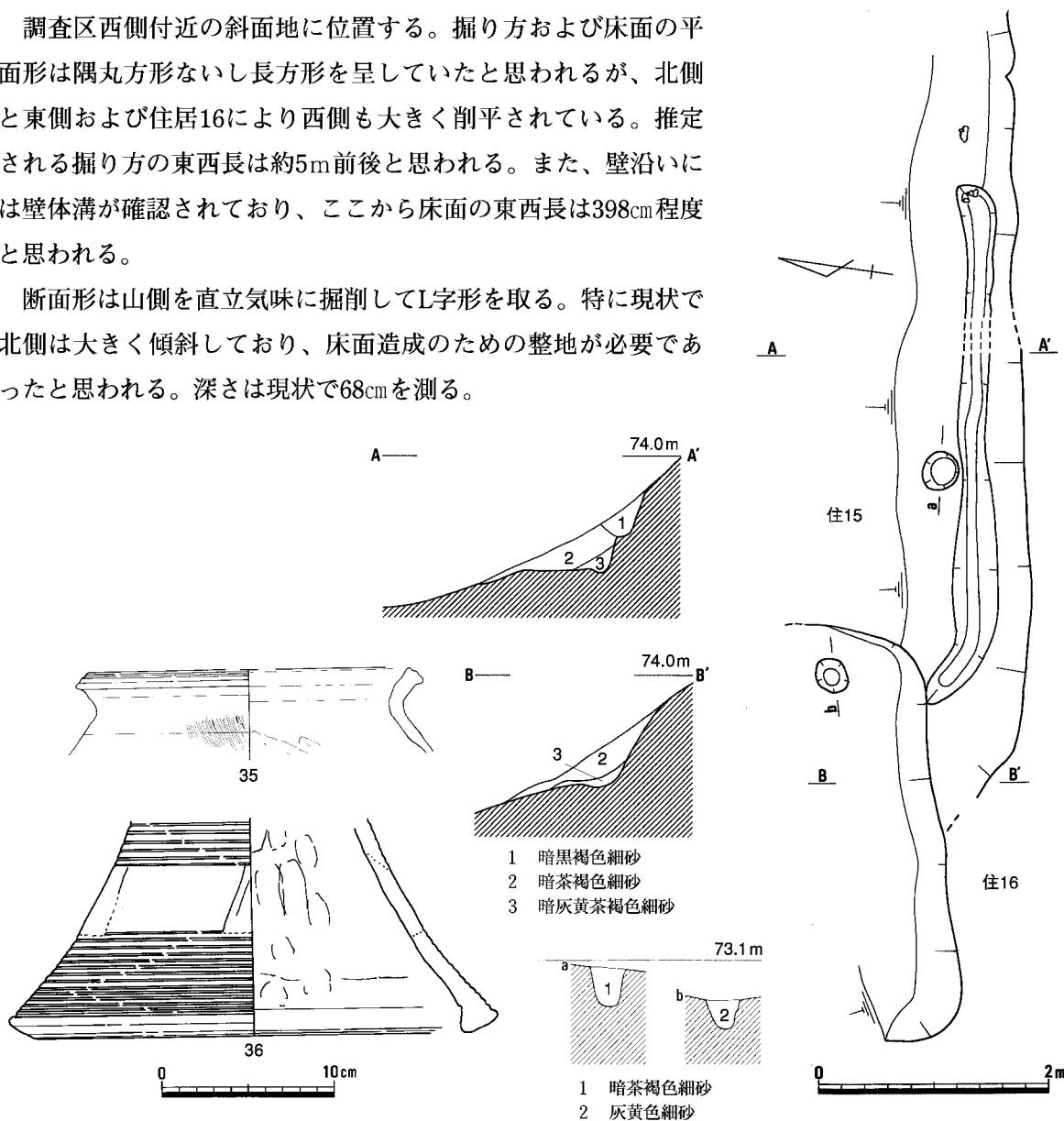
調査区中央付近の斜面地に位置する。掘り方および床面の平面形は隅丸方形ないし長方形を呈していたと思われるが、北側と土壌8で東側を大きく削平されている。推定で掘り方の東西長は495cm、床面の東西長は435cm程度を測る。断面形は山側を下部は直立気味に、上部は外上方に掘削してL字形を取る。ただし、現状で北側は大きく傾斜しており、しっかりした床面造成が必要であったと思われる。深さは現状で50cmを測る。壁体溝は確認できなかった。

柱構造については不明であるが、住居南側東西隅の位置で確認された柱穴a・bはこれに伴うものとして考えられ、柱間は295cmを測る。柱掘り方はいずれも円形を呈し、直径35~48cmで、深さ34~45cmを測る。また、柱痕跡がみてとれ、直径約20cm程度の柱材を使用していたと推測される。出土遺物は底径7.2cmを測る壺ないし甕34が出土している。時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居15 (第22図)

調査区西側付近の斜面地に位置する。掘り方および床面の平面形は隅丸方形ないし長方形を呈していたと思われるが、北側と東側および住居16により西側も大きく削平されている。推定される掘り方の東西長は約5m前後と思われる。また、壁沿いには壁体溝が確認されており、ここから床面の東西長は398cm程度と思われる。

断面形は山側を直立気味に掘削してL字形を取る。特に現状で北側は大きく傾斜しており、床面造成のための整地が必要であったと思われる。深さは現状で68cmを測る。



第22図 竪穴住居15・16(1/60)・竪穴住居15出土遺物(1/4)

柱構造については不明であるが、壁体溝で確認されたa柱穴はこれに伴うものとして考えられる。柱掘り方は円形を呈し、直径29cmで、深さ35cmを測る。

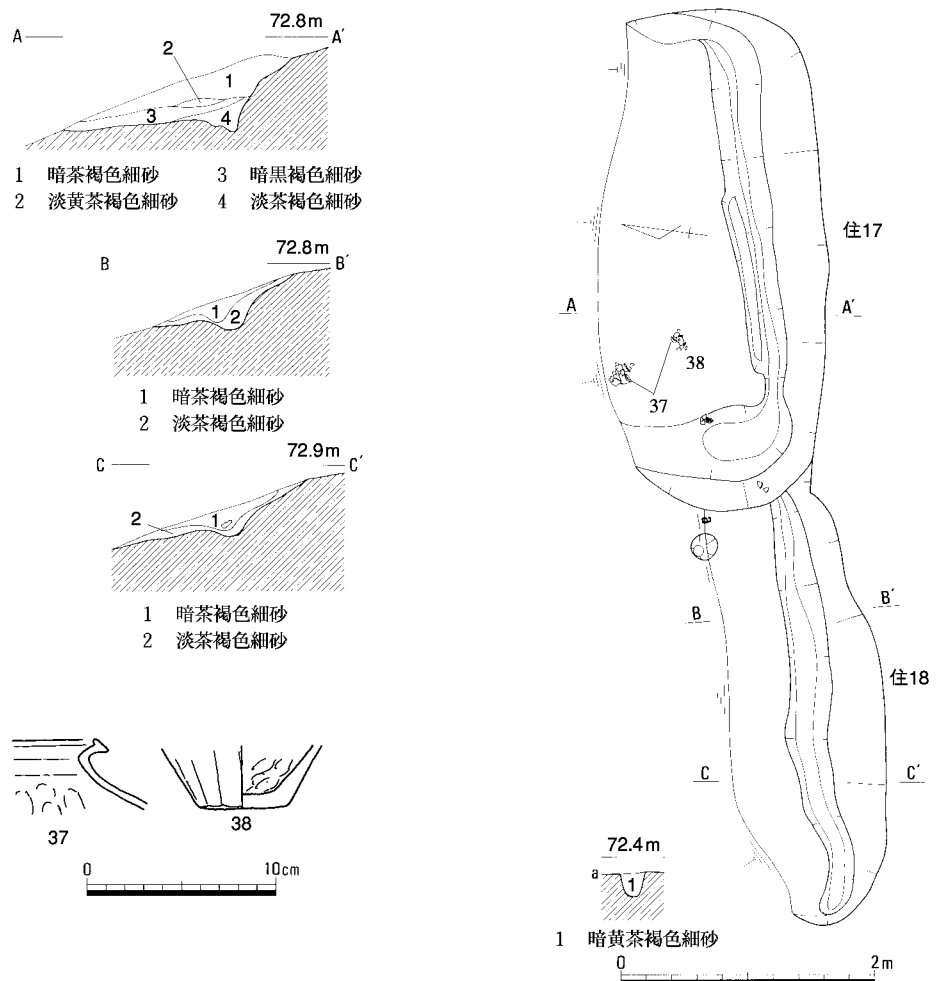
出土遺物は甕35、器台36などが出土している。甕35は口径18.6cmであり、ゆるく「く」の字に口縁部を屈曲させてやや肥厚した端部に2本の凹線文を施す。外面にハケメ、内面にヘラケズリが認められる。器台36は底径25.0cmを測り、円筒形から外方に開く脚裾部の外面に方形の透かし孔を配し、その上下段に数本の凹線文帯を巡らせている。脚端部は内側に肥厚させて、ヨコナデにより凹線文状とし、内傾する端面を作り出して内面接地となる。内面にはユビナデがみられる。弥生中期後半と思われる。

竪穴住居16（第22図）

調査区西端の斜面地に位置する。掘り方および床面の平面形は隅丸方形ないし長方形と思われるが、北側を大きく削平されている。現状で東西長は354cmである。壁体溝はみられなかったが、壁沿いはやや下がっている。断面形は山側を外上方に掘削してL字形を取るが、北側は大きく傾斜しており、床面造成のための整地が必要と思われる。深さは現状で64cmを測る。

柱構造については不明であるが、住居南側東隅で確認されたb柱穴はこれに伴うものとして考えられる。柱掘り方は円形を呈し、現状で直径25cm、深さ25cmを測る。なお、その立地から前述の住居15とは一連の構造体の可能性が高い。出土遺物はなかったが、弥生中期後半のものと思われる。

竪穴住居17（第23図）



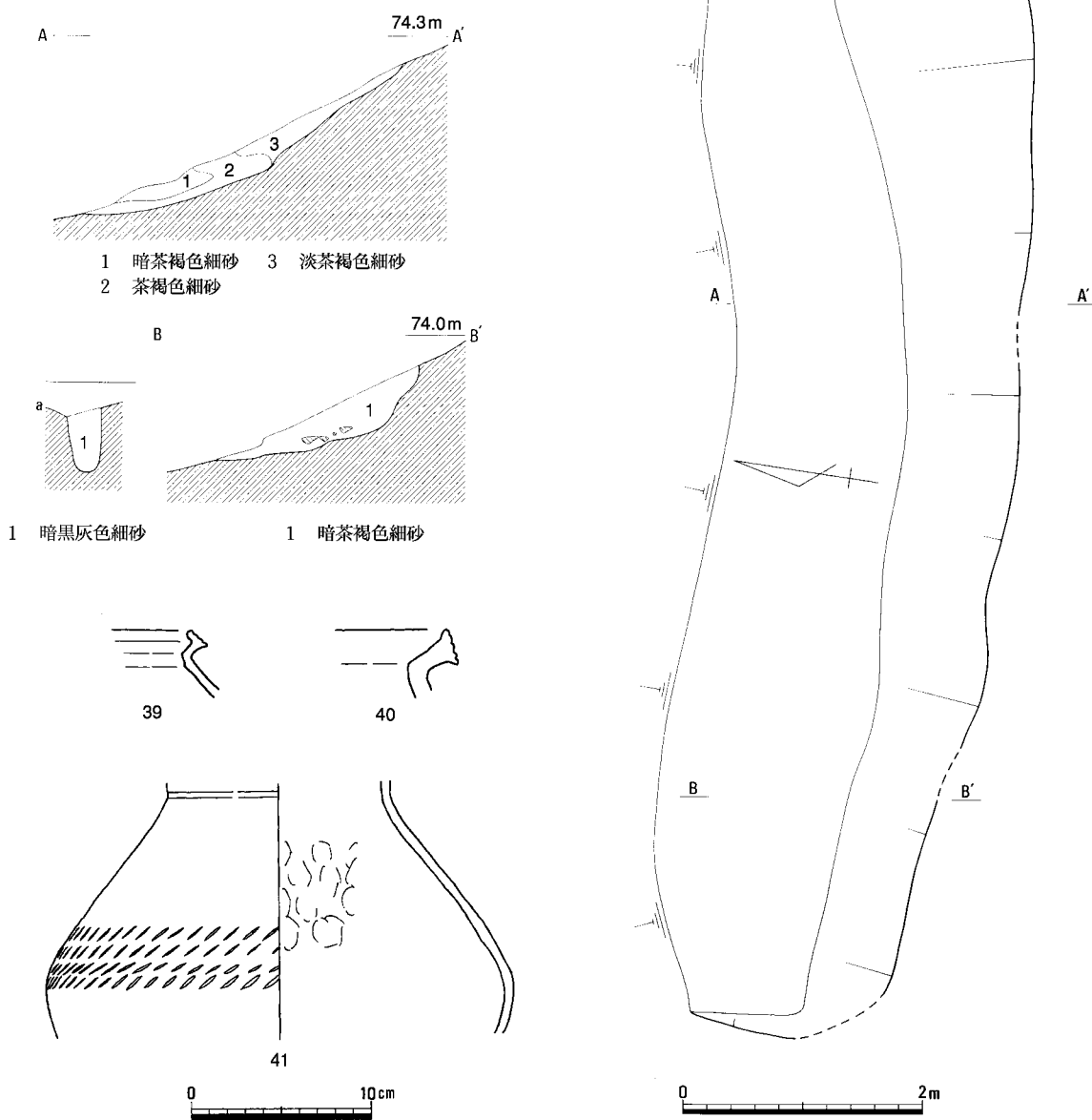
第23図 竪穴住居17・18(1/60)・竪穴住居17出土遺物(1/4)

調査区西側付近の斜面地に位置しており、北側は大きく削平されている。掘り方の平面形は隅丸方形を呈しており、壁沿いには壁体溝が確認されている。床面の平面形も同形で、東西長は295cmを測る。断面形は山側をやや外上方気味に掘削してL字形を取る。北側の傾斜地には、床面造成が行われたと思われる。深さは現状で55cmを測る。柱構造については不明である。

出土遺物は床面直上で甕37、壺ないし甕38などが出土している。甕37は体部から大きく「く」の字状に屈曲する口縁部から、端部を上下に拡張する。内面にはユビナデがみられる。壺ないし甕38は平底で底径4.8cmを測る。時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居18 (第23図)

調査区西端の斜面地に位置しているが、北側と住居17で東側は大きく削平されている。掘り方および床面の平面形は隅丸方形ないし長方形と思われ、住居17とほぼ同規模と考えられる。壁沿いには壁体溝が確認された。断

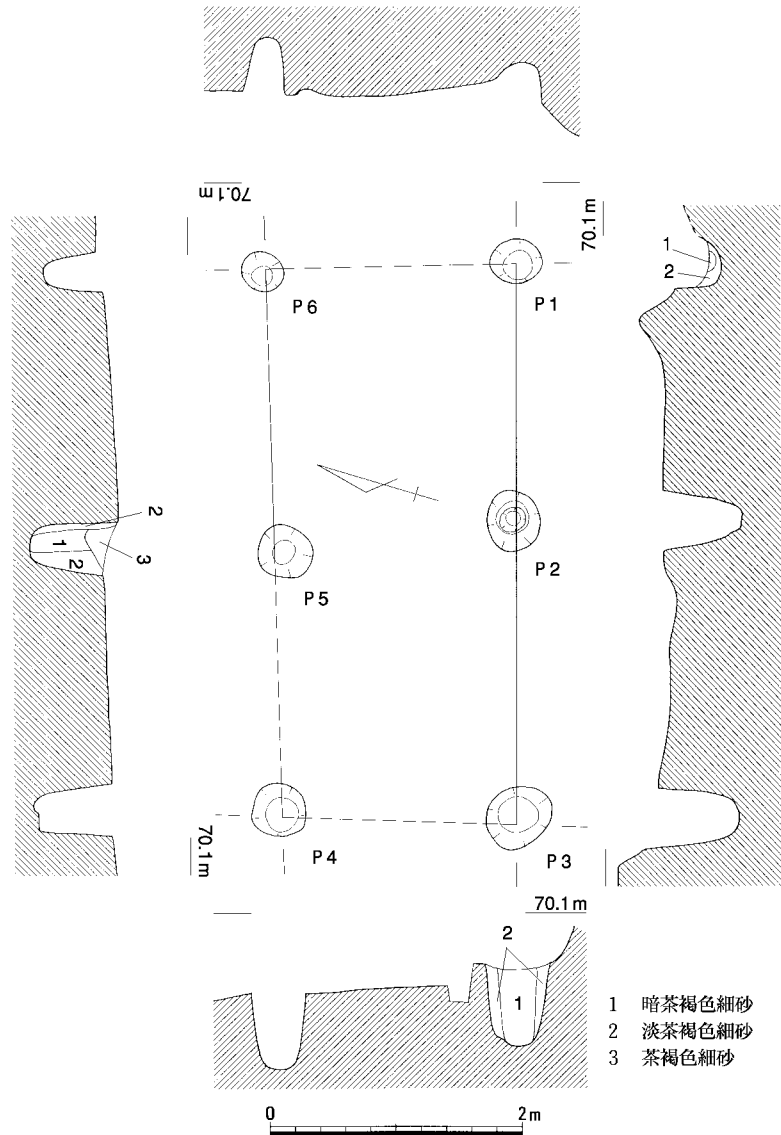


第24図 段状遺構1 (1/60)・出土遺物(1/4)

面形は山側をやや外上方気味に掘削してL字形を取ったと思われるが、崩落が著しい。北側の傾斜地には床面造成が行われたと思われる。深さは現状で36cmを測る。

柱構造については不明であるが、住居南側東隅で確認された柱穴aはこれに伴うものとして考えられる。柱掘り方は円形を呈し、現状で直径20cm、深さ17cmを測る。

なお、その立地から前述の住居17とは一連の構造体の可能性が高く、さらに、立地条件から住居15・16との関連も示唆に富む。図化し得ていないが、小片の遺物が出土している。時期は弥生中期後半と思われる。



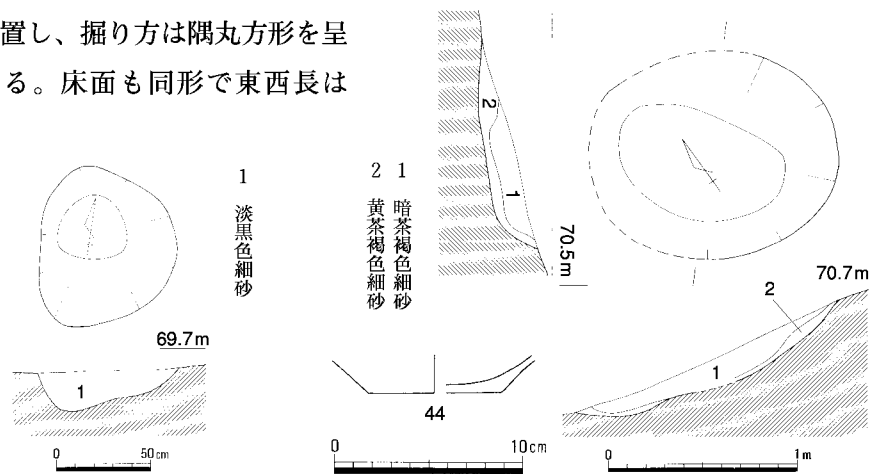
第25図 建物(1/60)・出土遺物(1/4)

段状遺構

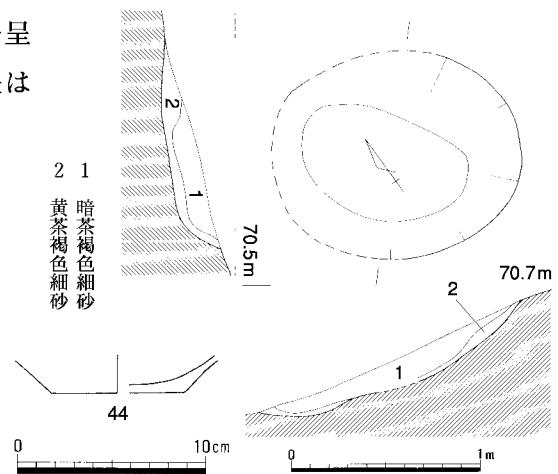
段状遺構1 (第24図)

調査区西側の斜面地に位置し、掘り方は隅丸方形を呈し、東西長は1046cmである。床面も同形で東西長は975cmを測る。断面形は山側をやや直立気味に掘削してL字形を取ったと思われるが、特に東側の崩落が著しい。深さは現状で59cmを測る。

柱構造は不明であるが、南側東隅の位



第26図 土壌 5 (1/40)



第27図 土壌 6 (1/40)・出土遺物(1/4)

置で確認できた柱穴aはこれに伴うものとして考えられ、柱掘り方は楕円形で直径35~45cmで、深さ53cmを測る。

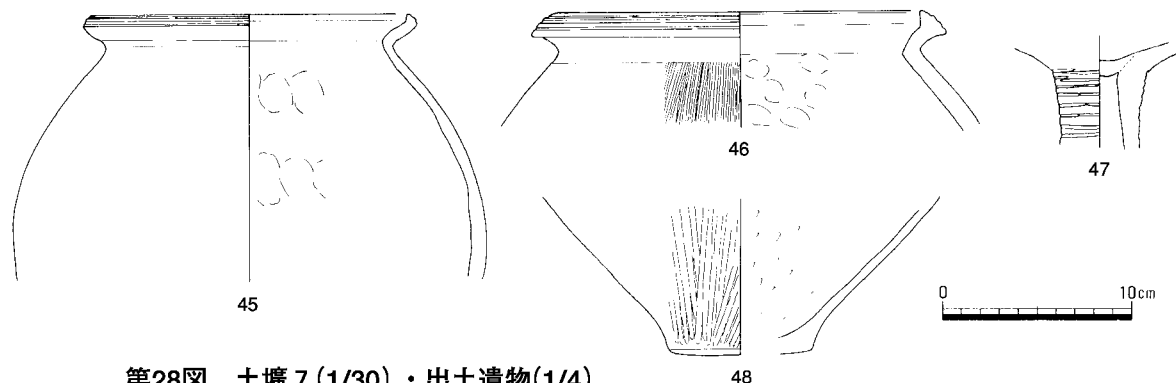
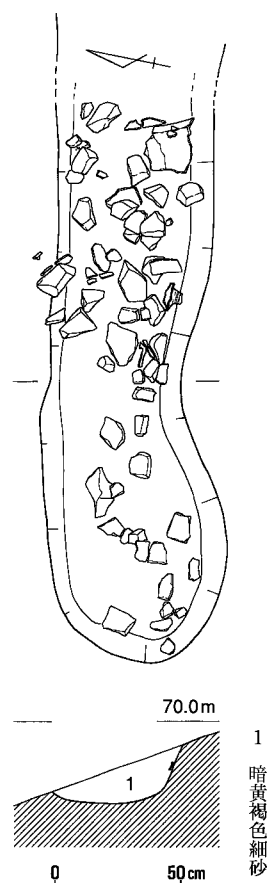
遺物は壺41、甕39・40などがみられる。壺41は体部中央に最大径を有し、上位に四重の連続刺突文と頸胴部に凹線文を巡らす。内面には指頭圧痕を残す。甕39は体部から「く」の字状に屈曲する口縁部から、主に端部を上方に拡張して3本の凹線文を施す。甕40は体部から大きく「く」の字状に外上方に開く口縁部から、端部を上下に拡張気味に肥厚させて、4本の凹線文を施す。時期は弥生中期後半と思われる。

建 物

建物 (第25図)

調査区中央付近に位置する1×2間の建物である。規模は南北長198cm、東西長435cmで、床面積は8.6㎡である。柱間は芯心で198cm、210cm、225cm、237cmをそれぞれ測る。掘り方は円形を呈し、直径35~53cm、深さ48~65cmを測る。また、柱痕跡がみてとれ、直径約20cm程度の柱材を使用していたと推測される。

遺物をみると、壺42は口縁端部を肥厚させ主に下方に拡張している。壺43は頸部に凹線文を施している。時期は弥生中期に入ると思われる。



第28図 土壌 7 (1/30) ・ 出土遺物(1/4)

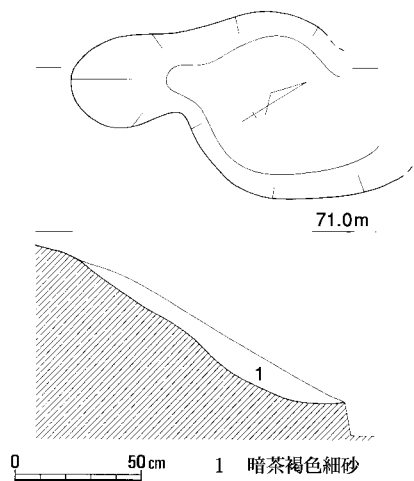
土 壙

土壙 5 (第26図)

調査区東側に位置する。平面形は不整円形を呈し、長径83cm、短径75cmを測る。断面形は楕円で、深さは19cmを測る。出土遺物なかった。時期は弥生時代後期と思われる。

土壙 6 (第27図)

調査区東側に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈し、長径138cm、短径109cm、深さ14cmを測る。遺物は底径7.1cmの壺ないし甕44がある。時期は弥生後期と思われる。



第29図 土壙 8 (1/30)

土壌7 (第28図)

調査区東側に位置している。平面形態は長楕円形で、長径260cm以上、短径71cmを測る。断面形は底面が丸い逆台形状を呈し、深さは24cmである。埋土中には10~30cm大の角礫が多量に包含されており、上方からの流れ込みの可能性もあるが、周辺の状況から人為的な集石と思われる。

遺物は甕45・46、壺ないし甕48、高杯47などが出土している。甕45は口径16.8cmで、球形状の体部から「く」の字にゆるく外上方に延び、端部は面をもって上方に引き上げている。端面には2本の凹線文を施す。内面には指頭圧痕を残す。甕46は口径19.2cmを測り、体部から短く「く」の字に屈曲する口縁部に、上下に拡張気味に肥厚した端部に3本の凹線文を施す。体部外面にはハケメ、内面には指頭圧痕を残す。壺ないし甕48は底径7.6cmで底部は平底であるが、やや凸状になる。高杯47は脚柱部のみ残存しており、杯部の接合は円盤充填法を用い、外面には沈線文を数条巡らしている。時期は弥生後期前半と思われる。

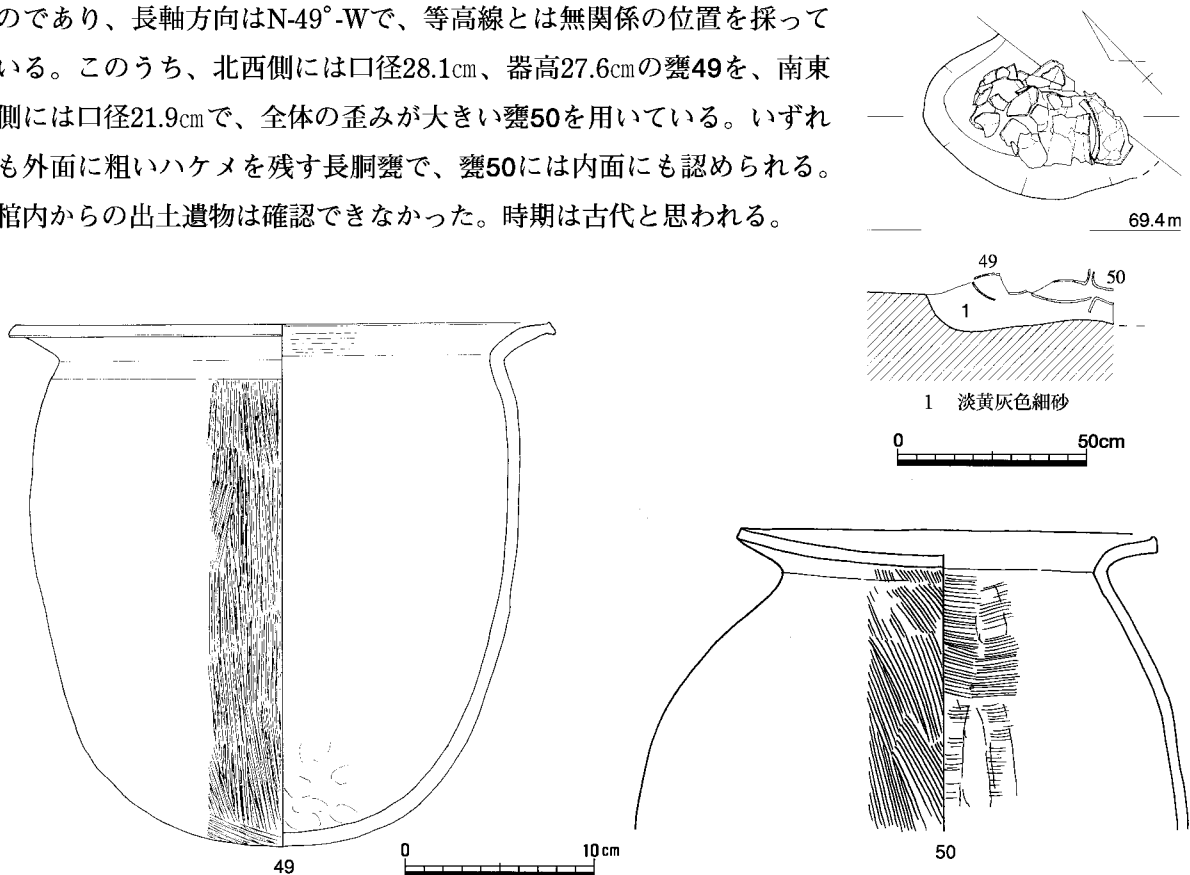
土壌8 (第29図)

調査区中央付近で確認された。平面形態は不整楕円形を呈し、長径120cm以上、短径73cmである。断面形は皿状を呈し、現状で深さは13cmを測る。出土遺物はみられない。時期は不明である。

土器棺墓

土器棺墓 (第30図)

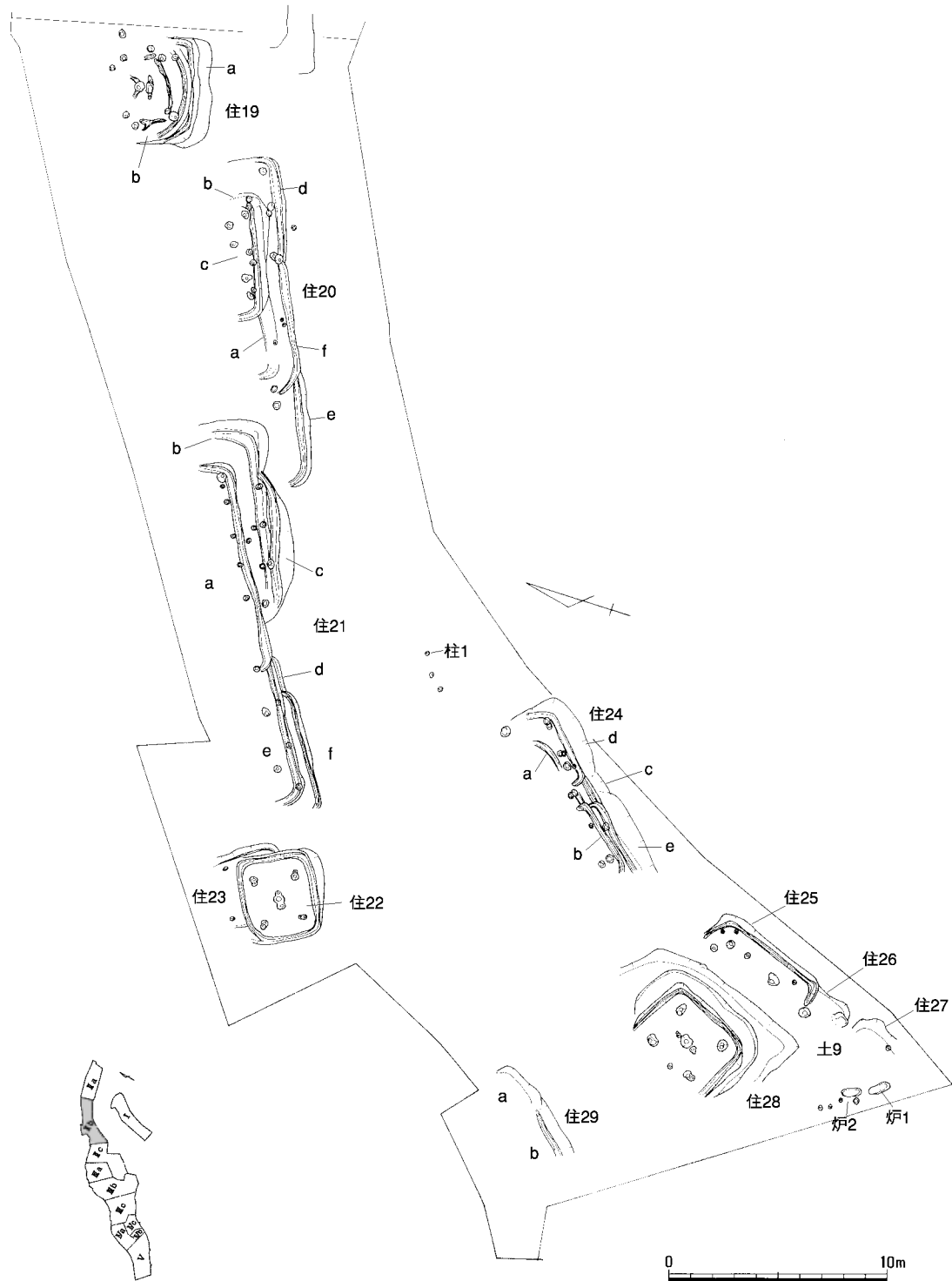
調査区中央付近の斜面地に位置する。掘り方の平面形態は楕円形を呈していたと思われる。断面形態は平底から外方に立ち上がり、現状で深さは16cmである。土器棺は2個体の土師器甕を合口にしたものであり、長軸方向はN-49°-Wで、等高線とは無関係の位置を採っている。このうち、北西側には口径28.1cm、器高27.6cmの甕49を、南東側には口径21.9cmで、全体の歪みが大きい甕50を用いている。いずれも外面に粗いハケメを残す長胴甕で、甕50には内面にも認められる。棺内からの出土遺物は確認できなかった。時期は古代と思われる。



第30図 土器棺墓(1/20)・出土遺物(1/4)

3 II b区の調査

II b区は才地遺跡の中央北東付近に位置する調査区である。基本的に南東から北西に下がる急斜面であるが、小尾根の張り出しや後述する II C区との境にある谷部などによって、さらに複雑な地形を呈している。遺構は竪穴住居11軒、炉2基、土壇1基、柱穴などが検出された。このうち竪穴住居には、複数回の建て替えが認められるものが多くみられ、検出総数は27軒である。



第31図 II b区遺構配置図(1/300)

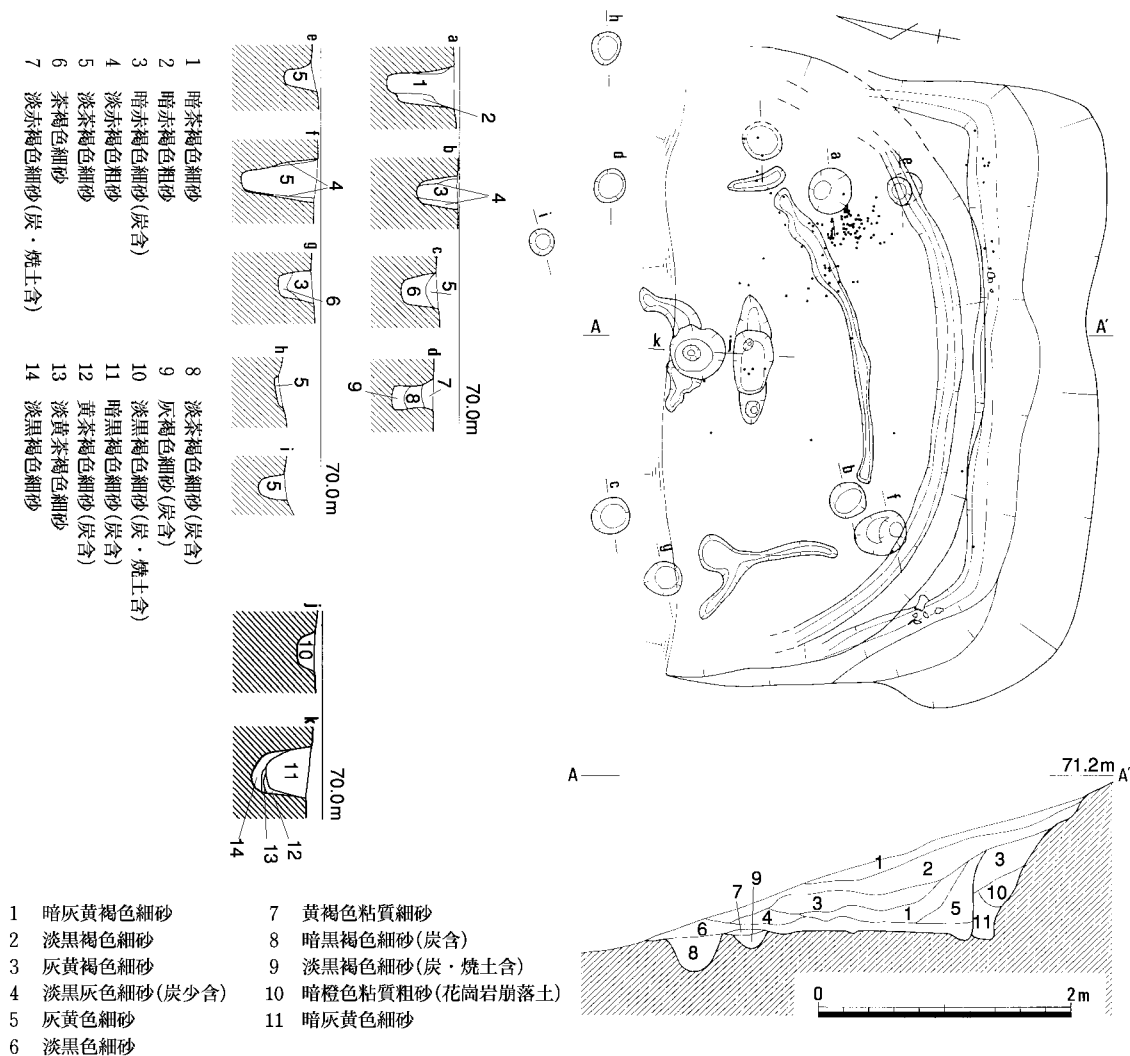
竪穴住居

竪穴住居19 (第32・33・34図)

調査区北東端の斜面地で確認された。調査結果から方形の住居19a埋没後に、新たに円形の住居19bが作られたことが明らかとなった。

竪穴住居19aの掘り方の平面形は、ほぼ長方形を呈していたと思われ、東西長は385cmを測り、南北長は主柱穴の位置関係からこれより短いと思われる。床面の平面形も同形で、東西長は359cmである。貼り床は認められなかったが、水平で堅くよくしまっていた。壁面に沿っては壁体溝が確認された。断面形態は床面からやや外方気味に掘削してL字形を取り、検出面から床面までの深さは98cmを測る。柱構造は主柱が4本柱と思われ、柱穴e・fはこれらに相当する。主柱柱間は276cmを測る。北側は判然としなかった。主柱掘り方はほぼ円形を呈し、直径27~36cmで、深さ23~55cmを測る。床面中央では長さ52cm、幅28cm、深さ13cmを測る断面で示す隅丸方形の中央穴が検出された。

竪穴住居19bは掘り方および床面は円形を呈していたと思われ、前者は直径506cm、後者は直径428cm程度を測るとと思われる。貼り床は認められなかったが、水平で堅くよくしまっていた。壁面に沿っては壁体溝が確認された。土層断面をみると、床面から住居19a廃棄後の堆積土に対しほぼ垂直



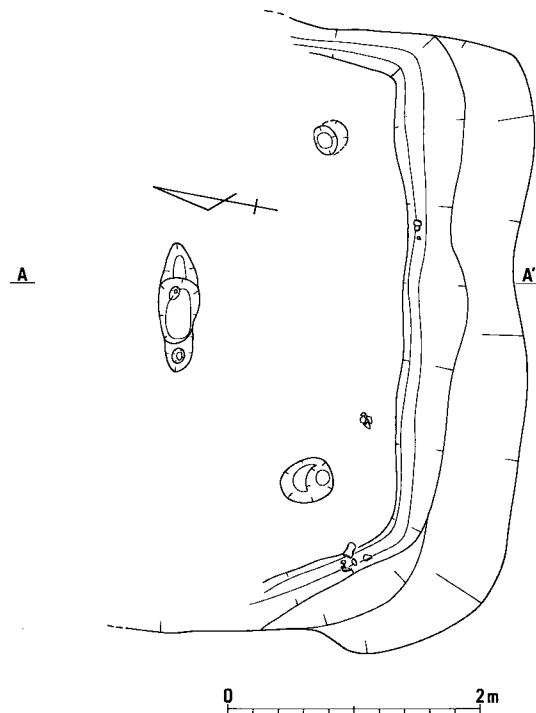
第32図 竪穴住居19(1/60)

に掘削してL字形を取っており、検出面から床面までの深さは105cmを測る。柱構造は主柱が4本柱であり、柱穴a・b・c・dが相当する。主柱柱間は東西方向が215～245cm、南北方向が170～180cmを測る。主柱掘り方は円形を呈し、直径36～25cmで、深さ25～53cmを測る。床面の中央では長径44cm、深さ45cmを測るk断面で示す円形の中央穴が検出され、東西に溝が二方向延びる。また、柱穴間に間仕切り溝が切られている。

遺物は高杯51・52、石鏃S8・S9などが出土し、高杯51、石鏃S9は床面直上から検出された。高杯51は口径19.5cm、底径10.2cm、器高10.9cmを測る。深い椀形の杯部の外面口縁部に3本の凹線文を施す。脚柱部から「ハ」の字状に開く脚裾部に円孔を4個配す。端部は上方にヨコナデにより面取りを行う。外面および杯部内面にヘラミガキ、内面脚部にハケメがみられる。高杯52は挿入により杯部の接合を行う脚部である。石鏃S8・S9はサヌカイト製である。石鏃S8は平基式で、現状で最大長25.0mm、最大幅15.0mm、最大厚3.7mmを測り、重さ1.33gである。石鏃S9は完形品で、最大長17.0mm、最大幅8.0mm、最大厚3.5mmで、重さ0.29gである。これらの時期は弥生後期後半と思われる。

竪穴住居20（第35・36・37・38図）

調査区東側の斜面地で検出された6軒の住居であり、住居19から約1.5m南西に位置する。検出状況と土層堆積から住居20a→20b



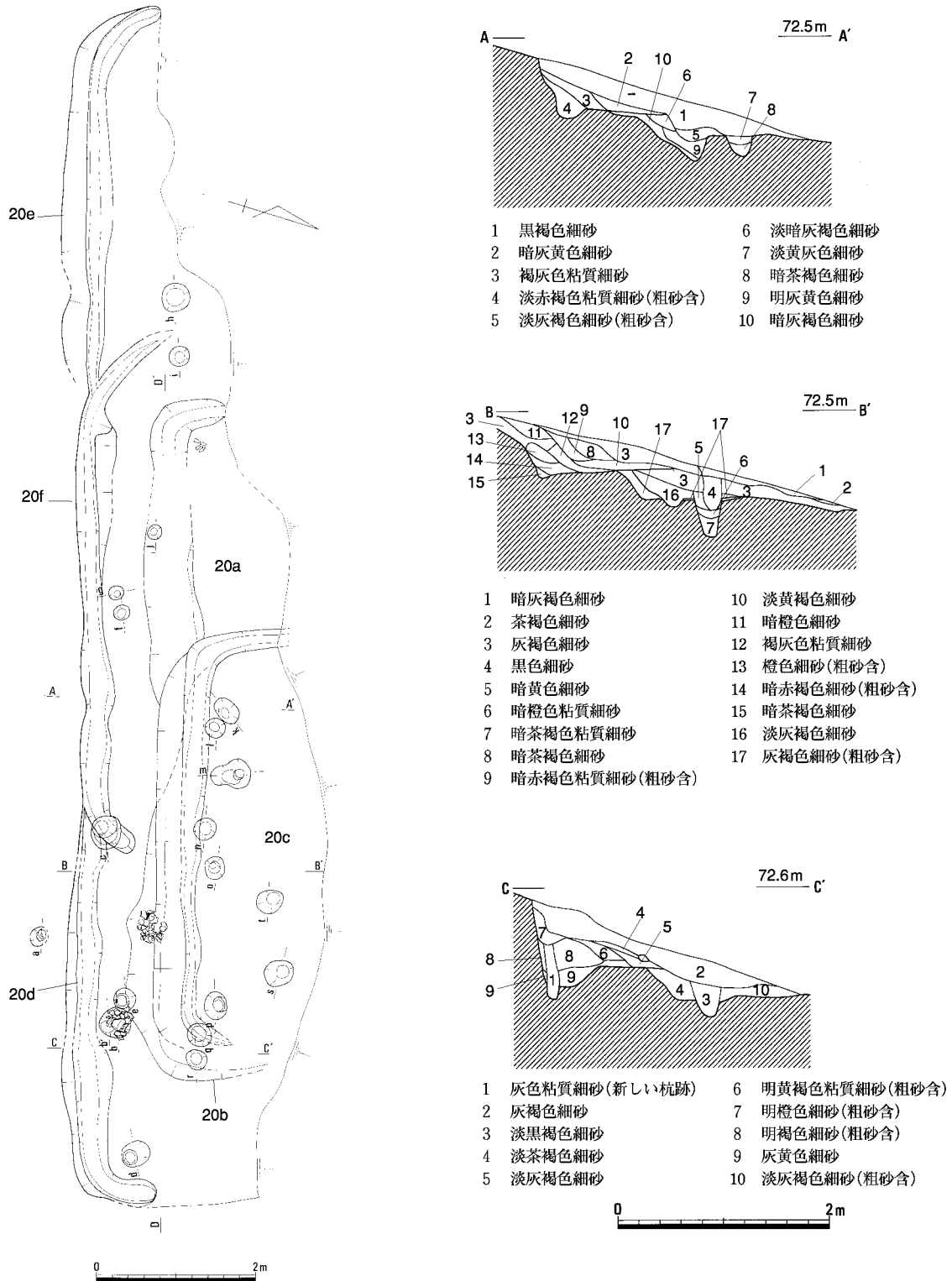
第33図 竪穴住居19a(1/60)



第34図 竪穴住居19b(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

→20c→20d⇔20e→20fの順に築造されたと思われる。

基本的に掘り方および床面は長方形ないし隅丸方形を呈していたと思われる。壁面に沿っては壁体溝が確認された。断面形態は床面からほぼ垂直に立ち上がり、L字形を取る。いずれにしても北側の傾斜地には大規模な床面造成が行われたと思われる。柱穴は合計21個検出したが、個々の対応は判然



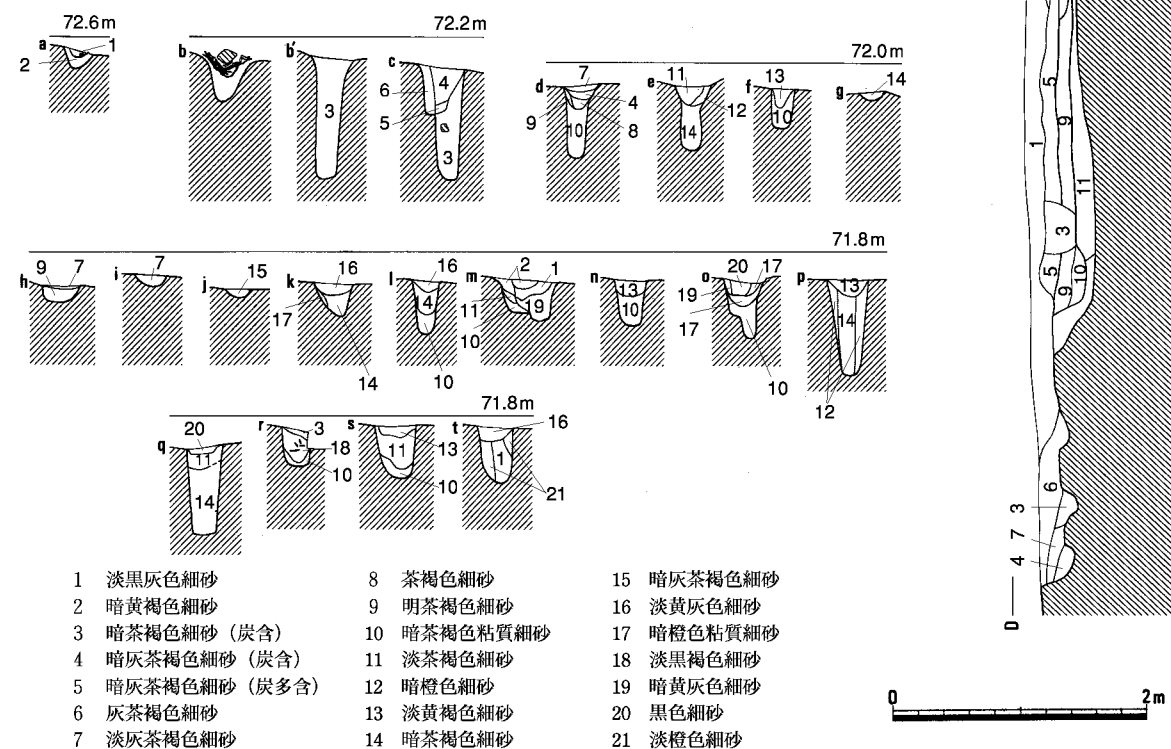
第35図 竪穴住居20(1/80・1/60)

としない。掘り方はいずれも円形を呈し、直径15~32cmで、深さ6~105cmを測るが検出地点により差異が大きい。一部には柱痕跡がみてとれ、直径約15cm程度の柱材を使用していたと推測される。

竪穴住居20aは壁体溝のみ検出した。遺物は底径5.4cmの壺ないし甕53が出土した。

竪穴住居20bは深さ23cmを測る。出土遺物は床面直上土器溜まりで把手付壺61、甕54~58、壺ないし甕62、高杯59・60などがある。把手付壺61は口径10.0cmで、頸胴部に沈線文と刺突文を施し、短く直口する口縁部を有して端部は面をもつ。また、体部上半には横位の把手をもつ。甕54は口径17.0cmで球形状の体部に、短く「く」の字状に屈曲する口縁部から肥厚する外面端部に2本の凹線文を施す。甕55は口径9.5cmで、短く「く」の字状に屈曲する口縁部から上下に拡張する外面端部に2本の凹線文を施す。外面体部にハケメ、内面にユビナデがみられる。甕56は口径14.0cmで、短く「く」の字状に屈曲する口縁部から上下に拡張する外面端部に2本の凹線文を施す。外面体部にハケメ、ヨコナデがみられる。甕57は口径13.6cmで短く「く」の字状に屈曲する口縁部から上方に拡張する外面端部に強いヨコナデを行う。外面体部にハケメの後、上半に二重刺突文を施し、内面に指頭圧痕がみられる。甕58は球形状の体部の外面にハケメの後ヘラミガキ、内面にヘラケズリ、ユビナデがみられる。壺ないし甕62は底径6.4cmの平底である。

高杯59は口径23.6cmで皿状の杯部から内傾気味に口縁部が立ち上がり、端部が内側に肥厚して面取りする。外面口縁部は4



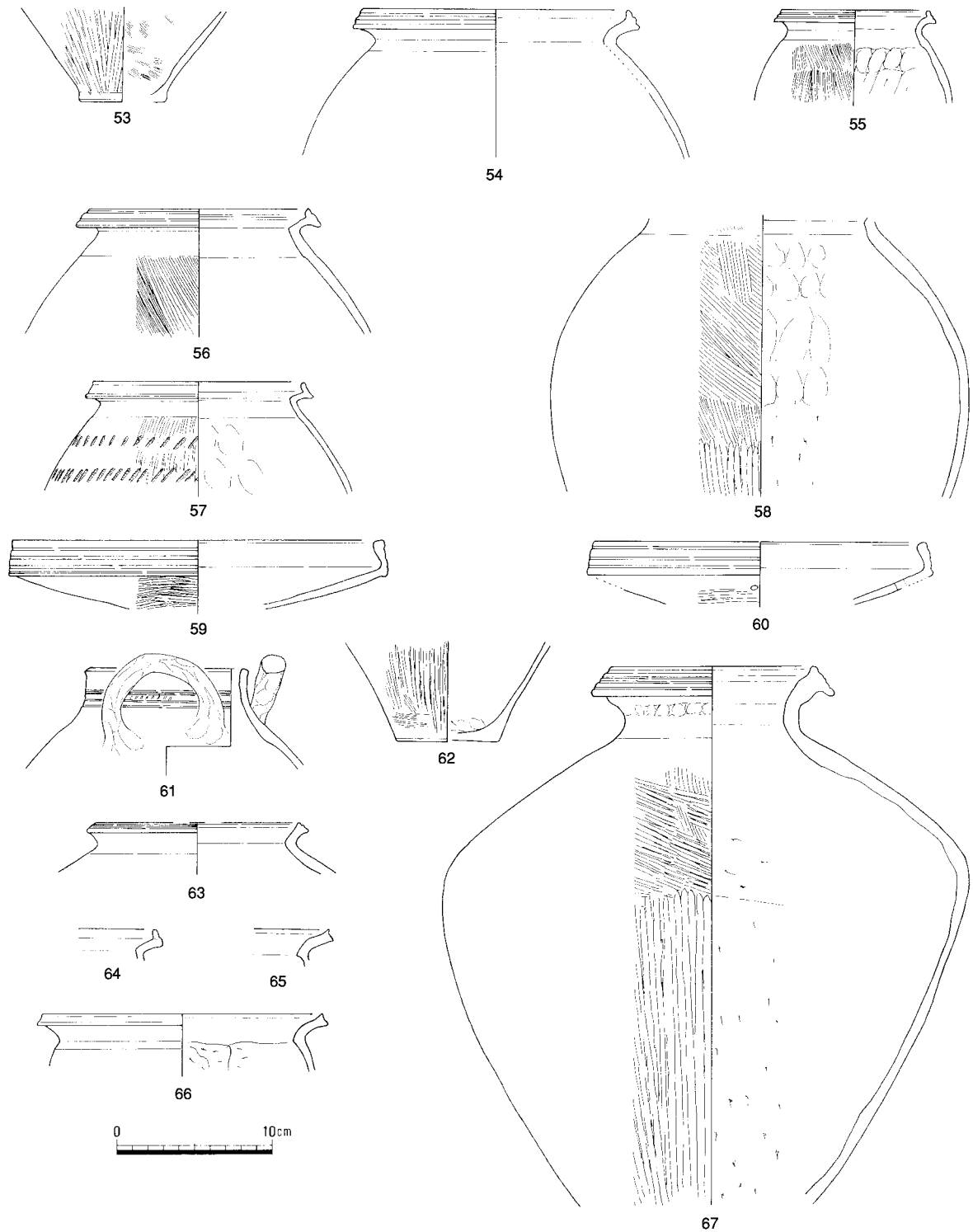
第36図 竪穴住居20土層断面図(1/60)

本凹線文を施し、杯部にはヘラミガキがみられる。高杯60は口径21.4cmで杯部に円孔を配す。高杯59と形成、調整の特徴が類似する。

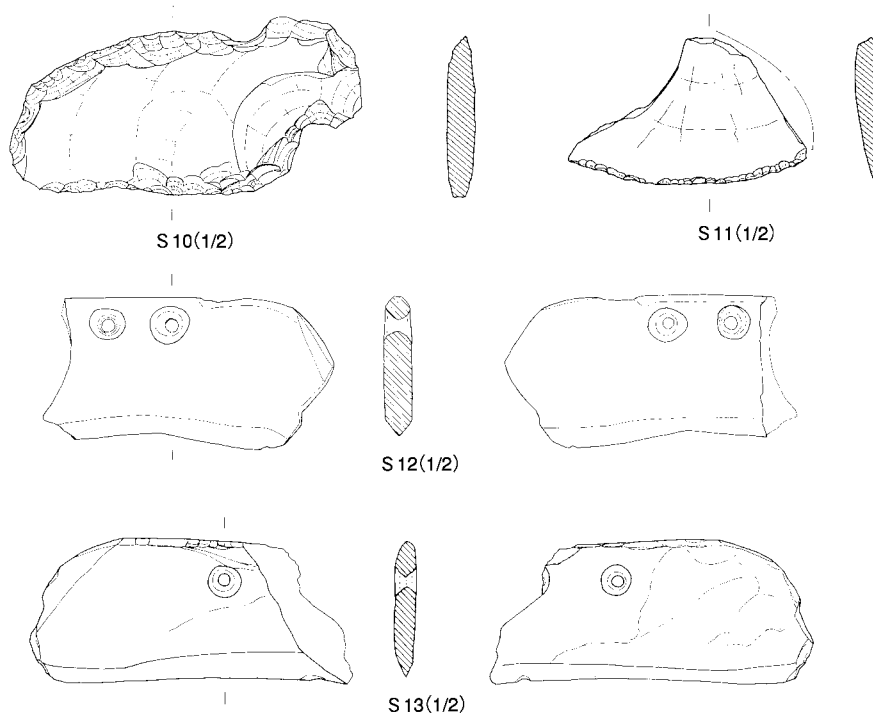
竪穴住居20cは掘り方の東西長が488cm、同床面長が460cm、深さ25cmを測る。

竪穴住居20dは深さ59cmを測る。遺物は壁体溝内で甕63が出土した。甕63は口径13.1cmで、短く「く」の字状に屈曲する口縁部から下方に肥厚する外面端部に2本凹線文を施す。

竪穴住居20eは深さ44cmを測る。出土遺物は甕64がある。甕64は「く」の字状に屈曲する口縁部から



第37図 竪穴住居20出土遺物 1 (1/4)



第38図 竪穴住居20出土遺物 2 (1/2)

上方に拡張する外面端部に凹線文を施す。

竪穴住居20fは掘り方の東西長が507cm、床面が505cm程度、深さ47cmを測る。出土遺物は甕65がある。甕65は外上方に延びる口縁部の端部に強いヨコナデを行う。

このほかとして、柱穴内で甕66、壺67、床面付近で石匙S10、スクレイパーS11、磨製石包丁S12・S13などが出土した。甕66は口径18.0cmで甕65と形成、調整の特徴が類似する。壺67は口径13.0cmで、最大径は体部上半にもち、外湾する頸部に外上方に延びる口縁部から上下に肥厚して拡張する外面端部に、4本凹線文を施す。外面にハケメの後、ヘラミガキ、内面にはヘラケズリを行う。

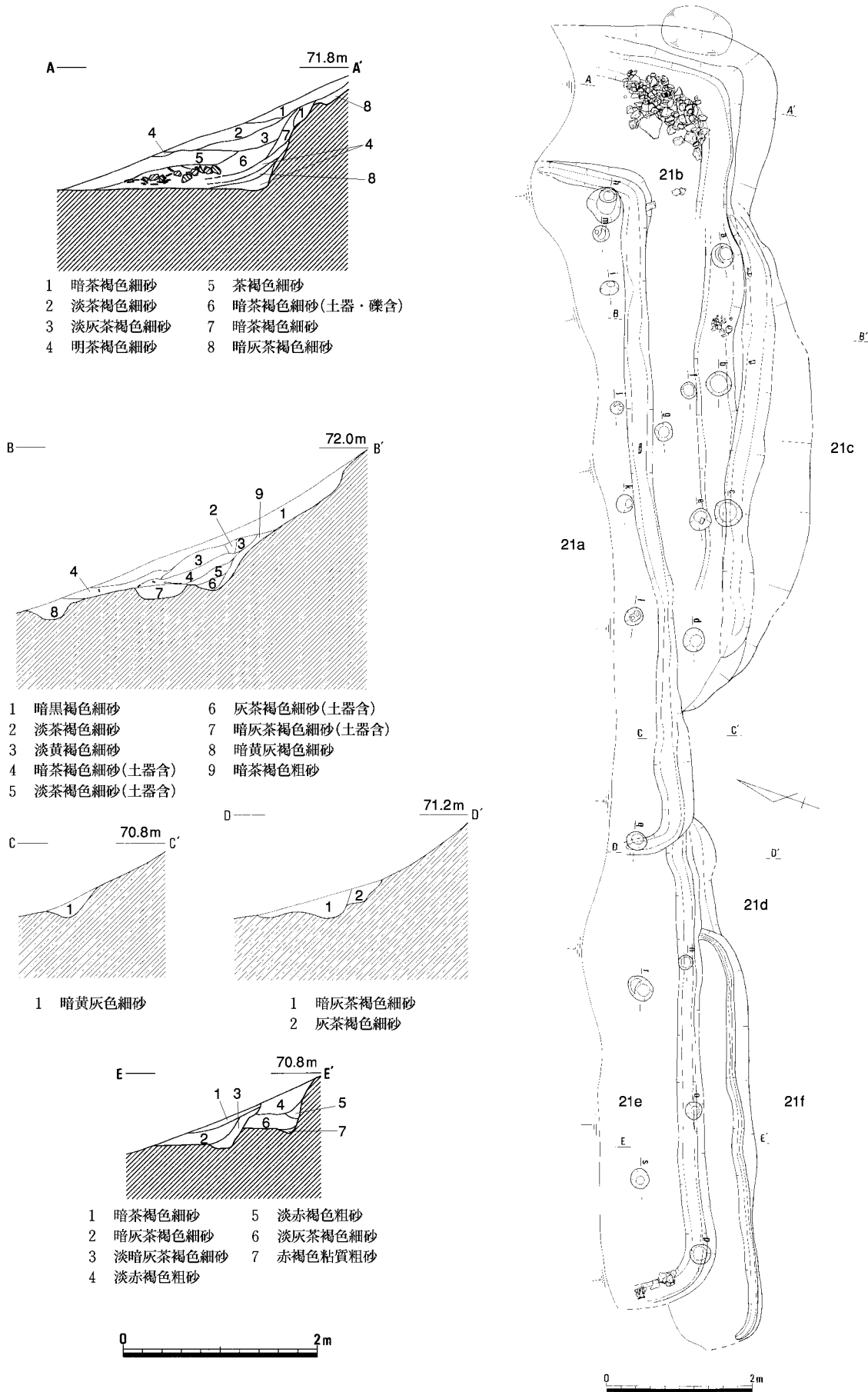
石匙S10、スクレイパーS11はサヌカイト製の完形品であり、前者は最大長92.5mm、最大幅47.0mm、最大厚8.5mmを測り、重さ40.47gである。後者は最大長63.0mm、最大幅38.5mm、最大厚6.5mmを測り、重さ12.06gである。磨製石包丁S12は流紋岩製で、最大長77.0mm、最大幅40.5mm、最大厚7.0mmで、重さ35.36gである。磨製石包丁S13は最大長85.0mm、最大幅38.5mm、最大厚6.0mmを測り、重さ29.50gである。これらの時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居21 (第39・40・41・42図)

調査区中央付近の斜面地で検出された6軒の住居であり、住居20から約1.0m北に位置する。検出状況と土層堆積から住居21d→21f→21e→21a→21b→21cの順に築造されたと思われる。

基本的に掘り方および床面は長方形ないし隅丸方形を呈したと思われる。壁面に沿っては壁体溝が確認された。断面形態は床面からほぼ垂直に立ち上がり、L字形を取るが、上部は崩落が著しい。いずれにしても北側の傾斜地には大規模な床面造成が行われたと思われる。柱穴は合計19個検出した。掘り方はいずれも円形を呈し、直径17～33cmで、深さ11～70cmを測るが検出地点により差異が大きい。一部には柱痕跡がみてとれ、直径約15cm程度の柱材を使用していたと推測される。

竪穴住居21aは掘り方が900cm、床面が860cm程度を測る。柱穴は柱穴h・i・j・k・l・mが伴ってい



第39図 竪穴住居21 (1/80・1/60)

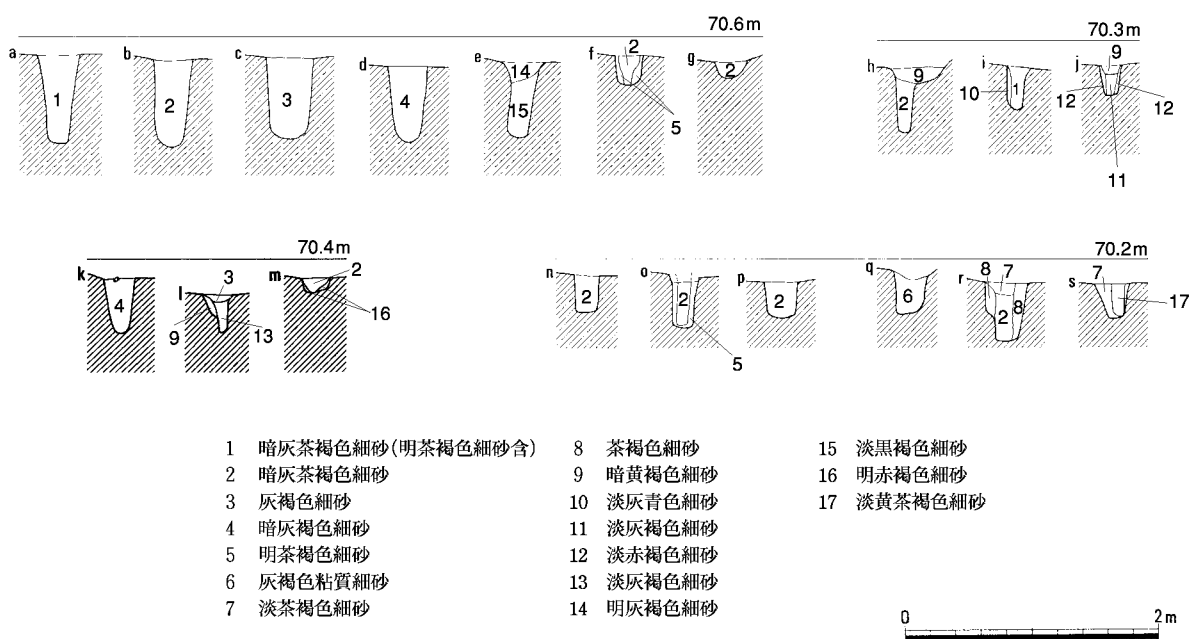
た可能性がある。出土遺物は頸部に凹線文を施す壺68がある。

竪穴住居21bは深さ89cmを測る。柱穴は柱穴d・e・fが伴っていた可能性がある。なお、住居東隅に多量の拳～人頭大の礫と土器片の集中箇所が認められた。堆積土層からは流れ込みを呈するが、人為的な投棄の可能性も考えられる。遺物は壺69・70、甕71～74、壺ないし甕80～83、高杯75・76・78・79、台付鉢77がみられ、甕74、高杯78以外はすべて集石遺構から出土した。

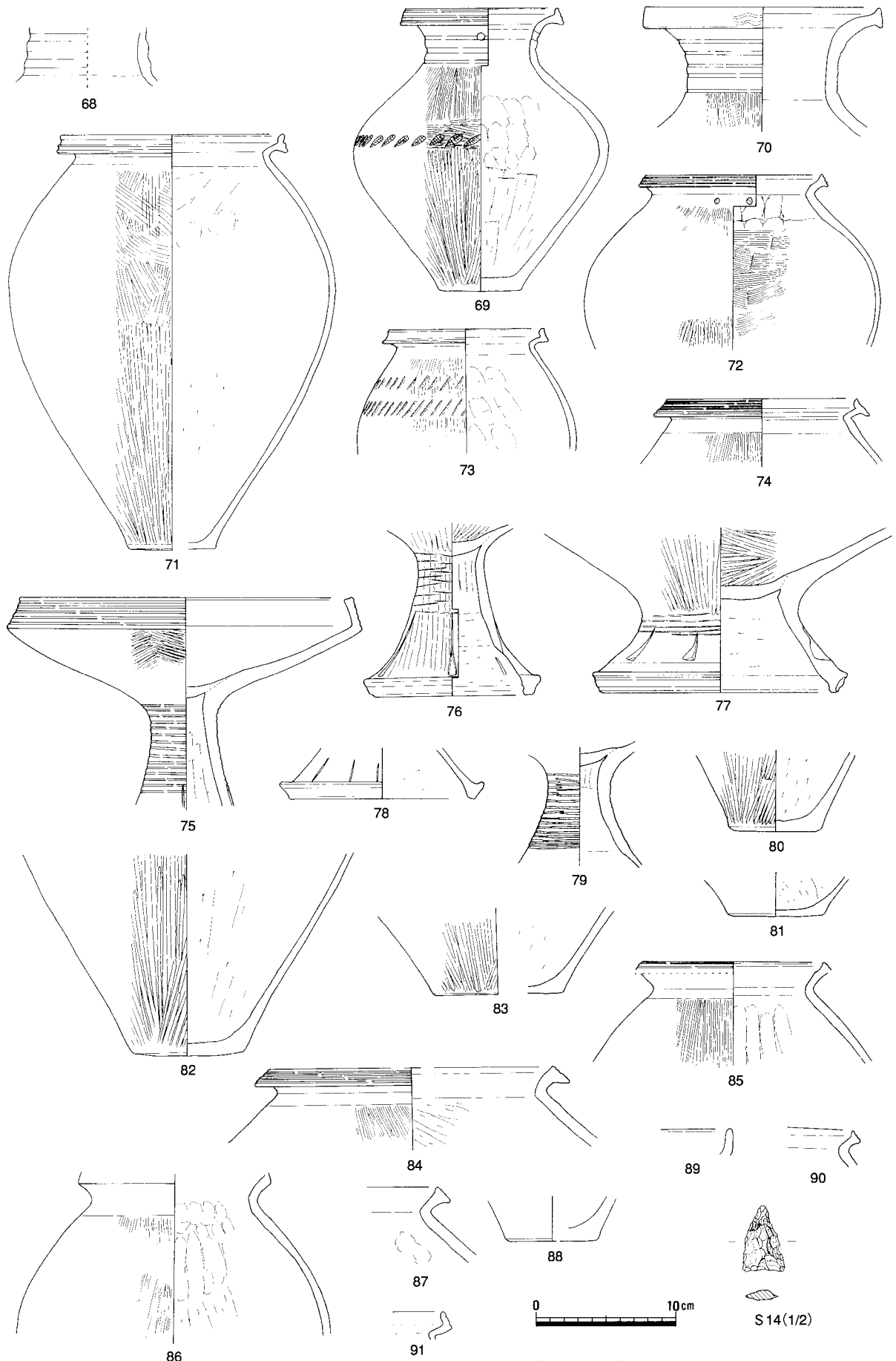
壺69は口径10.8cm、底径5.6cm、器高20.1cmを測る。平底で最大径を体部中位にもち、その上部に刺突文を巡らす。短い頸部には3本の凹線文を施し、円孔を2個配す。外湾する口縁部から上方に肥厚して拡張する外面端部に3本の凹線文を行う。外面体部にはハケメの後、ヘラミガキ、内面はヘラケズリ、ユビナデがみられる。壺70は口径16.6cmで、頸部には5本の凹線文を施し、外湾する口縁部から上下方にやや肥厚して拡張する外面端部に4～5条の波状文を行う。外面体部にはハケメがみられる。

甕71は口径16.0cm、底径6.0cm、器高29.6cmを測る。平底で最大径を体部上半にもち、短く「く」の字状に屈曲する口縁部から上方に拡張する外面端部に2本の凹線文を行う。外面体部にはハケメの後、ヘラミガキ、内面はヘラケズリ、ユビオサエがみられる。甕72は口径12.6cmで、球形状の体部から短く「く」の字状に屈曲する口縁部から肥厚する外面端部に3本の凹線文を行う。また頸部に円孔を2個一対配する。外面体部にはハケメの後、ヘラミガキ、内面はハケメ、ユビナデがみられる。甕73は口径11.0cmで体部上半に二重の刺突文を巡らし、短く「く」の字状に屈曲する口縁部から上方に拡張する強いヨコナデを行う。外面体部にはハケメ、内面はユビナデがみられる。甕74は口径13.6cmで、短く「く」の字状に屈曲する口縁部から上下方に拡張する外面端部に5本の凹線文を行う。外面体部にはハケメがみられる。壺ないし甕80は底径6.6cm、81は底径6.9cm、82は底径7.7cm、83は底径9.0cmをそれぞれ測る。

高杯75は口径23.6cmで、深い皿状の杯部に内傾する口縁部を有し、端部は面取りを行う。口縁部外面は5本の凹線文を巡らす。杯部と脚部は円盤充填法を用いて接合し、脚柱部は多条沈線文と縦位未貫通の透かし孔を施す。杯部外面にヘラミガキがみられる。高杯76は底径11.2cmで、杯部と脚部は円



第40図 竪穴住居21土層断面図(1/60)



第41図 竪穴住居21出土遺物 1 (1/4・1/2)

盤充填法を用いて接合し、脚柱部は7条沈線文、脚裾部は三角形の透かし孔を6個施す。脚裾端部は肥厚させて内面接地する。外面および内面杯部にヘラミガキ、内面脚部にヘラケズリがみられる。高杯78は底径13.0cmで、脚裾部は線刻による未貫通の透かし孔を施し、脚裾端部は肥厚させてヨコナデし、内面接地する。内面脚部にヘラケズリがみられる。高杯79は杯部と脚部は円盤充填法で接合し、脚柱部は多条沈線文を行う。

台付鉢77は底径16.8cmで、鉢部と脚部は円盤充填法を用いて接合し、脚柱部に沈線文を行い、脚裾部は未貫通の三角孔を9個施す。脚裾端部は肥厚させ、2本凹線文を行って内面接地する。外面および内面杯部にヘラミガキ、内面脚部にヘラケズリがみられる。

竪穴住居21cは深さ129cmを測る。柱穴は柱穴a・b・cが伴っていたと考えられる。遺物は甕84が壁体溝内から出土した。甕84は口径20.2cmで、短く「く」の字状に屈曲する口縁部から肥厚して下方に拡張する外面端部に4本の凹線文を行う。外面体部にはハケメ、内面はユビナデがみられる。

竪穴住居21dは壁体溝のみの検出で、柱構造は不明であった。遺物はみられなかった。

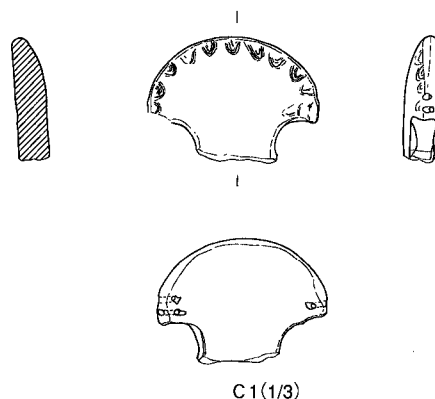
竪穴住居21eは深さ43cmを測る。柱穴はq・r・s柱穴が伴っていた可能性がある。遺物は甕85～87・90、壺ないし甕88、高杯89などがあり、甕90以外はすべて床面直上から出土している。甕85は口径13.0cmで、体部から外上方に延びる口縁部から面取りした端部外面に2本の凹線文を行う。外面体部にはハケメ、内面はユビナデがみられる。甕86は体部からゆるく外上方に延びる口縁部を有し、外面体部にはハケメ、内面はユビナデがみられる。甕87は短く「く」の字状に屈曲する口縁部から肥厚して下方に拡張する外面端部に凹線文を行う。甕90は短く「く」の字状に屈曲する口縁部から肥厚して上下方に拡張する外面端部に凹線文を行う。壺ないし甕88は底径6.2cmを測る平底である。高杯89は口縁部のみ残存する。

竪穴住居21fは掘り方が543cm、床面が525cm程度、深さ51cmを測る。柱穴は柱穴n・o・pが伴っていたと思われる。出土遺物は甕91がある。甕91は短く「く」の字状に屈曲する口縁部から上方に拡張する外面端部に2本の凹線文を行う。

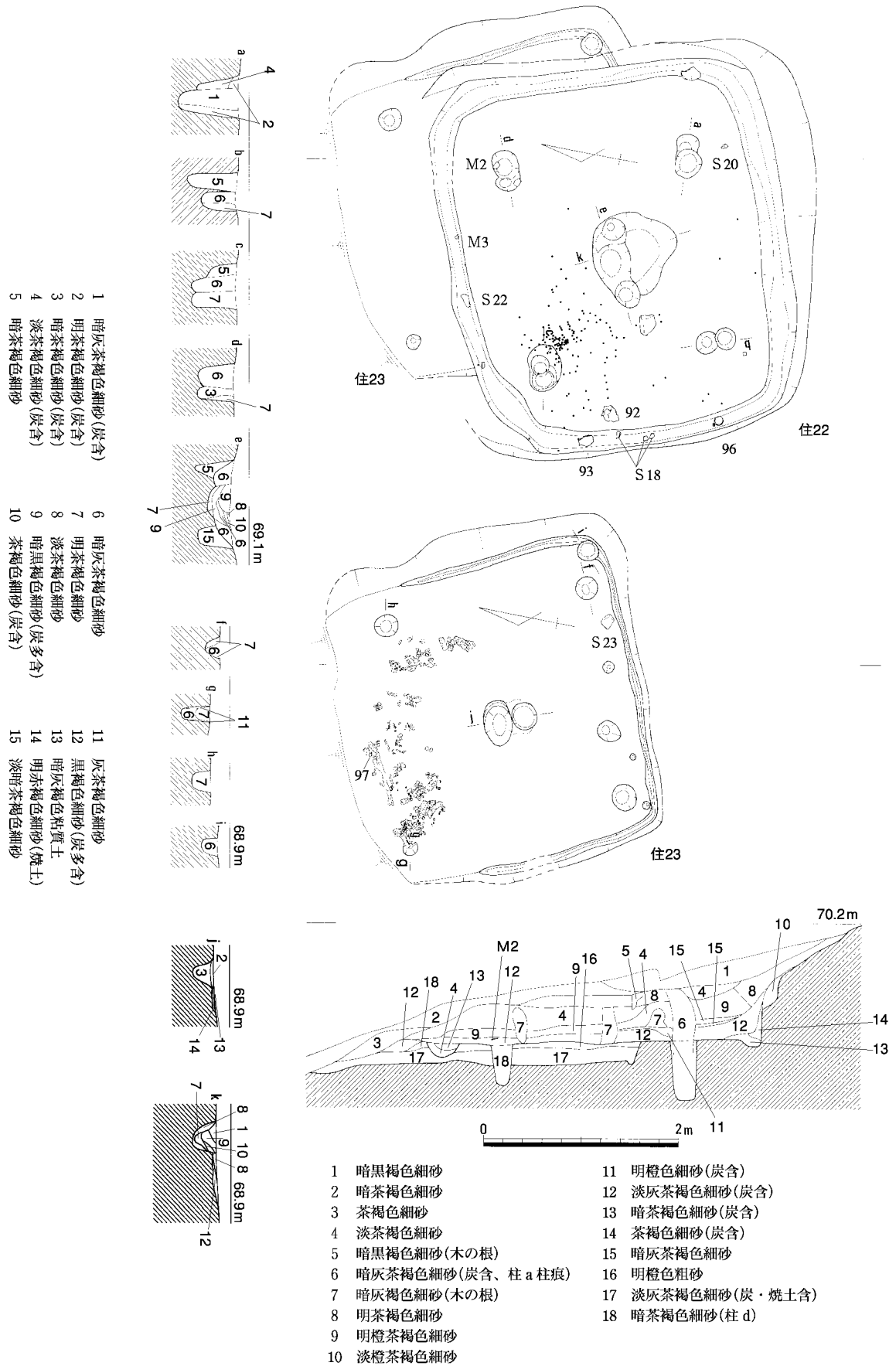
このほかに、住居21eないし21fで石鏃S14などが出土している。石鏃S14は平基式の完形品でサヌカイト製である。法量は最大長24.0mm、最大幅15.0mm、最大厚4.0mmで、重さ1.00gである。また、分銅形土製品C1は、現状で最大長49.0mm、最大幅36.5mm、最大厚8.9mmを測り、上面端部に円弧状の沈線を配し、両端側に穿孔を施す。これらの時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居22 (第43・44図)

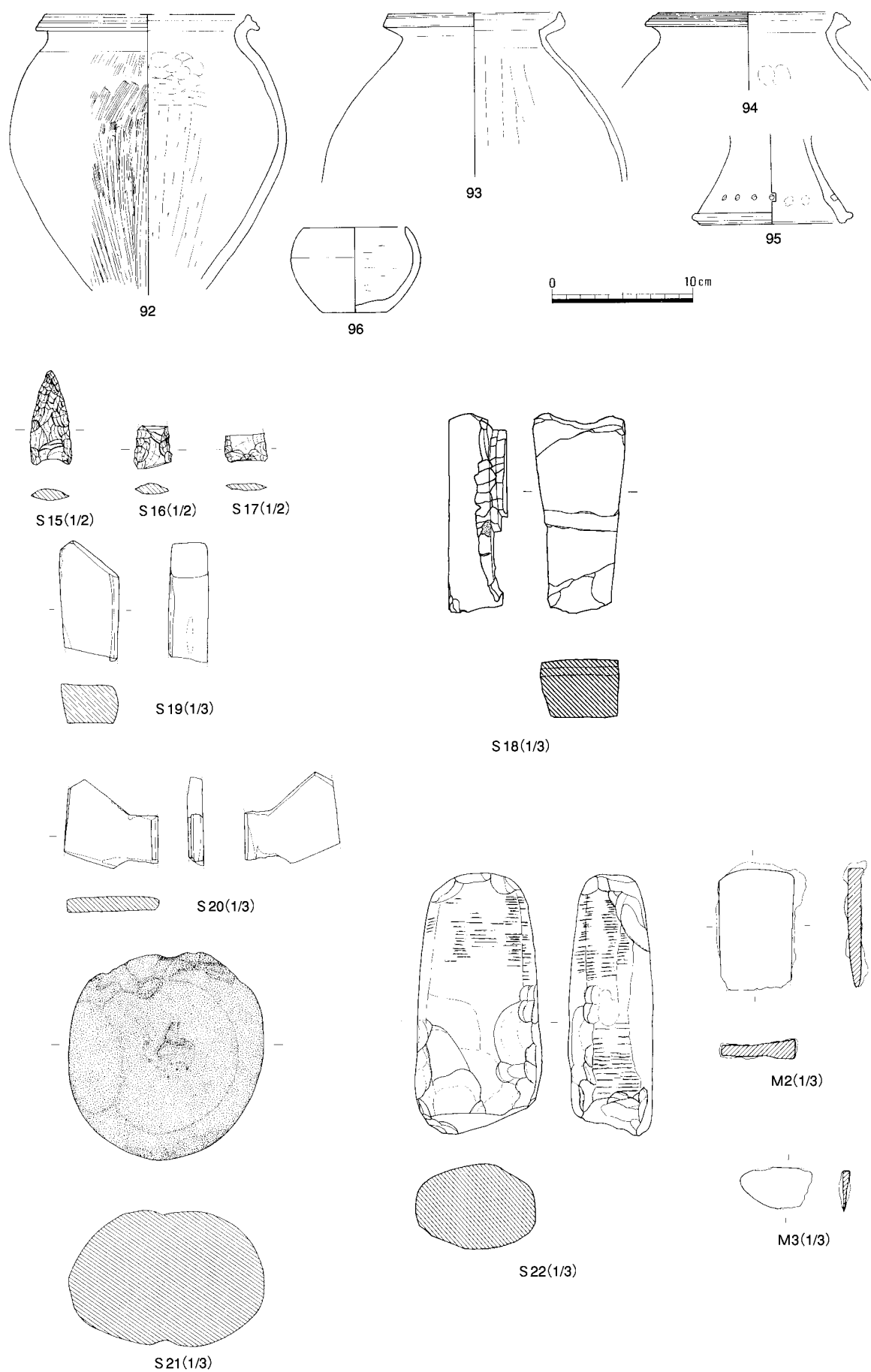
調査区中央付近の斜面地に位置しており、掘り方の平面形は北側に削平を一部受けているが、ほぼ長方形を呈していたと思われ、東西長395cmを測る。床面の平面形も同形で、東西長は341cm、南北長は301cm程度と思われる。土層断面をみると、床面下部は焼失住居である住居23廃棄後に約20cm程度の第16層(明橙色粗砂)を充填し、約5cm程度の第15層(明灰茶褐色細砂)を貼り床として用いており、水平で堅くよくしまっていた。断面形態は上位付近の一部はやや開口しているが、山側をほぼ垂直に掘削してL字形を取っており、検出面から床面までの深さは122cmを測る。



第42図 竪穴住居21出土遺物 2 (1/3)



第43図 竪穴住居22・23(1/60)



第44図 豎穴住居22出土遺物(1/4・1/2・1/3)

柱構造は主柱が4本柱であり、柱穴a・b・c・dがこれに相当し、いずれも建て替えが認められる。主柱柱間は東西方向が198～210cm、南北方向が190～198cmを測る。主柱と側壁の距離は30～50cmと推定される。主柱掘り方はいずれもほぼ円形を呈し、直径20～25cmで、深さ38～58cmを測る。また、柱痕跡がみてとれ、それらから直径約20cm程度の柱材を使用していたと推測される。

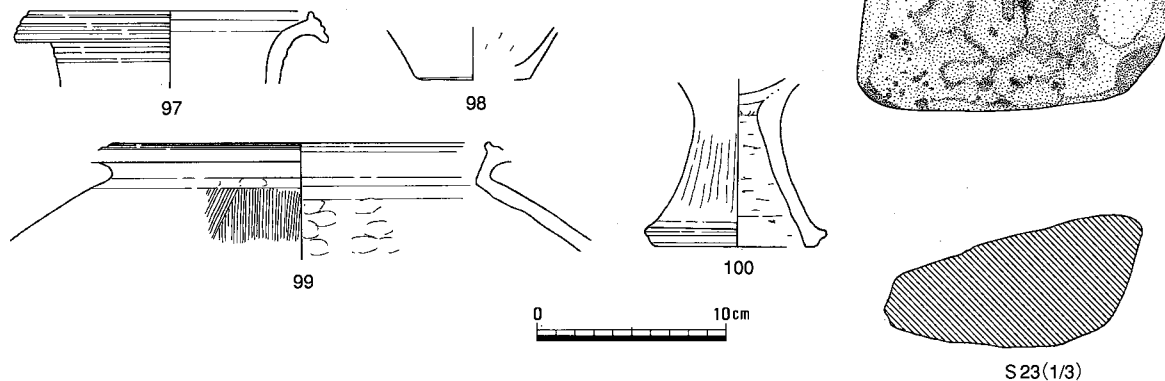
床面中央では長径46cm、短径35cm、深さ24cmを測る楕円形の中央穴が検出され、その南側に浅い窪みが、両端部には小柱穴が付属していた。また、床面北西部を中心にサヌカイトの剥片が多数散布しており、住居内で石器製作を行っていたと考えられる。

遺物は、甕92～94、高杯95、鉢96、石鏃S15～S17、砥石S18～S20、凹石S21、磨製石斧(転用敲き石)S22、鉄斧M2、刀子M3などが出土している。このうち、床面直上からは甕92、石鏃S15～S17、砥石S20、鉄斧M2などがみられ、壁体溝からは甕93・94、高杯95、鉢96、砥石S18・S19、磨製石斧(転用敲き石)S22、刀子M3などが確認された。

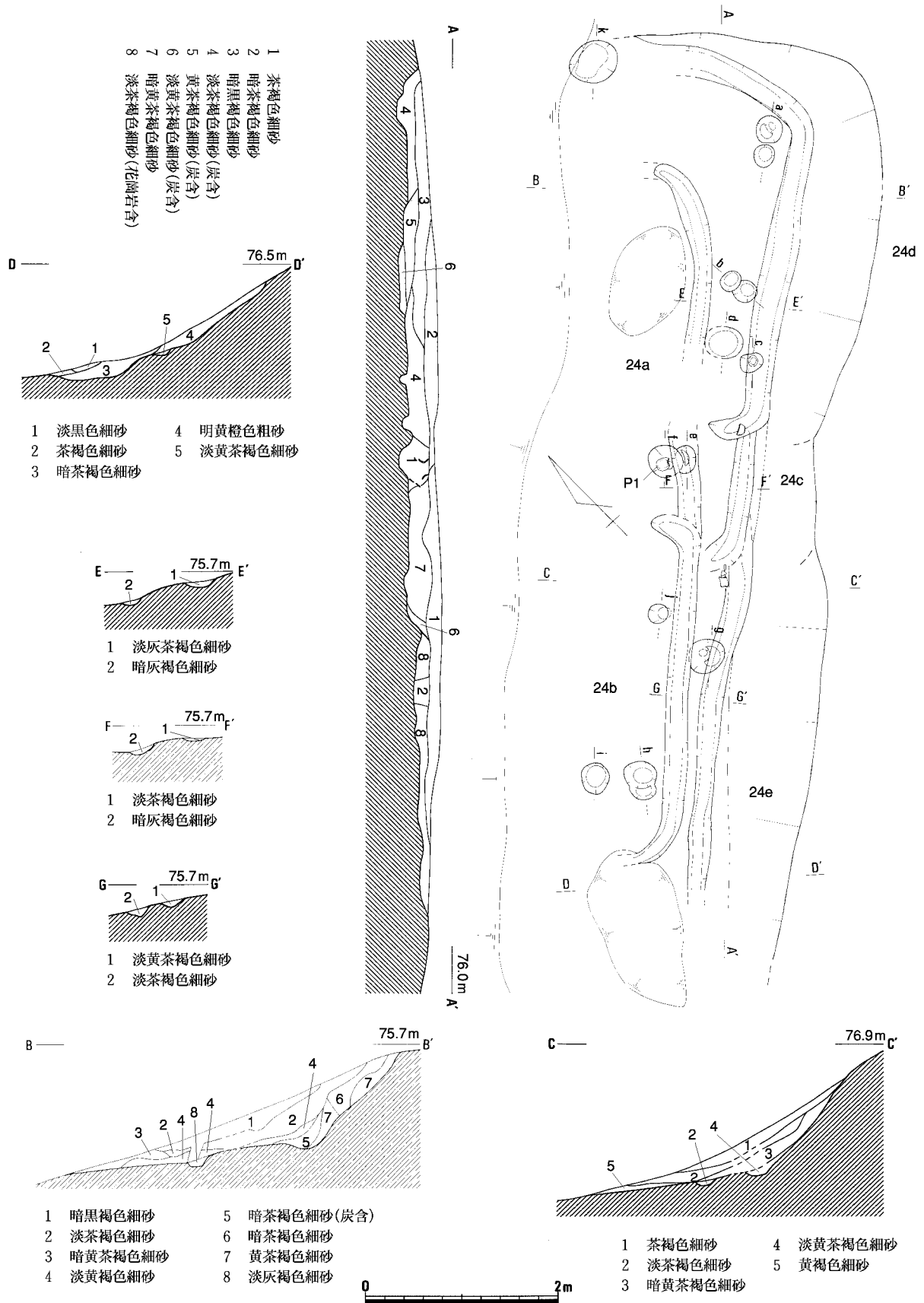
甕92は口径14.0cmであり、体部からゆるく「く」の字状に湾曲した口縁部に、下方を拡張して肥厚する外面端部へ2本の凹線文を施す。外面はハケメの後、ヘラミガキ、内面は体部下半ヘラケズリ、上半に指頭圧痕を残す。甕93は口径12.0cmで体部から短く「く」の字状に屈曲した口縁部から上方にやや肥厚する外面端部に数本の凹線文を施す。内面はユビナデを残す。甕94は口径12.5cmで、体部から短く「く」の字状に屈曲した口縁部から肥厚する外面端部に3本の凹線文を施す。高杯95は底径10.0cmで、脚裾部に円孔を巡らせ、端部は外上方に肥厚させて内面接地である。鉢96は口径7.4cm、底径4.4cm、器高6.0cmである。

石鏃はすべてサヌカイトである。石鏃S15は凹基式の完形品で、最大長33.5mm、最大幅14.5mm、最大厚4.5mm、重さは1.96gである。石鏃S16・S17は平基式で、前者は最大長15.0mm、最大幅13.5mm、最大厚4.5mm、重さ1.02gである。後者は最大長10.0mm、最大幅15.0mm、最大厚2.8mm、重さは0.54gである。

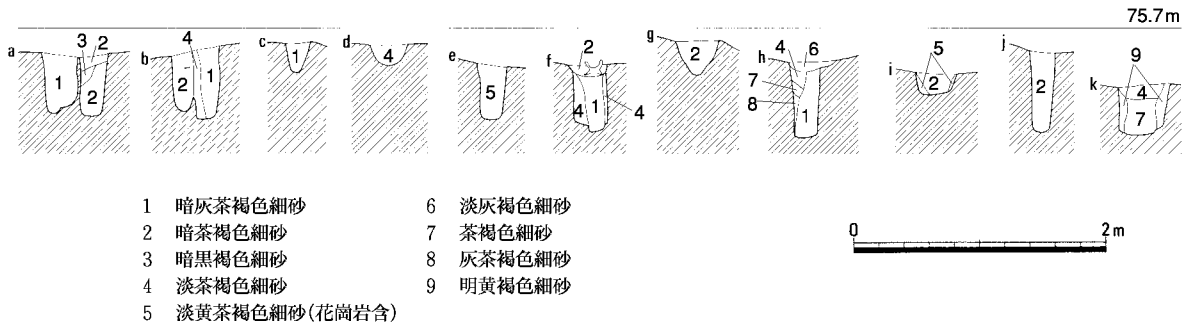
砥石S18は流紋岩製で、最大長105.0mm、最大幅49.0mm、最大厚30.5mm、重さ177.09gである。砥石S19は、最大長63.5mm、最大幅31.5mm、最大厚21.0mm、重さ65.28gである。砥石S20は流紋岩製で、最大長47.5mm、最大幅50.0mm、最大厚8.0mm、重さ28.58gである。凹石S21は花崗岩質アプライト製で、最大長110.0mm、最大幅103.0mm、最大厚72.0mm、重さ1147.93gである。磨製石斧(転用叩き石) S22は結晶質流紋岩製で、最大長138.0mm、最大幅67.0mm、最大厚45.0mm、重さ637.13gである。鉄斧M2は板状で、最大長6.3cm、最大幅4.0cm、最大厚0.8cm、重さ82gである。刀子M3は最大長3.3cm、最大幅2.15cm、最大厚0.35cmを測り、重さ6.42gである。時期は弥生中期末と思われる。



第45図 竪穴住居23出土遺物(1/4・1/3)



第46図 豎穴住居24(1/60)



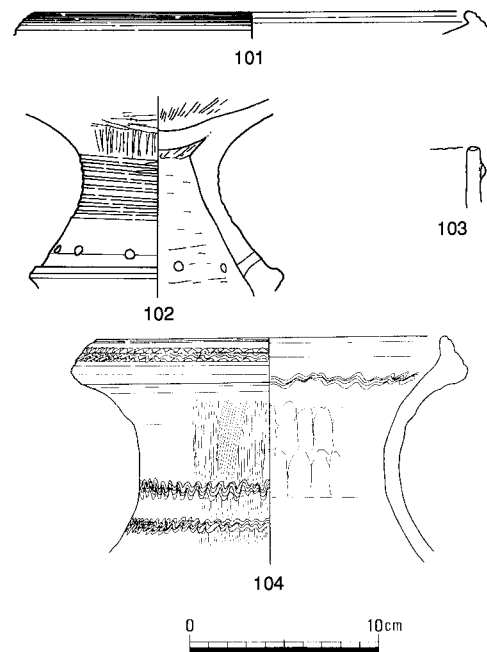
第47図 竪穴住居24土層断面図(1/60)

竪穴住居23 (第43・45図)

調査区中央付近の斜面地に位置し住居22に切られる。掘り方の平面形はほぼ正方形を呈したと思われる、東西長は336cmを測る。床面の平面形も同形で、東西長は296cmである。埋土状況では貼り床は認められなかったが、水平で堅くよくしまっていた。また、壁面に沿っては壁体溝が確認された。断面形は床面から直立気味に立ち上がり、深さは15cmを測る。

柱構造は主柱が各隅に配される4本柱であり、柱穴e・f・g・hが相当する。主柱柱間は東西方向が218～225cm、南北方向が210～213cmを測る。主柱と側壁の距離は10～25cmと推定され、中央部を広く取っている。主柱掘り方は円形を呈し、直径15～25cmで、深さ15～30cmを測る。床面の中央では長径46cm、短径29cm、深さ19cmを測る楕円形の中央穴が検出され、その南に浅い円形の窪みをもつ。また、住居22の非重複床面範囲で炭化材が確認され、焼失住居であったと思われる。

遺物は壺97、甕99、壺ないし甕98、高杯100、磨石ないし敲石S23などがみられ、壺97、壺ないし甕98、磨石ないし敲石S23は床面直上から出土した。壺97は口径14.8cmで、頸部上半に凹線文を巡らせ、外湾する口縁部を肥厚させて、外面端部に3本の凹線文を施す。甕99は口径19.8cmを測り、「く」の字状に屈曲する口縁部から上方に肥厚させて、3本の凹線文を巡らす。外面体部にハケメ、内面に指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデを行う。壺ないし甕98は底径5.6cmを測る。高杯100は底径8.3cmで、杯部と脚柱部を円盤充填法で接合し、脚裾端部は肥厚させて内面接地させる。外面脚裾部はヘラミガキ、内面脚裾部にはヘラケズリを行う。磨石ないし敲石S23の石材はホルンフェルスである。法量は最大長123.0mm、最大幅122.5mm、最大厚51.0mmを測り、重さ1121.65gである。時期は弥生中期末と思われる。



第48図 竪穴住居24出土遺物(1/4)

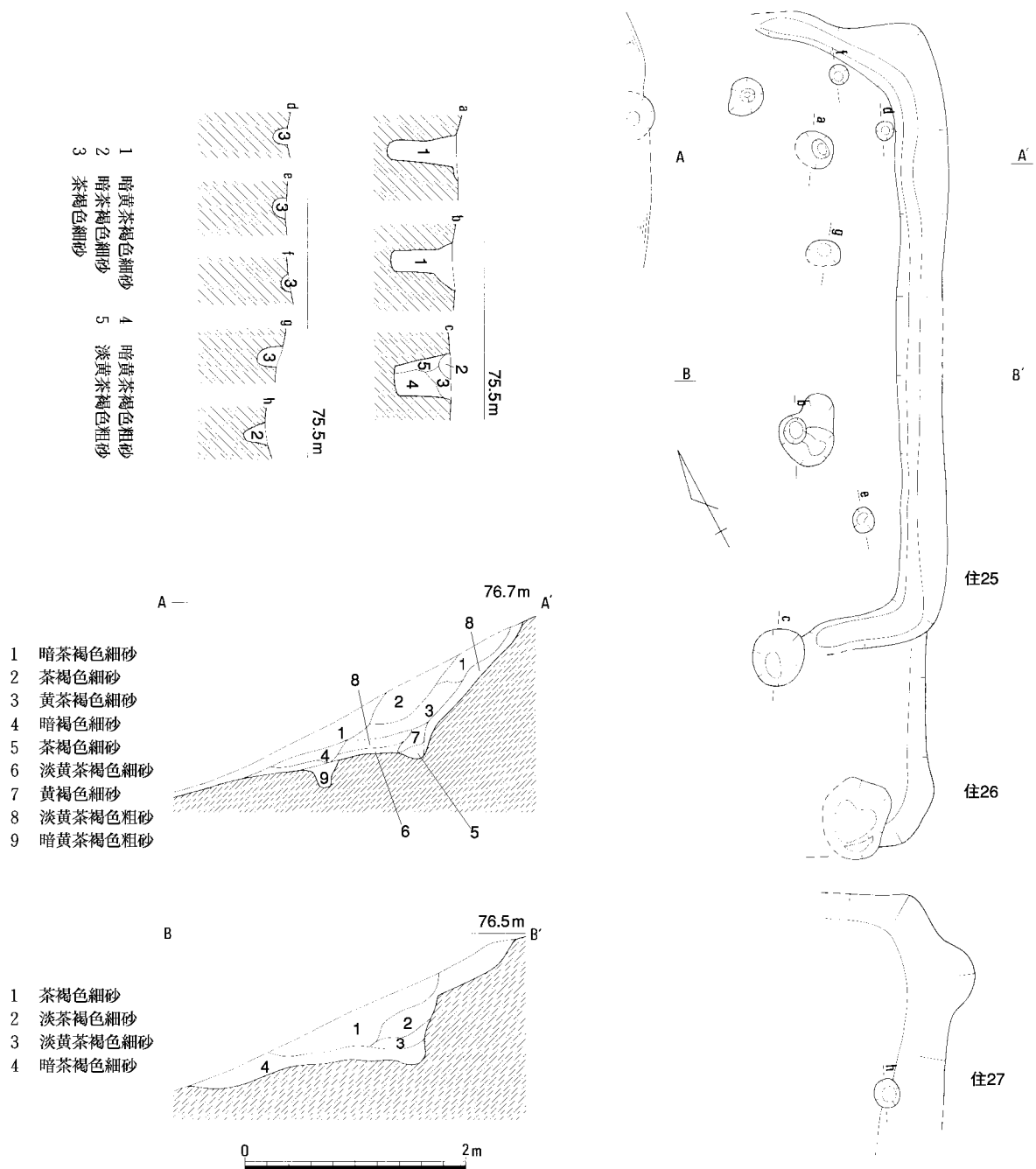
竪穴住居24 (第46・47・48図)

調査区南側の斜面地で検出した5軒の住居であり、住居24d→24c→24e→24b→24aの順に築造されたと思われる。掘り方および床面は長方形ないし隅丸方形を呈したと思われる。壁面に沿っては壁体溝が確認された。断面形は床面から垂直に立ち上がり、L字形を取ったと思われる。柱穴は合計13個検出した。掘

り方はいずれも円形を呈し、直径18~45cmで、深さ15~64cmを測る。

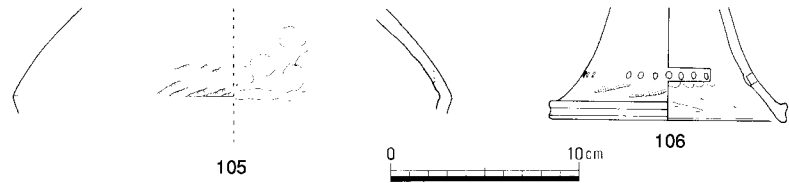
竪穴住居24aは深さ15cmを測り、柱穴e・fが伴う可能性がある。竪穴住居20bは、床面東西長は303cmを測り、深さは壁体溝のみの検出で不明であった。柱穴j・hが伴うと考えられる。竪穴住居24cは壁体溝のみの検出で規模は不明であった。竪穴住居20dの床面東西長は298cm、深さ98cmを測る。竪穴住居24eは、深さ88cmを測る。

遺物は、縄文時代晩期後半の深鉢103、壺104、甕101、高杯102などがみられ、このうち深鉢103、壺104、高杯102は柱穴からの出土である。深鉢103は口縁部下に刻目突帯文を施し、口縁端部にも刻目を行う。壺104は口径18.3cmで、頸部にハケメの後に4条1単位の波状文を2単位巡らせ、口縁部を大きく肥厚させ、3本凹線文を施した外面端部と内面口縁部に同様な波状文をそれぞれ施す。甕101は



第49図 竪穴住居25~27(1/60)

口径22.8cmで上部に肥厚した外面端部に4本凹線文を行う。高杯102は杯部と脚柱部を円盤充填法で接合し、脚柱部上半は8条の沈線文、下半には円孔を施す。脚裾端部は肥厚させ立ち上がる。内外面杯部はヘラミガキ、内面脚部にはヘラケズリを行う。時期は弥生中期後半と思われる。



第50図 竪穴住居25出土遺物(1/4)

内外面杯部はヘラミガキ、内面脚部にはヘラケズリを行う。時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居25 (第49・50図)

調査区南西側の斜面地に位置する。掘り方および床面は隅丸長方形を呈し、掘り方の長さは555cm、床面は446cmを測る。断面形は山側を直立気味に掘削してL字形を取ったと思われ、深さは118cmを測る。柱構造は不明だが、支柱穴は柱穴a・bが伴う可能性があり、柱間は273cmである。掘り方は円形を呈し、直径約40cm、深さ55～60cmを測る。遺物は台付鉢105や底径11.2cmを測り、脚柱部に円孔を7個1単位で4ヵ所巡らし、脚裾端部を肥厚させる高杯106がある。時期は弥生中期後半と思われる。

竪穴住居26 (第49図)

調査区南西側の斜面地に位置し、掘り方および床面は隅丸方形と思われる。断面形は山側を直立気味に掘削してL字形を取ったと思われ、深さは26cmを測る。柱構造は不明だが、柱穴cはこれに伴う可能性がある。図化していないが、土器片が出土している。時期は弥生中期後半と考えられる。

竪穴住居27 (第49図)

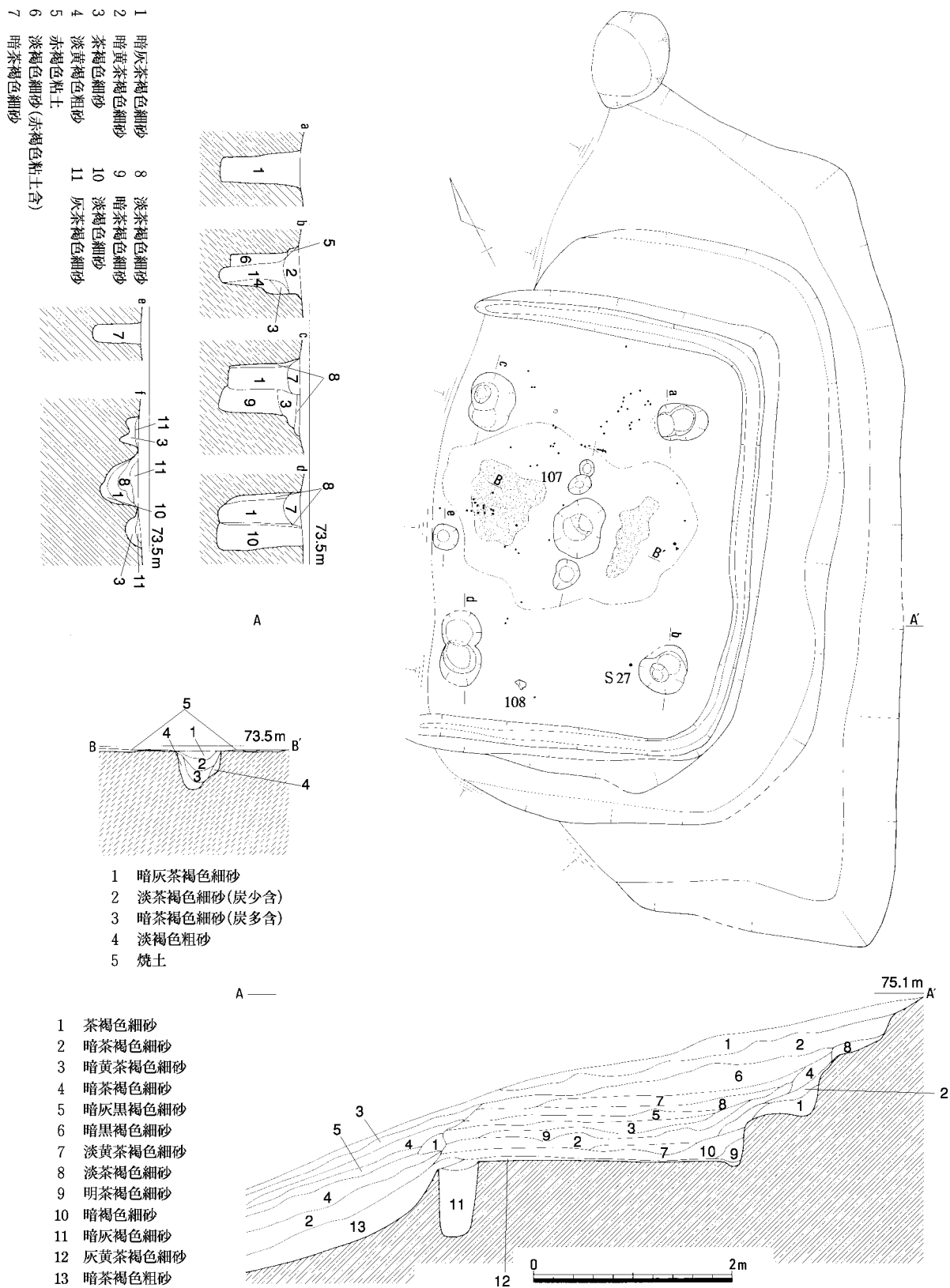
調査区南西側の斜面地に位置し、掘り方および床面は隅丸方形と思われる。断面形は山側を直立気味に掘削してL字形を取ったと思われ、深さは62cmを測る。柱構造は不明だが、柱穴hはこれに伴うと思われる。図化していないが、土器片が出土している。時期は弥生中期後半と考えられる。

竪穴住居28 (第51・52図)

調査区北東端の谷部に位置する。掘り方の平面形は長方形を呈したと思われ、長さは774cmを測る。床面の平面形も同形で、長さは391cm、幅は310cm程度と推定される。埋土状況から約5cm程度の貼り床が認められ、水平で堅くよくしまっていた。壁面に沿っては壁体溝が確認された。断面形をみると、山側をほぼ垂直に3回に段状掘削してL字形を取り、この各段階で造成された平坦面は曲輪状となっていた。深さは163cmを測る。柱構造は支柱が4本柱であり、柱穴a・b・c・dがこれらに相当し、建て替えが認められる。支柱柱間は南北方向が250cm、東西方向が200cmを測る。掘り方は円形を呈し、直径40～45cmで、深さ75～80cmを測る。また、柱痕跡がみてとれ、それらから直径約30cm程度の柱材を使用したと推測される。床面中央では長径60cm、短径48cm、深さ38cmを測る楕円形の中央穴が検出され、その両端部では小柱穴を確認した。埋土は多量の炭片が包含した。また、中央穴を挟む位置に赤色硬化した火処が検出され、さらに支柱穴の内側では炭片や灰が広く認められた。加えて、サヌカイトの剥片が多数散布しており、住居内で石器製作を行っていたと考えられる。

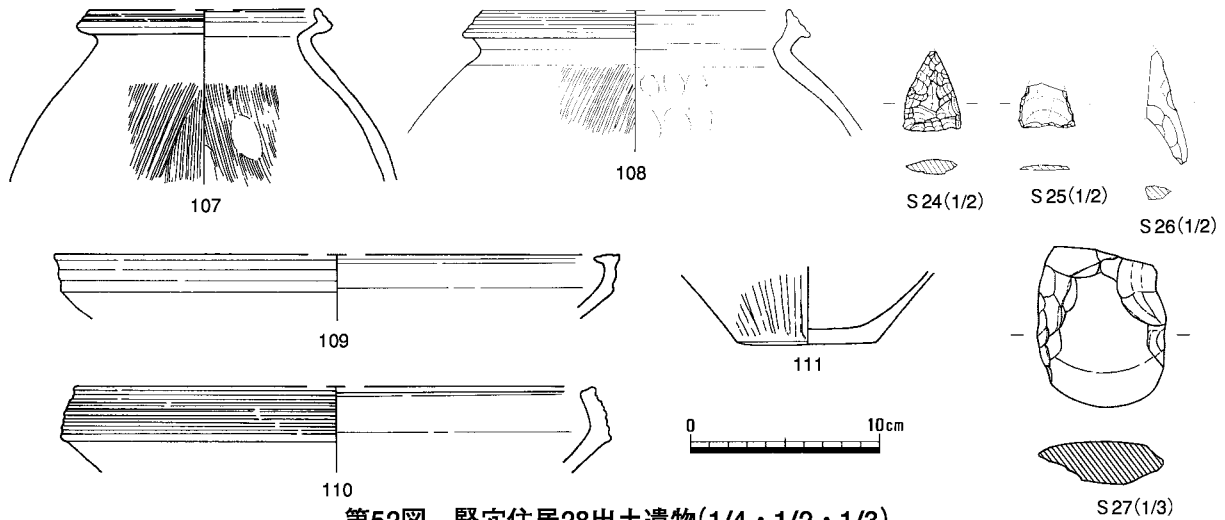
遺物は甕107・108、壺ないし甕111、高杯109・110、石鏃S24・S25・S26、磨製石斧S27などがみられ、甕107・108、磨製石斧S27は床面直上から出土している。甕107は口径12.0cmであり、内湾する体部から「く」の字状に屈曲する口縁部に、肥厚して上方に拡張する端部の外面に2本の凹線文を施す。内外面体部にハケメ、口縁部にヨコナデを行う。甕108は口径16.0cmであり、「く」の字状に屈

曲する口縁部に、肥厚して上下方に拡張する端部の外面に3本の凹線文を施す。外面体部にハケメ、内面にユビナデ、口縁部にヨコナデを行う。壺ないし甕111は底径7.4cmを測る。高杯109は口径29.6cmを測り、外上方に開く口縁部に2本の凹線文をもつ。内側に拡張した端部を有する。外面は凹



第51図 豎穴住居28(1/60)

線文状となる。高杯110は口径27.1cmを測り、内傾する口縁部をもち、外面に凹線文が7本巡る。石鏃はすべてサヌカイトである。石鏃S24・S25は平基式で、前者は最大長21.0mm、最大幅15.0mm、最大厚4.5mm、重さ1.36gの完形品である。後者は最大長12.0mm、最大幅15.0mm、最大厚1.8mm、重さ0.38gである。石鏃S26は凹基式で、最大長29.5mm、最大幅11mm、最大厚3.5mm、重さ0.68gである。流紋岩製の磨製石斧S27は最大長63.5mm、最大幅51.0mm、最大厚20.0mm、重さ85.64gである。時期は弥生中期後半である。

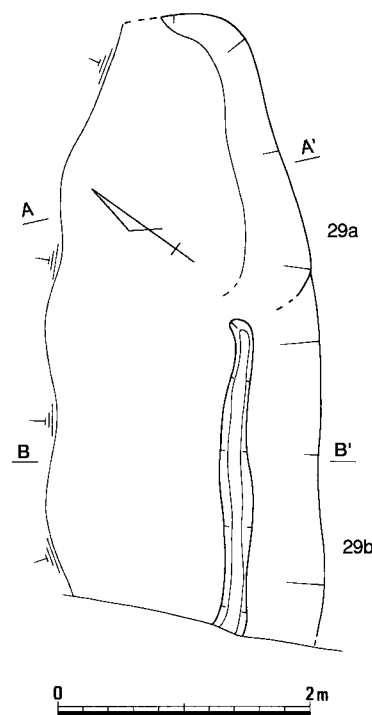


第52図 竪穴住居28出土遺物(1/4・1/2・1/3)

竪穴住居29 (第53・54図)

調査区南西側に位置する。埋土には拳大の礫が多量に包含した。住居29aは、隅丸長方形を呈し、長さ220cmを測り、深さは45cmである。

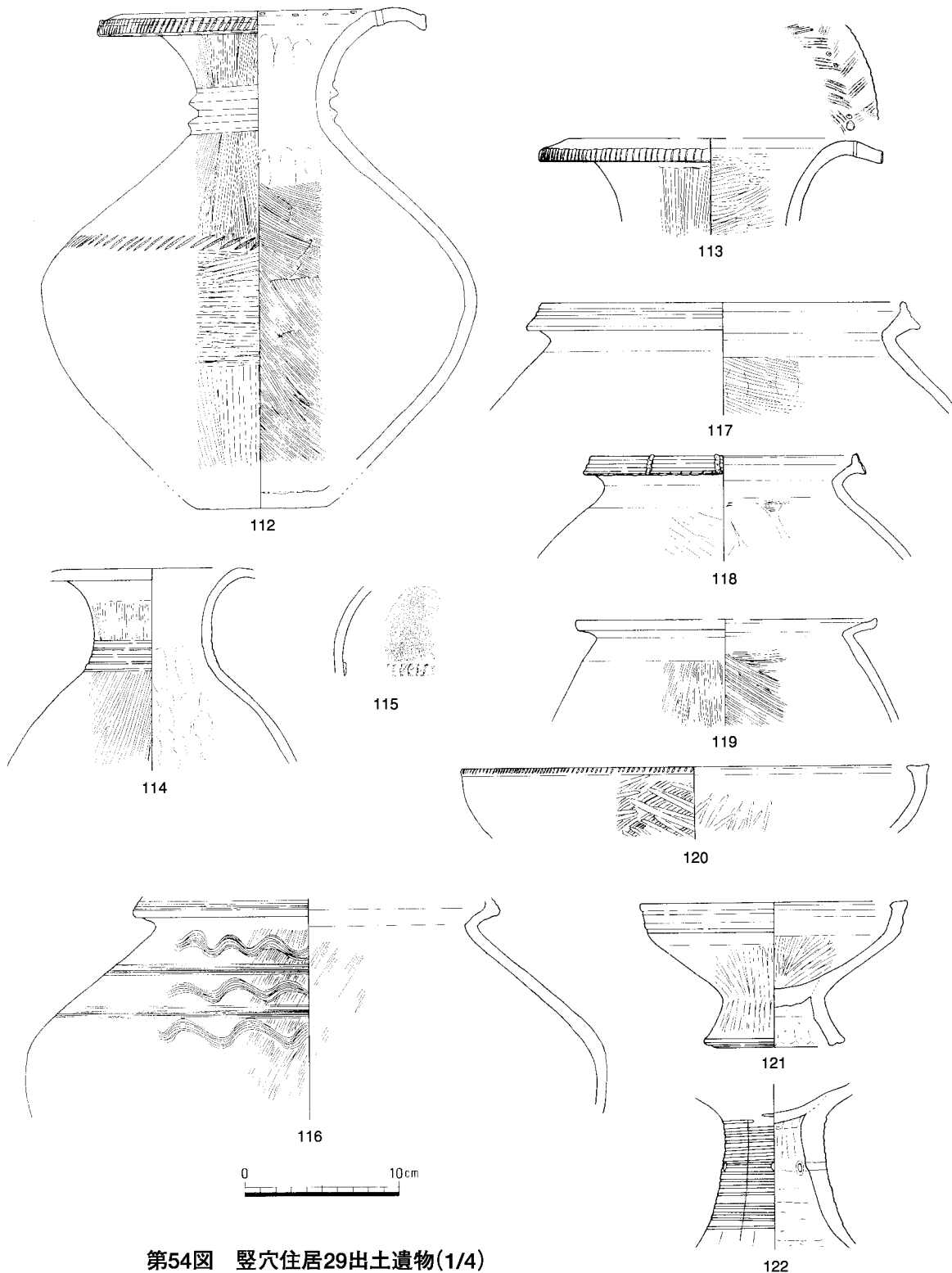
住居29bも隅丸長方形を呈し、深さは48cmで壁体溝を確認した。遺物は壺112～116、甕117～119、台付鉢120、高杯121・122などを確認した。



第53図 竪穴住居29(1/60)

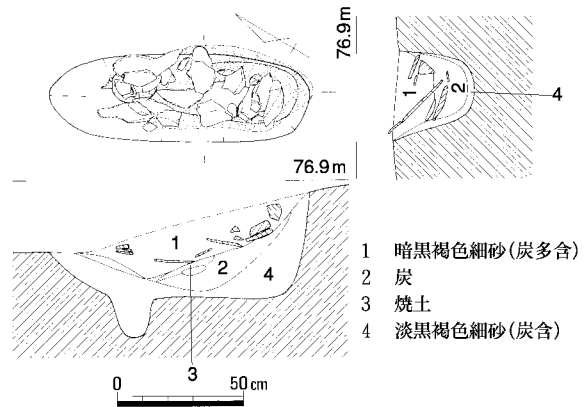
壺112は口径20.4cm、底径8.5cm、器高28.0cmを測る。外面体部に刺突文を行い、頸胴部に断面三角形の貼付突帯を2条巡らす。外方に開く口縁部に円孔を配し、端部は下方に引き出し肥厚させる。外面端部にヨコナデ後、刺突文を行う。外面にハケメ、ヘラミガキ、内面にハケメ、ユビナデを行う。壺113は口径26.0cmを測り、口縁部に円孔2個一対と円形浮文を配し、内面は綾杉状の施文を行う。端部は下方に引き出し、外面は刻目を巡らす。外面はハケメ、内面はヘラミガキを行う。壺114は頸胴部に凹線文を5本巡らし、口縁部は外方に開く。外面にハケメ、ヘラミガキ、内面に指頭圧痕がみられる。壺115の頸胴部は貼付突帯に連続刻目文を巡らす。壺116は口径13.2cmであり、外面体部上半に2条の直線と3条の波状の沈線文を巡らす。「く」の字状に屈曲した

口縁部から、引き上げて肥厚した外面端部に凹線文を3本巡らす。体部はハケメ、口縁部はヨコナデがみられる。甕117は口径23.0cmで、「く」の字状に屈曲した口縁部から、肥厚した外面端部には凹線文を2本巡らす。内面はハケメを行う。甕118は口径17.0cmを測り、「く」の字状に屈曲した口縁部から、上下に拡張して肥厚する外面端部に凹線文を2本巡らし、棒状浮文を貼り付ける。下端部に刻目を施す。外面にヘラミガキ、内面にユビナデ、ハケメがみられる。甕119は口径19.2cmで、「く」の字状に屈曲した口縁部から、端部を引き上げる。内外面はハケメを行う。台付鉢120は口径29.7cmで、内外に拡張する口縁



第54図 豎穴住居29出土遺物(1/4)

部を有し、端部に刻目を2段施す。外面にハケメの後ヘラミガキ、内面にヘラミガキを行う。高杯121は口径17.0cm、底径7.2cm、器高9.4cmを測る。椀形の杯部から外上方に開く口縁部が延び、端部は内傾する面をもつ。外面口縁部に凹線文を2本巡らす。脚裾端部は凹線文を1条巡らし、内面接地となる。内外面にヘラミガキ、内面脚部にヘラケズリを行う。高杯122は杯部と脚部の接合に円盤充填法を用い、外面に17条の沈線文と縦位線刻5条、内面にヘラケズリがみられ、脚裾部に円孔を5個と縦位線刻10条を配する。時期は弥生中期中葉と考えられる。

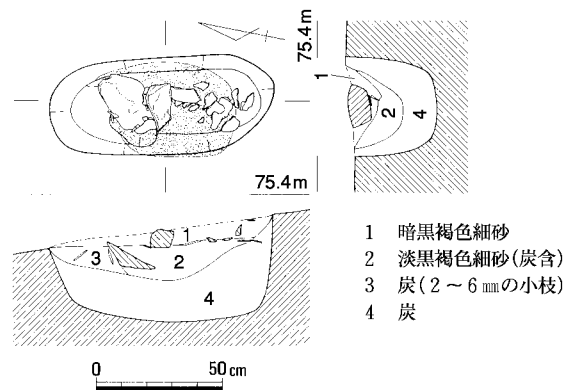


第55図 炉1 (1/30)

炉

炉1 (第55図)

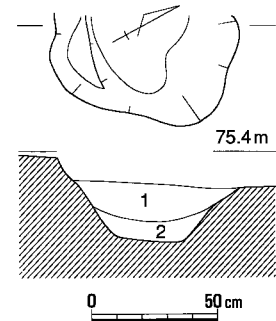
調査区南端に位置する。長径104cm、短径34cmの長楕円形で、深さは40cm、火窪は37cmを測る。長軸方向はN-32°-Wで等高線とは直交する。埋土には炭化物と焼土を含む。周辺で鉄滓などは確認できていないが、大鍛冶炉の形態と類似する。時期は不明である。



第56図 炉2 (1/30)

炉2 (第56図)

炉1から2m北西に位置する。長径90cm、短径39cmの長楕円形で、深さは39cm、火窪は28cmを測る。長軸方向はN-19°-Wで等高線とは直交する。炉1と同様の埋土状況で、大鍛冶炉の形態と類似する。なお、周辺では柱穴が4個検出されている。時期は不明である。



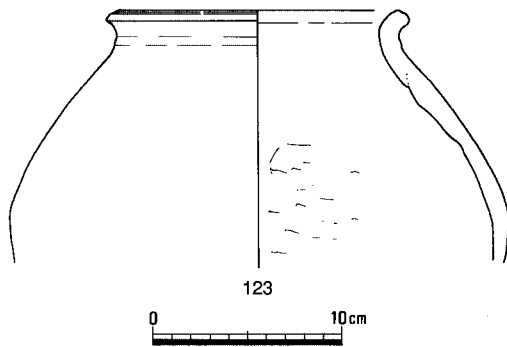
第57図 土壌9 (1/30)

土 壙

土壙9 (第57図)

調査区南西側に位置し、長径76cm、幅196cmの楕円形で、深さは23cm

を測る。遺物は出土していない。



第58図 柱穴1 出土遺物(1/4)

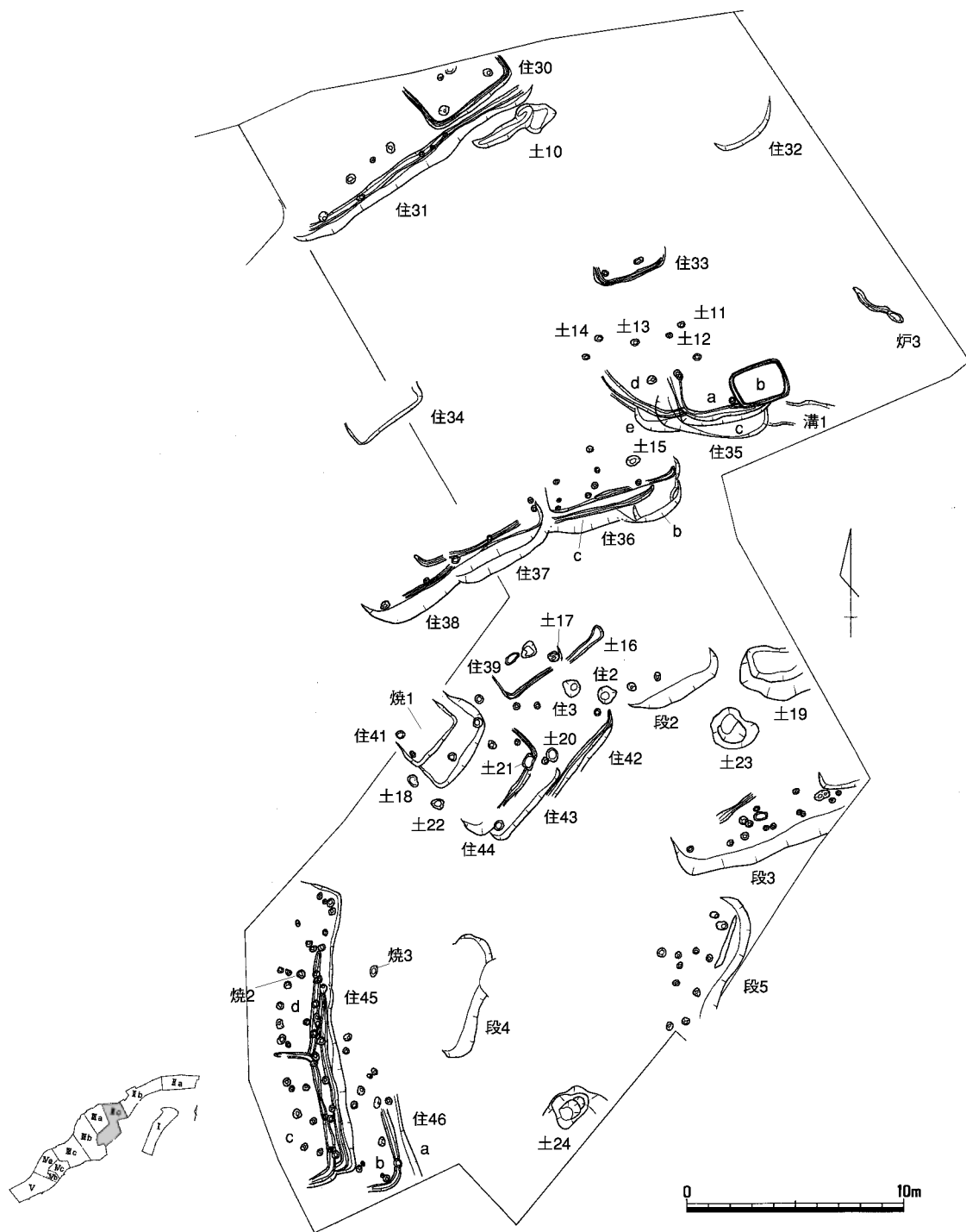
柱 穴

柱穴1 (第38・58図)

調査区中央で検出された3個の柱穴の1個である。自然崩落した竪穴住居または段状遺構の残欠とも考えられる。口径14.6cmの壺123が出土した。時期は弥生中期後半と思われる。(澤山)

4 II c区の調査

II c区は、これまでの調査区が15m前後と幅の狭い範囲であったものが、標高68~86.5mとなり、幅も50m近く上下に広がる。この調査区が、I区を除き最も標高の高い位置に遺構が所在しているのである。遺構は、等高線に沿うように5段に分布が認められる。基盤層は花崗岩であるが、II b区とIII a区との境部分は花崗岩の基盤層が下り谷を形成し、標高72mほどから下方にはやや粘質を有する花崗岩の再堆積土となる。



第59図 II c区遺構配置図(1/300)

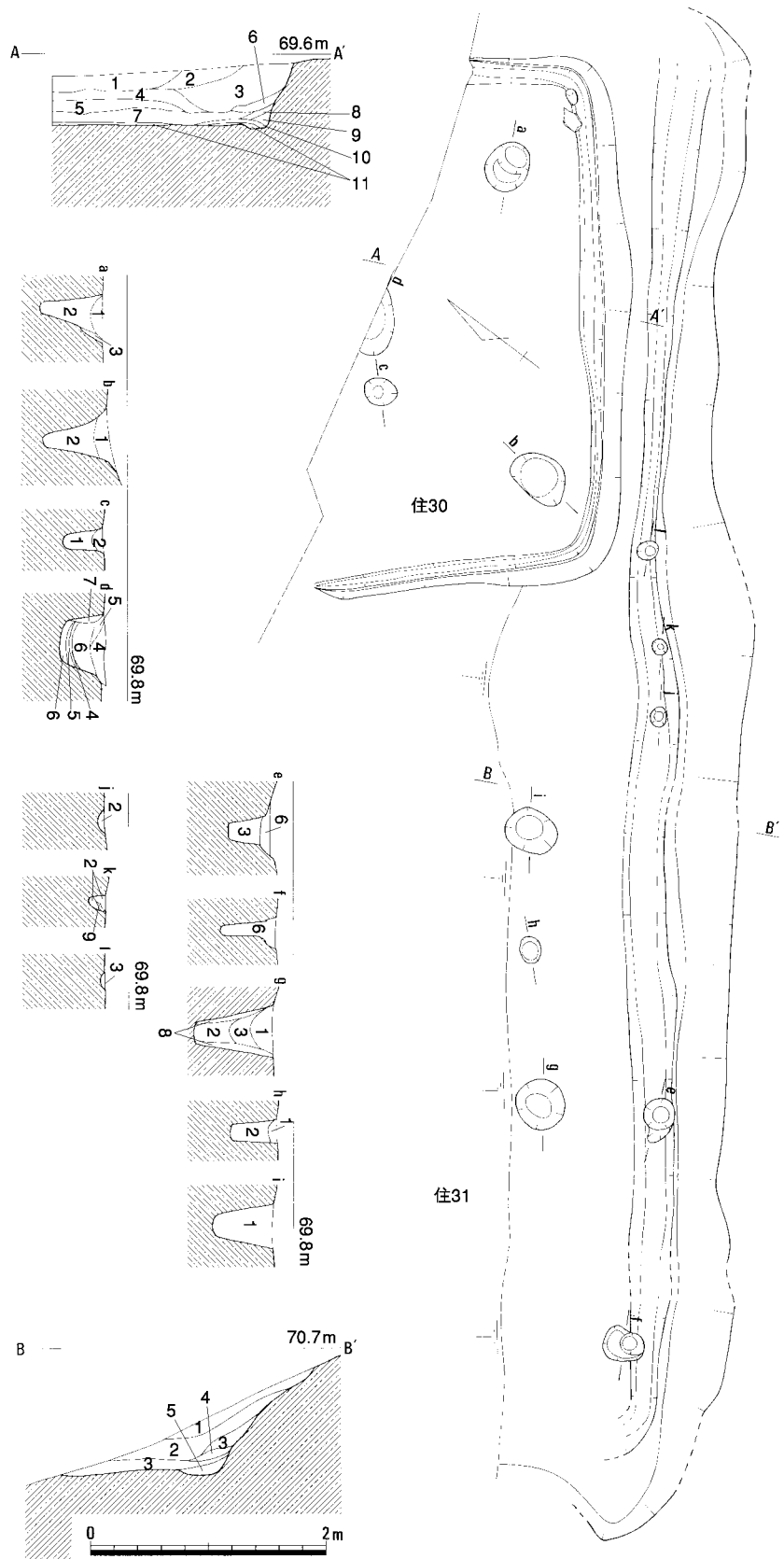
竪穴住居

竪穴住居30 (第60・61図)

- 1 暗茶褐色細砂
- 2 暗茶褐色細砂(炭僅含)
- 3 茶褐色細砂(炭僅含)
- 4 淡茶褐色細砂
- 5 淡灰茶褐色細砂
- 6 暗褐色細砂(炭僅含)
- 7 暗灰茶褐色細砂(炭含)
- 8 淡褐色細砂
- 9 暗茶褐色細砂
- 10 暗赤褐色細砂
- 11 黒褐色細砂

- 1 暗茶褐色細砂
- 2 暗灰茶褐色細砂
- 3 淡褐色粗砂
- 4 淡褐色細砂
- 5 淡灰褐色細砂
- 6 暗灰褐色細砂(炭含)
- 7 淡茶褐色粗砂
- 8 淡茶褐色細砂
- 9 明茶褐色細砂

- 1 暗茶褐色細砂
- 2 淡黄茶褐色細砂
- 3 暗茶褐色細砂(炭含)
- 4 暗黄茶褐色細砂(炭含)
- 5 淡灰茶褐色細砂(炭含)

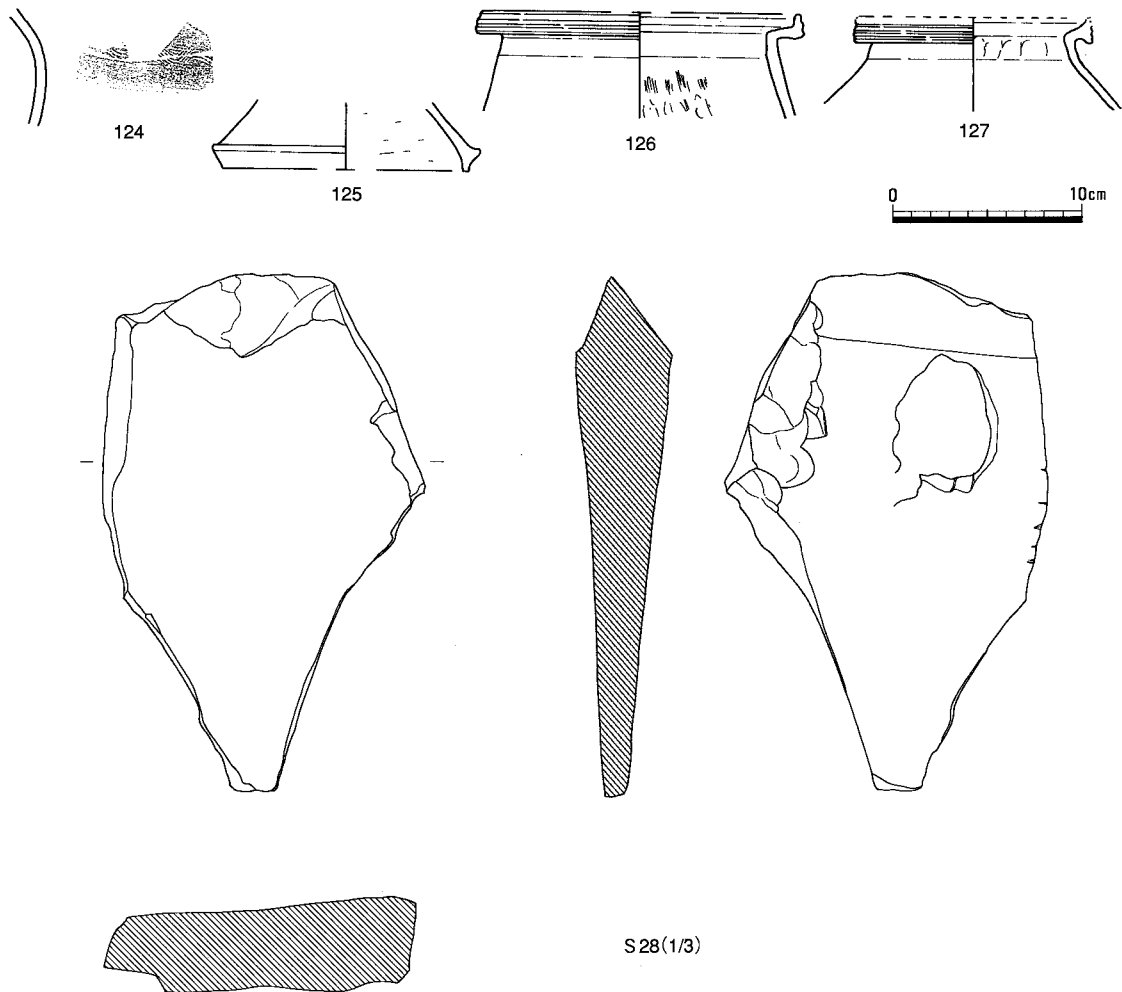


第60図 竪穴住居30・31(1/60)

竪穴住居30は住居33の北東下方で、住居31と重複して位置する。検出は、住居31の床面である基盤層の追及過程において踏み固められていない暗茶褐色細砂を確認したことによる。規模は北東～南西450cmを測るが、北西側は調査外となる。確認面から床面までは46cmを測り、壁帯溝は深さ4cm前後で巡っている。床面は、花崗岩風化土の基盤層を踏み固めている。この面直上に2cm前後の第11層の黒褐色細砂が認められることから、この面が床面と思考される。柱穴は、aとbの2本確認されたが、土層断面に示したように柱痕跡は認められなかった。中央穴は、形態が楕円形を呈するもので、埋土の第4層の淡褐色細砂と第7層の淡茶褐色細砂においては炭が認められている。また、中央穴南西側に認められるピットcは、中央穴の両脇に多く認められる種類のもので判断される。

住居31との関係は、先に記したように住居31の床面検出において、当該住居と異なる土層面を検出したのである。このことから、改めてA—A'の土層断面を設定したのである。この断面は、住居31床面からであるが、床面がこの部分に存在すれば何らかの変化が土層に表れると想定した。しかしながら、そのような土層はなく上層からの規則的な堆積を判断させるものであった。

出土遺物(第61図)は、埋土からのものである。124は胴部片で壺か台付甕の器種が考えられる。胴屈曲部にヘラガキの波状文を施文、内面屈曲部下半にヘラケケズリ施される。125は高杯の脚部で端部外面に凹部を形成する。126と127は口縁端部に凹線を施文する。S28は、東隅の壁帯溝で検出された流紋岩製の砥石である。両面とも使用されている。



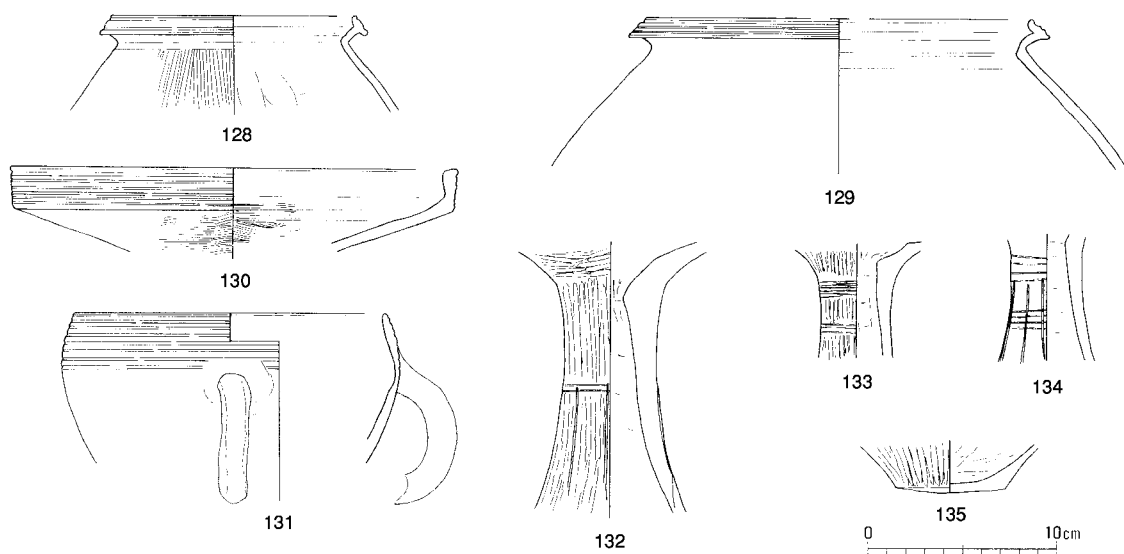
第61図 竪穴住居30出土遺物(1/4・1/3)

竪穴住居31（第60・62図）

竪穴住居31は、Ⅲa区の住居49の南西側に接して位置し、南東側は住居30と重複している。規模は、南東辺の約13mを確認されたが、北西側にあたる丘陵斜面下側について検出することはできなかった。壁の立ち上がりは、鋭角ではなく緩やかであり、床面までの高さは75mほどで遺存状態は良い。壁帯溝は壁に沿うように幅18～35cm、深さ5cm前後で認められる。柱穴は3ヶ所認められ、このうち、柱痕跡が認められたのはピットgである。また、ピットiは大きさと深さから柱穴として用いられていたことが妥当と判断されるが、ピットhについては、他の用途が考えられる。壁帯溝に検出されたピットは、その深さに差異があるが何れも壁帯溝にともなうものと思われる。

当住居は、検出時において10m以上の落ち込みとして確認し、住居の重複を想定して掘り下げ平面での把握に努めたのである。しかしながら、掘り下げ平面においてはそのような状況は認められなかった。壁と壁帯溝さらに床面の検出後においても、壁の変化、壁帯溝の複数の存在、床面の段差などの変化はなかったのである。したがって、住居31単独の構築と思考される。

出土遺物(第62図)の128と129は壁帯溝内から、他は埋土中からの検出である。128は頸部を「く」の字状に屈曲させ、端部を斜方向に上下に拡張する。その端面には、上端と下端寄りに各1本の凹線が施文される。器面外面は縦の粗いハケメ、内面はナデが認められる。129は頸部を「く」の字状に屈曲させ、端部を斜上方に拡張させ、端部外面に3本の凹線を施文する。内面には、押圧痕が認められる。130は高杯で、端部を上方に拡張する。端面には9本の凹線を施すが、その内容は沈線状で浅く、途中で消える部分も認められる。内外面の調整はハケメで行われている。131は把手付鉢で内傾する口縁に8本の凹線を施文する。把手は、凹線文の施文ののち縦位置に貼り付けられている。132は、高杯の脚柱部である。脚柱部中ほどに2本対で施されたヘラガキ沈線とそのあとから細長い透かしをもうけている。133は高杯の脚柱部である。脚柱部の上側に6条そして下方に3条のヘラガキ沈線を施文する。134は高杯の脚柱部である。脚柱部には、4条のヘラガキ沈線が2段に施文され、そのあとから縦のヘラガキ沈線を施す。135は、底の張り出す底部である。外面はタテヘラミガキ、内面はヘラケズリが認められる。

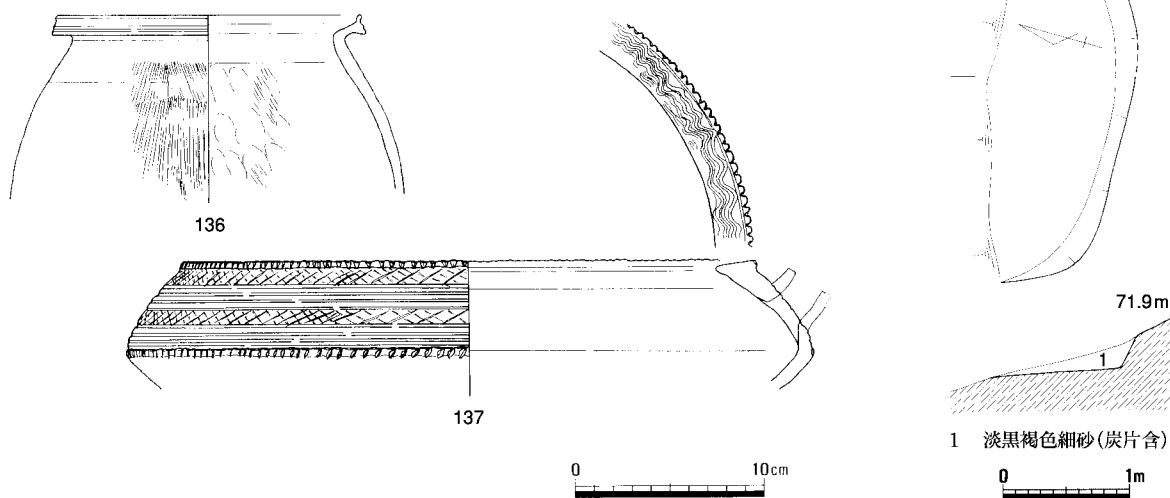


第62図 竪穴住居31出土遺物(1/4)

竪穴住居32 (第63図)

竪穴住居32は、Ⅱc区の住居29の南西上方に位置する。住居は、長さ320cmの楕円形状に確認され、丘陵斜面下方の北側は消失している。壁の高さは25cmを測るが、壁帯溝は検出できなかった。埋土は、淡黒褐色細砂の1層を観察できた。

出土遺物は、何れも埋土中からのものである。136は甕で頸部を「く」の字状に屈曲させ、端部を上方に拡張し下方は肥厚気味となる。口縁外面には2条の凹線を施文するが、上方の凹線は幅が広くなる。137は注口土器であるが、脚を付す器種と思われる。口縁外面には凹線施文ののちヘラガキの格子文を施している。また、口縁端部と杯の屈曲部にはキザミメを付す。さらに、口縁端面には、波状文が施されている。

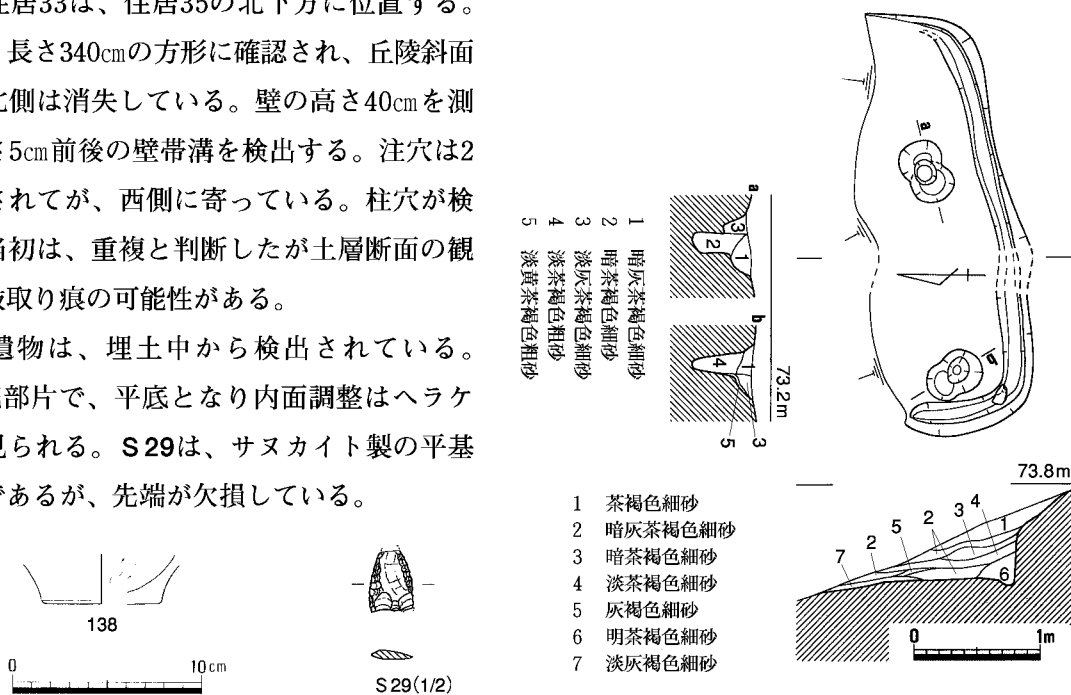


第63図 竪穴住居32(1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居33 (第64図)

竪穴住居33は、住居35の北下方に位置する。住居は、長さ340cmの方形に確認され、丘陵斜面下方の北側は消失している。壁の高さ40cmを測り、深さ5cm前後の壁帯溝を検出する。注穴は2本確認されてが、西側に寄っている。柱穴が検出した当初は、重複と判断したが土層断面の観察から抜き取り痕の可能性はある。

出土遺物は、埋土中から検出されている。138は底部片で、平底となり内面調整はヘラケズリが見られる。S29は、サヌカイト製の平基式石鏃であるが、先端が欠損している。

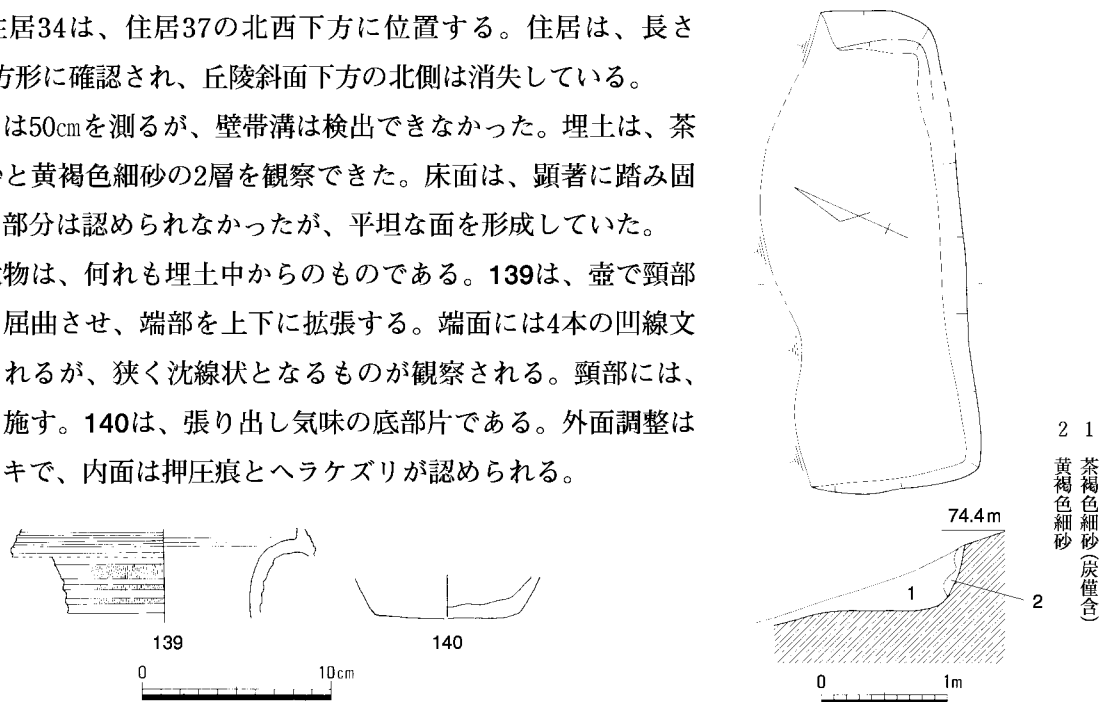


第64図 竪穴住居33(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

竪穴住居34 (第65図)

竪穴住居34は、住居37の北西下方に位置する。住居は、長さ385cmの方形に確認され、丘陵斜面下方の北側は消失している。壁の高さは50cmを測るが、壁帯溝は検出できなかった。埋土は、茶褐色細砂と黄褐色細砂の2層を観察できた。床面は、顕著に踏み固められた部分は認められなかったが、平坦な面を形成していた。

出土遺物は、何れも埋土中からのものである。139は、壺で頸部を外方に屈曲させ、端部を上下に拡張する。端面には4本の凹線文が施文されるが、狭く沈線状となるものが観察される。頸部には、凹線文を施す。140は、張り出し気味の底部片である。外面調整はヘラミガキで、内面は押圧痕とヘラケズリが認められる。



第65図 竪穴住居34(1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居35 (第66・67図)

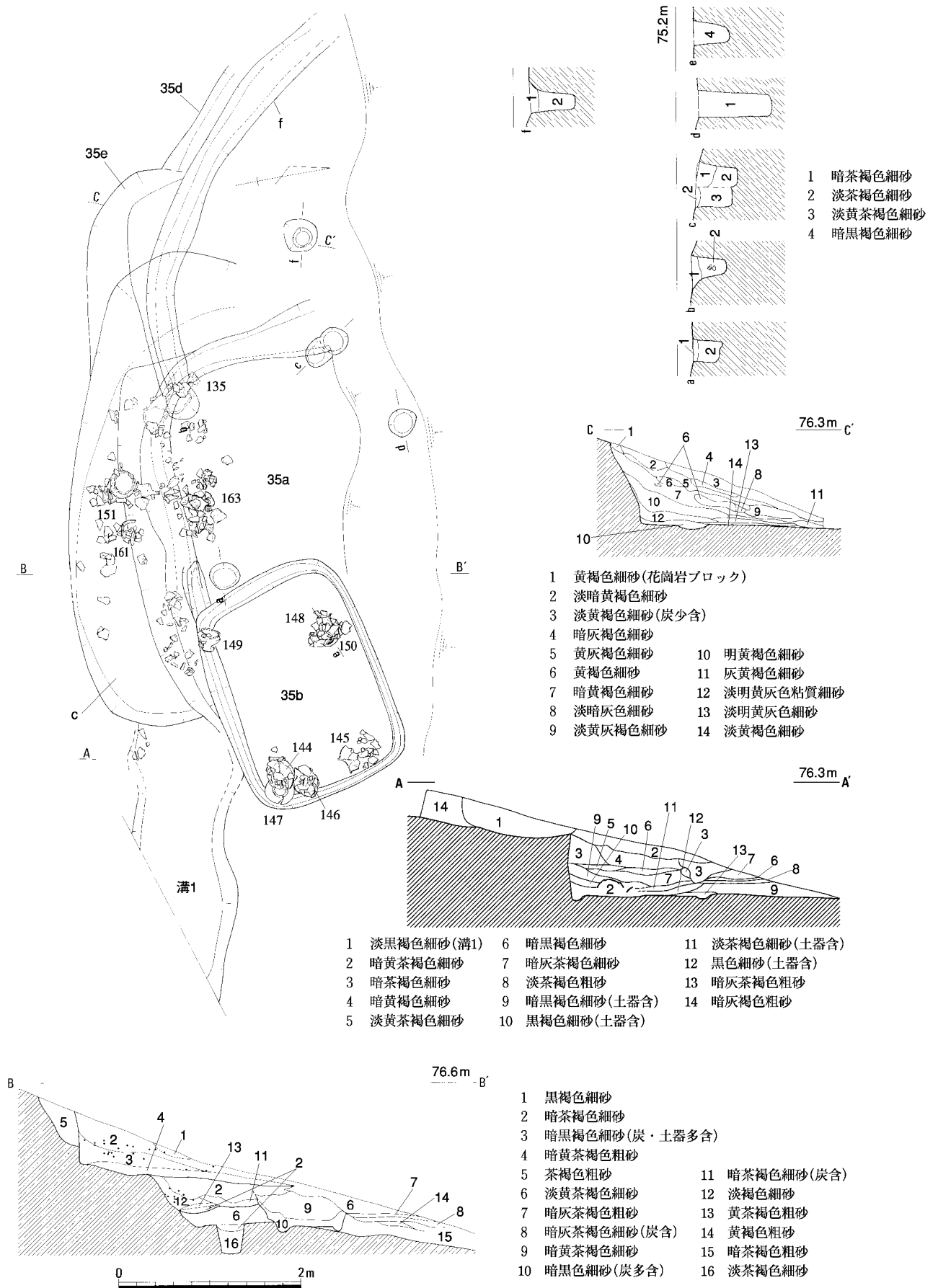
竪穴住居35は、住居36の北下方に位置し、a～fの6軒および溝1と重複している。

竪穴住居35aは、南辺から西辺にかけてL字状に検出され、形態的には方形を呈する。第67図の住居a検出時における平面図である。住居aの周溝南側上には、この周溝に切られるように方形のラインが検出されているが、同一住居として扱っている。このことは、調査の過程においてこの部分に伴うであろう面的な把握ができていないことからきている。しかし、B—B'の土層断面観察時には、単独住居の可能性を検討したのである。このことは、先の土層断面図における第2・6・11・12・13層が住居aの埋土と判断している層のうち第6層より上層が埋土で、断面図にやや太いラインで示したのが床面と思考した。さらに、遺物の出土状況が、この床面と思考される部分に多く留まり、床面と想定される面で広がる内容を示している。何れにしても、調査時には、重複した住居としての判断するのに躊躇し、報告書作成段階においても同様であり単一の住居として扱っている。

出土遺物(第68図)は、第2・12層からの検出である。141は甕で頸部を「く」の字状に屈曲させ、端部を上下に肥厚する。端面には3本の凹線文を施文する。142は高杯の脚部片で、脚端部は外に張り出す。柱状部はヘラガキ沈線が2本と3本単位で施されている。143は高杯の裾部片で、端部は立ち上がる。端部外面は、ナデによる凹部を形成する。石器は、S32のサヌカイト製の石鏃片である。

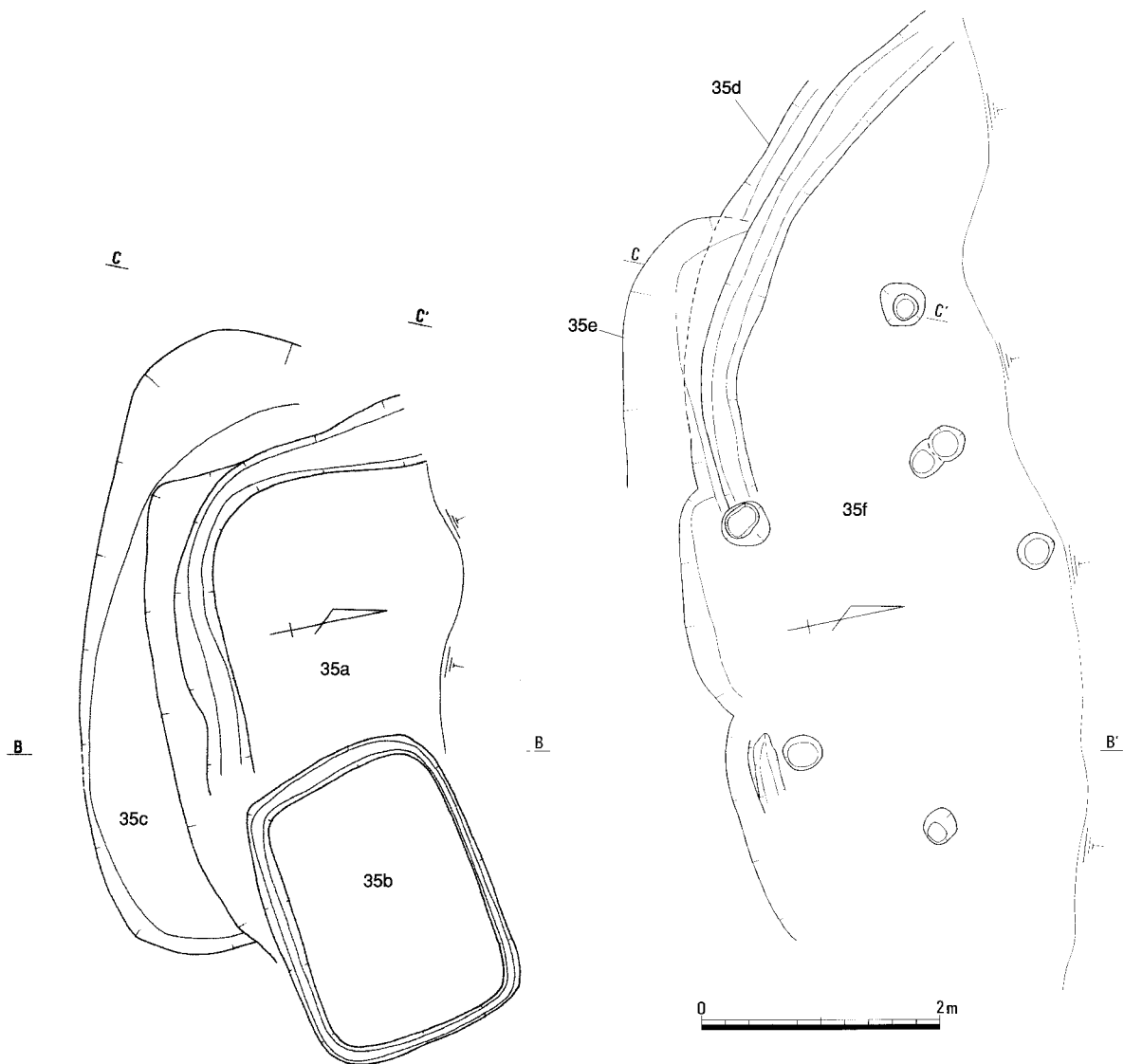
竪穴住居35bは、重複する住居の中で唯一全体の形態を把握できたものである。規模は256×185cm、壁高さは断面図から72cmを測り壁帯溝が巡る。住居35aとの関係は、土層断面図B—B'の第9・10層が当住居の埋土で、住居35aを切って構築されていることが観察される。床面には、周溝以外の施設は確認できなかったが、ピットeは上に土器が置かれていたことからこの住居に伴うものではないと判断している。

出土遺物(第68図)は、144・146・147が南東隅にかたまり、その検出状態からは、147の上に144



第66図 竪穴住居35(1/60)

を載せていたと考えられる状態のものであったのが、そのまま横に倒れた内容として遺存したと判断される。他に、3ヵ所で床面に接し検出されている。これらのうち、144は、口径14.8cm、底径6.6cm、器高32.8cmを測る甕である。文様は、口縁外面に3本の凹線文を施し、櫛描文の内容は、クシメの数は一定することはない。施文する頸部下半からの本数を見ていくと4~6、7、12、6~12、4~6となり工具の当る部分により施文の内容が変化したと思われる。145は、口径15.9cm、底径7.4cm、器高32.8cmを測る甕である。文様は、口縁外面に4本の明確さに欠ける凹線文が施文される。両者は交互に施文され、本数は上から10、5、7、5、5の本数が認められる。146は、口径14.4cm、底径6.7cm、器高31.6cmを測る壺である。内傾する頸部から短くL字状に外反させ、端部を上下に拡張する。胴部最大径は上位にあり、底部への移行は鈍角である。文様は、口縁外面に2~3本の凹線文を施し、肩部には波状文と直線文の櫛描文を交互に施文する。147は、口径15.3cmを測る甕である。頸部を「く」の字状に屈曲させ、端部を上方に拡張する。文様は、口縁外面に3本の浅い凹線文を施し、肩部から胴部最大径にかけ波状文と直線文の櫛描文を交互に施文する。外面調整は、頸部下にタテハケを行う。内面は、頸部下に押圧痕のちヨコハケで、胴部最大径部からはタテヘラケズリが認められる。148は、

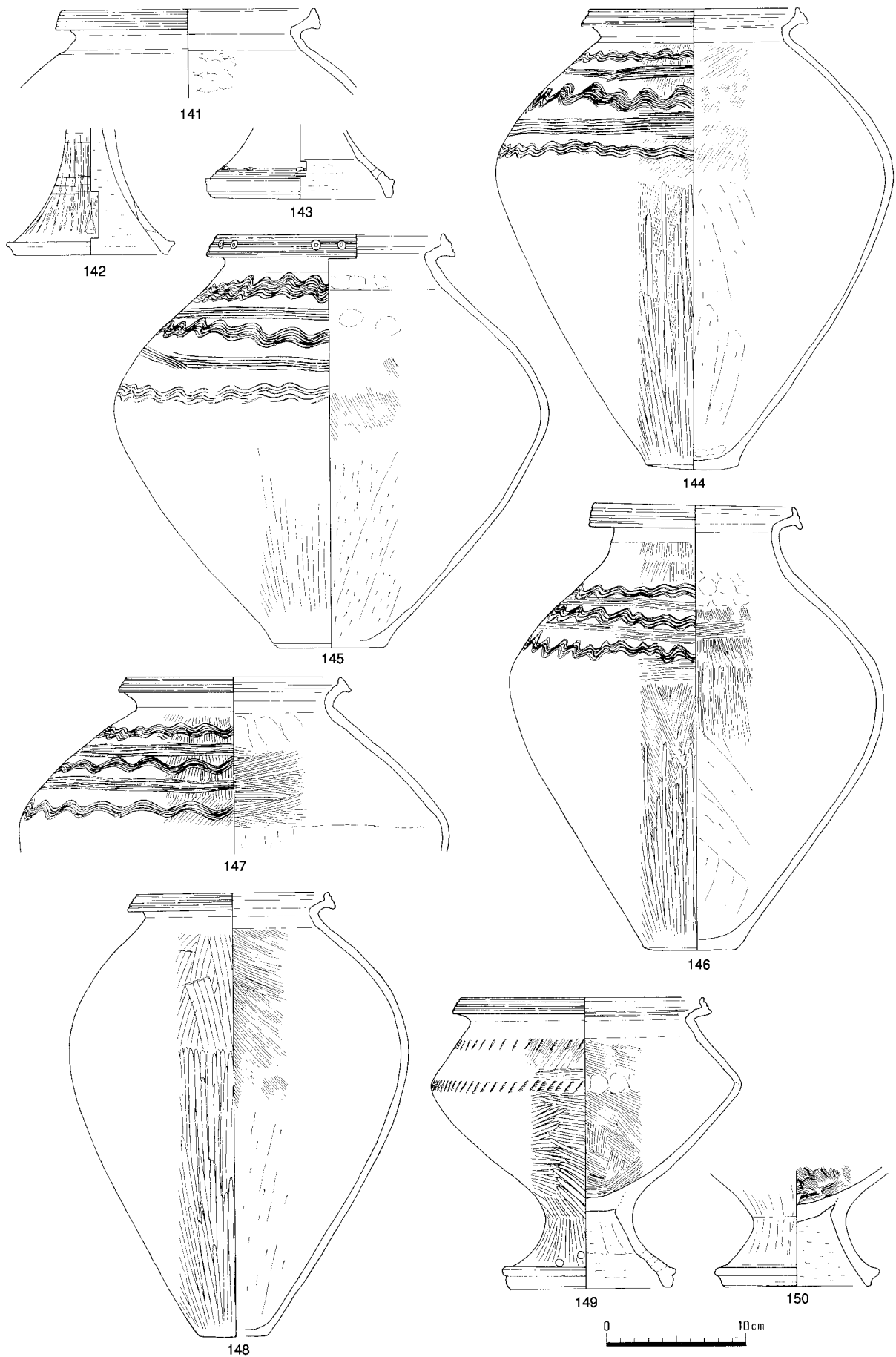


第67図 竪穴住居35関係図(1/60)

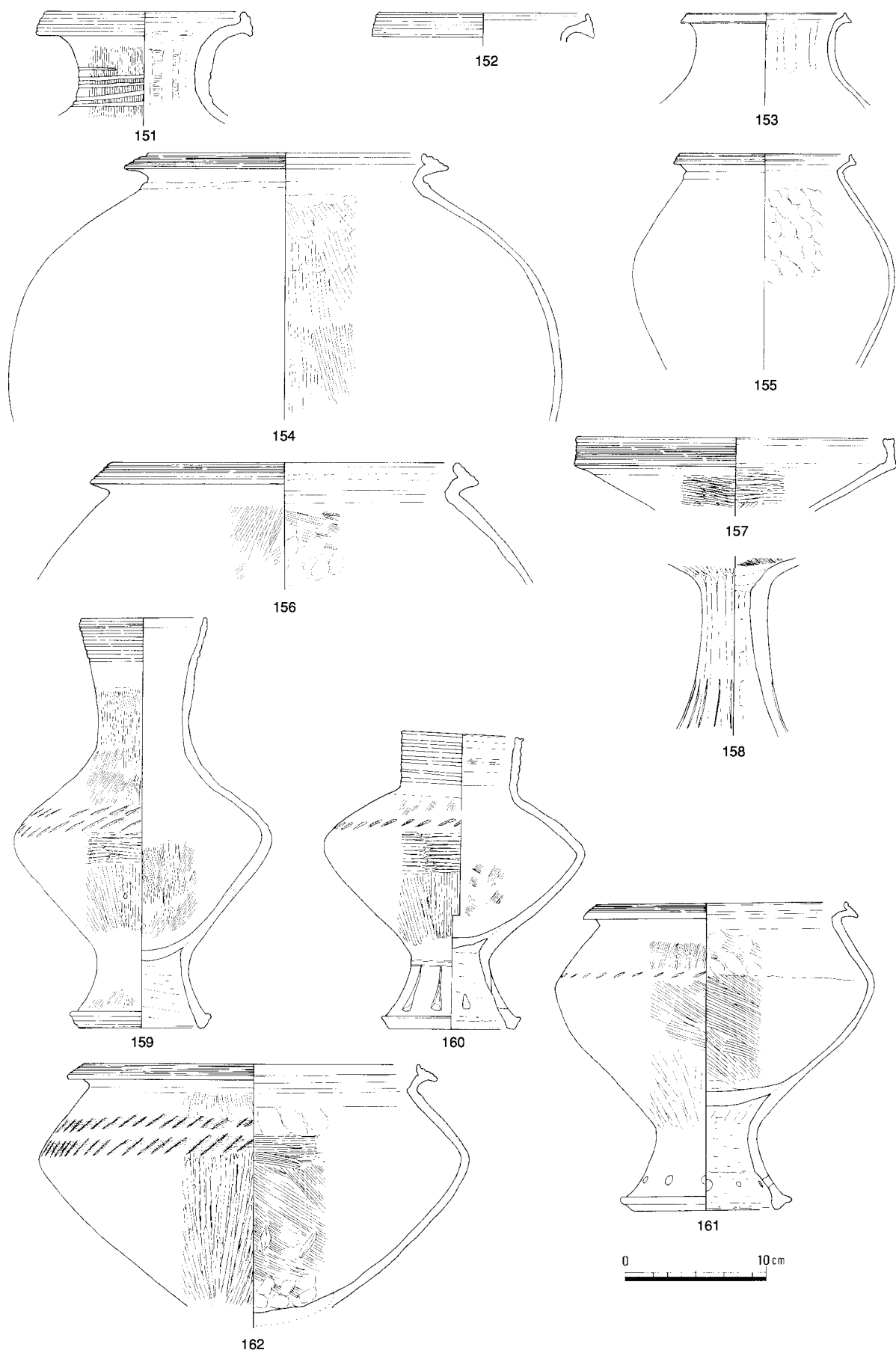
口径13.8cm、底径5cm、器高31.5cmを測る甕である。頸部を「く」の字状に屈曲させ、端部を上下に拡張する。胴部最大径は上位にあるが、文様を有する器種に比較して胴部の張りが大きくない。文様は、口縁外面に3本の凹線文を施文する。外面調整は、頸部下から胴部上位に幅広のハケメ、以下底部にかけてタテヘラミガキを行う。内面は、頸部下から胴部中位にナナメハケメ、以下タテヘラケズリが見られる。**149**は、口径17.2cm、台径11.4cm、器高20.6cmを測る台付甕である。頸部を「く」の字状に屈曲させ、端部を上方に拡張する。肩部は撫肩となり、胴部は逆「く」の字状に強く屈曲する。台部は「ハ」の字状に外反し、端部は立ち上がる。文様は、口縁外面に3本の凹線文を施し、肩部と胴部最大径部分に連続刺突文、裾部下半には、2個一対の円形透かしを施している。外面調整は、肩部上半にナナメハケで下半にヨコハケ、胴部最大径からは多角形のヘラミガキを施している。内面は、胴屈曲部に押圧痕、のち全体にナナメハケが認められる。台部は、ヘラケズリが行われる。**150**は、台径10.5cmを測る台付甕である。台部は「ハ」の字状に外反し、端部は肥厚させ、端面はナデによる凹部を形成する。外面調整はタテヘラミガキ、内面はヨコヘラケズリが見られる。

竪穴住居35cは、南側に「コ」の字状に検出され、規模は510cmを測り、形態的には方形を呈する。当住居は、第67図に示したようにプラン検出時に確認されてものである。重複関係にある住居35a・bとは、第66図B—B'の土層断面図から第1～4層が当該住居の埋土であり、このうち第4層が貼り床で写真図版8—1で見られるように明瞭に観察されたのである。したがって、下層に存在する2軒の住居の埋土上に構築されている。

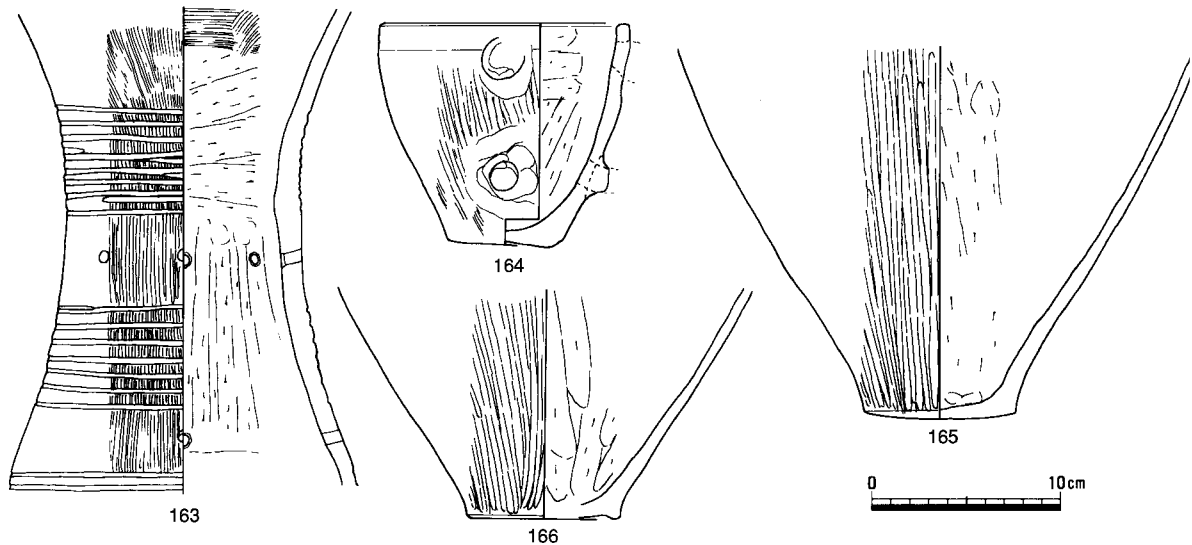
出土遺物(第69・70図)は、第66図の平面図に示したように、床面近くに比較的まとまって検出された。同図B—B'の土層断面の第2と3層のドットがそれであるが、断面位置が土器と離れていることから見通しとして作図している。**151**は、口径14cmを測る壺である。頸部は緩やかに外反し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁外面に3本の凹線文、頸部には螺旋の沈線文が施文される。外面調整はタテハケ、内面はヨコハケのちナデが認められる。**152**は、口径14.6cmを測る壺である。口縁端部は肥厚させ、上方に細く拡張する。端面には、3本の浅い凹線文施文される。**153**は、口径11.1cmを測る壺である。頸部は緩やかに外反し、端部を肥厚気味にする。内面調整は、ナデが認められる。**154**は、口径19.3cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を折り返し状に拡張する。肩部から胴部の移行は、丸身をもつ形状を示す。文様は、口縁外面に4本の凹線文が施文される。凹線文は、上端が深く明瞭であるが下方に行くにしたがい凸部の幅が狭くなる。外面調整は図化できなかつたが、ハケメのあとヘラミガキを観察できる。内面は、肩部に押圧痕のち胴部下に細かいハケメが見られる。**155**は、口径12.1cmを測る甕である。頸部は、端部を上方に拡張する。文様は、口縁外面に2本の凹線文を施文する。外面調整は、器面の磨滅により図化できなかつたがヘラミガキが認められる。内面は頸部下から胴部半ばまでハケメと押圧痕、以下ヘラケズリが見られる。**156**は、口径24.3cmを測る甕である。文様は、口縁外面に4本の凹線文を施文する。この凹線文は、当初に施文され凹線は深く明瞭であるが、再度口縁全体にナデを施し粘土が被る内容を残している。**157**は、推定口径22.3cmを測る高杯である。**158**は、柱状部片で下方に透かしが施される。**159**は、口径8.6cm、台径8.8cm、器高28.8cmを測る台付直口壺である。胴部半ばには、外からの敲打による穿孔が認められる。**160**は、口径8.6cm、台径8.7cm、器高20.9cmを測る台付直口壺である。**161**は、口径17.6cm、台径10cm、器高21.6cmを測る台付鉢である。**162**は、口径23.6cmを測る台付鉢である。文様は、口縁外面に4本で上2本は明瞭であるが、下2本は浅くなり明瞭さに欠ける部分が認められる。**163**は、筒部の遺存した器



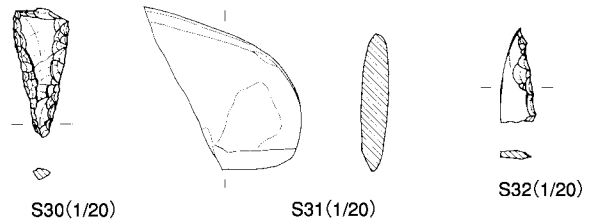
第68図 竪穴住居35出土遺物 1 (1/4)



第69圖 豎穴住居35出土遺物 2 (1/4)



台である。口縁部側は外方に開くが、台部側は内傾気味の器形を呈する。文様は、筒部上方に8本、下方に2段にわたり7本と2本以上の凹線文が施文される。凹線文は、重複する部分が認められている。164は、口径12.6cm、底径5.5cm、器高12.1cmを測る把手付鉢である。把手は、縦方向に差し込み式で付されている。165は、底径8cmを測る底部片である。166は、底径約7.6cmを測る底部片で上げ底となる。上げ底となる部分は、別途に粘土を充填した状態を観察している。石器(第70図)は2点でS30は、長さ35.0mm、幅15.0mm、厚さ4.5mmのサヌカイト製石錐で、先端部が磨滅している。S31は、流紋岩製の磨製石包丁である。



第70図 竪穴住居35出土遺物3 (1/4・1/2)

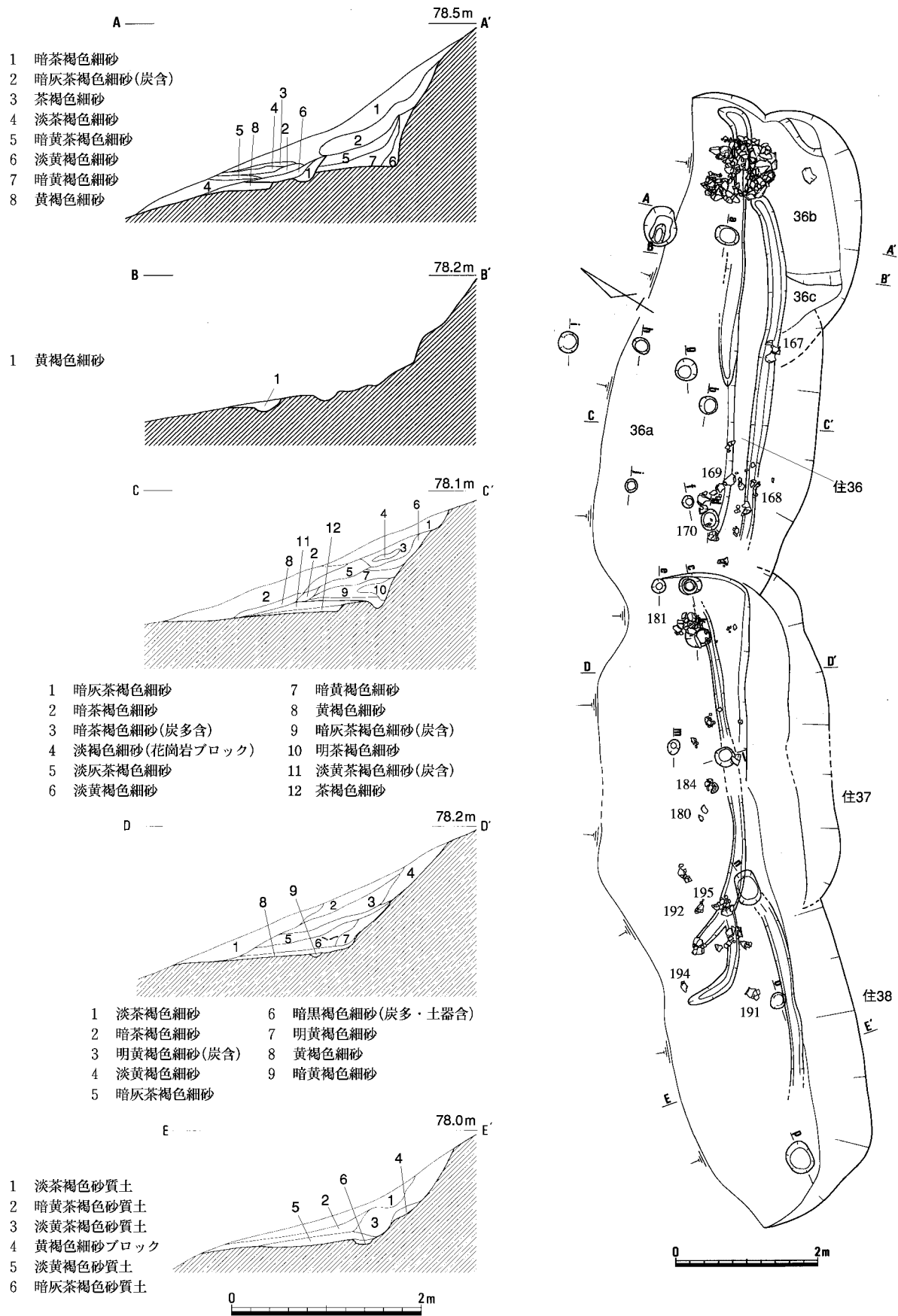
竪穴住居35dは、住居35a～cの確認を終了段階で西側部分に基盤層と考えている土層が認められない面の広がりを検出した。当該住居は、この部分に相当する。壁の一部のみの検出であるが住居35fの床面との関係は、当住居の壁下端と高さの差異はない。このことから、住居35fと同一住居として、検討したが判断できなかった。

竪穴住居35eは、住居35dと同様な状況で確認された。住居は南西隅が検出され、床面は住居35fと同一の高さで続いている。調査時においては、住居35dを切って構築されているのを第67図に見られる西側部分で確認している。

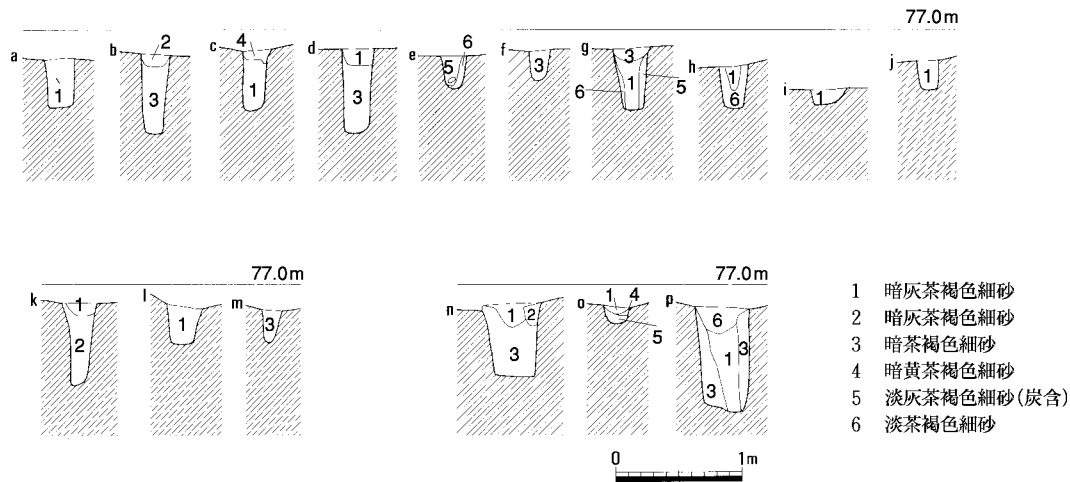
竪穴住居35fは、第67図最終遺構検出面に示される幅30cm前後、深さ6cmほどの壁帯溝である。住居35dと同一のものか判断できないが、第67図に示した住居35dから延びる破線が図のようになればと思考するが、調査段階での判断を変えるにいたらなかったのである。

第67図の最終遺構検出面は、基盤層とする面で検出されたものである。南側の壁の変化は、住居35aのなかでのものとし、東側部分の途切れた溝は住居35fに伴う可能性もある。検出された柱穴のうちa・b・c・fは、断面図に示すように暗茶褐色細砂で埋められている。なお、これらの柱穴がどの住居に伴うかは明らかにできなかったのである。

竪穴住居36 (第71図)



第71図 竪穴住居36~38(1/60・1/80)



第72図 縦穴住居36~38土層断面図(1/60)

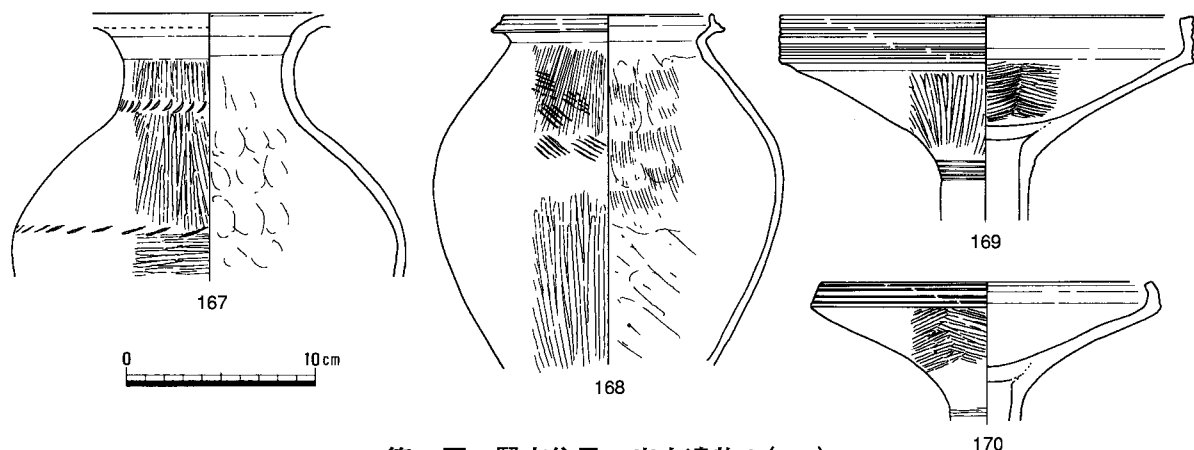
縦穴住居36は、縦穴住居35の南西上方に位置し、a~cの3軒と重複している。

縦穴住居36aは、南辺の壁が6.1mほどにわたり壁帯溝と立ち上がりを検出した。住居36bとは、第71図A—A'とC—C'の土層断面図で示すごとく、8と12層が住居36aの埋土であり、その上に堆積する土層が住居36cの埋土となる。当該住居に伴う柱穴は、検出できなかった。図示している柱穴は、いずれも住居36cの床面確認時において検出されたものである。

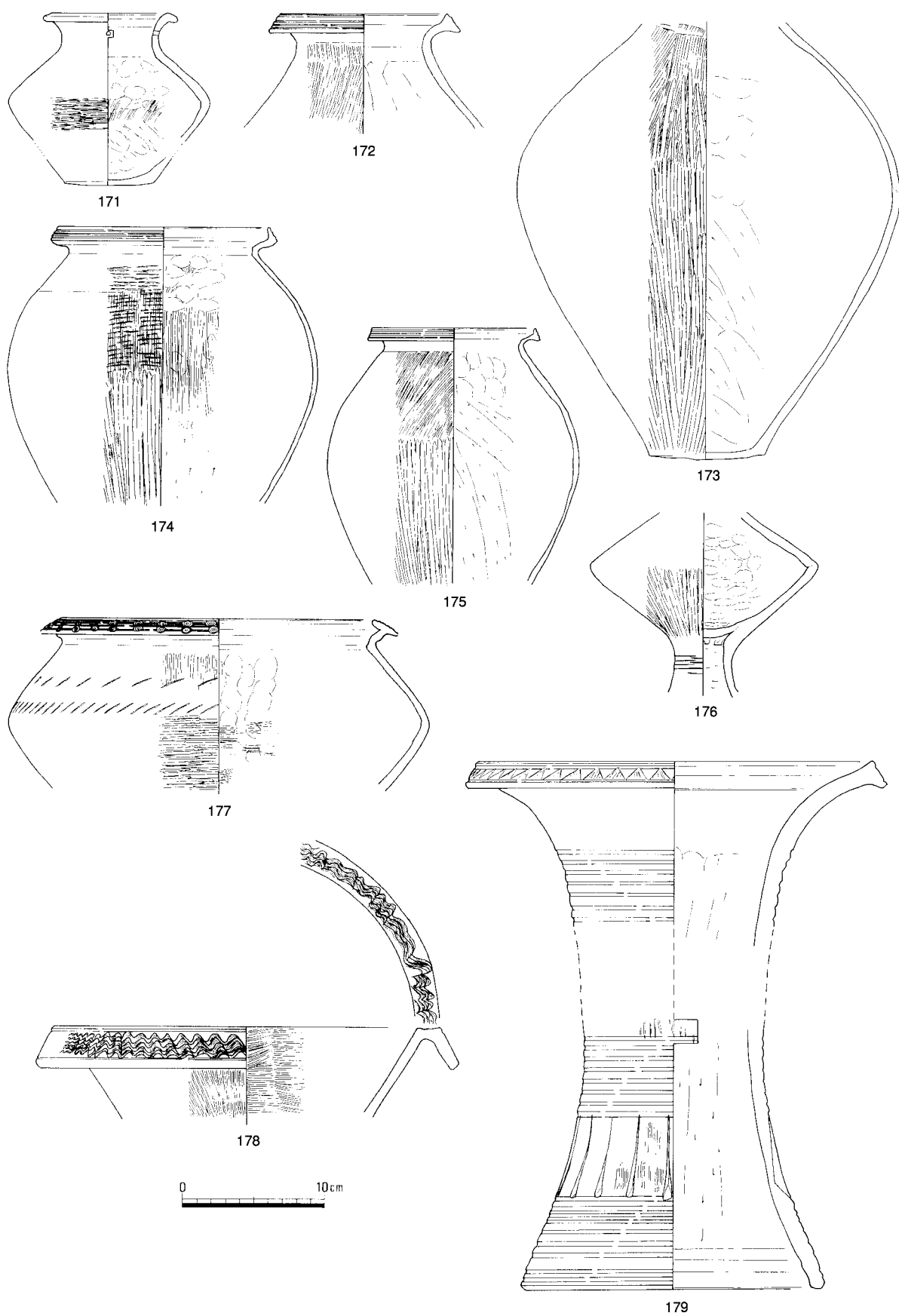
縦穴住居36bは、住居36cの北東側に3mで丸みを持つ方形の形態を呈する。第71図A—A'の土層断面図は、当該住居の埋土である第5・7層を切って住居36cが構築されている。壁帯溝は認められず両隅には、一段高い部分を残している。

縦穴住居36cは、北東部分のを検出できなかったが壁帯溝と柱穴を確認することができた。壁帯溝は、長さ480cmを検出した。図示した柱穴は、当該住居の床面において確認できたものである。a~cの柱穴が、その位置関係から支柱穴を構成したものと判断される。重複する住居との関係は、先に記した通りである。

出土遺物(第73・74・75図)は、南西寄りにまとまって検出された。**167**は、頸部が緩やかに屈曲し、口縁端部は欠損している。外面調整は、胴部上半までタテヘラケズリ、以下ヨコヘラミガキを行う。**168**は、口径11cmを測る甕である。外面調整は、胴部上半にタタキが認められる。内面は、胴部中位まで押圧のちハケ、以下ヘラケズリを行う。**169**は、口径21.8cmを測る高杯である。口縁は、内側を

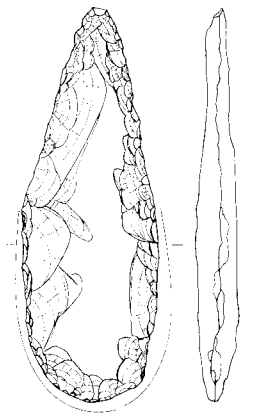


第73図 縦穴住居36出土遺物 1 (1/4)



第74図 豎穴住居36出土遺物 2 (1/4)

肥厚気味とする。170は、口径17.4cmを測る高杯である。口縁部は、内傾して上方に拡張する。文様は、口縁部外面に4本の凹線文を施文し、上2本は部分的に凹線の消失認められるが、下2本は明瞭に施文されている。171～179とS33は、住居36の検出過程において住居36bの埋土上面から第71図に示すように、ほぼ2mの円形状の範囲にほぼまとまった状態で認められたものである。本来的には、土器溜りとして扱うのが妥当と思されるが、一応ここで報告する。171は、口径8.7cm、底部径6.1cm、器高12cmを測る壺である。頸部には、2個一対の円孔が施される。外面調整は、胴部屈曲部にヨコヘラミガキが見られるが、他は剝離のため不詳である。172は、口径11.8cm、を測る壺である。頸部は外方に屈曲し、端部を肥厚させる。173は、底部径8.1cm、を測る甕である。底部は、張りだしている。174は、口径14.8cm、を測る甕である。頸端部は、上方に拡張する。文様は、凹線文の上2本が深く明瞭であるが、他は浅くなる。外面調整は頸部下半から胴部最大径部分にタタキを施す。175は、口径11.2cm、を測る甕である。176は、台付壺である。

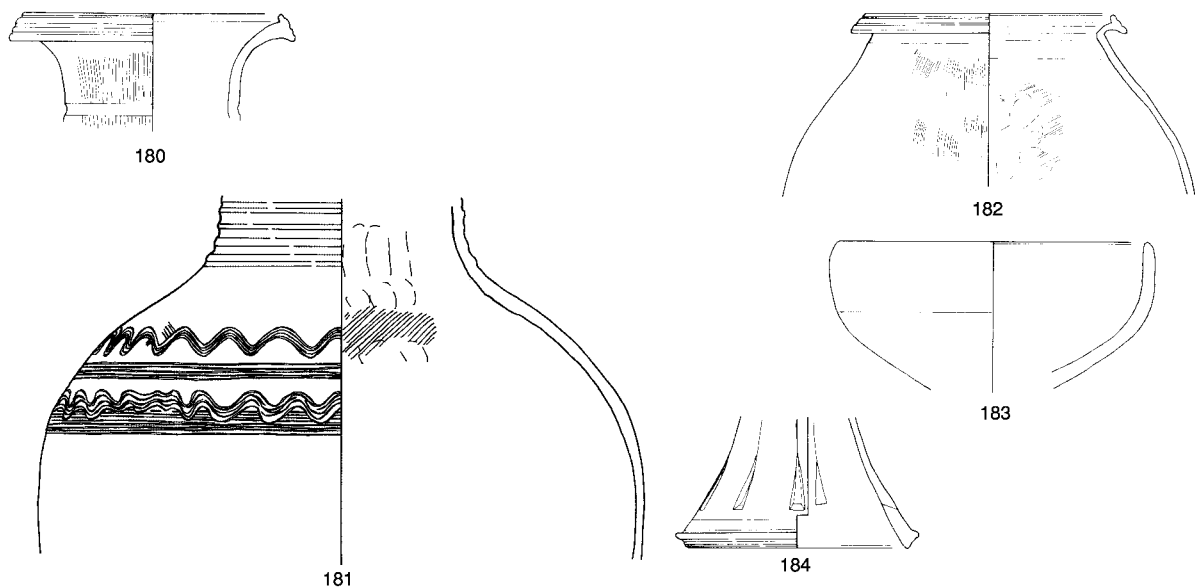


第75図 竪穴住居36
出土遺物3 (1/2)

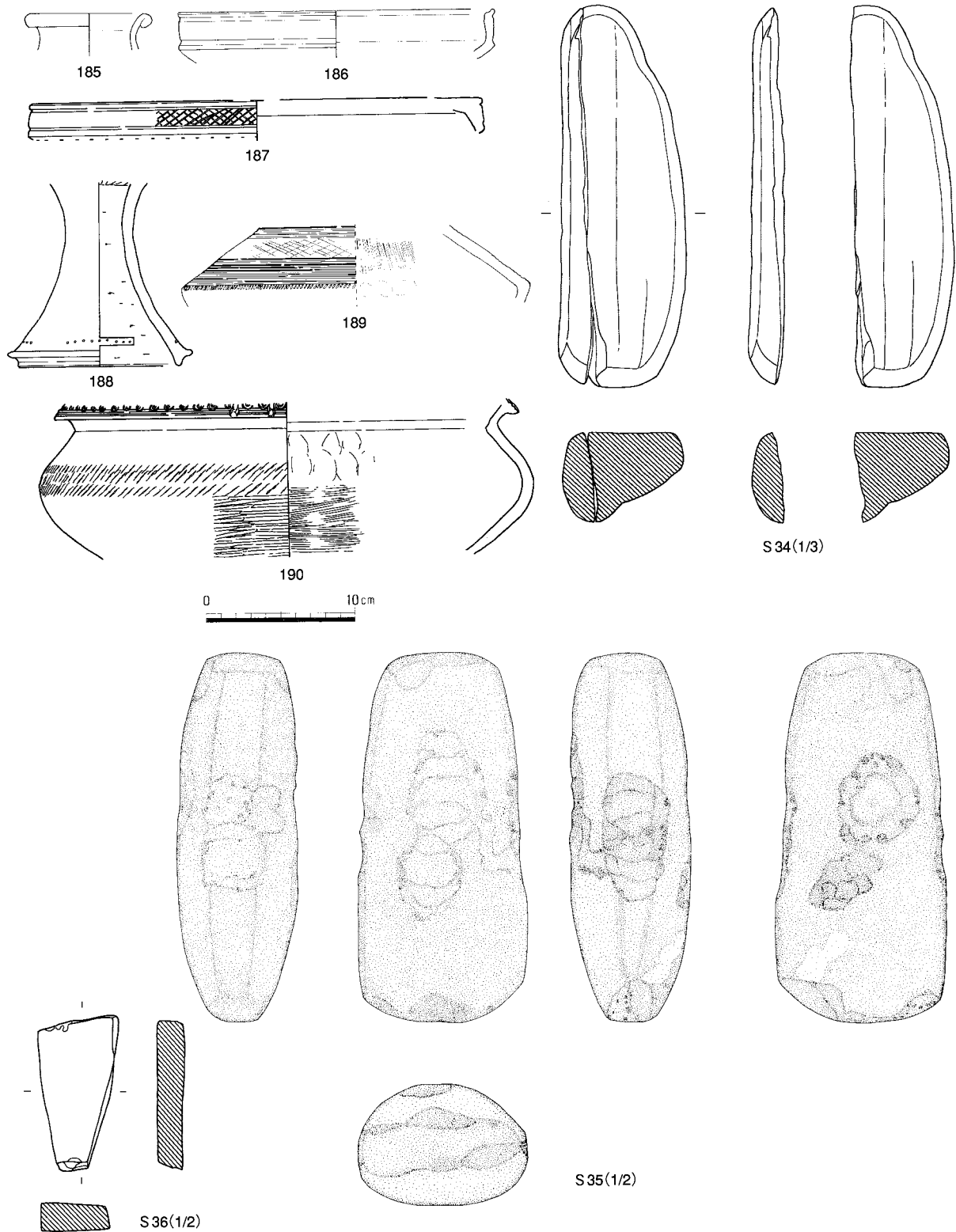
文様は、台部上半に単独線による4本のヘラガキ沈線文を施文する。177は、口径21.8cmを測る台付鉢である。外面調整は、胴部最大径からヨコヘラミガキ、内面は押圧のちヨコハケを施す。178は、口径27cmを測る器台である。外方に延びる口縁端部を平坦面を残し、さらに斜め下方に拡張する。179は、口径27.8cm、台径20.6cmを測る器台である。筒形の体部から受部は大きく外反し、端部は下方に肥厚する。裾端部は、丸く納めている。文様は、裾部に細い三角形状の袂りを施すが、残存する7個については裏面に貫通していない。S33は、長さ104.0mm、最大幅36.0mm、最大厚11.0mmを測る石槍である。先端は、欠けている。基部は、敲打により潰されている。基部と両側面には、珪酸の付着と推測される部分が認められることから石包丁からの転用とも思考される。

竪穴住居37 (第71図)

竪穴住居37は、住居36と南西側で重複した位置に所在する。壁は460cmにわたり方形状に認められ



第76図 竪穴住居37出土遺物1 (1/4)



第77図 竪穴住居37出土遺物 2 (1/4・1/3・1/2)

る。平面図においては、壁帯溝の上方に2段の下端と上端を表示しているが、同図のD—D'の土層断面図で明らかなように壁部分の変化であり、異なる住居の掘り込みを表現したものではない。壁帯溝は、壁下端よりも離れるが当該住居に伴うものである。しかし、壁帯溝の南西隅側に認められる壁帯溝との関係は、把握できなかった。柱穴は、k・1・mの3個を検出するのみである。

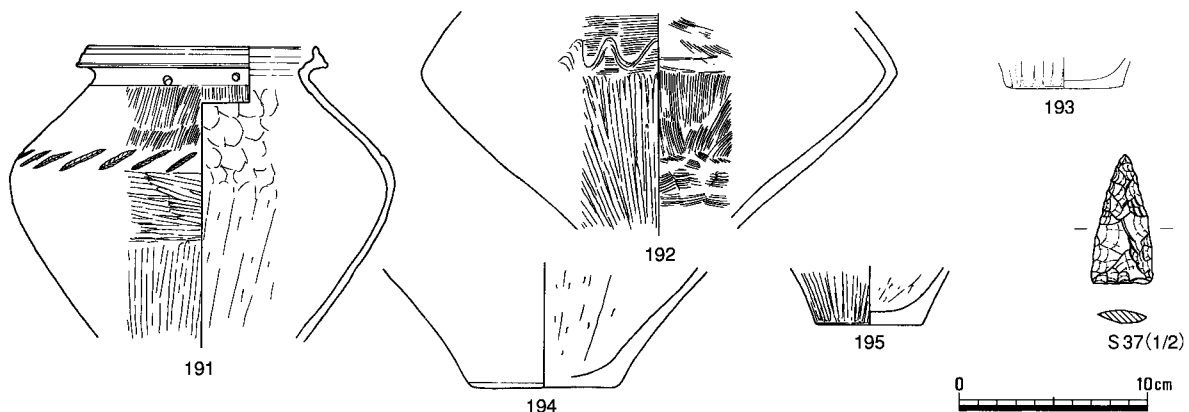
出土遺物(第76図)は、南東よりの床面から多く出土し、**180**～**184**と**S34**は床面、**S36**が柱穴からの出土で、他は埋土中からである。**180**は、口径13.5cmを測る壺である。頸部は緩やかに外反し、口縁端部を上下に拡張する。文様は、口縁端面に3本と頸部に凹線文を施文する。外面調整は、粗いタテハケが施される。**181**は、壺である。文様は頸部に凹線文、頸部下半から胴部にかけて櫛描の波状文と直線文を交互に施文している。**182**は、口径13cmを測る甕である。頸部は逆L字状に外反し、斜め上方に拡張する。**183**は、推定口径16.2cmを測る鉢である。器面が剥離して調整等は不詳である。**184**は、脚径11.6cm、を測る高杯の脚部である。脚端部は肥厚気味にする。文様は、脚端面に2本の凹線文、裾部には細長い三角形の透かし孔を施すが、貫通しないものも認められる。**185**は、口径7.8cm、を測る壺である。口縁端部は、折り曲げて玉縁状となる。**186**は、口径21cmを測る高杯である。**187**は、口縁端部が鏢状に張りだし、端部は下方に拡張する。**188**は、脚径10.6cmを測る高杯である。裾部は「ハ」の字状に開き、裾部下方には、6～3個対の貫通しない刺突文が施される。**189**は台付鉢と思われるもので、胴部は逆「く」の字状となる。器面外面の一部には、丹塗の痕跡が確認されている。**190**は、台付鉢である。外面調整は胴部屈曲下方からヨコヘラミガキを施す。内面は胴部上半に押圧、下方に細かいハケが見られる。

S34は、当該住居の柱穴k上面とⅢ区に所在する住居66aの埋土中からの2ヵ所からの出土が接合した緑色片岩製砥石である。前者からは長さ191.0mm、幅18.0mm、厚さ45.5mm、重さ221.3gで、後者は長さ191.0mm、幅52.0mm、厚さ45.5mm、重さ633.22gを測る。また、両者の接合で使用痕は認められなかった。**S35**は、長さ123.5mm、幅56.5mm、厚さ41.0mmを測り、磨製石斧を敲石に転用したものである。石材は、流紋岩製で各部に敲打痕が顕著に残されている。出土は柱穴eで、第72図土層断面の底近くに丸く表示している。**S36**は、長さ78.0mm、幅40.5mm、厚さ14.0mm、重さ64.4gを測る流紋岩製砥石である。

竪穴住居38 (第71図)

竪穴住居38は、住居41の北下方に位置し、住居37と重複する。壁は北東から南西に、長さ400cmほどの方形に確認された。壁帯溝は、一部検出されている。ピットはn・o・pの3個を認めるが、第72図のpの土層断面において柱痕跡を確認でき、nは深いがおは浅すぎて柱穴の用にはならない。また、壁帯溝と重複しているため支柱穴として用いたかは判断できないのである。また、先に記した住居37のピットkとlと当住居のピットnとは、大きさと深さにおいて差異が認められるが距離的に等間隔の位置にある。

出土遺物(第78図)は、石器を除いて床面より6～7cm浮いた状態で検出された。**191**は、口径12cmを



第78図 竪穴住居38出土遺物(1/4・1/2)

測る甕である。外面調整は、頸部から肩部下半にタテハケで胴部半ばまでヨコヘラミガキ、以下タテヘラミガキを施す。**192**は、胴部が逆「く」の字状に屈曲する台付鉢である。文様は、胴部に櫛描文を施文する。**193**は、底径4.5cmを測る。外面調整はタテヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。

194は、推定底径7.3cmを測る。外面調整は器面の剝離のため不詳、内面はタテヘラケズリを施す。

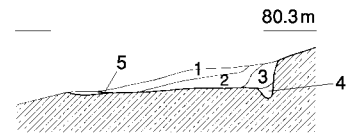
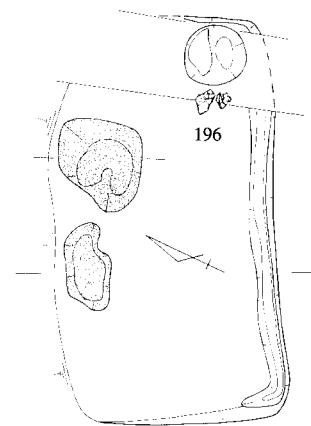
195は、底径5.6cmを測る。外面調整はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリを施す。

S 37は、長さ34.0mm、幅16.0mm、厚さ4.5mm、重さ2.03gを測るサヌカイト製石鏃である。床面より11cmほど浮いた埋土中で検出された。

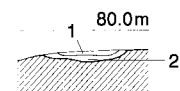
竪穴住居39 (第79図)

竪穴住居38は、土壙16の南西側に位置し、第一次調査のトレンチを北東片に設定した関係から、かろうじて北東辺を確認することができたのである。住居は、長さ320cmの方形に確認され、丘陵斜面下方の北西側は消失している。壁の高さは20cmを測り、幅15cm、深さ5cm前後の壁帯溝を検出する。注穴は、床面が花崗岩風化のしまった土層であったが確認することはできなかったのである。床面には、2ヵ所の焼土面を検出した。北東側の焼土は、規模が7×6.5cmを測る。深さ8cmほどに被熱の影響を受けている。土層断面にかかっている焼土は、規模7×3.5cm、深さ3cmほどに被熱の影響を受けている。

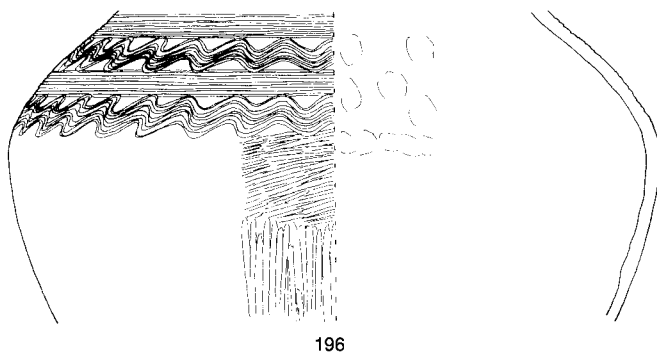
出土遺物(第79図)は、いずれも床面からの検出である。**196**は、肩部から胴部下半までの破片である。文様は、肩部に5本の櫛描文により直線文と波状文とが交互に施文されている。何れの線も幅広で、条線を持たない施文具を用いている。外面調整は、文様下から胴部半ばまでやや斜めのヘラミガキ、以下タテヘラミガキを施す。内面は、肩部に押圧、以下は器面の剝離で調整不詳である。**197**は、台付壺である。肩部が下方に「ハ」の字状に開き、内側に強く屈曲して脚部へ移行する。文様は、脚部上方に円形の透かし孔が6個穿たれている。外面調整は、風化が著しく凶化できなかったが、ヘラミガキを認める。内面は、肩部から底面にかけてナデとシボリ、底面にはハケが施される。



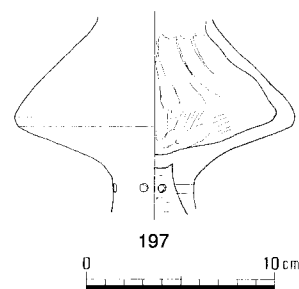
- 1 暗茶褐色細砂
- 2 暗黄茶褐色細砂
- 3 黄茶褐色細砂
- 4 暗灰茶褐色細砂
- 5 焼土



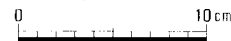
- 1 明赤褐色細砂(堅くしまる)
- 2 暗赤褐色細砂(堅くしまる)



196



197



第79図 竪穴住居39(1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居40 (第80図)

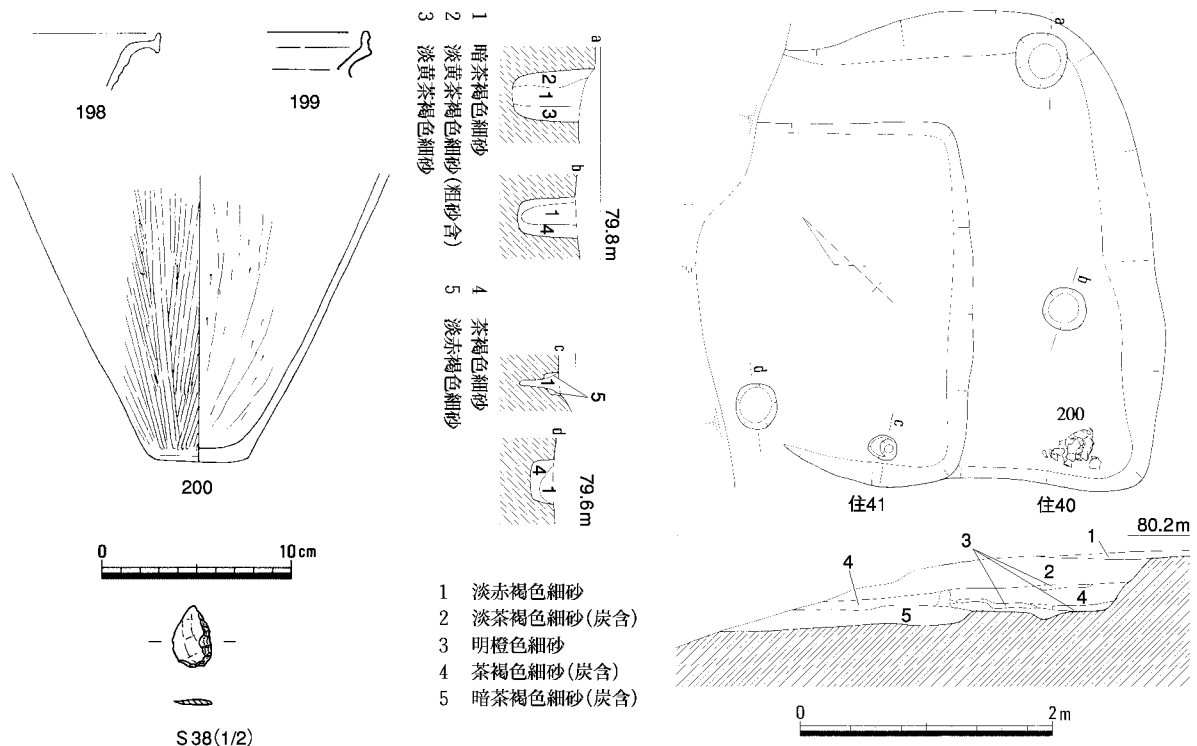
竪穴住居40は、住居44の北西下方に位置する。住居は、北東から南西に長さ375cmにわたり「コ」の字状に確認され、住居41と重複している。壁の高さは40cmを測るが、基盤は花崗岩風化土のしまった層であったが、壁帯溝は認められなかった。

住居の所在する地点は、平坦面を形成する地形を示していることから、住居埋土の状況がこれまでの斜面にあるものと異なり水平の状態での堆積である。住居41との重複関係は、土層第1~4層が住居40の埋土であり、第5層は貼り床に用いた土層である。このことから、住居41の上に貼り床を構築されたことが判断できる。柱穴は、2個検出しているが、土層断面においていずれも柱痕跡を認めている。

出土遺物(第80図)は、埋土からの検出であり、南西隅より出土した200は床面から17cm上からである。198は、壺の小片である。口縁部は外反し、端部を上下に拡張する。文様は、頸部に凹線文の施文か認められが、器面調整などは剥離が著しく不詳である。199は、甕の小片である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を上方に拡張する。文様は、口縁外面に2本の凹線文が施文される。S 38は、長さ16.0mm、幅10.0mm、厚さ1.5mm、重さ0.29gを測るサヌカイト製石鏃である。

竪穴住居41 (第80図)

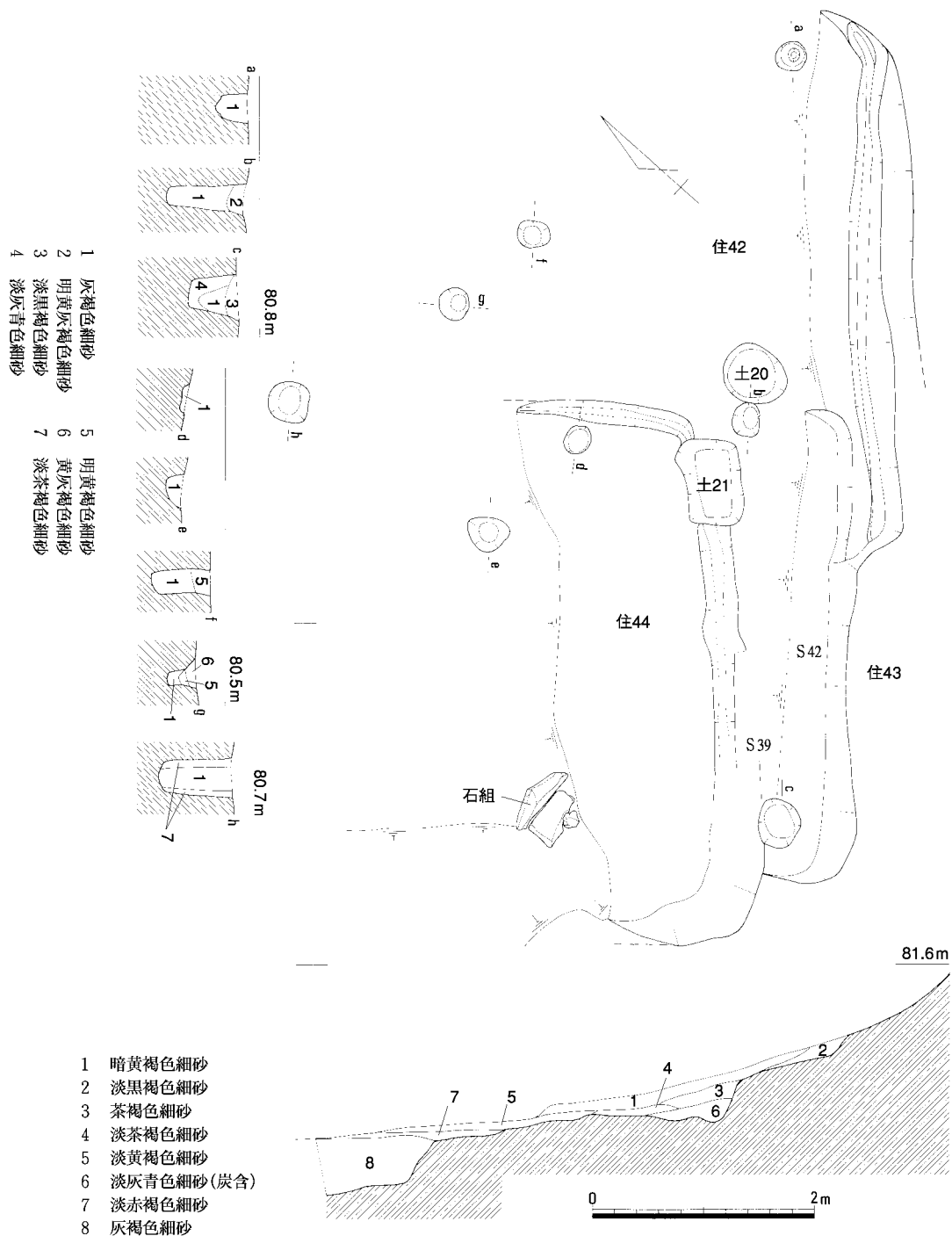
竪穴住居41は、住居44の北西下方に位置する。住居は、北東から南西に長さ288cmにわたり「コ」の字状に確認され、住居40と重複している。壁の高さは15cmを測るが、住居40と同様に壁帯溝は認められなかったのである。ピットは2個認められたが、柱穴に用いられたかについては判断しがたい内容である。住居40との関係は、第80図の土層断面図に示すように第6層が当該住居の埋土である。このことから、住居40よりも古くなる。



第80図 竪穴住居40・41(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

竪穴住居42 (第81図)

竪穴住居42は、段状遺構2の南西側近くに位置する。住居は、北東から南西に長さ約500cmにわたり「コ」の字状に確認され、住居43と重複している。壁の高さは55cmを測り、幅30cm前後、深さ3cm前後の壁帯溝を検出している。壁帯溝は、壁下端から20cm程度に内側に入り設けている。住居43とは南西側部分で重複し、床面の高さは当該住居が10cmほど高くなる。床面は花崗岩の基盤層と判断されるが、明確に床面と把握される踏み固められた部分は認められていない。また、掲載をしていないが、土層断面においても貼り床とされる土層は認められていないのである。ピットは、5本認められている。



第81図 竪穴住居42~44(1/60)

これらのピットa・b・f・gは、この住居のプランに入るものである。ピットaは30cm前後と浅いが、ピットの底が柱を据えたように凹み、また、ピットbが深さ70cmを測る。しかしながら、これらが明確に柱穴として用いられたかについての判断がしがたいのである。何れにしても、柱穴として用いられた可能性が高いことが思考される。

竪穴住居43（第81図）

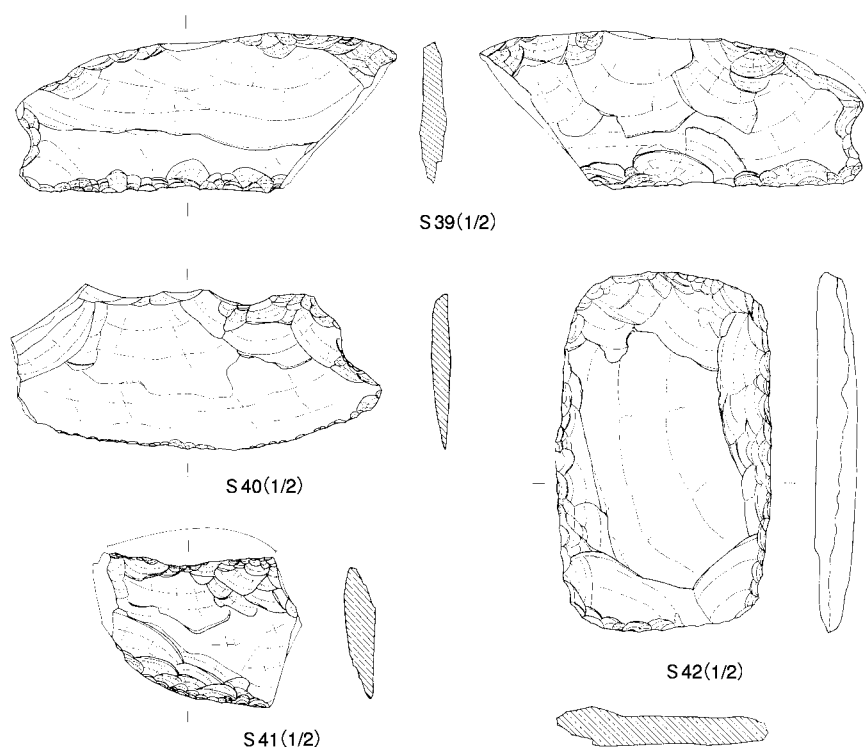
竪穴住居43は、住居40の北東側上方に位置する。住居は、北東から南西に長さ約425cmにわたり鋸状に確認され、住居42および44と重複している。壁の高さは約24cmを測り、壁帯溝は検出されなかつたのである。第81図の土層断面においては、第1と第2層が住居の埋土である。重複する住居との関係は、下方に存在する住居44との床面の差は55cm前後であり、土層断面図に示すように貼り床と思われる層は認められていない。住居43の床面は基盤層で、作図をしていることから下方に傾斜をもっている。このことから、床面が調査時における面よりも高い位置が想定され、いちがいに住居44上に貼り床を形成しなかったと判断しかねるのである。ピットは、南西隅にピットcが認められる。

出土遺物(第82図)は、埋土中から打製石包丁と打製石斧が出土している。S39は、長さ101mm、幅42mm、厚さ12mm、重さ46.9gを測り、一部欠損している。S42は、長さ95mm、幅58mm、厚さ11mm、重さ71.45gを測る。

竪穴住居44（第81図）

竪穴住居44は、住居40の北東側上方に位置する。住居は、北東から南西に長さ約490cmにわたり鋸状に確認され、住居43と北東隅側では土壌21と重複している。壁の高さは約30cmを測り、幅30cm、深さ4cm前後の壁帯溝を検出する。床面は、基盤層面での検出のため第81図の土層断面に示すように凹凸が顕著である。ピットは、2個認められているが、何れのピットも深さ5～15cmと浅く柱穴として用いられたのか判断できない。

なお、住居42～43の検出範囲の下方にピットhが検出されている。このピットは土層断面に示すように、柱痕が観察された。出土遺物(第82図) S40とS41は、これらの住居の検出過程で出土したものである。S40は、長さ97.5mm、幅44.0mm、厚さ6.0mm、重さ30.01gを測る打製石包丁である。S41は、長さ55.0mm、幅39.5mm、厚さ9.5mm、重さ22.75gを測るスクレイパーであり、一部欠損が認められる。

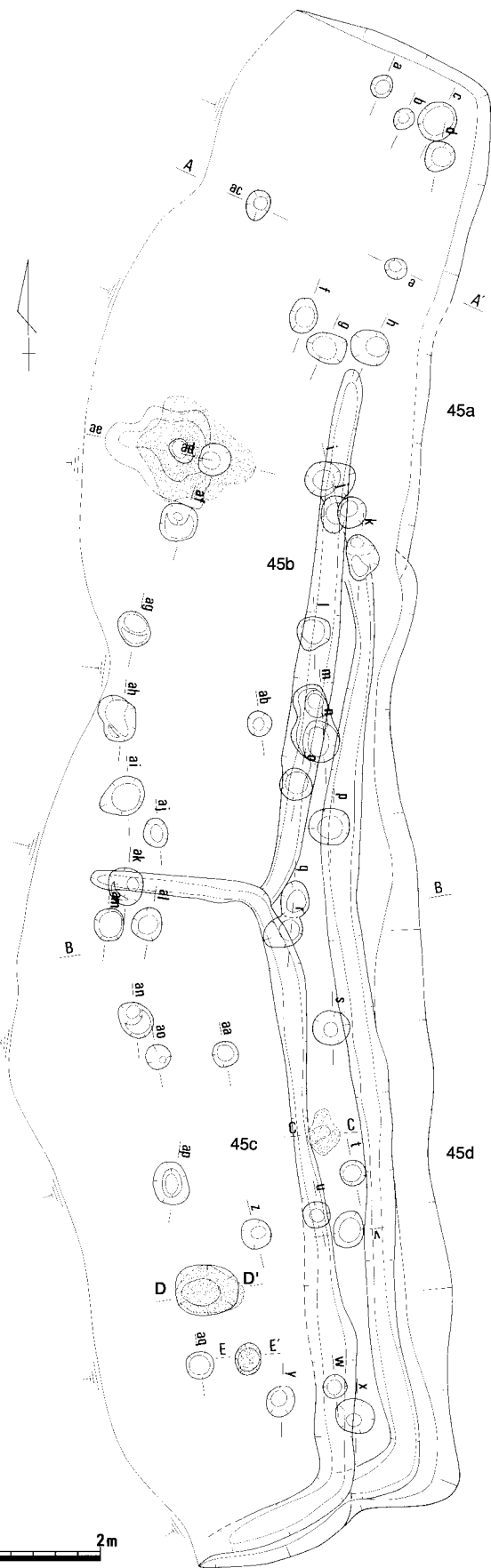
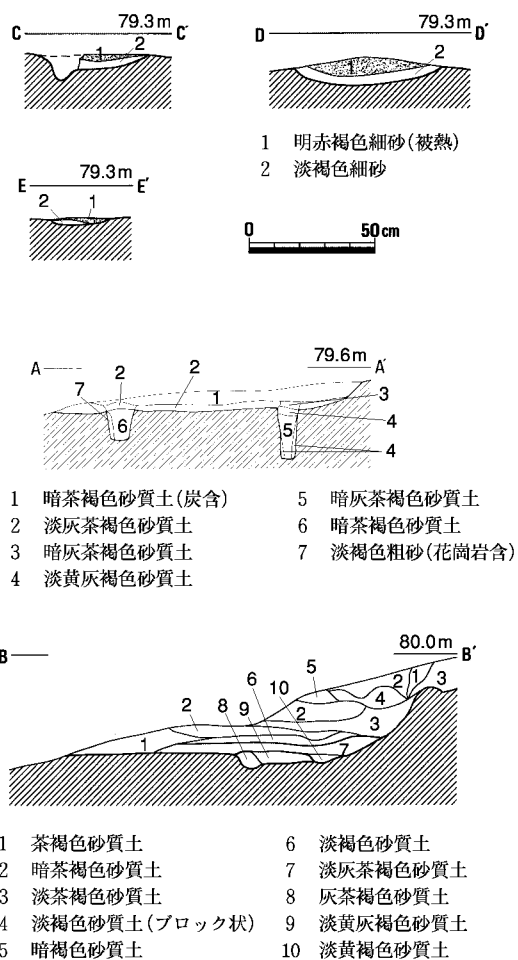


第82図 竪穴住居42・44出土遺物(1/2)

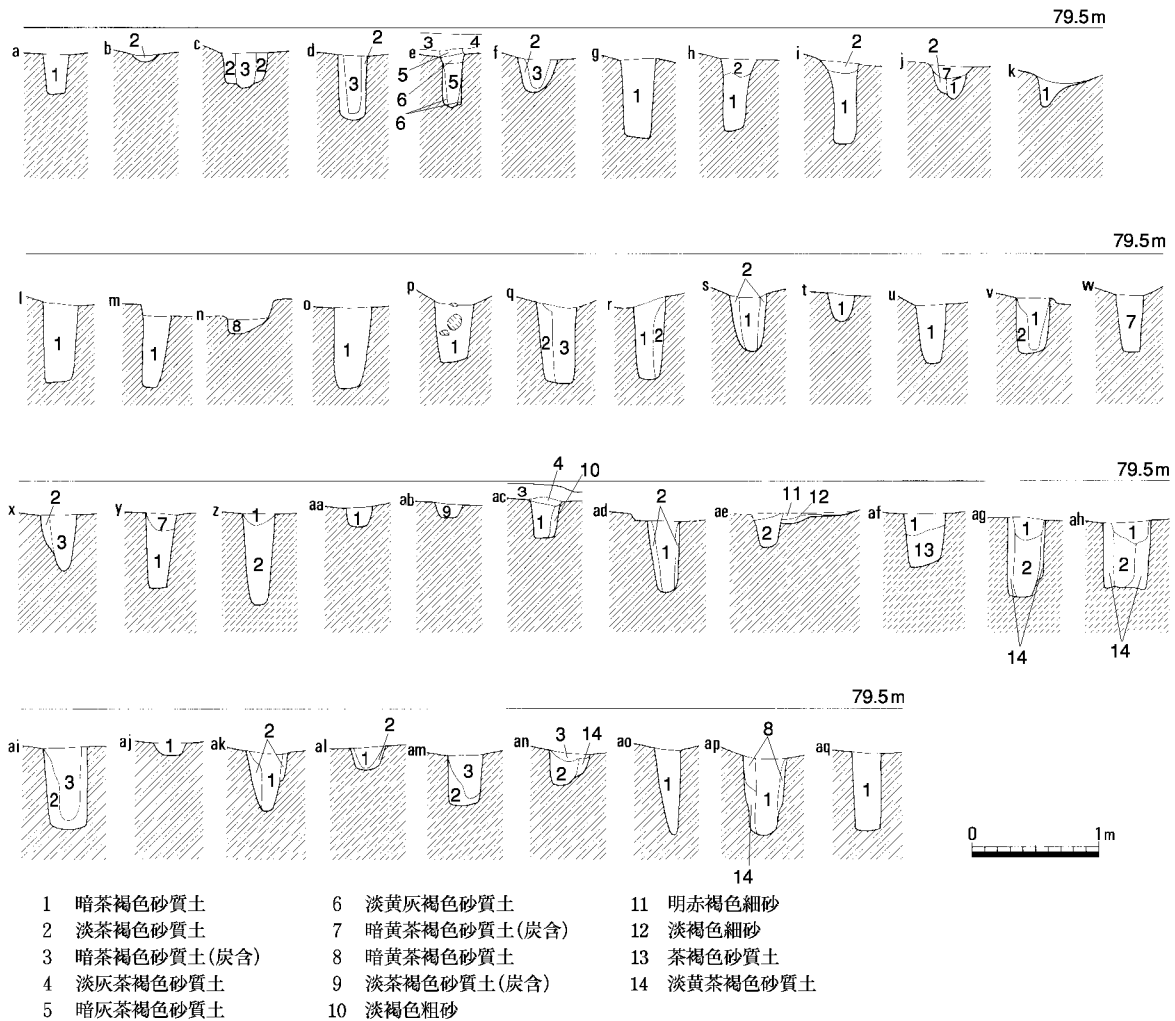
竪穴住居45 (第83図)

竪穴住居45は、段状遺構4の南西下方に位置し、a~dの4軒と重複している。

竪穴住居45aは、南北方向に450cmにわたり北東隅から南辺にかけて検出され、南よりで住居45dと重複する。検出時においては、基盤が花崗岩に角礫を含む関係から確認に凹凸が顕著であったことから、住居45dの壁を含めた規模で把握していた。しかし、調査の過程で壁の高さが15cmほど比較的明瞭な立ち上がりがあることから、南側の重複部分において壁の変化を認めたのである。さらに、住居45dの壁下端から認められる壁帯溝が、この部分で検出できなくなるのである。このようなことから、別個の住居としたのである。床面は、



第83図 竪穴住居45(1/60・1/30)



第84図 竪穴住居45土層断面図(1/60)

土層断面図A—A' に示すように基盤層の上に第2層の淡灰茶褐色砂質土を用いて床面とし、柱穴もこの面から確認している。柱穴は、北東隅に4個かたまって認められるが、ピットbの他は比較的深く、柱痕の認められるものもある。ピットf～hも同様の内容を示す。ピットeとacは土層断面図(第84図)に示すように、深さもあり柱痕も認められる。しかしながら、これらいずれのピットとも支柱穴として用いられたと判断することができなかったのである。

出土遺物(第85図)は、西端の床面が消失付近で検出されたのが201の壺である。口径は16.6cmを測り、頸部は緩やかに外反し端部近くで強く屈曲させ、端部を上下に肥厚させる。文様は口縁端部に3条の凹線文、頸部下半にも3条の凹線文を施文する。外面調整は頸部から肩部下半までタテハケ、以下にヨコハケが施される。内面は肩部から胴部にかけてヨコハケと押圧が認められる。

竪穴住居45bは、住居45aおよびdの床面部分に長さ480cm、幅35cm前後、深さ8cmほどの壁帯溝が確認されたもので、壁は検出されなかった。住居45aとは床面の高低差は無く、壁とこの壁帯溝と考えているものであり、ほぼ平行して存在することから同一住居として把握しても判断の誤りではないと思考する。しかしながら、調査時および整理の段階においても明確に判断することができなかったのである。結果、単独の住居として報告したのである。また、住居45cとの関係は、この住居の壁帯溝により切られている。当該住居にともなうとみられるピットは、主に西よりの床面消失側に確認され

ている。土層断面(第84図)でピットaf~akはピットajを除き深さ60cm前後で、柱痕をピットaf以外に認められている。しかし、住居45aと同じように支柱穴と判断されるものは確認できなかった。

火処は、北寄りに95×80cmの範囲が浅い凹みを形成する焼土面を検出する。焼けている範囲は、第83図の平面図で示されるように、凹みより外側に広がっているのを確認している。火処の中には、ピットaeとadが認められている。火処との関係は、第84図のピットaeの土層断面において、あとから掘られたことが確認され、さらにピットadにおいては確認のトレンチで作図できなかったが、同様な内容を調査時において把握している。

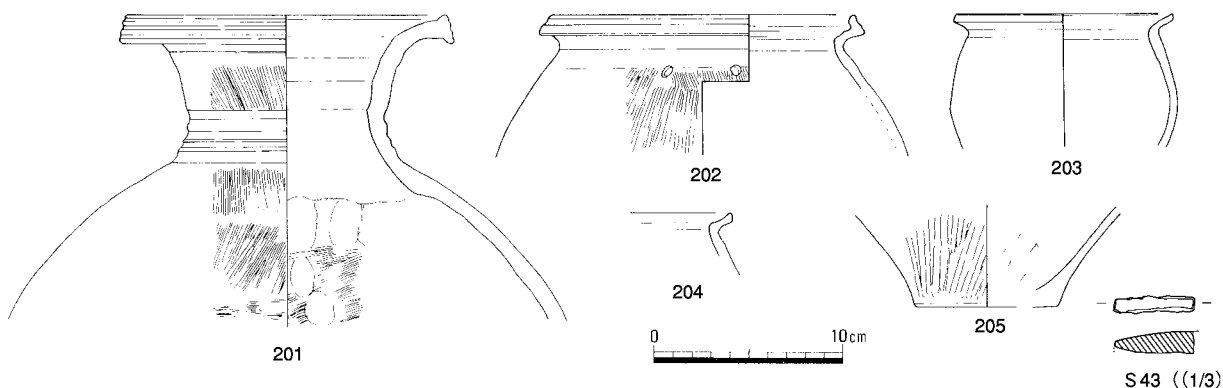
出土遺物(第85図)は、火処の凹み部分からS43の砥石が出土している。長さ32mm、幅7mm、厚さ9mm、重さ2.28gを測るが、欠損している。

竪穴住居45cは、住居45bの北側に規模が680cmの鋸状に検出されている。壁の立ち上がりは認められず幅30cm前後、残りのよいところで深さ10cmほどの壁帯溝が確認されている。住居45dとの関係は、土層断面図B—B'に示したように第7と10層から上が住居45dの埋土であり、当該住居は同断面図の第8層がその壁帯溝である。したがって、住居の検出は貼り床を除去してから認められたのである。ピットは比較的多く確認しているが、先に記したと同様に支柱穴として用いられたかの把握ができないのである。火処は2ヶ所確認され、このうち貼り床下からと検出レベルで土層断面E—E'については当該住居に伴うと判断したのである。

竪穴住居45dは、住居45cの東に接し、長さ840cmほどにわたり検出されている。壁の立ち上がりは40cm前後認められ、幅約25cm、深さ6cm前後の壁帯溝が認められる。重複する住居との関係は、先に記したように当該住居が最も新しく構築されたものである。支柱穴について、壁帯溝と重複するが、ほぼ等間隔で並ぶ5本の柱穴を確認することができた。これらの柱穴は、ピット1・p・s・v・xの5本であり、径が30~35cm、深さがピット1の60cmを除きほぼ45cmを測るのである。これらのピットが、支柱穴として用いられたと判断される。火処は、2ヶ所確認された。土層断面図C—C'は60×75cmで厚さ5cmほどの被熱部分を認め、土層断面図D—D'は120×90cmで厚さ15cmほどの被熱部分を認める。

出土遺物(第85図)は、ピットnから202を検出している。この甕は、頸部を「く」の字状に屈曲させ端部を上方に拡張する。文様は口縁部外面に深めの凹線文が1本、肩部には円孔が施されている外面調整はタテハケ、内面は剝離するが押圧が認められる。

203~205は、住居45の検出過程で出土したもので、具体的な出土場所が不明なものである。



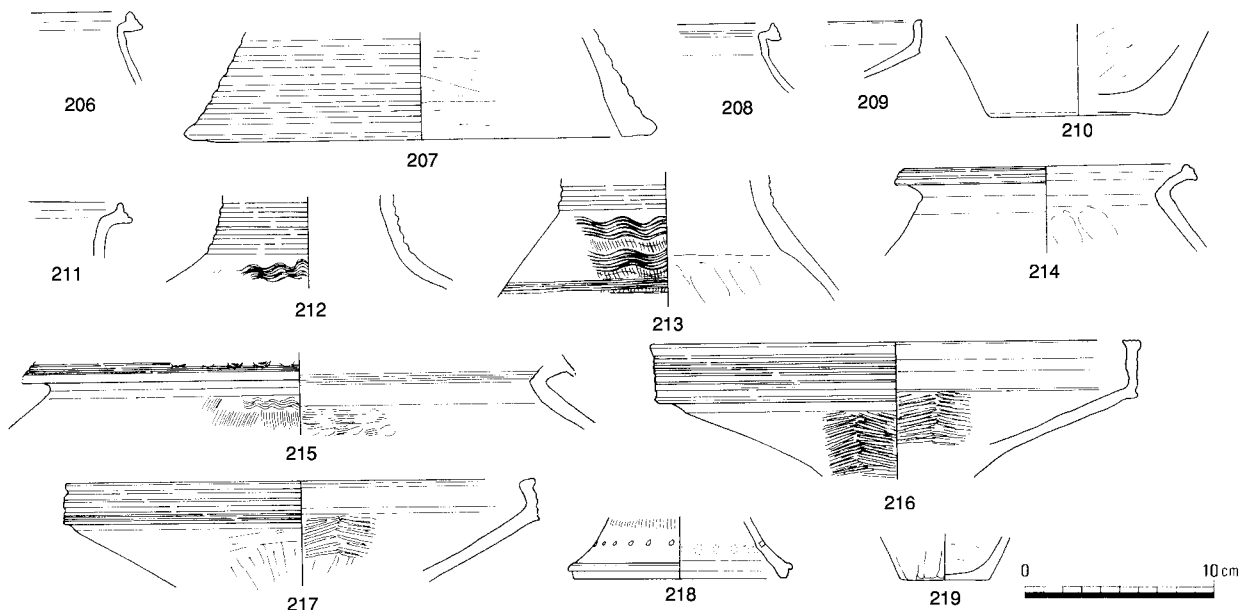
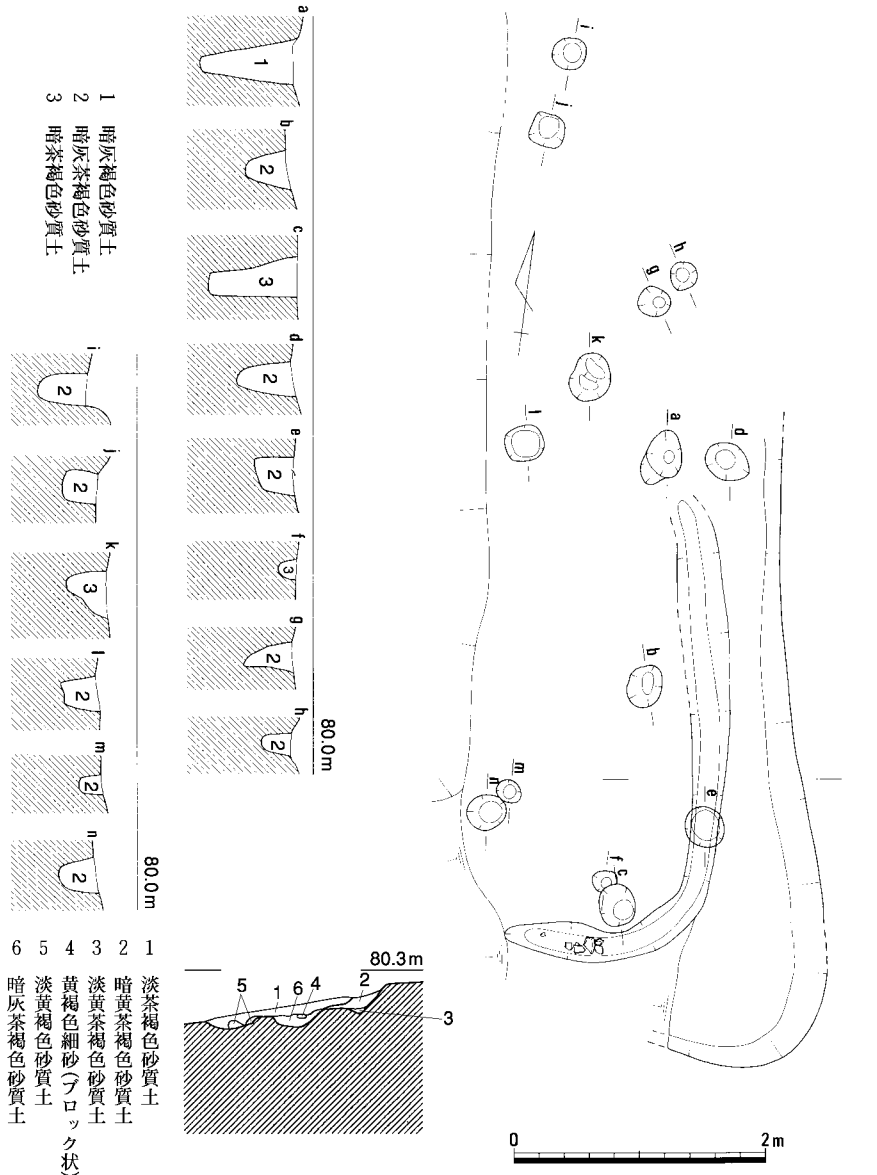
第85図 竪穴住居45出土遺物(1/4・1/3)

竪穴住居46 (第86図)

竪穴住居46は、土壙24の北下方に位置し、a～bの2軒と重複している。

竪穴住居46aは南北方向に長さ5mほどにわたり確認された。壁の立ち上がりは15cmほどであるが、壁帯溝は認められなかった。支柱穴はピットd・e・l・nの4本がほぼ方形の配置となるが、伴うかどうかは判断しがたいのである。

出土遺物(第86図)は、1点を除き埋土中からである。210は、ピットeから検出した底部で、内面にヘラケズリを認める。211～213は壺で、凹線文が口縁部外面と頸部に施文される。肩部に櫛描の波状文と直線文を施すのも認められる。214と215は甕で、口縁部外面に凹線文を施文す



第86図 竪穴住居46(1/60)・出土遺物(1/4)

る。215は口縁部外面に刺突文、肩部に櫛描波状文を施している。216は口径25.7cmを測る高杯で、口縁外面に6本、口縁端面は肥厚させ3本の凹線文を施文する。217は口径24.5cmを測る高杯で、口縁部外面に5本の凹線文を施文する。

竪穴住居46bは、住居45aのすぐ下方に長さ350cmほど壁帯溝確認された。当該住居は土層断面図A—A'に示すように住居45aを切って構築される。主柱穴は、ピットa・b・cの3本がほぼ等間隔で配置され、その可能性を考える。しかし、断面図などに示すように判断しがたいのである。

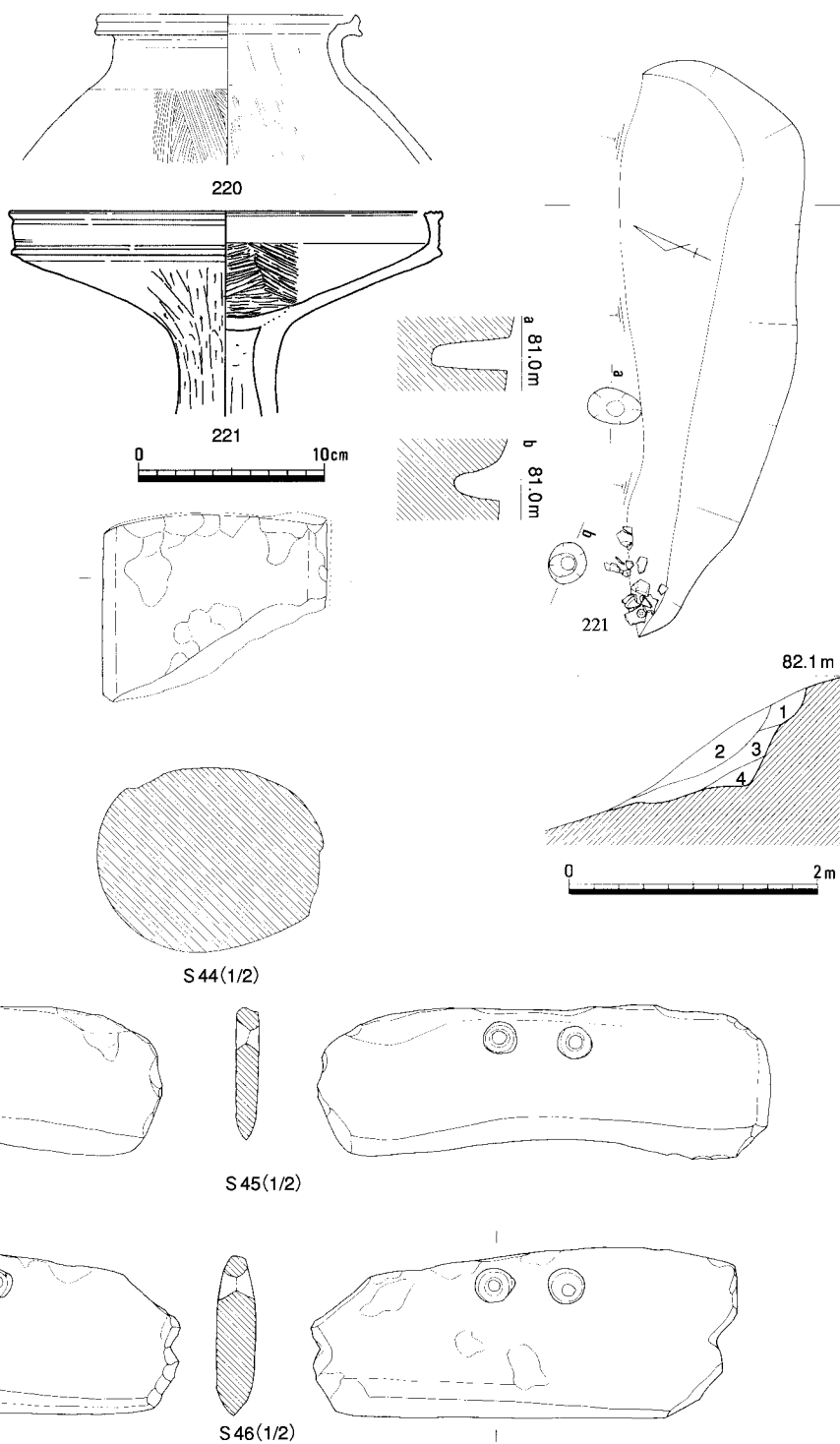
出土遺物(第86図)は206と207で、壁帯溝部分から検出された甕と器台である。

段状遺構

段状遺構 2 (第87図)

竪穴住居42の北東側に位置する。規模は長さ465cm、壁の高さ80cmほどを測り、楕円状に遺存する。床面は基盤層で、傾斜を示している。ピットは2個確認できたが、関係は不詳である。

出土遺物(第87図)は何れも埋土中からであり、平面図に出土状態を示している221は底面よりも21cm上で検出されている。220は、口径13.9cmを測る甕である。頸部は上方に立ち上がり端部を外側に屈曲させ、端部を肥厚気味に上方に拡張する。文様は、口縁外面



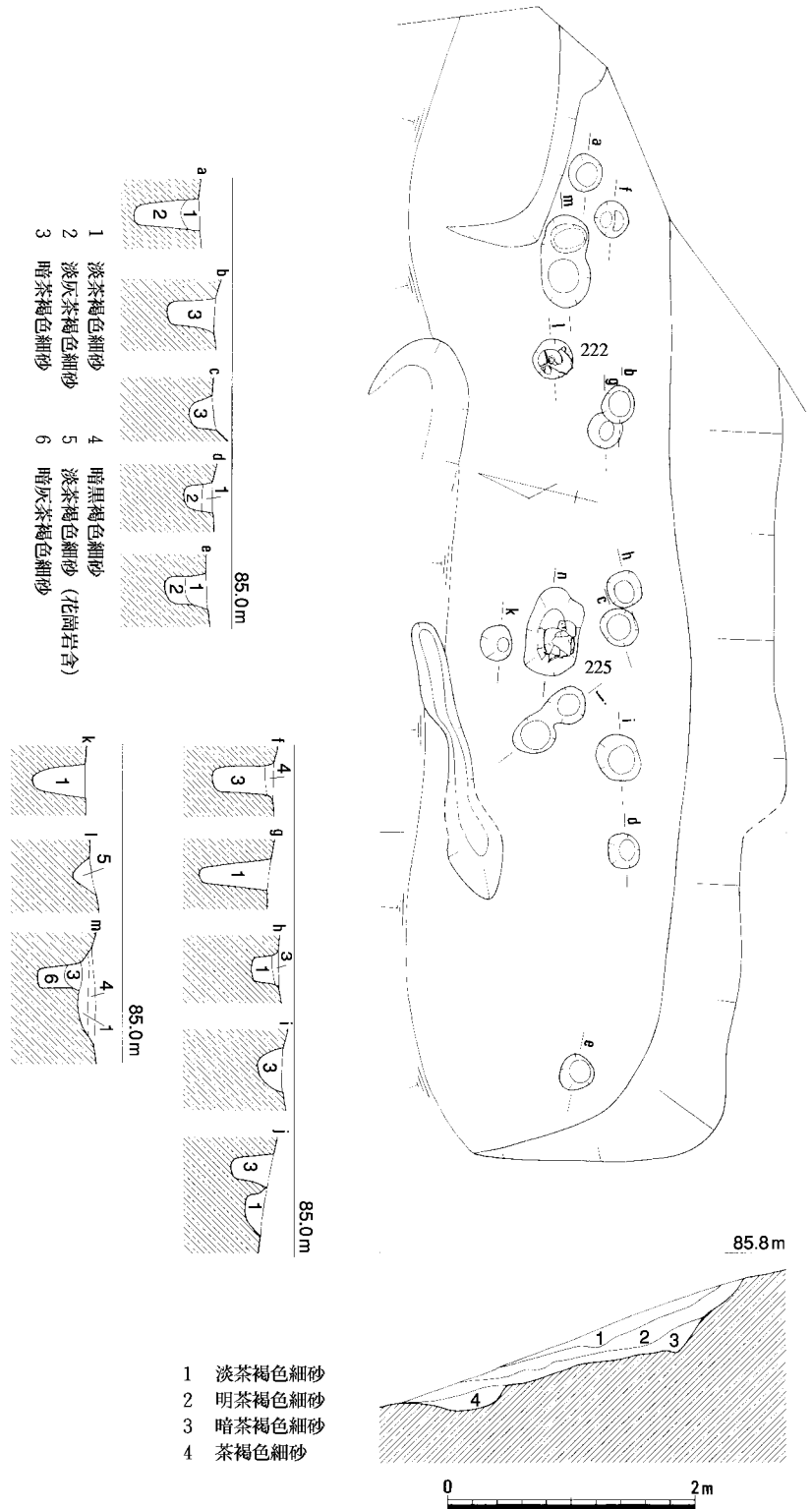
第87図 段状遺構 2 (1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

に太い凹線を施す。外面調整は肩部下半からタテハケ、内面は細かいハケが施される。**221**は、口径23cmを測る高杯である。口縁端部は肥厚させ3本、口縁部外面には2本の凹線文を施文する。**S44**は、流紋岩製の磨製石斧片である。**S45**は、長さ121.5mm、幅41.5mm、厚さ6.5mm、重さ58.84gを測る頁岩製の磨製石包丁である。**S46**は、長さ114.0mm、幅46.0mm、厚さ10.5mm、重さ84.11gを測る流紋岩製の磨製石包丁である。

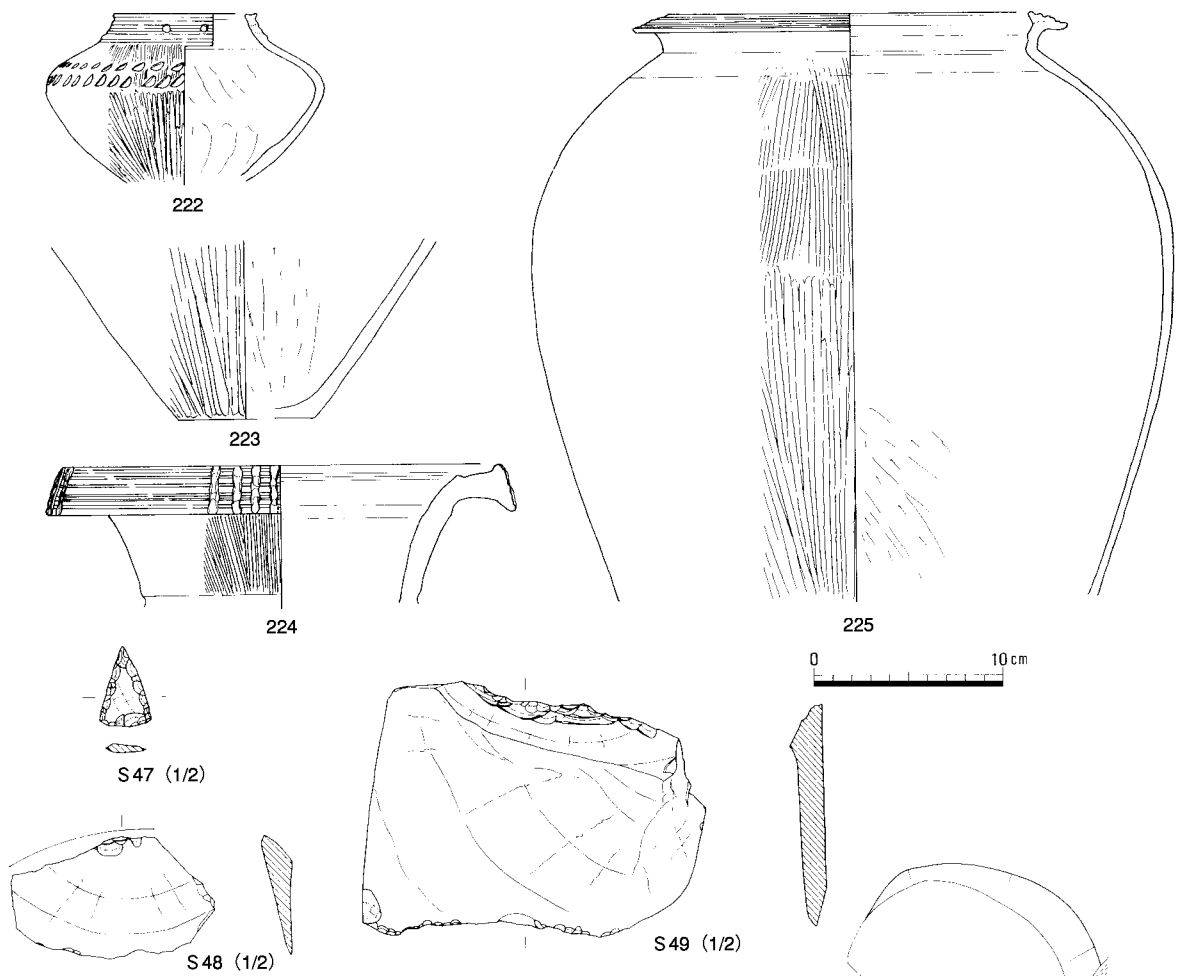
段状遺構3 (第88図)

段状遺構2の北東上方に位置する。規模は、東西方向に長さ920cmにわたりL字状に検出されたが、東側は調査対象外となっている。壁の高さは40cmほどを測るが、底面は傾斜となり平面図に示すように掘り込みを認める。ピットは多く検出されているが、このうち支柱穴として用いられたと思われるのはピットa～eの5本である。これらのピットは深さを異にするが、ほぼ180cmの間隔で認められることから推測される。

出土遺物(第89図)はピット1から**222**、ピットnからは**225**そして土層断面にかかる溝状の掘り込みから**223**を検出している。他の土器と石器は、埋土からである。**222**は、口径7.5cmを測る台付壺である。口縁部は内傾して立ち上がり、端部を肥厚させ凹部となる。文様は口縁部外面に4条、肩部には2段の刺突文を施文する。外面調整は、肩部下半にかけタテヘケ、以下タテヘラミガガキ、内面にはナデを施す。**223**は底部片で、内面にはタテヘラケズリを施す。ピットjは、土壌としたほうが妥当であろう。規模は42×71cmで、深さ13cmを測る。**225**は、口径19cmを測る



第88図 段状遺構3 (1/60)



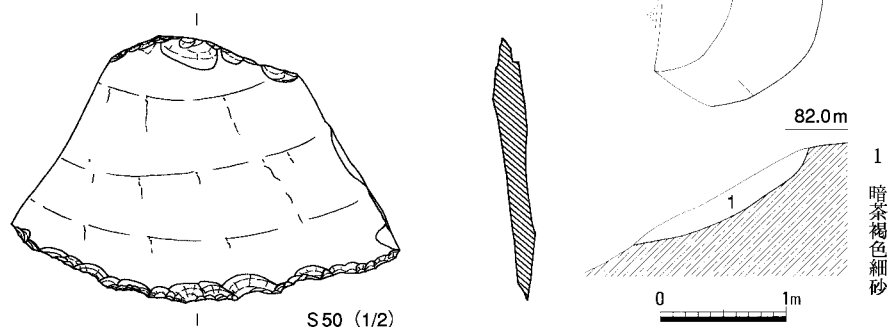
第89図 段状遺構3出土遺物(1/4・1/2)

甕である。頸部は上方に立ち上がり、端部を水平方向に近く折り返して拡張させる。文様は、口縁部外面に5条の凹線文を施文する。外面調整は肩部から胴部上半までタテハケ、以下タテヘラミガキ、内面は肩部から胴部下半に押圧とナデ、以下タテヘラケズリを施す。224は住居14の埋土からの検出された破片と接合する。口径は23cmを測る壺である。文様は頸部に凹線文、口縁部外面に6条の凹線文と4本の棒状浮文を5ヶ所に施す。S47は長さ21.0mm、幅13.5mm、厚さ2.5mm、重さ0.64gのサヌカイト製の石鏃である。

段状遺構4 (第90図)

段状遺構は、住居46の北東上方に位置する。規模は、南北方向に長さ573cmにわたり検出され、細長い土壇状を呈する。

出土遺物(第90図)は、S50の長さ102.5mm、幅71.0mm、厚さ10.0mm、重



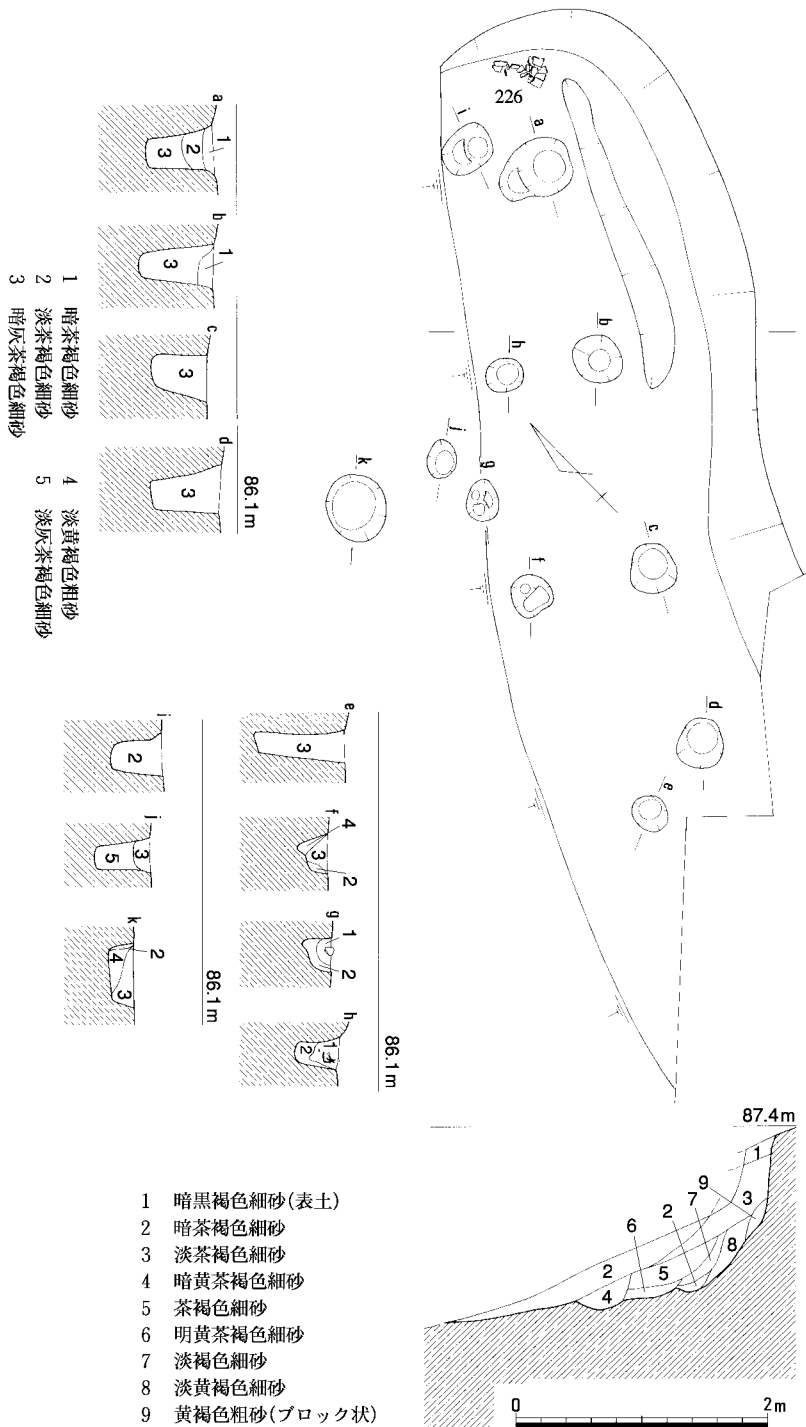
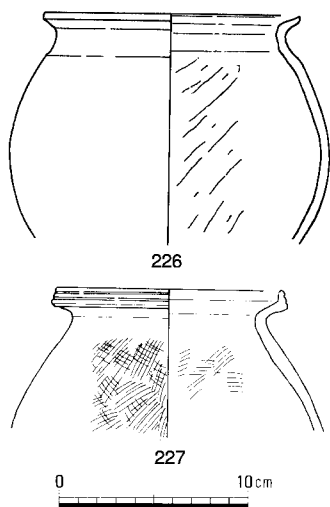
第90図 段状遺構4 (1/60) ・ 出土遺物(1/2)

さ62.48gを測るサヌカイト製のスクレイパーである。

段状遺構5 (第91図)

段状遺構4は、段状遺構3の南側上方に位置する。規模は長さ850cmを測るが、南西側は調査対象外となる。底面は土層断面図に示すように、平坦な状態を呈していなかった。北東側に溝を認めるが、これを壁帯溝壁とするには躊躇する。支柱穴と考えられるピットは、ピットa~dの4本である。これらのピットは、ほぼ等間隔に並び断面図に示すように深さも近い内容を呈している。

出土遺物(第91図)は、住居北東辺近くの床面から226、ピットhからは227が出土している。226は、口径13.5cmを測る甕である。頸部は緩やかに外反し、強いヨコナデにより肩部に明瞭な稜を形成する。端部は、内面に少し癖を持つが平坦となる。外面調整は風化のため不詳、内面は頸部下半からヘラケズリを施している。227は、口径12cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲するが、端部は上方に拡張する。文様は、口縁部外面に2条の凹線文を施文する。外面調整はハケ、内面にはナデとハケメが認められる。



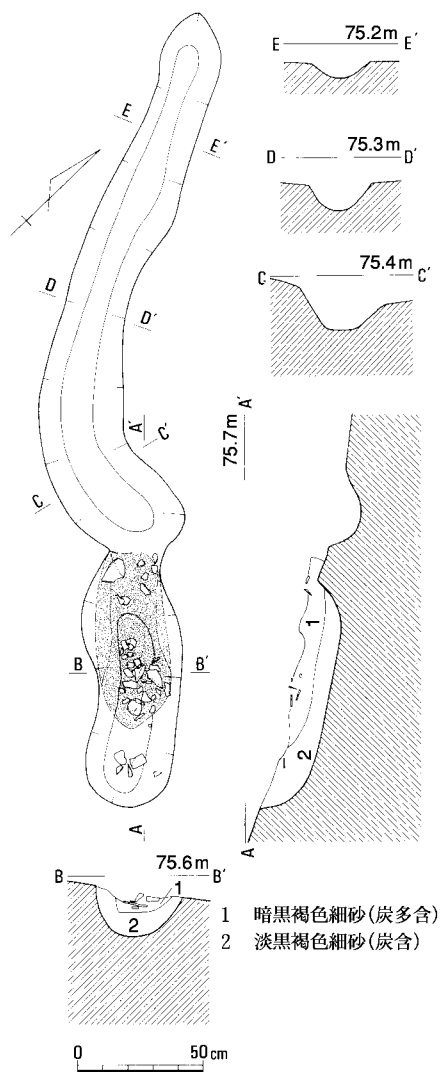
第91図 段状遺構5 (1/60)・出土遺物(1/4)

炉

炉3 (第92図)

炉3は、竪穴住居32の南東上方に位置する。地形的には、第1図に示されるように屈曲し谷地形状の様相がみられるが、等高線の間隔が広がる形状である。炉は、この部分に北西から南東に長さ285cmあたり、丘陵斜面に沿うように検出され、形態的には2個の細い溝がつながっている状態である。丘陵斜面の上になる南東側部分は、長さ103cm、幅39cm、深さ16cmほどを測る楕円状である。これに取り付くように長さ215cm、幅22~33cm、深さ12~23cmの屈曲する溝が丘陵斜面下側に認められた。

楕円形を呈する上側は、70×28cmの範囲の極めて薄い焼土が認められ、さらに断面図の第1層は炭化物になる前段階と思われる焼って炭状を呈する小枝の類が詰まっていた状態であった。また、第92図の平面と断面図に表現している遺物は、石である。この石は、御影石で薄く割られ、この中に入れられたものである。この石と壁などは、被熱の影響が認められなかった。下方の溝は、風化土の埋土1層のみであった。



第92図 炉3 (1/30)

焼土壇

焼土壇1 (第93図)

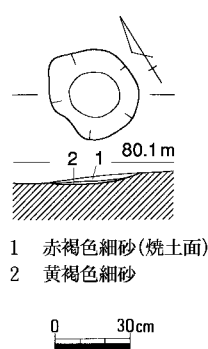
焼土壇1は、住居41のプラン検出中に確認する。規模は、径35cmほどの円形を呈する。焼土面は、厚さ2cmほどで炭が僅かに認められる。住居の床面との差は、56cmである。

焼土壇2 (第94図)

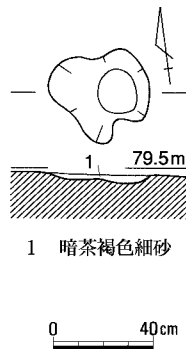
焼土壇2は、住居45bのプラン検出中に確認する。規模は40×33cmほどの不整形で、焼土面は厚さ3cmで炭が僅かに認められ、住居床面との差は21cmである。

焼土壇3 (第95図)

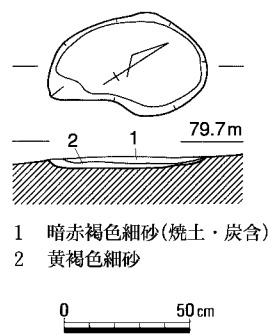
焼土壇3は、住居45bの東上方に位置する。規模は、63×44cmの楕円形状を呈する。焼土面の厚さは3cmほどを測り、僅かに炭を認める。



第93図 焼土壇1 (1/30)



第94図 焼土壇2 (1/30)



第95図 焼土壇3 (1/30)

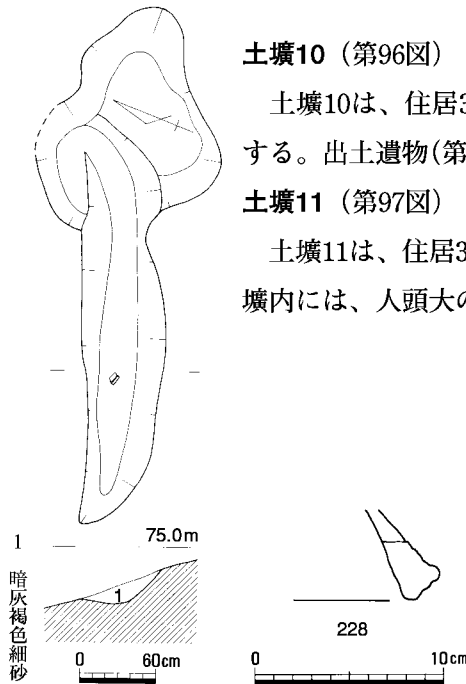
土 壙

土壙10 (第96図)

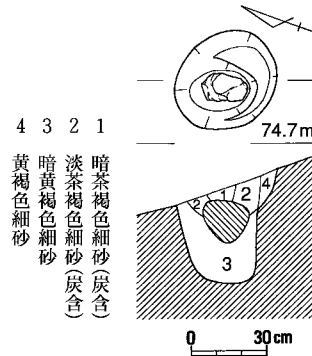
土壙10は、住居30の南東上方に位置する。規模は410×78cmを測り、溝状を呈する。出土遺物(第96図)は228で、凹線文と透かしがある器台片である。

土壙11 (第97図)

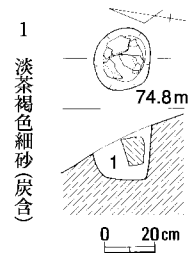
土壙11は、住居33の南東上方に位置する。規模は径40cm、深さ38cmを測る。土壙内には、人頭大の礫が認められている。



第96図 土壙10(1/60)・出土遺物(1/4)



第97図 土壙11(1/30)



第98図 土壙12(1/30)

土壙12 (第98図)

土壙12は、住居33の南東上方に位置する。規模は径25cmほどの円形を呈する。土壙内には、土器と角礫が認められている。

土壙13 (第99図)

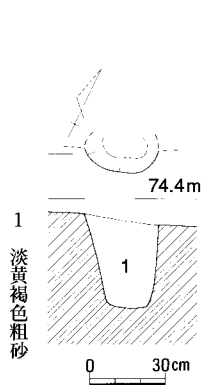
土壙13は、住居33の南東上方に位置する。規模は長さ30cm、深さ34cmを測るが、丘陵斜面下になる北側は、トレンチにより切られている。

土壙14 (第100図)

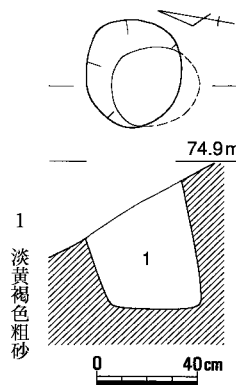
土壙14は、住居33の南上方に位置する。規模は径40cm前後、深さ44cmを測る。検出地点は、丘陵の斜面がきつくなる関係と思考されるが、丘陵斜面上側になる掘り方下端は上面掘り方よりも外側になる。埋土は、淡黄褐色風化土の1層だけである。

土壙15 (第101図)

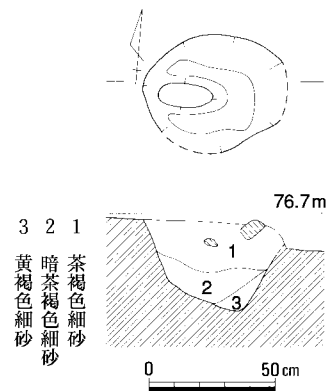
土壙15は、住居36aの床面上に位置する。規模は57×47cm、深さ35cmを測る。底面は、若干盛り上



第99図 土壙13(1/30)



第100図 土壙14(1/30)



第101図 土壙15(1/30)

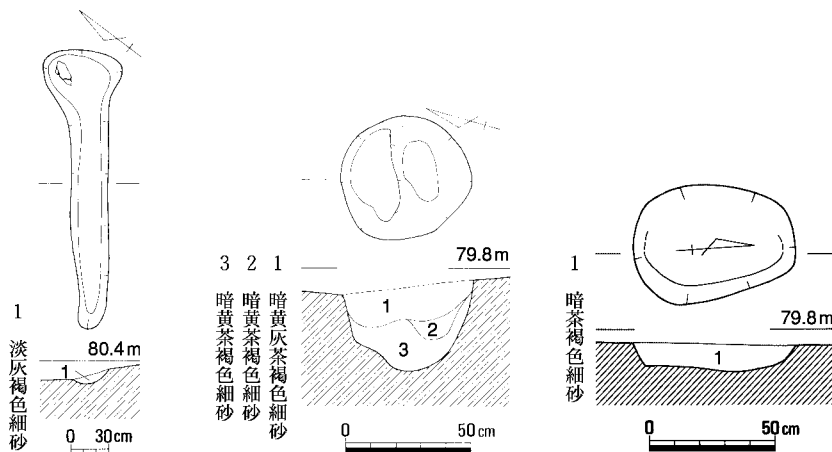
がった形状を示している。埋土は、3層の堆積が認められ、第1層の茶褐色細砂中に礫の混入が認められる。また、時期を判断できる土器などは検出されなかった。

土壙16 (第102図)

土壙16は、住居39の北東に接して位置する。規模は長さ220cm、幅32cm、深さ6cmを測り、溝状を呈しする。検出時においては、住居39の北東に延びる壁帯溝と考えられた。しかし住居の壁帯溝は報告したように曲がり、さらに、当土壙の両端は立ち上がる形状から土壙としたのである。

土壙17 (第103図)

土壙17は、住居39内の東壁隅部分に位置する。住居39との関係は、住居の床面を切っていることが確認されている。規模は53×48cm、深さ33cmを測る。



第102図 土壙16(1/60) 第103図 土壙17(1/30) 第104図 土壙18(1/30)

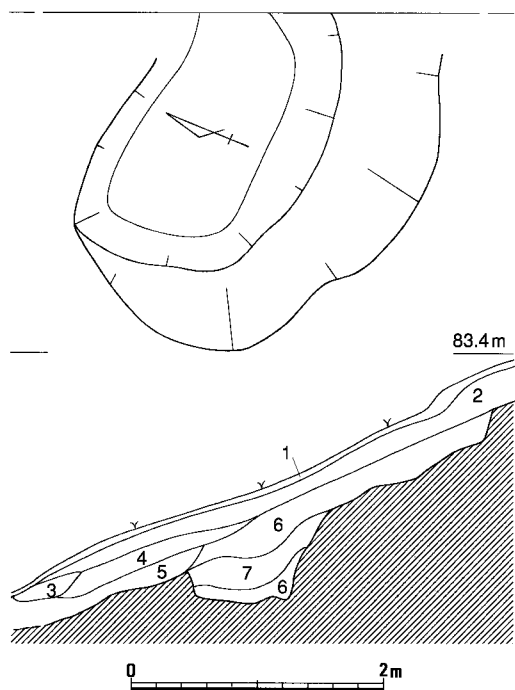
土壙18 (第104図)

土壙18は、住居40の南西側に位置する。規模は

63×46cm、深さ10cmを測り、楕円状を呈するものである。底面の破線は、掘り過ぎである。

土壙19 (第105図)

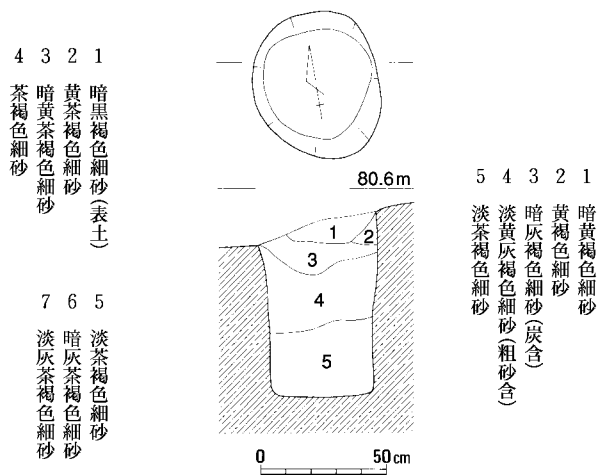
土壙19は、段状遺構2の東上方に位置する。規模は270+α×240cmを測り、形態は方形を呈する。東側は、調査対象外となる。土壙は、第105図の土層断面図で示すように表土からの堆積が観察されている。この観察からは、基盤層上面堆積層からの掘り下げを確認できなかった。



第105図 土壙19(1/60)

土壙20 (第106図)

土壙20は、住居44の東隅上方に位置する。規模は規模は60×50cm、深さ70cmを測り、底面は平坦となる。形態は、円形を呈する。



第106図 土壙20(1/30)

土壌21 (第107図)

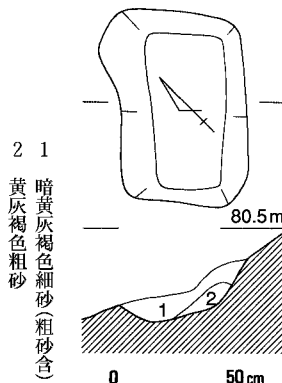
土壌21は、住居44の東隅壁と重複して位置する。規模は76×50cm、深さ10cm前後を測る。形態は方形を呈する。住居44との関係は、当土壌が住居の壁を切って掘り込まれているのを確認している。底面は、丘陵斜面に位置することから傾斜を持っている。

土壌22 (第108図)

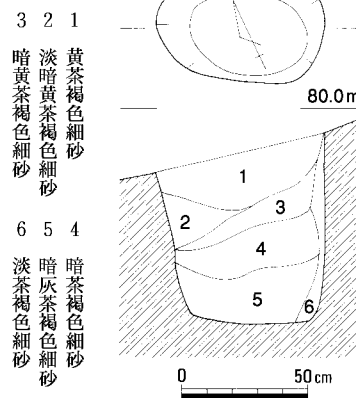
土壌22は、住居40の南隅上方に位置する。規模は66×45cm、深さ69cm前後を測り、形態は楕円状を呈する。底面は、平坦となっている。埋土は、花崗岩の風化土を主とするものであり、炭化粒や土器の検出は認められなかった。

土壌23 (第109図)

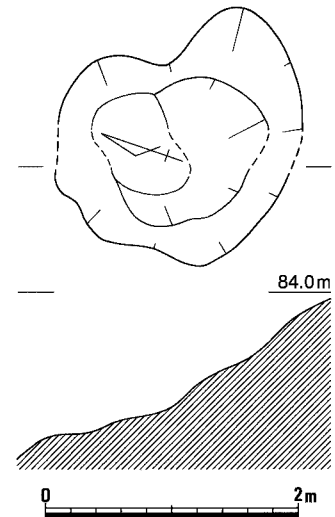
土壌23は、段状遺構2の南東上方に



第107図 土壌21(1/30)



第108図 土壌22(1/30)

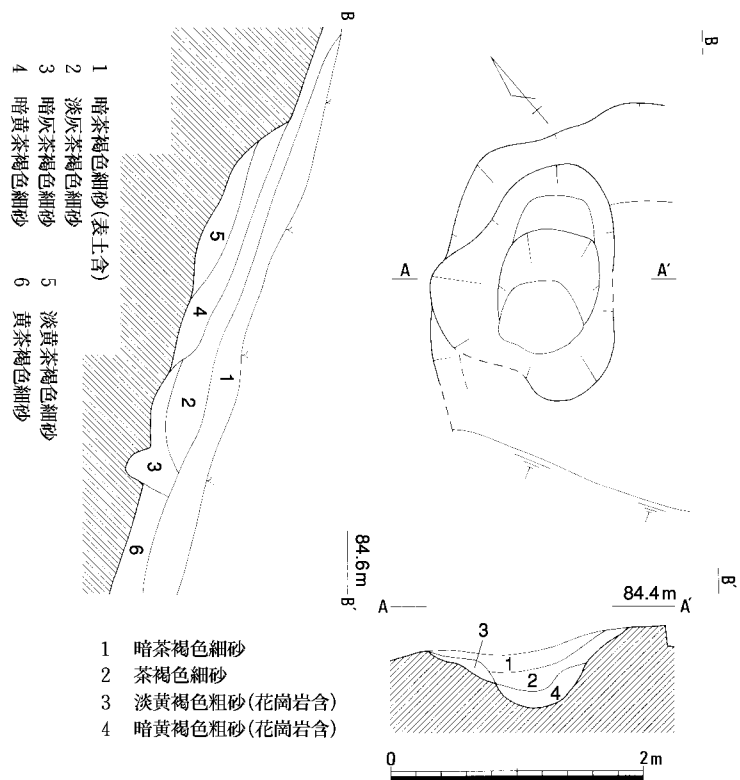


第109図 土壌23(1/60)

位置する。規模は200×195cm、深さ20cm前後を測る。検出時においては、基盤層面の凹みと判断していたものである。

土壌24 (第110図)

土壌24は、段状遺構4の南東側上方に位置する。規模は310×220+αcm、深さ60cmを測る。形態は、広い掘り方のなかにさらに185×150cmの掘り方を持つのである。の南東側は、調査対象外となり不詳である。第110図土層断面図B—B'においては、広い掘り方が埋まった段階で、土層断面図A—A'の掘り方が掘られたことが観察できるのである。



第110図 土壌24(1/60)

柱

柱2 (第111図)

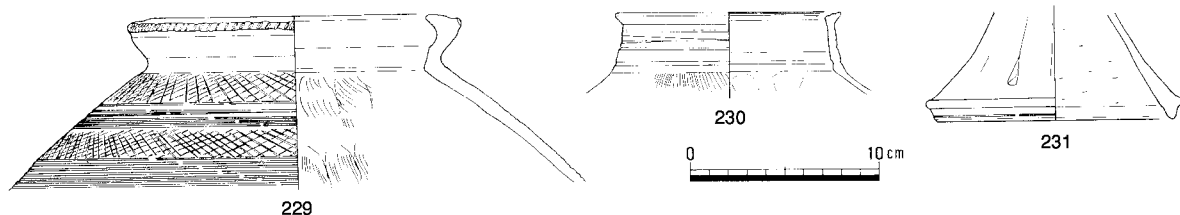
柱2は、住居39の東上方に位置する。規模は85×77cm、深さ92cmを測り、形態

は不整形円形を呈する。北西側は、2段状の掘り方となる。検出段階では、土層断面図の第2層の暗黒褐色細砂が先に掘れることが判断でき、次に3と4層をも掘ることができることを確認したのである。柱痕と思考される土層は、第2層の暗黒褐色細砂と第3層の暗黄茶褐色細砂である。第1層の暗茶褐色細砂は、上面に土器が多く検出されている。この層までは、柱痕と思考される第2と3層は立ち上がってこないのである。このことは、柱の抜取に伴う可能性も推測されるが、判断しがたいのである。

出土遺物(第111図)は、断面図の第2層のなかほどに図示しているのが229の土器であり、他は第1層からの出土である。229は、口径14cmを測る壺である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を内側を抉る様に肥厚させる。文様は口縁端部にキザミメ、頸部下からはヘラガキ格子文と凹線文を交互に施文する。内面調整は、押圧とハケが施される。230は、口径12cmを測る台付直口壺である。頸部は内径気味に立ち上がり、端部を外側に拡張させる。文様は口縁部端面に2条、頸部に4条の凹線文を施す。231は、脚径12.4cmを測る高杯である。文様は、貫通しない透かしと線刻状のものが認められる。

柱3 (第112図)

柱3は、住居39の東上方に位置する。規模は80×72cm、深さ110cmを測り、形態は不整形方形を呈する。掘り方は南東側を除き、2段掘りとなる。柱痕は、断面図で示すように確認されいない。土層断面



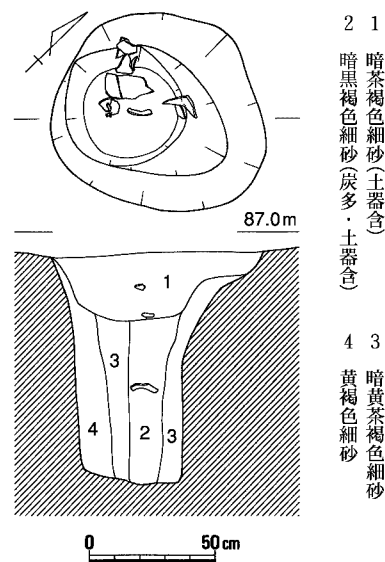
第111図 柱穴 2 (1/30)・出土遺物(1/4)

図は、第一次調査のトレンチが南北に通っていることから、第2層の上端の線は遺構が確認された時点で掘り下げを止めた面であることから、土層の堆積層が異なることでの線ではない。したがって、ここまでの土層の図化はできなかつたのである。第2と3層の境部分は、水平の堆積状況を示すが、第4層の明茶褐色細砂はブロック状に確認された。柱痕は確認できなかつたが、柱の抜取りを想定して土層の観察を行ったが、先に記したように断面における土層の変化を認められず判断しがたいのである。

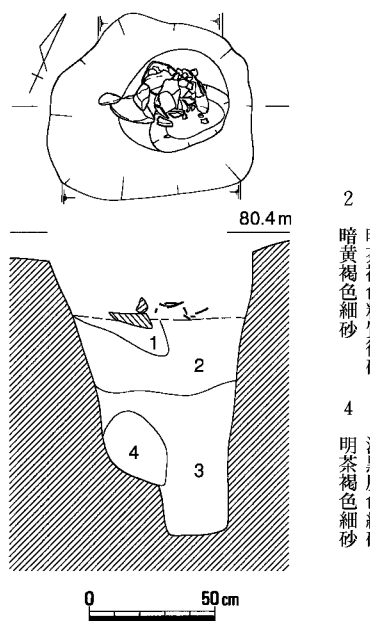
溝

溝 1 (第66図)

溝1は、竪穴住居35の東側に重複して位置する。規模は幅100cm、深さ25cmを測る。溝の東側は調査対象外となり、西は住居35と重複しているため検出できた長さは300cmほどである。住居35との関



- 2 1 暗茶褐色細砂(土器倉)
- 暗黒褐色細砂(炭多・土器倉)
- 4 3 暗黄茶褐色細砂
- 黄褐色細砂

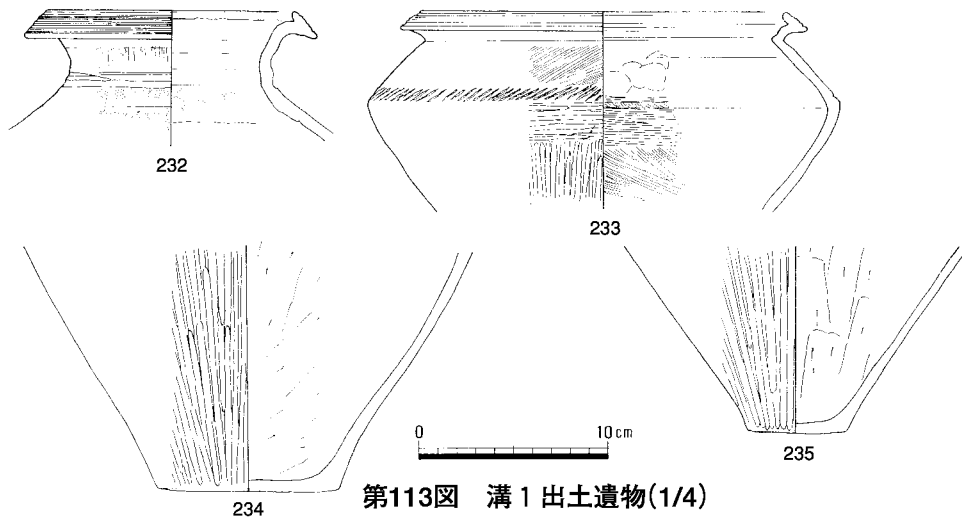


- 2 1 暗茶褐色粘質微砂
- 暗黄褐色細砂
- 4 3 淡黒灰色細砂
- 明茶褐色細砂

第112図 柱穴 3 (1/30)

係は、第66図の土層断面図A—A'での第1層が当該溝に相当し、住居35aを切って構築されたことが観察されている。住居53cとは、溝と近い高さで土器溜りが認められることから、この部分まで続く可能性を考えた。しかしながら、土器溜りは溝の想定幅よりも広く形成され、土層断面図B—B'では溝の断面を確認することができず、住居の堆積状態を把握できただけである。このようなことから、当該溝は住居35aより新しく、住居35cよりも古くなることが思考されるのである。

出土遺物（第113図）は、何れも埋土中からの出土である。232は、口径13cmを測る壺である。頸部は立ちあがり気味に外反し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁部外面に6～7条の凹線文が施される。頸部には、凹線状の線が認められる。外面調整は非常に細かいタテハケ、内面にはハケが施されている。233は、口径19.2cmを測る台付鉢である。胴部は逆「く」の字状に屈曲し、頸部は「く」の字状に屈曲させ端部を上方に拡張する。文様は口縁部外面に上下端に凹線文、その間は浅い条線となる。胴屈曲部には、刺突文を施す。外面調整は肩部にハケ、刺突文から胴部半ばまでヨコヘラミガキ、以下タテヘラミガキを施す。内面肩部には押圧、屈曲部にヨコハケ、以下斜めのハケを施す。234は、底径9.6cmを測る。235は、底径5.2cmを測る。何れの底部も丸みが有り、235の方がいくぶんか強い内容を示している。両者とも外面調整はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリと同じである。

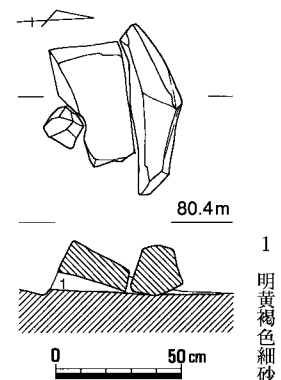


第113図 溝1出土遺物(1/4)

石組

石組（第114図）

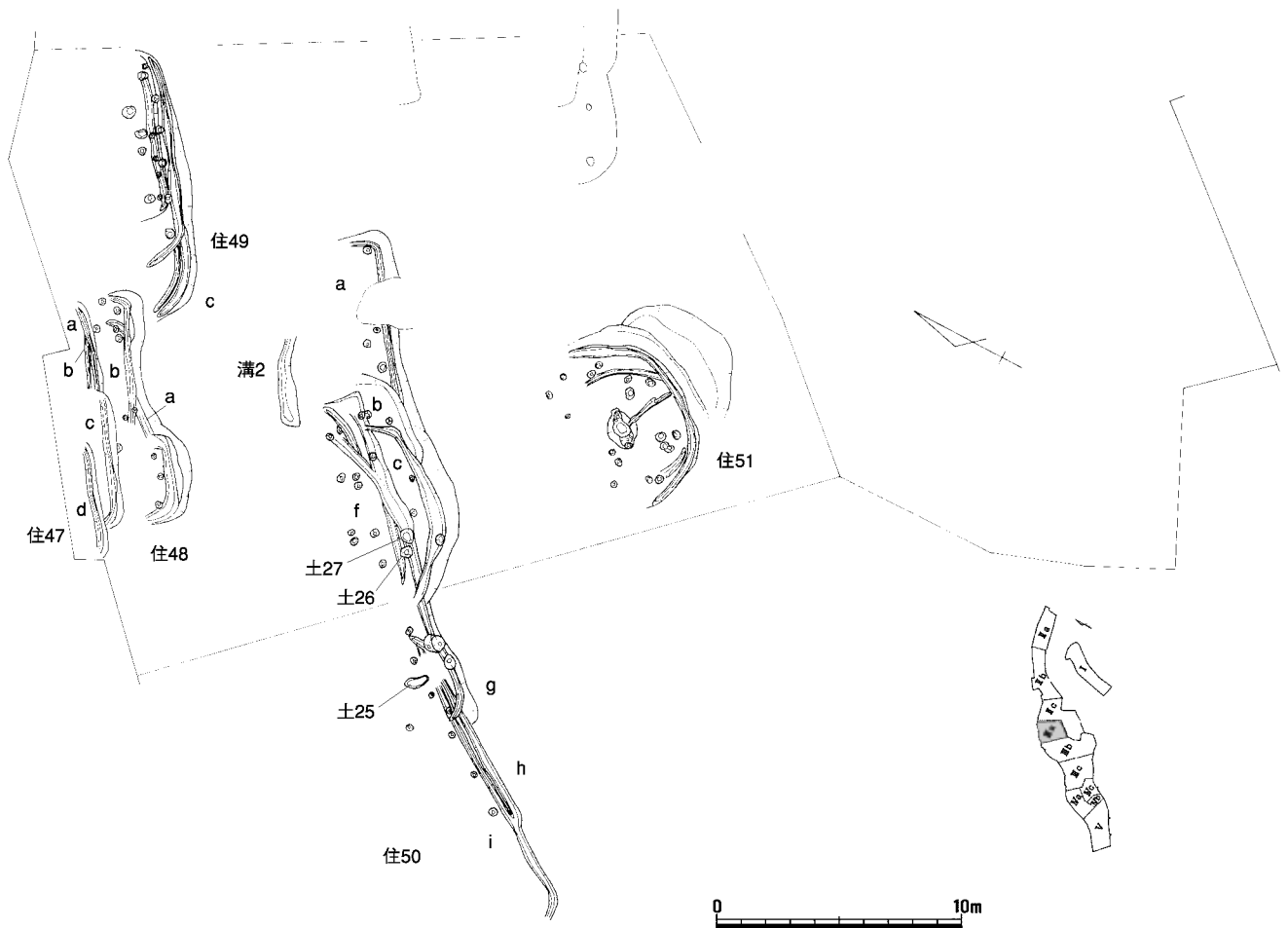
石組は、住居44の南東隅下方の床面上に位置する。表土掘削時にすでに一部を露出していたものである。石の確認段階では、面を持った石であることから石棺などの埋葬遺構を想定して周囲の確認も含め掘り下げたのである。棺を想定される範囲の層は、第114図に示した明黄褐色細砂である。この層を掘り下げていくが、図にある石が検出されただけであり、これ以上の石は確認できなかったのである。さらに、周辺を掘り下げる過程でも墓壇を想定される掘り込みは認められなかった。このようなことから、石組がどのような性格を有するのか判断しかねるのである。石材は、分析に出していないので不詳であるが、花崗岩ではないと思われる。



第114図 石組(1/30)

5 III a区の調査

III a区は、II c区の丘陵最高所の調査区から下った位置にあり、才地遺跡の遺構検出レベルの最も低い地点にも相当する。遺構は、II c区と連続する状況で展開している。III 区に相当する調査地点は、丘陵の尾根が下がりながら前面に広がっていく地形を呈している。このようなことから、II c区で遺構の希薄部分には、地形の広がりから遺構が見られるようになる。さらに、丘陵最下部にも新たな遺構の展開が認められているのである。



第115図 III a区遺構配置図(1/300)

竪穴住居

竪穴住居47 (第116図)

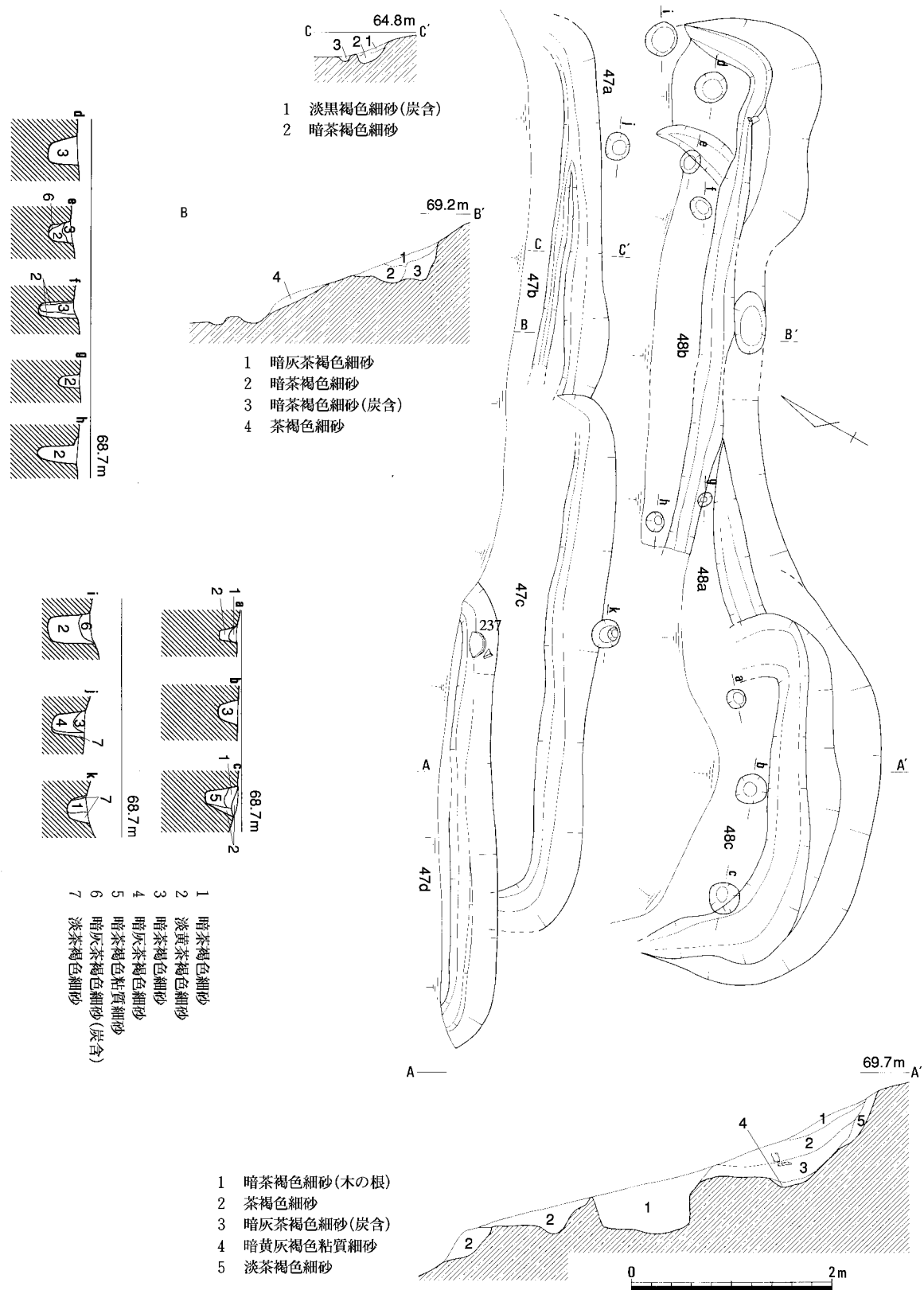
竪穴住居47は、竪穴住居48の北西下に位置する。当該住居は、a～dの4軒と重複している。

竪穴住居47aは、長さ370cmにわたり検出された。壁帯溝は幅20cm前後、深さ5cm前後を測る。住居床面の面的な遺存状態は、近現代墓地の造成が迫り極めて悪いのである。

出土遺物(第117図)は、236で口径26.4cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部にかけて肥厚させる。文様は口縁部外面に4条の凹線文施文後に棒状浮文を施す。肩部に刺突文を施文する。外面調整は粗いハケと細かいハケ、内面は粗いハケで行われる。

竪穴住居47bは、長さ200cm前後の壁帯溝である。壁帯溝は幅12cm前後、深さ3cm前後を測り、住居47aから分岐した状況で検出されている。

竪穴住居47cは、長さ535cmにわたって鋸状に検出された。重複する住居との関係は、住居47aを切



第116図 竪穴住居47・48(1/60)

って、住居47d上に貼り床をして構築されているのが確認されている。

出土遺物(第117図)は、238の高杯の小片である。口縁部外面には、5条の凹線文が認められる。

竪穴住居47dは、長さ465cmにわたって検出され、壁帯溝は幅20cm前後、深さ5cm前後を測る。床面は近現代墓地在り、ほとんど遺存していない。

出土遺物(第117図)は、何れも埋土中からの出土である。237は、

口径24.9cmを測る高杯である。口縁部は内径気味に立ち上がり、口縁部外面は丸みを持ち、端部を肥厚気味とする。文様は、口縁部外面に5条の凹線文を施文する。外面調整は、多角形のヘラミガキを施している。239は、脚径9.2cmを測る。文様は、裾部にヘラガキの直線文3条と鋸歯文が施文されている。

竪穴住居48 (第116図)

竪穴住居48は、住居49の北西下方に位置する。当該住居は、a～cの3軒と重複している。

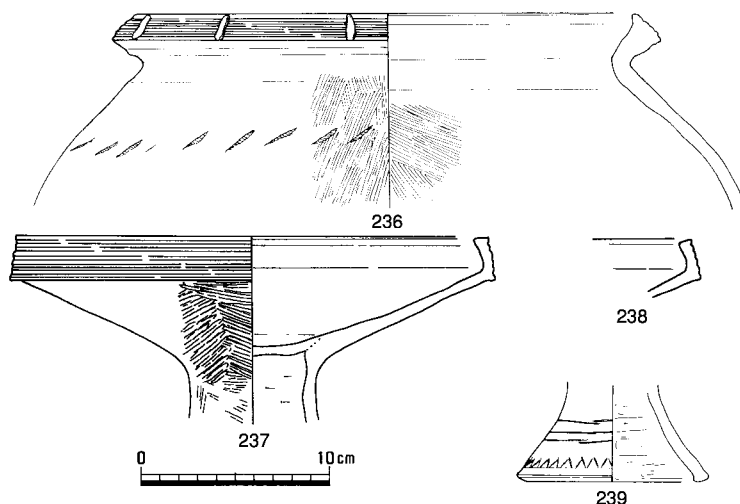
竪穴住居48aは、長さ490cmの壁帯溝と一部の壁が認められている。壁帯溝は、北東側と南西側の一部が確認され、間は重複する住居48bに、また南西側は住居48cにより消失している。ピットは確認されているが、当該住居に伴うか判断できないのである。

出土遺物(第118図)は、240～243であるが最終遺構検出時点の段階において単一住居の遺物として取り上げているので、住居48bとの分離ができていないのである。240は外面上下端に凹線文、243はヘラガキ沈線を2段施している。

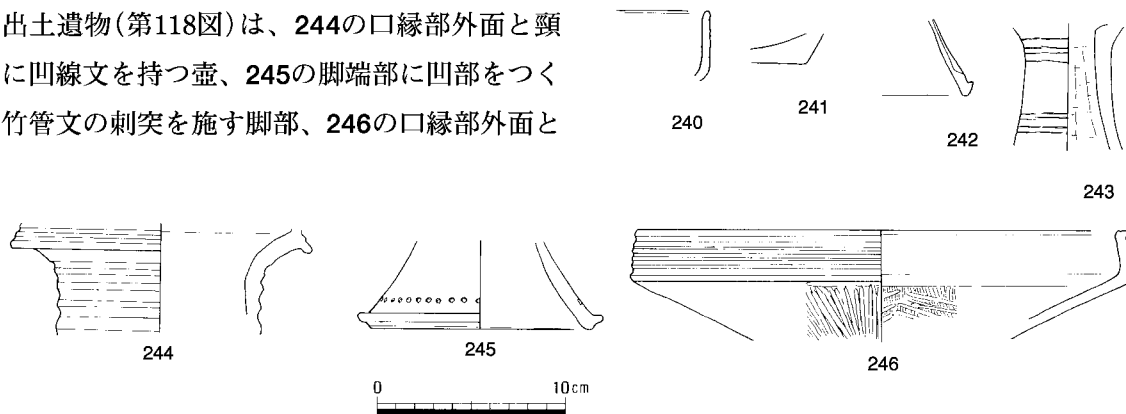
竪穴住居48bは、長さ530cmの壁帯溝と一部の壁を検出している。壁帯溝は幅30cm前後、深さ3cm前後を測る。東壁隅は確認できたが、西壁側は株痕を重機により除去したことから大きく抉られ確認できていないのである。ピットは、住居48aと同様に判断できなかった。

竪穴住居48cは、規模は365cmので鋸状に検出された。壁帯溝は幅が広く、深さは5cm前後を測る。ピットは3本確認されたが、いずれも柱穴として用いられたと考えられる。

出土遺物(第118図)は、244の口縁部外面と頸部に凹線文を持つ壺、245の脚端部に凹部をつくり竹管文の刺突を施す脚部、246の口縁部外面と



第117図 竪穴住居47出土遺物(1/4)



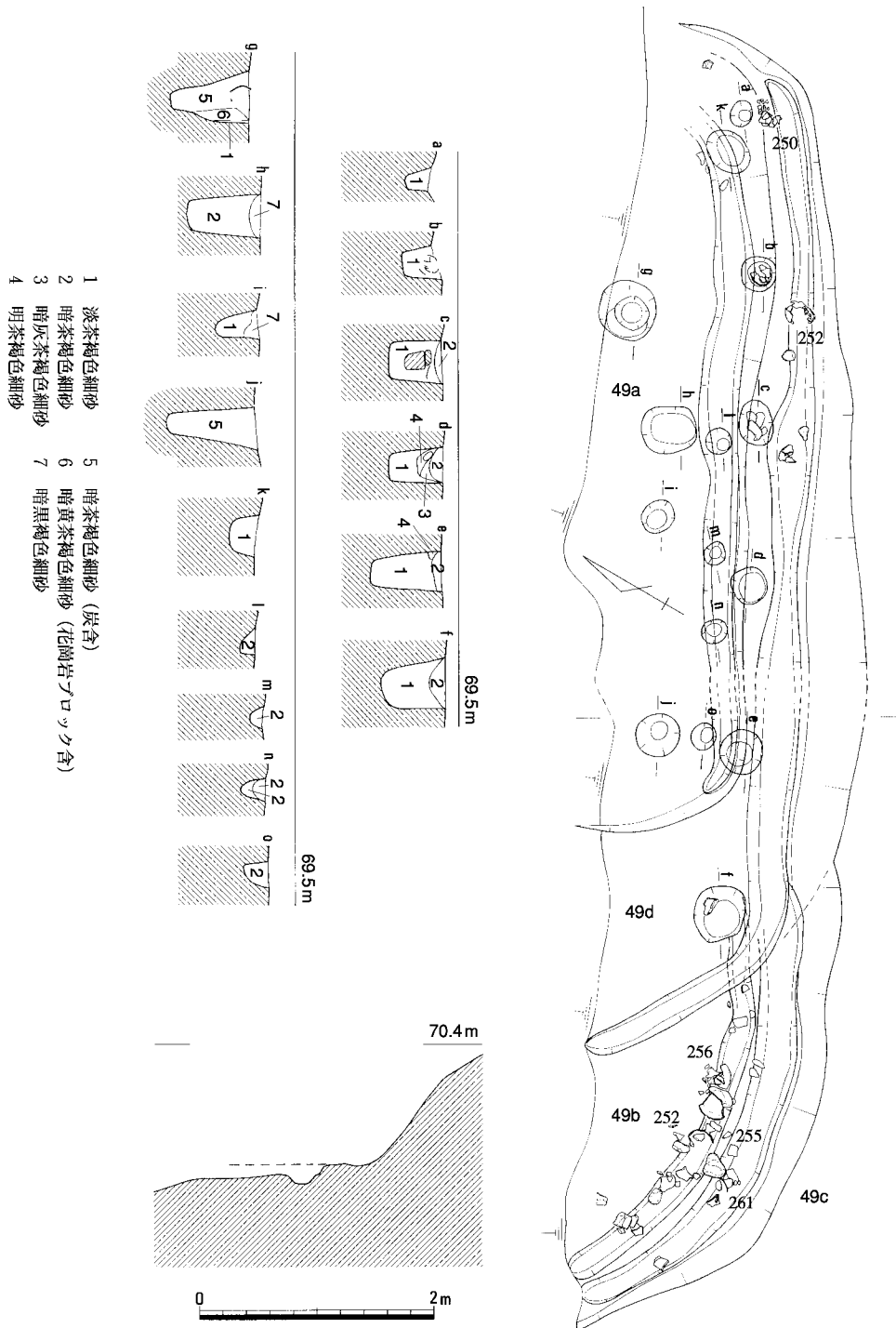
第118図 竪穴住居48出土遺物(1/4)

端部に凹線文および外面調整にタテヘラミガキを施す高杯等が埋土から出土している。

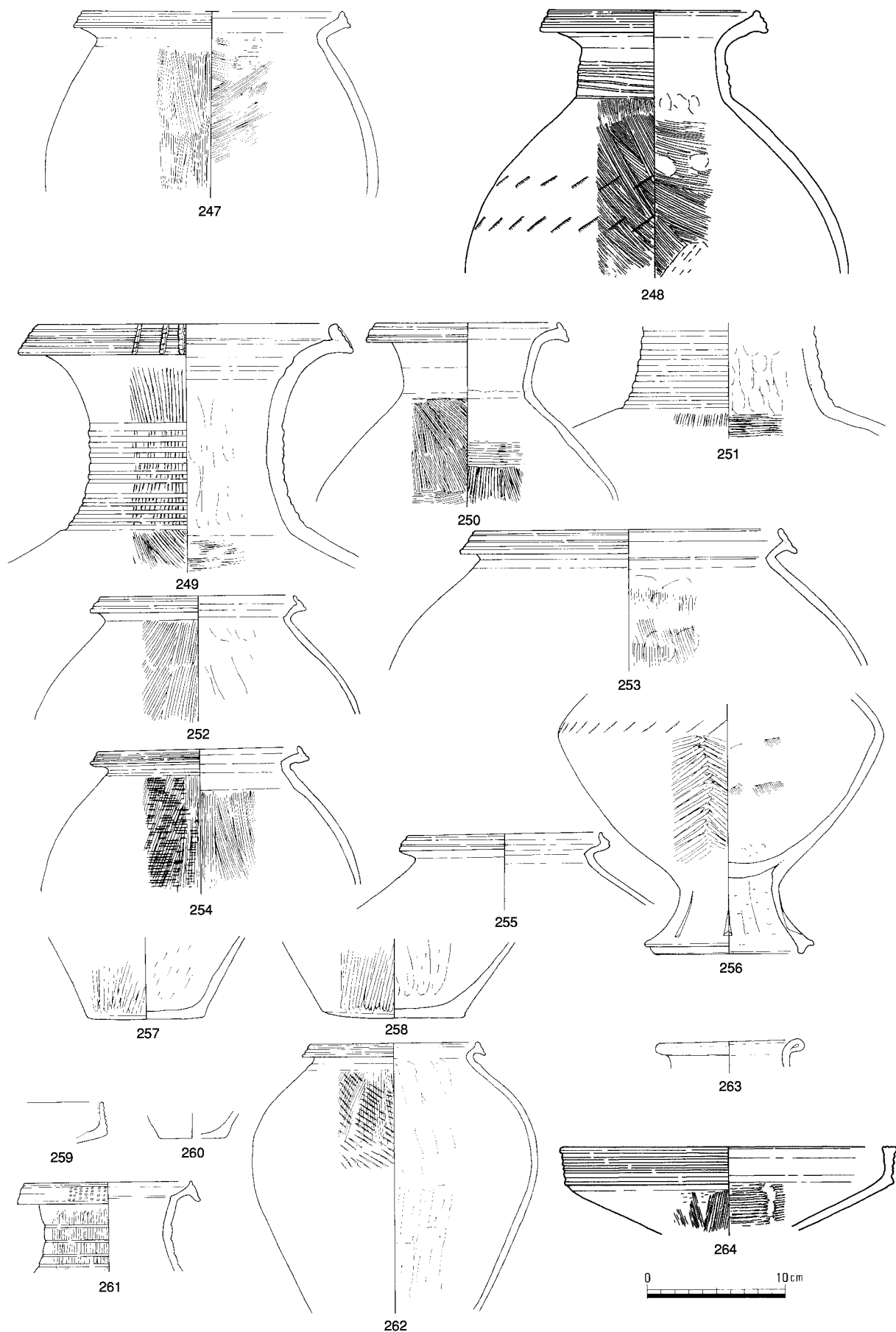
竪穴住居49 (第119図)

竪穴住居49は、Ⅱ区に所在する竪穴住居31の南西下に位置する。当該住居は、4軒と重複している。

竪穴住居49aは、長さ600cmにわたり鋸状に検出されている。壁帯溝は幅25cm前後、深さ6cm前後を測る。住居49bとの関係は、第119図の断面図に破線で示すように当該住居の上に貼り床が確認されている。調査時においては、単独の住居として掘り下げを行い最終段階で下に住居の存在を認識したのである。したがって、土層断面図が録れていないのである。ピットg~jとl~oは、貼り床を取り除い



第119図 竪穴住居49(1/60)



第120図 豎穴住居49出土遺物(1/4)

てからの検出であることから伴うことが妥当である。

出土遺物(第120図)は、ピットgと埋土から検出されている。247は、推定口径18.8cmを測る甕である。頸部は、端部を肥厚させる。248は埋土から出土しているが、住居49dからも検出され接合している。推定口径は、14.8cmを測る壺である。文様は、頸部に不明瞭な4～6条の凹線文を施す。口縁部外面にも3条の凹線文を施文する。内面調整は、胴部半ばにはタテヘラケズリが認められる。

竪穴住居49bは、長さ300cmほどにわたり、南西側の隅部分が検出されている。壁帯溝は幅20cm前後、深さ5cm前後を測る。住居49cとdとの関係は、前者は床面を検出後に当該住居の壁帯溝を確認し、後者については第119図に示したように壁帯溝が住居49dにおいても検出されているが、床面レベルの関係で遺存したことが認められたのである。

出土遺物は、この住居に伴うと判断される明確な遺物は検出されていないのである。

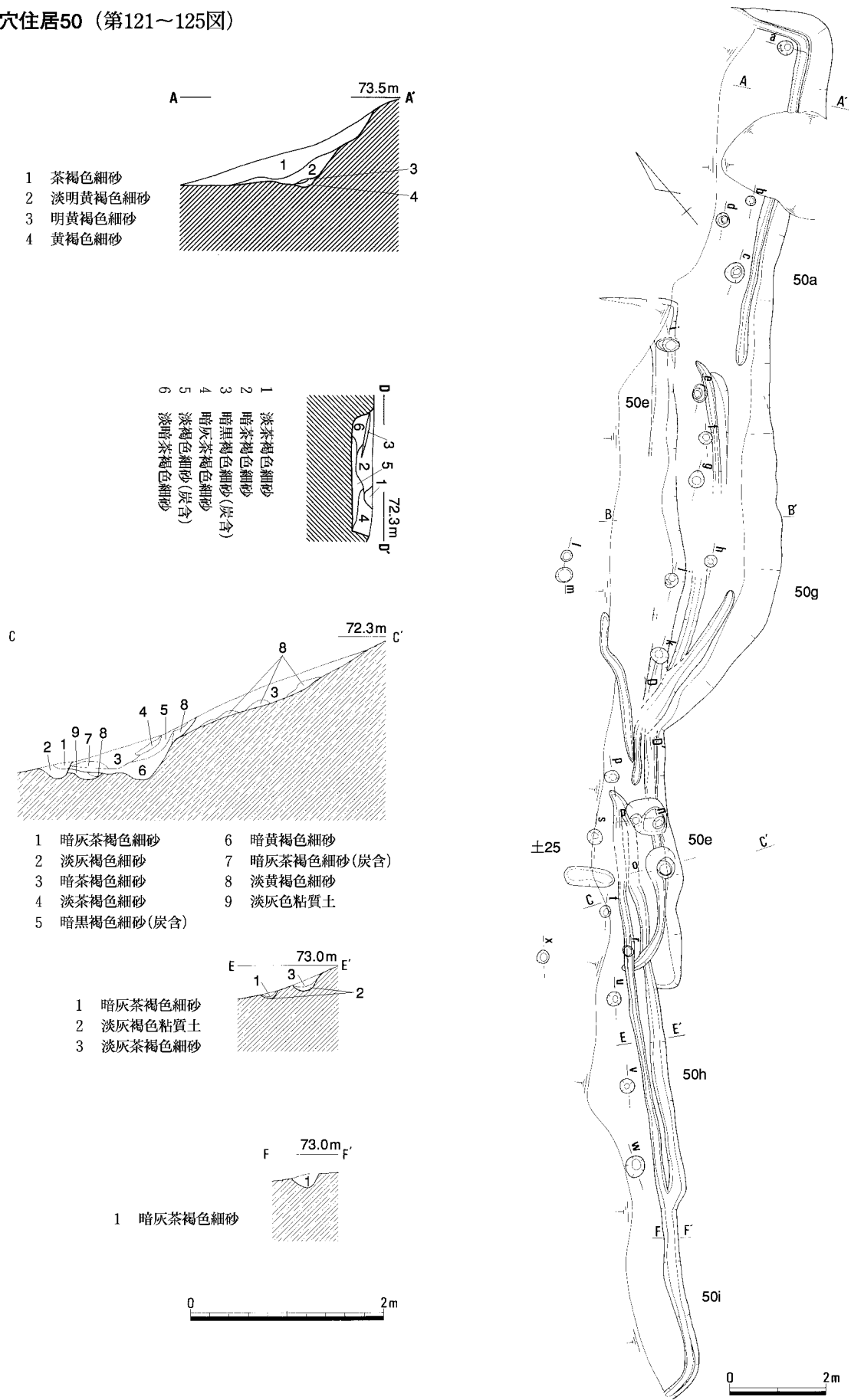
竪穴住居49cは、長さ400cmほどにわたり、南西側の隅部分が検出されている。壁帯溝は、幅32cm前後、深さ6cm前後を測る。

出土遺物(120図)は、おもに住居49bの壁帯溝上面に土器溜り状に検出されている。249は、口径21.4cmを測る壺である。文様は、口縁部外面には上3条が深く、下端の1条が浅い凹線文を施している。250は、口径13.2cmを測る壺である。頸部は逆「ハ」の字状となり、端部を強く屈曲させる。外面調整は、肩部から胴部にかけて細かいナナメハケで以下ヨコハケが認められる。251は、壺の破片である。文様は、頸部に凹線文を施文している。252は、口径14cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を斜めに拡張する。253は、推定口径22cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を斜めに折り曲げて上下に長く拡張する。254は、口径14.6cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を斜めに折り曲げて拡張する。文様は、口縁部外面に3条の凹線文を施文するが、幅広の凹部の中に凹線が認められる。外面調整は横のタタキ後細かいタテハケを施される。255は、推定口径14cmを測る甕である。文様は、口縁部外面に深いものと浅い2条の凹線文を施文する。256は、台径10.5cmを測る台付鉢である。文様は、裾部には貫通しないが透かしが施されている。257は、底径8.5cmを測る底部片である。底面は、やや丸みを持つ内容を呈している。258は、底径10.2cmを測る底部片である。底面は、257よりも丸みを持つ内容となる。外面調整はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリを施している。

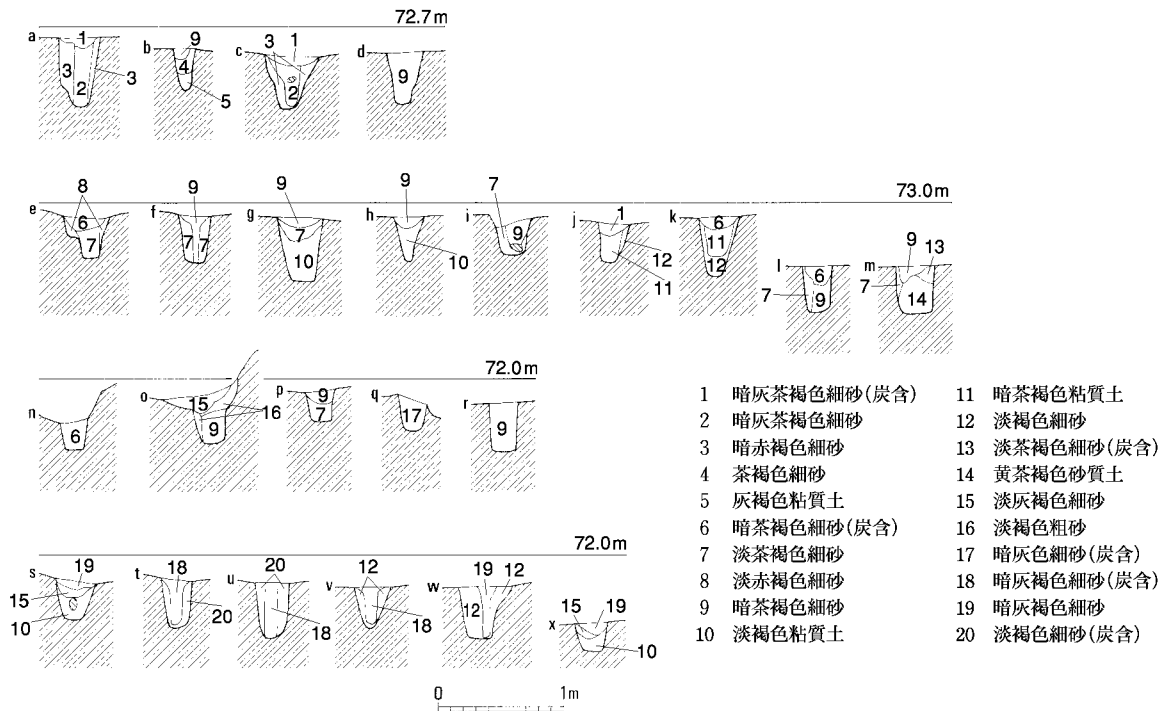
竪穴住居49dは、長さ855cmにわたり錠状に検出されている。壁帯溝は幅23～43cm前後、深さ4cm前後を測る。ピットは、貼り床上で確認されたa～fが伴うものである。これらのピットは、深さに差異を認めるが、135cmの間隔でほぼ等間隔で穿たれていることから柱穴として用いられたものと判断している。丘陵斜面上側の壁の掘り込みは、当該住居に伴うものと判断している。

出土遺物(120図)は、遺構に伴うものが259と260、他は土器溜りと埋土からの出土である。259はピットgから検出し、口縁部外面に6条の凹線文を施す高杯の小片である。260は、底部の小片で壁帯溝から検出されている。261は、東隅部分に床面よりもやや浮いた状態で検出されたもので、口径12cmを測る壺である。262は、壁帯溝上面から検出されたもので、口径12cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を肥厚させる。外面調整は、肩部から胴部最大径下に向け斜めのタタキ後タテハケを施す。263は、推定口径10cmを測る壺である。口縁部は、端部を丸め込んで玉縁状に形成する。264は、推定口径24.1cmを測る高杯である。杯部から上方に立ち上がる口縁部は、その端部を肥厚させる。文様は口縁部外面に6条、口縁端部に3条の凹線文を施文する。外面調整はヨコヘラケケズリ後タテヘラミガキ、内面にはヨコナデ後ヘラミガキを施している。

豎穴住居50 (第121~125図)



第121図 豎穴住居50-1 (1/120・1/60)



第122図 竪穴住居50土層断面図(1/60)

竪穴住居50は、住居49の南西上方に位置する。当該住居は9軒と重複している。この住居は、重複する住居が多いために、ここでそれぞれの関係について記しておく次第である。第121図の平面図は、第123図の土層断面図B—B'に示した第7層明茶褐色細砂の下線が住居50gの床面となり、さらに第8層が貼り床となることから、この面で検出できた遺構について作図をしたものである。しかし、住居50gの南西側に重複する住居e・h・iは、貼り床などは認められていないのである。このことから、調査時においてこの西側住居との関係は明確に把握できていなかったのである。この住居50b～d・f・gと住居50e、hおよびiとは、図面整理時において認識できたのである。

住居50b～gの関係を把握できるのが、第121図の土層断面図B—B'である。この断面図では、住居50gの床面が第7層下面が貼り床となる。この貼り床の下に住居fがあり、第8層下面がその貼り床となる。さらに、その下には住居50dが存在する。また、住居50eとhおよびiとの関係を判断できるのは、第121図の土層断面図C—C'である。これでそれぞれの埋土を見ていくと、住居50iは第1と2層、住居50eは第6層、住居hは第8と9層である。したがって、住居50hの上に貼り床をして住居50eを、さらに、それらを切るにより住居50iを構築しているのである。このことは、平面においても把握されている。第121図の住居50eの隅部分では、この3軒の重複が認められている。これによると、住居50eが住居50hを切り、住居50iに切られているのである。

このように、検討してきたが一部の壁帯溝においては、その対応関係が不詳である。したがって、調査と整理の段階で明確にできたのが、以上の内容である。

竪穴住居50a(第121図)は、重複する住居の最も北東端に位置する。規模は、南西側を住居50jに切られることから、長さ740cmの逆Lの字状に検出される。壁帯溝は幅25cm前後、深さ3cmを測り、コーナー部分は明確な方形を呈している。ピットは4個認められ、第122図の土層断面図においてピットaとcに柱痕を観察している。

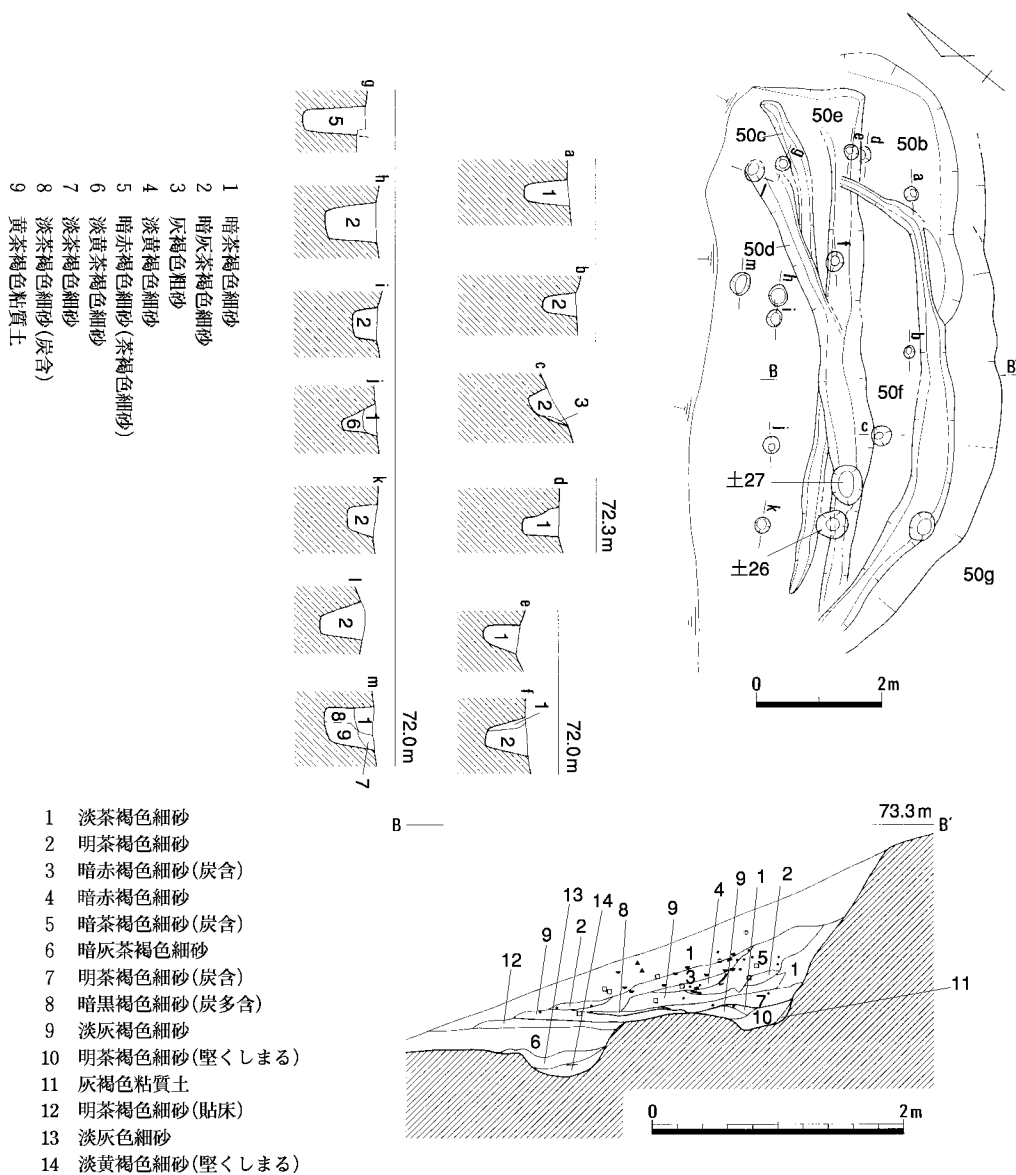
出土遺物(第124図)は、265～270の土器とS53、S66の石器でいずれも埋土からの出土である。

265は、口径17.8cmを測る高杯である。口縁部下には、鏝を持ち端部を肥厚させ、2条の凹線文を施文する。266は、口径22.5cmを測る高杯である。口縁端部は、内側を肥厚させる。267は、推定口径23.2cmを測る甕である。文様は、凹線文、棒状浮文、櫛描沈線文を施文しているのが認められる。268は、底部と同一個体であるが接合点がない。底径6.3cmを測る壺である。胴部最大径は上位に有り、底部は丸みを持っている。269は、推定底径8.2cmを測る。底部は、平底となる。270は、器台の筒部から裾部にかけての破片である。文様は、筒部に円形の透かし穴を設けている。

竪穴住居50b(第123図)は、住居50aの南西側に逆L字状に検出されたている。長さ400cmほどで、壁帯溝は認められなかった。住居50aの床面は認められずに、当該住居のプランを検出している。また、住居50cとは、このプランが5cm前後上で確認できている。

出土遺物(第124図)は、明らかに伴う状況で認められていないのである。277は住居50gで報告するが、検出は両者のプラン検出時である。

竪穴住居50c(第123図)は、長さ290cmほどの壁帯溝のみ検出されている。この壁帯溝は、ピットkの



第123図 竪穴住居50-2 (1/120・1/60)

上方の壁帯溝と同一の可能性を持つが、判断できないのである。ピットh~kは、この住居に伴う可能性が有るが不詳である。

出土遺物(第124図)は、壁帯溝から検出している。272は、高杯の小片である。

竪穴住居50d(第123図)は、住居50cの北西側に約500cmの壁帯溝のみ確認されている。壁帯溝の土層断面図B—B'部分においては、3本の壁帯溝が重複するが明確に把握することができなかった。

竪穴住居50e(第121・123図)は、長さ14m40cmを測り、北東と南西側のコーナーを確認する。当初段階では、これほどの規模になるとは考えていなかった。しかし、確認された両コーナーの壁帯溝のレベルが同じであり、さらには、10mを超える規模のものが他にも認められることから判断したのである。

竪穴住居50f(第123図)は、幅720cmを測り、形態は鋸状を呈する。先に記したように、住居50gの貼り床を取り除いて検出された。ピットは、柱穴に用いられたと考えられる以前に、確認された数が少ないのである。

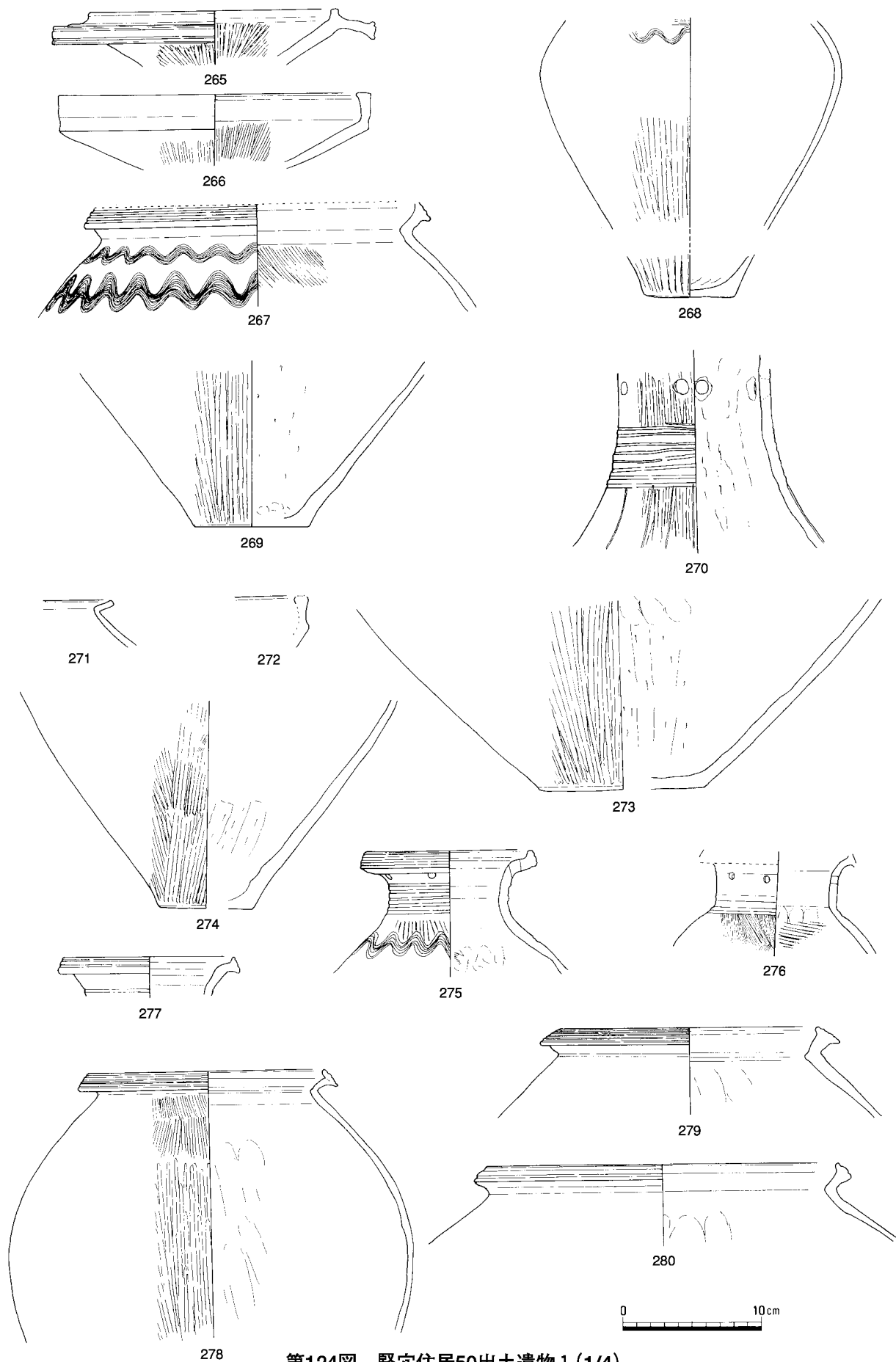
出土遺物(第124図)は、壁帯溝から検出している。271は、甕の小片である。

竪穴住居50g(第121図)は、重複する住居の最も外側に、長さ680cmほどに検出される。第121図の当該住居部分は、住居50eの破線を除き床面で確認した遺構である。土層断面図D—D'は、当該住居の壁帯溝を検出した段階での土層断面図である。この時点では、第2層が住居50gの壁帯溝であり、第3層は異なる住居の貼り床と認識し、第4~6層が下の住居の埋土と理解されたのである。このことは、確認できなかったが当該住居の他に住居の存在が想定されるのである。

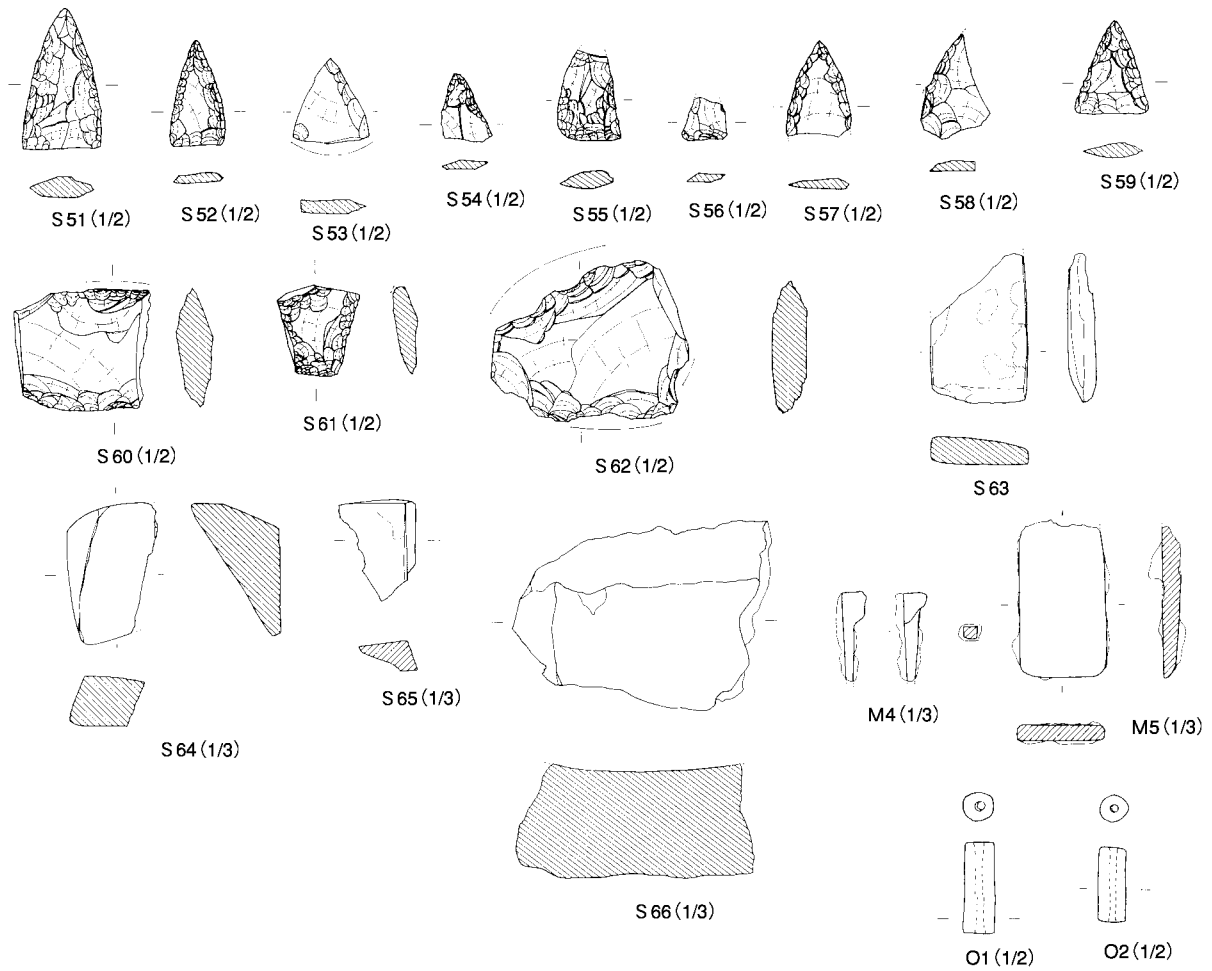
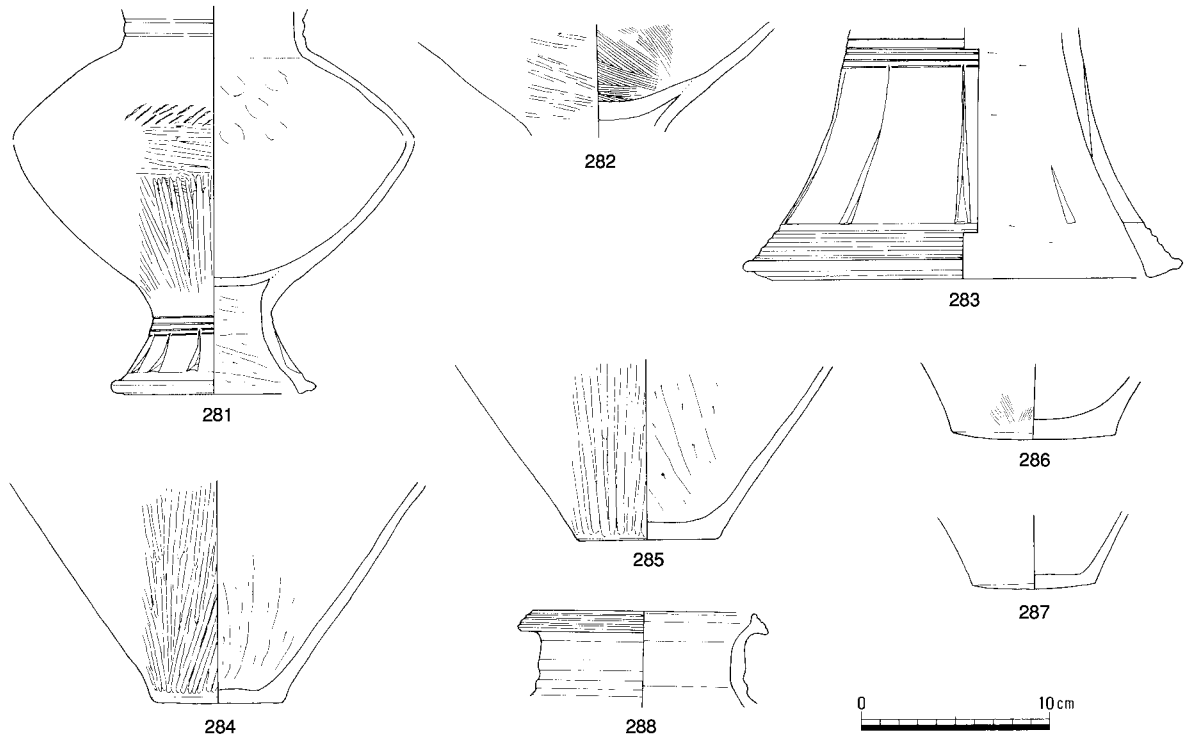
出土遺物(第124・125図)は、273と274およびS64床直で、ほかは第123図の土層断面図B—B'で明かのように、ほとんどが埋土中からの出土である。273は、推定底径11.8cmを測る。274は、推定底径6.6cmを測る。内面調整はナデとタテヘラケズリが見られる。275は、口径11.8cmを測る壺である。頸部は弓状に外反し、端部を上へ拡張する。文様は、凹線文と櫛描波状文を施す。276は、頸部が立ち上がり端部が外反し、さらに上下に拡張する。277は、口径12.3cmを測る壺である。頸部は外反し、口縁端部を上下に拡張させる。文様は、口縁部外面と頸部に凹線文を施している。278は、口径17cmを測る甕である。口縁屈曲部内面は、強いヨコナデによる、明瞭な凹部を形成させる。279は、口径18.4cmを測る甕である。280は、口径25.3cmを測る甕である。口縁端部の下方を肥厚気味に丸く、上方に拡張させる。281は、台径9.2cmを測る台付壺である。胴部は逆「く」の字状に屈曲し、直口する頸部をつくる。台端部は、外側に拡張させる。文様は、台部で篋描沈線文と貫通しない透かしを施している。282は、高杯の破片である。283は、推定台径20cmを測る台部片である。文様は、篋描沈線文と裾部よりに凹線文を施文する。その文様間には、透かしが設けられている。284は、底径6.8cmを測る底部の破片である。285は、底径7.4cmを測る平底の底部の破片である。底部下端には、ヨコナデが認められる。286は、底径8.8cmを測る底部の破片である。底部は、丸みを持って張りだしている。287は、推定底径6.5cmを測る底部の破片である。底部は、丸みを持って張りだしている。288は、口径11.8cmを測る壺である。文様は、凹線文を施文する。

石器は、石鏃、楔形石器、砥石が検出されている。

鉄器は、2点検出されている。M4は、残存長さ3.6mm、幅0.8mm、厚さ0.5mm、重さ5.24gを測る釘状のものである。先端部は、太くなっているが、錆膨れの可能性が有る。M5は、残存長さ62.0mm、幅35.0mm、厚さ7.0mm、重さ48.42gを測る斧である。基部側が欠損している。



第124図 豎穴住居50出土遺物1 (1/4)



第125図 竪穴住居50出土遺物 2 (1/4・1/2・1/3)

管玉は、グリーンタフ製のものが2点検出されている。**O1**は、最大径8.2mm、長さ24.4mm、孔径2.5mm、重さ1.6gを測り、穿孔は両側から行っている。**O2**は、最大径7.3mm、長さ20.0mm、孔径2.2mm、重さ1.1gを測り、穿孔は両側から行っている。

以上が、住居50gからの出土遺物である。先に記したように、これらの遺物は住居に伴う状況で検出されたのは極めて少ないのである。このことは、第123図土層断面図B—B'に示されるように、埋土からの出土である。したがって、その出土状態と当該住居の上方に認められる住居51の遺物内容と密接に関わると思考されるのである。

竪穴住居50h(第121図)は、長さ880cmあたり、幅20～35cm、深さ5～8cmの壁帯溝が、住居50iと平行して検出したのである。検出された地点は、花崗岩と粘質を持った堆積土で花崗岩風化土とは趣を異にする。柱穴は、ピットs～wがほぼ等間隔で並び、深さも変わらないのである。柱痕は、土層断面図第122図に示したようにピットsを除き認められる。さらに、これらのピットが、壁帯溝と同じプランの中で認められていることから、伴うと判断しているのである。

竪穴住居50i(第121図)は、長さ12.60mあたり、幅20cm前後、深さ5～13cmの壁帯溝が、住居50dと平行して検出したのである。壁帯溝以外には、当該住居に伴う遺構は検出されていないのである。住居は検出部分の幅が狭く、住居にともなうピットなどは検出されなかったのである。

竪穴住居51(第126図)

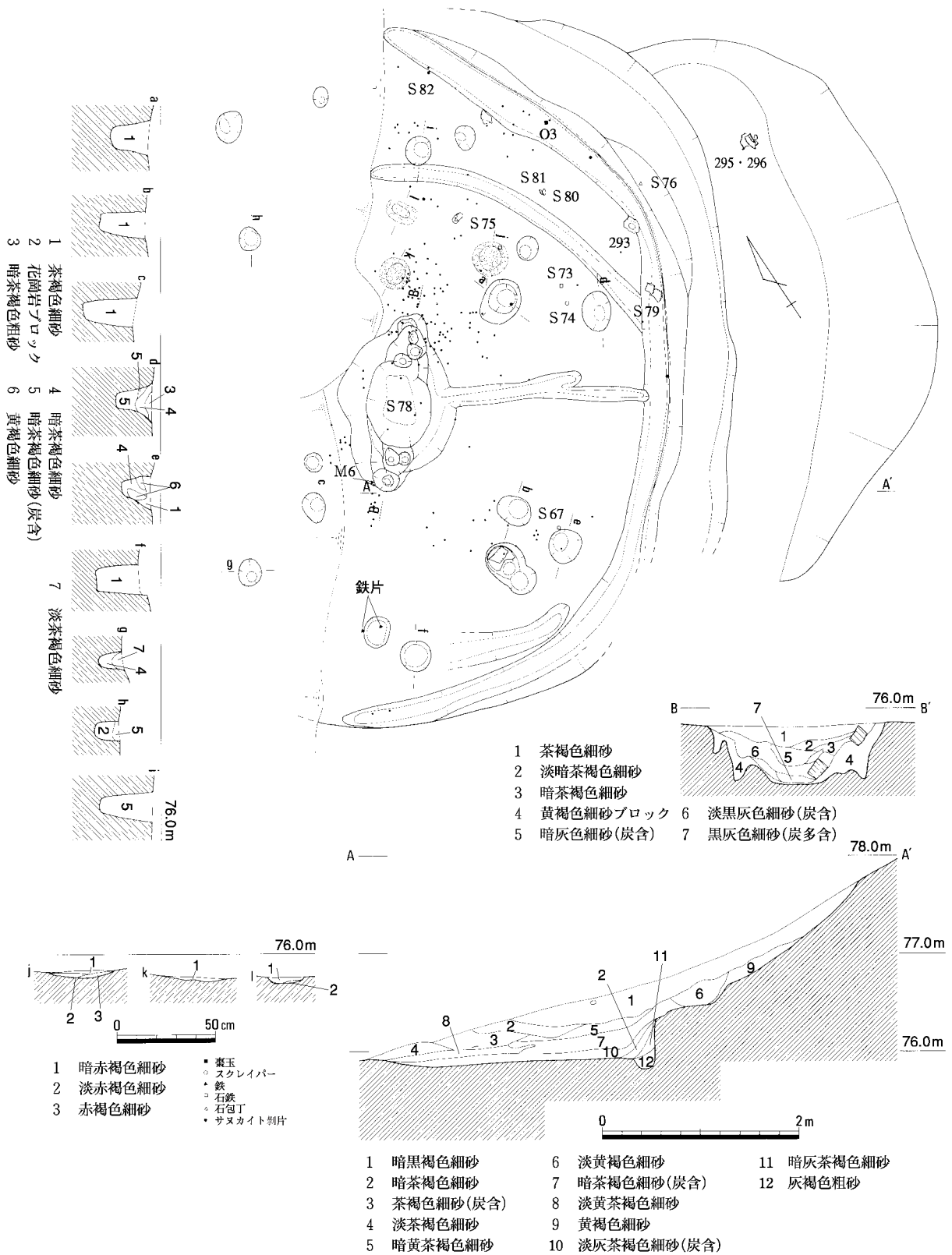
竪穴住居51は、住居50gの南東上方に位置する。住居は、長さ705cmにわたり検出され、住居北西側の丘陵斜面下方にあたる部分は流れて消失している。残存する部分からの形態は、胴張り隅丸方形を呈すると考えられる。住居南東側の丘陵斜面上側には、2つの段が認められている。最も外側のものは、長さ560cmにわたり弧状の窪み状に認められた。住居に最も近いものは、住居に沿って幅50～80cmで認められる。第126図土層断面図A—A'から前者は、明確な掘り込みではなく、窪み状となる。後者は、20cmほど掘り下げていることが、斜面堆積とは異なる層の第6層で認められる。

住居は、幅25cm前後、深さ8cm前後の壁帯溝が巡る。この内側に幅18～25cm、深さ6cm前後の壁帯溝が存在する。このことから、住居の拡張が判断されるが、この壁帯溝状には貼り床は認められなかったのである。拡張前の柱穴は、ピットa～cの3本を確認することができたが、北側に位置するピットは斜面の関係から検出することはできなかったのである。拡張後の柱穴は、ピットd～iの6本柱と想定している。しかし、斜面側のピットgとhの間が開くことから、確認できなかったが柱穴の存在を思考したほうが妥当であると判断される。中央穴の規模は、115×180cm、深さ68cmほどを測る。形態は楕円形を呈し、両端にピットを設けている。中央穴からは、北東側に幅15cm前後、深さ8cm前後の溝が認められる。火処は、中央穴の北東側に偏在する。

出土遺物(第127～128図)は、**289**が中央穴、**290**がピットa、**291**と**292**は床面からの検出である。また、**295**と**296**は、最も外側の段からのものである。石器は、**S76**を除き柱穴と床面付近から検出されている。鉄器と黍玉もまた床面からである。

289は、口径13cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を斜め上下に拡張する。**290**は、高杯の小片である。**291**は、口縁部外面に凹線文を施文する壺の小片である。**292**は、口縁端部が下方に巻き込む様になる壺の小片である。**293**は、床面よりも5cmほど上で検出した底径8.2cmを測る底部片である。底部は、丸みを持って張りだしている。外面調整はタテヘラミガキ、底部はヘラミガキの後の使用による磨滅が認められる。内面は、タテヘラケズリを施している。**294**は、床面よ

りも10cmほど上で検出された脚径6.3cmを測る脚部片である。文様は、裾部に透かしの換わりと考えられる3本対の篋描沈線が施文されている。**295**は、口径11.4cmを測る壺である。胴部最大径は上位にある。文様は、凹線文と櫛描文が施文されている。**296**は、推定口径19.2cmを測る壺である。文様は、



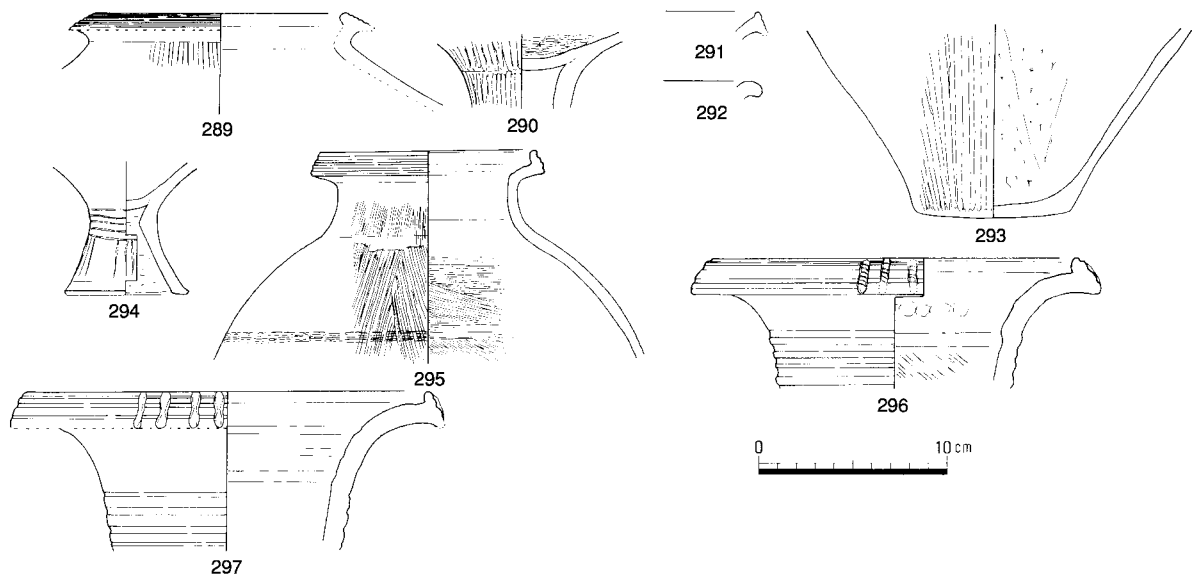
第126図 竪穴住居51(1/60)

口縁部と頸部に凹線文を施文する。297は、口径21.2cmを測る壺である。口縁部は外反し、端部を上方へ拡張する。文様は、口縁部外面と頸部に凹線文を施文する。

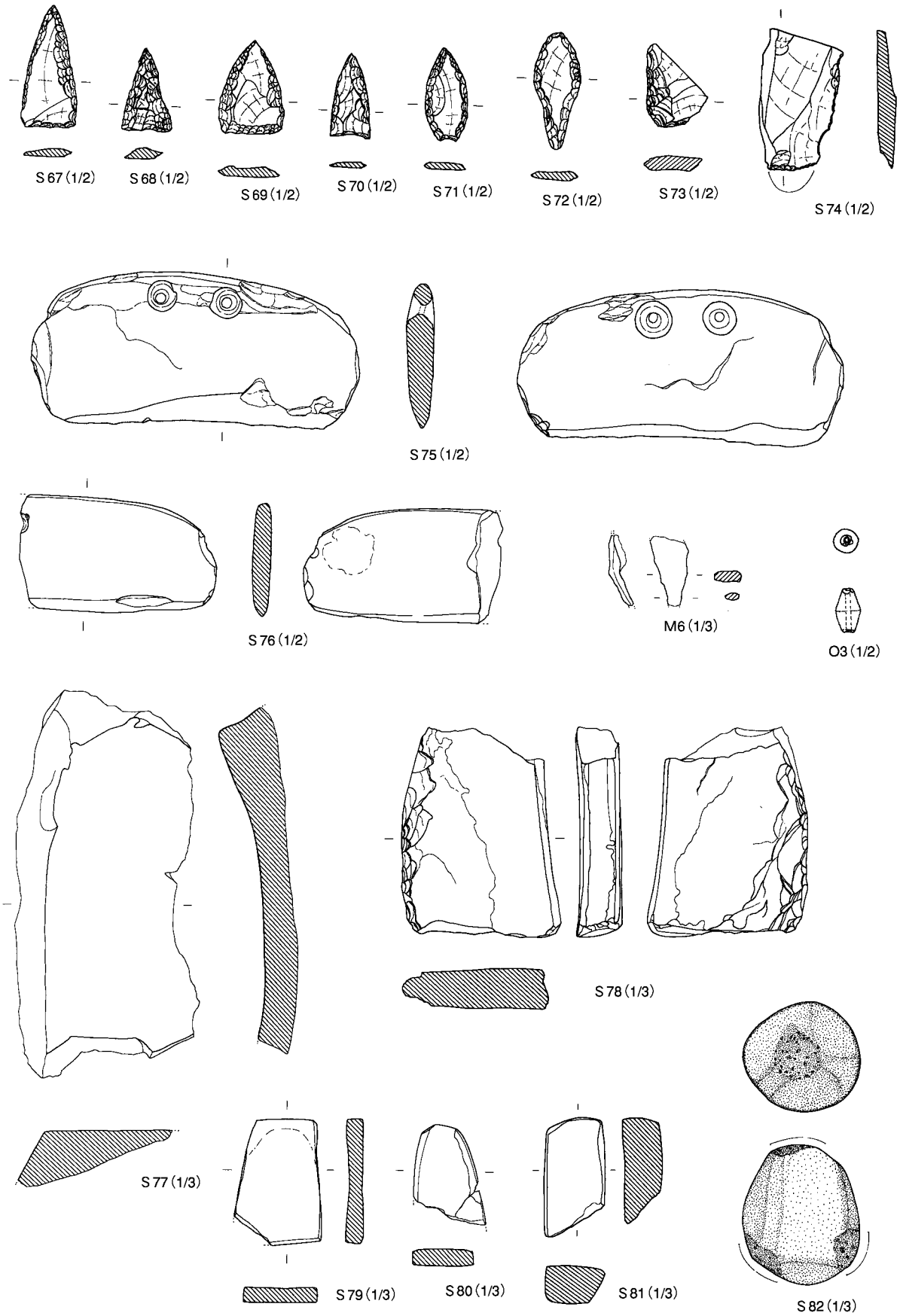
S67～S72は、石鏃である。S73は、長さ29.0mm、幅21.5mm、厚さ6.0mm、重さ3.41gを測るR.Fである。刃部は、潰れて磨滅している。S74は、長さ50mm、幅29.5mm、厚さ7.5mm、重さ11.91gを測るR.Fである。刃部は、使用により丸みを帯び磨滅している。以上の石鏃とR.Fの石材は、サヌカイトである。S75は、長さ114.5mm、幅54.0mm、厚さ9.5mm、重さ85.51gを測る磨製石包丁である。石包丁は完形で、紐通し孔は両側から穿孔している。S76は、残存長さ69.0mm、幅40.0mm、厚さ6.5mm、重さ25.31gを測る頁岩製の磨製石包丁である。石包丁は、紐通し孔の部分で欠損している。S77は、長さ205.0mm、幅97.0mm、厚さ55.0mm、重さ664.75gを測る流紋岩製の砥石である。平面と側面には、使用痕がみとめられているが一部は欠失している。S78は、長さ111.0mm、幅84.5mm、厚さ24.0mm、重さ321.44gを測る流紋岩製の砥石である。側面には、石切の痕が認められる。使用痕は、両面と側面にも認められ、一部欠失している。S79は、長さ66.5mm、幅46.0mm、厚さ9.3mm、重さ45.75gを測る流紋岩製の砥石である。形態は、方形を呈し一部を欠いている。両平面と各の側面には、使用痕が認められる。S80は、長さ52.0mm、幅38.5mm、厚さ9.0mm、重さ23.80gを測る流紋岩製の砥石である。使用痕は、全面に認められ一部を欠いている。S81は、長さ62.5mm、幅32.0mm、厚さ21.0mm、重さ65.47gを測る流紋岩製の砥石である。使用痕は、全面に認められる。これらの砥石のうちS78とS79は、住居の中央穴からの出土である。S82は、長さ73.5mm、幅62.0mm、厚さ58.0mm、重さ338.13gを測る花崗岩質アプライト製の磨石で、敲打部分も認められる。この磨石は、住居の埋土中からの検出である。

M6は、残存長さ3.5mm、幅1.9mm、厚さ0.5mm、重さ4.63gを測る鉄製品で、鏃とも想定されるが判断できないのである。鉄器は、第126図でピットf下方の深さ30cmのピット周辺に▲印の2カ所で検出されているが、錆でしか遺存していなかったものである。

O3は、棗玉径8.7mm、長15.2mm、孔径1.5mm、重さ1.2gを測る水晶製の棗玉である。穿孔は、ほぼ同じ幅を認めることができる。しかしながら、一方の孔の状は回転したと思われる筋が認められ、他方の反対側の孔はこの筋が無く、はつりしたような痕が観察される。中央の稜は、研磨され丸くなっている。上下の部分は、丁寧に研磨され稜を残していないのである。



第127図 竪穴住居51出土遺物1 (1/4)



第128図 竪穴住居51出土遺物 2 (1/2・1/3)

土壌25 (第129図)

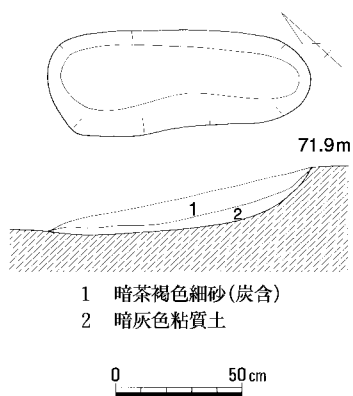
土壌25は、住居50hのピットsとtの間に位置する。規模は推定長さ104cm、幅39cm、深さ13cm前後を測る。形態は楕円状を呈し、底面は丸みを有する。第129図土層断面図で示すように、北東側は丘陵斜面下側になるため立ち上がりを確認できなかった。

土壌26 (第130図)

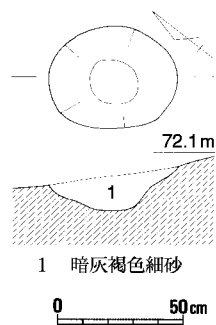
土壌26は、住居50gの南西端よりで住居50eの壁帯溝と重複している。規模は、長さ40×51cm、深さ14cmを測る。形態は、円形を呈する。住居50eと重複することからその前後関係は、壁帯溝を掘り下げることで確認したのであるが、明確ではない。

土壌27 (第131図)

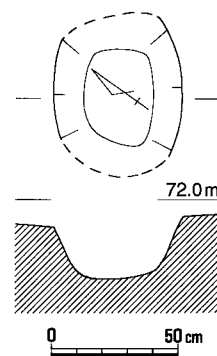
土壌26は、住居50gの南西端よりで住居50eの壁帯溝と重複する。そして、土壌26の北西側に接して位置している。規模は、長さ50×60cm、深さ23cmを測る。形態は、隅丸方形を呈する。この土壌は、第131図に示すように南西と北東辺が破線に表示している。これは、住居50eの壁帯溝を掘り上げてからの検出によるものである。



第129図 土壌25(1/30)



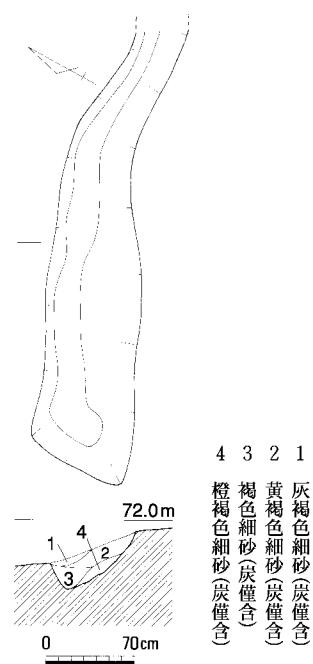
第130図 土壌26(1/30)



第131図 土壌27(1/30)

溝2 (第132図)

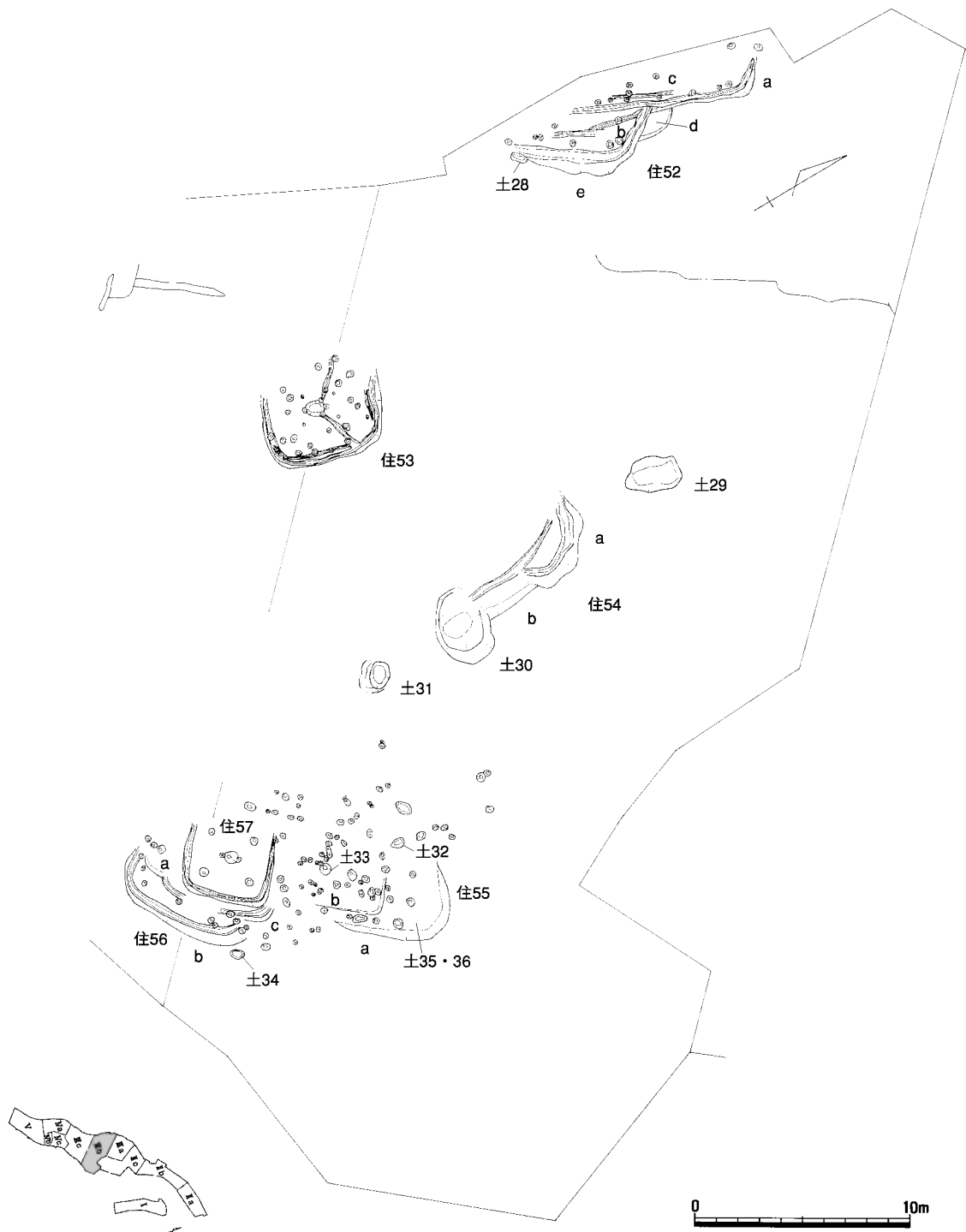
溝2は、住居50aの北西下方に位置する。溝は、南西から北東に長さ355cm、幅38～80cm、深さ24cm前後をはかる。溝の南西端は、方形状となり底面の深さ21cmとなる。反対の北東側は、斜面上側となる部分の掘り込みは確認することができたが、下方側の掘り込みは確認することはできなかったのである。このことから、北東側は、地形的な関係から消失したものと思われされる。底面の状態は、第132図の土層断面図に示すように丘陵上側となる壁はなだらかとなるが、その下側となる壁面は明確に立ち上がっている。埋土には、各層に炭を含んでいることから上に存在する住居の関係の影響とも推測される。



第132図 溝2 (1/60)

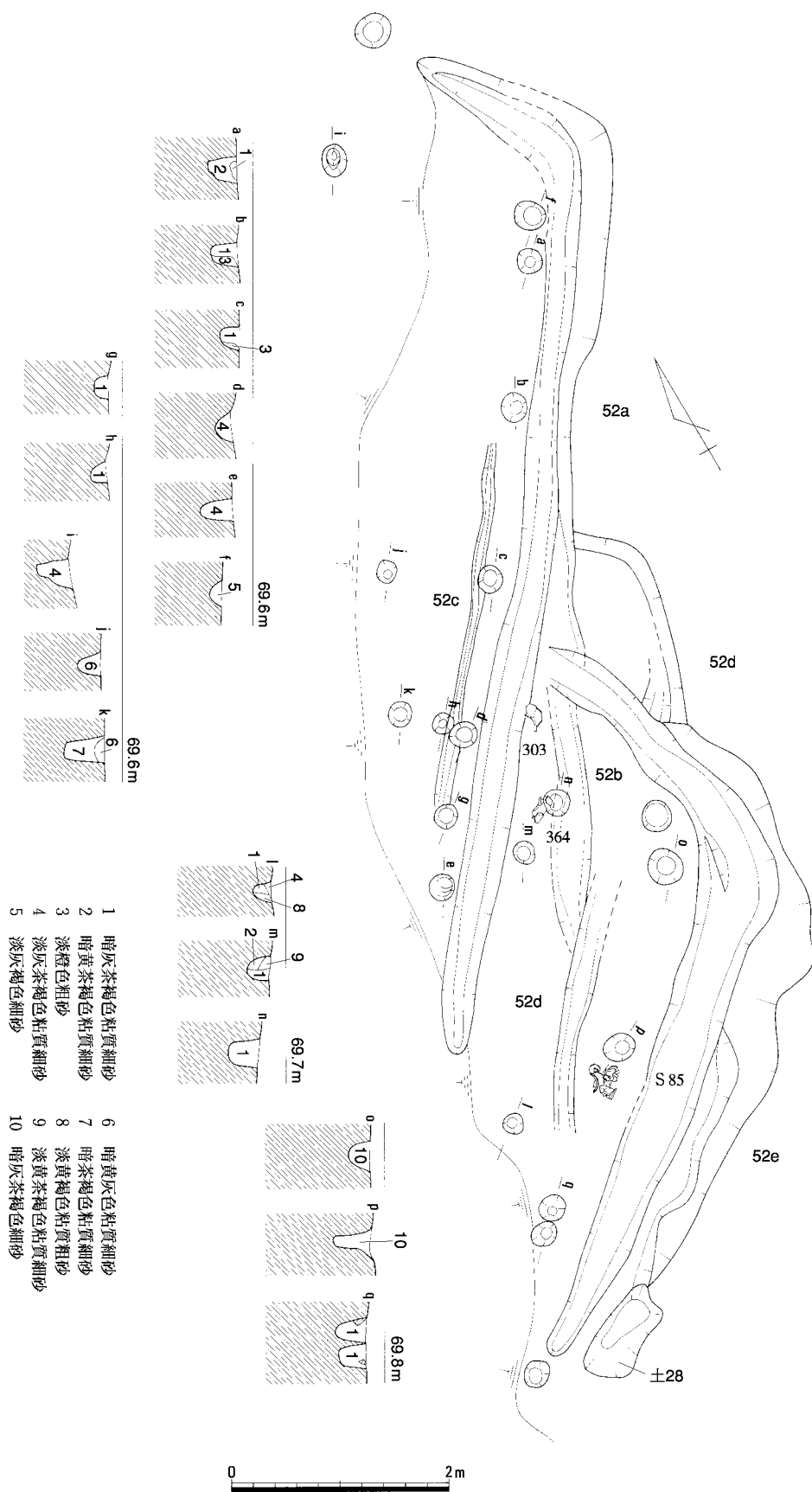
6 IIIb区の調査

IIIb区は、IIc区からIIIa区が丘陵の張りだし部分に相当し、南西斜面に転換する位置にある。一部は、そこから形成される広い谷状の地形を呈する地点にも相当する。遺構は、IIc区と連続する状況で展開しているが、単独で存在する竪穴住居も認められている。この部分の基盤層は、暗茶褐色系の風化土、風化土に角礫を含む、風化土に粘質を持つなど谷の堆積土の様相を示すのである。



第133図 IIIb区遺構配置図(1/300)

豎穴住居52 (第134図)



- 1 暗灰茶褐色粘質細砂
- 2 暗黄茶褐色粘質細砂
- 3 淡橙色粗砂
- 4 淡灰茶褐色粘質細砂
- 5 淡灰褐色粗砂
- 6 暗黄灰色粘質細砂
- 7 暗茶褐色粘質細砂
- 8 淡黄褐色粘質粗砂
- 9 淡黄茶褐色粘質細砂
- 10 暗灰茶褐色細砂

第134図 豎穴住居52(1/60)

竪穴住居52は、Ⅱc区の住居50iの北西下方に位置する。調査時は、住居の一部のみ確認され、遺物も多く伴っていることから、丘陵斜面下方向を2mほど拡張する。その結果、a～eの5軒と重複していることが明かとなったのである。調査区拡張前においては、確認されていた住居の前後関係を把握していたが、拡張後にその様相が異なることが明かとなった。さらに、機械で住居の埋土近くまで排土したことにより、関係する土層断面を作成できなかつたのである。したがって、拡張前の段階で把握していたのは、住居52b→住居52e→住居52aの関係で認識していた。

竪穴住居52aは、長さ900cmにわたり曲尺状に認められる。壁帯溝は、幅25～40cm、深さ5cm前後を測る。また、壁の高さは、30cmを超える部分も認められる。柱穴は、ピットa～eの5本が、ほぼ140cm間隔で並び、壁帯溝との幅も同じことから、それに用いられたと思われされる。しかしながら、第134図に示したピットa～eの断面は浅く、柱痕と思われる土層もピットcのみである。このことからすれば、判断しがたいのであるが、ほかの住居の内容から思考して妥当と思われる。

出土遺物(第135図)は、298と300が埋土、299と301そして302は住居b埋土との判断ができなかつたものである。298は、推定口径18.1cmを測る甕である。文様は、口縁部外面に凹線文を施文するが、真ん中の凹線文が消える部分が認められる。300は、口径14.6cmを測る高杯である。杯端部は、内側に肥厚させて拡張する。299は、甕の小片である。口縁部を受け口状に立ち上げる。内面調整は、頸部下まで斜めのヘラケズリが認められる。301は、底径8.3cmを測る底部片である。302は、底径4.4cmを測る底部片である。底部には、焼成後の穿孔を認める。

竪穴住居52bは、住居52aの壁中ほどから南の斜め上方に長さ400cmの壁帯溝が認められる。遺存している壁の高さは、20cm前後を測る。壁帯溝は、幅30cm前後、深さ3cmを測る。ピットは、2個検出しているが、当該住居に伴うか判断しがたい。

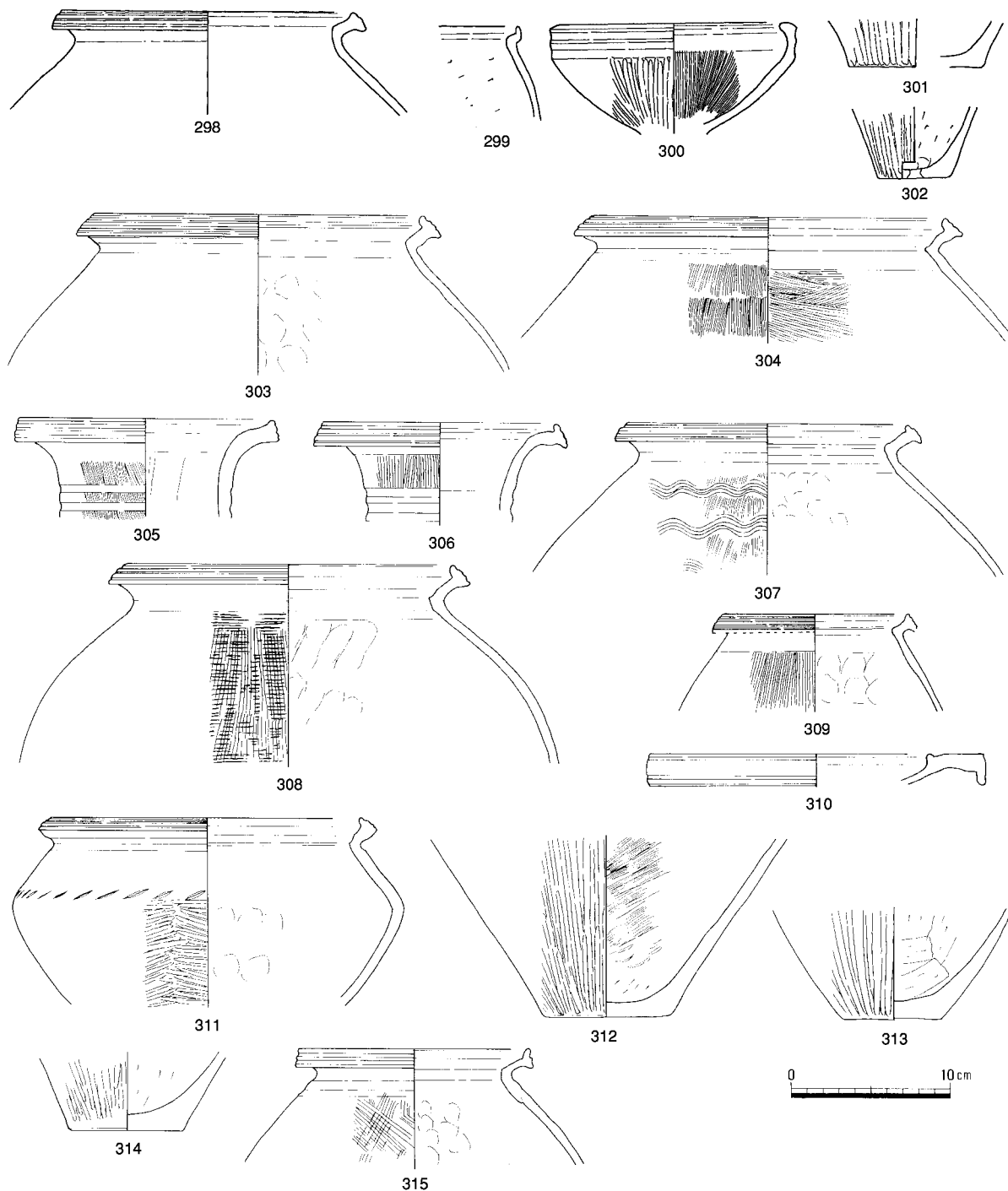
竪穴住居52c(第134図)は、住居50aの壁帯溝と平行して長さ340cmにわたり検出されている。壁帯溝は、幅10cm前後、深さ2cm前後を測る。

竪穴住居52dは、壁の立ち上がりを住居52aとeとの重複部分で認められる。この部分では、一部の壁帯溝が検出され、この壁帯溝が住居52eに認められる溝とつながるのである。したがって、この住居は長さ540cmにわたって検出されている。

竪穴住居52eは、長さ550cmにわたり、コーナーが丸くなるが曲尺状に認められる。壁の高さは、50cmを超える部分も認められる。壁帯溝は、幅40～50cm、深さ4～9cm前後を測る。柱穴は、ピットo～qが用いられてと判断される。

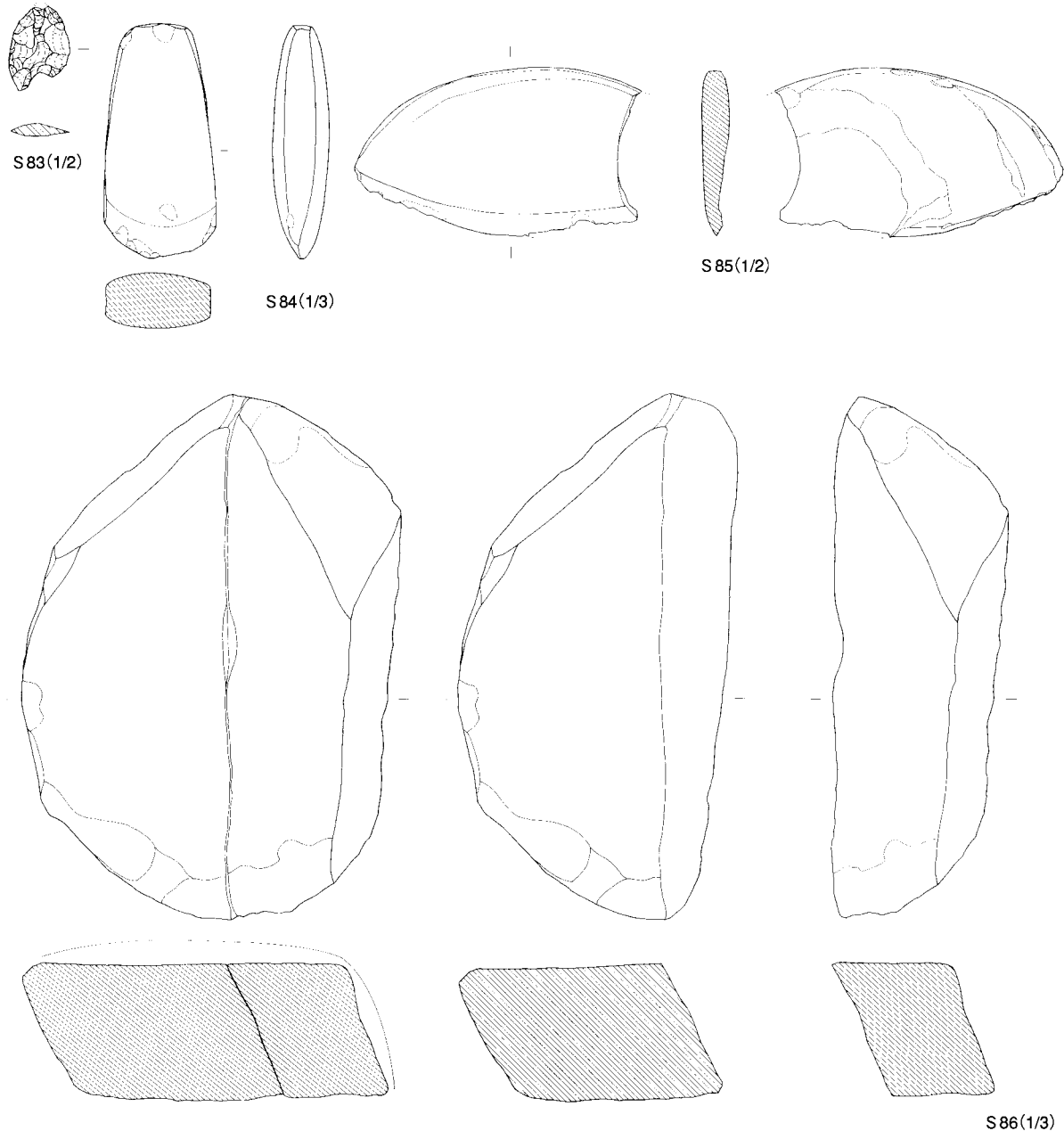
出土遺物(第135図)は、303と304が床面、305～314は埋土から検出されている。また、315は人頭大から拳大の角礫が住居内に流れ込んだ層の中から出土されている。石器のS83～S85は床面、S86は埋土からの出土である。303は、推定口径20.4cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を斜め上下に拡張する。304は、口径20cmを測る甕である。外面調整はタテハケ、内面は押圧後ハケが認められる。内面には、強いヨコナデによる明確な稜を形成する。305は、口径16cmを測る壺である。口縁端部は、肥厚気味に拡張する。306は、推定口径14.6cmを測る壺である。文様は、口縁部外面に4本、頸部にも凹線文を施文する。307は、推定口径17.6cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を斜め上下に拡張する。文様は、口縁部外面に凹線文と胴部上半に櫛描波状文を施している。308は、口径20.4cmを測る甕である。外面調整はタタキの後タテハケ、内面にはナデが認められる。内面の頸部屈曲部は、明瞭な面を形成する。309は、推定口径11.6cmを測る甕である。

文様は、口縁部外面に4条の凹線文を2本対で施文する。外面調整は、粗いタテハケ、内面にはナデと押圧が認められる。**310**は、口径14cmを測る高杯である。口縁端部に鋳を付し、端部が垂れ下がる。**311**は、口径19.2cmを測る台付鉢である。文様は、口縁部外面に3本の凹線文を施文する。胴部屈曲部には、刺突文を施す。**312**は、底径7.9cmを測る底部片である。**313**は、底径6cmを測る底部片である。**314**は、推定底径7.1cmを測る底部片である。外面調整はタテハケ後タテヘラミガキ、内面にはヘラケズリが認められる。**315**は、推定口径14.4cmを測る甕である。文様は、口縁部外面に凹線文を施文する。外面調整は粗い斜めのハケ、内面には押圧が認められる。



第135図 竪穴住居52出土遺物1 (1/4)

S83は、長さ25.0mm、幅18.0mm、厚さ4.0mm、重さ1.7gを測るサヌカイト製の石鏃である。S84は、長さ103.5mm、幅50.0mm、厚さ25.0mm、重さ203.7gを測る結晶質流紋岩製の磨製石斧である。S85は、長さ85.0mm、幅50.0mm、厚さ8.0mm、重さ41.1gを測る磨製石包丁である。一部欠失しているが、紐通し孔は不詳である。S86は、長さ234.0mm、幅125.0mm、厚さ61.0mm、重さ2230gを測る花崗岩質アプライ製の砥石である。この砥石は、変色していることから、火を受けたことが考えられる。



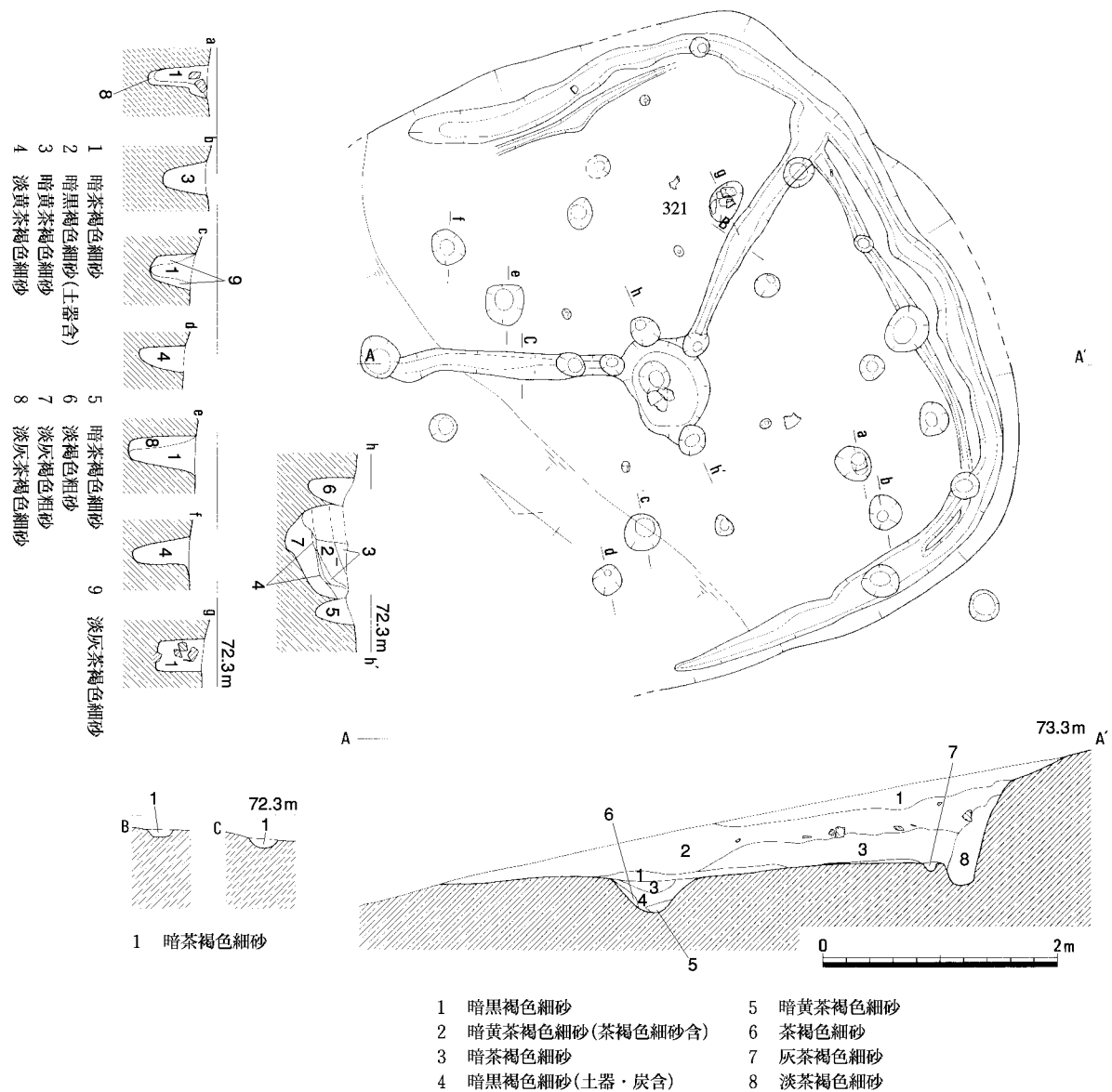
第136図 竪穴住居52出土遺物2 (1/2・1/3)

竪穴住居53 (第137図)

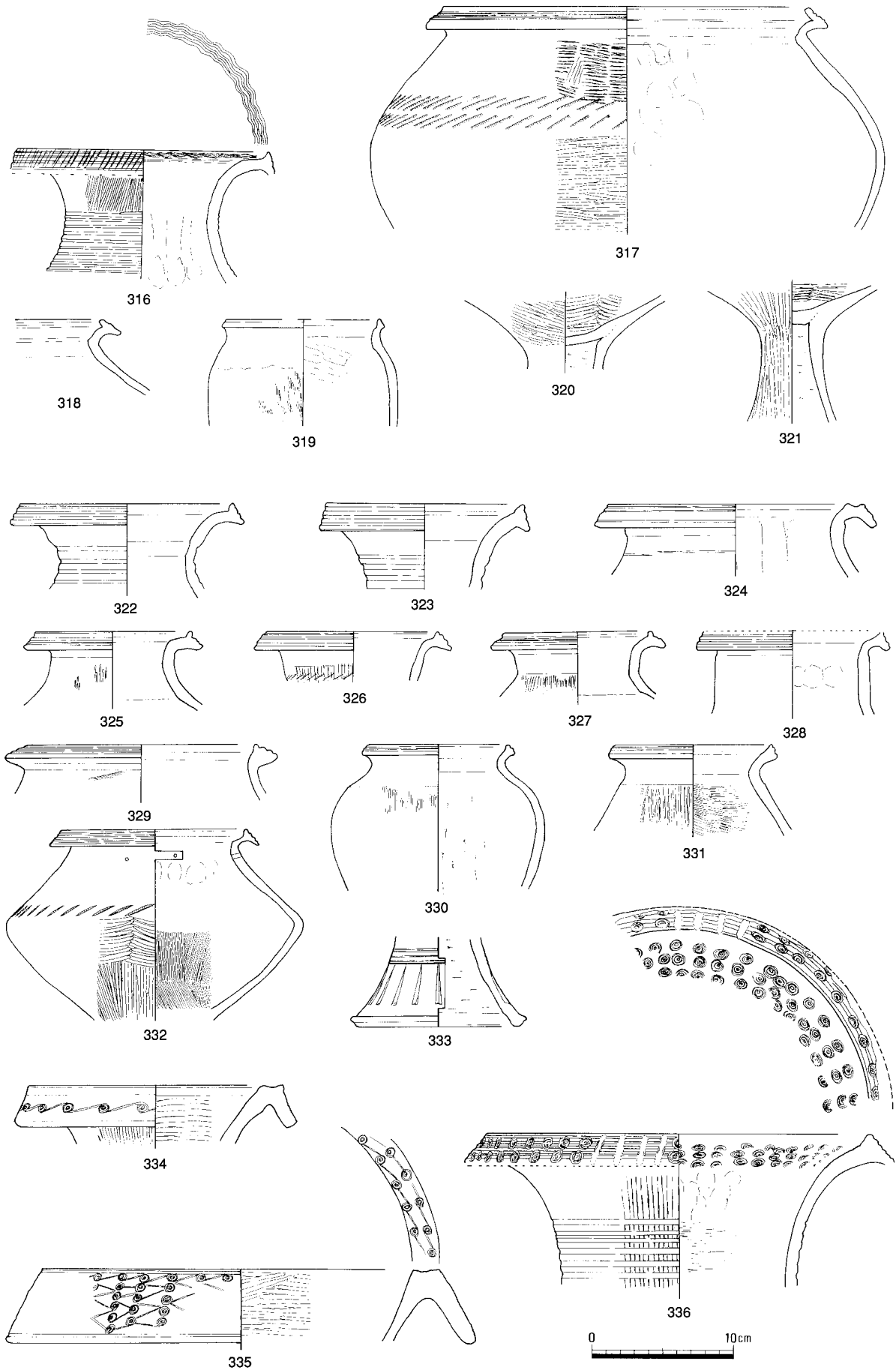
竪穴住居53は、住居52の南上方に位置する。規模は $380+a \times 550$ cmを測り、形態は隅丸方形を呈する。斜面側になる住居の西辺は、消失している。壁帯溝は、2本認められることから住居の拡張が想定される。柱穴となるのは、ピットa～fを考えており、このうち、第137図の土層断面図に示したようにピットa、c、eに柱痕が認められている。ピット名を付していないが、中央穴の周辺に径10cm前後、

深さ25cm前後のものが方形の配置で認められる。中央穴は65×85cm、深さ58cmを測る。この南北側には、ピットを設けている。また、北西と東に向けて溝が存在する。

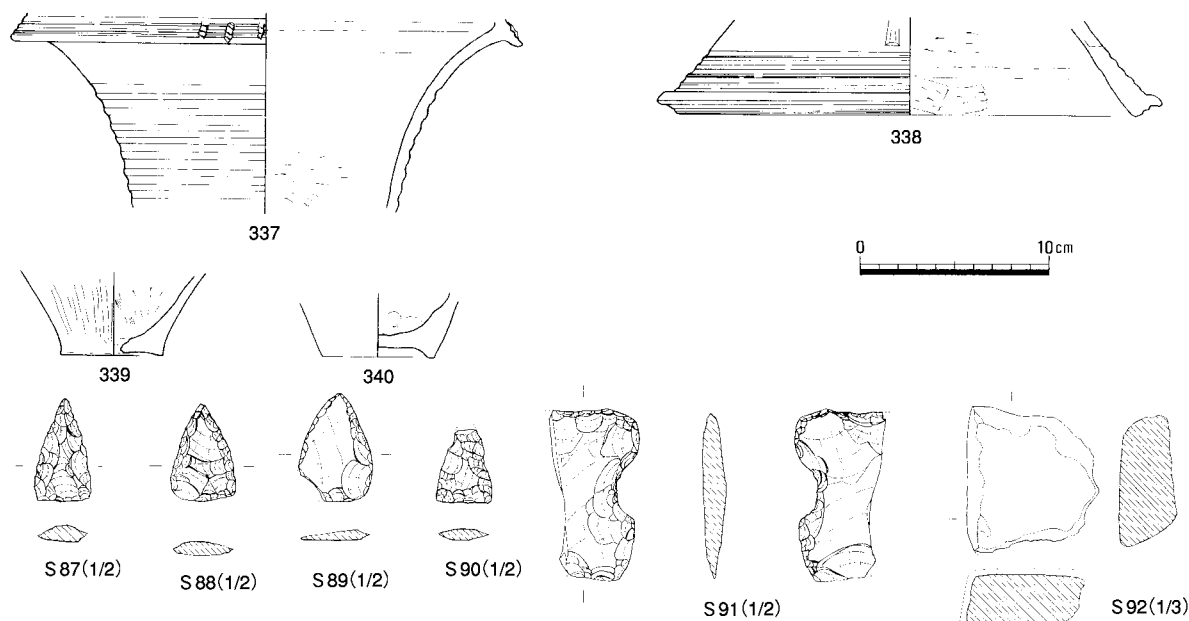
出土遺物(第138・139図)は、316~318が中央穴、319・S89・S91・S92が壁帯溝、320がピットg、321・S90が床直からの出土である。その他は、埋土中からの出土である。316は、口径17.6cmを測る壺である。文様は、頸部に螺旋の凹線文を施文する。317は、推定口径25.5cmを測る甕である。文様は、口縁部外面に凹線文を施文するが、上2本は同一の凹部となる部分が認められる。外面調整は、頸部から胴部文様帯にかけヨコタタキ、以下ヨコヘラミガキが施される。318は、甕の口縁部小片である。319は、推定口径11cmを測る甕である。口縁部は緩やかに屈曲し、端部を若干立ち上げる。内面調整は、頸部からヨコヘラケズリを施している。320と321は、高杯の破片で、円盤充填である。322は、口径14.8cmを測る壺である。文様は、口縁部外面と頸部に凹線文を施文する。323は、口径14cmを測る壺である。文様は、口縁部外面と頸部に凹線文を施文する。324は、口径14.8cmを測る壺



第137図 竪穴住居53(1/60)



第138図 竪穴住居53出土遺物1 (1/4)



第139図 竪穴住居53出土遺物2 (1/4・1/2・1/3)

である。頸部には、ヘラの工具痕が残る。325は、推定口径10.8cmを測る壺である。文様は、口縁部外面に上1本が太く、下2本が細い凹線文を施文する。326は、推定口径12cmを測る壺である。327は、推定口径10.2cmを測る壺である。文様は、口縁部外面に凹線文を施文するが、下端の凹線が消える部分が認められる。内面調整は、頸部下にヘラケズリが認められる。328は、推定口径12.4cmを測る壺である。329は、口径16cmを測る甕である。口縁部は端部を肥厚させる。330は、推定口径9.9cmを測る甕である。文様は、口縁部外面に凹線文を施文するが、上1本は凹線施文後にナデにより粘土が被う状態が観察できる。331は、推定口径11cmを測る甕である。332は、口径12.9cmを測る台付鉢である。胴部は逆「く」の字状に屈曲し、頸部も強く外反して端部を上下に拡張する。文様は、口縁部外面に凹線文と刺突文を施している。333は、脚径11.4cmを測る脚部片で、端部を肥厚させる。裾部には、篋描沈線文と貫通しない透かしを施している。334は、口径17.8cmを測る器台である。外方に延びる口縁端部は、平坦面を残し斜め下方に拡張する。335は、口径28cmを測る器台である。336は、推定口径26.8cmを測る器台である。口縁部は外方に屈曲し、端部を肥厚して拡張させる。文様は、口縁外面に凹線文、竹管文、棒状浮文を施している。337は、器台片である。内面調整は、筒部にヨコヘラケズリが認められる。338は、推定台径24.1cmを測る器台片である。台端部は、外方に丸みを持って拡張する。339は、底径5.4cmを測る底部片である。底部には焼成後の穿孔が認められる。340は、底径6cmを測る底部片で、底は凹んでいる。

S87は、長さ27.5mm、幅15.0mm、厚さ4.5mm、重さ1.57gを測るサヌカイト製の石鏃である。S88は、長さ26.0mm、幅17.0mm、厚さ3.7mm、重さ1.7gを測るサヌカイト製の石鏃であるが、先端が磨滅しているのが認められる。S89は、長さ28.5mm、幅19.5mm、厚さ3.0mm、重さ1.76gを測るサヌカイト製の石鏃であるが、一部を欠失している。S90は、残存長さ19.5mm、幅14.5mm、厚さ3.0mm、重さ0.96gを測るサヌカイト製の石鏃であるが、一部を欠失している。S91は、サヌカイト製の打製石包丁である。全体に珪酸が付着している。S92は、残存長さ58.0mmの流紋岩製の砥石であるが、一部を欠いている。使用面は、一部側面に及んでいる。

竪穴住居54 (第140図)

竪穴住居54は住居53の東上方に位置し、aとbの2軒と重複している。

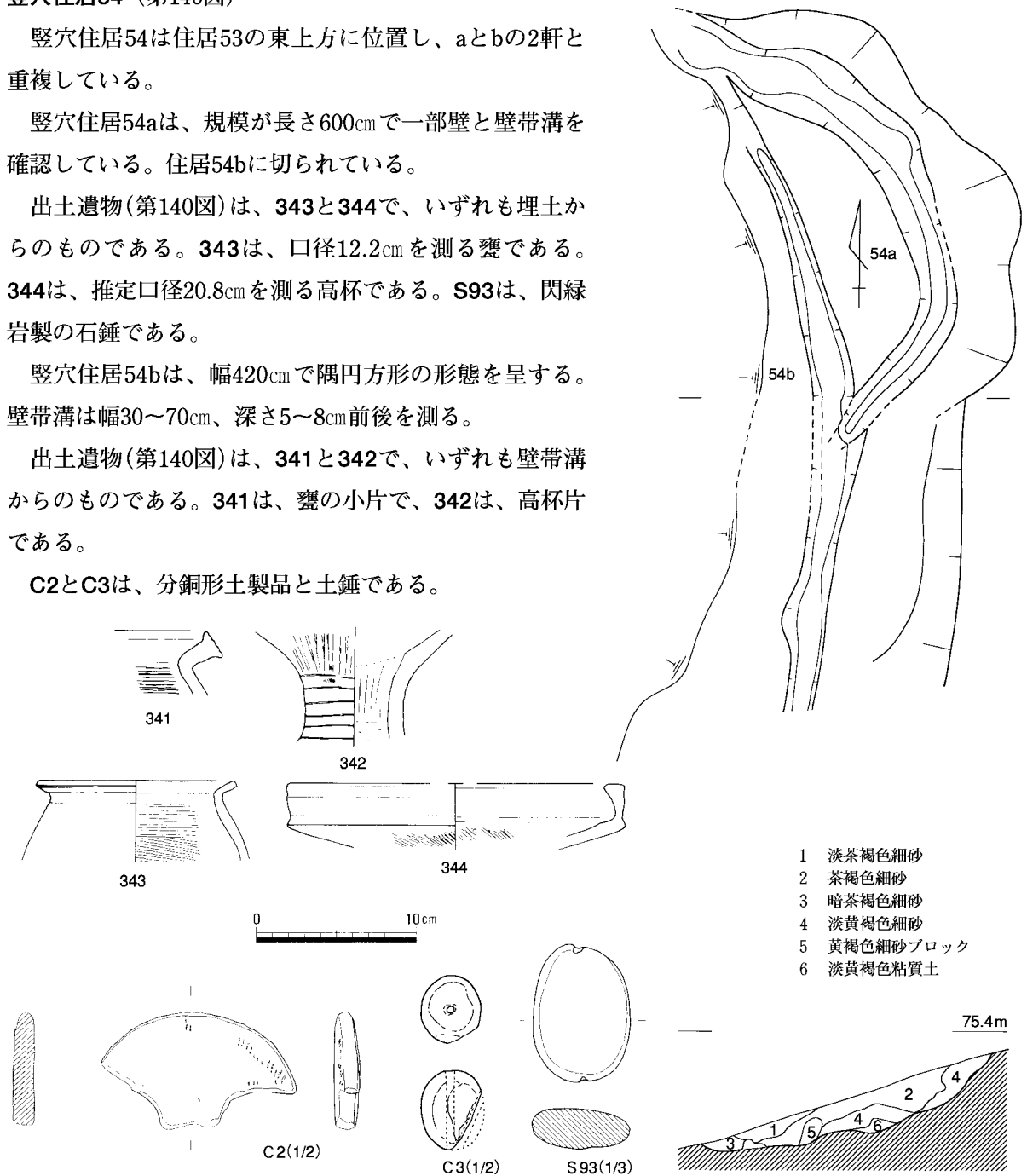
竪穴住居54aは、規模が長さ600cmで一部壁と壁帯溝を確認している。住居54bに切られている。

出土遺物(第140図)は、343と344で、いずれも埋土からのものである。343は、口径12.2cmを測る甕である。344は、推定口径20.8cmを測る高杯である。S93は、閃緑岩製の石錘である。

竪穴住居54bは、幅420cmで隅円方形の形態を呈する。壁帯溝は幅30~70cm、深さ5~8cm前後を測る。

出土遺物(第140図)は、341と342で、いずれも壁帯溝からのものである。341は、甕の小片で、342は、高杯片である。

C2とC3は、分銅形土製品と土錘である。



第140図 竪穴住居54(1/60)・出土遺物(1/4・1/2・1/3)

竪穴住居55 (第141図)

竪穴住居55は、住居54の南東上方に位置し、2軒と重複している。

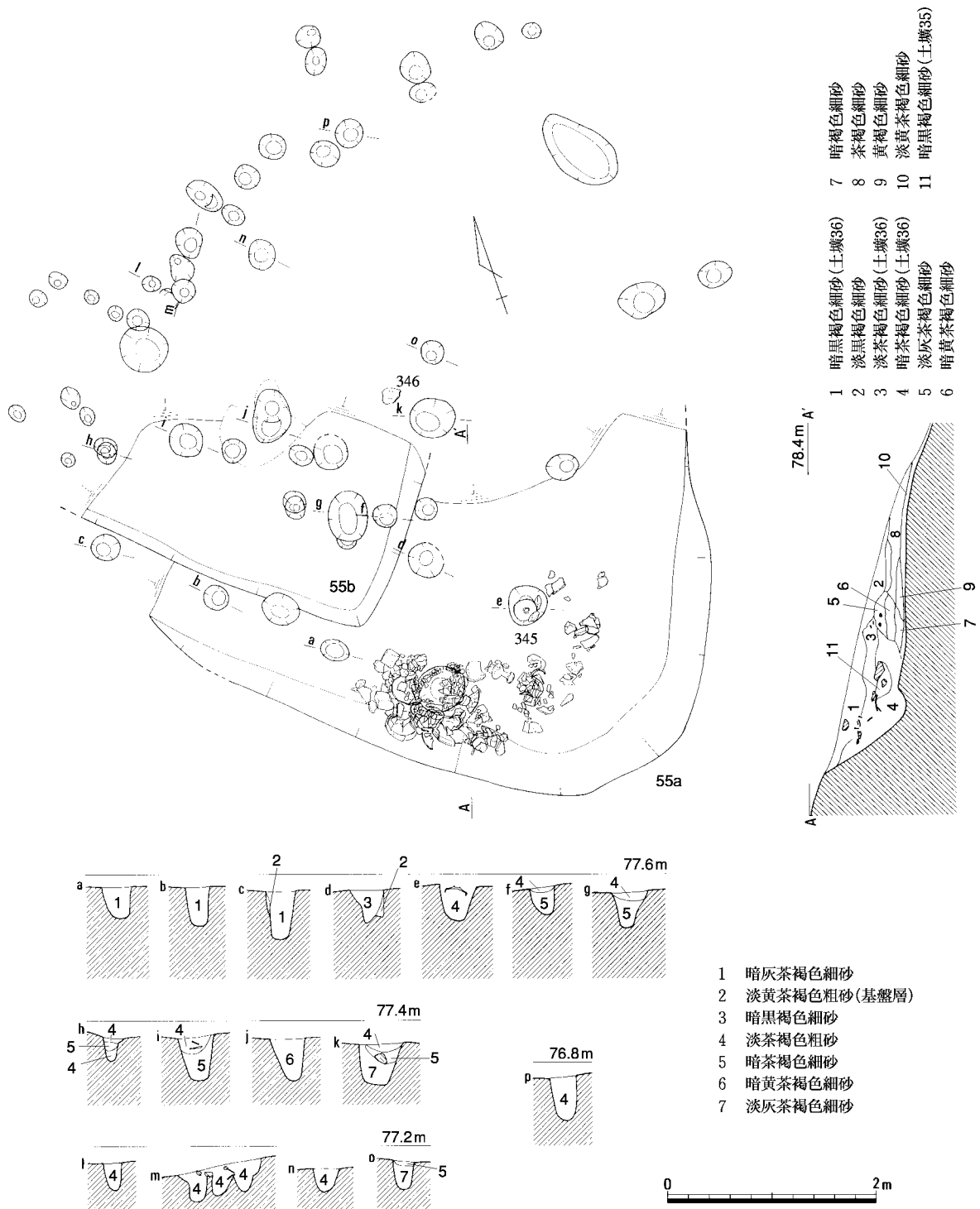
竪穴住居55aは、長さ500cmの隅円方形の一部が確認できたが、壁帯溝は、検出することはできなかつたのである。壁は南コーナー側で高さ85cmと遺存がよく、北方向に行くにともない悪くなる。当該住居は、北側で住居55bと重複する。その関係は、住居55aの床面検出過程で確認でき、貼り床は認められていない。ピットは多く検出されているが、明確に当該住居の柱穴と判断できていないのである。ピットa~cが、ほぼ等間隔に並ぶことから、何らかの柱として用いられた可能性を想定できる。

出土遺物(第142図)は、345がピットeから検出されている。345は、口径20cmを測る高杯である。口

縁部は、杯端部を内径気味に立ち上げ、口縁部外面は、丸みを持っている。

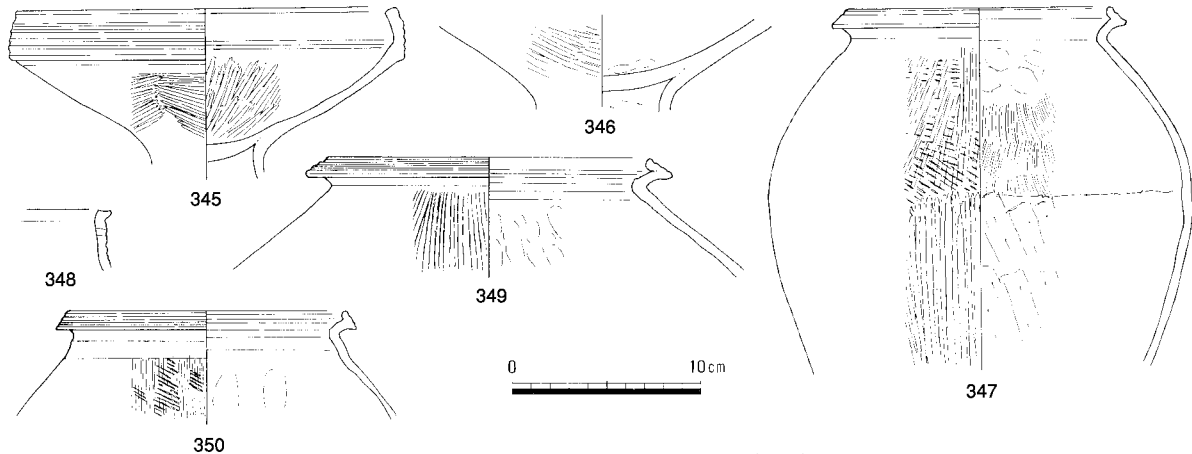
竪穴住居55bは、長さ300cmの方角の一部が確認できたが、壁帯溝は、検出することはできなかったのである。ピットは検出されているが、伴いという判断ができていないのである。

出土遺物(第142図)は、346が床面、347と348は断面図に示していないが、ピットiとjの間に位置する深さ15cmの浅いピットからの出土である。349と350は、埋土からの検出している。346は、円盤充填の高杯の破片で、外面調整は多角形のヘラミガキが認められる。347は、口径14cmを測る甕である。



第141図 竪穴住居55(1/60)

外面調整は、頸部から胴部最大径辺りまでナナメのタタキ後タテハケを施している。内面は、頸部から胴部最大径辺りまで押圧後タテハケを行い、以下はタテヘラケズリを施している。348は、直口壺の小片である。口縁端部は、外方に張りだし、端面は凹部となる。349は、口径17cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を折り返して斜め上下方に拡張する。350は、口径14.8cmを測る甕である。肩部は、ヨコナデによる凹凸が形成されている。頸部内面屈曲部は、強いヨコナデによる明確な稜を形成する。



第142図 竪穴住居55出土遺物(1/4)

竪穴住居56 (第143図)

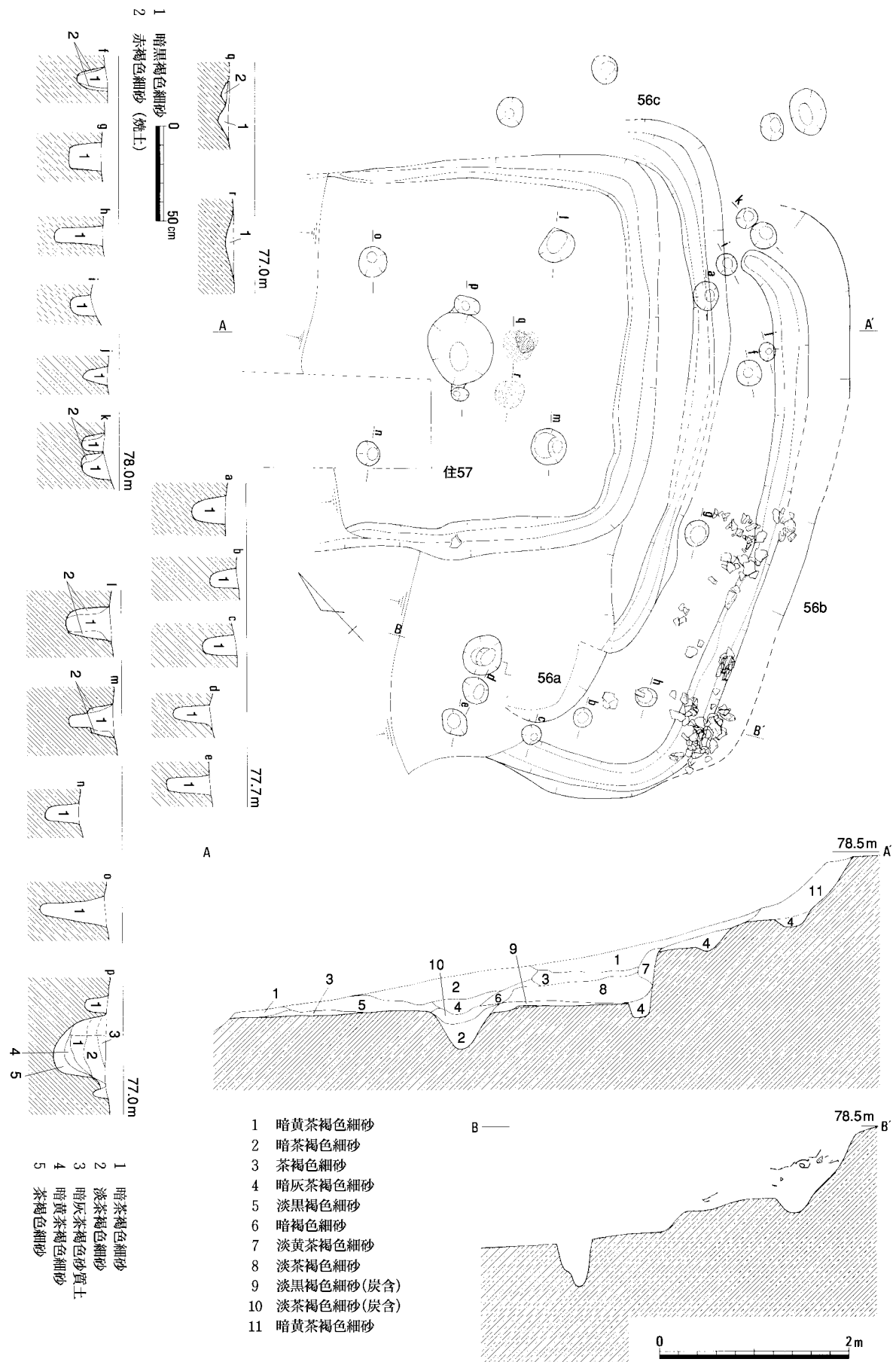
竪穴住居56は、住居55の南西側に位置し、4軒と重複している。その関係は、明確に土層断面等で検討できなかったが、住居56bとcとは第143図土層断面図A—A'においても、明確な前後関係を把握できなかったのである。また、住居56aとcとは、検出段階で住居56aがcに切られていることを確認している。

竪穴住居56aは、長さ100cmほどがL字形に検出し、壁帯溝は、認められていない。

竪穴住居56bは、長さ580cmほどに鋸状に検出された。壁帯溝は、幅30cm前後、深さ7cmほどを測る。ピットは検出できているが、柱穴として用いられてと思われるのはピットf~hである。土器は、第143図に示した壁帯溝側に2ヵ所に土器溜り状に認められるが、同図の土層断面図B—B'のごとく、上方からの流れ込みとして検出されている。石器は、住居の南コーナーよりの壁帯溝の壁側に第146図に示すようにまとめて置かれていたのである。この、検出の状態からデポとして認識しても妥当と判断される。断面図では、石器と壁帯溝との間に空間がある。これは、柔らかく掘りやすい花崗岩風化土を基盤としている関係から、土層断面作成時における面と掘り上げ段階での面が異なることから起因している。

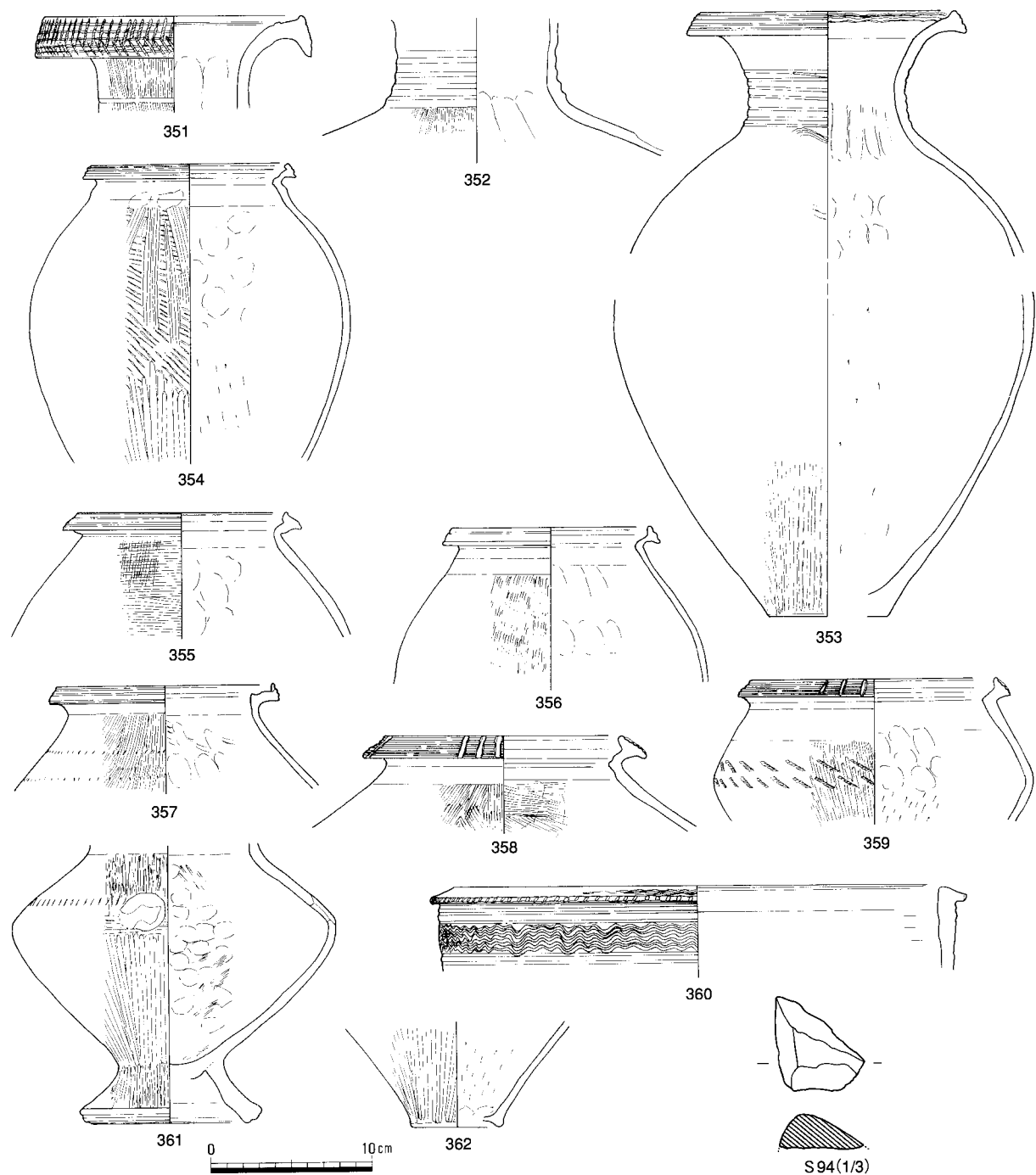
出土遺物(第144~147図)は、第143図土層断面図B—B'において示された土器と143図に示された部分が主体を占める。351は、Ⅲc区の住居62埋土、住居65及び66c上に認められた集石部分から検出された破片が接合できたのである。S96~S112は、サヌカイト製のU.Fとスクレイパーでありデポとして検出されたが、S95は150cmほど離れた壁帯溝付近から出土している。

351は、口径16cmを測る壺である。文様は、口縁部内面に凸線を施文している。352は、直口を持つ壺である。頸部には、凹線文を施文する。353は、口径17.7cm、底径7.3cmを測る壺である。同一個体であるが、接合部が認められていないことから、作図で復元している。354は、口径12.2cmを測る



第143圖 豎穴住居56・57 (1/60・1/30)

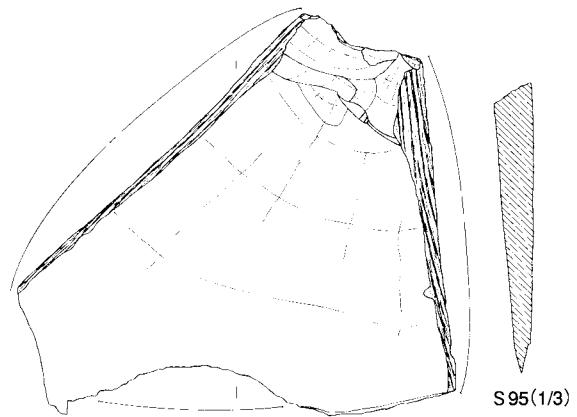
甕である。頸部下には、強いヨコナデによる凹凸が形成される。外面調整は、頸部から胴部最大径下
 辺りまでナナメのタタキ後タテハケを施している。**355**は、口径13cmを測る甕である。口縁部は「く」
 の字状に屈曲し、端部を上下方に拡張する。**356**は、口径12.2cmを測る甕である。文様は、口縁部外
 面の先端より凹線を施文する。**357**は、口径13.5cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、
 端部上端に粘土を足し、上方に拡張する。**358**は、口径14.6cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状
 に屈曲し、端部を斜め上下方に拡張する。**359**は、口径15.2cmを測る甕である。内面調整は、ナデと
 押圧で、胴部屈曲辺りは強い押圧を施し、以下タテハケであるが、ケズリのように砂粒の移動痕が観
 察される。**360**は、口径30.2cmを測る台付鉢である。口縁端部は、外側に張り出す。**361**は、台径



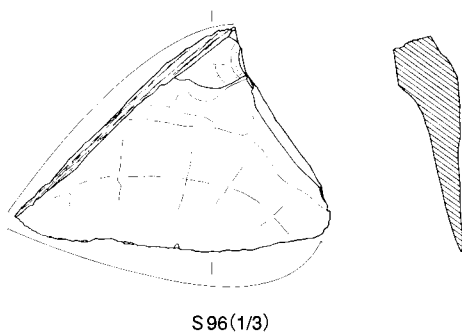
第144図 竪穴住居56出土遺物1 (1/4・1/3)

9.8cmを測る台付鉢である。台端部は、肥厚気味にする。外面調整は、胴部最大径辺りまでタテハケ後タテヘラミガキで胴部最大径部分にはヨコヘラミガキ、以下タテヘラミガキを施している。内側からの穿孔が行われている。362は、底径5.6cmを測る底部片で、底部は凹んでいる。

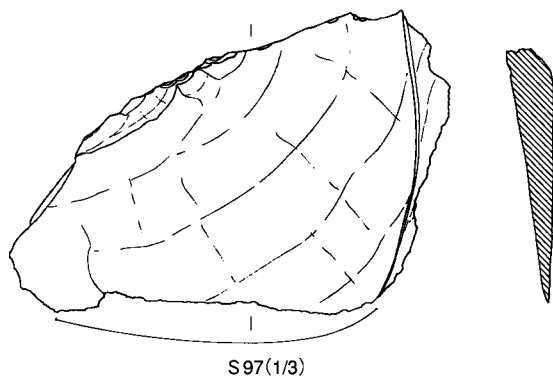
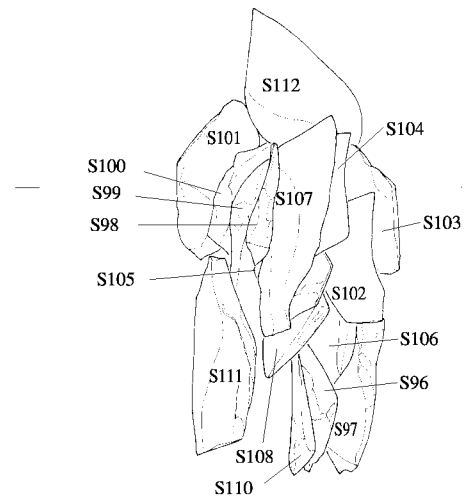
S94は、結晶質流紋岩製の磨製石斧の小片と考えている。S95は、長さ173.5mm、幅159.5mm、厚さ25.0mm、重さ471.93gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。S96は、長さ125.0mm、幅89.0mm、厚さ24.0mm、重さ135.89gを測るU.Fである。側面に自然面を残し、一部使用部分が観察される。S97は、長さ175.0mm、幅121.0mm、用厚さ22.5mm、重さ293.3gを測るU.Fである。一部使用部分が観察され、側面に磨滅が認められる。S98は、長さ96.0mm、幅70.0mm、厚さ19.0mm、重さ90.25gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。S99は、長さ126.5mm、幅91.0mm、厚さ20.0mm、重さ130.23gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。S100は、長さ106.0mm、幅67.0mm、厚さ14.0mm、重さ84.37gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。S101は、長さ117.5mm、幅98.0mm、厚さ15.0mm、重さ154.4gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。S102は、長さ101.0mm、幅72.5mm、厚さ9.0mm、重さ67.59gを測



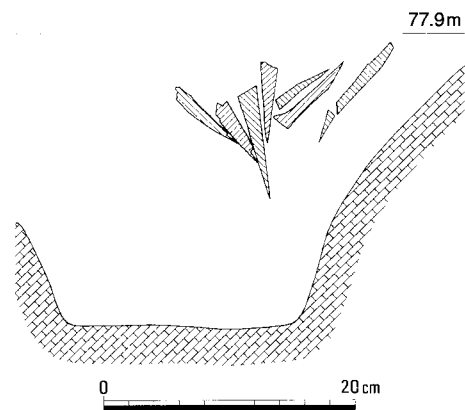
第145図 竪穴住居56出土遺物 2 (1/3)



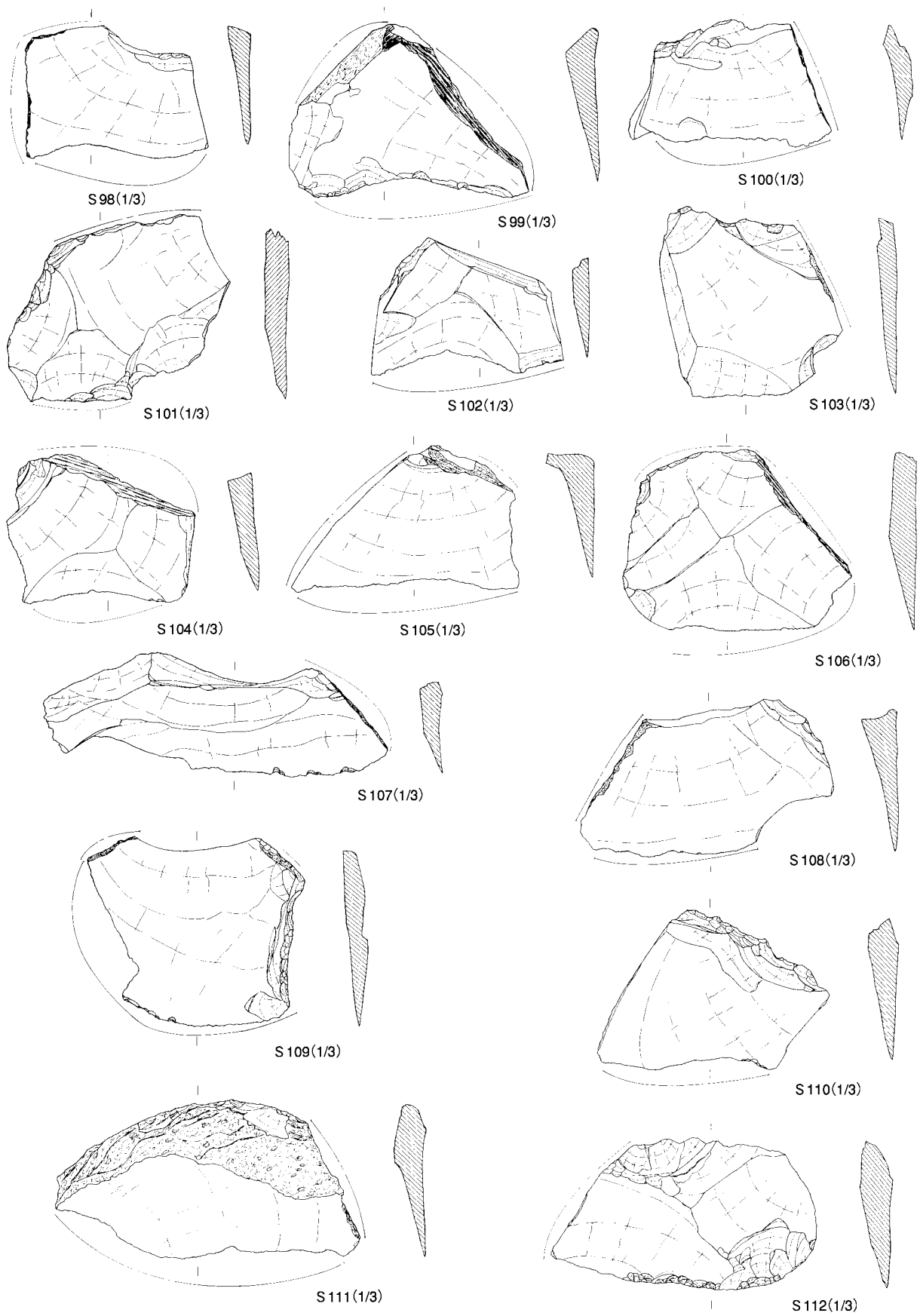
S96(1/3)



S97(1/3)

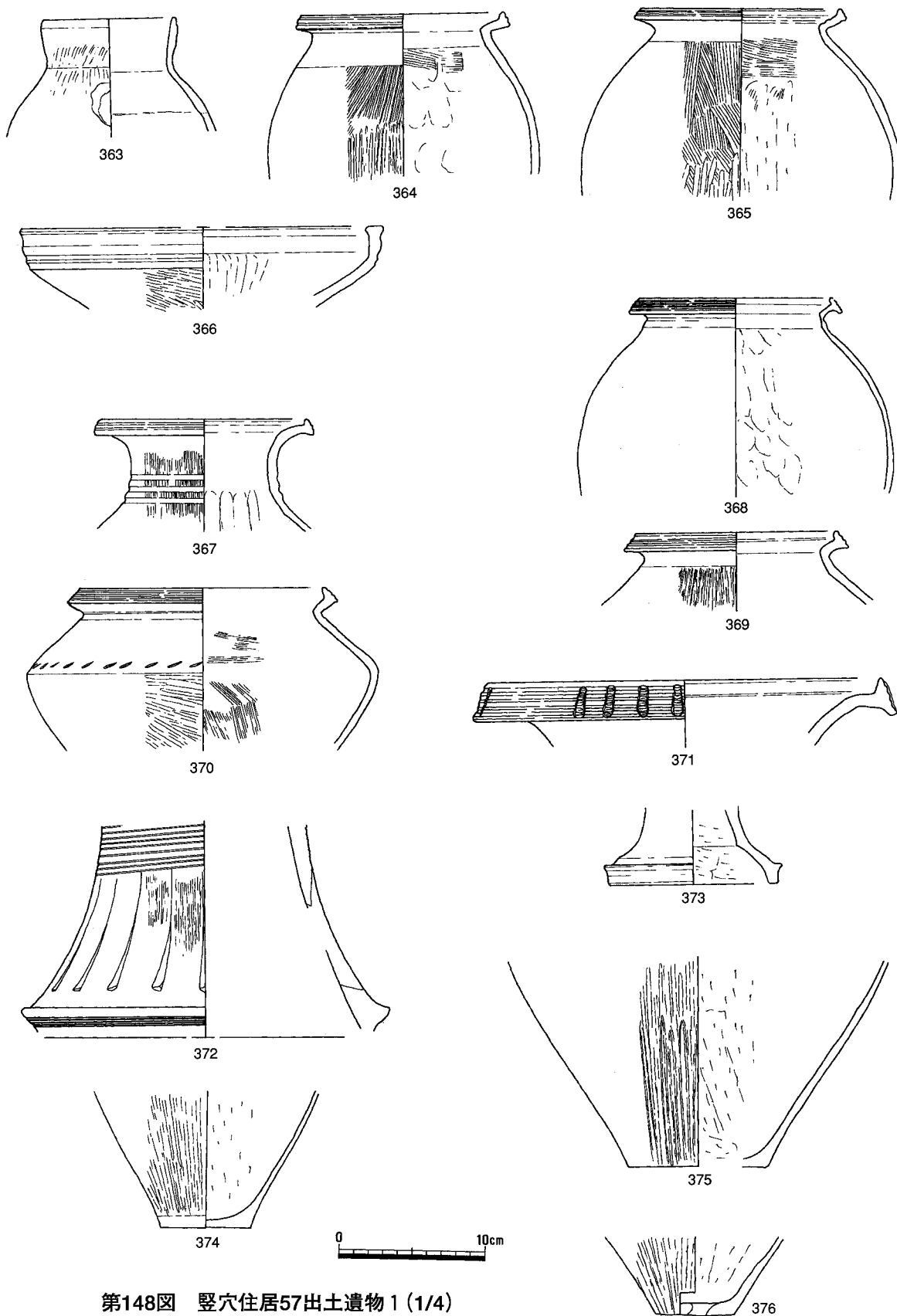


第146図 竪穴住居56内集石遺構(1/6)・出土遺物 1 (1/3)



第147図 竪穴住居56内集石遺構出土遺物 2 (1/3)

るU.Fで、一部使用部分が観察される。S103は、長さ101.0mm、幅99.0mm、厚さ11.0mm、重さ102.12gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。S104は、長さ99.0mm、幅79.0mm、厚さ16.0mm、重さ91.27gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。S105は、長さ



第148図 竪穴住居57出土遺物1 (1/4)

120.0mm、幅77.0mm、厚さ25.0mm、重さ100.36gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。**S106**は、長さ120.0mm、幅95.0mm、厚さ15.0mm、重さ172.34gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。**S107**は、長さ181.5mm、幅65.0mm、厚さ13.0mm、重さ131.23gを測るU.Fで、自然面を残している。**S108**は、長さ133.5mm、幅82.0mm、厚さ20.0mm、重さ144.23gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。**S109**は、長さ114.5mm、幅100.0mm、厚さ18.0mm、重さ143.12gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。**S110**は、長さ121.5mm、幅84.0mm、厚さ19.0mm、重さ137.92gを測るU.Fで、一部使用部分が観察される。**S111**は、長さ160.5mm、幅83.5mm、厚さ19.0mm、重さ181.85gを測るU.Fである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。**S112**は、長さ138.5mm、幅79.0mm、厚さ16.5mm、重さ162.90gを測るスクレイパーである。自然面を残し、一部使用部分が観察される。これらの、石器は接合を試みたが、その関係に有るものは認められなかった。

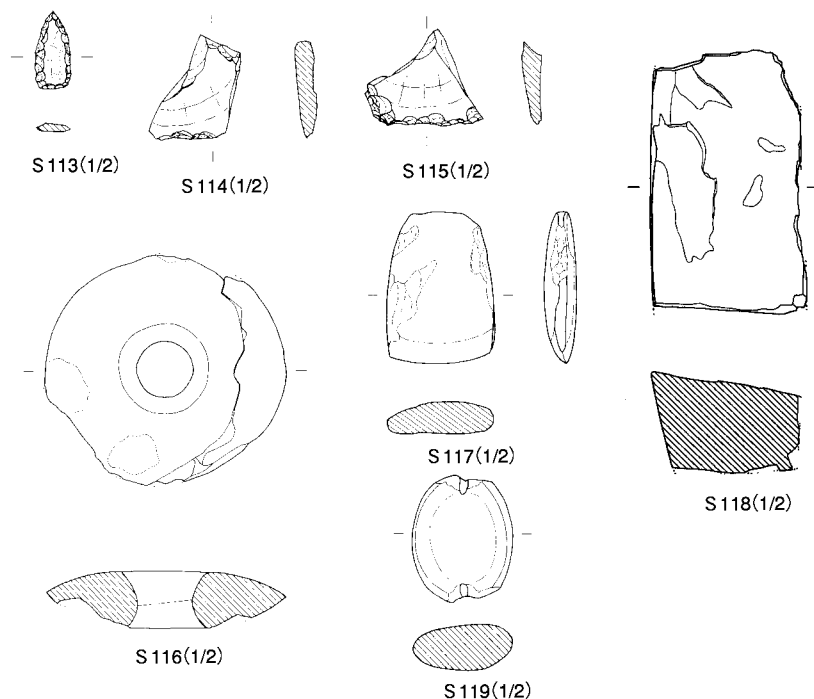
竪穴住居56cは、長さ560cmほどに鋸状に検出された。壁帯溝は、幅25cm前後、深さ6cmほどを測る。当該住居に伴うと思われるピットは、全く確認することができなかった。

竪穴住居57 (第143図)

竪穴住居57は、住居55の南西側に位置し、4軒と重複している。それらの住居との関係は、第143図の土層断面図A—A'で住居56cの貼り床がなく、住居57の検出段階と覆土掘り下げの過程において、ピットなどは確認することができなかったのである。このようなことから、当該住居が最も新しくなると判断している。規模は、 $420 \times 36 + a$ cm、壁の高さ50cmを測るが、北西辺は丘陵斜面の関係から消失している。柱穴は、ピットl～oの4本である。ピットnは、検出レベルが他と異なり低い位置になっている。これは、第143図に図示している一点破線が、第一次調査のトレンチによるものである。中央穴の規模は70×75cm、深さ55cmを測り、形態はほぼ円形を呈する。中央穴の両側には、深さ25cmと15cmの小ピットが存在する。火処と考えられる焼土面は、中央穴の南東側に2ヵ所認められている。

出土遺物(第148・149図)

は、土器の**363～366**と**374・375**が埋土であり、他はプラン検出途上で出土したものである。石器は、**S113**が床面直上、**S116**が床面より17cmの埋土中、**S117**が床面より1cm上、**S118**が床面より3cm上でそれぞれ検出されている。そのほかのものは、埋土中からである。**363**は、口径9cmを測る壺であるが、把手が付されていたようで、とれた痕跡が残されている。把手



第149図 竪穴住居57出土遺物 2 (1/2)

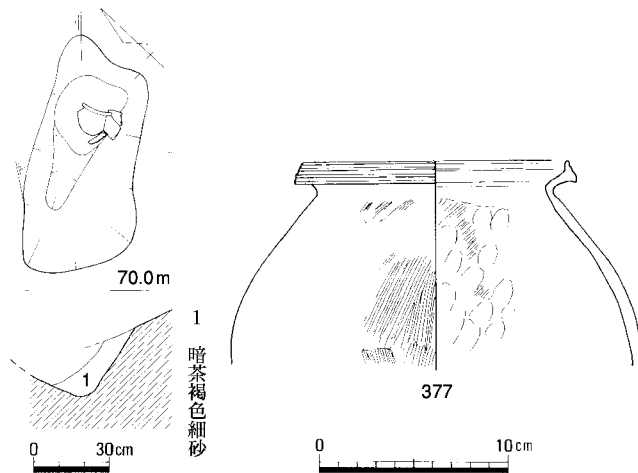
は差し込み式ではなく、貼付けによる。364は、口径13.8cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。365は、口径13.6cmを測る甕である。口縁部内面には、強いヨコナデによる凹凸が形成される。366は、推定口径24.6cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から上方に立ち上がり、口縁端部を張りだし気味に肥厚させる。367は、口径13.9cmを測る壺である。頸部は短く弓状に外反し、口縁端部を上下方に拡張する。368は、口径13.2cmを測る甕である。頸部下には、強いヨコナデによる凹凸が形成される。369は、口径13.8cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。370は、口径13.2cmを測る甕である。頸部下には、強いヨコナデによる凹凸が形成される。371は、推定口径26.8cmを測る器台である。372は、推定台径22cmを測る台部片である。透かし穴は、貫通しているかの有無は、小片のため不詳である。373は、台径11.4cmを測る台部片である。374～376は底部片で、376が焼成後の穿孔が見られる。

S113は、長さ20.5mm、幅9.5mm、厚さ2.5mm、重さ0.5gを測るサヌカイト製の石鏃である。S114は、長さ24.5mm、幅28.0mm、厚さ6.0mm、重さ3.26gを測るサヌカイト製のR.Fである。S115は、長さ31.0mm、幅26.0mm、厚さ5.0mm、重さ3.38gを測るサヌカイト製のR.Fである。S116は、外径95mm、円孔22.5mm、厚さ22.0mm、重さ201.91gを測る流紋岩製の環状石斧である。全体的に非常に、丁寧に研磨されている。検出時は、近接して5～6の破片の状態を確認される。完全に復元するだけの破片は、出土していない。S117は、長さ60.5mm、幅42.5mm、厚さ12.0mm、重さ56.78gを測る流紋岩(熔結凝灰岩)製の扁平片刃石斧である。S118は、長さ104.5mm、幅61.5mm、厚さ31.0mm、重さ397.38gを測る流紋岩製の砥石である。一部は欠失しているが、全面に使用痕を認める。S119は、長さ50.5mm、幅40.0mm、厚さ19.0mm、重さ53.16gを測る閃緑岩製の石錘である。

土壌28 (第150図)

土壌28は、住居52の南西端に、住居52eと重複して位置する。規模は、42×94cm 深さ20cmほどを測る。住居52eとは、調査時の土層観察で、当該土壌が新しくなることを判断している。

出土遺物(第150図)は、377の口径14cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上方に拡張する。文様は、口縁部外面に3本の凹線文を施す。外面調整はタテハケ、内面には押圧とハケが認められる。



第150図 土壌28(1/30)・出土遺物(1/4)

土壌29 (第151図)

土壌29は、住居54の北側に位置する。規模は160×260cm、深さ30cmほどを測る。形態は方形を呈するが、壁のプランは一定しない。

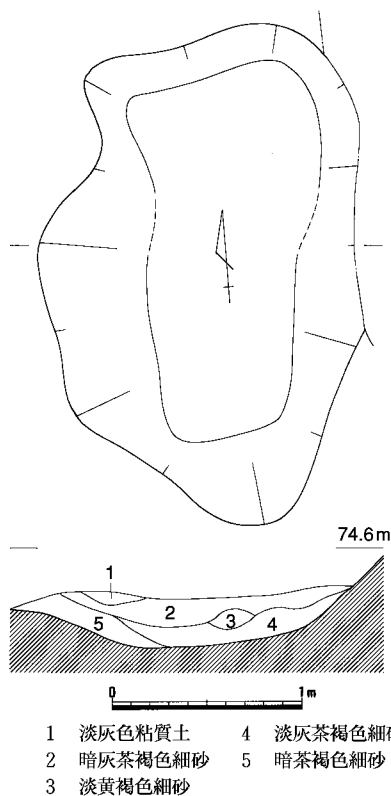
土壌30 (第152図)

土壌30は、住居54の南側に重複して位置する。住居54aとの関係は、当該土壌が住居を切っていることを確認している。規模は、260×355cm、深さ40cmほどを測る。形態は、不整楕円形を呈する。第152図の断面図においては、第2と3層の埋土に第1層が、北西側に基盤層を掘り広げた状況が観察でき

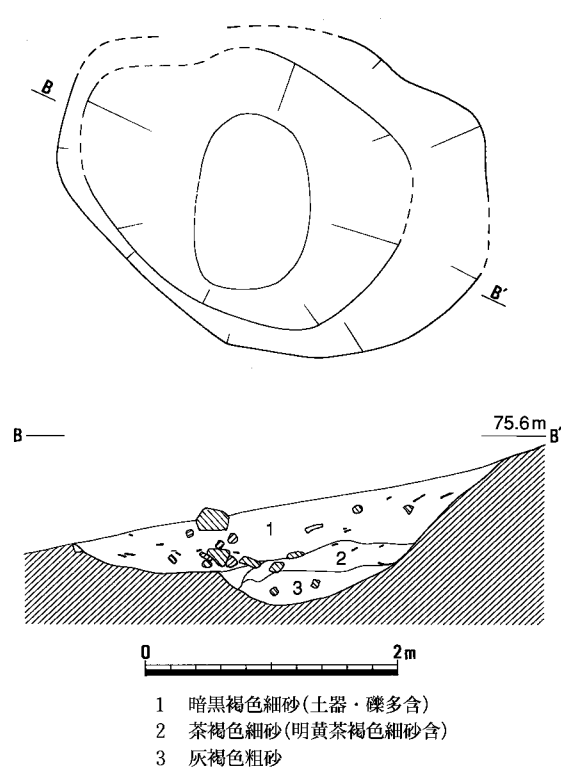
る。しかしながら、平面におけるプランの検出においては、そのような内容は把握されなかったのである。したがって、単独の土壌として報告する。

出土遺物(第153図)は、土器と石器とも埋土中からの出土である。378は、口径15cmを測る壺である。379は、口径14cmを測る壺である。頸部が外方に開き、端部がさらに屈曲し、その端部を上下に拡張する。380は、口径19.8cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文を施文する。381は、口径11.8cmを測る壺である。外面調整は頸部下にタテハケ後タテヘラミガキ、内面には頸部下にヨコヘラケズリが認められる。382は、壺である。頸部凹線文は、重複する部分があるが独立線である。383は、口径13.4cmを測る壺である。外面調整は、頸部にヨコヘラミガキを行っている。384は、口径19.5cm、器高11.6cm、脚径9.2cmを測る高杯である。裾部には、貫通しない透かしを6個施している。385は、口径17cmを測る甕である。外面調整は斜めのタタキ後粗いタテハケ、内面は押圧後にナデを施している。386は、高杯の柱状部である。文様は、螺旋による篋描沈線文が施文される。387は、台径12cmを測る台部片である。台端部は、外側に張りだしている。388は、底径5.4cmを測る平底の底部片である。389は、台径24.4cmを測る器台である。台端部は肥厚し、外側に張りだしている。裾側の凹線文は、螺旋により描いていることが窺われる。390は、口径30.4cmを測る器台である。口縁端部は平坦面をつくり、さらに下方に大きく垂下して拡張する。

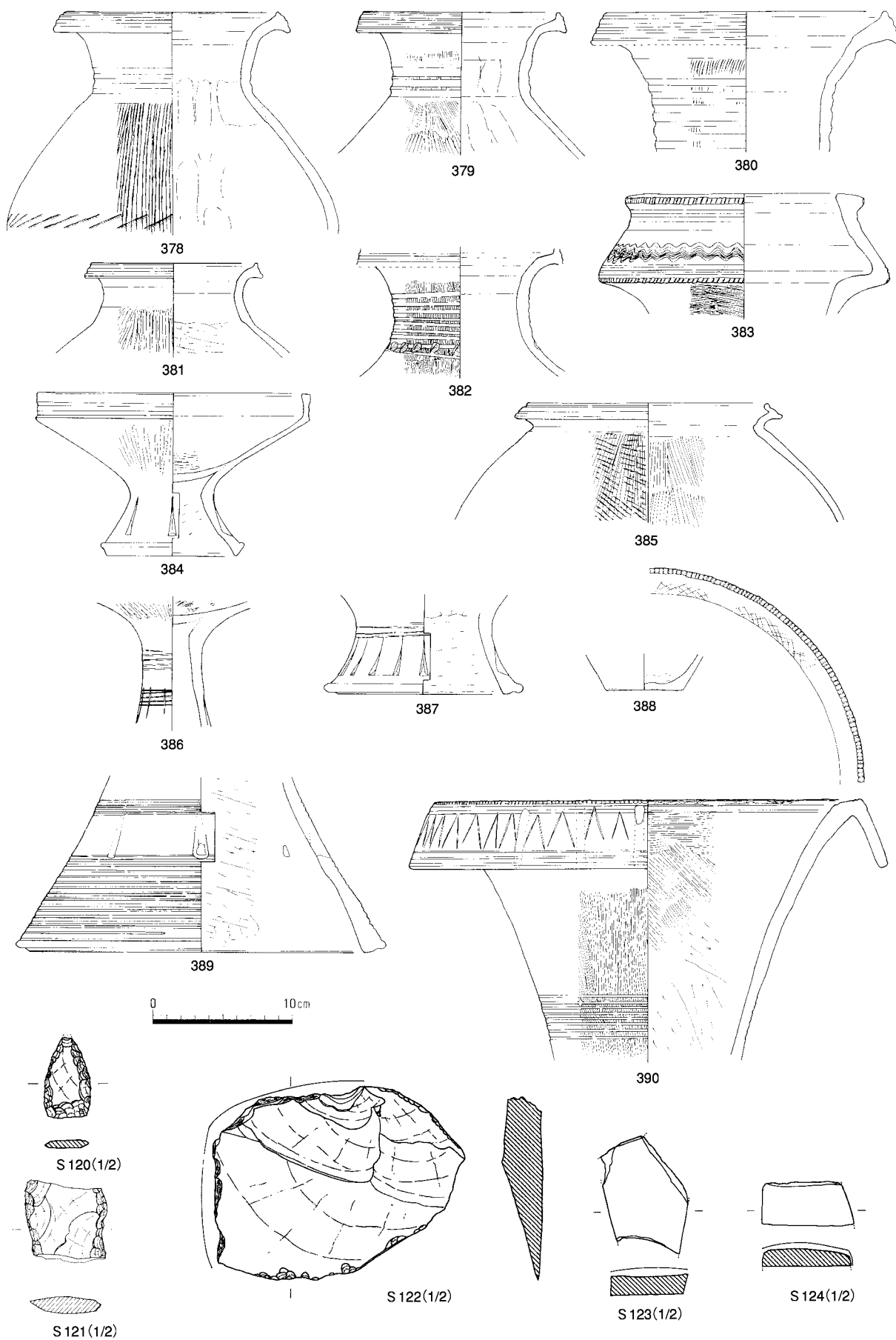
S120は、長さ28.5mm、幅16.5mm、厚さ3.3mm、重さ1.85gを測るサヌカイト製の石鏃である。S121は、長さ29.5mm、幅30.0mm、厚さ6.0mm、重さ7.69gを測るサヌカイト製の楔である。S122は、長さ90.0mm、幅69.0mm、厚さ17.0mm、重さ87.81gを測るサヌカイト製のスクレイパーである。S123とS124は、流紋岩製の砥石である。



第151図 土壌29(1/40)



第152図 土壌30(1/60)

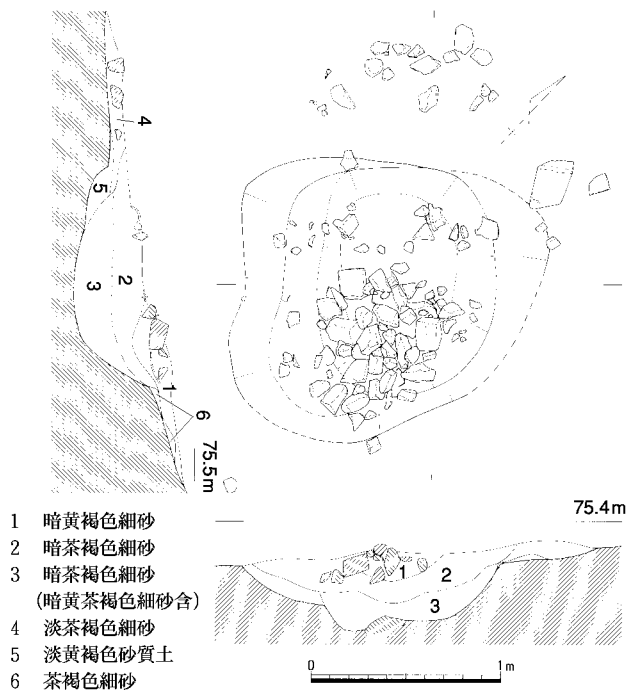


第153図 土境30出土遺物(1/4・1/2・1/3)

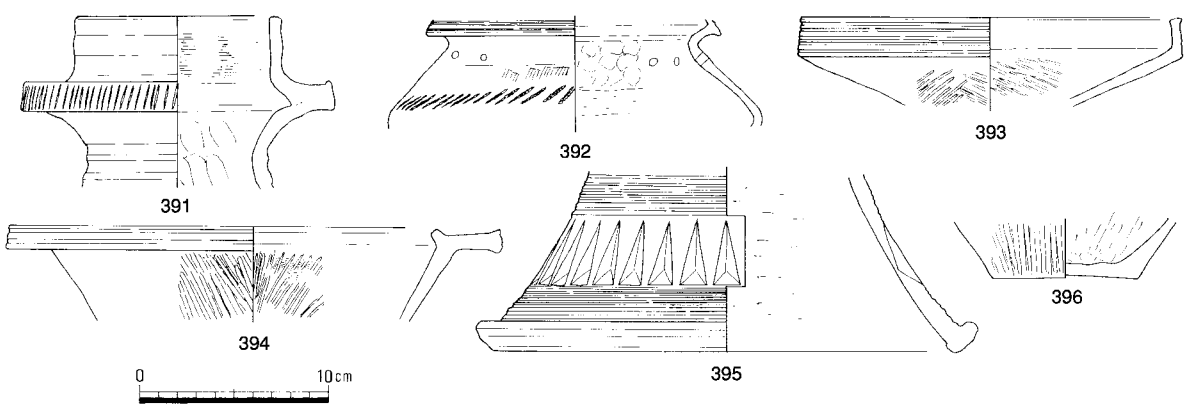
土壌31 (第154図)

土壌31は、住居57の北下方に位置する。規模は規模は149×157cm、深さ40cmほどを測る。形態は、不整形を呈する。土壌は、第154図に示した土層断面図などから土壌の重複が思考されるが、単一の土壌として扱っている。

出土遺物(第154図)は、391～396であり、いずれも土壌埋土中からであるが、395は土壌検出段階での出土である。391は、口径10.8cmを測る壺である。口縁部は、外反する頸部端を折り返し、上方に長く立ち上がる。したがって、折り返し部分が突帯状となる。文様は、突帯部分にキザミ、頸部には凹線文を施文している。内面調整は、口縁部にハケ状工具のナデ、頸部にもナデが施される。392は、口縁端部を欠失している甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁端部外面に凹線文の施文、肩部下半に刺突文を施している。頸部下には、2個対の円孔が認められる。外面調整は頸部下にタテハケ、内面には頸部から肩部に押圧、以下ヨコヘラケズリを施している。393は、口径20cmを測る高杯である。口縁部は、杯部を上方に拡張し、端部を肥厚気味にする。文様は、口縁部外面に5条の凹線文を施文する。外面調整は多角形のヘラミガキ、内面は斜めのヘラミガキを施している。394は、口径19.2cmを測る高杯である。口縁端部には、鏝を付している。文様は、鏝外面に2条の凹線文を施文する。外面調整はタテヘラミガキ、内面はヨコハケ後タテヘラミガキを施している。395は、台径24cmを測る器台である。台端部は、斜め上下に拡張する。文様は、裾部に2段、台端部外面に2条の凹線文を施文している。また、裾部の凹線文の間には、三角形の透かしを施し、一部にわずかに貫通しているものも認められる。内面調整は、ヨコヘラケズリを施している。396は、底径7.8cmを測る底部片である。底部は、上げ底気味を呈する。外面調整はタテヘラミガキ後ナデ、内面はタテヘラケズリで底面に指押えが認められる。



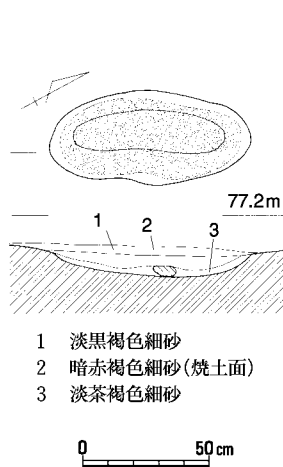
- 1 暗黄褐色細砂
- 2 暗茶褐色細砂
- 3 暗茶褐色細砂 (暗黄茶褐色細砂含)
- 4 淡茶褐色細砂
- 5 淡黄褐色砂質土
- 6 茶褐色細砂



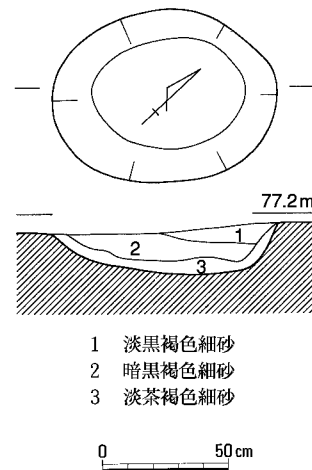
第154図 土壌31(1/40)・出土遺物(1/4)

土壙32 (第155図)

土壙32は、住居55の北西下方に位置する。規模は、37×79cm、深さ11cmを測り、形態は楕円形を呈する。土壙は、第155図の土層断面に示すように、第2層の暗赤褐色細砂が焼土となる。このことから、焼土土壙と呼んだほうが妥当とも考える。このことから、住居55の火処と思われたが、床面との高低差が100cm以上あることから単独のものとしたのである。



第155図 土壙32(1/30)



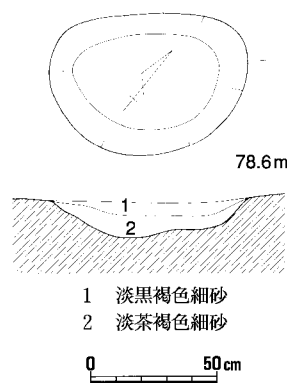
第156図 土壙33(1/30)

土壙33 (第156図)

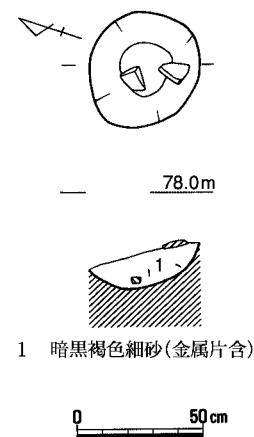
土壙33は、住居55bの南西側に位置する。規模は、69×89cm、深さ17cmを測り、形態は円形を呈する。

土壙34 (第157図)

土壙34は、住居56の東コーナー上方に位置する。規模は、56×78cm、深さ14cmを測り、形態は円形を呈する。



第157図 土壙34(1/30)



第158図 土壙35(1/30)

土壙35 (第157図)

土壙35は、住居55の南東の壁際に位置する。規模は、43×48cm、深さ17cmを測り、形態は円形を呈する。土壙は、平面での作業においてその存在を認識してい

なかったのである。土壙が確認することができたのは、第141図土層断面図A—A'の土層断面の土手中である。これと同様に土壙36もこの断面図において認識されたことから、作図後に平面での検出を行ったのである。その結果、土壙36の土器溜りの中に、土器の認められない円形部分を確認する。これが、土壙35の平面プランでの検出である。土壙は、深さ17cmを測る間に土器溜りの土器があるにもかかわらず、それは認められなかったのである。その掘り下げ中に、木の鬚根と思われた長さ2cm前後で極めて細い物質を確認したのである。当初は、木の鬚根と思い折ろうとしたが、折れることなく曲がるのである。さらに、この形状以外に、幅1mm前後の物も検出される。形状は異なるが、色調はいずれも緑青状を示すことから同質のものと判断したのである。このようなことから、土壙の埋土を持帰り洗浄した結果1.34g*を採取したのである。

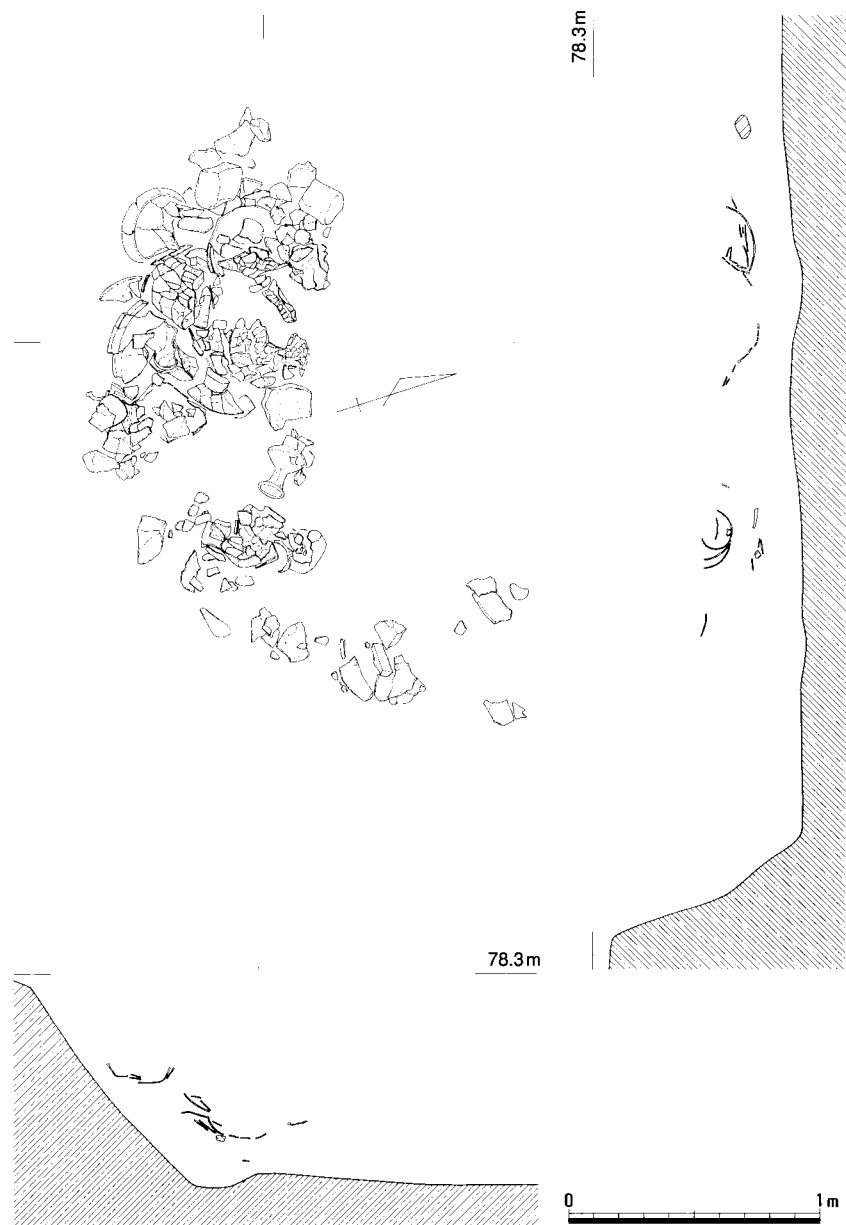
土壙の時期は、先の土層断面図A—A'に示されるように、第4層の土壙36が住居55aの埋土を掘り込んで設けられている。さらに、この土壙を切って第11層の土壙35を穿っている。その後、第1と3層がその上に堆積するのである。このことから、土壙36が埋まったか埋まらないうちに、当該土壙が掘られたと判断しても妥当とおもわれるのである。なお、土壙内には、焼土や炭等は認められなかった。さらに、ビニール等を想定できる熔解物は、調査時及び洗浄段階においても認めることはなかったのである。

土壌36 (第159図)

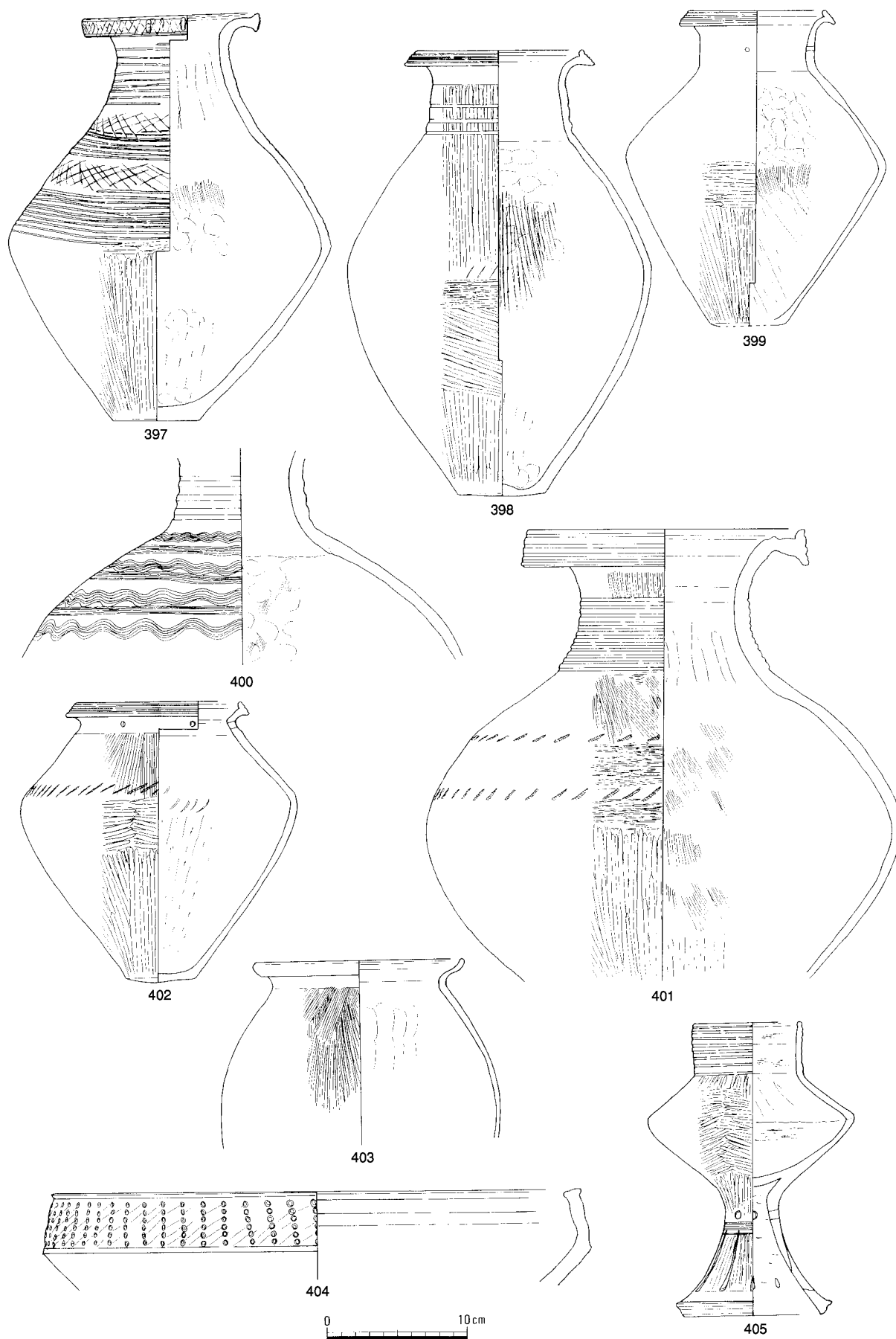
土壌36は、住居55の南東の壁際に位置する。規模については、土器の分布範囲が160×230cm、深さ30cm前後を測る。土壌は、平面での作業においてその存在を認識していなかったのである。土壌が確認することができたのは、第141図土層断面図A—A'の土層断面の土手中である。この段階ですでに土手を除いた部分は、掘り下げをほぼ終わり住居内の土器溜りと判断していたのである。しかし、この断面観察の結果、土壌であることが認識されたのである。このようなことから、当該土壌の平面プランを確認することはできなかったのである。

出土遺物(第160・161図)は、397～411である。397は、口径12.4cm、底径6cm、器高28.7cmを測る壺である。口縁部は、水平に屈曲し、端部を上下に拡張する。胴部最大径は下位にあり、底部は平底となる。頸部から胴部には、3段にわたり螺旋による凹線文を施している。398は、口径11.7cm、底径6.2cm、器高31.6cmを測る壺である。底部は、丸みを持って張りだしている。内面調整は、胴部下方にはタテヘラケズリ、底面に押圧が認められる。

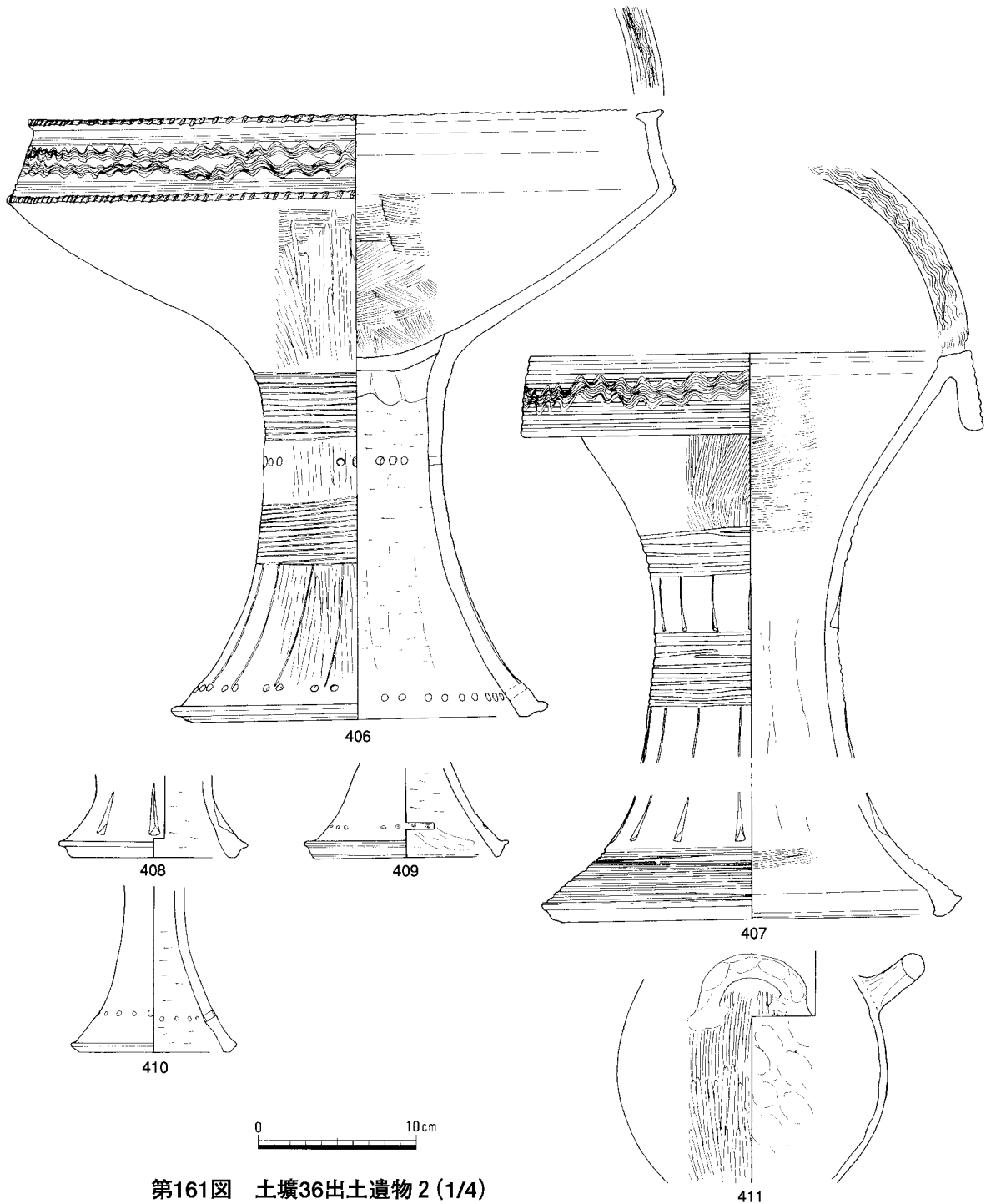
399は、口径9.5cm、底径5.4cm、器高22.3cmを測る壺である。底部は、丸みを持って張りだしている。内面調整は、肩部から胴部中ほどに押圧後タテハケで、胴屈曲部以下にタテヘラケズリを行っている。400は、壺の頸部から胴部上半の破片である。401は、口径19.4cmを測る壺である。凹線文の施文内容は、上から下に凹線を施したことが、上の凹線文の施文時に出た粘土のはみ出しが下の凹線文に被る。さらに、頸部については、2本単位で施文した後ナデを施している。402は、口径11.7cm、底径5cm、器高19.8cmを測る甕である。内面調整は、胴屈曲部から底部にかけタテヘラケズリを行っている。403



第159図 土壌36(1/30)



第160図 土壙36出土遺物1 (1/4)



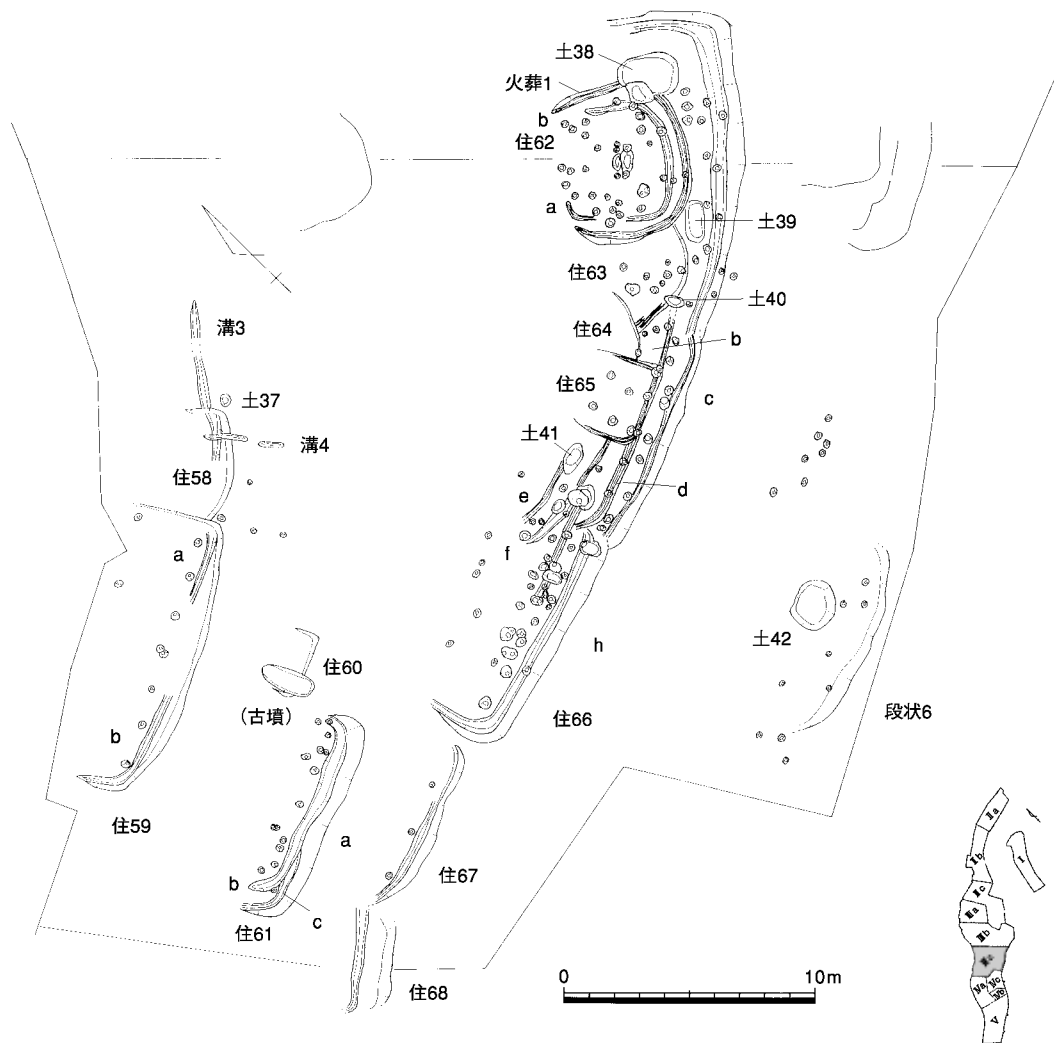
第161図 土壙36出土遺物 2 (1/4)

は、口径14.7cmを測る甕である。口縁部は、頸部が屈曲して外反し、受け口状となる。**404**は、口径37cmを測る台付鉢である。口縁端部は、張り出し気味に拡張する。**405**は、口径7.8cm、台径10cm、器高20.7cmを測る台付壺である。**406**は、口径40cm、脚径5cm、器高19.8cmを測る高杯である。裾端部は、外に張り出している。**407**は、口径27.8cm、台径24.2cm、推定器高35.5cmを測る器台である。口縁端部は、筒部と裾部の透かしは、貫通していないのである。**408**は、台径10.5cmを測るの台部片である。台端部は、肥厚して端面にナデの凹みを認める。文様は、貫通しない透かしが施される。**409**は、脚径11cmを測る高杯の脚部片である。**410**は、脚径9.2cmを測る高杯の脚部片である。文様は、貫通する円形の透かしを施している。**411**は、把手部分の破片である。把手は、貼付けによる。

7 III c 区の調査

III c 区の調査区は、III b 区が谷のほぼ中央部分に当るのに対し、当該調査区は尾根が張り出す斜面側に相当する。遺構は、これまでのように連続して、展開して行くことはなくなる。このことは、谷の埋積土が花崗岩風化土中に角礫が多く含まれる土は、雨が降ると幾つかの筋の溝となり流れ、止んだ後もしばらくは水が湧き出る状況である。さらには、乾燥すると人的な掘削具は、全く歯が立たないのである。したがって、III b 区におけるこの部分に遺構が希薄と思考される背景である。そして、このような堆積土が認められない III c 区に、新たに住居を造りはじめるのである。なお、段状遺構6と住居66との間にあるピットの穿たれている地点は、斜面角度がきつく、斜面に手を突かなければ身体の保持ができない状態であった。

遺構は、3段にわたり認められるが、海拔85mに所在する段状遺構は、非常に脆い花崗岩に相当するところであり、自然崩壊が認められるものである。その下段の海拔75m付近は、まだ上層の基盤の状態であるが、北東側の谷部に近くなると再堆積土となる。そして、最下段には、谷と同じ花崗岩風化土の再堆積土が認められるのである。



第162図 III c区遺構配置図(1/300)

竪穴住居58 (第163図)

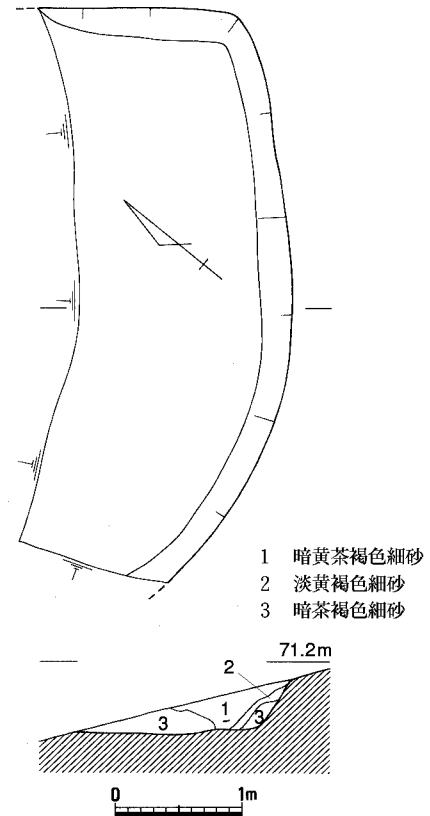
竪穴住居58は、Ⅲb区の住居53の西下方に位置し、住居59と溝3、4と重複している。規模は、長さ450cmにわたり、L字状に検出される。遺存の良いところで壁高は35cmを測るが、丘陵下方側になる北西辺は消失している。壁帯溝などは確認することはできなかったのである。

竪穴住居59 (第164図)

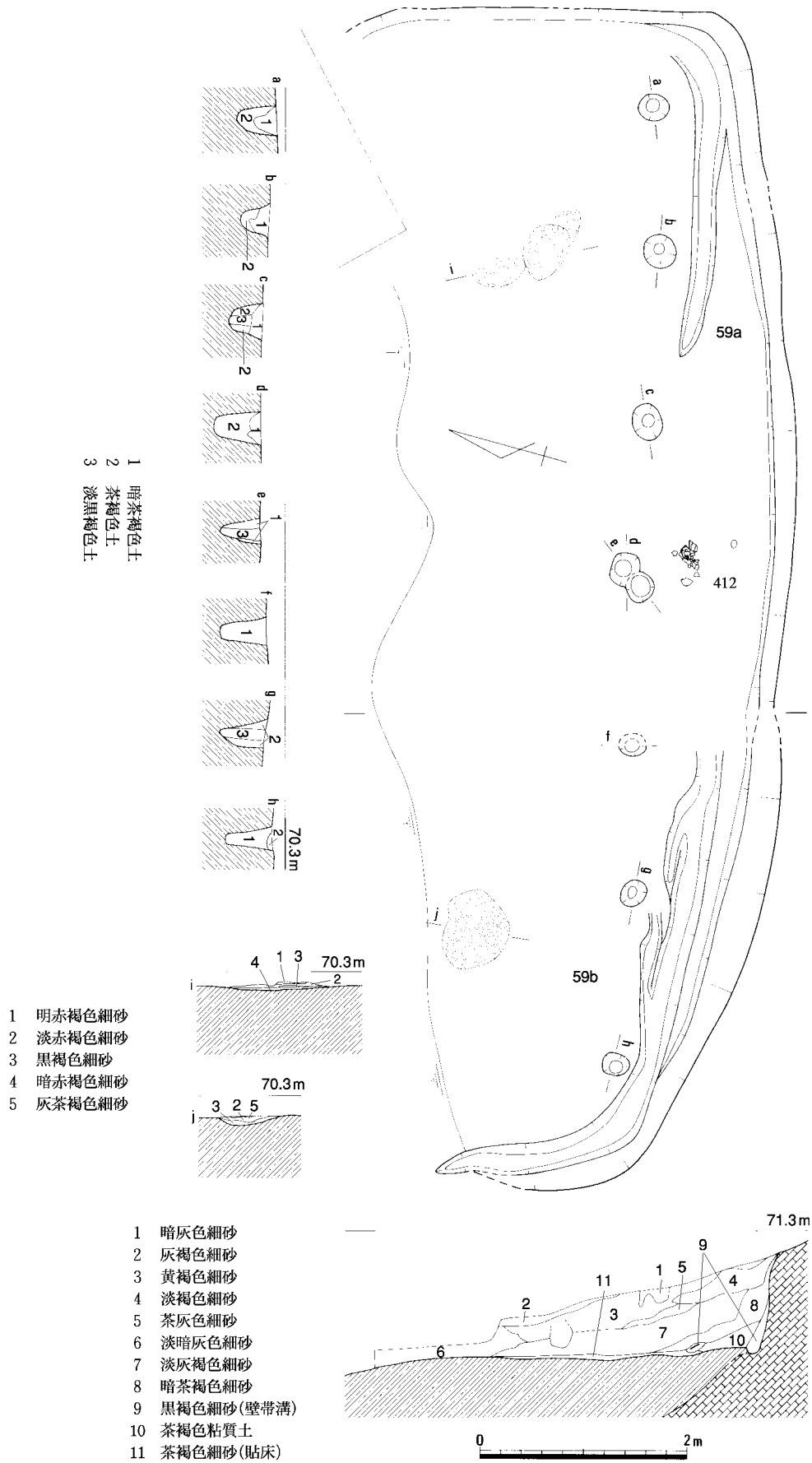
竪穴住居59は、住居61の北下方に位置する。規模は、長さ114cmの鋸状に検出され、丘陵斜面下方になる北辺は消失している。当該住居の壁高は、100cmを測るところがあり、遺存の状態は良いのである。プラン確認時においては、2軒の重複であると思わしたのである。このことは、第164図の平面図で土層断面の南側のポイントとなる部分が破線で表示をしているところで、重複していると判断したのである。したがって、この部分に土層観察用の土手を残し、プランの検出に努めたのである。しかしながら、確認時のプランと掘り下げながらのプランが一定しないのである。このことは、第164図の土層断面図においても、住居が重複しているという土層の変化は認められないのである。結果的には、床面の検出段階で、重複を想定される壁帯溝及びピットが検出されたのである。両住居の床面の差は、全く認められないのである。

竪穴住居59aは、東側にある壁帯溝とピットa～dと火処を伴うものである。ピットの土層断面においては、柱痕を認められなかったが、柱として用いられたと思われる。

出土遺物(第165図)は、土器の412が床面、413～425と石器のS126～S130が埋土中からである。先に記しているように重複が、確認できるまでの段階を含めている。なお、413は、住居61埋土中から接合破片を出土している。412は、口径18.4cmを測る高杯である。口縁端部に鏝を付し、端部が垂れ下がる。外面調整はタテヘラミガキ、内面はナデが認められる。413は、口径15cmを測る壺である。口縁部は、頸部が弓状に屈曲し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁端部外面に3条、頸部に5条の凹線文を施文する。胴部には、斜めの刺突文が認められる。外面調整は、頸部から胴部上半までタテハケ、刺突文からナナメハケを施している。内面は、頸部にヨコハケ、以下ナデが認められる。414は、口径18.7cmを測る壺である。口縁部は、端部を水平に外反させ、端部は上下に拡張する。文様は、口縁部内面に凹線文、櫛描波状文、円形浮文を施文する。口縁端部外面には、4条の凹線文と2段のキザミを施している。415は、推定口径13.6cmを測る壺であるが、台が付く可能性もある。口縁端部は、水平に拡張させる。文様は、口縁端面に2条の沈線を施文する。頸部には、円孔が認められる。外面調整はタテヘラミガキ、内面は押圧後ヨコハケを施している。416は、推定口径23.3cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁端部外面に4条の凹線文を施している。外面調整はタテハケ、内面にはヨコハケを行っている。417は、口径20.7cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から立ち上がり、端部に行くにしたがい肥厚させる。文様は、口縁

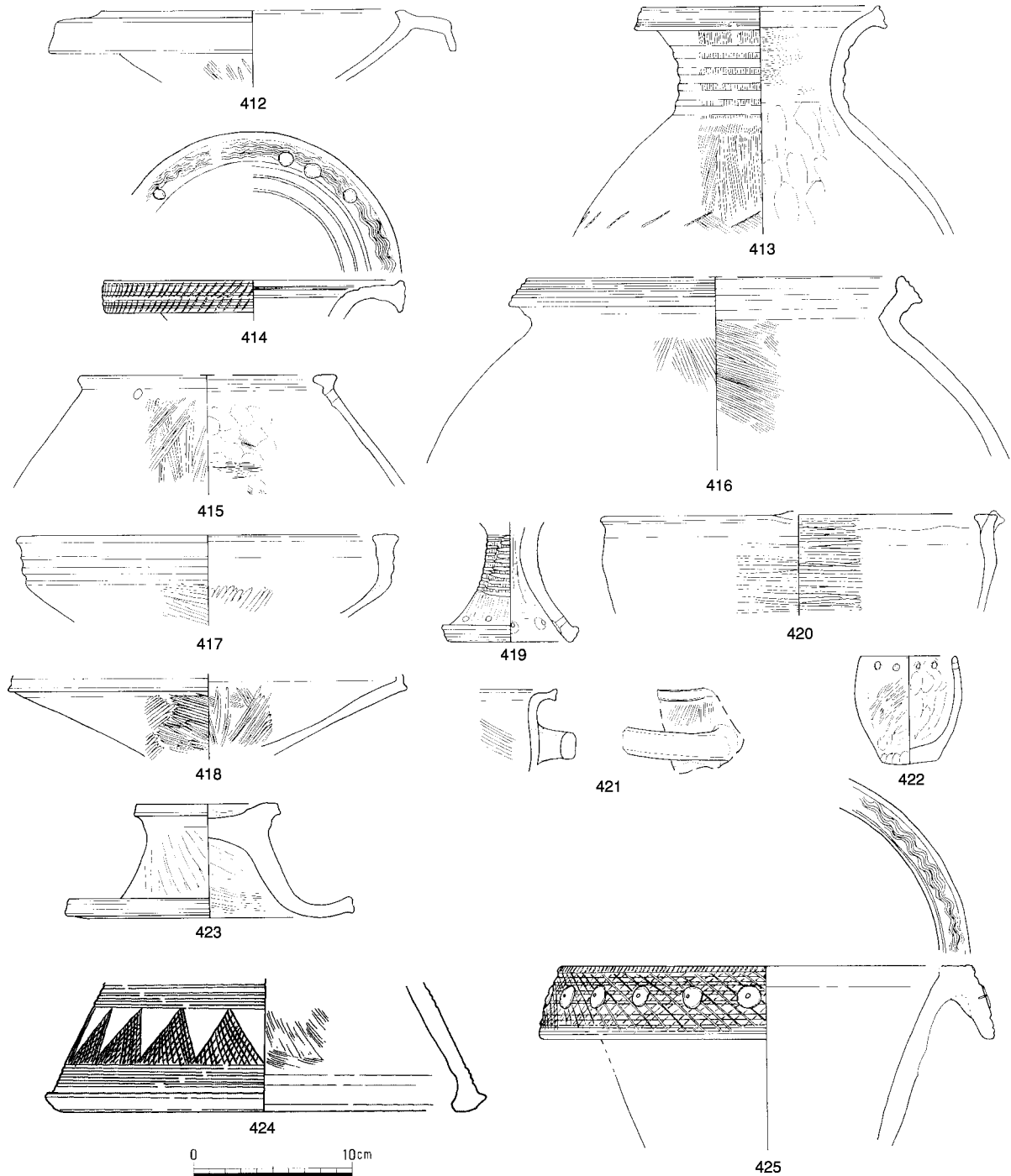


第163図 竪穴住居58(1/60)

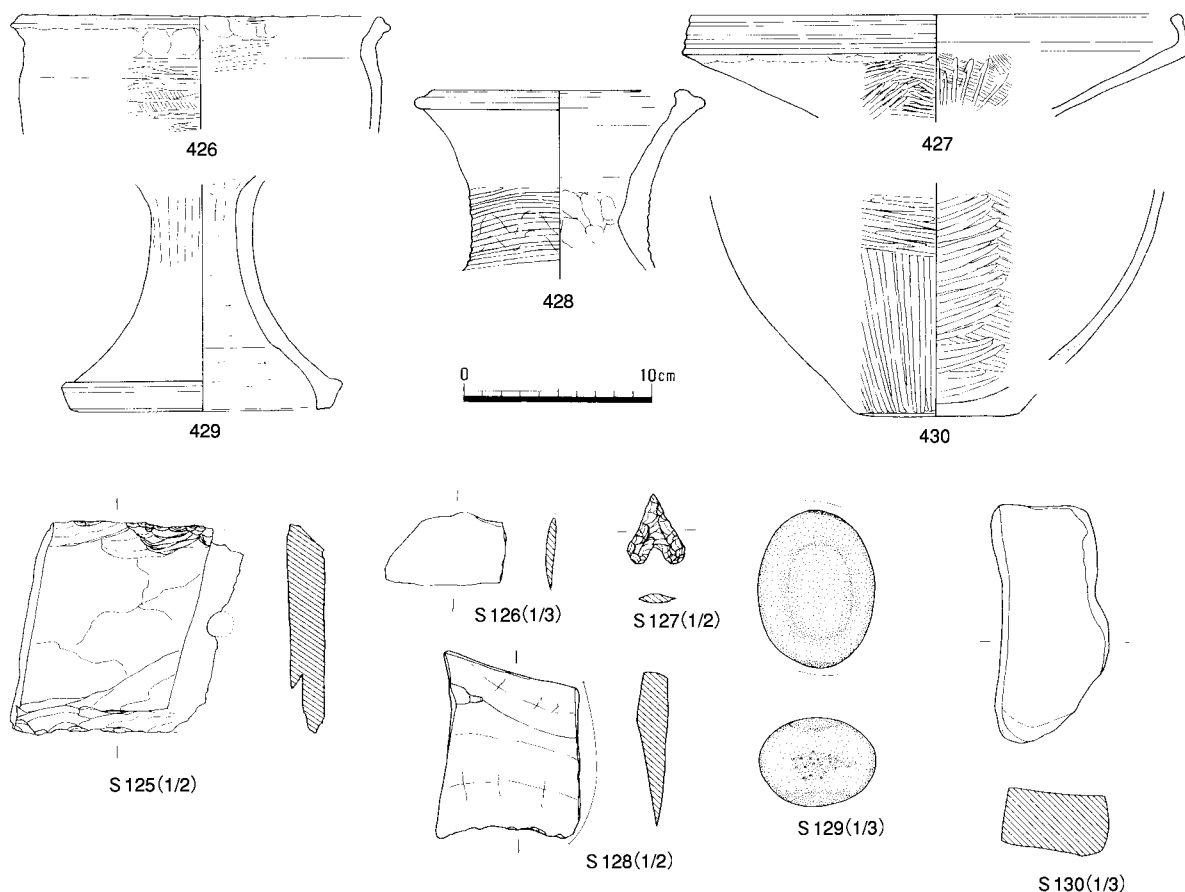


第164図 竪穴住居59(1/60)

部端面に2条と端部外面に3条の凹線文を施文する。調整は、内外面ともヘラミガキが認められる。**418**は、高杯の破片である。杯部外面調整は、多角形のヘラミガキである。**419**は、脚径7.6cmを測る脚部片である。裾端部は、上方に拡張する。文様は、脚柱部に10条、裾部外面に2条の凹線文を施文する。透かしは、貫通する円孔が9個認められる。外面調整はタテヘラミガキ、内面にはシボリ痕とヨコヘラケズリが行われる。**420**は、口径23.6cmを測る片口である。外面調整はナナメハケ後ヨコヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキを施している。**421**は、把手部分の破片である。口縁部は、水平方向に外反し、端部は拡張気味となる。把手は、差し込みで付されている。**422**は、口径5.3cm、底径



第165図 竪穴住居59出土遺物 1 (1/4)



第166図 竪穴住居59出土遺物2 (1/4・1/2・1/3)

3.3cm、器高6.8cmを測る鉢である。口縁部近くには、2個対の円孔を設ける。外面調整は、タテヘラミガキで底部近くは押圧、内面は押圧とタテヘラケズリを施している。423は、つまみ8.8cm、口径18cm、器高7.1cmを測る蓋である。つまみは、端部外面に平端面を形成させる。体部は、「ハ」の字状に外反し、端部をさらに広げる。文様は、口縁部端面に凹線文を施している。外面調整はタテヘラケズリ、内面は口縁部にヨコハケ、以下ヘラケズリとナデが認められる。424は、台径25.2cmを測る器台である。台端部は、斜め上下に丸みを持って拡張させる。文様は、2段の凹線文を施文し、その間に充填鋸歯文を施している。425は、口径25.8cmを測る器台である。口縁部は、筒部から逆「ハ」の字状に開き、口縁端部に平坦面を残し斜め下方に拡張する。文様は、口縁部外面に7の凹線文、あとに格子文、さらに中心に穴を付した円形浮文を施している。口縁端部平坦面には、2条の凹線文の間に7~8条の櫛描波状文を施文する。

S126は、流紋岩製の石包丁片である。S127は、長さ18.5mm、幅15.5mm、厚さ2.4mm、重さ0.44gを測るサヌカイト製の石鏃である。S128は、長さ38.0mm、幅49.5mm、厚さ10.0mm、重さ19.64gを測るサヌカイト製のU.Fである。S129は、花崗岩質アプライト製の磨石だが、敲打面が認められる。S130は、長さ94.5mm、幅46.5mm、厚さ31.5mm、重さ156.19gを測る流紋岩製の砥石である。

竪穴住居59bは、西側にある壁帯溝とピットe~hと火処を伴うものである。ピットの土層断面においては、柱痕を認められるものがあり、柱として用いられたと思われる。壁帯溝は、複数となる部分が認められる。

出土遺物(第166図)は、土器の426がピットeで、他は埋土からの出土である。426は、推定口径19cm

を測る鉢である。口縁部は、押圧による凹凸を残している。文様は、口縁部外面に凹線文を施している。胴部には、不鮮明ではあるがキザミと沈線が観察できる。外面調整はヨコヘラミガキ、内面は口縁部から頸部にヨコヘラミガキ、以下ナデを行っている。427は、口径26cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から内径気味に立ち上がる。文様は、口縁部外面に3条の凹線文を施文する。外面調整は多角形のヘラミガキ、内面はハケ後タテヘラミガキを施している。428は、口径12.2cmを測る壺である。口縁端部は、肥厚し拡張させる。文様は、口縁端部外面に凹部、頸部に凹線文を施文する。内面調整は、押圧を施している。429は、脚径13.8cmを測る脚部片である。端部は、肥厚して立ち上がる。430は、底径8.6cmを測る平底の底部片である。外面調整は胴下半までヨコ、以下タテヘラミガキ、内面は多角形のヘラミガキを施している。

S125は、幅57.0mmを測るサヌカイト製の石包丁片である。

竪穴住居60（第167図）

竪穴住居60は、住居59の南上方に位置し、才地古墳群の土壙墓1と重複している。規模は、272cmを測り、「コ」の字状に検出される。壁の高さは34cmと残りは良いが、斜面下方の北側は消失している。壁帯溝及びピットは、検出されなかったのである。第167図の土層断面図に示すように、床面から5cmほど上面には第4層の炭層が認められている。

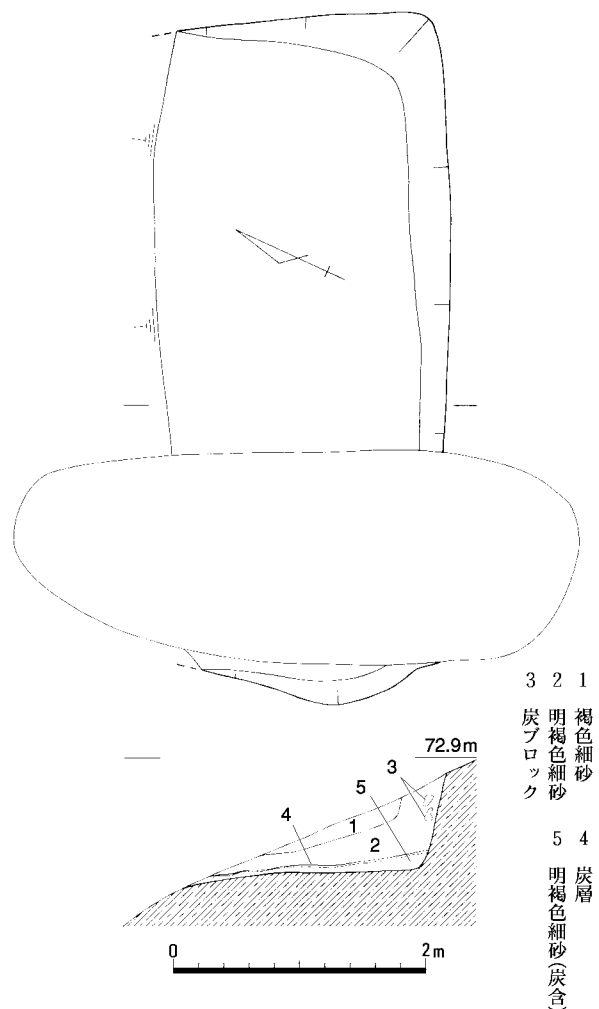
竪穴住居61（第168図）

竪穴住居61は、住居59の南上方に位置し、重複している。その関係は、第168図土層断面図B-B'において、壁際の壁帯溝が切っていることが、さらに南西での壁帯溝の平面での確認においては、図のように検出することができたのである。

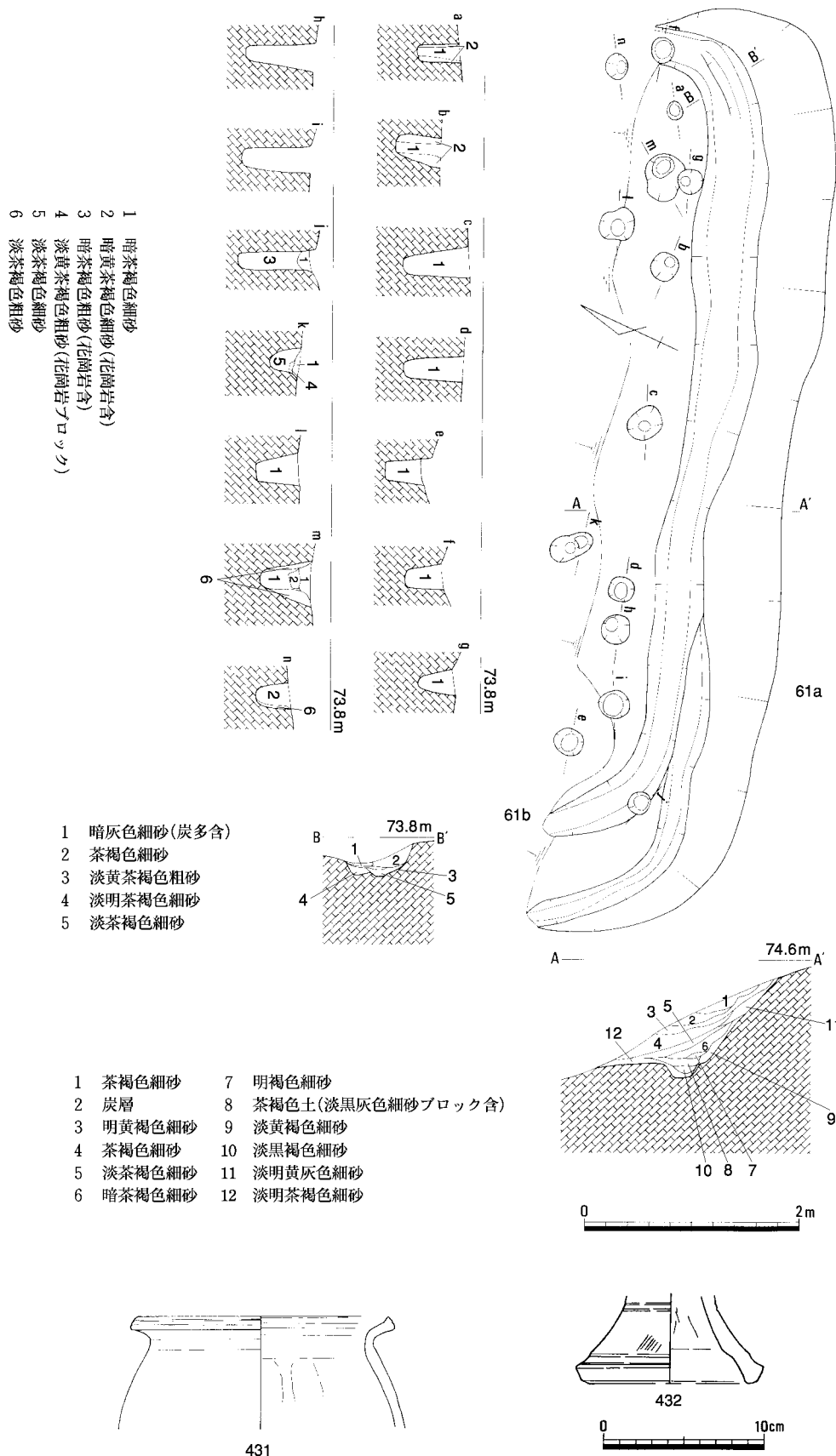
竪穴住居61aは、逆L字状に検出された。壁帯溝は幅25cm前後、深さ6cm前後のもので、このほかに、当該住居に伴うものはピットjが考えられるのである。

竪穴住居61bは、長さ790cmの鋸状に検出する。ピットはa～eの5本が柱に用いられたと判断される。

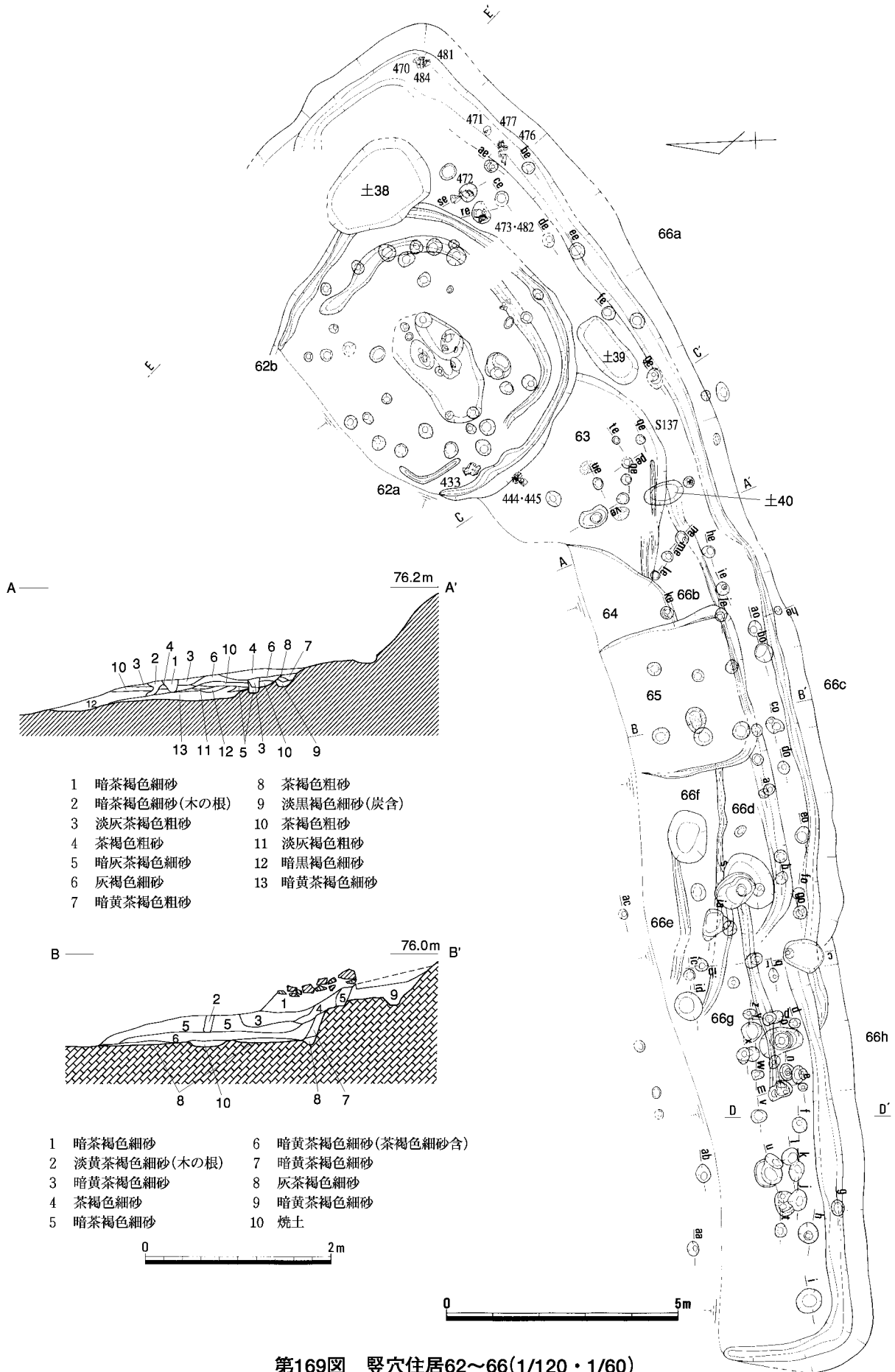
出土遺物(第168図)は、431がピットf、432が床面からの出土である。431は、口径15.6cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を拡張気味にする。文様は、口縁端部外面に2本の凹線文を施文する。外面調整はハケ、内面にはナデが認められる。423は、推定脚径10.2cmを測る脚部片である。裾端部は、肥厚させる。文様器面の剝離が著しく、不詳であるが脚柱部近くに凹線文、裾部に充填鋸歯文が認められる。



第167図 竪穴住居60(1/60)



第168図 竪穴住居61(1/60)・出土遺物(1/4)



第169図 竪穴住居62~66(1/120・1/60)

竪穴住居62～66（第169図）

ここに所在する住居は、土壌とともに複雑に重複して検出されている。さらに、これらの遺構からは多くの遺物が出土している。このようなことから、遺構番号順ではなく、住居62～66および土壌について、先に記しておき、のちに個々の遺構について述べる。

この地区で最初に認識したのは、第一次調査トレンチの断面清掃時である。この時に土壌38と住居66aの存在を認識したのである。しかし、住居66aについては、平面プランの検出を同時に行っていたことからこの時点においては、20mをこえて黒色の落ち込みを確認していたのである。この落ち込みは、ほとんど変化無く続くのである。このようなことから、段状遺構と判断し、土層の変化が認められる高さまで掘り下げを行ってしまったのである。具体的には、第169図土層断面図A—A'に示した住居66aの床面まで下げたことになる。この段階で壁帯溝が伴うことなどから、当初に段状遺構と認識していたものが、竪穴住居であることを認識したのである。重複する遺構については、住居66aの床面を検出過程において確認した。A～Dの土層断面を通して、その関係を見ていくことにする。先に示した第193図土層断面図では、土壌38が住居66aの埋土中から掘り込まれている。第172図C—C'は、プラン検出面での層が認められている。第1層上面には、土器を多く含んだ礫が認められる。この層と2・4層が、住居66aの埋土となる。また、第6層が住居63の埋土となるのである。第169図土層断面図A—A'は、第3、4層が住居66aの貼り床、第5、13層が住居63埋土については、プランを把握することができた。しかしながら、同断面図の第10～13層の貼り床は、平面プランで検出することができなかった。平面プランで確認できている住居66bの壁帯溝は、第8と9層と判断している。第169図土層断面図B—B'は、住居66cの第9層が切られて住居66dの埋土である第3～5層が認められる。そして、その下に住居65の埋土が存在する。第172図土層断面図D—D'は、重複する遺構はなく、住居66hの層序である。

以上が、土層断面図を通しての遺構の重複関係であるが、平面のプラン検出時での関係は個別の説明の中で記すことにする。

竪穴住居62（第170図）

竪穴住居62は、Ⅲc区住居53の南東上方に位置し、住居62a、住居62b、住居63が重複する。その関係は、住居62bが住居62aの上に貼り床をして、拡張をしている。住居63は、住居62に切られている。土壌38とは、土壌が当該住居を切っている。

竪穴住居62aは、規模は440×580cmを測り、形態は隅丸方形を呈する。壁帯溝で確認されたもので、北辺は消失している。柱穴は、ピットa～dが用られてと思考される。中央穴は、140×270cmを測る楕円形の掘り込みの中に、さらに2個の掘り込みが認められる。このうちの45×70cmを測る掘り込みが、先ほどのピットと同様の対角線上にくることから判断される。また、両長辺側に小ピットが認められ、伴うことが考えられる。

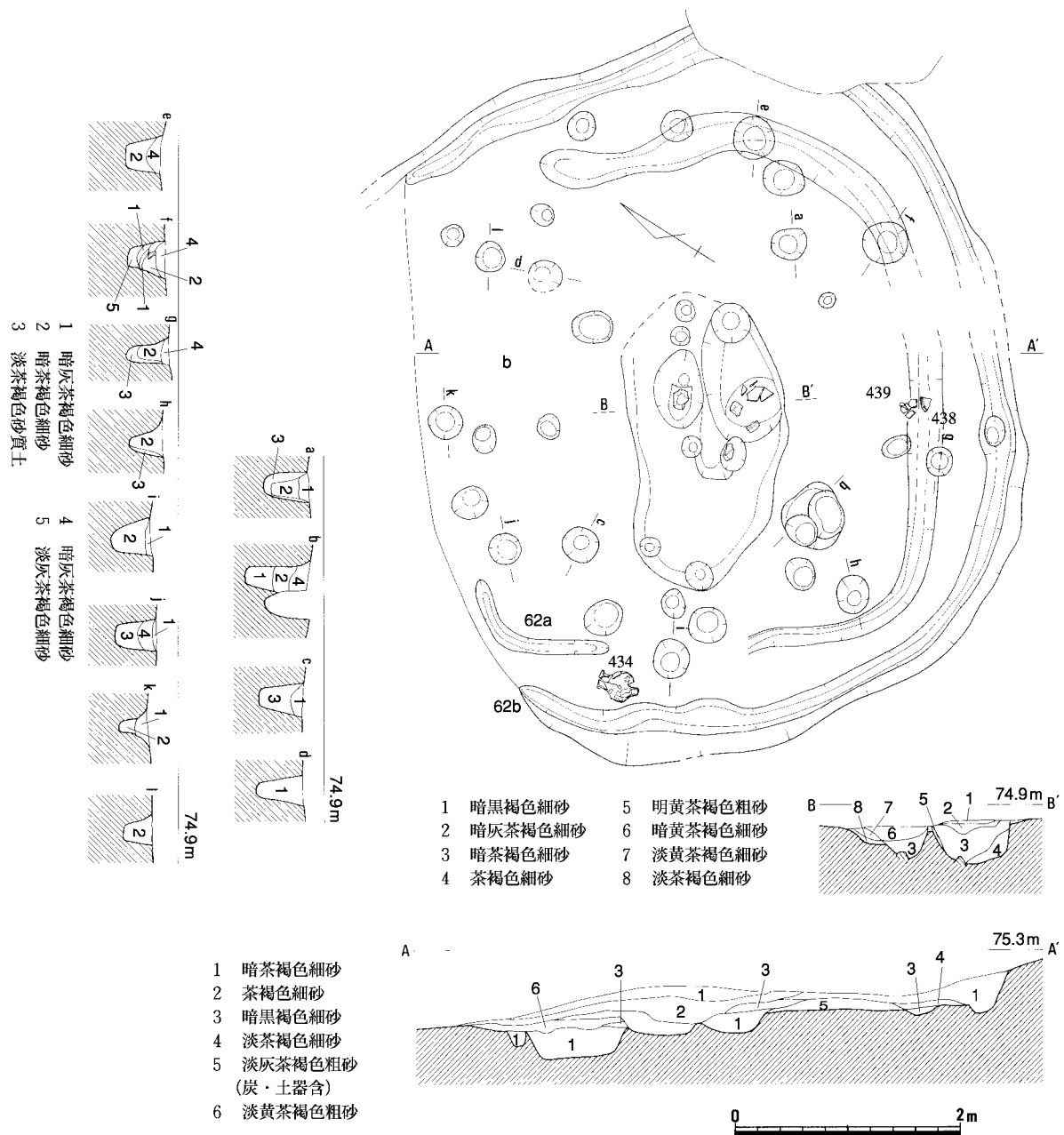
出土遺物(第171図)は、土器の433が床面、鉄器のM8が壁帯溝から検出されている。433は、口縁端部外面を斜め上下に拡張させ、その外面に4条の凹線文を施文する甕の小片である。

M8は、残存長さ74.0mm、残存幅24.0mm、厚さ4.5mm、重さ65.64gを測る物である。両側と下方部分は、欠損している。上部は、断面に示すように内側に折り曲げているが、木質などは認められなかった。また、下方部分も欠損していると思われ、その内容は不詳である。

竪穴住居62bは、規模は540+ α ×630cmを測り、形態は胴張隅丸方形を呈する。当該住居は、住居

66aの貼り床下、住居62a上に貼り床をして構築されている。柱穴は、ピットe~lの8本である。中央穴は、住居66aに接した南東側に70+α×130cm、深さ40cmを測るものが存在する。

出土遺物(第171図)は、土器の436、441が壁帯溝内、443がピットiの北東側のピット内、442がピットl内で、他は、床面からの出土である。石器は、S134、S135が床面で、他は、埋土中からの出土である。鉄器は、M7が床面から検出されている。434は、口径13.2cm、底径5.6cmを測る壺である。検出時では、一括で認められたが復元においては作図のように、接合できなかったのである。頸部は、螺旋の沈線文、肩部に刺突文を施している。内面調整は、肩部にヨコハケとタテハケ、以下タテハラケズリを行っている。435は、甕の小片で、口縁端部外面に凹線文を施文する。436は、壺の小片で、口縁端部に凹線文と棒状浮文が認められる。437は、高杯の小片で、口縁部端面と外面に凹線文を施文する。438は、高杯の小片で、口縁端部外面に凹線文を施文する。439は、口径27cmを測る高杯で

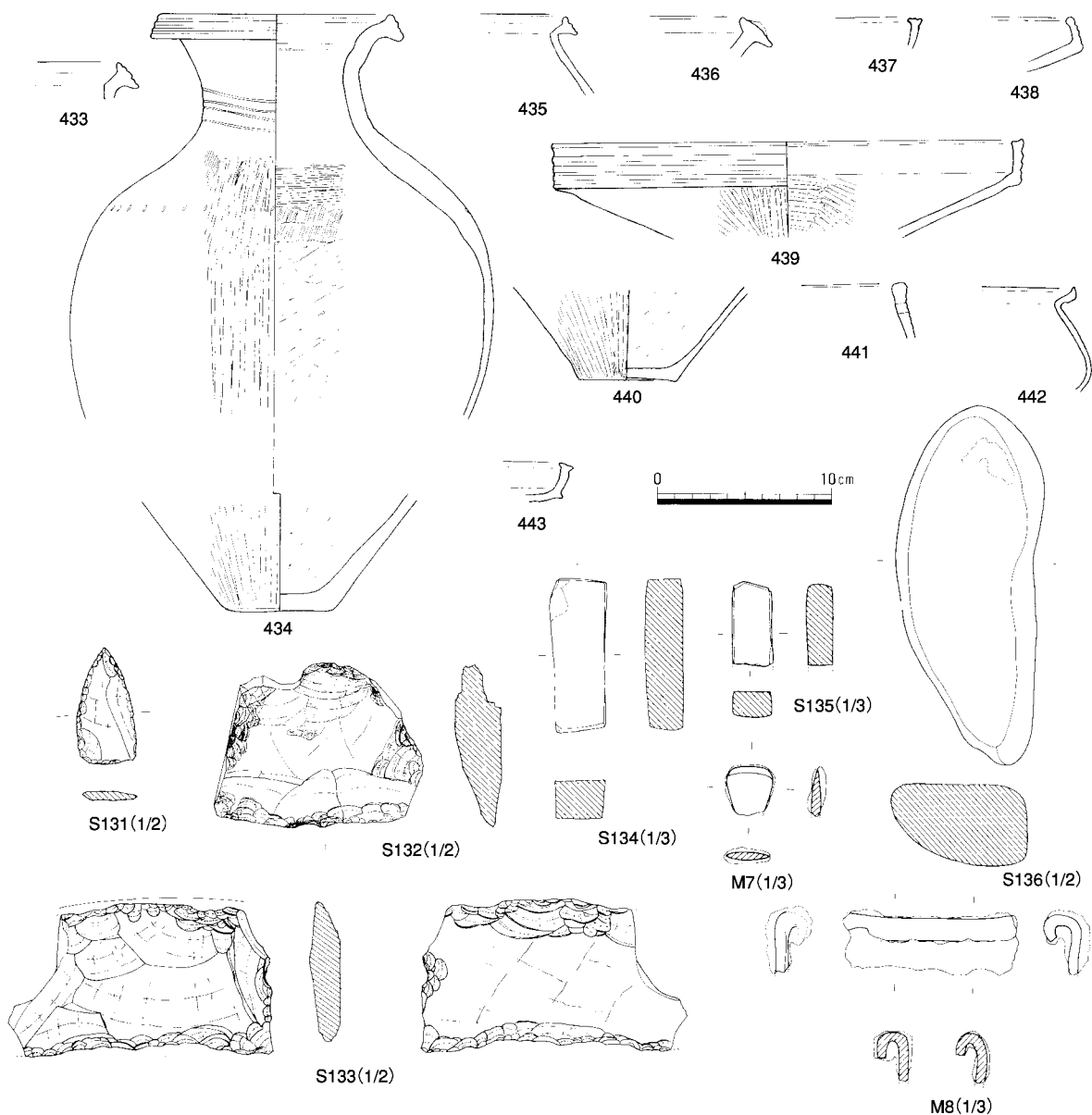


第170図 竪穴住居62(1/60)

ある。440は、底径5.6cmを測る上げ底の底部である。441は、壺の小片で、凹線文と穿孔が認められる。442は、甕の小片で、に凹線文が認められる。443は、高杯の小片である。

S131は、長さ33.0mm、幅16.5mm、厚さ3.0mm、重さ1.86gを測るサヌカイト製の石鏃である。S132は、長さ59.0mm、幅47.5mm、厚さ13.5mm、重さ42.83gを測るサヌカイト製のスクレイパーである。風化している古い調整痕が認められる。S133は、残存長さ76.0mm、幅44mm、厚さ9.0mm、重さ40.21gを測るサヌカイト製の石包丁である。S134は、長さ66.0mm、幅24.5mm、厚さ15.5mm、重さ47.87gを測る流紋岩製の砥石である。使用は、全面にわたる。S135は、残存長さ36.0mm、幅17.5mm、厚さ11.5mm、重さ13.43gを測る流紋岩製の砥石である。S136は、長さ154.0mm、幅62.5mm、厚さ35.5mm、重さ519.25gを測るヒン岩製の磨石である。一部は比較的磨滅が認められ、全体的には使用したと思われる磨った状態が認められている。

M7は、残存長さ21.0mm、幅20.0mm、厚さ3.5mm、重さ4.65gを測る鏃である。先端部分が薄くなる形状を示すことから判断したのである。



第171図 竪穴住居62出土遺物(1/4・1/2・1/3)

竪穴住居63 (第169・172・173図)

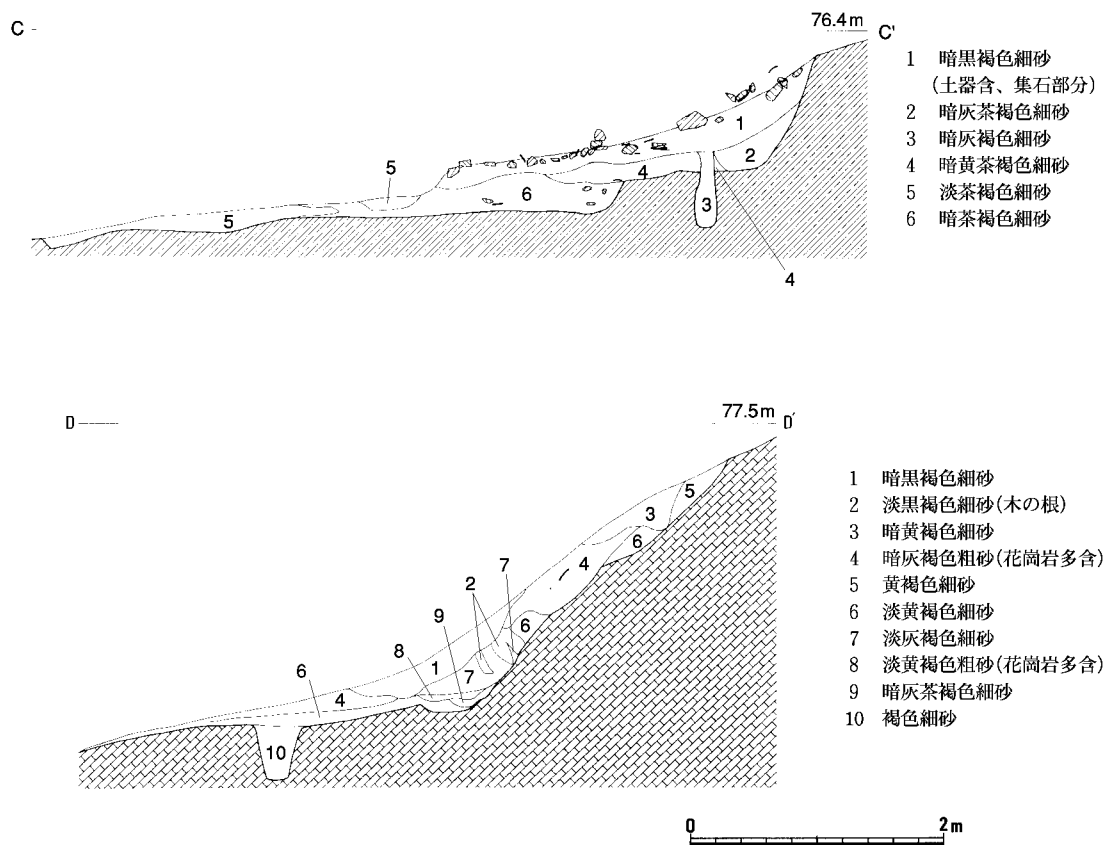
竪穴住居63は、住居62の南西に接して位置し、同住居と住居64と重複する。これら重複する関係は、いずれも当該住居が切られている。壁帯溝は、西側よりに認められ、一部2本となっている。第169・172図土層断面図に示したように、平面では確認できたが明確に壁帯溝とし作図でき無かったのである。ピットは、第173図のピットte、ue、veの3本が、当該住居の床面から検出されている。このうちピットveで柱痕を認めることができた。これ以外のピットoe、pe、qeは、床面よりも上面のプラン検出段階で確認されたものである。火処は、25×35cmと30×37cmの範囲のものが2カ所認められる。この火処は、火の影響は浅いものである。

出土遺物(第174図)は、土器の444と445と一括して床面近くから検出される。石器のS137は、壁際の埋土から検出されている。444は、口径25cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に細い条線が認められる。445は、口径12.2cmを測る甕である。頸部は、「く」の字状に外反し、端部を肥厚気味にして拡張する。内面調整は、頸部近くまでヨコヘラケズリを施している。

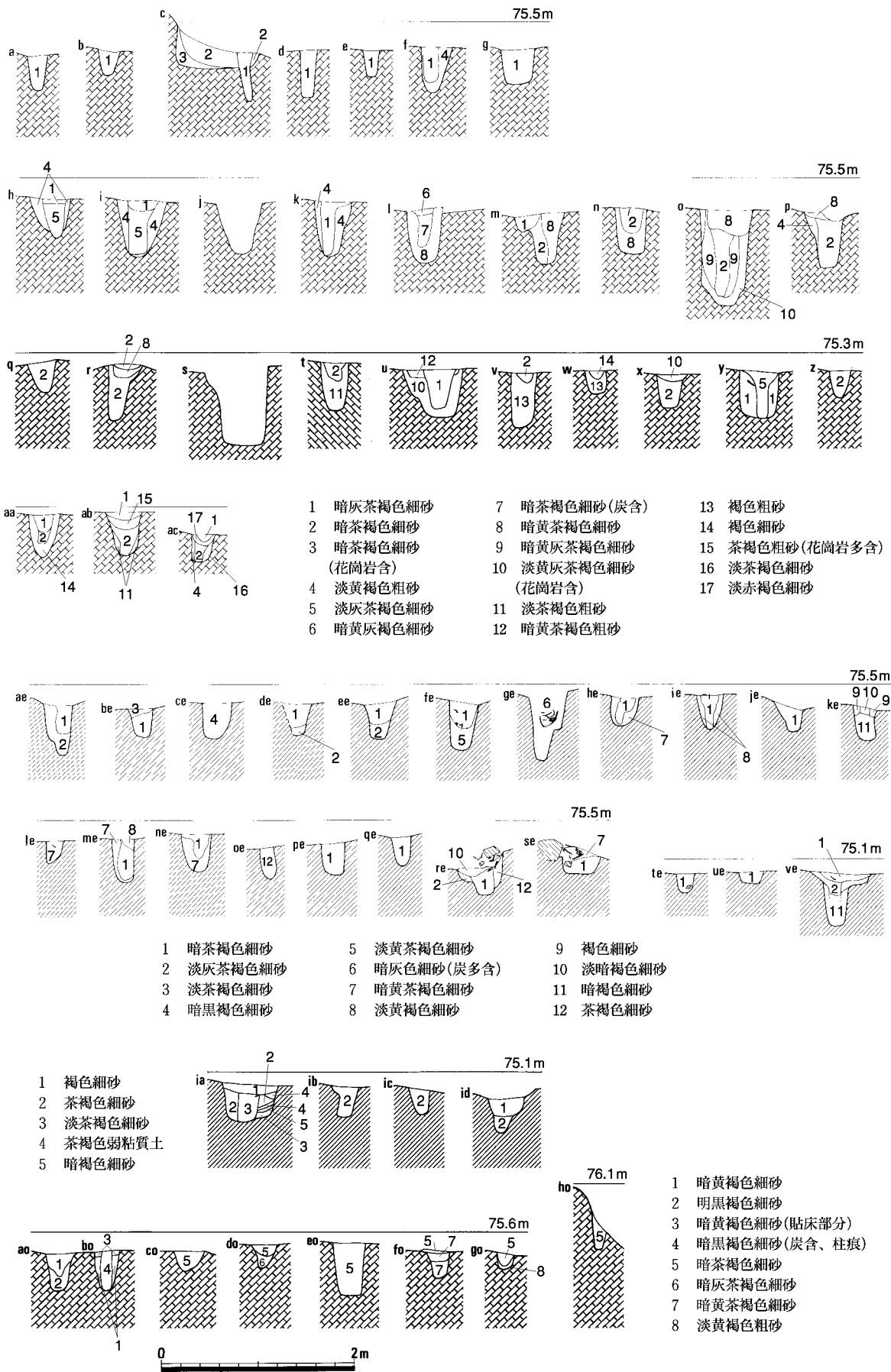
S137は、長さ44.0mm、幅37.5mm、厚さ6.0mm、重さ10.61gを測る流紋岩製のスクレイパーである。

竪穴住居64 (第169・175図)

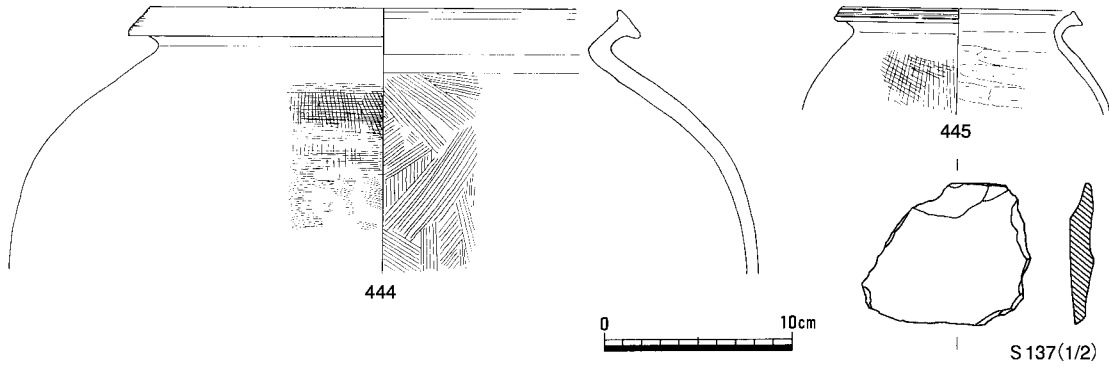
竪穴住居64は、住居63の南西に接して位置し、当該住居と住居65と重複する。これら重複する関係は、住居63を切り、住居65に切られている。先にも記したが、第169図土層断面図A—A'に示すように、明確な状態で土層の内容を把握できなかったのである。壁高は18cm前後で、他に当該住居に伴うのは検出されていないのである。第169図のピットkeは、床面よりも31cmほど上面で確認されたものである。出土遺物(第175図)は、446の底部が出土している。



第172図 竪穴住居63・66土層断面図(1/60)



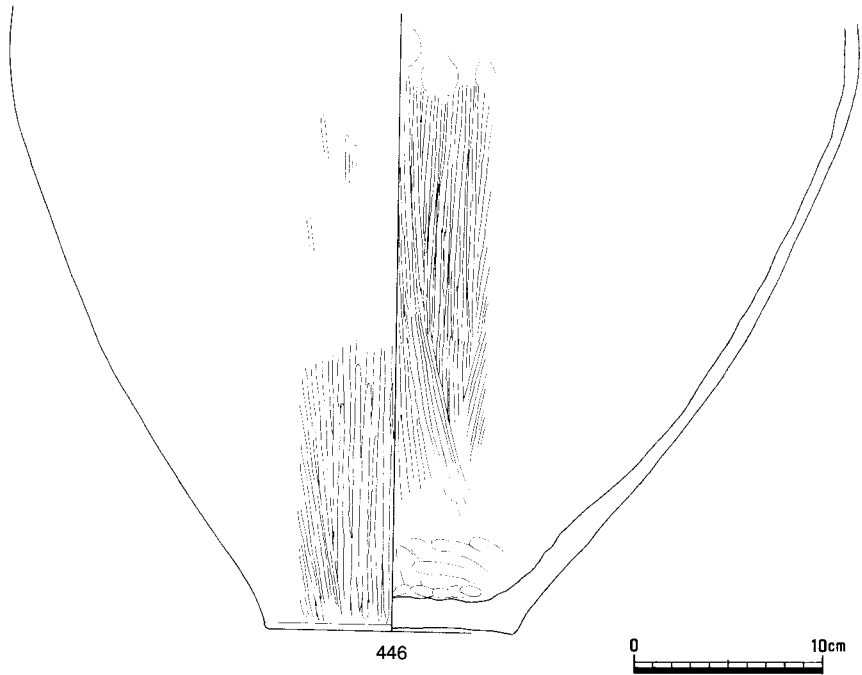
第173圖 豎穴住居63・64・66土層断面圖(1/60)



第174図 竪穴住居63出土遺物(1/4・1/2)

竪穴住居65 (第169・176図)

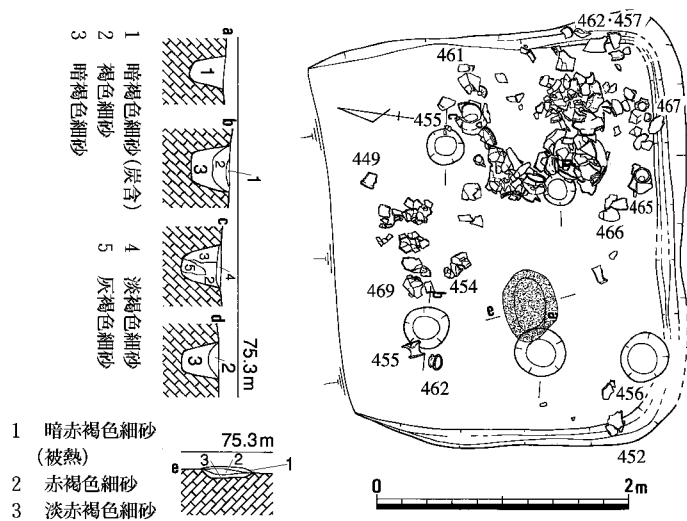
竪穴住居65は、住居64の南西に接して位置し、当該住居と住居66b、d、fと重複する。これら重複する関係は、当該住居の上に住居66bが造られ、住居66bとfを切っていることが認められたのである。規模は、 $275+a \times 328\text{cm}$ を測り、形態は隅丸方形を呈する。北辺部分は消失している。壁高は、残りのよいところで25cm前後を測る。柱穴は、



ピットa～dの4本である。柱穴は、住居プランに対し歪な配置となる。火処は、ピットaに接して $58 \times 41\text{cm}$ の範囲で認め

第175図 竪穴住居64出土遺物(1/4)

る。出土遺物(第177～179図)は、土器が床面に潰れた状態で検出されている。石器はS141～S143が床面、S138が埋土中、S139とS140が住居66dとの検出中に出土している。447は、口径22.5cm、底径9.5cm、器高57.7cmを測る壺である。胴部最大径は上位にあり、撫肩から平底の底部に到る。頸部凹線文は、螺旋



第176図 竪穴住居65(1/60)

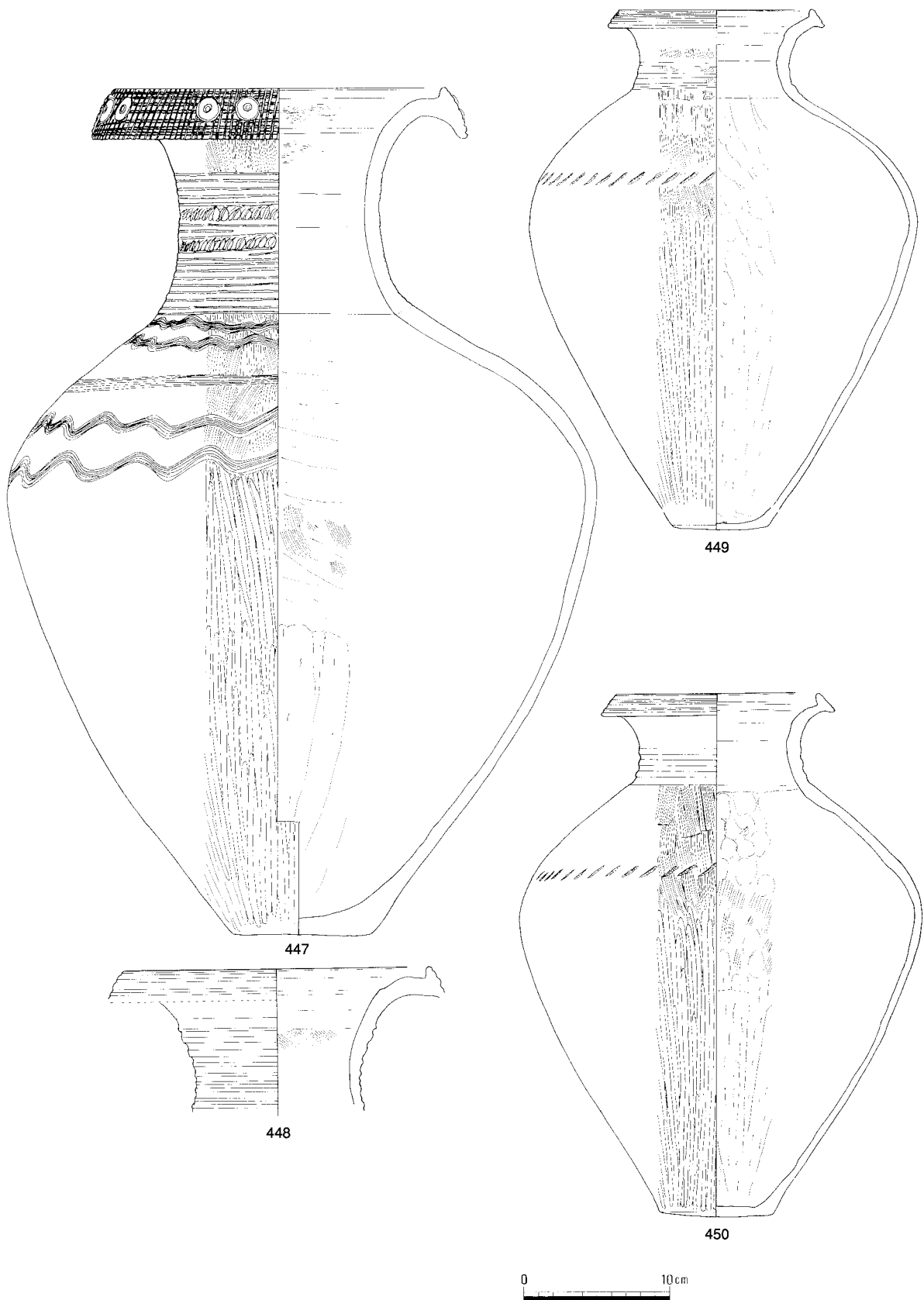
で施文している。外面は頸部から胴部上までタテハケ、内面調整は、口縁から頸部にナデ後細かいハケを施し、肩部から胴部半ばに丁寧なヨコヘラケズリ後タテハケ、以下タテヘラケズリを行っている。なお、外面の凹線施文部分は、タテハケを認められないのである。448は、口径20.8cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。449は、口径13.1cm、底径6.6cm、推定器高35.3cmを測る壺である。底部は、張りだすが胴部との接合面が無いのである。450は、口径13.8cm、底径7.7cm、推定器高35.6cmを測る壺である。底部は、張りだしている。文様は、口縁端部外面には凹線文は無く、ナデによる条線が認められる。451は、口径14.1cm、底径9cm、器高35.4cmを測る甕である。底部は、張りだしている。452は、口径15.2cmを測る甕である。内面調整は、ナデが認められる。453は、口縁端部上端を欠く甕である。文様は、口縁端部外面に浅い凹線文を施している。454は、口縁端部上下端を欠く、推定口径12.1cmを測る甕である。内面調整はナデが認められる。455は、脚径12.2cmを測る高杯である。脚端部は、外方に拡張する。裾部の透かしは、貫通している。456は、推定口径18.9cmを測る高杯である。外面調整は多角形のヘラミガキ、内面は、ヘラミガキを施している。457は、推定口径34cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から上方に拡張し、端部を肥厚する。458は、口径16.5cmを測る高杯である。口縁部は、浅い杯部から内傾して上方に立ち上がる椀状のものである。459は、脚径11.8cmを測る高杯の脚部片である。460は、脚径10cmを測る高杯の脚部片である。脚端部は、外側に拡張する。461は、脚径8.6cmを測る高杯の脚部片である。脚端部は、外側に拡張し、裾部に篋描沈線文と透かしを設けている。462は、口径16.6cm、台径9.5cm、器高21cmを測る台付鉢である。台端部は、肥厚して外方に張りだす。外面調整は、胴屈曲部までタテハケ、以下幅2cmほどのヨコヘラミガキからタテヘラミガキとなる。463は、口径12.9cm、台径9.7cm、器高18.5cmを測る台付鉢である。台端部は、立ち上がりながら拡張する。464は、口径11.8cmを測る台付壺である。口縁部は、内傾して立ち上がる。465は、台径9.6cmを測る台部の破片である。裾端部は、立ち上がりながら拡張する。466は、推定口径22cmを測る鉢である。口縁部は立ち上がり気味となり、体部は下膨れとなる。467は、底径6cmを測る底部で片で、底は張りだすものである。468は、底径4.9cmを測る底部片で、底は張りだすものである。469は、底径8cmを測る底部片で、底は張りだすものである。

S138は、長さ32.0mm、幅31.0mm、厚さ6.5mm、重さ6.47gを測るサヌカイト製のスクレイパーである。S139は、長さ33.5mm、幅27.5mm、厚さ8.0mm、重さ6.28gを測るサヌカイト製のR.Fである。S140は、長さ32.5mm、幅24.5mm、厚さ6.0mm、重さ3.1gを測るサヌカイト製のU.Fである。S141は、長さ51.5mm、幅56.5mm、厚さ11.5mm、重さ30.47gを測るサヌカイト製のR.Fである。S142は、長さ46.0mm、幅24.0mm、厚さ19.0mm、重さ30.94gを測る流紋岩製の砥石である。使用は、全面にわたっている。S143は、長さ149.0mm、幅97.0mm、厚さ77.0mm、重さ1224.66gを測る流紋岩製の敲石である。敲打面は、3カ所認めるが、全面にわたり磨石としても使用されたいと思われる。

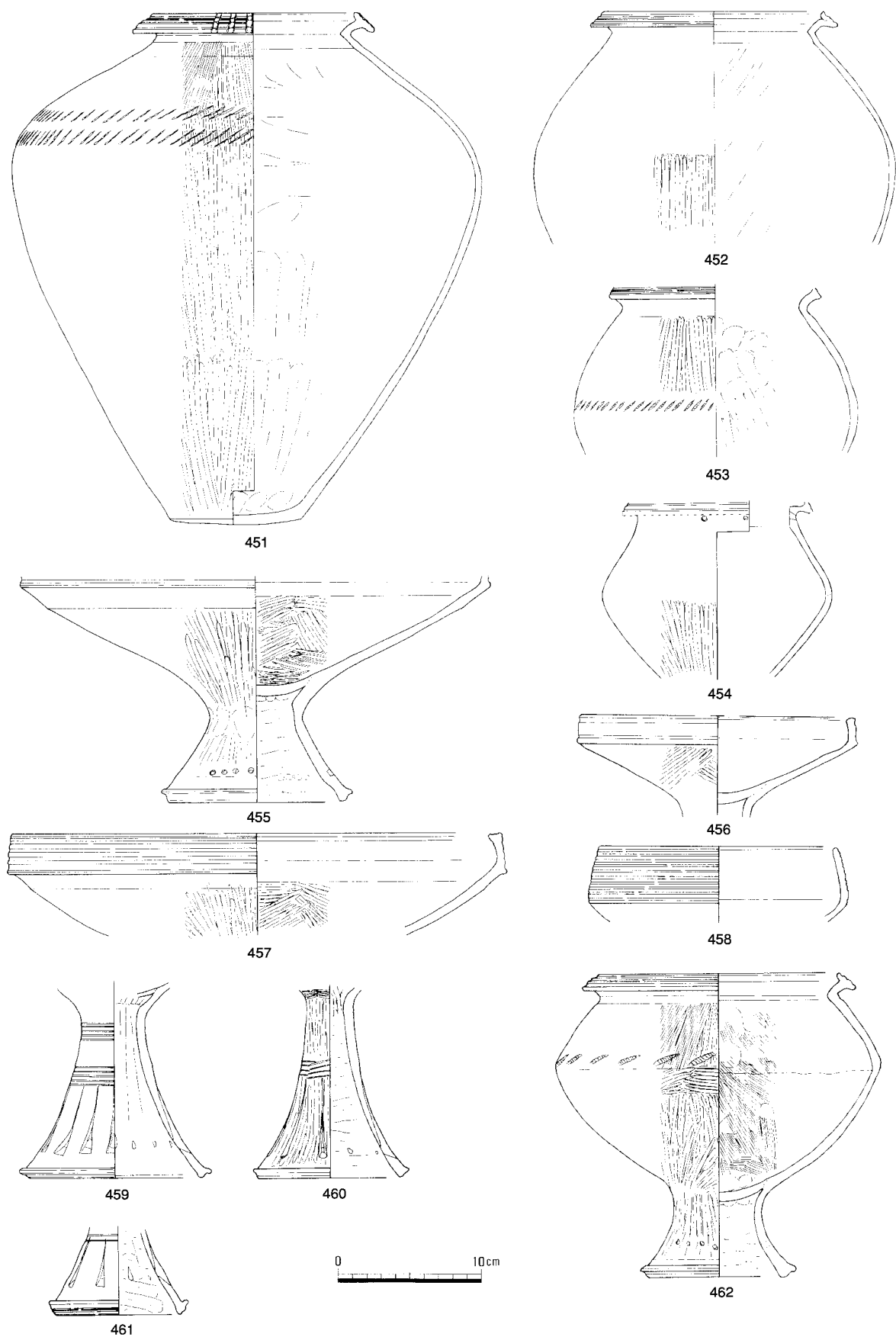
竪穴住居66（第169・172・173・193図）

竪穴住居66は、住居58の南東上方に位置する。当該住居は、最も外側の壁を有するもので、それと平行して認められた壁体溝と思考される溝について、住居a～gの名を付している。

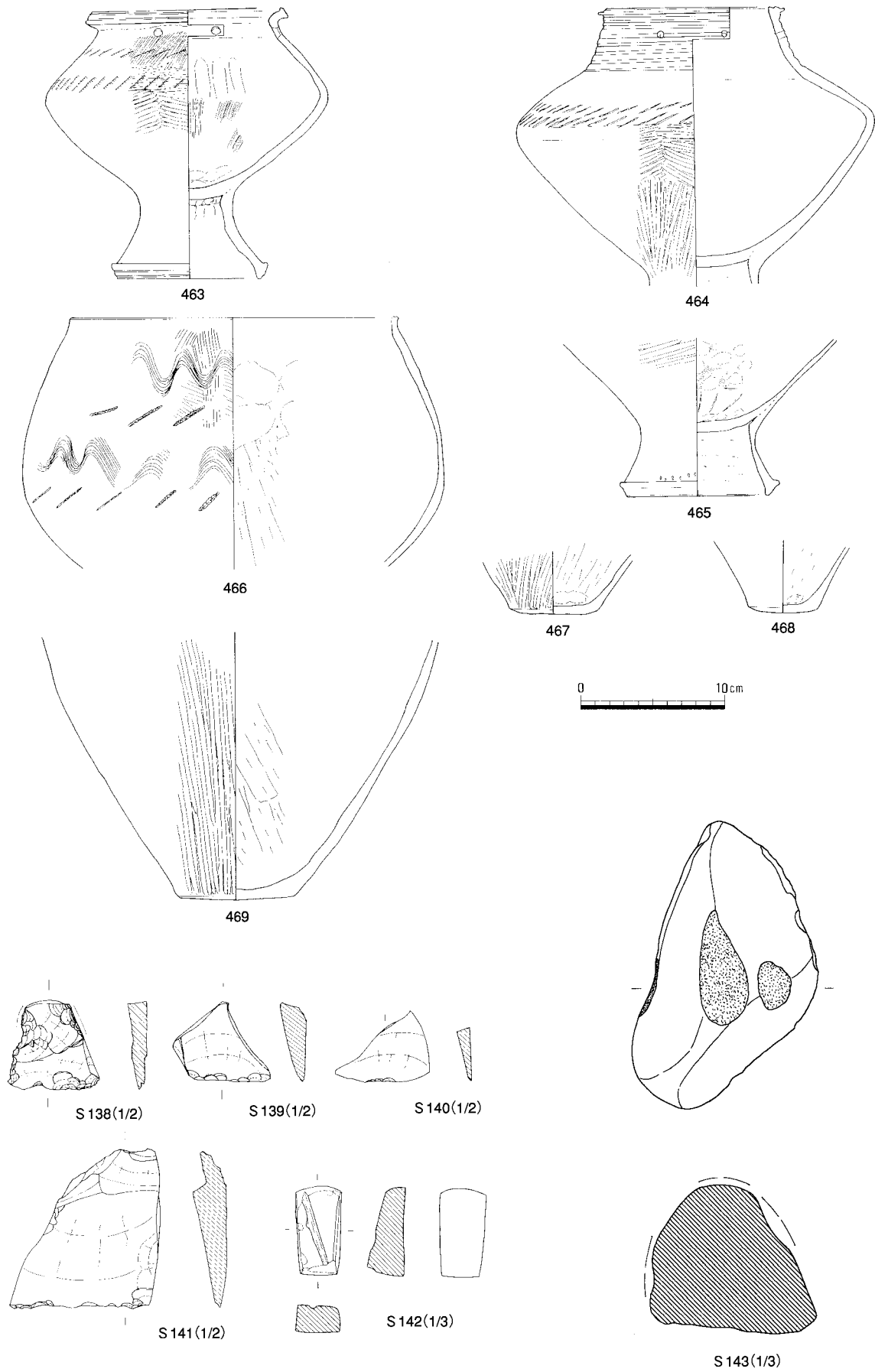
竪穴住居66aは、先にも記したが、段状遺構として掘り下げた部分に相当する。規模は、12m60cmにL字状に検出される。重複する関係は、当該住居が住居62及び住居63の上に貼り床をして構築され、土壇38には切られている。壁体溝は、両側での高さの差を10cm前後認められる。ピットは、第173図の断面図に示したように、等間隔で位置することなどから柱穴として判断すべきものが認められてい



第177図 竪穴住居65出土遺物1 (1/4)



第178図 豎穴住居65出土遺物2 (1/4)

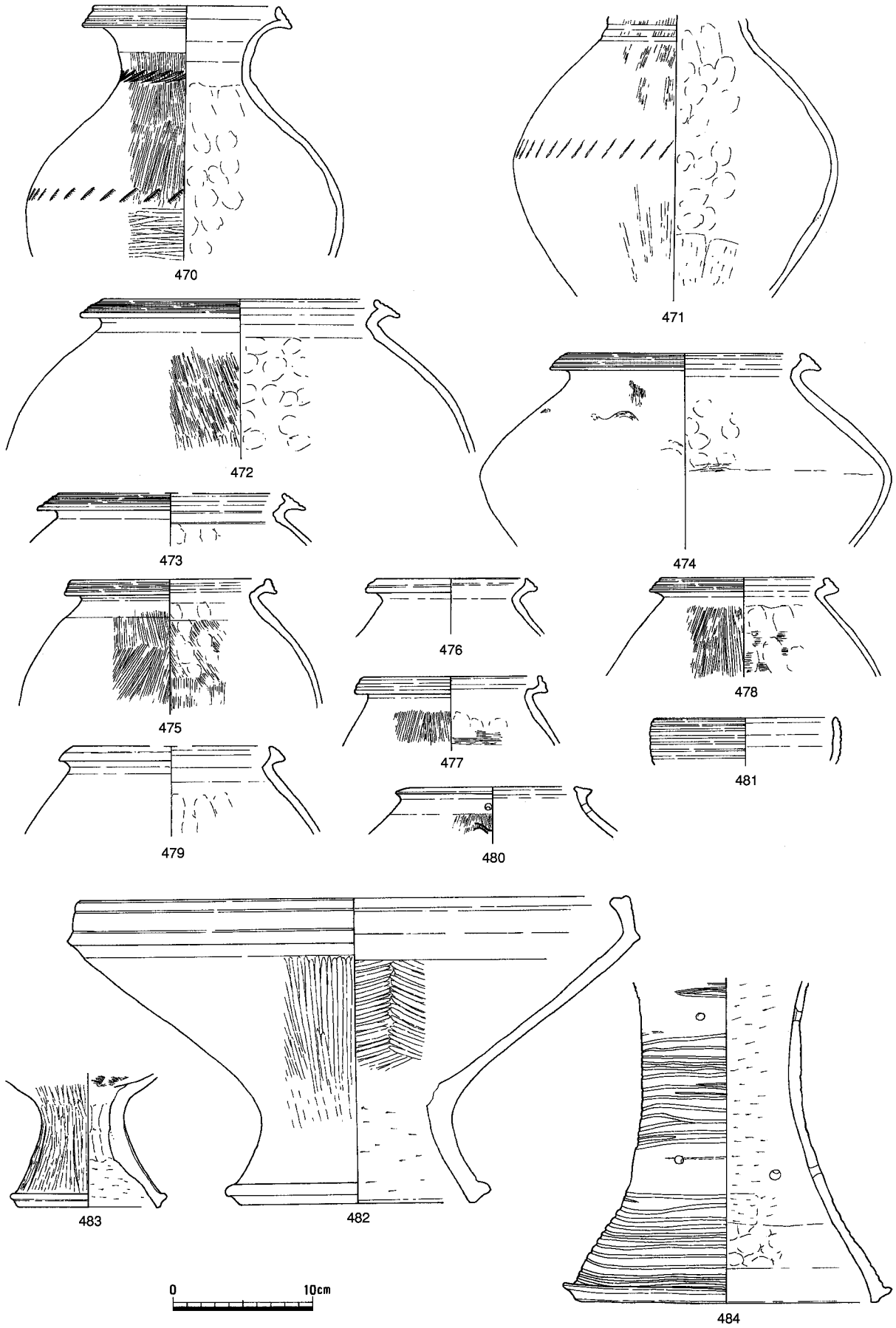


第179図 竪穴住居65出土遺物3 (1/4・ 1/2・ 1/3)

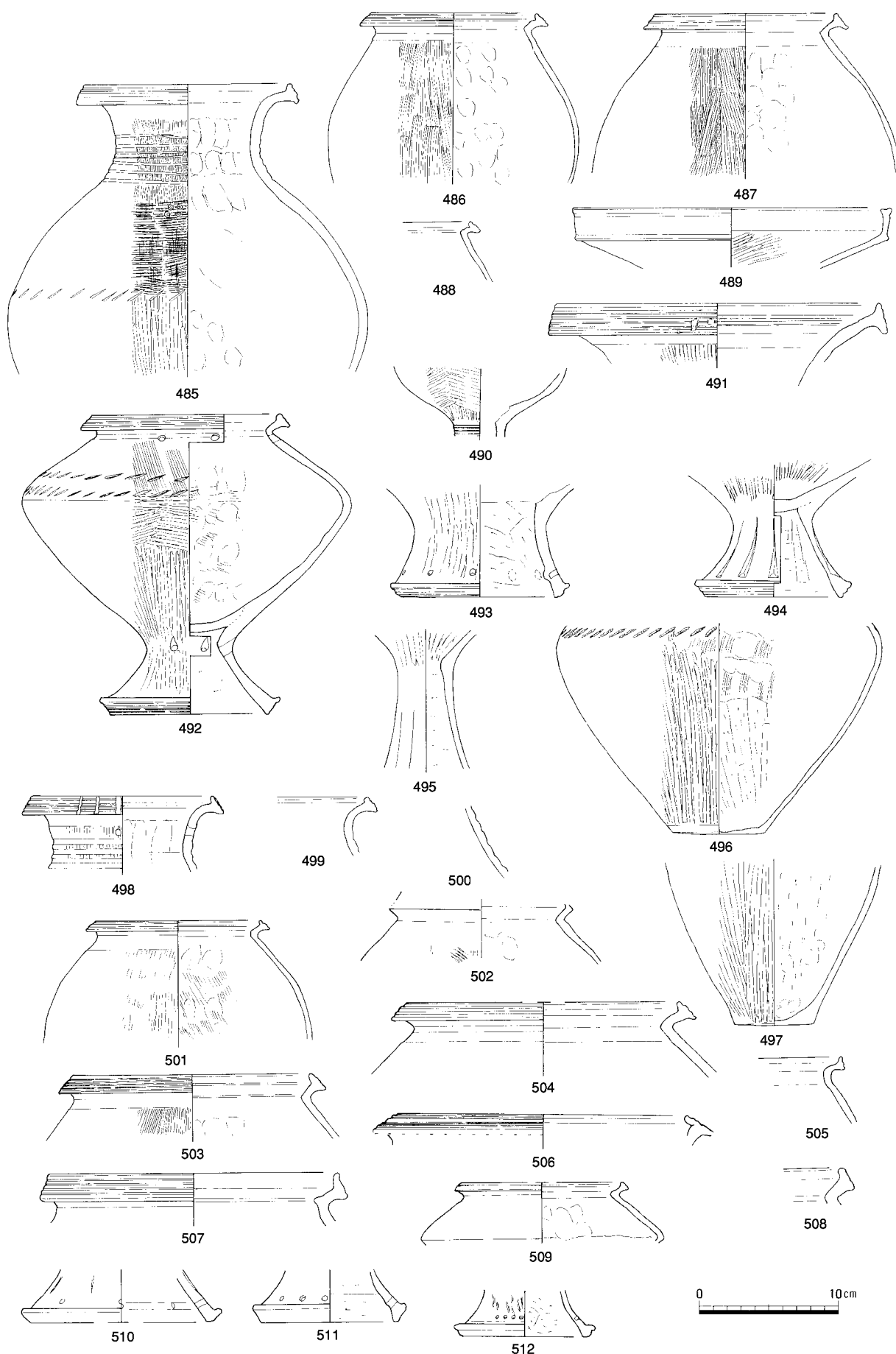
る。ピットae、de、fe、geの4本は、これに相当すると判断されが、土壇40の上に認められる石の入っているピットも含まれる可能性がある。しかし、断面図を示していないが、深さが15cmと浅く判断しがたいのである。

出土遺物(第180～186図)は、その出土内容から三つに分けることができたのである。470～512とS148・S152・S154・S156は床面と遺構内、513～555とS144・S145・S147・S149～S151そしてM9・M10は第172図の土層断面図C-C'に示した第1層上面に認められた集石周辺から検出、556～588とS146・S153・S155そしてM11・M12は埋土からの出土に分かれる。遺構に伴うものについては、個々に記する。

470は、北東隅より481と484とともに検出された口径13.2cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文、頸部と胴部に刺突文を施文する。471は、ピットaeの北東側の壁帯溝から477とともに検出された壺である。文様は、頸部に凹線文、胴部に刺突文を施文する。472は、ピットseから検出された口径19.5cmを測る甕である。外面調整は、胴部上半に幅が狭く密にタテヘラミガキ、以下太いタテヘラミガキ、内面には押圧が認められる。473は、床面から検出された口径16cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。474は、床面から検出された口径16.6cmを測る台付鉢である。文様は、口縁端部外面に凹線文、肩部に櫛描波状文が認められる。475は、床面から検出された口径14.2cmを測る甕である。外面調整はタテハケ、内面には押圧とハケが認められる。476は、ピットseの上方の壁帯溝から検出された口径10.7cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。477は、471と共に検出された口径12.6cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。478は、床面から検出された口径12cmを測る甕である。外面には、楕円状の平坦面が連続して認められることから、タタキを用いたことが想定される。479は、床面から検出された推定口径14cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を拡張する。480は、床面から検出された口径11.9cmを測る壺である。文様は、櫛描波状文が僅かに認められる。481は、床面から検出された口径13cmを測る高杯である。482は、ピットreから483と共に検出された口径38.7cm、台径16.6cm、器高21.9cmを測る台付鉢である。口縁部は、上方に立ち上がり、端部を内側に拡張する。台端部は、外方に拡張する。484は、北東隅より470と484とともに検出された台径21.3cmを測る器台である。外面は、二次的な火を受けていることから剥離が著しく、調整不詳である。485は、ピットgeから検出された口径14.8cmを測る壺である。外面調整は、頸部下から胴部刺突文までタタキのち頸部からタテハケ、以下はタテヘラミガキを施している。486は、ピットgeから検出された口径11.9cmを測る甕である。487は、ピットgeから検出された口径13cmを測る甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。488は、ピットgeから検出された甕の小片である。489は、ピットgeから検出された口径22.8cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から上方に拡張する。490は、ピットgeから検出された高杯の破片である。脚柱部に篋描沈線文を施文する。491は、ピットgeから検出された口径23.2cmを測る器台である。口縁端部は、上下に拡張する。492は、ピットgeから検出された口径13.5cm、台径11.3cm、器高21.5cmを測る台付鉢である。頸部には、2個対の円孔が2カ所認められる。493は、ピットgeから検出された台径11.2cmを測る台部片である。台端部は、肥厚して外方に拡張する。494は、ピットgeから検出された台径9.1cmを測る台部片である。台端部は、肥厚して外方に拡張する。裾部の透かしは、貫通してしていない。495は、ピットgeから検出された脚柱部の破片である。496と497は、ピットgeから検出され、前者は底径6.6cmを測る胴部から底部の破片である。498は、ピットieから検



第180図 竪穴住居66出土遺物1 (1/4)

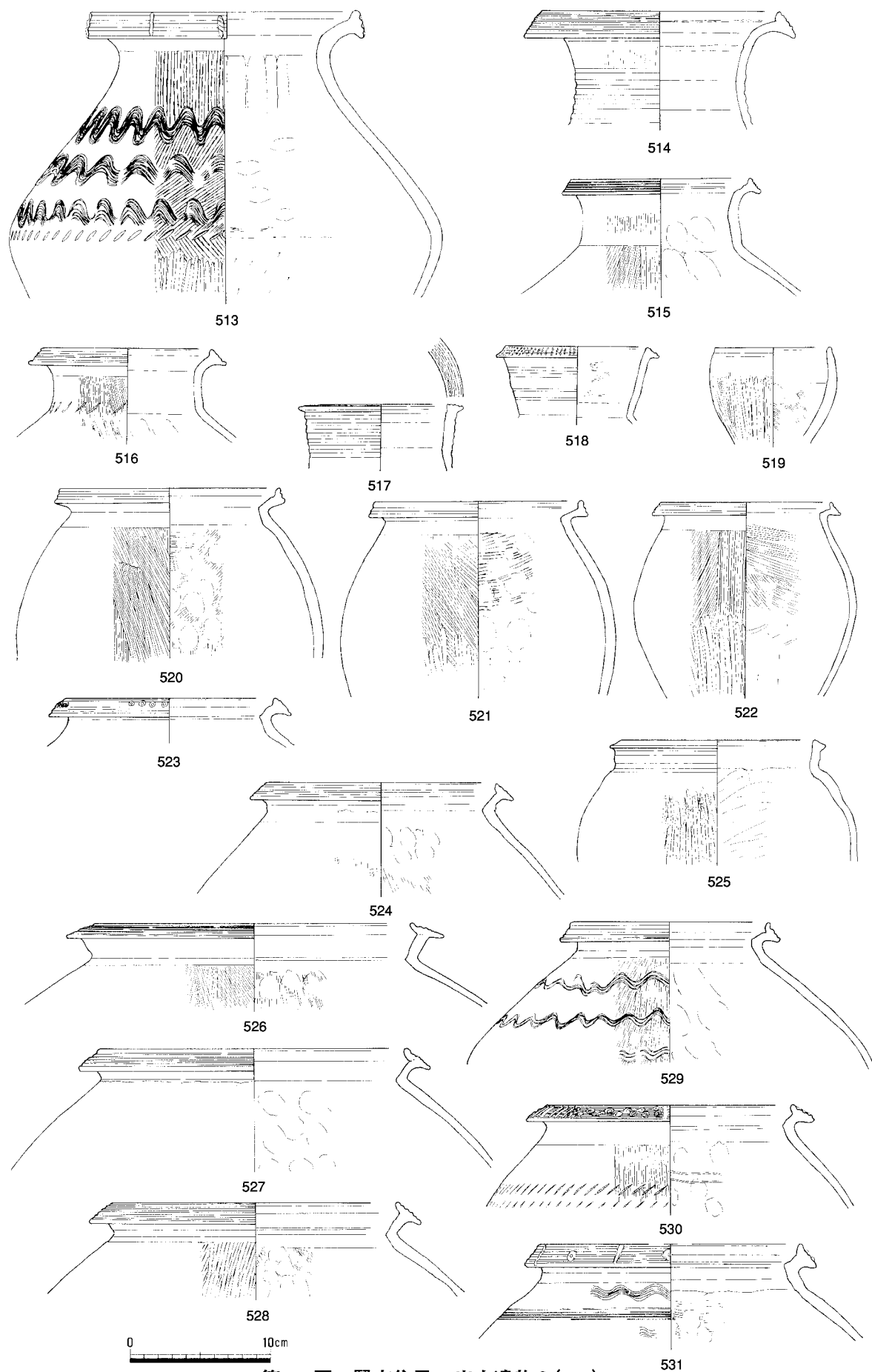


第181圖 豎穴住居66出土遺物 2 (1/4)

出された口径12.9cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文と棒状浮文、頸部にも凹線文を施文する。499は、ピットfeから検出された壺の破片である。500は、ピットmeから検出された壺の破片で、凹線文が施文される。501は、ピットfeから検出された口径14.2cmを測る甕である。502は、壁帯溝から検出された甕である。外面には、タタキが認められる。503は、ピットfeから検出された口径17cmを測る甕である。504は、ピットneから検出された推定口径19.6cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。505は、ピットmeから検出された甕の小片である。506は、ピットneから検出された甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。507は、壁帯溝から検出された甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。508は、住居63のピットueの下方にあるピットから検出された甕の小片である。509は、ピットseの北東にあるピットから検出された甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。510は、ピットheから検出された推定脚径12.6cmを測る脚部である。脚端部は、外方に拡張する。511は、ピットieから検出された推定脚径9.9cmを測る脚部である。脚端部は、拡張する。512は、ピットreから検出された脚径9cmを測る脚部である。

S148は、ピットから出土したサヌカイト製の石鏃である。S152は、床面から検出され、長さ43.0mm、幅25.0mm、厚さ10.0mm、重さ11.76gを測るサヌカイト製のR.Fである。S156は、床面から検出された長さ162.0mm、幅185.0mm、厚さ98.0mm、重さ4030gを測る流紋岩製の砥石である。S154は、土壌40の上にあるピットから検出された長さ残存36.0mm、幅28.0mm、厚さ6.0mm、重さ8.01gを測る流紋岩製の砥石である。

次は、先に記した集石周辺から検出された遺物である。513は、口径18.9cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文とキザミを付す棒状浮文、胴部には櫛描波状文、胴屈曲部に刺突文を施文する。514は、口径17cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文を施文する。515は、口径13cmを測る壺である。頸部は、立ち上がり端部を外反し、上下に拡張する。516は、口径12cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文と頸部に刺突文を施文する。517は、口径11.8cmを測る壺である。518は、口径10cmを測る壺である。頸部は、外方に立ち上がり端部を斜め下に拡張する。519は、口径8cmを測る鉢である。口縁部は、丸く納める。520は、口径15.7cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。521は、口径14.6cmを測る甕である。522は、口径12.2cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。523は、口径15cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文と竹管文を施している。524は、口径16.4cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。525は、口径13.8cmを測る甕としたが壺としたほうが良いか。外面調整はハケ後タテヘラミガキ、内面は頸部下からヨコヘラケズリを行っている。526は、口径22.4cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。527は、口径21.6cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。528は、口径20.2cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。529は、口径14cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。胴部上半には、櫛描波状文を3段に施文する。530は、口径17.4cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文の施文と竹管による刺突文、棒状浮文を付している。胴部上半には、2段の刺突文を施文する。531は、口径18.4cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文、肩部には櫛描波状文と直線文を施文する。532は、口径19cmを測る台付鉢である。文様は、口縁端部外面に凹線文、胴屈曲部に刺突文を2段施文する。533は、口径14.4cmを測る台付鉢である。内面調整は、胴屈曲部までナデ、以下タテヘラケズリが認められる。534は、口径12.5cmを測る台付鉢である。口縁部は小さく立



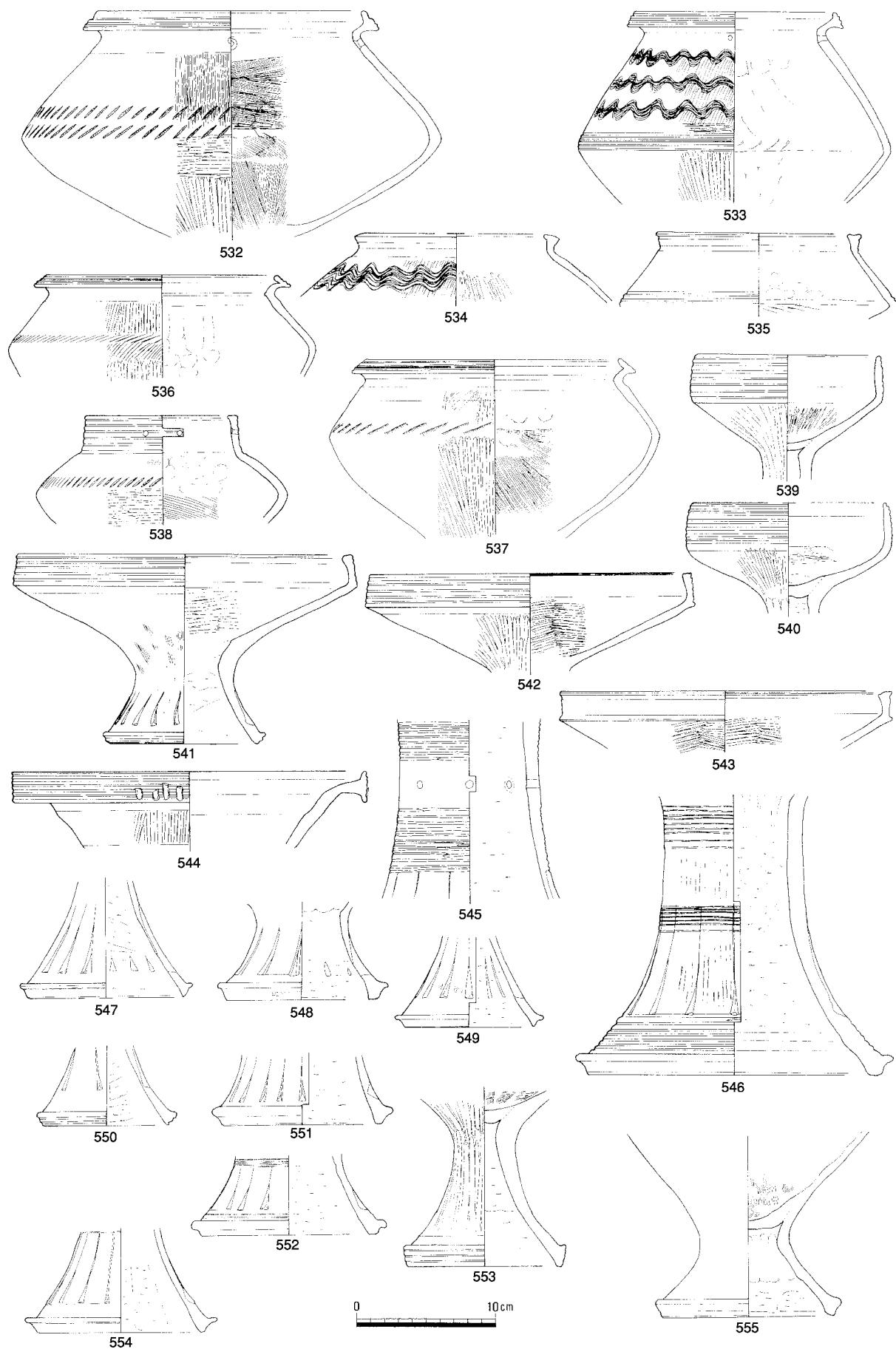
第182図 豎穴住居66出土遺物 3 (1/4)

ち上がり、端部を肥厚させ内側に拡張する。**535**は、口径12.6cmを測る台付鉢である。口縁部は小さく立ち上がり、端部を肥厚させ拡張する。**536**は、口径16.4cmを測る台付鉢である。**537**は、口径18cmを測る台付鉢である。文様は、口縁端部外面に凹線文、胴屈曲部に刺突文を施文する。**538**は、口径10.8cmを測る台付壺である。口縁部は頸部が直口し、端部を肥厚気味に拡張する。文様は、口縁外面に凹線文、胴屈曲部に刺突文を施文する。**539**は、口径13.2cmを測る高杯である。口縁部は、浅い杯部から上方に立ち上がる椀状のものである。**540**は、口径13.8cmを測る高杯である。口縁部は、椀状のものである。**541**は、口径24cm、脚径10.6cm、器高13.5cmを測る高杯である。口縁端部は、肥厚させる。裾端部は、外方に拡張する。裾部には、貫通しない透かしを施している。**542**は、口径23cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から上方に立ち上がる。文様は、口縁部端面と端部外面に凹線文を施している。**543**は、口径23.8cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から上方に立ち上り、端部を肥厚させる。**544**は、口径25.2cmを測る器台である。口縁部は、端部がさらに屈曲して上下に拡張する。**545**は、器台の筒部の破片である。文様は、円形透かしの上下に篋描沈線文、裾部側に透かしの沈線が認められる。**546**は、脚径20.9cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚して拡張させる。透かしは、貫通しないで施されている。**547**は、脚径11cmを測る高杯である。裾端部は、立ち上がり外方に張りだしている。透かしは、貫通するものが施されている。**548**は、脚径10.8cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させ外方に張りだしている。透かしは、貫通するものが施されている。**549**は、脚径9.2cmを測る高杯である。裾端部は、立ち上がり外方に張りだしている。透かしは、貫通するものが設けられている。**550**は、脚径9cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させる。透かしは、貫通しないものが設けられている。**551**は、脚径11.4cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させる。透かしは、貫通しない。**552**は、脚径12.6cmを測る高杯である。文様は、裾端部に肥厚させ外方に張りだしている。透かしは、貫通しないものが設けられている。**553**は、脚径11cmを測る高杯である。裾端部は、立ち上がり外方に張りだしている。**554**は、脚径11cmを測る高杯である。裾端部は、立ち上がり外方に張りだしている。透かしは、貫通しないものが設けられている。**555**は、脚径11cmを測る高杯または鉢になると思われる。

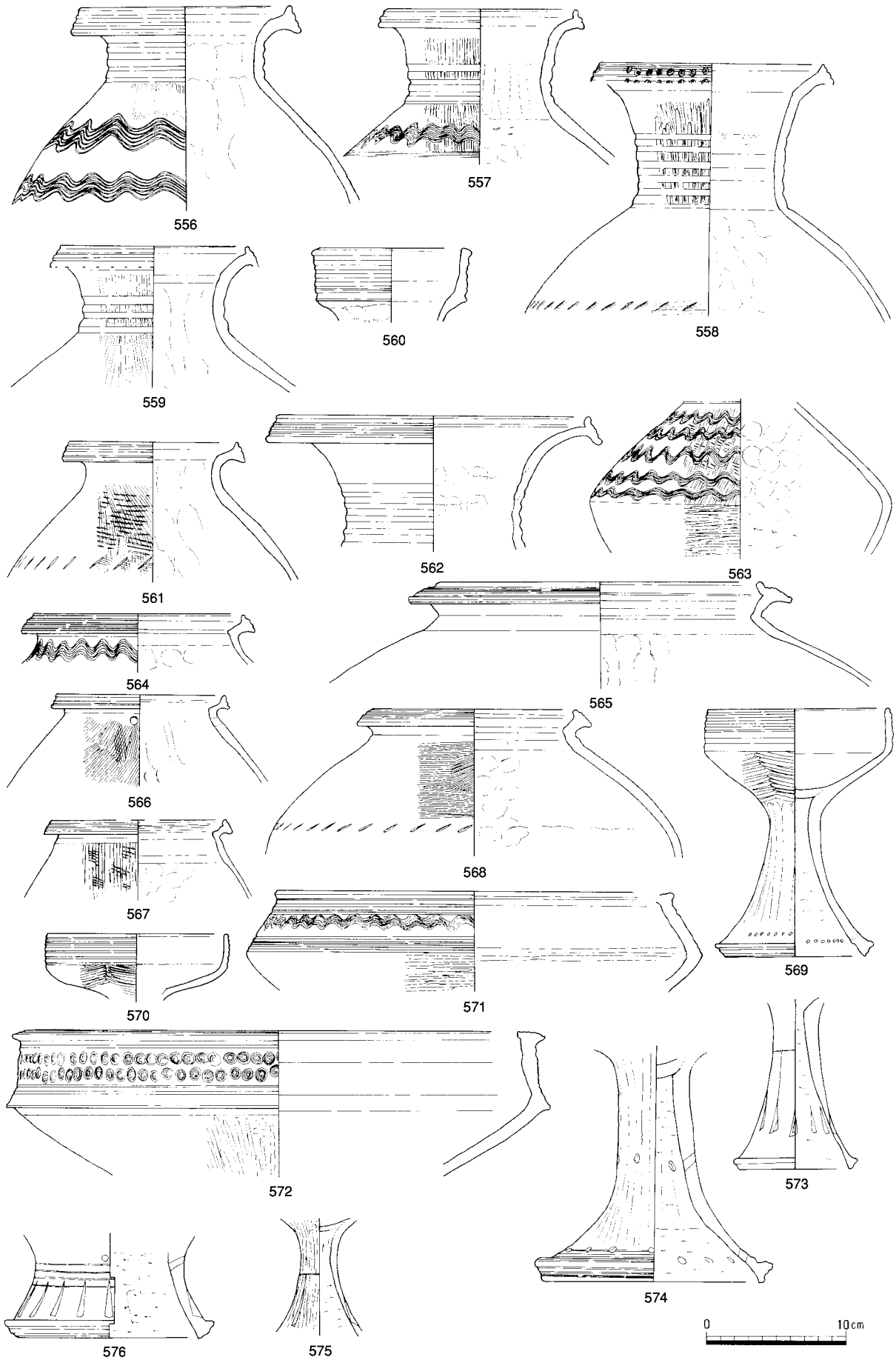
S144は、長さ31.5mm、幅14.0mm、厚さ3.3mm、重さ1.18gを測るサヌカイト製の石鏃である。先端は、一部欠損している。**S145**は、長さ21.5mm、幅14.0mm、厚さ2.7mm、重さ0.77gを測るサヌカイト製の石鏃で、一部を欠損している。**S147**は、残存長さ20.5mm、幅13.0mm、厚さ3.0mm、重さ0.92gを測るサヌカイト製の石鏃で、一部を欠損する。**S149**は、残存長さ36.0mm、幅10.5mm、厚さ5.5mm、重さ1.99gを測るサヌカイト製の石鏃で、先を欠損する。**S150**は、長さ41.5mm、幅38.0mm、厚さ8.0mm、重さ8.31gを測るサヌカイト製のR.Fである。**S151**は、長さ49.5mm、幅45.0mm、厚さ8.0mm、重さ16.85gを測るサヌカイト製のスクレイパーである。

M9は、残存長さ30.0mm、幅10.0mm、厚さ4.0mm、重さ3.2gを測るが、種類は不詳である。**M10**は、残存長さ7.4cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm、重さ7.28gを測る釘状を呈する。欠損部分は、ねじれている。

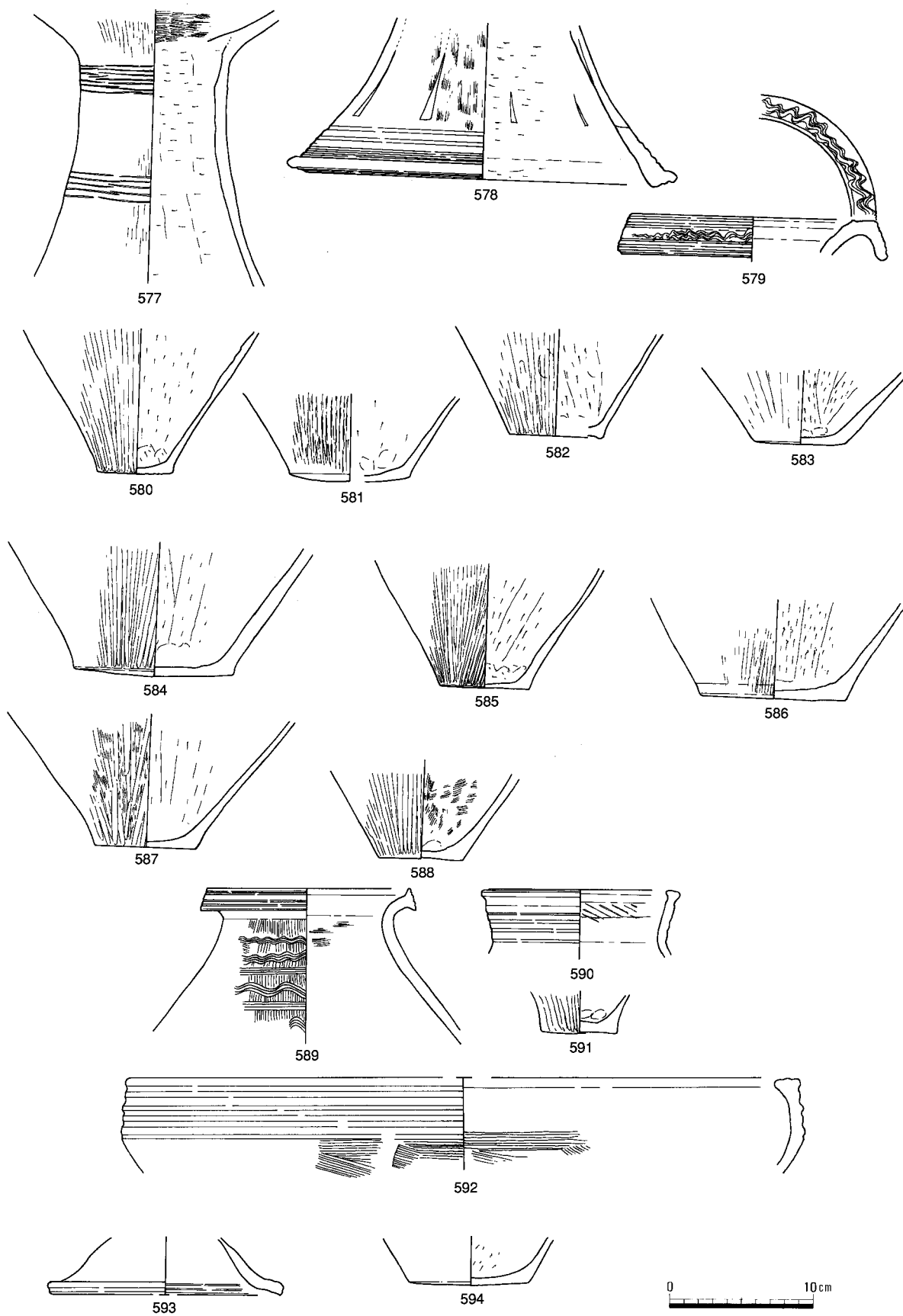
以下の遺物は、埋土から出土したものである。**556**は、口径15cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文を施している。胴部には、2段の櫛描波状文を施文する。**557**は、口径13.5cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文を施している。胴部には、櫛描きによる波状文と直線文を施文する。**558**は、口径16cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文と竹管文、頸部にも凹線文を施している。胴部には、刺突文を施文する。外面調整は、胴部刺突文部分でヨコへ



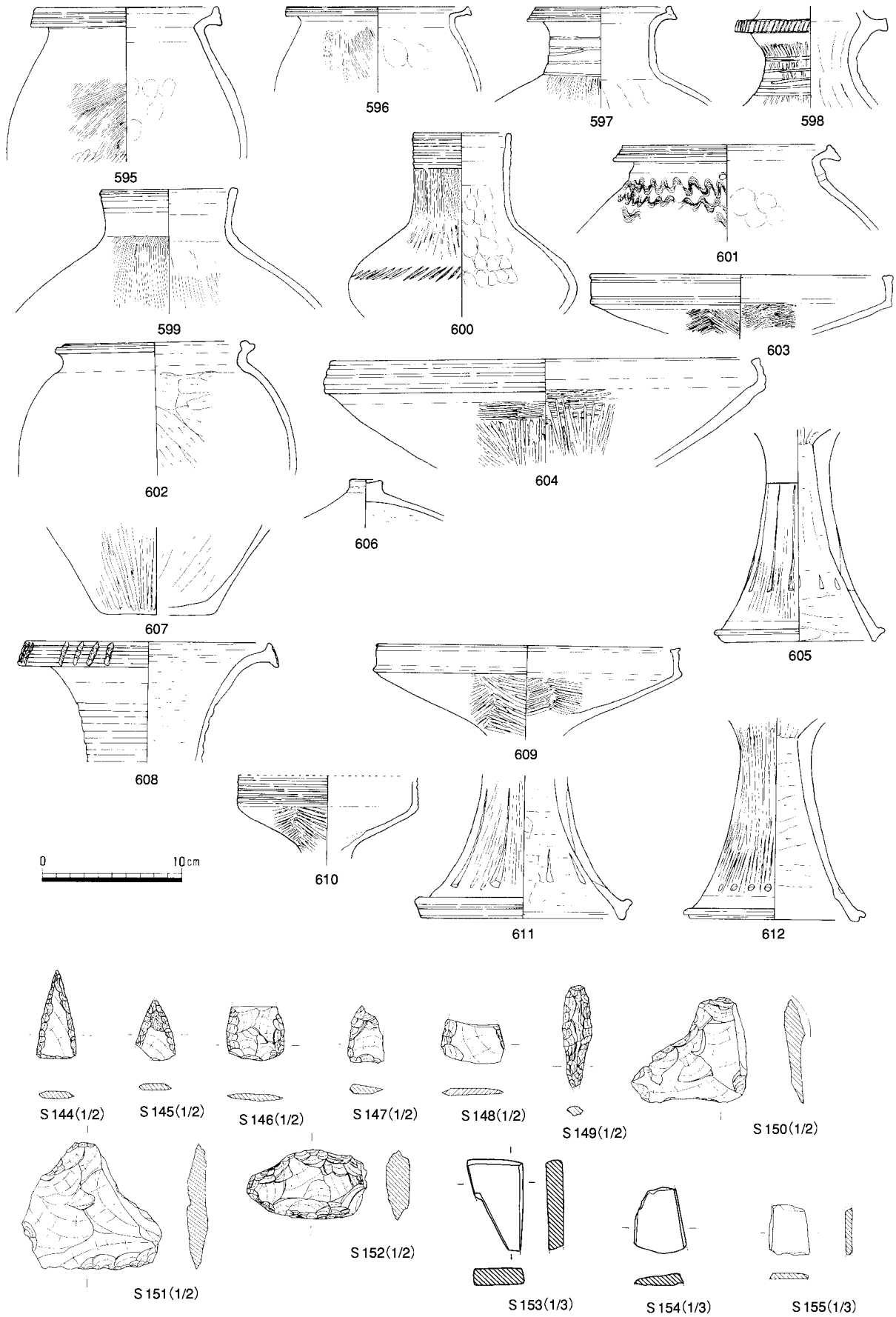
第183図 豎穴住居66出土遺物4 (1/4)



第184図 竪穴住居66出土遺物 5 (1/4)



第185図 豎穴住居66出土遺物6 (1/4)



第186図 竪穴住居66出土遺物7 (1/4・1/2・1/3)

ラミガキが認められる。559は、口径13.4cmを測る壺である。外面調整は粗いタテハケ、内面は、押圧とナデを施している。560は、口径10.2cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施している。561は、口径12cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文、胴部に刺突文を施文する。外面調整はタタキ後タテハケを施している。562は、口径22cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文を施している。563は、壺の胴部片である。外面調整は、屈曲部上半にタタキ後タテヘラミガキ、以下ヨコヘラミガキを施している。内面は、屈曲部上に押圧、以下ヨコヘラケズリを行っている。564は、口径15cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文と肩部に櫛描波状文を施している。565は、推定口径22.8cmを測る甕である。口縁部は、頸部「く」の字状に屈曲し端部を水平近くくに拡張する。566は、口径12cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施している。肩部には、円孔を施している。567は、推定口径12.4cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に浅い条線を施している。外面調整はタタキ後タテハケを施している。568は、口径14.4cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文、胴部に刺突文、肩部に櫛描波状文を施文する。569は、口径13cm、脚径10cm、器高17.7cmを測る高杯である。口縁部は、浅い杯部から上方に立ち上がる。裾部には、貫通しない透かしが7個対で4ヵ所認められる。570は、口径12.7cmを測る高杯である。外面調整は、多角形のヘラミガキを施している。571は、推定口径28.5cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から内傾し端部を拡張する。572は、推定口径38cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から立ち上がり端部を拡張する。573は、脚径8.1cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させて立ち上がる。文様は、篋描沈線文と透かしを施している。574は、脚径15.7cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させて立ち上がる。文様は、柱状部と裾部に円形の透かしを施している。575は、高杯の柱状部片である。文様は、篋描沈線文と透かしを施している。576は、脚径12.8cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させて立ち上がり、外方に拡張する。文様は、裾部に篋描沈線文と透かしを施している。577は、高杯の柱状部片である。578は、推定台径24.4cmを測る器台である。579は、口径17cmを測る器台である。口縁部は、口縁端部に平坦面を残し斜め下方に拡張する。文様は、口縁端部平坦面に凸線文を施している。580は、底径6.2cmを測る底部片である。内面調整は、タテヘラケズリで、底面にはヨコヘラケズリを施している。581は、底径8.4cmを測る底部片で、底は張りだしている。内面調整は、タテヘラケズリで、底面には押圧を施している。582は、底径6.3cmを測る底部片で、上げ底となる。内面調整は、タテヘラケズリで、底面には押圧を施している。583は、底径6.3cmを測る底部片で、底は張りだしている。底部外面にはヘラミガキを施している。内面にはタテヘラケズリで、底面には押圧を施している。584は、底径11cmを測る底部片で、底は張りだしている。底部外面にはヘラミガキを施している。内面にはタテヘラケズリで、底面には押圧を施している。585は、底径6.2cmを測る底部片である。内面調整は、タテヘラケズリで、底面にはヨコヘラケズリを施している。586は、底径9.8cmを測る底部片である。587は、底径7cmを測る底部片である。外面調整は細かいタテハケ後タテヘラミガキ、内面にはタテヘラケズリを施している。588は、底径5.8cmを測る底部片である。

S146は、残存長さ19.0mm、幅21.0mm、厚さ3.0mm、重さ1.58gを測るサヌカイト製の石鏃である。S153は、残存長さ49.5mm、幅29.0mm、厚さ9.0mm、重さ17.94gを測る流紋岩製の砥石である。S155は、残存長さ27.0mm、幅22.0mm、厚さ3.5mm、重さ3.55gを測る流紋岩製の砥石である。

M12は、残存長さ6.9mm、幅2.1mm、厚さ0.2mm、重さ59.05gを測るが、種類は不詳である。

竪穴住居66b(第169図)は、住居64の上側に長さ250cmにわたり壁帯溝を検出する。調査時において

は、住居65を挟んで西に位置する住居66dと別個の住居としていたのである。これは、当該住居が住居65の西コーナー部分においてピットjeを認めるが、切られていると判断していたのである。また、住居66dにおいては、住居65の上に構築されたと思われるのである。そして、整理過程においては、両者の壁帯溝のプランに変化が無く、壁帯溝の高さもほぼ同じことから同一の住居の可能性はある。しかしながら、明確に把握できなかったことから別のものとしたのである。ピットは、ke、le、me、neの4本が認められるが、いずれも床面と思われる高さから30cmほど上面で検出されている。

竪穴住居66c(第169図)は、住居66aに西側に続いて位置する。長さ900cmの壁帯溝を確認する。ピットは、第173図に示したao～goの7個検出されるが、組み合わせものについては判断できなかった。しかしながら、これらのピットが、柱穴と用いられたと思われる。

出土遺物(第185図)は、591が壁帯溝からの他は埋土中からの出土である。589は、口径14cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文、胴部に櫛描きの波状文と直線文を施文する。590は、口径13.9cmを測る壺である。口縁部は、頸部から直口し端部を肥厚させる。591は、底径5.2cmを測る底部片である。592は、推定口径46cmを測る高杯である。口縁部は丸みを持ち、端部を拡張させる。

竪穴住居66dは、住居65の西側に位置し、住居66bで記したように同一のものとしての把握の可能性はある。長さ400cmほどの壁帯溝を検出している。

出土遺物(第185図)は、床面から1点検出されている。593は、推定口径16cmを測る蓋である。文様は、内面に凹線文が認められる。

竪穴住居66eは、住居65の西側に位置し、280cmほどの長さ壁帯溝が確認されている。

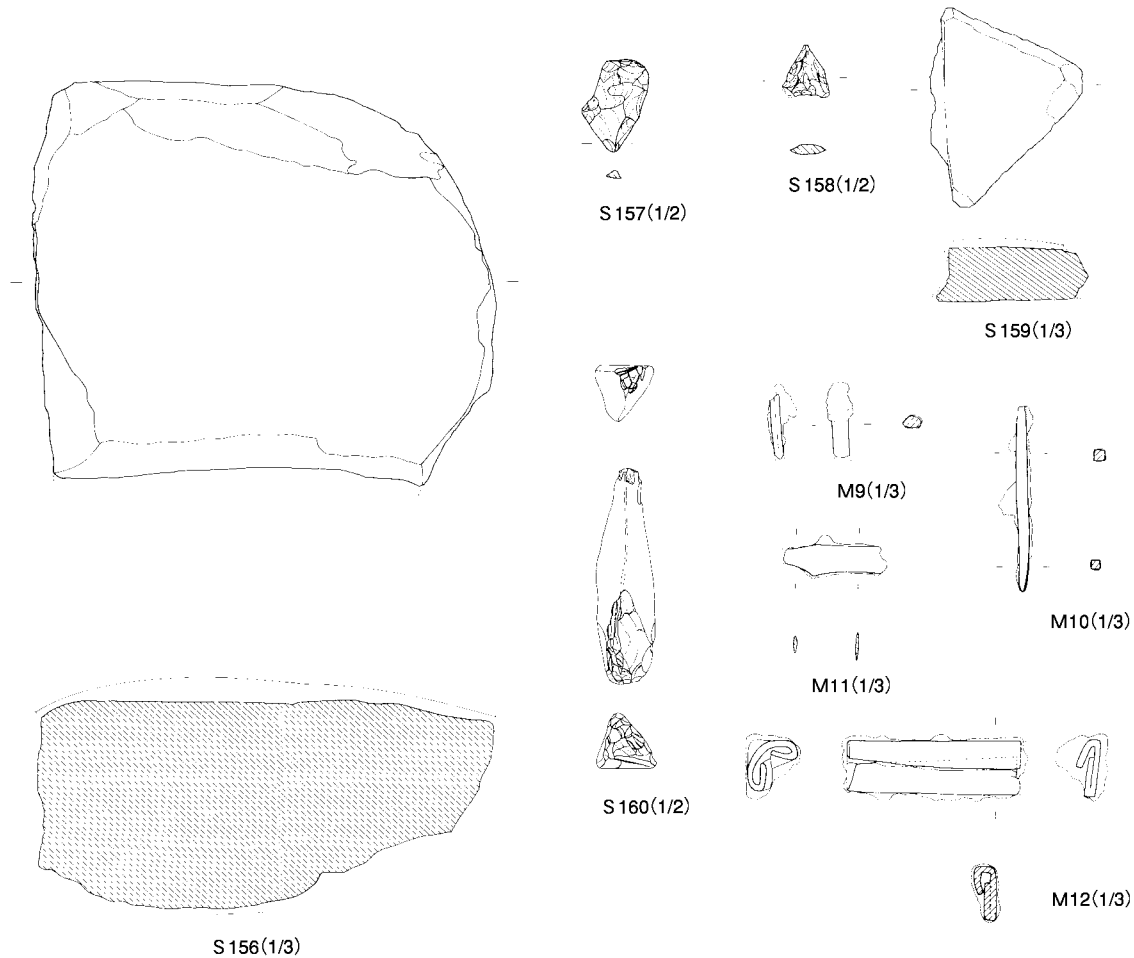
竪穴住居66fは、住居65の西側に位置し、540cmほどの長さに壁帯溝が確認されている。プラン的には、住居64に関係すると想定されるが、壁帯溝の有無及び床面お差が15cmほど認められることから、異なるものとして扱ったのである。

出土遺物(第185図)は、埋土中から一点検出されている。594は、底部径8.3cmを測る底部片で、底は張りだしている。

竪穴住居66gは、住居66fの南西側に位置し、400cmほどの長さに壁帯溝が確認されている。

竪穴住居66hは、住居66cの西側に続いて位置する。住居は、逆L字状に長さ880cmにわたって検出されている。ピットは、第173図に示すように柱痕跡を断面に残すものが多く認められている。このことから、これらのピットが、柱穴と用いられたと思われるが、組み合わせものについては判断できなかったのである。

出土遺物(第186・187図)は、595がピットi、596がピットnからで、他は埋土中からの出土である。なお、608～612は、上方から流入の可能性のある土器である。石器は、S157とS158が床面からで、他は埋土中からの出土である。595は、口径12.8cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に3条の凹線文を施している。外面調整は、胴部半ばまでハケ、以下タテヘラミガキを認める。596は、口径13cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施している。597は、口径9.6cmを測る壺である。口縁部は、頸部が直口し、外反して端部を拡張させる。598は、壺である。口縁部は、頸部が弓状に屈曲し、鏝を設けさらに上方に拡張させる。599は、口径9.7cmを測る壺である。口縁部は、頸部が直口する。600は、口径9.7cmを測る壺である。文様は、口縁部に凹線文、胴部に刺突文を施している。601は、口径14.7cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文、肩部に3段の櫛描波状文を施している。602は、口径12.6cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施している。内



第187図 竪穴住居66出土遺物 8 (1/2・1/3)

面調整は、頸部下からヘラケズリを施している。603は、口径21.7cmを測る高杯である。口縁端部は、肥厚させる。604は、口径30.4cmを測る高杯である。外面調整はヨコとタテのヘラミガキ、内面にはヘラケズリ後ヨコとタテのヘラミガキを施している。605は、脚径10.8cmを測る高杯である。裾端部は立ち上がり、外に張りださせる。606は、つまみ部で径3cmを測る蓋である。607は、底径8cmを測る底部片である。内面調整は、タテヘラケズリを施している。608は、口径17.3cmを測る器台である。文様は、口縁端部外面に凹線文と棒状浮文、頸部には凹線文を施文うる。609は、口径21.6cmを測る高杯である。口縁端部は、肥厚させる。内外面とも調整は、多角形のヘラミガキを施している。610は、推定口径12.6cmを測る高杯である。口縁部は、浅い杯部から立ち上がる。611は、脚径10.8cmを測る高杯である。裾端部を立ち上がり、外に張りださせる。612は、脚径12cmを測る高杯である。裾端部を立ち上がり、外に張りださせる。文様は、貫通しない円孔を施している。

S157は、長さ24.5mm、幅17.5mm、厚さ3.8mm、重さ1.33gを測るサヌカイト製の石錐である。先端が磨滅している。S158は、長さ14.0mm、幅12.0mm、厚さ3.0mm、重さ0.44gを測るサヌカイト製の石鏃で、一部欠損している。S159は、長さ97.0mm、幅61.0mm、厚さ21.0mm、重さ117.63gを測る流紋岩製の砥石である。S160は、長さ86.0mm、幅23.5mm、厚さ22.0mm、重さ46.96gを測るホルンフェルス製の敲石である。細い先端側は、磨滅した状態が観察できる。

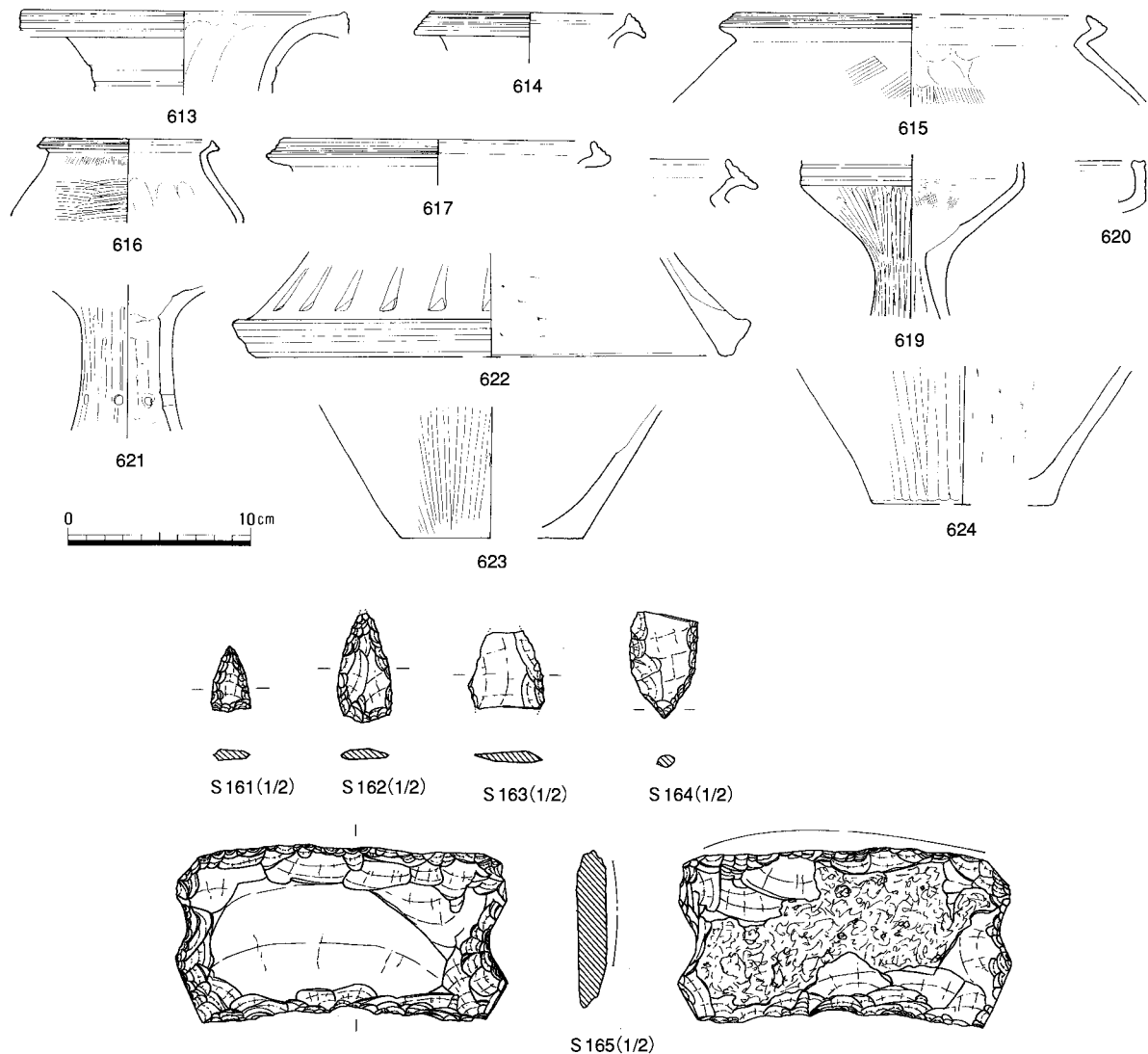
163～624は、第169図土層断面図B—B'に示した、集石部分から検出されたものである。613は口

径17.5cmを測る壺である。614は口径10.9cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施文する。615は、推定口径19.5cmを測る甕である。616は、口径9.2cmを測る甕である。外面調整は頸部下にタテハケ、以下ヨコヘラミガキを施している。617と618は、拡張する口縁端部をゆうする甕の破片である。619と620は、高杯の破片である。621は、脚柱部の破片で、円孔の透かしを設ける。622は、器台片で貫通しない、透かしを設けている。623と624は、底部片である。

S161～165は、住居66a～hの検出過程で出土した石器である。S161は、長さ18mm、幅11mm、厚さ3.7mm、重さ0.68gを測るサヌカイト製の石鎌である。S162は、長さ30.5mm、幅15mm、厚さ3.5mm、重さ1.50gを測るサヌカイト製の石鎌である。S163は、残存長さ22mm、幅21mm、厚さ3mm、重さ1.47gを測るサヌカイト製の石鎌で、前端を欠失している。S164は、長さ29mm、幅18.5mm、厚さ3.5mm、重さ2.75gを測るサヌカイト製の石錐である。S165は、長さ91.5mm、幅49.5mm、厚さ10mm、重さ70.65gを測るサヌカイト製の石包丁である。

竪穴住居67 (第189図)

竪穴住居67は、住居61の南東上方に位置し、西側で住居68と重複している。規模は、長さ730cm



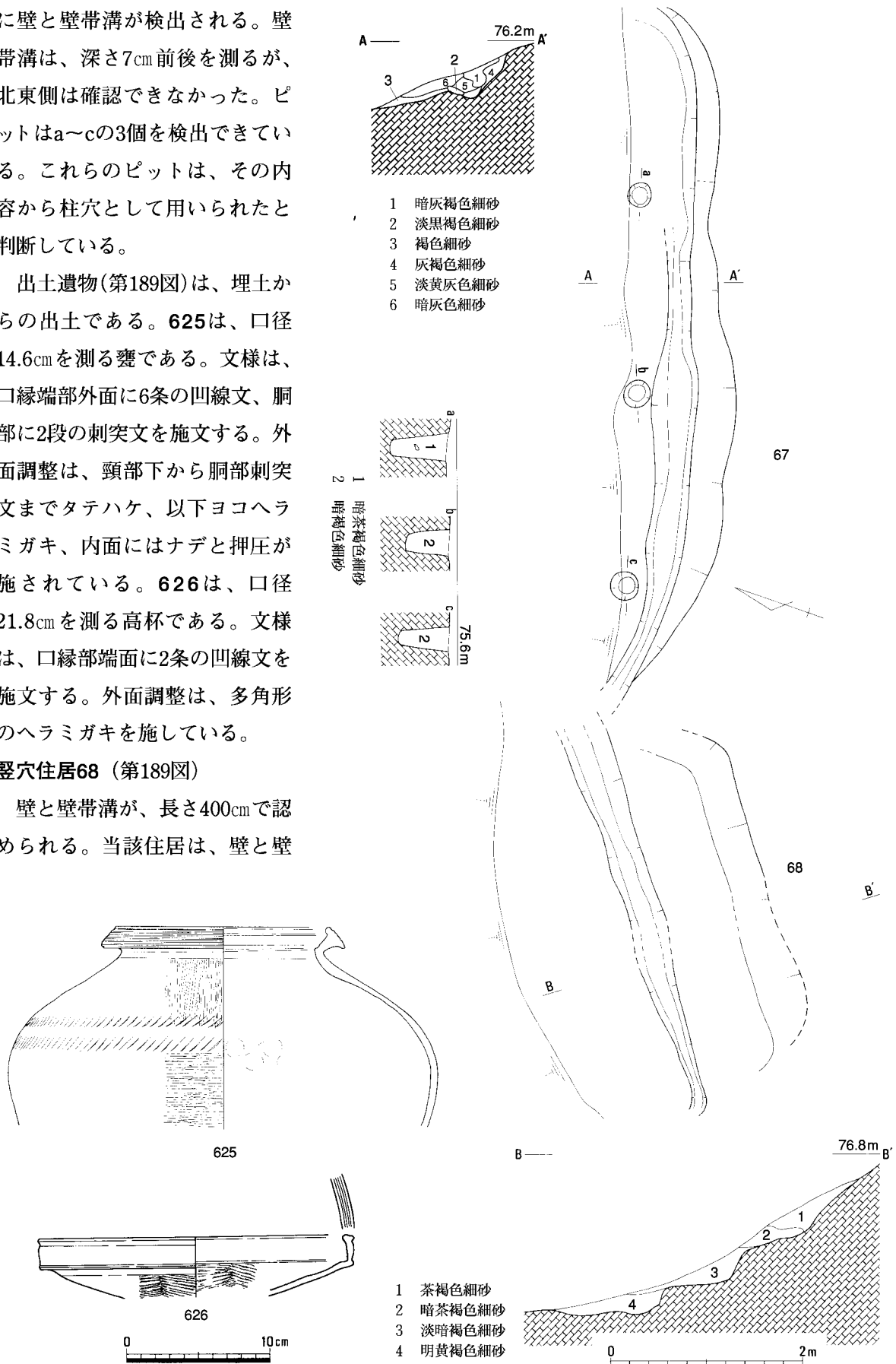
第188図 竪穴住居66出土遺物9 (1/4・1/2)

に壁と壁帯溝が検出される。壁帯溝は、深さ7cm前後を測るが、北東側は確認できなかった。ピットはa~cの3個を検出できている。これらのピットは、その内容から柱穴として用いられたと判断している。

出土遺物(第189図)は、埋土からの出土である。625は、口径14.6cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に6条の凹線文、胴部に2段の刺突文を施文する。外面調整は、頸部下から胴部刺突文までタテハケ、以下ヨコヘラミガキ、内面にはナデと押圧が施されている。626は、口径21.8cmを測る高杯である。文様は、口縁部端面に2条の凹線文を施文する。外面調整は、多角形のヘラミガキを施している。

竪穴住居68 (第189図)

壁と壁帯溝が、長さ400cmで認められる。当該住居は、壁と壁



第189図 竪穴住居67・68(1/60)・出土遺物(1/4)

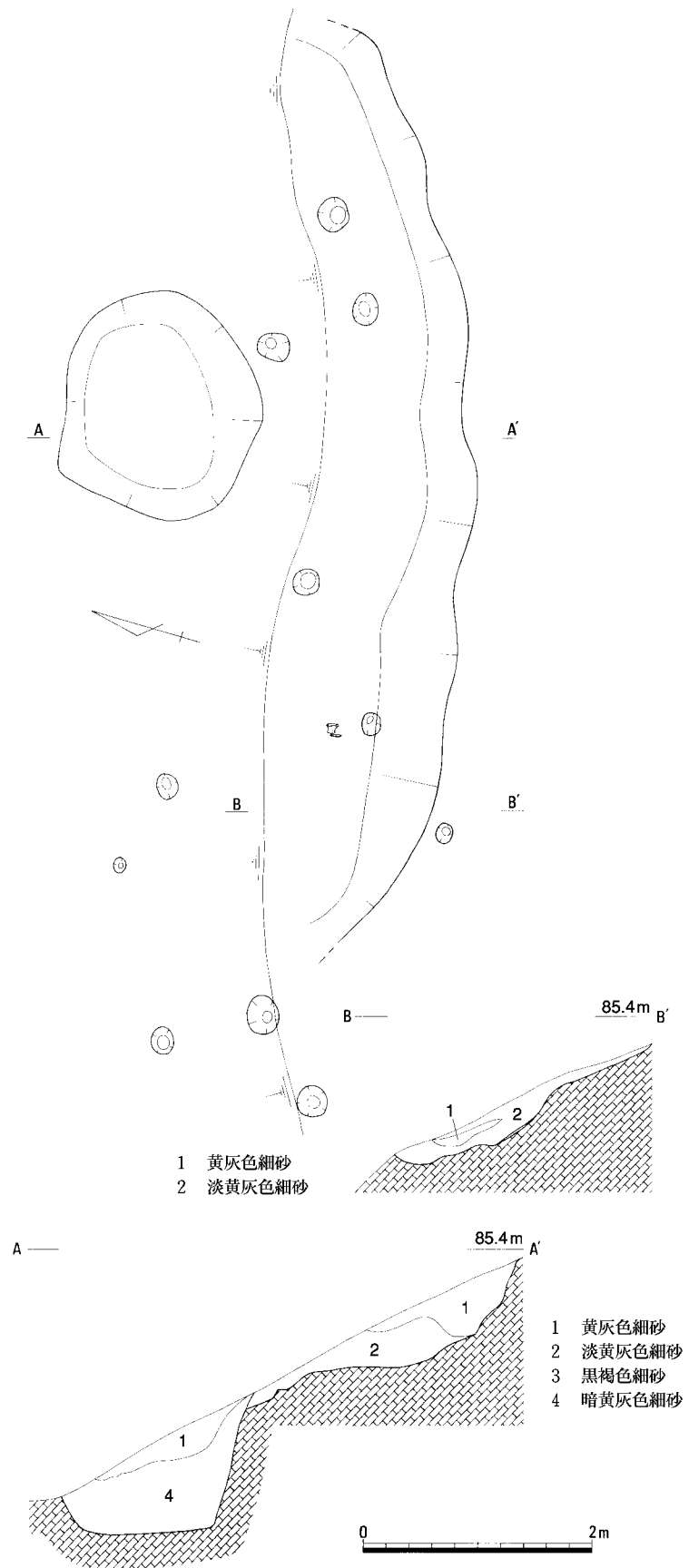
帯溝が離れていることから別個住居が想定される。第189図の断面図B—B'では、第3層が上段部分、第4層の窪みが壁帯溝にそれぞれ相当するのである。このことから、床面レベルが異なり、土層堆積状態も異なる住居を示している。しかしながら、当該住居の存在する地点は、花崗岩の最も崩落しやすいところに相当する。降雨においてもかなりの影響を受けるのである。このようなことから、詳細についての判断ができないのである。

段状遺構 6 (第190図)

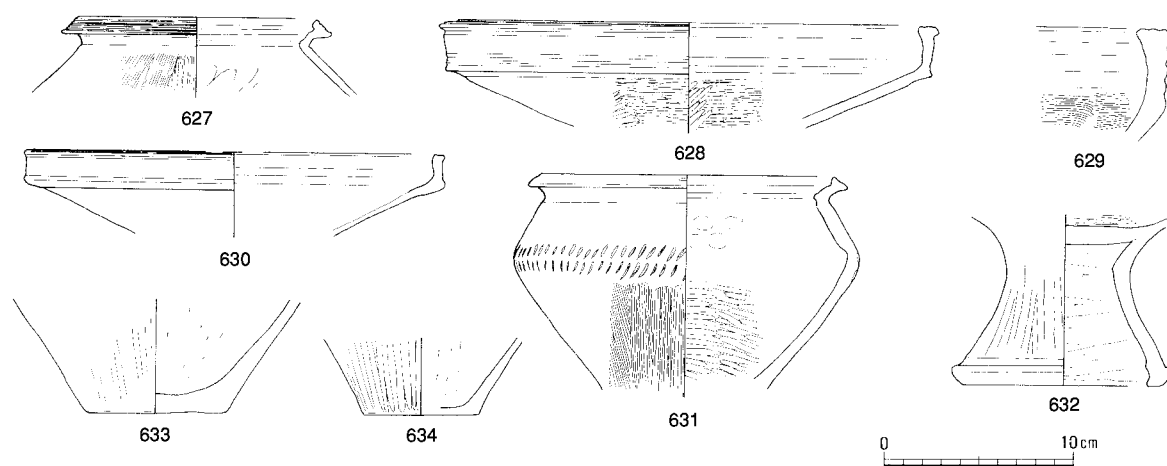
段状遺構6は、住居66hの南上方に位置する。規模は、長さ800cmほどにわたり検出される。第190図で示すように、断面においては緩やかな壁面となり、下端も腕状に丸くなっている。断面図A—A'では比較的平坦を示すが、基本的にはB—B'の断面のような凹凸がある状態である。

ピットは、11個ほど図で表示しているが、ほとんど数センチの浅い穴である。住居68においても記したが、この地点もそれと同様な基盤層の状況である。このことから、これらの浅いピットは、遺構として取り扱うものはかなり減ると思われるのである。

出土遺物(第191図)は、すべて、埋土中からの出土である。627は、口径12.6cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を拡張させる。文様は、口縁端部外面に4条の凹線文を施文する。外



第190図 段状遺構 6 (1/60)

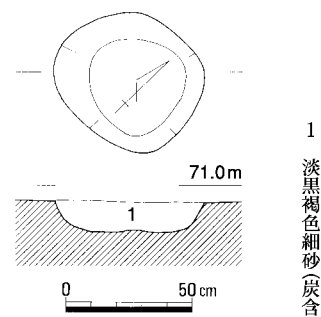


第191図 段状遺構6出土遺物(1/4)

面調整はタテハケ、内面にはナデを施している。628は、口径26.4cmを測る高杯である。口縁部は杯部から立ち上がり、端部を肥厚して拡張させる。文様は、口縁部端面に深い部分が3ヵ所ほど認められる。口縁部外面には明瞭な凹部を示さないが、凹線状の凹凸が認められる。口縁部端面に凹線文を施す。調整は、内外面とも多角形のヘラミガキを施している。629は、高杯の小片である。口縁部を内側に拡張気味とする。文様は、口縁部端面と口縁部外面に凹線文を施文する。630は、口径22.2cmを測る高杯である。口縁部は杯部から立ち上がり、端部を肥厚させる。口縁外面は、平坦にくぼんだ形状を示している。文様は、口縁部端面に2条の凹線文を施している。631は、口径15.5cmを測る台付鉢である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を拡張させる。文様は、胴屈曲部に2段の刺突文を施文する。外面調整は胴部文様下からタテハケ、内面は胴屈曲部まで押圧、以下ヨコヘラミガキを施している。632は、台径10.6cmを測る台部片である。裾端部は、拡張させ立たせる。外面調整はタテヘラミガキ、内面はヨコヘラケズリを行っている。633は、底径7.7cmを測る底部片である。外面調整はタテヘラミガキで、底部に丁寧なヘラミガキ、内面にはタテヘラケズリを施している。634は、底径6cmを測る底部片である。外面調整はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリを施している。

土壌37 (第192図)

土壌37は、住居58の東コーナー近くに位置する。規模は、55×60cm、深さ11cmを測る。形態は、円形を呈する。検出面は、これより70cmほど上層で検出されている溝4の面から掘り下げた確認である。このことから、住居58のプラン検出面と同じ高さにおいて認められたのである。他の土壌が、伴出遺物や住居と重複で時期を判断することができてきている。しかし、当該土壌については、検出面からの時期の把握である。このようなことから、土壌が新しい時期ではなく、遺跡の主体を占める時期に属することが思考されるのである。



第192図 土壌37(1/30)

土壌38 (第193図)

土壌38は、住居62の東側に重複して位置する。規模は、15×24.2cm、深さ59cm前後を測る。形態は方形を呈し、底面は平坦となる。重複する住居66とは、第193図の土層断面図E-E'に示すように、

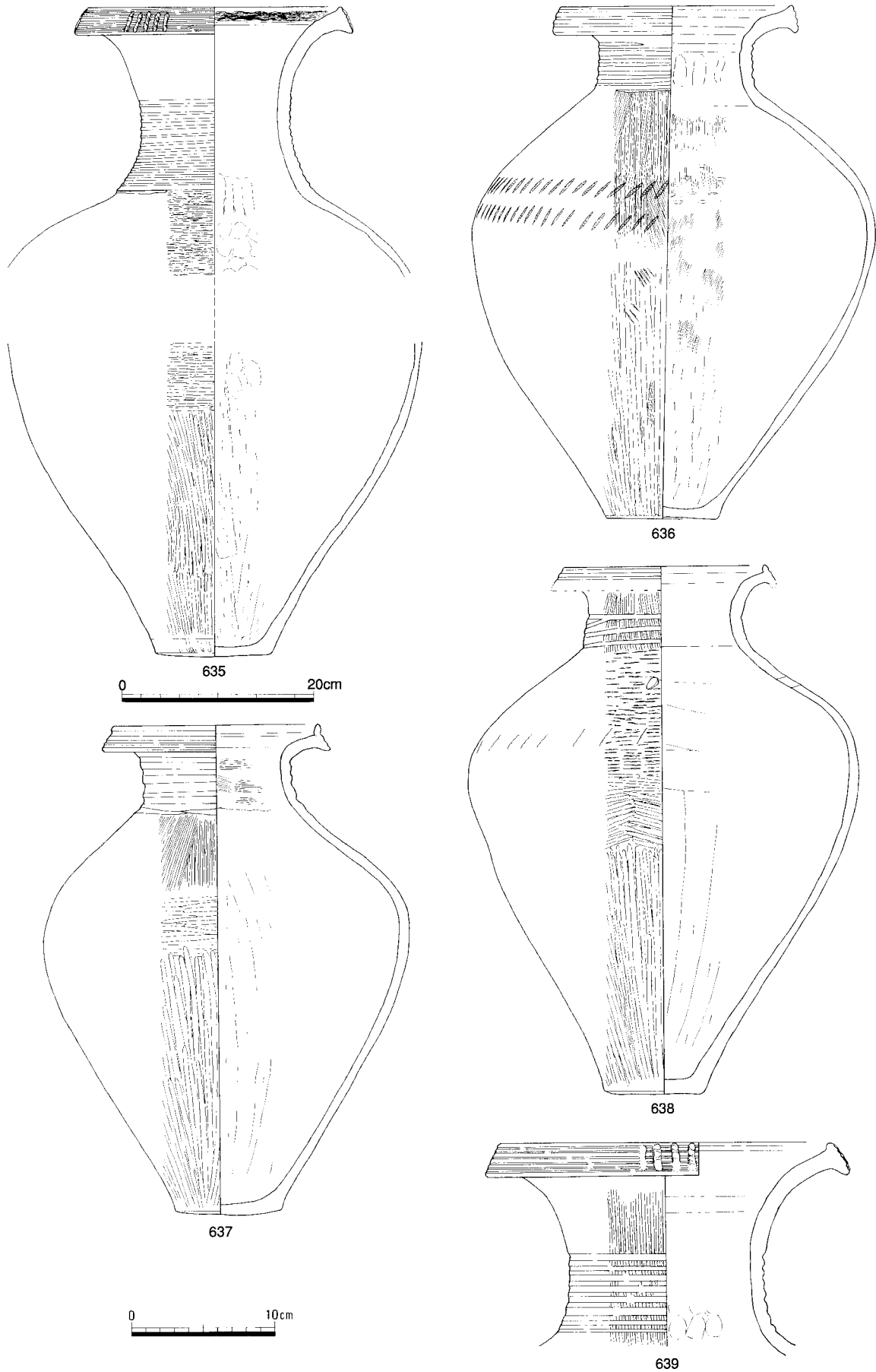
当該土壌が切っていることが示された土層の関係になっている。土壌内には、土器が充填した状態で確認されたが、この状態は土壌内全体にはではない。第193図の平面図においては、不規則な状態ではなく、辺をもっていることが判断される。土壌内に投げ捨てられたのではなく、何らかの容器あるいは囲いの存在が窺われるのである。土壌底での土器の状態は、断面図などで示すとおり浮いた状態で凹凸がないことが理解できる。このようなことから、土壌内には、土層断面図の第12層を意識的に敷いて、その面から何らかの囲いとなる構造物を造ったのである。そして、その中に検出された土器を充填した、結果、このような検出状態となったことが思考されるのである。

出土遺物(第194~199図)は、土壌内からの出土である。635は、口径26.5cm、底径12.4cmを測る壺である。胴部での接合点がなく、器高は不明である。底部は、張りだしている。外面調整は、肩部下から胴部半ばにヨコ、以下タテヘラミガキ、を行っている。内面は、胴半ばまで押圧とナデ、以下タテヘラケズリを施している。636は、口径16cm、底径7.6cm、器高35.7cmを測る壺である。底部は、上げ底気味となる。文様は、口縁端部外面と頸部には7条の螺旋による凹線文が施文される。

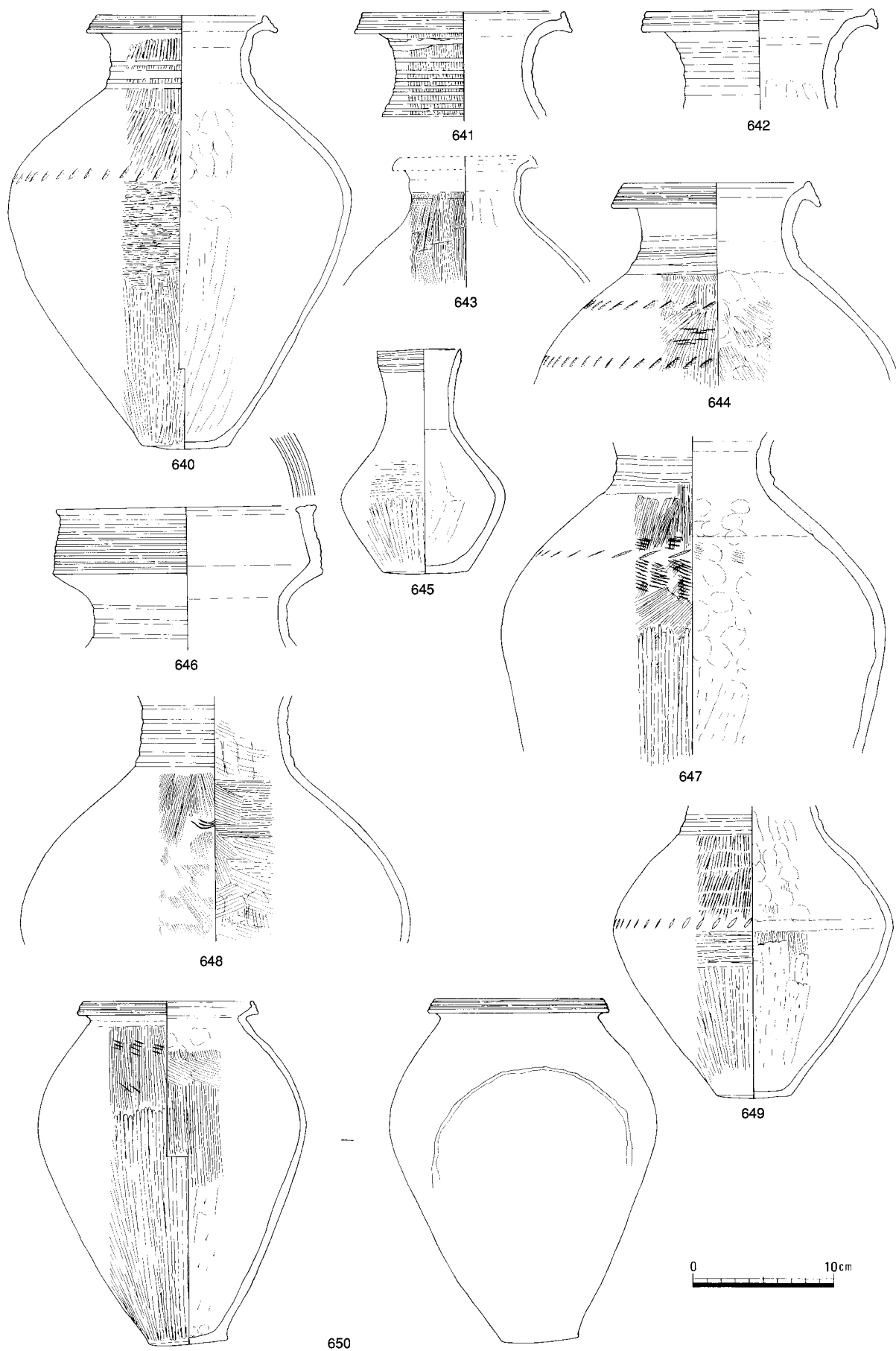


第193図 土壌38(1/40・1/60)

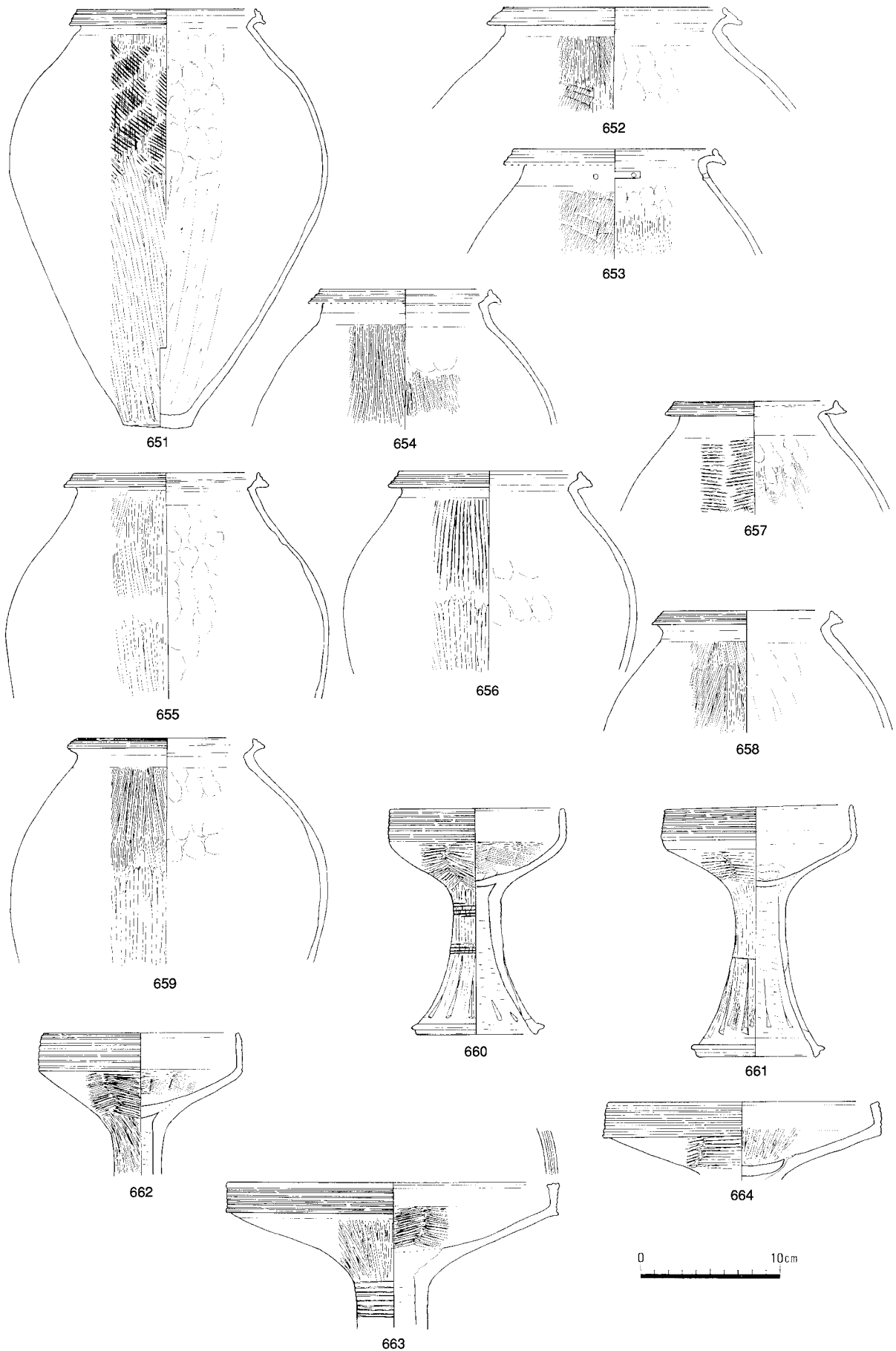
内面調整は、頸部と肩部にナデと押圧、後胴部下まで細かいハケ、以下にタテヘラケズリを行っている。637は、口径14.2cm、底径7.4cm、器高34cmを測る壺である。底部は張りだす。文様は、口縁端部外面と頸部には螺旋による凹線文が施文される。内面調整は、頸部にヨコハケ、肩部にナデ、以下タテヘラケズリを行っている。638は、口径14.1cm、底径7cm、器高36.6cmを測る壺である。底部は、張りだし気味である。文様は、口縁端部および頸部外面には螺旋による凹線文が施文される。639は、口径23cmを測る壺である。口縁部は、頸部が弓状に外反し、端部は拡張させる。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文を施している。外面調整はタテハケ、内面には押圧とナデを施している。640は、口径11.6cm、底径5.9cm、器高30.7cmを測る壺である。底部は張りだす。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文が施文される。641は、口径14.4cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文を施している。外面調整は、タテハケを施している。642は、口径15.9cmを測る壺である。643は、推定口径9.4cmを測る壺である。外面調整はタテハケ、内面にはナデを施している。644は、口径13cmを測る壺である。文様は、口縁端部外面と頸部に凹線文を施している。645は、口径6cm、底径6.1cm、器高16cmを測る壺である。底部は、張りだし気味となる。内面調整は、肩部下からタテヘラケズリを行っている。646は、口径18.4cmを測る壺である。文様は、口縁部端面と口縁端部外面、頸部にそれぞれ凹線文を施している。647は、頸部から胴部の壺の破片である。外面調整はタタキ後胴半ばまでタテハケ、以下タテヘラミガキ、内面には押圧、胴半ば下からタテヘラケズリを行っている。648は、頸部から胴部の壺の破片である。649は、底部径5.2cmを測るの壺である。文様は、頸部に凹線文、胴部に刺突文を施文する。外面調整は、胴屈曲部に幅2.5cm前後のヨコヘラミガキを施している。650は、口径12cm、底径5.5cm、器高24.4cmを測る甕である。外面調整は、タタキ後頸部下から胴部上半にタテハケを施している。なお、胴部には大きく穴を開けている。651は、口径12.6cm、底径4.9cm、器高19.5cmを測る甕である。外面調整は、胴部上半までタテハケ後タタキを施している。652は、口径15.8cmを測る甕である。外面調整はタテハケ、内面には押圧が認められる。653は、口径14.3cmを測る甕である。外面調整はタテハケ、内面には押圧、タテハケを施している。654は、口径12.4cmを測る甕である。外面調整はタテハケ、内面には押圧、タテハケを施している。655は、口径13.2cmを測る甕である。外面調整は、胴部上半までタテハケ、以下タテヘラミガキを施している。内面には押圧とナデが認められる。656は、口径13cmを測る甕である。外面調整は、胴部上半までタテハケ、以下タテヘラミガキを施している。内面には、押圧が認められる。657は、口径11.6cmを測る甕である。外面調整はタタキ、内面には押圧、ナデ、細かいタテハケが認められる。658は、口径12.2cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施している。659は、口径12.6cmを測る甕である。文様は、口縁端部外面に凹線文を施している。660は、口径12.4cm、脚径8.5cm、器高16.1cmを測る高杯である。口縁部は、浅い杯部から上方に立ち上がる椀状のものである。裾部は、端部を外方に張りださせる。661は、口径13.3cm、脚径8.4cm、器高17.9cmを測る高杯である。口縁部は、浅い杯部から上方に立ち上がる椀状のものである。裾部は、端部を外方に張りださせる。柱状部から裾部には、篋描沈線文と透かしが施文されている。662は、口径13.8cmを測る高杯である。口縁部は、浅い杯部から上方に立ち上がる椀状のものである。裾部は、端部を外方に張りださせる。文様は、柱状部には、篋描沈線文が施文されている。663は、口径23.6cmを測る高杯である。口縁端部は、肥厚気味にさせる。柱状部には、篋描沈線文が施文されている。664は、口径19.4cmを測る高杯である。外面調整は多角形のヘラミガキ、内面にはタテヘラミガキを施している。665は、口径33.7cmを測る高杯である。口



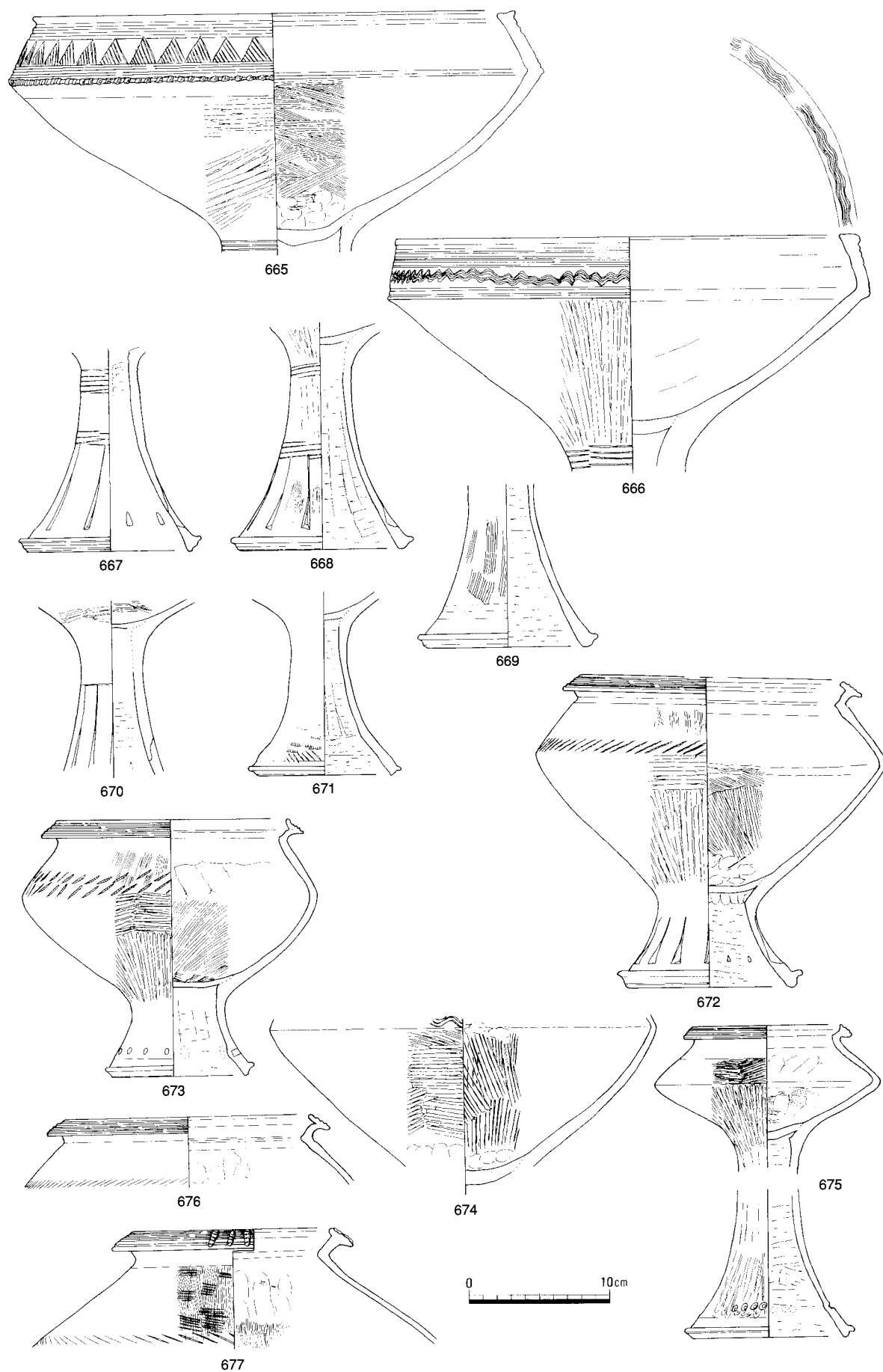
第194図 土壙38出土遺物1 (1/4・1/6)



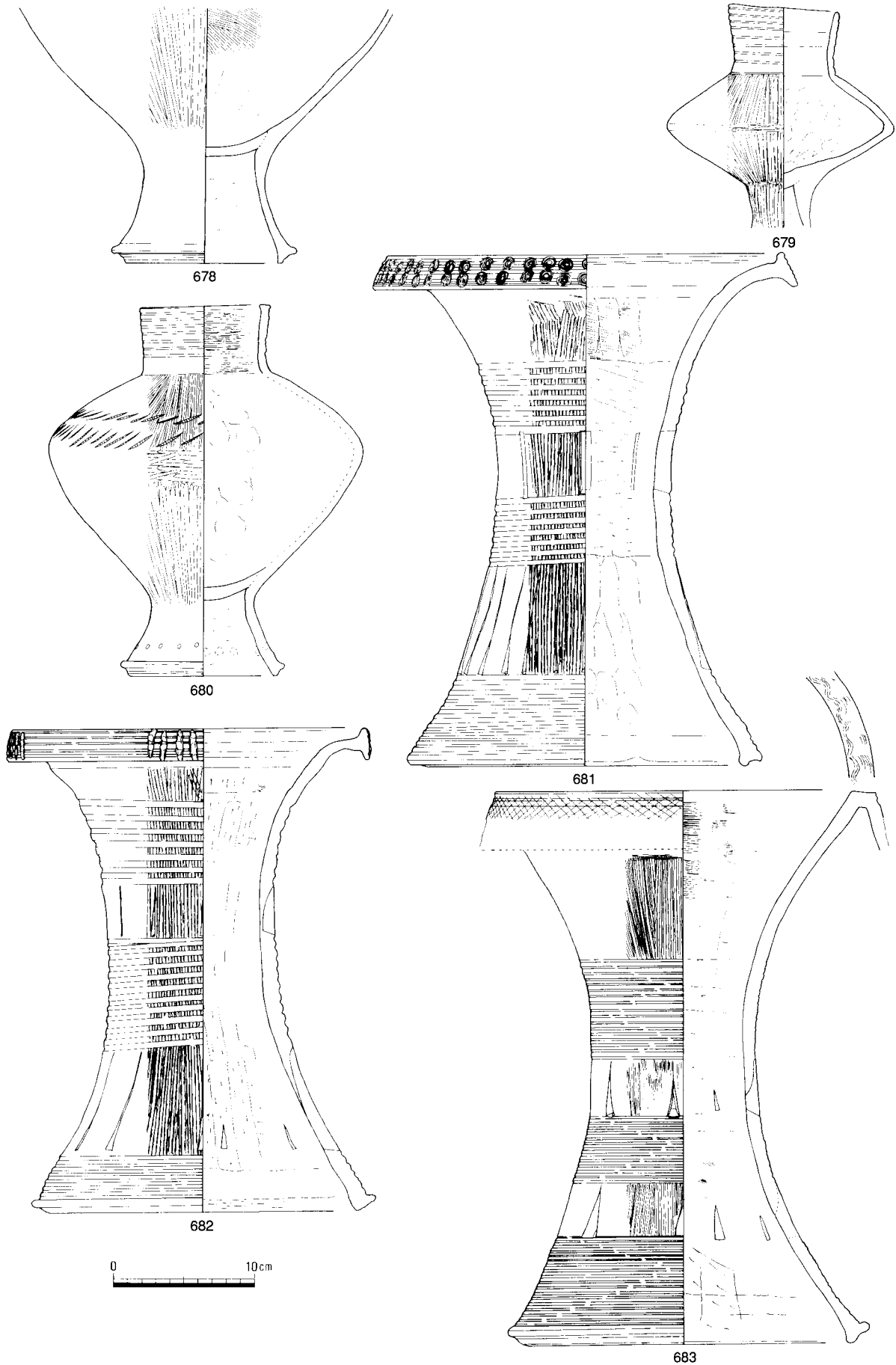
第195図 土壙38出土遺物 2 (1/4)



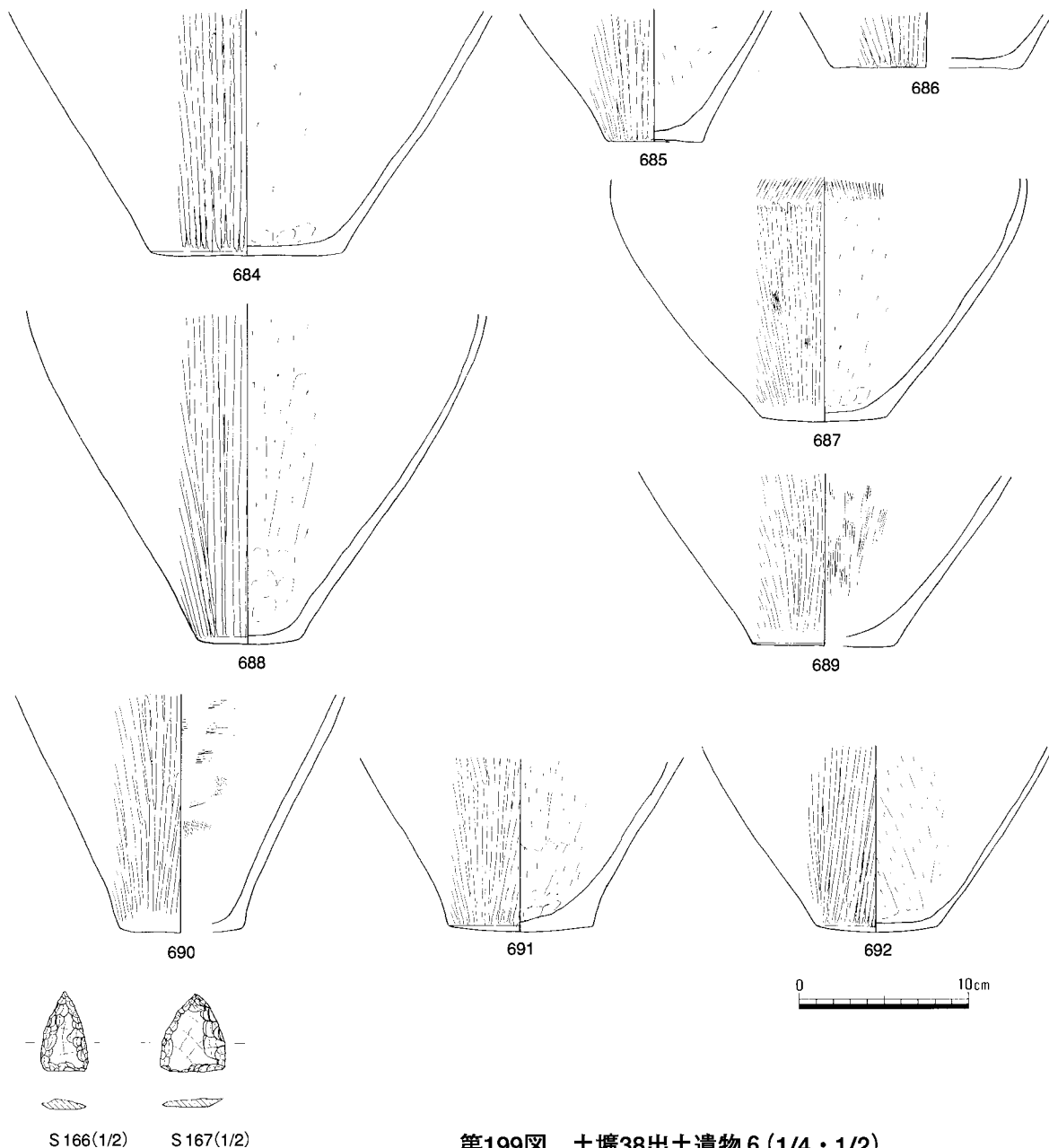
第196図 土壇38出土遺物 3 (1/4)



第197図 土壙38出土遺物 4 (1/4)



第198図 土壙38出土遺物 5 (1/4)



第199図 土壌38出土遺物6 (1/4・1/2)

縁部は、杯部から内傾して上方に立ち上がり、端部を肥厚気味にさせる。666は、口径32.5cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から内傾して上方に立ち上がり、端部を肥厚気味にさせる。667は、脚11.6cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させて立ち上がる。668は、脚11.8cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させて立ち上がる。文様は、篋描沈線文と貫通しない透かしを施している。669は、脚11.4cmを測る高杯である。裾端部は、肥厚させて立ち上がる。670は、高杯の脚部片である。671は、脚9.6cmを測る高杯である。裾端部は、外方に張りださせる。672は、口径18.6cm、台径11.8cm、器高22.2cmを測る台付鉢である。頸部は「く」の字状に屈曲し、裾端部は、外方に拡張する。文様は、口縁端部外面に凹線文、胴部には刺突文を施している。台裾部は、透かしが施される。673は、口径16.4cm、台径9.5cm、器高18.1cmを測る台付鉢である。裾端部は、外方に拡張する。文様は、台裾部に貫通しない円孔透かしが施される。674は、台付鉢の胴部破片である。外面調整は、ヨコヘラミガキが認められる。675は、口径10.6cm、台径11cmを測る台付鉢である。台部との接合面がないが、胎土、

色調が同じで出土状態から同一個体としたものである。676は、口径17.3cmを測る台付鉢である。文様は、口縁端部外面に凹線文、胴部に刺突文を施文する。677は、口径14cmを測る台付鉢である。文様は、口縁端部外面に凹線文と棒状浮文、胴部に刺突文を施文する。678は、台径11.2cmを測る台付鉢である。台端部は、立ち上がって拡張させる。679は、口径7.6cmを測る台付壺である。口縁部は、直口する。外面調整は、胴屈曲部に幅6mm前後のヨコヘラミガキを施している。680は、口径9.2cmを台径10.4cm、器高26.1cmを測る台付壺である。透かしは、貫通しない円形のものに施されている。681は、口径27.6cm、台径23cm、器高36.1cmを測る器台である。口縁端部は、下方に拡張する。裾端部は、外方に拡張させる。裾部は、27個の透かしが狭いものと広いものが交互に位置している。682は、口径24.8cm、台径21.9cm、器高34.1cmを測る器台である。口縁部は、筒部から逆「ハ」の字状に開き、口縁端部を下方に拡張する。683は、口径27cm、台径23cm、器高38.8cmを測る器台である。口縁部は、筒部から逆「ハ」の字状に開き、口縁端部に平坦面を残し斜め下方に拡張する。裾端部は、肥厚させながら拡張させる。684は、底径11.4cmを測る底部片で、底は張りだし気味となる。685は、底径5.8cmを測る底部片で、底は上げ底気味となる。686は、底径10.7cmを測る底部片である。687は、底径7.2cmを測る底部片で、底は張りだし気味となる。内面調整は、胴屈曲部までハケ、以下タテヘラケズリで底に押圧を施している。688は、底径6cmを測る底部片で、底は張りだし気味となる。689は、底径8.3cmを測る底部片で、底は張りだし気味となる。690は、底径7.4cmを測る底部片で、底は張りだし気味となる。691は、底径8.5cmを測る底部片で、底は張りだし気味となる。692は、底径7.2cmを測る底部片で、底は張りだしとなる。内面調整は、タテヘラケズリで底に押圧を施している。

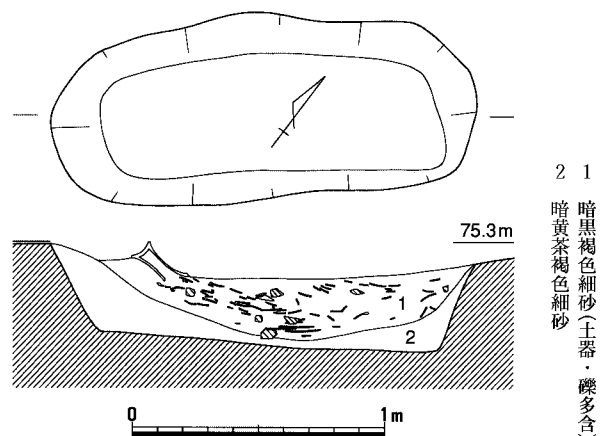
S166は、長さ23.5mm、幅14.0mm、厚さ4.8mm、重さ1.27gを測るサヌカイト製の石鏃である。S167は、長さ23.0mm、幅19.0mm、厚さ3.0mm、重さ1.35gを測るサヌカイト製の石鏃である。

土壌39 (第200図)

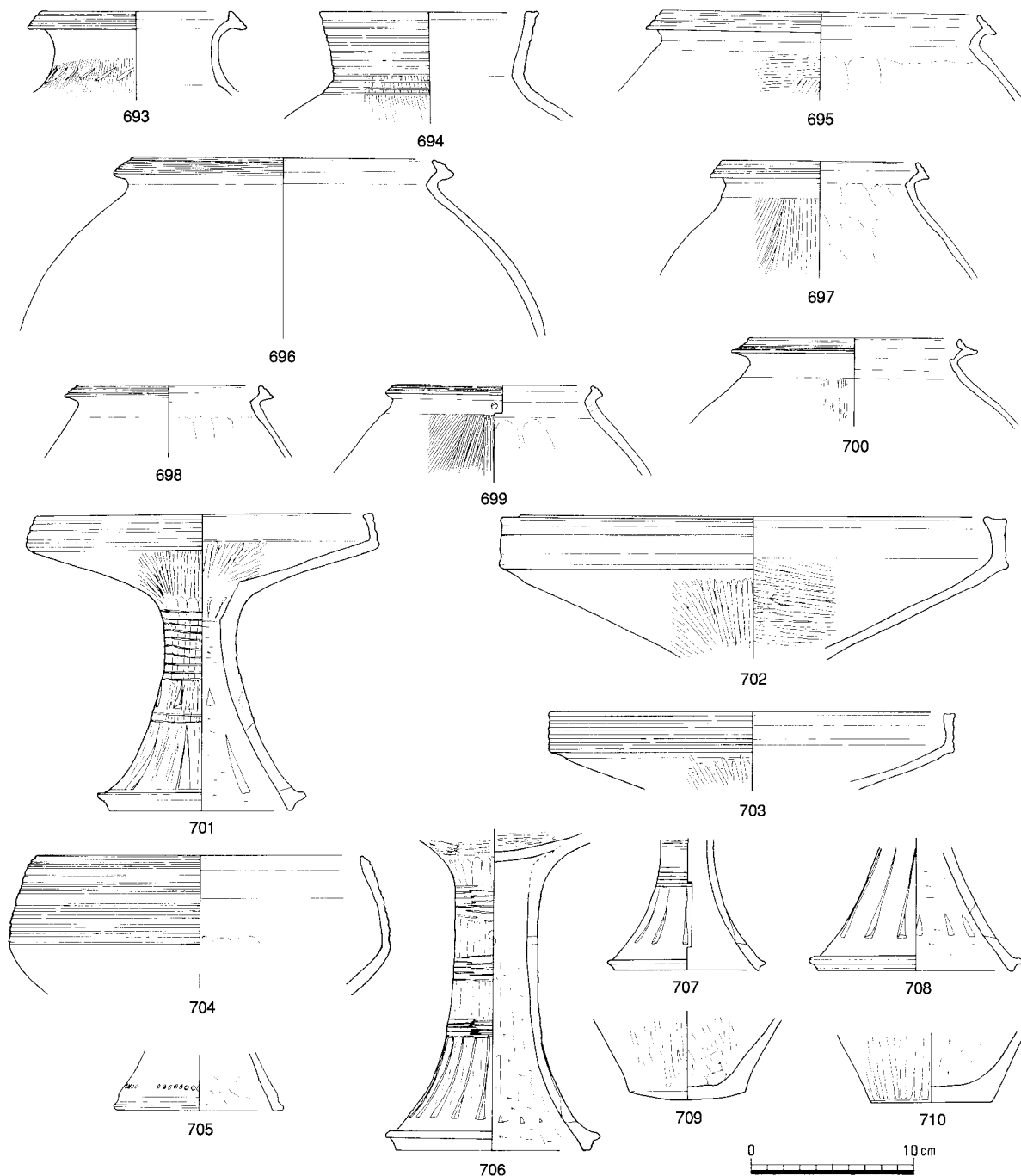
土壌39は、住居62と63の重複部分の南東上に位置している。規模は、72×168cmで深さ30cmを測り、形態は方形を呈する。遺物は、第200図の断面図に示されるように、第1層中にレンズ状堆積している。この層中には、土器の他に拳大の礫が多く含まれていたのである。

出土遺物(第201図)は、すべて土壌内からの出土である。693は、口径11.4cmを測る壺である。口縁部は、頸部が立ち上がり、端部を屈曲させて拡張する。文様は、口縁端部外面に3条の凹線文、頸部には刺突文を施文する。外面調整は、タテハケが認められる。694は、口径13.2cmを測る壺である。口縁部は、頸部が立ち上がる。

文様は、口縁端面に1条、口縁部外面に11条の凹線文を施している。外面調整は、タテハケを施している。695は、口径19.4cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁端部外面に3条の凹線文を施している。外面調整はヨコとタテのハケ、内面にはナデが認められる。696は、口径18.2cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁端部外面に5条の凹線



第200図 土壌39(1/30)



第201図 土壌39出土遺物(1/4)

文を施している。内外面調整は、剝離がひどく不詳である。697は、口径12cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁端部外面に3条の凹線文を施している。外面調整はタテハケ、内面には押圧が認められた。698は、口径11.2cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。文様は、口縁端部外面に3条の凹線文を施している。外面調整はタテハケ、内面には押圧が認められる。699は、口径12cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。頸部には、円孔が認められる。文様は、口縁端部外面に3条の凹線文を施している。外面調整はタテハケ、内面にはナデが認められる。700は、口径12.9cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張する。内面屈曲部は、強いナデによ

り張りだすようになる。文様は、口縁端部外面に4条の凹線文を施している。外面調整はハケ、内面にはナデが認められる。701は、口径20.4cm、脚径11.2cm、器高18.1cmを測る高杯である。口縁部は、杯端部を上方に立ち上がらせる。裾端部は、肥厚して立ち上がり、外方に張りださせる。文様は、口縁部外面に3条の凹線文を施している。柱状部に10条と2条の篋描沈線文、その間に貫通しない三角形の透かしを設ける。裾部には、三角形の透かしを施している。外面調整はタテヘラミガキ、内面にはヘラミガキとヨコヘラケズリが認められる。702は、口径28.4cmを測る高杯である。口縁部は、杯端部を上方に立ち上がらせ、端部を肥厚させて拡張させる。文様は、口縁端面にはナデによる凹部となり、口縁端部外面に沈線が認められる。外面調整はタテヘラミガキ、内面にはヨコヘラミガキを施している。703は、推定口径24.1cmを測る高杯である。口縁部は、杯端部を上方に立ち上がらせ、端部を肥厚させる。文様は、口縁端部外面に凹線文が認められる。外面調整はヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ、内面にはヨコヘラミガキを施している。704は、口径19.8cmを測る高杯である。口縁部は、杯部から内傾気味に大きく立ち上がる。文様は、口縁部外面に12条の凹線文を施文する。705は、脚径10cmを測る脚部片である。文様は、裾部に竹管文を施している。内面調整は、ヨコヘラケズリが認められる。706は、脚径12cmを測る脚部片である。裾端部は、肥厚させて立ち上がり、外方に張りださせる。柱状部には、円孔が2個認められる。文様は、柱状部に3段の6条、5条、5条の篋描沈線文、裾部に透かしを設けている。透かしは、貫通しないものとするものが認められる。篋描沈線文は、半回転ごとに施文している。外面調整はタテヘラミガキ、内面にはヨコヘラケズリが認められる。707は、脚径8.8cmを測る脚部片である。裾端部は、肥厚させて立ち上がらせる。文様は、柱状部に2段の螺旋による篋描沈線文、裾部に透かしを設けている。708は、脚径12cmを測る脚部片である。裾端部は、肥厚させて立ち上がり、外方に張りださせる。文様は、裾部に透かしを設けている。内面調整は、ヨコヘラケズリを施している。709は、底径7.2cmを測る脚部片で、底は張りだしている。外面調整はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリで底にナデを行っている。710は、底径7.4cmを測る脚部片で、底は平底である。外面調整はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリを行っている。

土壌40 (第190図)

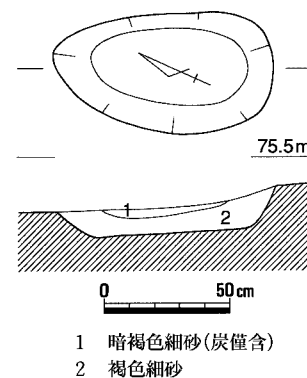
土壌40は、住居63と66bが重複している位置にある。規模は、4.8×8.7cm、深さ17cmを測り、形態は楕円形を呈する。重複する住居との関係は、住居の検出面より当該土壌が20cmほど高い位置で確認されていることから、それらの遺構よりも新しくなる。土壌内の埋土は、2層認められ、その内の第1層に炭が含まれている。

土壌41 (第202図)

土壌41は、段状遺構6の北下方に位置する。規模は、180×200cmで深さ120cmを測り、形態は不整形円形を呈する。埋土は、基本的に1層のみである。土壌の掘り込みは、基盤層からではなく、堆積土中からであることが、土層断面図で確認することができたのである。

土壌42 (第203図)

土壌41は住居66eの北東端に位置する。規模は、8.4×11.2cm、深さ41cmを測り、形態は方形を呈する。土壌内の遺物の出土状態は、第203図に示すように、主に第1層からである。遺物

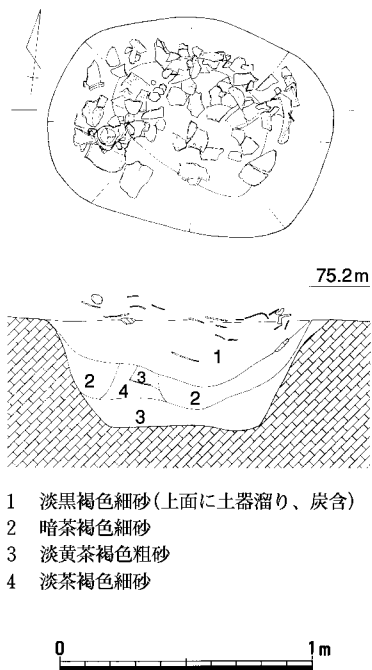


第202図 土壌41(1/30)

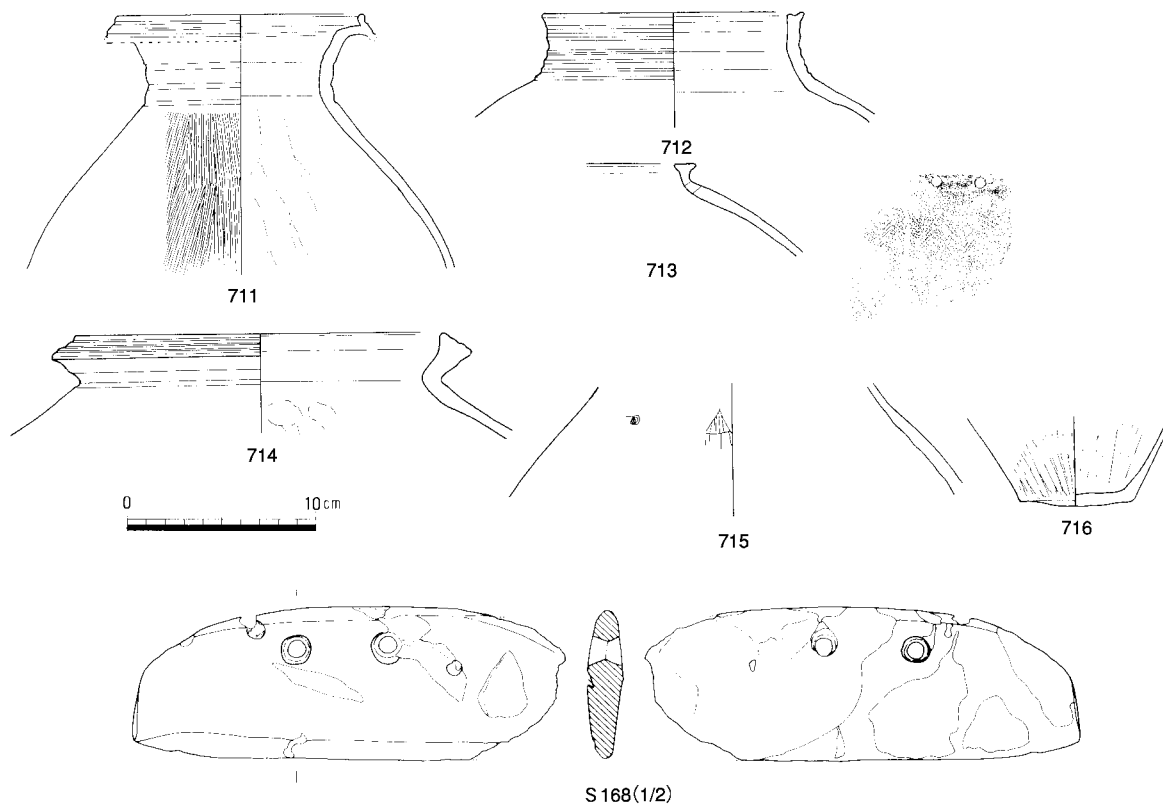
は、プラン確認レベルよりも高い位置に認められている。これは、最初に遺物が検出され土壌のプランが確認できなかったことによる。したがって、断面図に示すような状況となったのである。

出土遺物(第204図)は、すべて土壌内からである。711は、口径12.9cmを測る壺である。口縁部は、頸部が弓状に外反し、端部を拡張する。文様は、口縁端部外面に2条、頸部に3条の凹線文を施文する。外面調整はタテハケ、内面にはナデを施している。712は、口径13.6cmを測る壺である。口縁部は、頸部が立ち上がり、端部は拡張しない。文様は、口縁端部外面に6~7条の凹線文を施している。外面調整はタテハケ、内面にはナデと押圧が認められる。713は、壺の小片である。口縁部は、頸部が屈曲し、端部を水平に肥厚させて拡張させる。肩部には、円孔が設けられている。文様は、櫛描波状文が2段認められる。714は、口径19cmを測る甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を肥厚させ拡張する。文様は、口縁端部外面に3条の凹線文を施こしている。715は、建物の線刻と竹管文のある破片である。716は、底径5.6cmを測る底部片で、底は張りだしている。

S168は、残存長さ114.5mm、幅41.0mm、厚さ10.0mm、重さ53.03gを測る流紋岩製の石包丁である。



第203図 土壌42(1/30)



第204図 土壌42出土遺物(1/4・1/2)

火葬墓 (第205図)

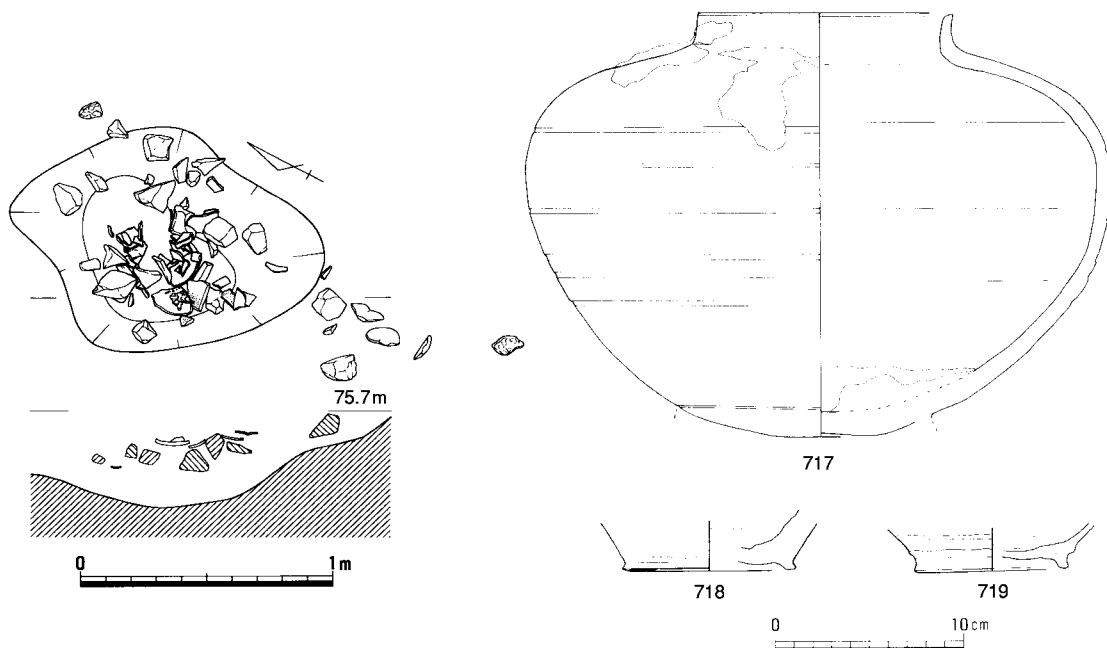
火葬墓は、住居62と土壙38との重複部分に位置する。この関係は、当該火葬墓が40cmほど上面で検出されている。規模は、82×100cm、深さ30cm前後を測り、形態は不整形である。検出は、遺構検出中に礫が散在する状態で認められていた。この礫の散布する範囲での何らかの遺構の存在を想定して掘り下げたのである。そして、礫の中に須恵器の破片を検出したのである。しかし、この段階でも明確な遺構のプランと内容は、把握できていなかったのである。遺構として認識されたのは、比較的礫がまとまって検出される部分に須恵器の底部を確認してからである。この底部は、礫に囲まれた状態の中に認められたのである。このことから、これらの礫は、須恵器を据えるために用いられていたものであると判断したのである。

検出段階では、周辺に石が散在する状況であり、明確な掘り込みを確認することができなかったのである。須恵器の底部を検出した段階では、その部分に集中して石が存在することから、ここを起点にして掘り込みの確認に努めたのである。その結果、上記の規模の掘り込みを検出したのである。

出土遺物(第205図)は、土壙内からの出土である。717は、口径13.4cmを測る台付短頸壺で、ほぼ完形に復元される。台部は、剥離をしている。肩部と内面底部には、熔壁が付着している。718は、台径9.1cmを測る須恵器の高台部の破片である。外面には、ヨコヘラケズリが認められる。719は、台径8.1cmを測る須恵器の高台部の破片である。外面には、強いヨコナデが認められる。この2個体の高台部の破片は、713との関係で蓋に使用されたと思考されたが、複数のため判断に到っていないものである。

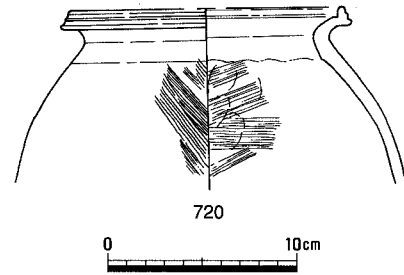
溝3 (第162図)

溝3は、住居58の北東側に、重複して位置する。規模は、長さ660cm、幅25～35cm、深さ16cm前後を



第205図 火葬墓(1/30)・出土遺物(1/4)

測る。重複する住居58との関係は、住居内にも当該溝が認められている。重複は北東辺であり、住居検出時においては、住居のプランが認められたことから、住居が溝を切っているのが判断される。溝の北東端は、上がってしまい消失する。この部分から北東側は、基盤層が張りだしてきているところで、溝の位置からすれば上っていく状況となる地形となることに影響されたと思われる。一方、逆位置の南西側は、住居内で消えている。なお、トレンチを入れるなどして、その続きを追及したが明らかにできなかったのである。



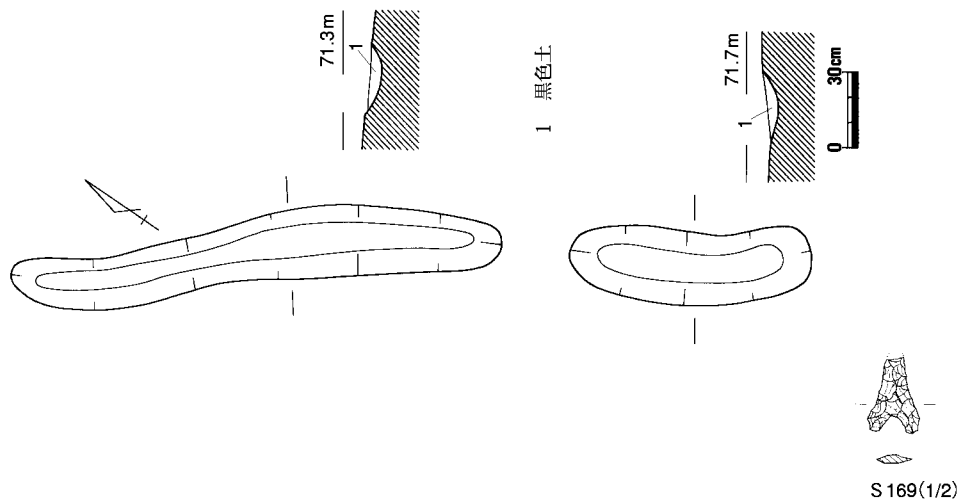
第206図 溝3出土遺物(1/4)

出土遺物(第206図)は、溝内からの出土である。720は、推定口径28.6cmを測る甕である。口縁部は、頸部が「く」の字状に屈曲し、端部が上方に拡張させる。文様は、口縁端部外面に2状の凹線文を施している。外面調整は細かいナメハケ、内面には押圧後ハケを施している。

溝4 (第207図)

溝4は、住居58の北東側に溝3と共に重複して位置する。規模は、長さ195cm、幅20~28cm、深さ5cmと長さ95cm、幅30cm、深さ5cm前後を測る2本の溝である。検出された溝は2本であるが、同一の溝と判断している。重複する住居58と溝3との関係は、住居58のプラン検出レベルさよりも、5cmあまり高くなり、当該溝のプランが住居58上に検出されているのである。

出土遺物(第207)は、S169が出土している。S169は、残存長さ20.0mm、幅13.5mm、厚さ2.8mm、重さ0.46gを測るサヌカイト製の石鏃である。先端部が欠けている。この石鏃は、溝埋土から検出されているが、遺構の重複関係に伴う時期の判断からして、当該溝に伴うか判断しかねるのである。このことから、上方からの流れ込みを想定したほうが妥当と思考されるのである。(下澤)



第207図 溝4 (1/30) ・ 出土遺物(1/2)

8 IVa区の調査

IV区はⅢ区の南側に位置する。Ⅲ区が谷地形であるのに対してIV区は急斜面ではあるがやや台地状を呈する部分である。調査の都合上3つの小区に分割して発掘したので、ここではIVa区について説明する。調査区の形状は円筒を展開した形となり南北に長い扇形長方形で、調査した面積は長さ30m・幅20mの600m²を測り、その標高は70～76mの範囲である。弥生時代と考えられる遺構として段状に検出できた竪穴住居が6群19軒を数えることができる。住居69は2段で7軒の住居が重複している。住居70は5段で5軒が切り合っている。住居71は3軒が重なっている。住居74は2軒が切り合っているようである。住居72は1軒単独である。また、柱穴だけが検出できた部分もある。この部分は才地古墳1号墳の横穴式石室掘り方で削平されている。土壙墓と推定される土壙が3基検出されているが、土壙墓2は出土遺物から中世と判明したが、他は埋積土や土層・切りあい関係から中世の可能性が高いと推定している。その他遺物も出土してないし、土層関係も明確でないため時期が判明しない土壙が2基調査区南部で検出されている。この調査区では他に古墳は2基検出されている。

竪穴住居69（第209図）

IVa区の最下段、調査区西北部に位置する2段7軒が重複した竪穴住居群で、下段には住居69a～69c、上段には住居69d～69gがある。

竪穴住居69aは長さ900cm以上、壁の高さ50cmで柱穴・壁体溝がない。

竪穴住居69bは長さ730cm以上、壁の高さ50cmで柱穴はないが壁体溝がある。

竪穴住居69cは長さ440cm以上、壁の高さ50cmで柱穴、壁体溝がある。

竪穴住居69dは長さ720cm以上、壁の高さ50cmで柱穴はないが壁体溝がある。

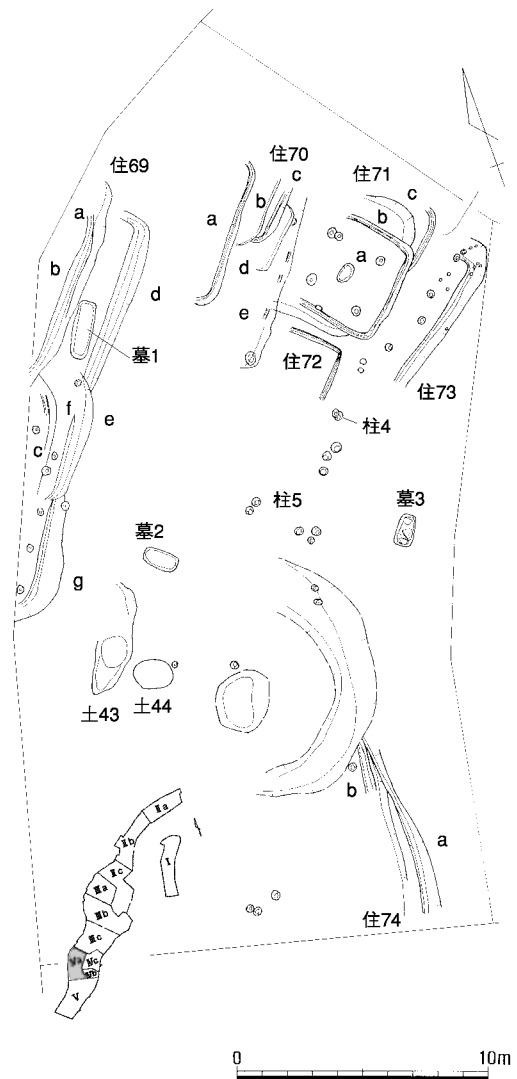
竪穴住居69eは長さ670cm以上、壁の高さ20cmで柱穴はないが壁体溝がある。

竪穴住居69fは長さ520cm以上、壁の高さ50cmで柱穴、壁体溝がある。

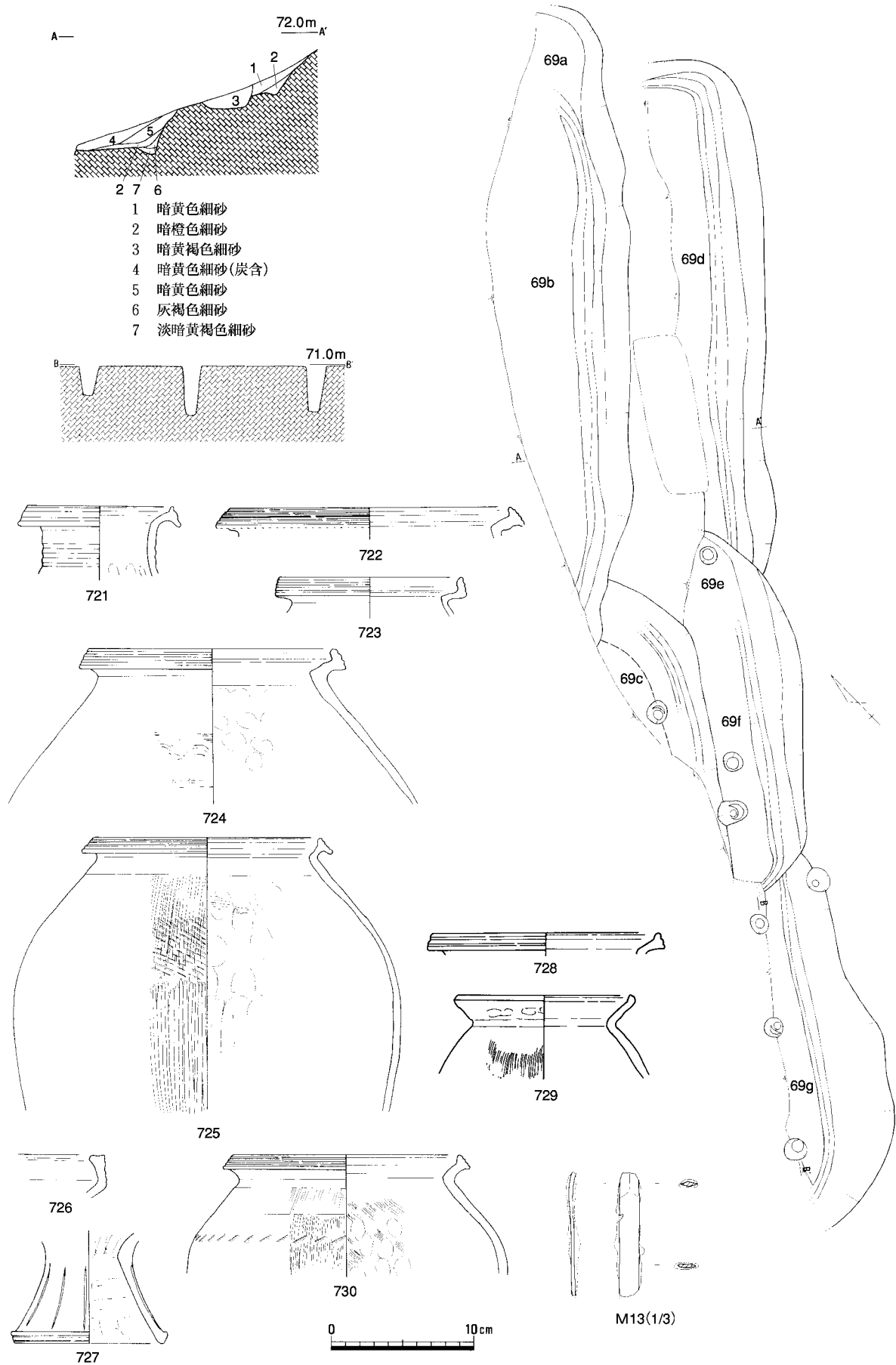
竪穴住居69gは長さ540cm以上、壁の高さ50cmで柱穴、壁体溝がある。

柱穴の深さは40～60cmを測る。住居69a、69b、69d、69eの北グループと住居69c、69f、69gの南グループで柱穴の有無が分かれる。壁体溝のないのは69aだけであった。

遺物は721～730の弥生土器とM13の鉄器が出土している。721は壺、722～730は甕、726・727は高杯である。M13の鉄器鉞で、長さ63.0mm・幅10.0mmを測る。



第208図 IVa区遺構配置図(1/300)



第209図 竪穴住居69(1/80)・出土遺物(1/4・1/3)

竪穴住居70（第210図）

IVa区の中段、調査区北部、住居69の北東に位置する5段5軒が重複した竪穴住居群である。

最下段の竪穴住居70aは長さ600cm、壁の高さ10cmで柱穴・壁体溝がない。

竪穴住居70bは長さ320cm以上、壁の高さ10cmで柱穴はないが壁体溝が南の一部分に残存している。

竪穴住居70cは長さ220cm以上、壁の高さ25cmで柱穴はないが壁体溝はある。

竪穴住居70dは長さ290cm、壁の高さ10cmで柱穴・壁体溝もない。

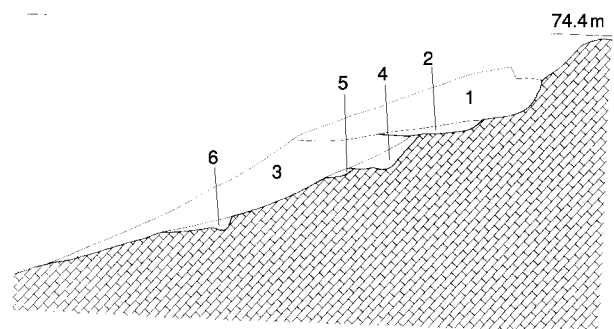
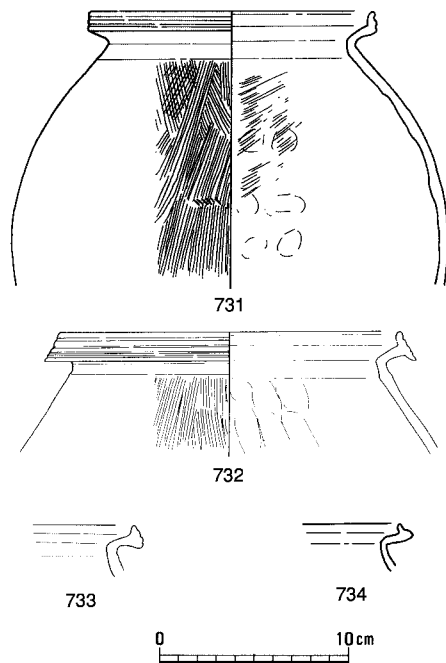
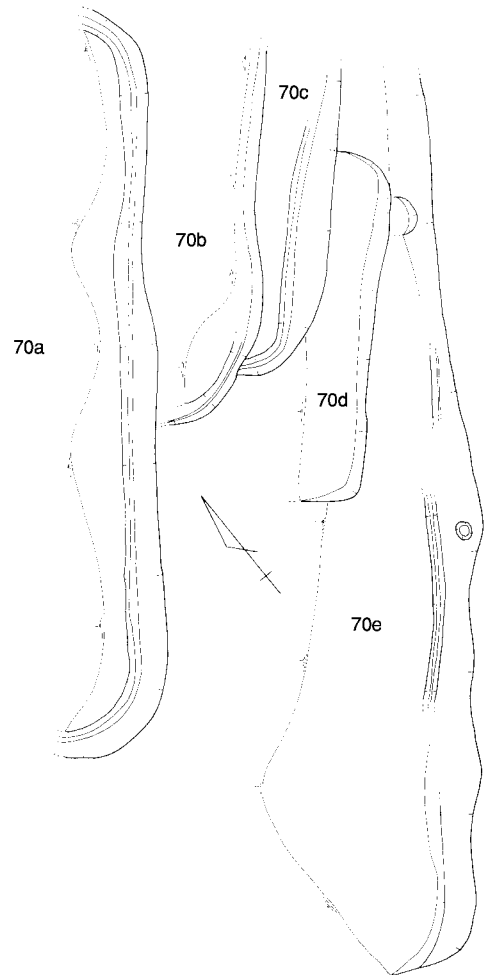
竪穴住居70eは長さ710cm以上、壁の高さ40cmで柱穴はないが壁体溝が断続的にある。

土層断面の観察では、竪穴住居70aから順に上方に新しく造成して行ったように考えられる。

遺物は731～734の弥生土器が出土している。

731は甕で、「く」の字に外反する口縁部の端部は上方に拡張し、その外面には凹線が2条施されている。732は甕で、「く」の字に外反する口縁部の端部は上下に拡張し、傾斜するその外面には凹線が3条施されている。733は甕で、「く」の字に外反する口縁部の端部は上方にわずかに折り曲げている。734は甕で、「く」の字に外反する口縁部の端部は肥厚させて外傾する面を作り、その面に1条の凹線を入れている。

以上の出土した弥生土器の形式からこの竪穴住居の廃棄された時期は弥生時代中期末に推定したい。

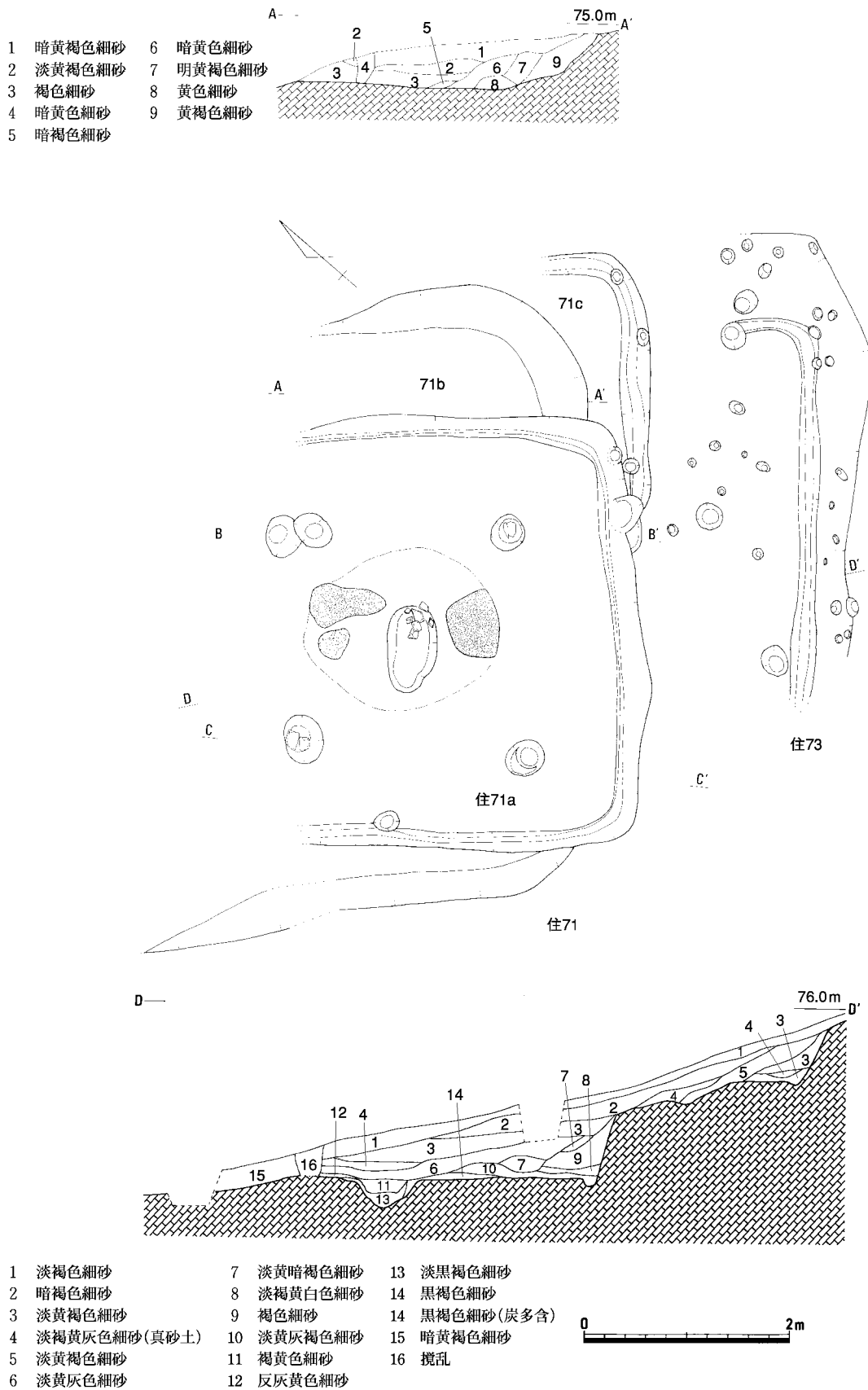


- 1 暗黄褐色細砂
- 2 黄褐色細砂
- 3 暗黄灰色細砂
- 4 暗黄色細砂
- 5 淡暗黄褐色細砂
- 6 褐色細砂

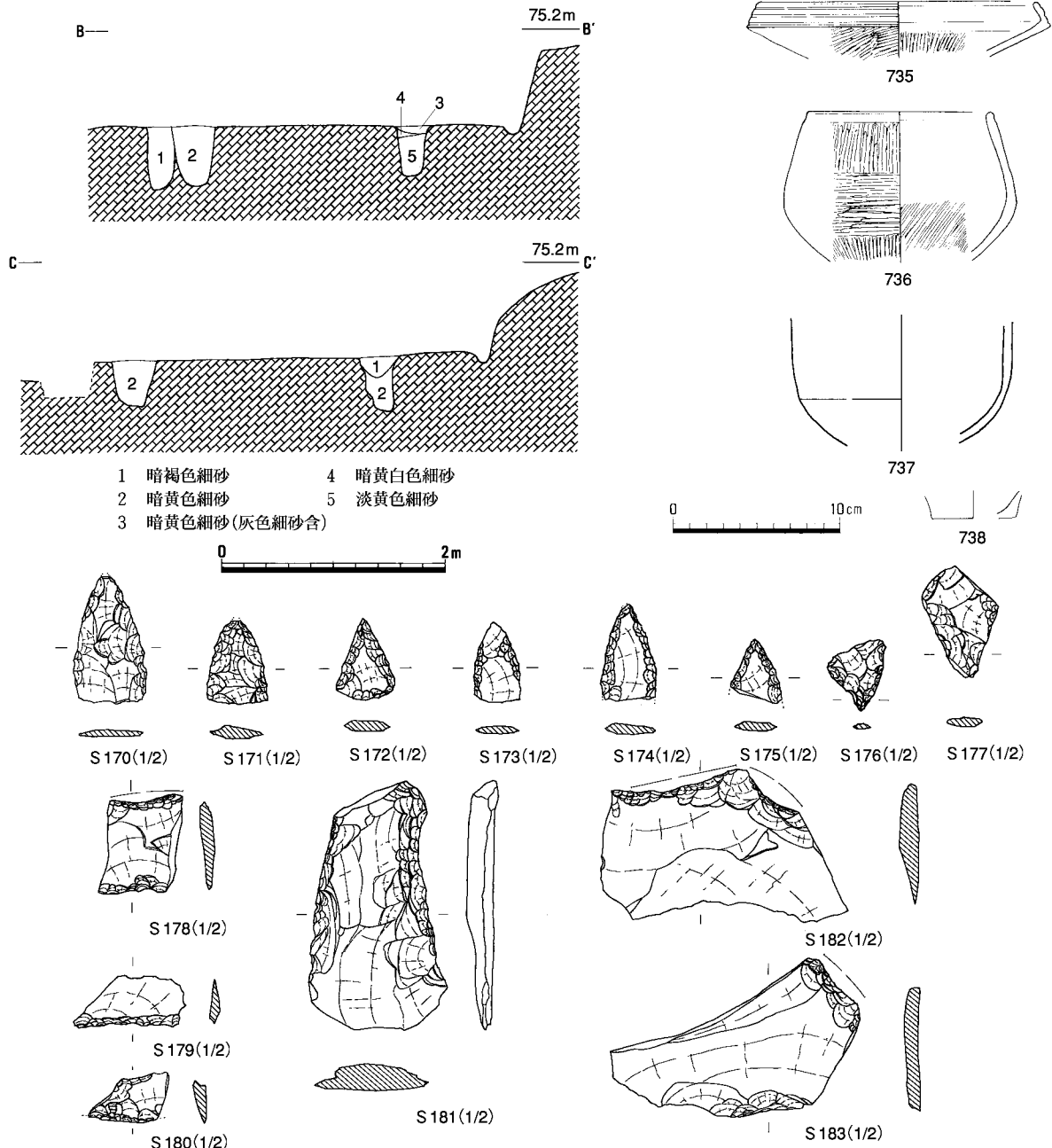


第210図 竪穴住居70(1/60)・出土遺物(1/4)

豎穴住居71 (第211・212図)



第211図 豎穴住居71・73(1/60)



第212図 竪穴住居71土層断面図(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

IVa区の上段、調査区西東部、住居70の東上方に位置する3軒が重複した竪穴住居群である。

竪穴住居71aは長さ420cm、幅350cm、壁の高さ60cmを測る。本調査区中最も残存状態の良い住居である。柱穴は4本あるが、そのうちの2本が掘り直しを受けている。柱穴の大きさは、直径35～45cm・深さ40～55cm、柱穴の芯々距離は200～220cmを測る。壁体溝は「コ」の字形に3辺残存している。また床面中央部に楕円形の中央穴が掘り込まれ、その周囲には3ヵ所に火処が認められた。中央穴の大きさは、長さ80cm、幅50cm、深さ25cmを測り、掘り直しも認められる。

竪穴住居71bは長さ600cm以上、床面の幅220cm、壁の高さ30cmで柱穴、壁体溝もない。

竪穴住居71cは長さ250cm以上で壁体溝のみが残存している。

遺物は735～738の弥生土器4点とS170～S183の石器14点が住居71aから出土している。735は高杯の口縁部で、やや内傾して立ち上がる口縁外面には3条の凹線を施し、杯部内外面はヘラミガキして

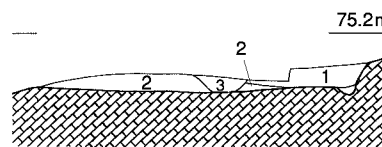
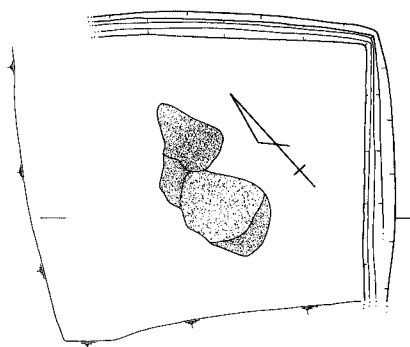
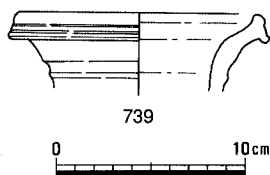
いる。口径は推定で16.4cmである。736は中央穴から出土した台付鉢の鉢部であり、口縁は丸く収め、鉢部内外面は細いヘラミガキ調整している。口径は推定で10.9cmである。737は床面から出土した台付鉢の鉢部であり、器面が磨滅して調整は不明瞭である。S170はサヌカイト製の平基式石鏃で、南東隅の埋土から出土した。本住居出土の石鏃中最大で、長さ38.0mm・幅21.0mm・厚さ2.5mm・重さ2.14gを測る。S171はサヌカイト製の平基式石鏃で、南東隅の埋土から出土した。長さ25mm・幅18.0mm・厚さ4.0mm・重さ1.80gを測る。S172はサヌカイト製の凸基式石鏃で、南東隅の埋土から出土した。長さ24.0mm・幅17.0mm・厚さ3.5mm・重さ1.27gを測る。S173はサヌカイト製の平基式石鏃で、南東隅の埋土から出土した。長さ24.0mm・幅14.0mm・厚さ3.0mm・重さ0.95gを測る。S174はサヌカイト製の石鏃で南東隅から出土した。長さ29.0mm・幅16.5mm・厚さ3.0mm・重さ1.74gを測る。S175はサヌカイト製の石鏃で、南東隅埋土から出土した。よく磨滅していて、長さ19.0mm・幅15.0mm・厚さ3.0mm・重さ0.83gを測る。S176はサヌカイト製の石錐で、南東隅の埋土から出土した。長さ21.0mm・幅17.0mm・厚さ4.0mm・重さ1.06gを測る。S177はサヌカイト製の石錐で、南東隅の埋土から出土した。長さ33.5mm・幅22.0mm・厚さ4.5mm・重さ2.67gを測る。S178はサヌカイト製の楔形石器で、南東隅の埋土から出土した。長さ25.5mm・幅29.5mm・厚さ5.0mm・重さ4.30gを測る。S179はサヌカイト製の石鏃の未製品で、南東隅の埋土から出土した。長さ33.0mm・幅16.0mm・厚さ3.0mm・重さ1.01gを測る。S180はサヌカイト製の剥片石器で、南東隅の埋土から出土した。長さ24.0mm・幅15.0mm・厚さ4.5mm・重さ1.53gを測る。S181はサヌカイト製の剥片石器で、柱穴から出土した。長さ74.0mm・幅41.5mm・厚さ9.0mm・重さ24.28gを測る。S182はサヌカイト製の剥片石器で、柱穴から出土した。長さ73.5mm・幅46.0mm・厚さ7.0mm・重さ20.52gを測る。S183はサヌカイト打製の剥片石器で、柱穴から出土した。長さ24.0mm・幅15.0mm・厚さ4.5mm・重さ1.53gを測る。

竪穴住居72 (第213図)

IV a区の上段、調査区中央部、住居71の南に位置する1軒が単独で検出された住居である。住居は方形を呈するが南西部は才地1号墳石室掘り方で破壊されている。長さ300cm・幅260cm・床面から壁の高さ20cmを測る。柱穴は確認できなかった。壁体溝は一状に残存している。壁体溝の長さは440cm、幅は15cm、床からの深さは5cmで、断面形はU字形を呈する。床面の中央部と考えられる部分には2ヵ所火処が見られる。

出土遺物には739の弥生土器壺がある。口縁部から頸部にかけての破片である。推定の口径は12.6cmを測る。口縁端は上下に拡張し、端面には2条の凹線を施す。頸部下端には凹線を巡らす。

弥生土器の形式から見て、本住居の廃絶された時期は、弥生時代中期後半の範囲に属すると考えられる。



- 1 暗黄褐色細砂
- 2 暗茶褐色細砂
- 3 暗黄色細砂
- 4 淡黄色細砂



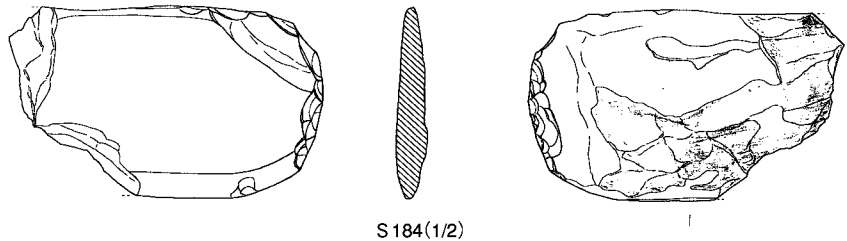
第213図 竪穴住居72(1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居73 (第211・214図)

IVa区の上段、調査区北東端部、住居71の東に位置する長い段状の住居である。ㄣ形に残存する壁体溝と幅の狭い平坦な床面に3本の柱穴があり、そのほか床面および壁面には多数の枕穴が認められた。壁体溝の長さは420cm、幅は20cm、深さは5cmである。壁の高さは50cmを測る。柱穴の大きさは直径25~30cm、深さは20~30cmであり、3本の柱穴は直線に並んではないし、柱間の間隔は160~220cmと一定でもない。

遺物としてはS184の黒色片岩の磨製石包丁が1点出土している。穴は穿たれていない。

これから住居の廃絶された時期は弥生時代中期に比定したい。



第214図 竪穴住居73出土遺物(1/2)

竪穴住居74 (第215図)

IVa区の上段、調査区最南端部、竪穴住居73のはるか14m南に位置する長い段状の住居である。壁体溝と考えられる溝が2条と幅の狭い平坦な床面に1本の柱穴を検出している。

竪穴住居74aの溝は長さ700cm、最大幅70cm、床面と考えるとところからの深さ平均10cmを測る。床面の幅は40cmが残存している。

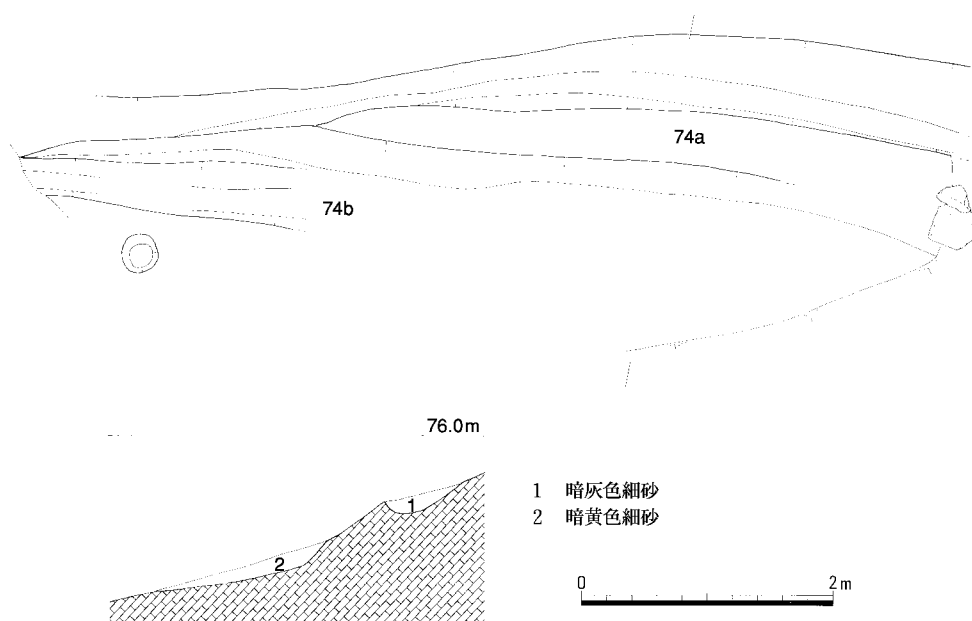
竪穴住居74bは、住居74aの下位に位置し、溝が一部残存しているのみで、溝の長さ220cm、最大幅45cm、深さ最大5cmである。

竪穴住居74bの長さは700cmある。柱穴は1本しか検出できなかった。

遺物も実測可能なほどのものは出土していないが、弥生土器片を少量採集している。したがって、時期の確定が困難ではあるが状況から弥生時代中期と考えたい。

土壌43 (第216図)

IVa区の下段、調査区中央南部、竪穴住居69の東南に位置する南北に長い舟形の土壌である。平面

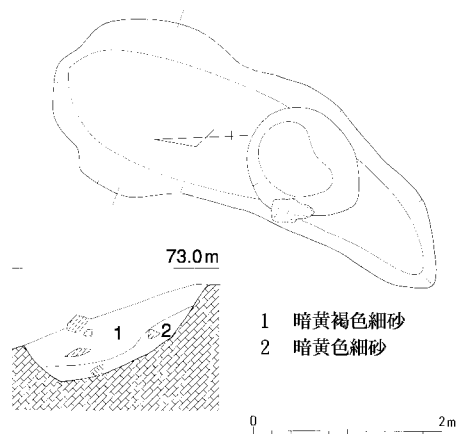


第215図 竪穴住居74(1/60)

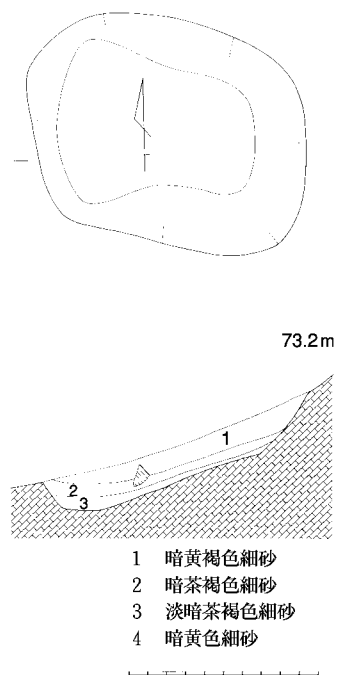
の形状は人魂あるいはおたまじゃくしに類似する。中央やや南よりが円形に一段深くなっている。規模は全長450cm、最大幅200cm、最大の深さ100cmである。土層は2層に分割でき、第1層が暗黄褐色細砂で角礫を多数含み、第2層が暗黄色細砂で同じく角礫を多数含む。しかし、遺物はまったく含まないため時期の決め手がない。

土壌44 (第217図)

IVa区の下段、調査区中央南部、土壌44の東上方に位置する土壌である。平面の形状は上端は隅の丸い長方形で、下端はひょうたん形である。遺物はまったく含まないため時期の決め手がない。



第216図 土壌43(1/80)



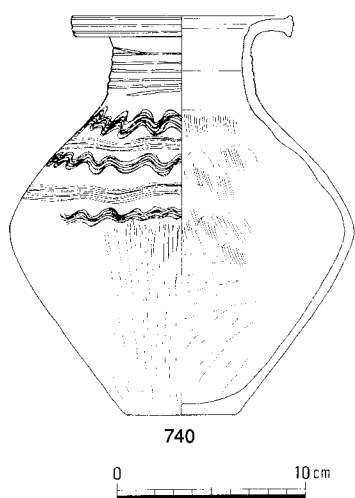
第217図 土壌44(1/40)

柱4 (第208・218図)

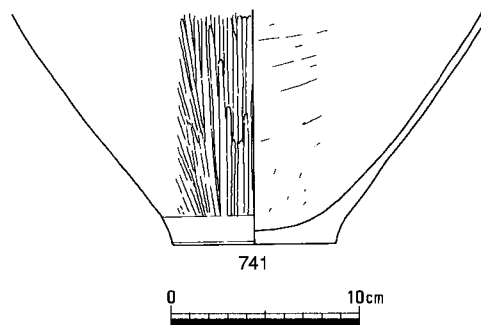
竪穴住居73の南、竪穴住居72の東に位置する柱穴である。竪穴住居73の床面と同じレベルにあるのでこの住居の柱穴としても良いかもしれない。この柱穴からは740の壺が出土している。口径11.6cm、底径6.0cm、器高21cmを測る。口縁端面と頸部に凹線文、肩部に波状文と平行沈線文を施している。

柱5 (第208・219図)

柱4の南東5mの位置にある柱穴で、741の壺か甕の底部が出土している。内面ヘラケズリである。



第218図 柱穴4出土遺物(1/4)



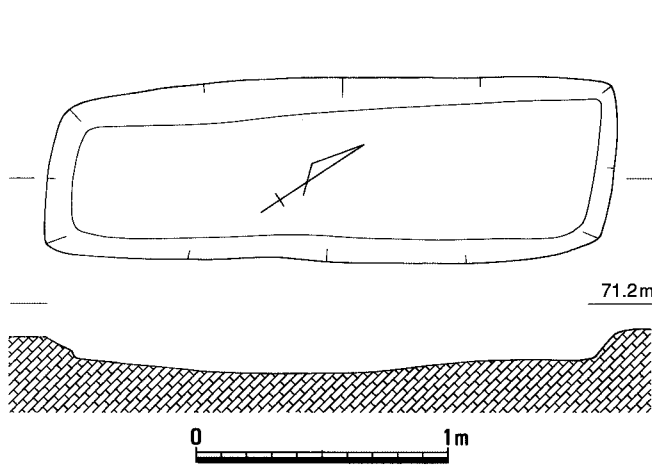
第219図 柱穴5出土遺物(1/4)

土墳墓 1 (第220図)

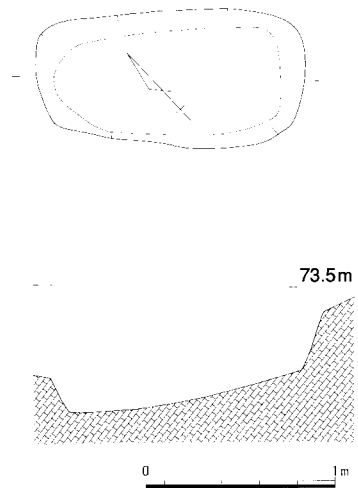
住居69dの中に位置する土墳である。掘り方の上端の形状は長方形で、下端も長方形である。床は中央部が少しへこんではいるが、ほぼ平坦である。全体形は箱形を呈する。床面から1cm程度の厚さに灰色粘土が堆積していた以外に、遺物の出土もない。土質等から中世墓と考えたい。

土墳墓 2 (第221図)

土墳43の北に位置する土墳である。掘り方の上端の形状は隅丸の長方形で、下端も長方形である。床はほぼ平坦であるが、北西に傾斜している。遺物の出土はないが、土質等から中世墓と考えたい。



第220図 土墳墓 1 (1/30)



第221図 土墳墓 2 (1/40)

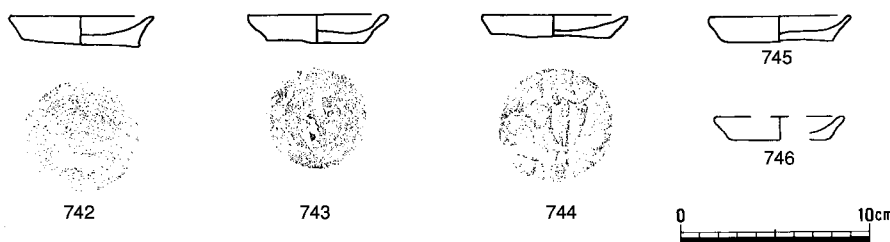
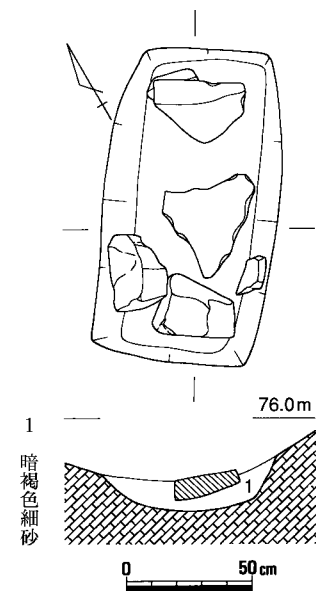
土墳墓 3 (第222図)

IVa区の中央やや北よりのテラス状の段の奥づめで検出された遺構であり、等高線に直交した土墳墓である。

検出された土墳墓は、1号墳の周溝に直交する形で掘り込まれた土墳墓であり、墓壇は北東-南西の長辺で若干歪な長方形の平面形態を呈している。土墳の掘り方は、小口側は若干の傾きを呈するが側辺は丸味をおびて掘り込まれ、底面は丸く掘り上げている。

検出された土墳は、一見石蓋土墳墓の形状を示す遺構であり、使用されている石材の残存性も悪い状態である。遺構掘り下げ中、石材の上面に何らかの骨片とおぼしきものを認めることができた。小片であったため小動物の可能性が考えられる。

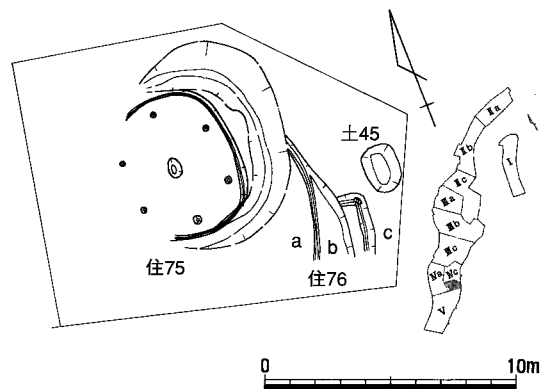
石材除去後の埋土中から小皿が5枚出土している。出土遺物742~746からこの遺構は、古代~中世に考えられる。



第222図 土墳墓 3 (1/30) ・ 出土遺物(1/4)

9 IVb区の調査

IVa区の南東部にあたる調査区で五角形を呈する。面積は150㎡あり、地形は東から西に傾斜する緩やかな斜面である。検出できた遺構としては、弥生時代の竪穴住居2群4軒と古墳時代の古墳周溝1条および土壇1基である。住居75は単独で存在し、切り合いも重複もないが、住居76は3軒が重複している。古墳については5号墳であるが、才地古墳群を参照されたい。土壇はIVa区の土壇44等と同様の時期・性格のはっきりしないものである。



第223図 IVb区遺構配置図(1/300)

竪穴住居75 (第224図)

IVb区の中央部に位置する住居である。焼失した住居である。床および壁面には不完全燃焼した垂木が中心から放射状に炭化材となって残存し、屋根に葺かれた草(茅か)の繊維もかなり明瞭な状態で検出できた。そして、赤く焼けた大量の土の存在は、屋根に乗せていたものか、火事の消化のためにかけたものかは判断に迷うところである。図上でスクリーントーンを貼った部分は、床面に火処となって赤く焼けた部分である。

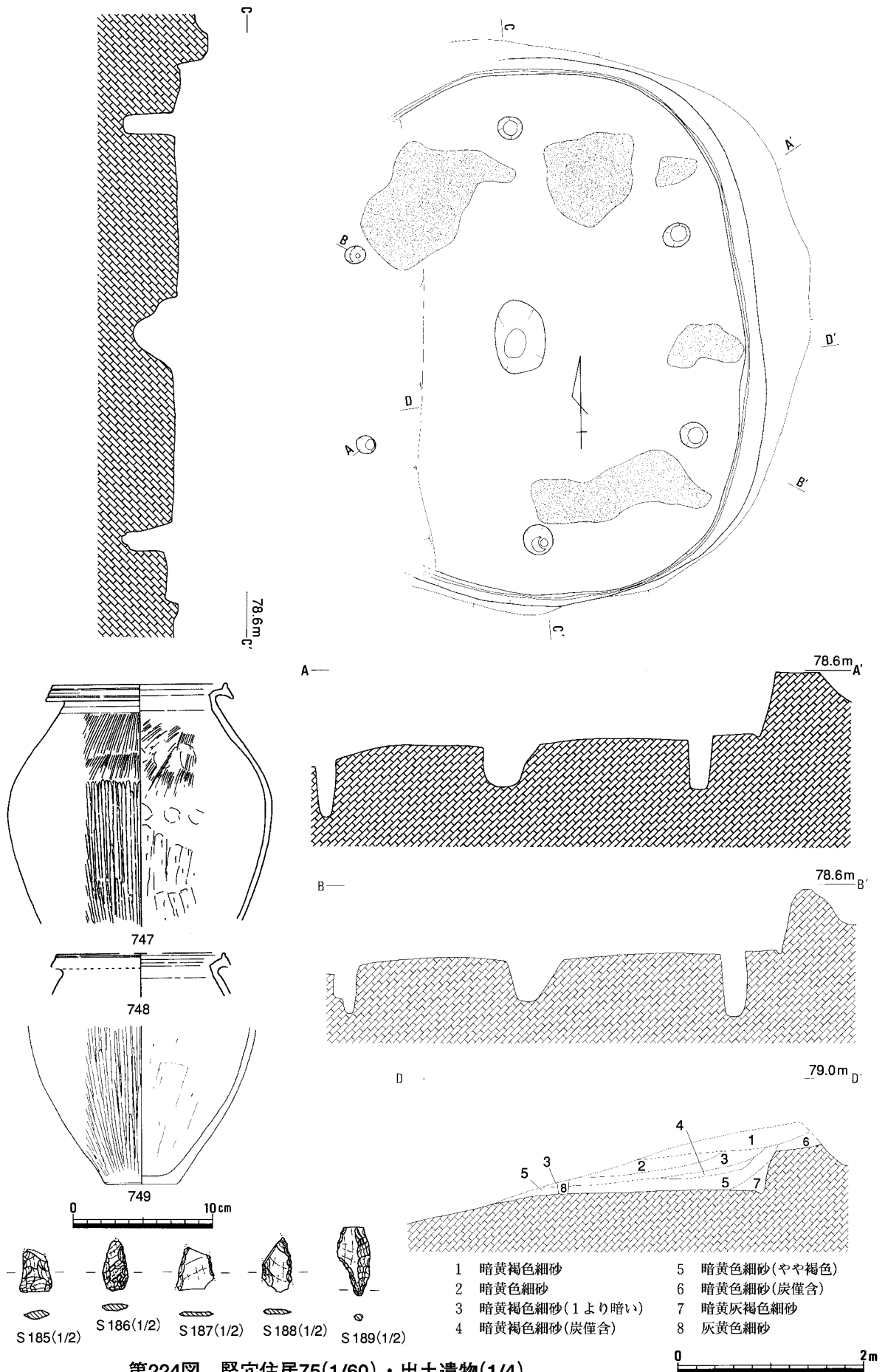
平面形は、東側と南北を5号墳周溝で円形に削平を受けているため、上端では見掛け上は円形に見える。壁体溝の形状から考えると、南北にやや長い楕円形を呈している。したがって、本住居の平面形としては楕円形と考えられる。床面の大きさは、長軸で560cm・短軸で推定500cmを測る。また、壁面の高さは最大値が東側にあり65cmで、西側は350cmのところから床面も削平されている。

柱穴は6本検出できた。掘り直しなどは認められず、各柱穴間の間隔もほぼ一定の200~220cmにあり、深さは55~70cmとやや大小があるが、おおむね1時期の掘り上げと断定してよい。すなわち6本柱の住居である。

中央穴は、1基検出し、床面の中央に位置する。平面形は南北に長い楕円形を呈する。断面はU字形を示し、最も深いところは45cmで、やや南寄りにある。

壁体溝は、東および南北に連続して残存し、全長約10m・幅10cm・深さ5cmを測る。

遺物としては747~749の3点の弥生土器とS185~S189の5点の石器が出土している。747の甕は底部を欠いている。床面で採集している。体部内面下半部はヘラケズリされている。748の甕は外面調整が不明瞭である。749の甕は上層から出土した。体部内面下半部はヘラケズリされている。S185は上層から出土したサヌカイト製平基式石鏃である。長さ15.5mm、幅11.5mm、厚さ3.5mm、重さ0.63gを測る。S186はサヌカイト製凸基式石鏃である。長さ18.0mm、幅9.0mm、厚さ2.9mm、重さ0.45gを測る。S187はサヌカイト製石鏃である。長さ15.5mm、幅13.5mm、厚さ1.5mm、重さ0.39gを測る。S188はサヌカイト製石鏃である。長さ20.0mm、幅11.0mm、厚さ2.0mm、重さ0.46gを測る。S189は埋土下層から床面で出土したサヌカイト製石鏃で、先端は磨滅している。長さ24.5mm、幅12.0mm、厚さ3.0mm、重さ1.09gを測る。



第224図 竪穴住居75(1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居76 (第225図)

IVb区南東部で、住居75の東上方に位置する。段状に検出され、3軒が重なっている住居である。西下方から竪穴住居76a、中央のものを竪穴住居76b、東上方のものを住居76cとして説明する。

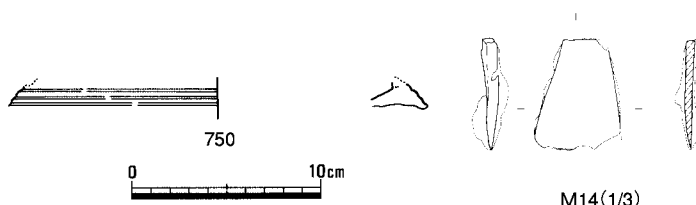
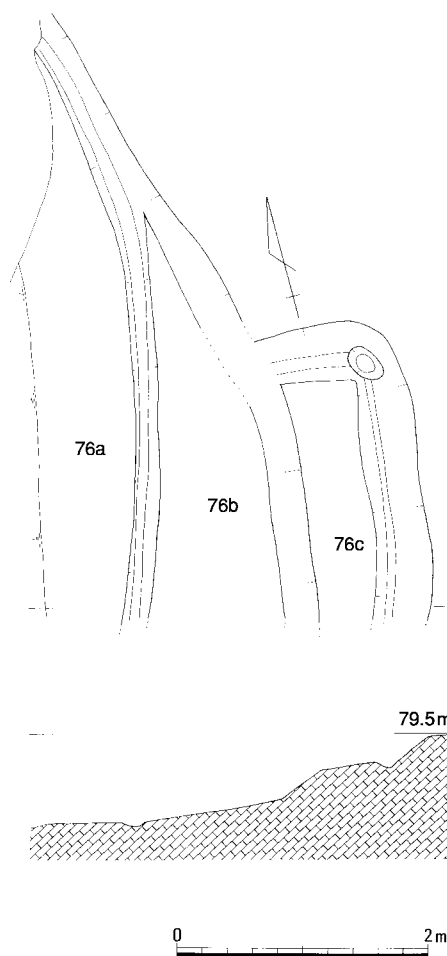
竪穴住居76aは壁体溝と幅の狭い平坦な床面を検出した。緩やかにカーブする壁体溝の長さは450cm、幅は20cm、深さは5cmで、床の幅は最大58cm、床の海拔高は78.8mを測る。

竪穴住居76bは壁体溝がなく、平坦であるがやや西に傾斜した床面を検出した。くちばし状の床の幅は最大120cm、床の海拔高は79.0mを測る。

竪穴住居76cは壁体溝と幅の狭い平坦な床面を検出した。ㄠ形の壁体溝の長さは東西に70cm、南北に200cm、幅は50cm、深さは床面から5cmで、床の幅は最大50cm、床の海拔高は79.3mを測る。壁面の高さは20cmある。

3軒の前後関係は、下から上に新しくなるように土層観察から結論付けた。

遺物としては750の弥生土器細片とM14の鉄器が出土している。750は壺の口縁部で、凹線を3条持っている。M14は板状鉄斧で、長さ43.0mm、幅35.0mm、厚さ3.5mm、重さ22.19gを測る。

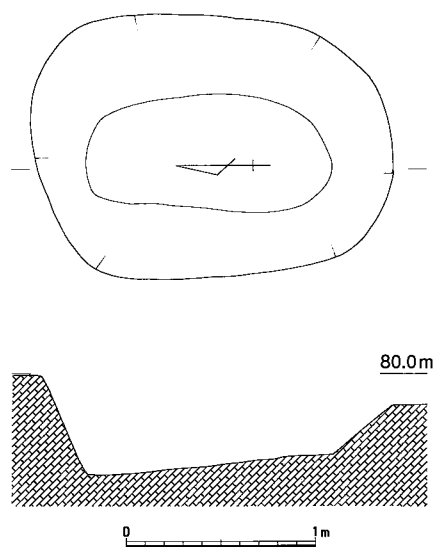


第225図 竪穴住居76(1/60)・出土遺物(1/4・1/3)

以上の遺物からこの住居群の廃絶した時期は、弥生時代中期後半としたい。

土壇45 (第226図)

IVb区東端部で、竪穴住居76の北東上方に位置する。南北に長い小判形の土壇である。土壇上端の長軸の長さは190cm、短軸の長さは140cm、下端の長軸の長さは130cm、短軸の長さは60cmを測り、底面の海拔高は79.5mである。土壇の底面は平坦ではあるが、やや北に傾斜している。埋積土の土質は土壇44と同じ暗黄褐色土で、遺物は全然含まない。したがって、時期の決め手がない。また、性格についてもまったく不明である。ただ、調査区の位置から推定すると才地古墳群の中に含まれることから古墳時代の土壇墓とも考えられるが、現状ではまったく掘みようもない。



第226図 土壇45(1/40)

10 IVc区の調査

IVc区はIVa区の東上方、IVb区の北側に位置する。この区の地形は緩やかな西下りの斜面ではあるが北側に位置するⅢ区の谷地形とは極端に異なる台地状を呈している。調査区の形状は多角形を呈し、調査した面積は長さ20m・幅17mの600㎡を測り、その標高は76m～82.7mの範囲である。遺構は弥生時代と考えられるものとして段状の竪穴住居が77～80の4群4軒を数えることができる。住居77と住居78は同一等高線上で切りあっている。竪穴住居79は中段にあり、住居80は調査区最上段に存在する。すべて柱穴を検出はしているが、壁体溝を有するものとそうでないものがある。土壌は土壌46～58の13基も検出している。調査区西部に少なく、東部に南北に並ぶように集中的に存在している。この調査区では古墳は2基検出されているが、この項では古墳の記述はしない。才地古墳群の3号墳・4号墳の項目を参照されたい。土壌のいくつかは古墳時代のものもあるかもしれないが、各土壌の項目で詳しく説明したい。

竪穴住居77（第227・228図）

IVc区の西部にあって、住居73の南東に位置する南北に長い段状の住居である。ㄠ形に残存する壁面と壁体溝の一部そして幅の狭い平坦な床面に2本の柱穴を検出している。住居の長さは750cm以上であるが、壁体溝の長さは250cm、幅は25cm、深さは5cmである。壁の高さは50cmを測る。柱穴の大きさは直径30cm、深さは50cmであり、2本の柱穴の柱間の間隔は200cmである。この間隔から推定すると、あと一本検出できそうであるが、住居78に削平されていることが考えられる状況である。

遺物としては弥生土器細片が出土しているが、実測できるものではない。

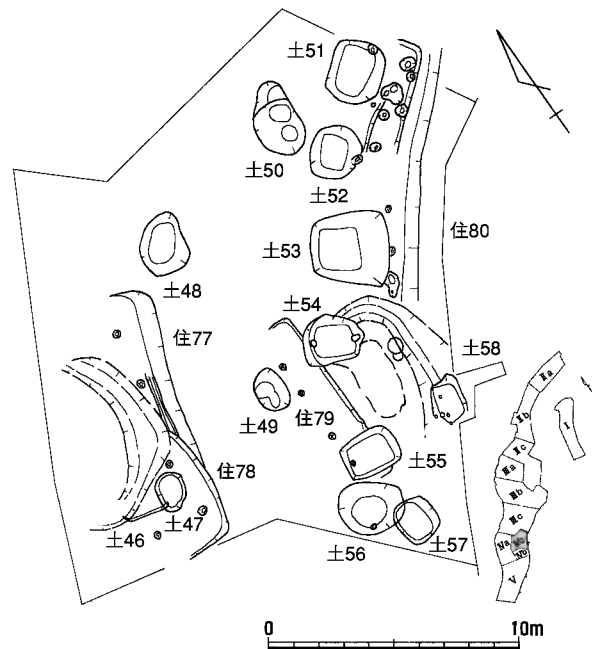
この遺物および土層観察の結果、この住居の時期は弥生時代中期に属すると考えている。

竪穴住居78（第227・228図）

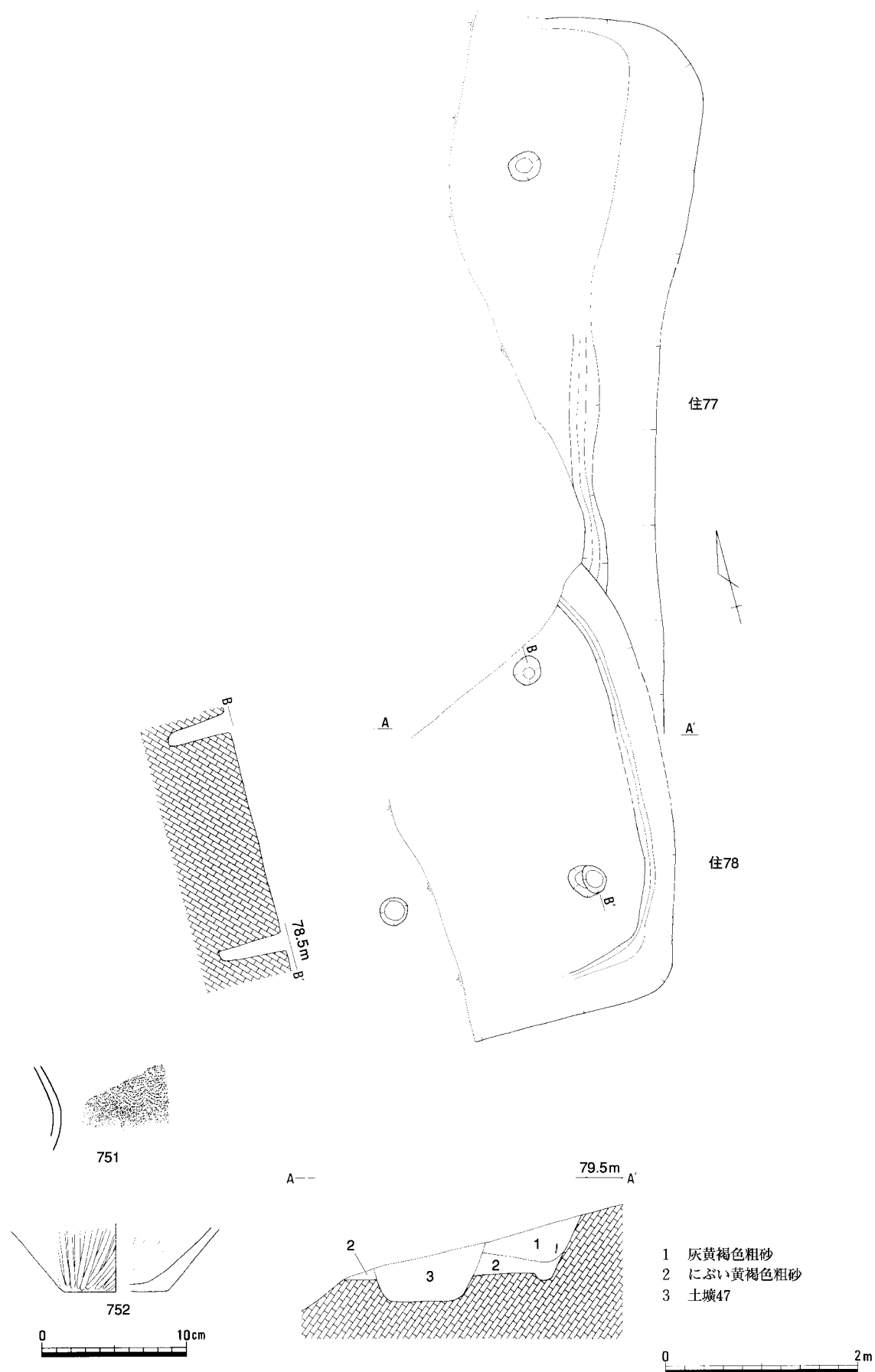
IVc区の南西部にあって、住居77の南に位置する竪穴住居である。ㄠ形に残存する壁面と幅の広い平坦な床面に3本の柱穴を検出している。壁体溝はなかった。住居の長さは推定で400cmであり、床面の幅は230cm残存し、壁の高さは60cmを測る。柱穴の大きさは直径30cm、深さは65cmであり、3本の柱穴の柱間の間隔は210cm・220cmである。この住居の柱穴は4本で完結すると考えられる。なお、本住居は住居77を切っているの、より新しいといえる。

遺物751は、壺の肩部で波状文が認められる。752は、壺の底部で外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリが施されている。および土層観察の結果、この住居の時期は弥生時代中期に属すると考えている。

（浅倉）



第227図 IVc区遺構配置図(1/300)



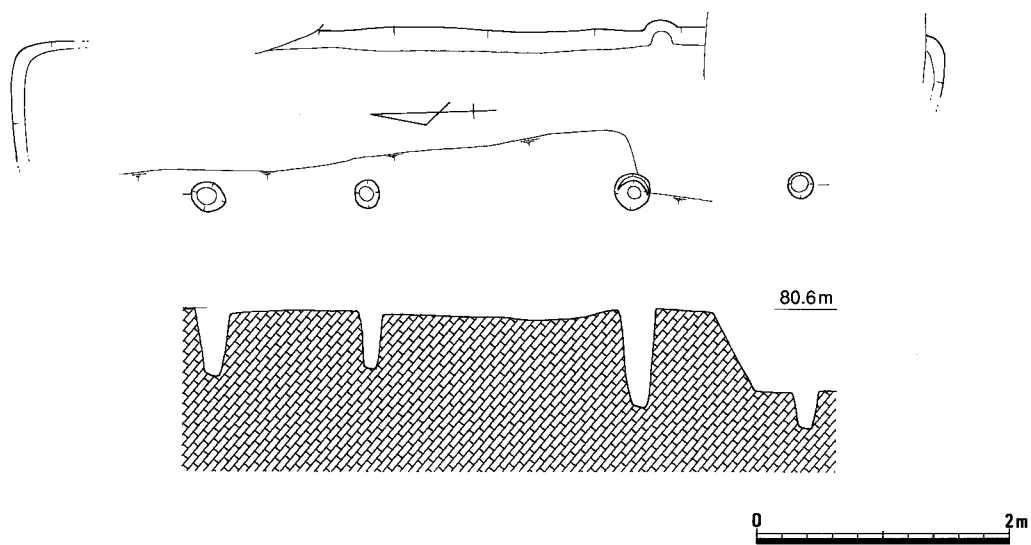
第228図 竪穴住居77・78(1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居79（第227・229図）

調査区の南東部に位置して、南辺を土壌56、東辺の一部を土壌54・55によって失っている。東辺と土壌49との距離80cm、同じく住居77・78の東辺との距離約6mをそれぞれ測る。

東辺は、等高線に平行してほぼ直線を呈し、740cmを測る。側壁は高さ25cmが残るが、壁体溝は認められなかった。北辺は90cm、南辺は40cmが残るのみである。東側壁から西へ約1m離れて並ぶ4本の柱穴が検出された。平面形は楕円形で、長径20～30cm、深さは45～80cmであるが、土壌55の底面で検出された南端の柱穴は復元すると95cmになる。北端の柱穴と北辺の距離は135cm、以下125cm、215cm、135cmと続き、南端の柱穴と推定南辺の距離は100cm程度である。床面はこれらの柱穴より東側で平坦面が認められ、海拔80.6m前後である。

遺物は出土していないが、弥生時代中期後半に想定される土壌54に先行している。



第229図 竪穴住居79(1/60)

竪穴住居80（第227・230図）

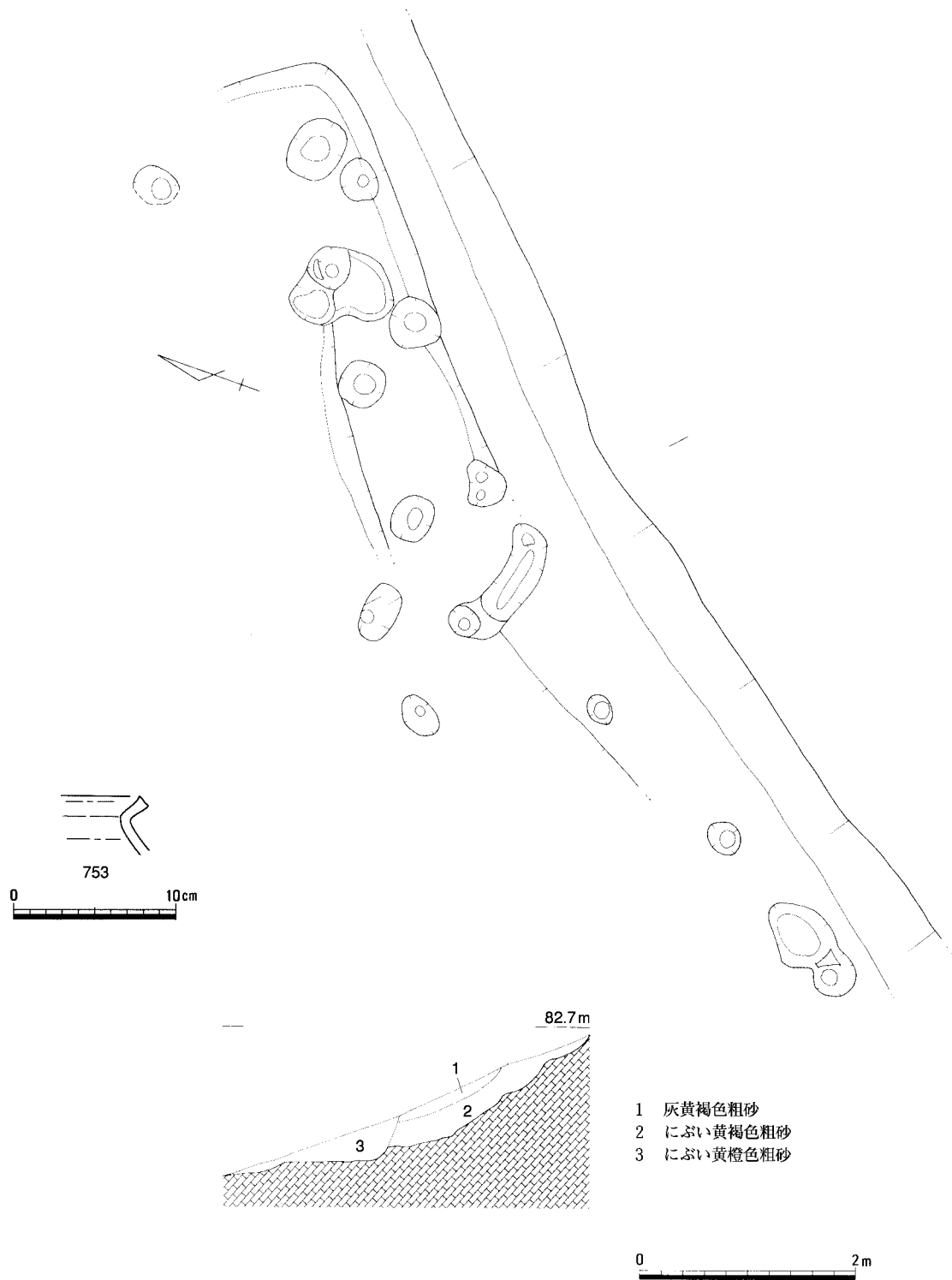
調査区の北東部で、土壌51～53と重複して検出され、山側を直線的に削土した平坦面に柱穴が所在する状況から、住居と認識した。Ⅳ区の竪穴住居としては、最高所に位置する。

検出された遺構は、斜面を直線的に削った東側の肩口と、その裾部で平坦な床面へ移行する肩口と床面および複数の柱穴列である。

東側の肩口は、等高線に平行して10mにわたって確認でき、ほぼ直線的に掘られているが、検出範囲の中央やや北寄り、屈曲している。掘削面は約35°の傾斜を示し、高さ70cmを測る。この掘削面の裾から、ほぼ平坦な段が狭く検出される。東肩口の屈曲点付近から北東側では、幅50cm程度で450cm程続き、屈曲点より南西側では幅100cm前後で550cm程続いている。後述するように、屈曲点より北東側は改変を受けており、南西側の幅が本来の段幅を示していると考えられ、この段までは、第230図の断面図の第1・2層で埋まっている。同図の第3層で示される新たな掘り込みに相当するのは、屈曲点より北側の部分で、北東部の角から直線的に掘られて、南西角は溝状を呈している。この長さが約500cmである。外側の段から約10cm低く、幅90cm程の平坦面があって、さらにもう一段下がっている。これらの平坦面においては、計16本の柱穴が検出された。いずれも平面形は不整な楕円形で、長径30～70cm、深さ30～65cm程度の規模である。屈曲点から南に4～5本からなる1列と、屈曲点より

北側に70cm程の間隔で2列の設定ができそうであるが、いずれも平坦面の東端との組み合わせにおいて、約70cmを前後する距離に位置しそうである。以上の観察から、住居80として報告したこの遺構は、古段階に隣接する2軒と、新段階に北東側に位置する1軒の3軒分と考えられる。

遺物は、弥生土器の甕753をはじめとして、小片が若干量出土したのみであるが、土壌51～53などとの重複関係から、弥生時代中期に比定できる。



第230図 竪穴住居80(1/60)・出土遺物(1/4)

土壌46 (第227・231図)

調査区の南西部で、竪穴住居78の床面より下層で検出された。北半は才地3号墳の周溝に削られて不明である。長さ160cmの直線的な南辺が検出され、その両端から20cm程北へ入る部分までが残っていた。深さ25cm程でほぼ平坦な底面に至り、灰黄褐色粗砂の埋土には、遺物は含まれていない。時期は竪穴住居78との関係から、弥生時代中期以前に想定される。

土壌47 (第227・228・232図)

調査区の南西部で、竪穴住居78の埋土を掘り込んでいる。中央部を住居78の土層確認のために損なってしまったが、平面形は不整な楕円形に復元され、長径150cm、残存最大短径110cmを測る。山側で深さ55cmを測り、底面はほぼ平坦である。出土遺物は無く、時期不明である。

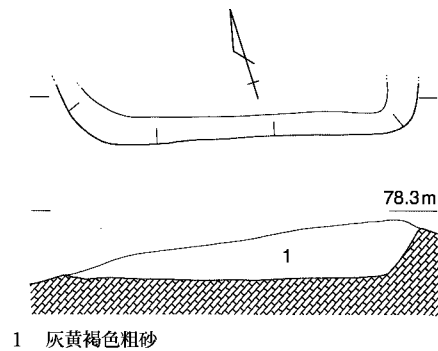
土壌48 (第227・233図)

調査区の北西部で、住居77北東隅から80cm離れた斜面上に位置する。平面形は不整な楕円形で、長径260cm、短径200cm、深さ35cm程度の規模である。底面も傾斜しており、北東隅が一番深くなっている。出土遺物は無く、時期不明である。

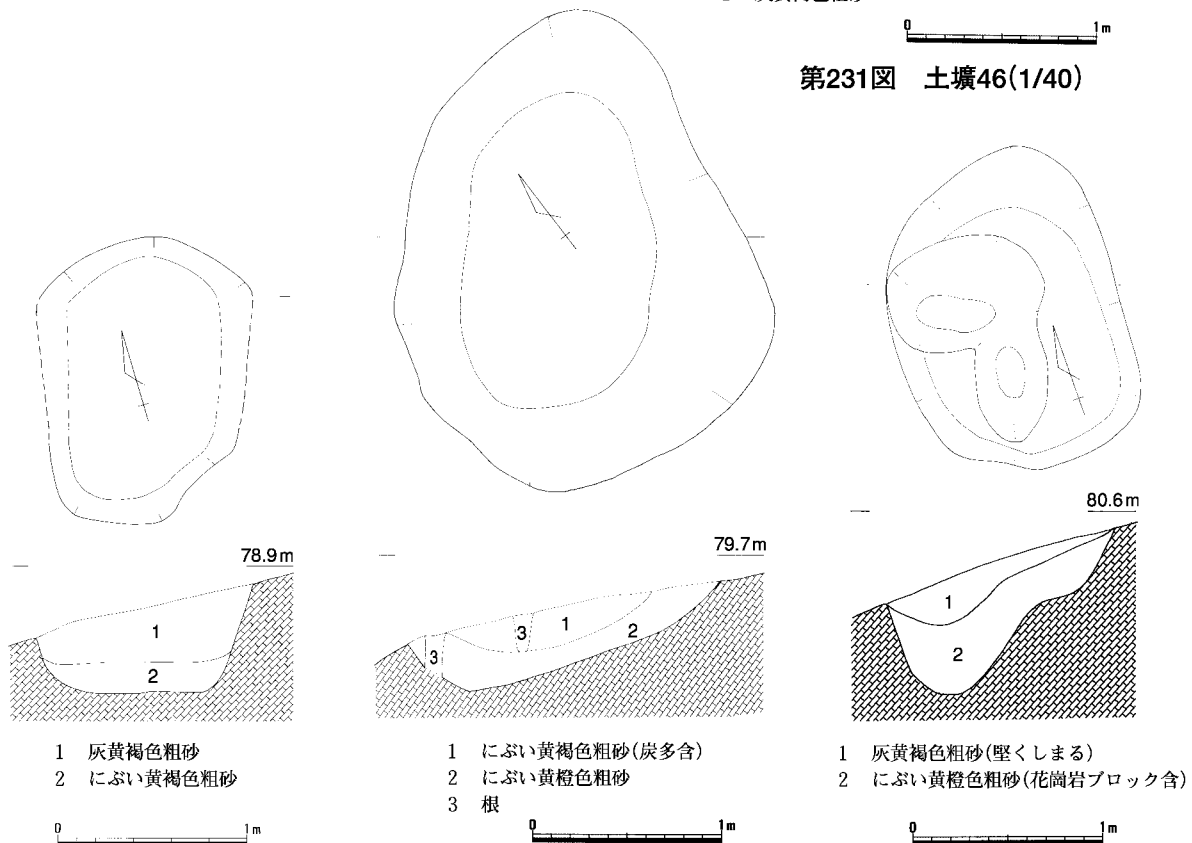
土壌49 (第227・234図)

調査区中央部で、住居79の床面が終わる西斜面に位置している。竪穴住居79との先後関係は不明である。

平面形は楕円形を呈し、長径170cm、短径120cmで、深さ30cm程度で一旦段をなすが、南西部と北西部がさらに50cm程深い。出土遺物は無く、時期不明である。



第231図 土壌46(1/40)



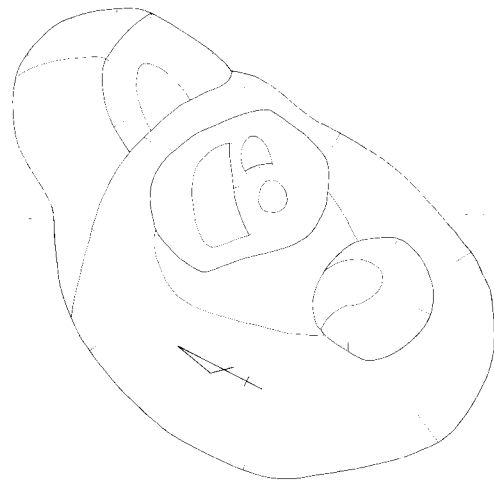
第232図 土壌47(1/40)

第233図 土壌48(1/40)

第234図 土壌49(1/40)

土壌50 (第227・235図)

調査区の北東部に位置し、土壌52の西斜面に直近して所在する。平面形は不整な楕円形を呈し、300×180cmの規模で、底面には凹凸がある。出土遺物は無く、時期不明である。(光永)



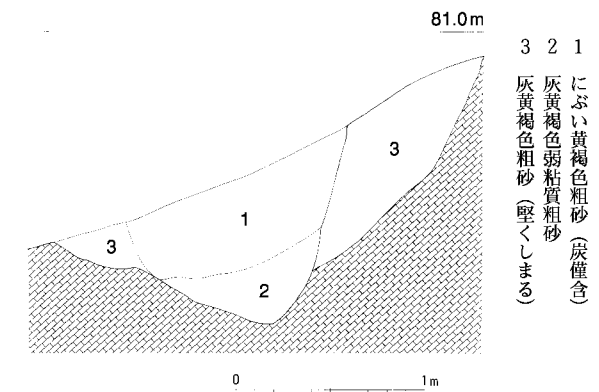
土壌51 (第236図)

調査区北東端、土壌50の北東1.5mに位置する長方形の平面形を呈する土壌である。主軸は北東から南西にあり、長軸260cm・短軸210cm・深さ最大100cm、検出面の海拔高は81.3mである。遺物はないが、弥生時代の貯蔵穴と推定する。

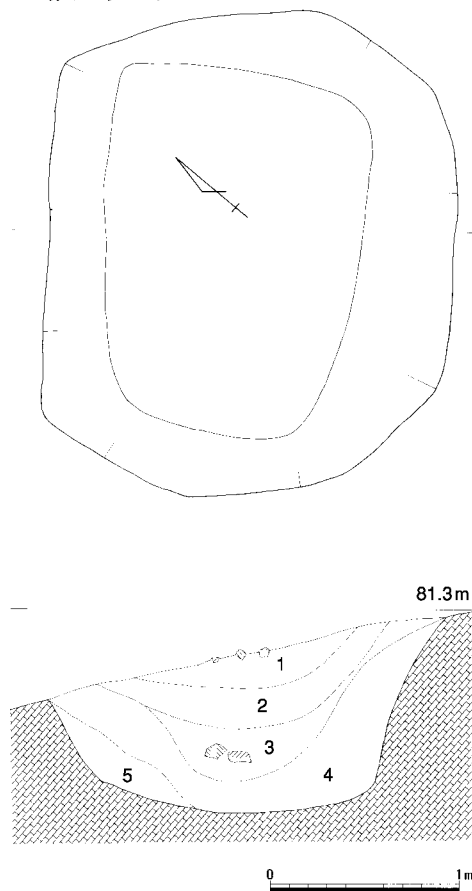
土壌52 (第237図)

調査区北東端、土壌51の南西100cmに位置する上端は楕円形、下端が長方形の平面形を呈する土壌である。主軸は北東から南西にあり、長軸210cm、短軸200cm、深さ最大130cm、検出面の海拔高は81.4mである。

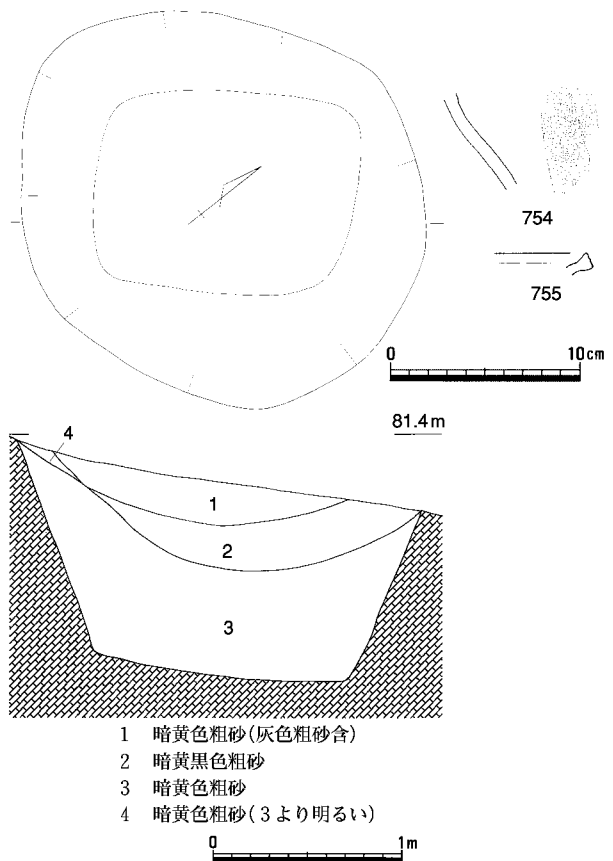
遺物は754・755の2点出土し、弥生時代の貯蔵穴と推定する。



第235図 土壌50(1/40)



第236図 土壌51(1/40)

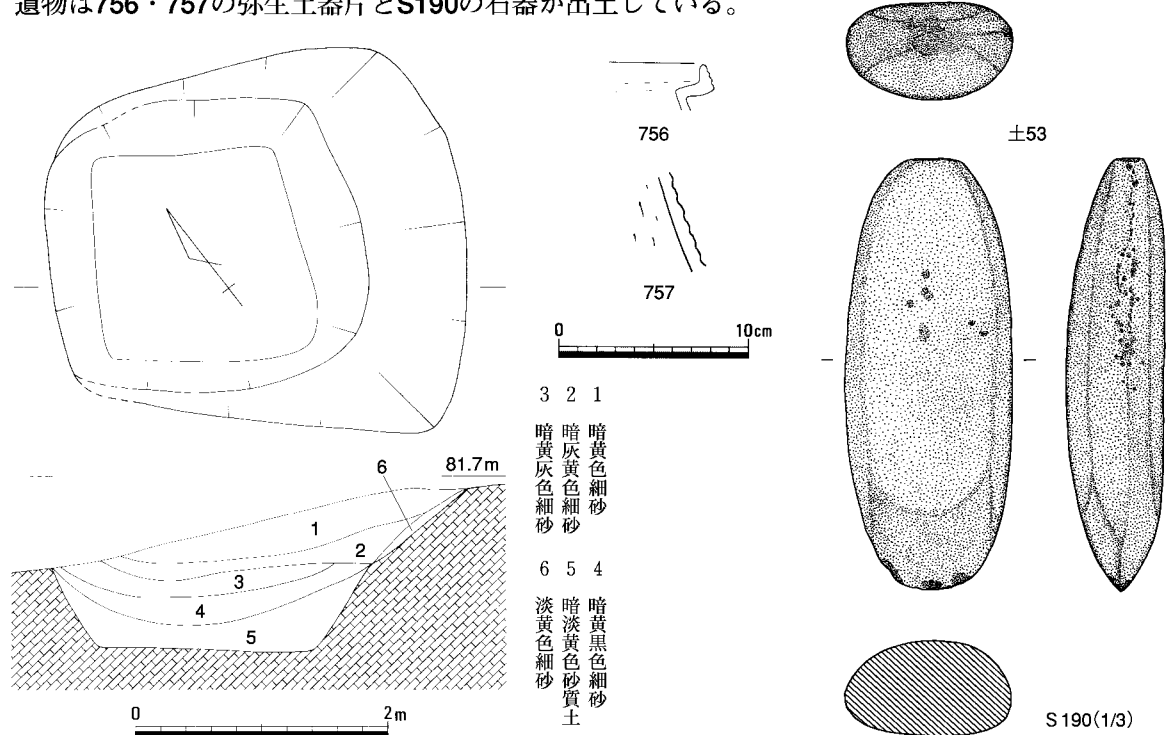


第237図 土壌52(1/40)・出土遺物(1/4)

土壌53 (第238図)

調査区北東部、土壌52の南西1.5mに位置する上端は台形、下端が正方形の平面形を呈する土壌である。主軸は北東から南西にあり、最大長330cm・最大幅310cm・深さ最大140cm、検出面の海拔高は81.6mである。

遺物は756・757の弥生土器片とS190の石器が出土している。



第238図 土壌53(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

756は甕の口縁部で、757は壺の頸部である。S190は流紋岩製の太形蛤刃石斧で、完形品である。

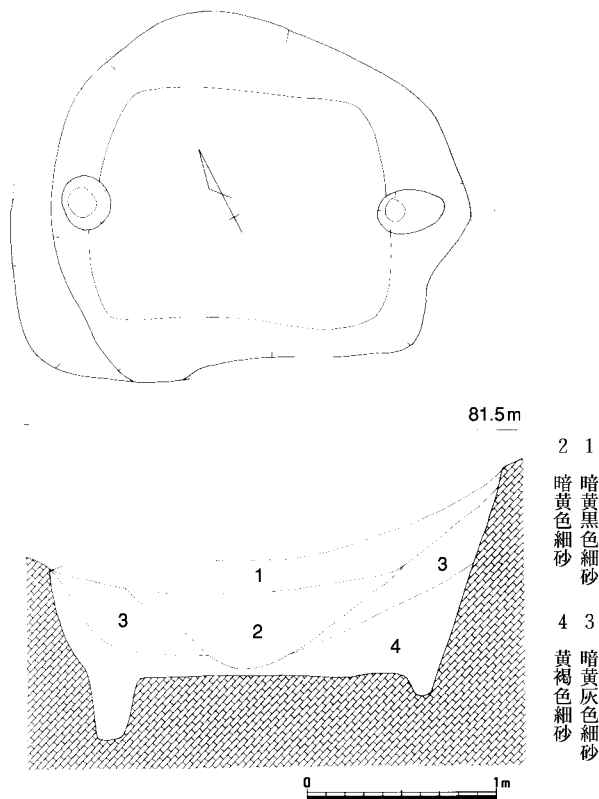
時期は弥生中期後半で、貯蔵穴と推定する。

土壌54 (第239・240図)

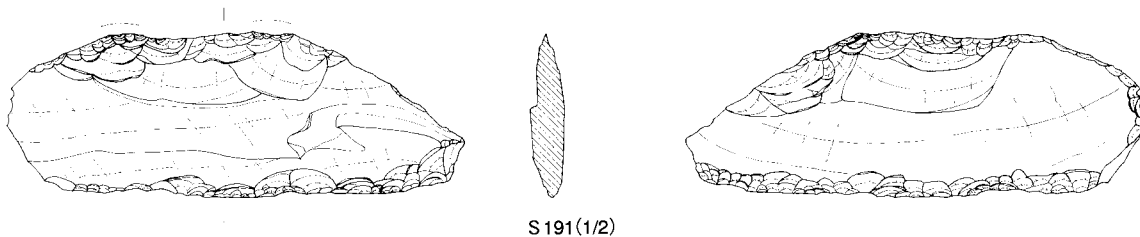
調査区北東部、土壌53の南西1.5mに位置する上端は不定形、下端が長方形の平面形を呈する土壌である。主軸は北西から南東にあり、上端の長さ220cm・同幅190cm・下端の長辺160cm・同短辺120cm・深さ最大110cm、検出面の海拔高は81.3mである。床面の長辺の端には1対2個の柱穴を検出できた。この土壌には覆い屋根が付属していたことが伺われる。

遺物はS191のサヌカイト製石器が出土している。

時期は弥生中期後半で、貯蔵穴と推定する。



第239図 土壌54(1/40)



第240図 土壌54出土遺物(1/2)

土壌55 (第241図)

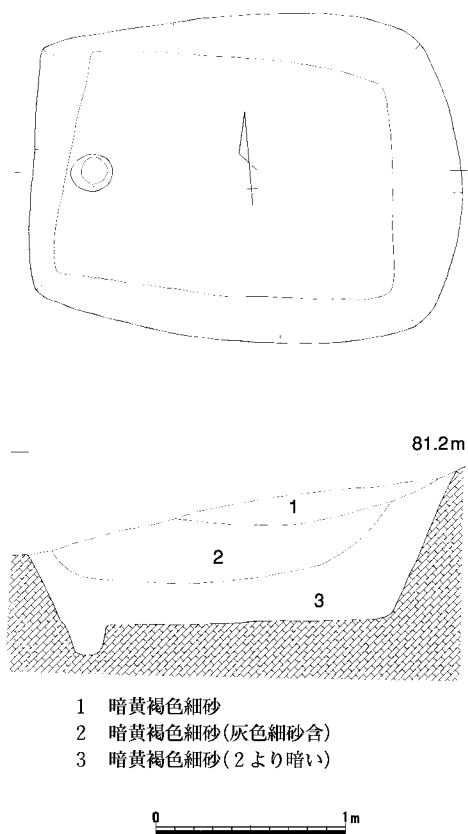
調査区南部、土壌54の南3.0mに位置する長方形の平面形を呈する土壌である。主軸線はほぼ東西にあり、上端の長さ230cm・同幅190cm・下端の長辺170cm・同短辺130cm・深さ最大80cm、検出面の海拔高は81.1mである。床面の長辺の端には1個の柱穴を検出できた。この土壌にも覆い屋根が付属していたことが伺われる。

遺物は出土していないが、土壌53と同様の土質から見て弥生時代中期の範囲に入れたい。

土壌56 (第242図)

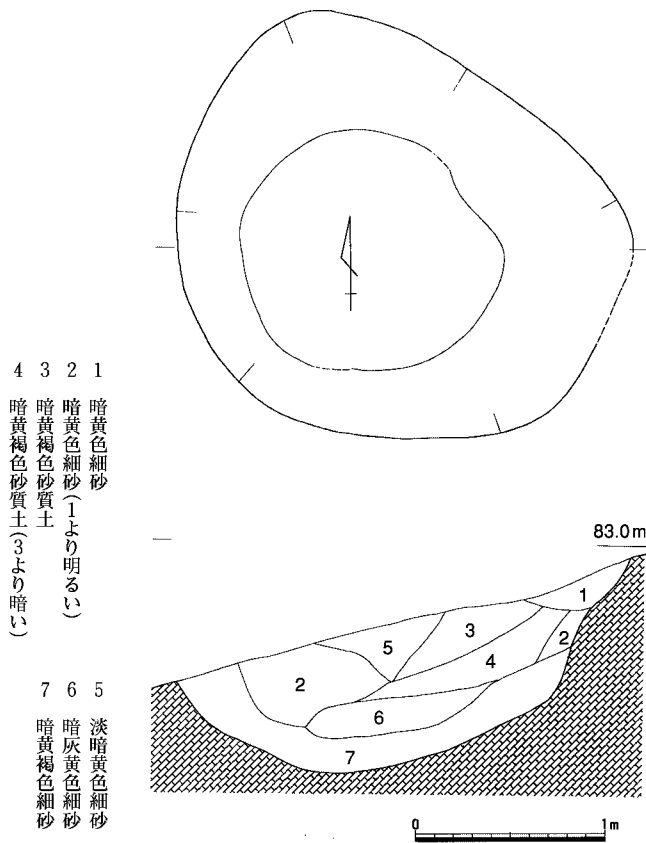
調査区南部、土壌55の南に接して位置する上端は不整円形、下端は円形の平面形を呈する土壌である。上端の長さ240cm・同幅200cm・下端の直径130cm・深さ最大100cm、検出面の海拔高は82.9mである。底面は丸い。この調査区の他の土壌と比較して土層がやや複雑である。

遺物は出土していないし、他の土壌と異なる土質から見て時期不明である。



- 1 暗黄褐色細砂
- 2 暗黄褐色細砂(灰色細砂含)
- 3 暗黄褐色細砂(2より暗い)

第241図 土壌55(1/40)



- 4 暗黄褐色砂質土(3より暗い)
- 3 暗黄褐色砂質土
- 2 暗黄褐色細砂(1より明るい)
- 1 暗黄褐色細砂
- 7 暗黄褐色細砂
- 6 暗黄褐色細砂
- 5 淡暗黄褐色細砂

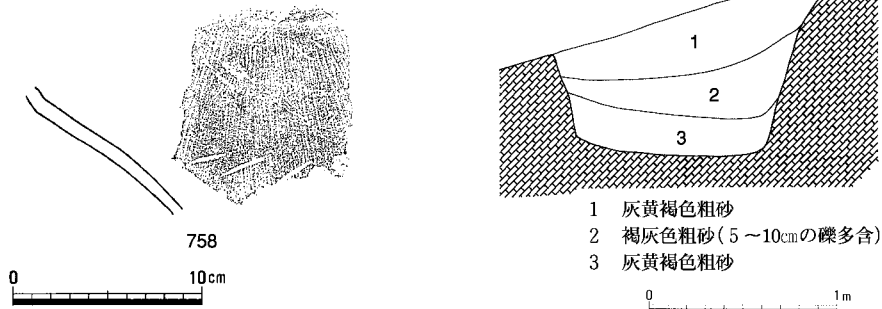
第242図 土壌56(1/40)

土壙57 (第243図)

調査区南端、土壙56の東南に一部切りあう形で位置する長方形の平面形を呈する土壙である。主軸線はほぼ南北にあり、上端の長さ180cm・同幅150cm・下端の長辺150cm・同短辺100cm・深さ最大100cm、検出面の海拔高は81.3mである。

遺物は758の弥生土器が出土している。壺体部肩部の細片で、ヘラ状工具による刺突文が見られる。

土器および形状・土層等から考えて、時期は弥生中期後半としたい。



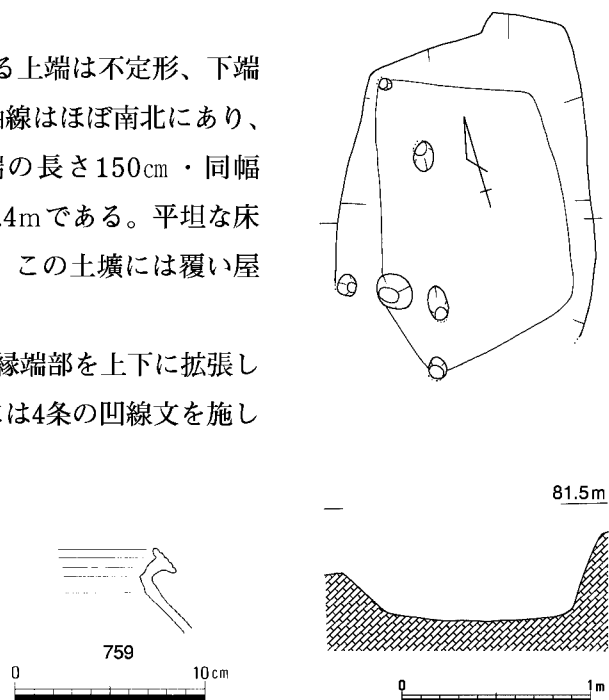
第243図 土壙57(1/40)・出土遺物(1/4)

土壙58 (第244図)

調査区北東部、土壙55の東1.9mに位置する上端は不定形、下端が多角形の平面形を呈する土壙である。主軸線はほぼ南北にあり、上端の長さ200cm以上・同幅130cm・下端の長さ150cm・同幅100cm・深さ最大50cm、検出面の海拔高は81.4mである。平坦な床面には1個の柱穴と5個の杭穴が検出できた。この土壙には覆い屋根が付属していたことが伺われる。

遺物は759の弥生土器が出土している。口縁端部を上下に拡張して幅広い内側に傾斜する面を作る。その面には4条の凹線文を施している。

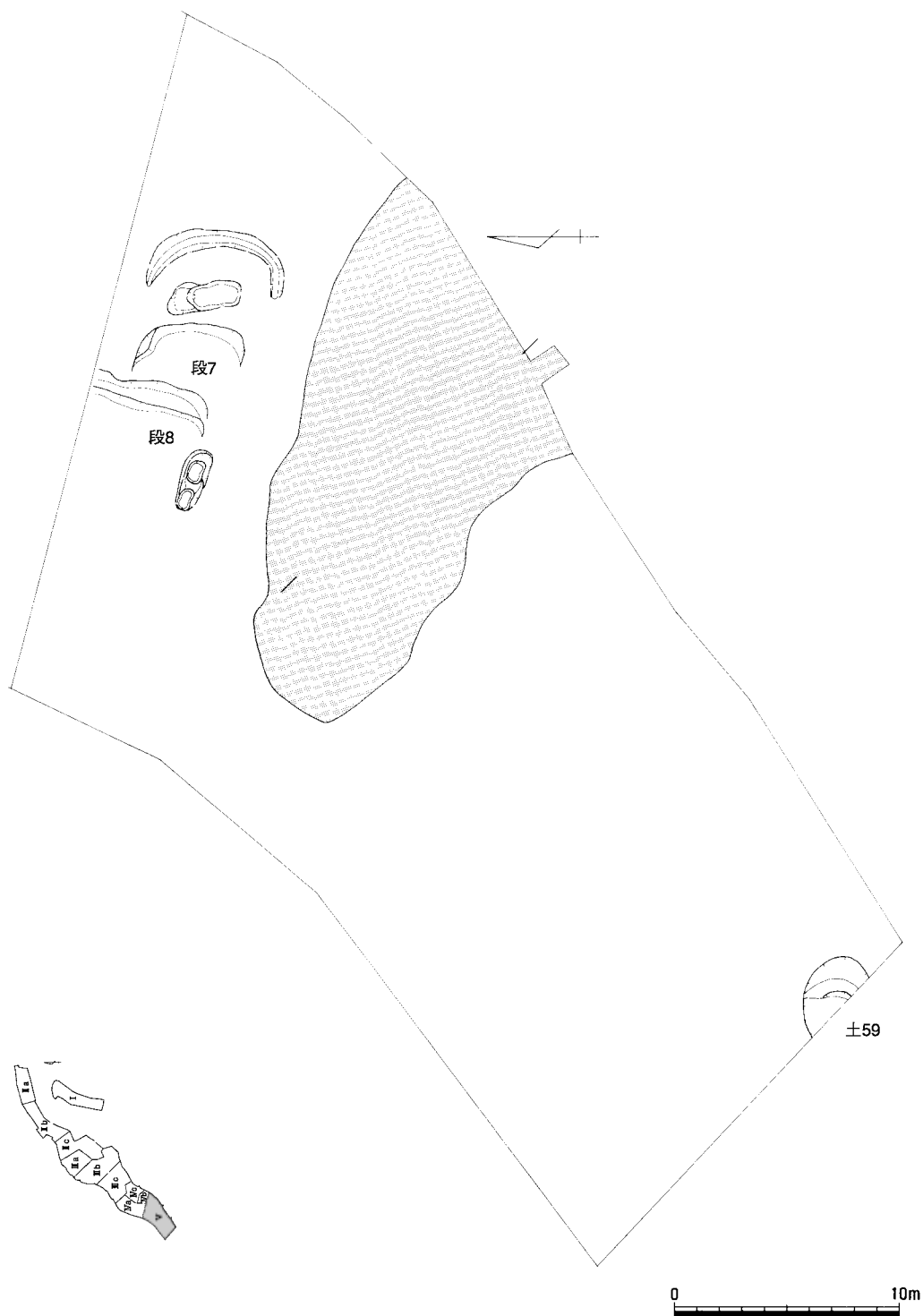
本土壙の時期は、この土器の形式から弥生中期後半と推定したい。(浅倉)



第244図 土壙58(1/40)・出土遺物(1/4)

11 V区の調査

IV区から続く遺構は、V区北寄りの谷地形までで途切れる。第245図に点描で示した範囲では大小の角礫が積み重なった状態で検出され、間から弥生土器も出土した。平面的には一部に列をなすように見られる部分が所在し、人為的な構造物の可能性が考えられたが、等高線に直交する形で重なり方



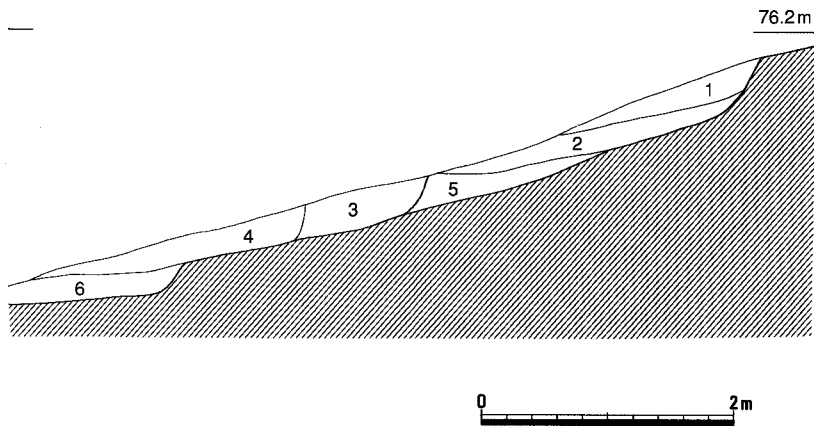
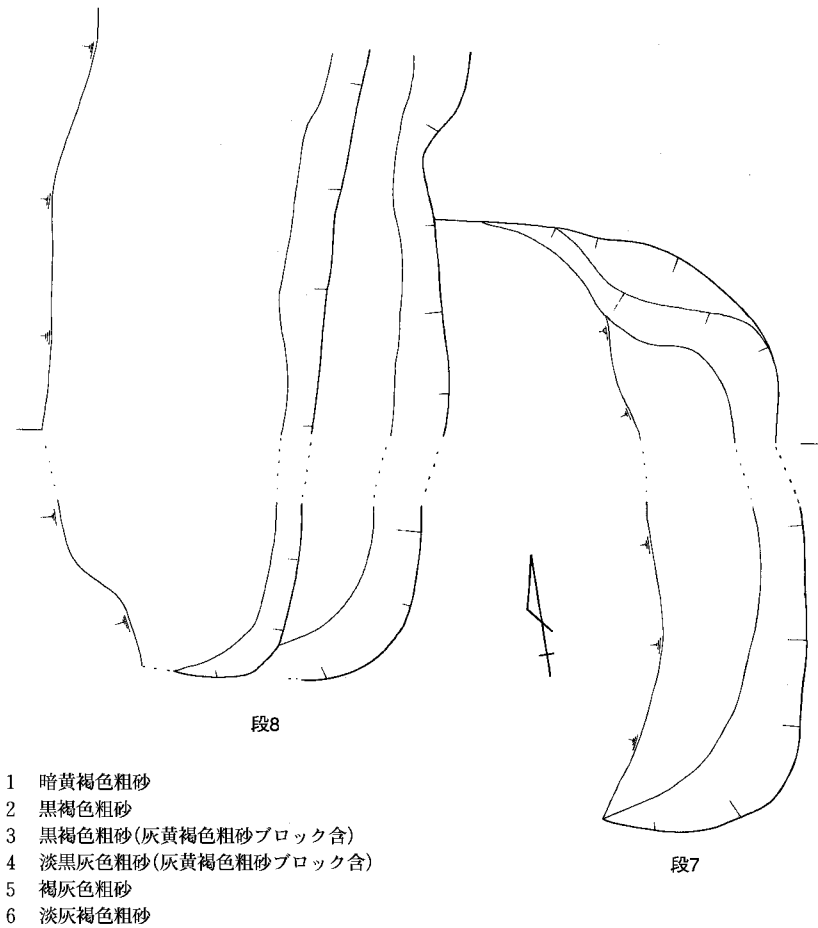
第245図 V区遺構配置図(1/300)

の断面観察等を行った結果、確証は得られなかった。他の調査区も含めて、このように角礫の集中するところはなく、これより北側での集落の設営に当たって、掘り出された石を寄せ集めた場所であるのかもしれない。

他に、段状遺構2基、土壇1基が検出されている。

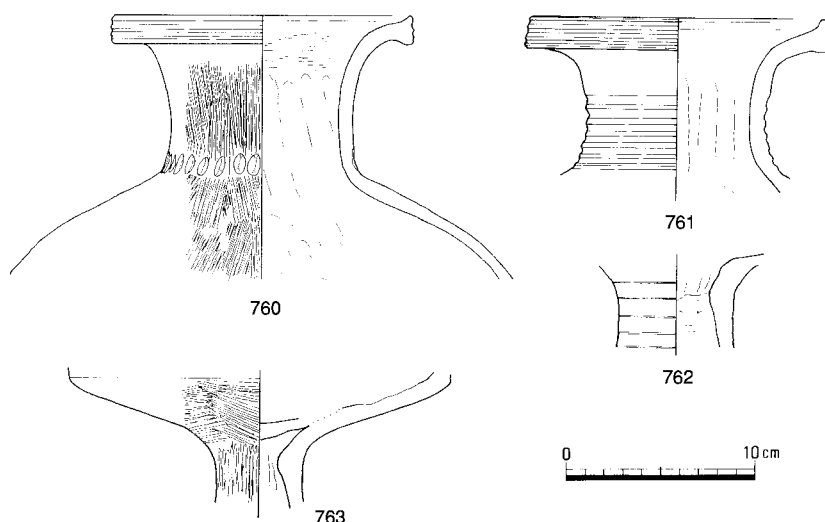
段状遺構7（第245～247図）

調査区の北東部で、段状遺構8の東に隣接して所在する。



第246図 段状遺構7・8 (1/60)

遺構の平面規模は、南北長470cm、東西幅250cm程度の長方形範囲に想定され、第246図の第2層下面における平坦面は、3.5×0.8m程度の広さであるが、この範囲についても平坦とは言い難い緩斜面である。この平坦面および西側斜面の遺構想定範囲においては、建物を構成する柱穴は検出されなかったほか、平坦面山側



第247図 段状遺構7 出土遺物(1/4)

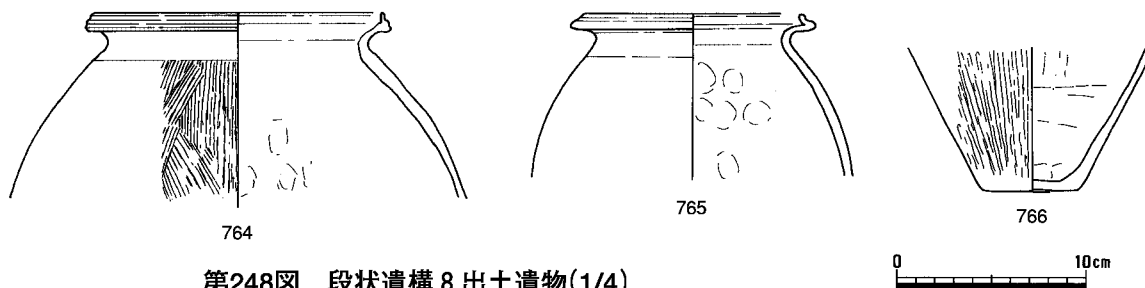
にも、壁体溝等の構造は見られない。これらの検出状態から、この遺構を竪穴住居とはみなせない。

出土遺物には、弥生土器の壺760・761、高坏762・763などがあり、壺頸部外面の凹線や高坏脚部への円盤充填などから、弥生時代中期後半に比定される。

段状遺構8（第245・246・248図）

調査区の北辺中央部に位置し、IV区の竪穴住居74に続く。下記のような遺構検出状態から、竪穴住居とせず、段状遺構としている。

第246図の平面図においては、遺構を山側で2段になる状況に表現しているが、これは同図の断面図



第248図 段状遺構8 出土遺物(1/4)

における第3層および第4層の、それぞれの山側の立ち上がりの形状を一枚の図に表現したためで、断面図の形状からも、第3層によって埋没した古段階の遺構に、第4層相当の新段階の段状遺構が重複して設営されたことがうかがえる。調査区内で検出された規模は、南北長約5m、新段階での幅180cm、古段階の残存幅90cm程になる。古段階・新段階とも、床面は平坦とは言えず、貼り床等も確認されない。また、山側の端部には、壁体溝等の構造は見られない。床面と想定する面およびその西側斜面において、建物を構成する柱穴はまったく検出されなかった。

出土遺物には、弥生土器の甕764～766などがあり、弥生時代中期後半に比定される。

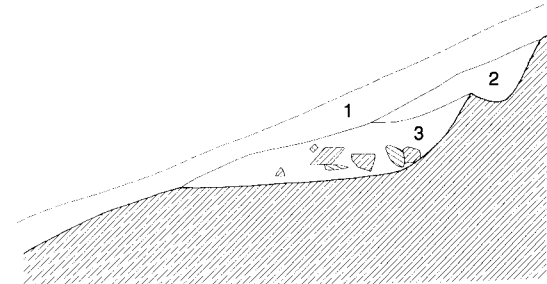
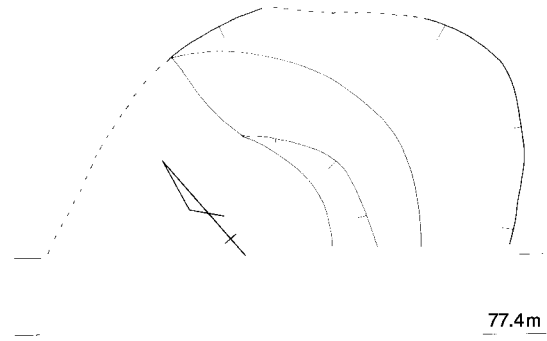
土壌59（第245・249図）

調査区の南端に位置し、一部を調査区外に残す。段状遺構7・8とは、間に角礫集中範囲を挟んで35m離れている。角礫集中範囲より南側については、その北側よりも地形の凹凸は少ないものの、斜度はやや大きくなっており、面的にも、トレンチによる土層観察によっても、遺構・遺物は確認されず、この土壌だけが大きく離れて検出された。

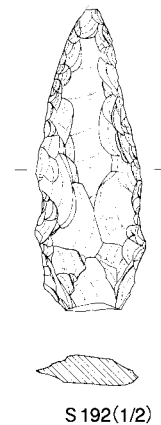
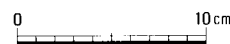
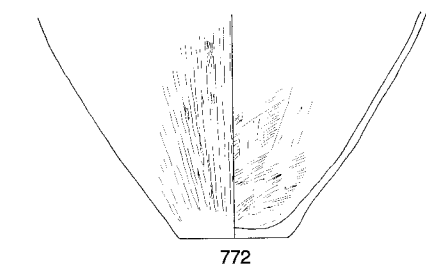
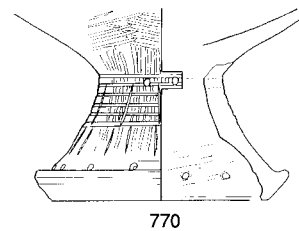
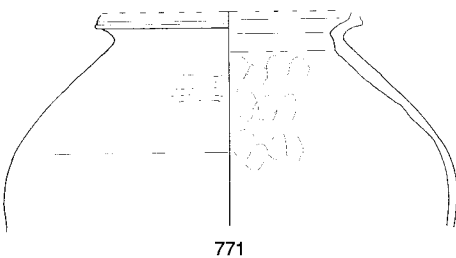
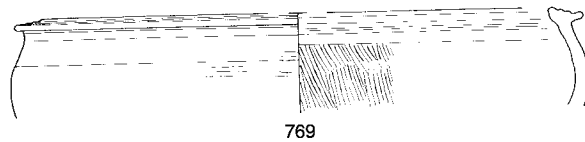
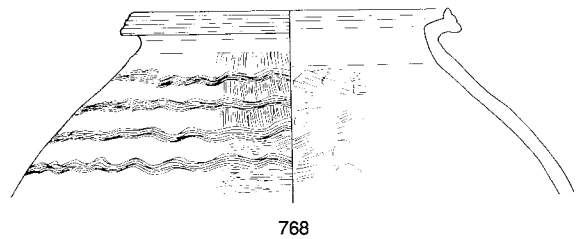
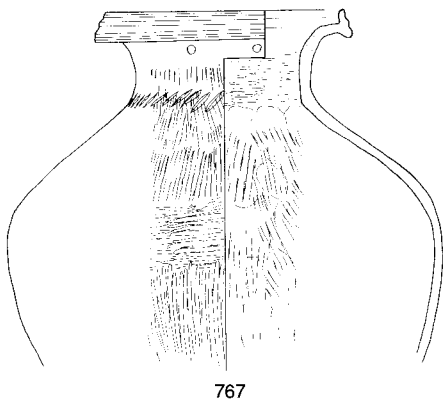
南西部が調査区外に残るため、全体像が不明であるが、円形ないし隅丸方形と想定される。規模は、現存で3×2.5m程度で、平面図には表現しきれしていないが、第249図第3層下面に若干の平坦面を形成している。山側の肩口は2段に掘られているが、第2層と第3層の関係と、遺物が第3層からのみ出土する状態からは、第2層部分は別遺構となるかもしれない。第3層の下半からは多数の角礫が出土したが、構造物となるような可能性は認められない。

出土遺物には、弥生土器の壺767、甕768・771・772、鉢769、台部770などの他に、石槍S192がある。これらは、弥生時代の中期後半に比定され、調査区北部およびⅣ区以北で検出されている弥生時代の遺構と、時期差は無いようである。

(光永)



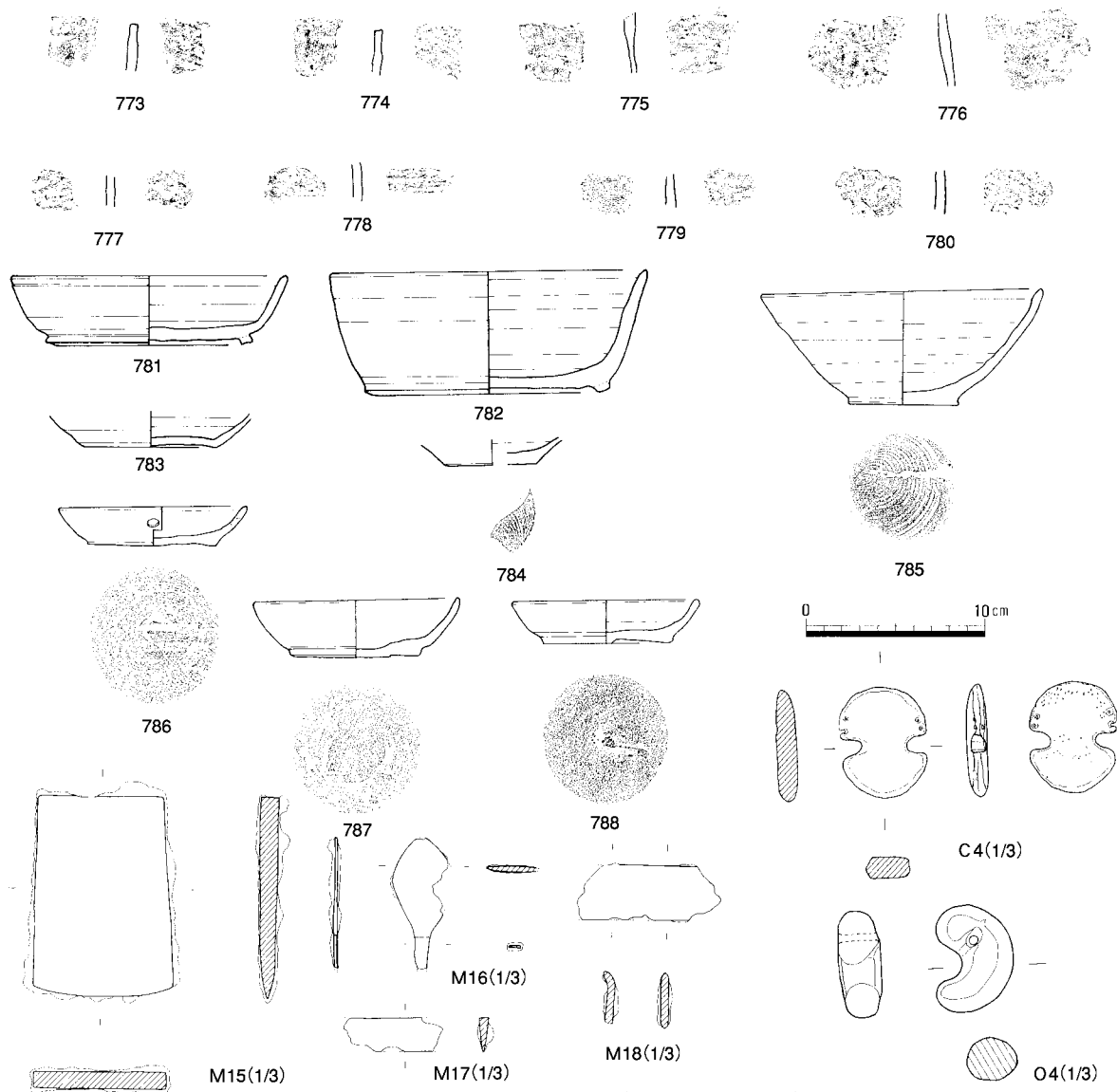
- 1 にぶい黄褐色細砂
- 2 褐灰色細砂
- 3 褐灰色細砂(弥生片含)



第249図 土壌59(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

12 遺構に伴ない遺物

773~780は、I区の株周辺から検出された。包含されていた土層は、花崗岩の風化土中であり、遺構を確認することはできなかった。すべての破片は、同一個体の破片である。口唇部は、平坦となり、内外面にアルカ属の条痕が認められる。781~784は、Ⅲb区住居55の東側斜面上方から検出されている。Ⅱc区の住居45の検出中に出土したものである。しかしながら、明確に遺構の存在を確認できてからではなく、Ⅱc~Ⅲb区にかけての南西斜面における遺構の有無の確認段階である。781と782の須恵器は、同レベルの周辺から鉄滓がみとめられていることから、8世紀代の時期のものであることから、この段階に比較的高所になる丘陵斜面部に何らかの遺構が伴うことが想定される。785と786は、住居76から出土しているが、当該住居には伴わないと判断している。785は、備前焼である。787と788は、住居80の浅い窪みの部分から重なって検出されている。C4は、住居57の遺構検出中に検出されている。検出された周辺には、遺構を確認することができなかったのである。M15は、住居56と57の検出中に出土したのである。しかし、検出面は、これら住居のプラン検出の前である。M16とは、全面調査開始後の遺構の広がり把握するためのトレンチ25と26から検出されている。O4は、Ⅲb区の包含層から検出された土製勾玉である。 (下澤)



第250図 遺構に伴ない遺物(1/4・1/3・1/1)

第9章 結 語

第1節 発掘調査の成果

本報告書に収載した遺跡は、6遺跡である。時代は、縄文期から鎌倉・室町期の遺構と遺物が検出されている。岡遺跡で検出された陥し穴は、埋土が黄褐色系で、黒色土を含んでいないことから縄文時代でもかなり古くなると思考される。その分布は、1個が離れているが3個はまとまって配置されている状況を窺わせるものである。また、才地遺跡においても、この時期と想定される同一個体の破片が検出されている。

弥生時代中期中葉から末葉の遺構が、岡遺跡から検出されている。特に、この地域では、様相があまり明らかでない中期中葉段階の頸部に突帯文を有する時期のものが一括して出土している。この段階から岡遺跡では、継続して生活が営まれていたことが少ない資料ながら明らかにすることができたのである。そして、相前後して展開をしてきたのは、才地遺跡である。当該遺跡では、新しくなる時期のものも出土しているが、頸部に突帯を有するのが検出されている。後葉になると岡遺跡と異なり、居住域を拡大させるのである。才地遺跡の居住域は、北から北西斜面に位置していることから、その居住環境は良好とは言えないにも関わらず、居住域を形成させていくのである。出土土器においては、県南部の土器を主体とするが県北を中心として分布する器種が認められる。この器種は、器台の受部に平坦面を形成し、下方に垂下させる口縁部となるものである。また、備後地域に分布の中心があるとされ、県北にも出土例のある注口付の脚付鉢が検出し、さらに播磨地域にみられる土器もみとめられるなど県南部と周辺地域の土器のあり方を考えるうえで、貴重な資料を得ることができたのである。

弥生時代後期前葉の遺構と遺物は、岡遺跡で検出されている。しかし、中期末葉からの継続ではなく、時期差を介在させるのである。この後葉段階になるとハヶ奥遺跡では、小規模の纏まった居住域を形成する。しかしながら、この居住域も才地遺跡とかわることなく北斜面に位置するが、さらなる悪条件は、谷部に形成されていることである。このような地点に居住域を形成させる背景にはなにがあるのか今後の課題である。なお、当該期には、岡遺跡で遺構は不詳であるが遺物、才地遺跡では竪穴住居が確認されている。

古墳時代の5世紀末から7世紀代には、小坂古墳群と才地古墳群が形成される。このうち、才地1号墳では、棺釘がほぼ原位置で認められたことから棺の規模及び棺の構造を知る手掛かりを得ることができた。さらに同4号墳においては、竪穴式石室の内側にさらに石で囲う状況が認められている。そして同6号墳では、石棺の外に何らかの施設を想定される石の集積が認められるなど、特異な造りが注目される。出土遺物においては、土壙墓2から出土した48の徳利状の須恵器が、外来形のものとしてこの地域として初見であり、遠隔地との関係を把握するうえで貴重な資料を得ることができたのである。

この他に、奈良時代の骨壺が出土したことから、同時期の遺跡の存在が想定されるのである。ともかくも、これまで遺跡の希薄な地域であったが、今回の調査で県南城と遜色ない遺跡の広がりや内容を有することが明かとなったのである。

第2節 集落の展開

今回調査された内の岡遺跡、八ヶ奥遺跡、才地遺跡の距離関係は、岡遺跡と才地遺跡が11km、才地遺跡と八ヶ奥遺跡では1kmほどの位置にある。先に地理的環境で触れたが、岡遺跡は赤磐郡、他は和気郡に含まれるのである。これら遺跡を最短距離で結ぶことができるのは、郡境となる佐伯峠である。この峠は、岩盤を切り通したものであり、尾根越えの山道ではないのである。ともかくも、このような地勢条件での南側の前面に岡遺跡、北側からの最も奥まった処に八ヶ奥遺跡、谷筋の水田から広く前面に広がる佐古を望むことができる位置に才地遺跡が営まれているのである。

三遺跡において最も古くなるのはⅠ期とした中期中葉の住居を検出している岡遺跡と才地遺跡である。岡遺跡では、住居に伴う状態での遺物の検出が少なく個々の遺構について、その時期の明確さに欠ける。しかしながら、竪穴住居1・2・5、段状遺構2・11、土壇7においては、中期中葉の土器を良好な状態で検出することができたのである。才地遺跡では、竪穴住居29と竪穴住居50eである。竪穴住居29は、住居にしては明確さに欠け、また、竪穴住居50eは、遺構内容について興味深いものであるが、伴出遺物が甕の小片である。このようなことから、遺構および遺物の内容からも岡遺跡が、この段階において中心的に展開していたことが想定される。

ⅡからⅢ期中期後葉になるとその様相は、大きく変化するのである。岡遺跡では、中期中葉からの継続した集落の営みを確認できないのである。これに対し才地遺跡は、広い範囲にわたり集落を営み出すのである。番号を付した住居は80軒であり、その内時期が前後するもの11軒を抜くと69軒となる。さらに枝番を付しているので実質的には、その倍以上の住居が営まれたことが想定される。これらの住居は、同じ時期に営まれていなかったことが調査において把握されている。しかしながら、先に、個々の遺構の説明で示したように重複関係から前後することも確認している。ともかくも、長さ約270mの調査範囲において住居が一定の距離をおくことで集落を営まれたことが想定される。このことは、日当たりの悪い北西の丘陵斜面(冬季の調査時で2c区から南西側は、10時過ぎまでは霜柱が溶けず、15時過ぎには日が山かげに入り、さらに16時過ぎには霜柱が立ち始める状況であった。)であるにもかかわらず、この斜面全体を集落域として設定しているのである。

岡遺跡では、当該期の住居が1軒検出されている。この前の時期では認められなかったが、竪穴住居10が認められる。この内容からは、才地遺跡で検出されたような集落の展開は認められなかったのである。

Ⅳ期中期末葉段階になると、帯状に展開することなく住居間の距離が離れる。また、住居の構造は、段状遺構の内容が多くなるのであるが、集落の規模は前段階よりも大幅に縮小してくるのである。

先に、各調査区の冒頭で基盤層については、花崗岩の風化土とその再堆積土からなることについて触れている。花崗岩風化土は、水の侵食に極めて脆く、また容易に掘削が可能な土質のものである。このことは、竪穴住居28の住居の廻りに段を2重に巡らし、床面までの掘り下げも極めて深くしているにもかかわらず丘陵斜面下方は流出しているのである。この他の住居も、丘陵斜面下方部分が流出し、ほとんどが「コ」の字状となって検出されている。また、第1図の調査区全体図にみられる等高線は、Ⅱa区の竪穴住居7～13、Ⅱb区の竪穴住居20と21、Ⅱc区の竪穴住居35～37、同区の段状遺構4、Ⅲc区とⅣa区にかけての竪穴住居66～68、71が認められる箇所のそれは、等高線が積んでいる状況が

判断される。角度を実際に測ってみると、30度前後からきつい箇所では45度を越える所も認められる。調査時でのこの部分からの上り下りは、ほとんど不可能であった。また、Ⅲc区の竪穴住居66と段状遺構6との間の北東側に検出されたピット群の掘り下げには、身体の保持ができない状況であったのである。このような内容からは、住居の崩落が比較的頻繁に発生していたことが思考される。しかし、調査時における樹木を全て伐採し、表土も除去して崩落しやすい基盤層を露出させた状態では想定していないのである。住居を構築するさいには、やはりそれに近い状況が生じたと思えることは許されるであろう。このことから住居の構築は、平地に存在する住居と異なりその存続時間は短いと思われる。これにより、住居は、崩落の危険が増す丘陵斜面の上下方向ではなく、その危険が少なくかつ平坦面を造成しやすい等高線に沿った展開となったのである。したがって、帯状の形態はあらかじめ広い平坦部を設け、その中に住居を構築したのではなく、崩落した住居の建て直しの連続によりこのような景観が生じたと思えるのである。

さらに、住居の構造は、「コ」の字状に検出されているが、基本的に竪穴の内容を想定している。しかし、住居50eは長さ11mを超えるものが、竪穴の構造が可能であろうか。この問題は、住居の構築内容と密接に関わってくると思える。住居を構築するには、住居規模の範囲において樹木の伐採から入り、それから掘削となると思われる。才地遺跡の地は、当時において人の手の入った二次林ではなかったことから、樹木の伐採はかなりの負担となったと思われる。さらに、調査において確認された長さ11m、幅3m前後の竪穴は、丘陵斜面側が流出したと想定しても困難である。このようなことから、流失したと想定される丘陵下方側の樹木の伐採は、住居構築時にあらかじめ床面と想定する高さまでにとどめたと思える。床面は、この切りとどめられた面と丘陵斜面上方側を掘削面とをつなぐことにより、粗朶類を用いた床面が設けられる可能性を想定するのである。この可能性が許されるならば、竪穴住居構築に伴う株の撤去を伴う掘削の労力が大幅に軽減される。さらには、従来から認められてきた斜面部における段状とされる遺構が、このような構築内容を考慮することにより、住居として検討すべきものであることが了解されることが許されると判断されるのである。

後期前葉から中葉にかけては、岡遺跡で住居と段状遺構が認められ、才地遺跡では住居1からこの期の土器が出土している。後葉になると才地遺跡で住居が2軒認められるが、両遺跡の間に位置する八ヶ奥遺跡に中心が移るのである。この住居は、一部に重複するものが認められるが、ほぼ単一の時期の集落である。この集落の立地は、才地遺跡が所在する丘陵の最も奥まった北西側の谷奥にあたる。集落の立地条件としては、才地遺跡よりも悪く、日中でもほとんど陽がささない環境である。何れにしても、居住環境の悪い所に占地することは、このような条件の下でも集落を営まなければならない背景があったものと思える。しかしながら、才地遺跡にみられるような土器の他に鉄器の保有、石器製作、分銅形土製品の存在は、吉備南部の同時期の遺跡と比較しても遜色ないものである。このことからすれば、八ヶ奥遺跡と比較しようがないが、集落の立地については同様な背景が介在したものと思えるのである。

第3節 出土遺物について

1 中期中葉から末葉の土器について

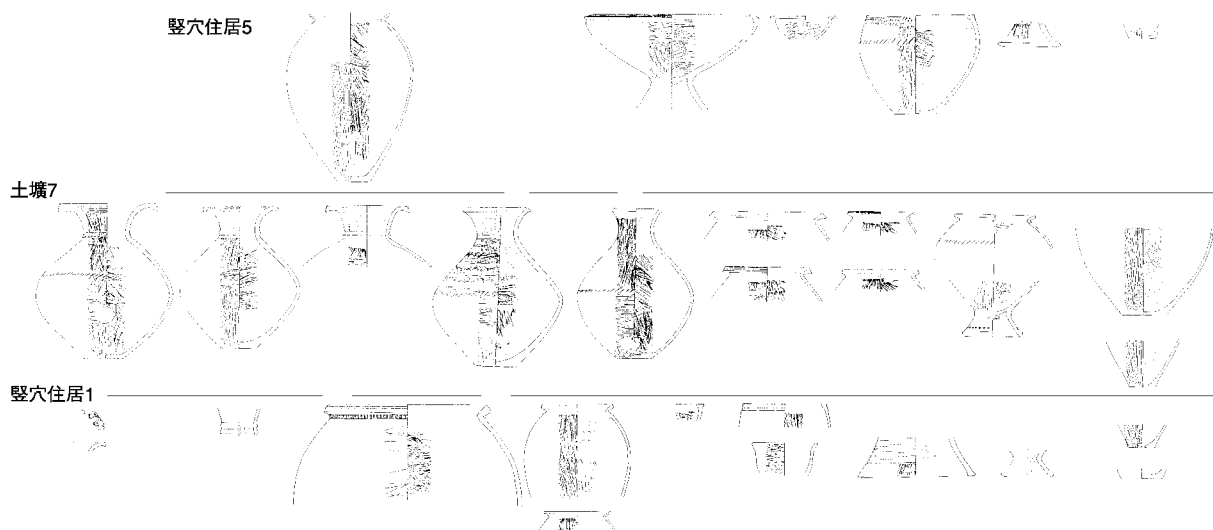
今回調査された岡遺跡と才地遺跡では、弥生中期中葉から末葉にかけて土器をともなう住居が多数検出された。前者は赤磐郡であり、後者は和気郡に所在し、吉井川流域に連なっている。吉井川は、県下三大河川内で最も東部を流れ、県北の拠点である津山を流域に含んでいるのである。岡遺跡は、切り通し状の峠を越えることにより、近接する状況となる。しかしながら、この峠のある佐伯峠の歴史的な変遷は不詳である。県東部のこの地域は、近年にいたるまで顕著な弥生時代遺跡の存在が知られていなかったのである。しかしながら、今回の調査では、当該遺跡に近く大規模な集落遺跡が調査された山陽団地関連と遜色ない集落が確認されたのである。このことは、空白部分であった県東部の吉井川流域が、県南部と県北との土器を通して明らかにできる資料を得たことになったのである。

このような位置関係にある両遺跡は、先に個々の遺構について述べてきたが、改めて当該期の土器の器形、文様、器面調整について、遺構ごとにそれらの内容を示すことにより、その変化を具体的に見ていくことにする。基本的には、重複する遺構からの出土土器との関係を基準とする。

岡遺跡と才地遺跡で最も古くなると考えられるⅠ期の土器を伴う遺構は、前者から多く検出されている。このうち、重複関係(第1図)にあるのは、住居5と土壌7であり、前者の上面に検出されている。

器形は、土壌7の甕が口縁屈曲部器壁を肥厚することなく、端部のみを上下に張り出させるのと、屈曲させた口縁部外面に丸みを持たせ、内面は凹み状となり先端を鋭角に終わらせるものがある。凹線文は、後者に施されないのが認められる。46は、その顕著な例である。高杯は、住居5で口縁部が内湾して端部を拡張させるのと、端部を鏢状に拡張させるものがある。前者には、凹線文を施している。脚端部は、ほぼ変化なく、素縁で終わらせる。また、高杯の脚部ではないが土壌7の台付鉢では、やや端部を肥厚気味にさせるが、素縁の内容である。壺は土壌7からで、頸部が大きく外反し、口縁部がほぼ水平の面を形成させ端部を下方に垂下させるものと、甕に見られた端部のみを上下に張り出させるものとが認められる。底部は、住居5の甕19でやや凹み状を呈し、土壌7の50や54では、同様な内容の形状を示している。これらは、押圧とナデによるもので、明確に上げ底、張りだしを意識しての形成はしていない。

文様は、住居5で甕と高杯の口縁端部に膨らみと条線のある凹線文(凹線文に関しては、項を改めて記す。)を施している。土壌7は、壺の頸部に凸帯文と凹線文、胴部には刺突文と櫛描文を施すのが認



第1図 岡遺跡重複遺構出土遺物

められる。さらに、口縁部内面にも文様帯を残している。台部には、円形の刺突文が施文されている。凹線文は、壺、甕とも住居5と同じ内容を呈している。

器面の外面調整は、住居5の甕と鉢で胴部上半にハケを施した後にタテヘラミガキを用いている。高杯は、ヨコヘラミガキの後タテヘラミガキと21のように多角形となるヘラミガキを用いている。土壙7は、壺の胴部に幅広の帯状のヨコヘラミガキを用いている。この帯状ヘラミガキは、42の甕にも認められる。内面は、ヘラケズリが住居5の甕24で認められるが、19ではタテハケを用い底部近くでナデを行い、ヘラケズリを用いていない。ヘラケズリが認められるのは、23の鉢において胴部半ばからである。

重複関係にないが、この両遺構と同様な土器内容を呈するのは、同じ岡遺跡の住居1である。ここでは、新たに器台が加わる。壺の口縁部、甕の口縁端部形状、また、器台、台部の端部処理を素縁で終わるなど先の内容に示されたものである。さらに、住居5の23と同じ内容に近い器種の伴出が見られる。才地遺跡では、住居29からの112～115、119～121の遺物である。

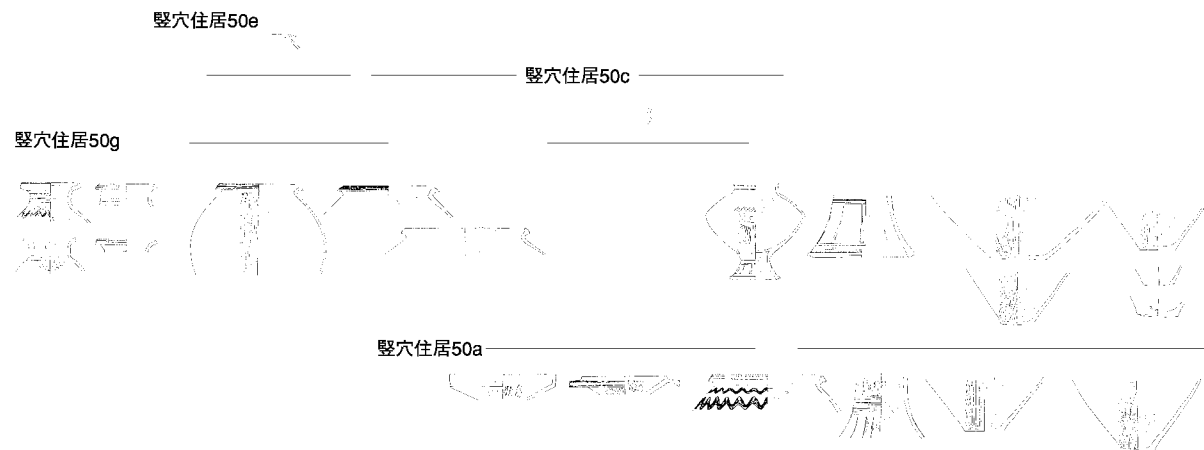
また、Ⅰ期とⅡ期およびⅣ期との重複(第2図)が認められている。これは、住居50の重複である。住居50eからは、甕の小片を検出している。甕は、頸部を「く」の字状に強く屈曲させ、端部の肥厚が認められないなどⅠ期の内容を示している。重複関係で次に構築されたのは、住居50cと50gがⅢ期とし、次の住居50aがⅣ期になる。

Ⅲ期の器形は、壺で頸部が緩やかに外反するものと直口するものがある。口縁端部は、上方に拡張するものと撥状に肥厚させるもののが認められる。甕は、278の口縁端部が折り返して形成されものと、先の壺と同様な端部処理をしているもののが認められる。底部は、平底と張り出しているのが検出されている。

文様は、壺、甕とも凹線文を施している。281と283においては、凹線文とヘラ描沈線文の施文が認められる。後者の凹線は、膨らみと条線が認められる。また、透かしを施しているが、281は貫通していない。

器面の外面調整は、278で頸部から肩部にタテハケ、以下タテヘラミガキを施している。281では、胴部文様以下に帯状のヘラミガキを行っている。内面は、底部近くにヘラケズリを施すが、胴部から肩部にかけては、押圧とナデによる。

Ⅳ期の器形は、高杯で口縁部が立ち上がるものと鏝を付すもののが認められる。底部は、平底である。



第2図 才地遺跡重複遺構出土遺物1

文様は、266で口縁部外面の凹線文の施文が無く、立ち上がり部分にナデによる凹部が認められる。器台では、螺旋によるヘラ描沈線文が施されている。

Ⅱ期の重複関係は、才地遺跡で調査され、Ⅱ期からⅢ期と、さらにⅣ期にわたって連続しているのも認められる。前者が住居36c、土器溜まり、住居37と住居55a、同b、土壙36、後者が住居66a、住居62、土壙38、住居65、住居66埋土、住居66上面集石周辺からの出土において見ることができる。

Ⅱ期からⅢ期の重複関係(第3図)は、住居36c、住居36土器溜まり、住居37であり、それらについて見ていくことにする。

器形は、壺の口縁部外反の度合いが緩くなる。甕の口縁端部は、上方に拡張させるもの、肥厚させ上方に拡張させるもの、上下に拡張させるものが認められる。高杯は、口縁部が内湾するものと直口する2種類が認められる。脚端部には、凹線文が認められる。器台は、口縁部が肥厚気味のもの、端部に平坦面をもうけて斜めに垂下させる口縁部を形成させるものがある。台部の端部は、素縁で終わらせている。

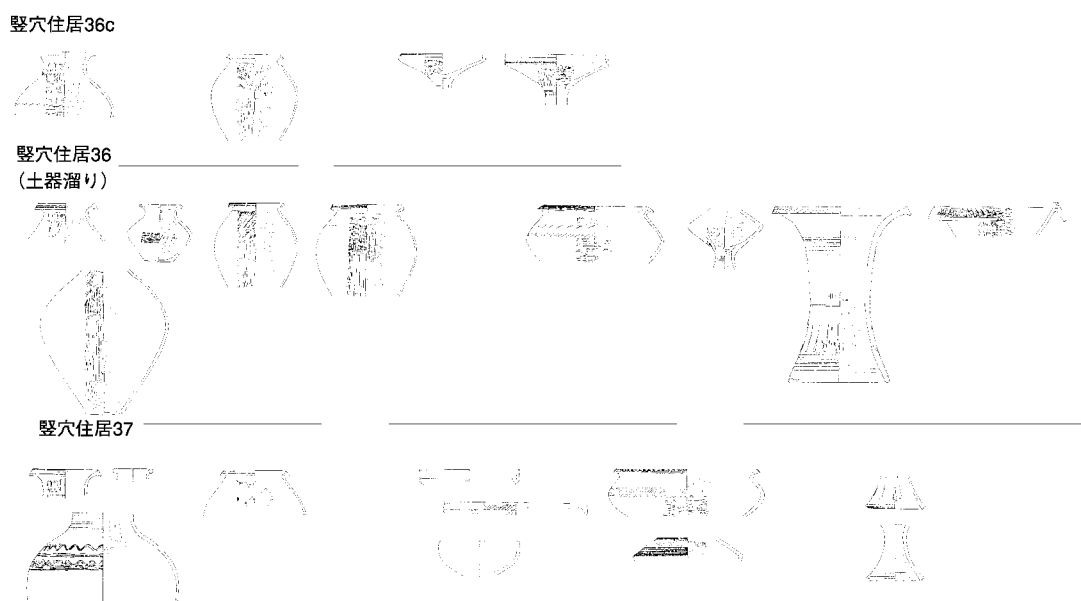
文様は、壺及び台付鉢で刺突文が認められるものがある。高杯脚部や台付壺の台部には、単線(螺旋または2本などの単位によるのではなく、半回転さらには数回の連続であっても単独のリングとしての施文である。)による篋描沈線を施文している。透かしは、貫通していない。

器面の外面調整は、壺と台付鉢胴部に帯状ヘラミガキを行っている。甕の頸部から胴部半ばまでタテハケ、以下タテヘラミガキを施している。また、タタキを施しているものも認められる。内面は、ヘラケズリが胴部最大径よりやや下方までであるが、肩部に押圧のみで、タテヘラケズリが肩部下半に達する個体が認められる。

Ⅲ期は、住居37である。

器形は、壺の口縁で口縁端部を丸く折り曲げて、玉縁を意識しているのが認められる。甕の口縁端部の拡張が、下方の屈曲が強くなる。また、胴部が逆「く」の字状に屈曲するもの、高杯には、鏝を有するのが伴っている。

次は、Ⅱ期が住居55aと同b、Ⅲ期が土壙36(第4図)である。



第3図 才地遺跡重複遺構出土遺物2

器形は、高杯の口縁部が内湾して立ち上がる。甕口縁部は、斜め上方への拡張傾向が強く、端部の粘土を折り曲げて拡張しているものも認められる。

文様は、甕、高杯とも口縁端部外面に凹線文を施文するが、甕では1本のみの施文のものがある。

器面の外面調整は、甕ではタタキが認められ、胴部最大径あたりまでタテヘラミガキを行っている。内面は、甕のヘラケズリは、胴部最大径部分まで認められ、それから頸部までは、押圧とハケを施している

Ⅲ期は、土壙36である。

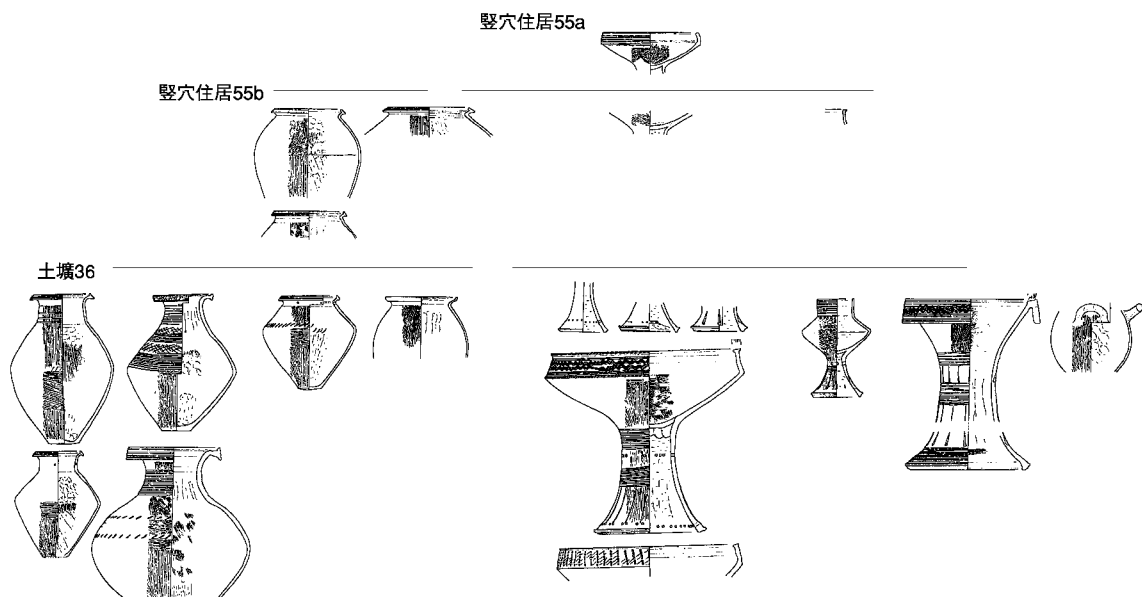
器形は、壺の頸部が、直口して茄子状の胴部となるもの、頸部が緩やかに下方に広がり胴部最大径が下位になるもの、緩やかに屈曲する頸部から玉ねぎ状の胴部を形成させるものがある。何れも、口縁部の外反が強く、端部を上下に拡張させている。甕の口縁部は、素縁で受け口状を呈するものも認められる。高杯は、この段階で大型のものが認められる。口縁端部は、T字状に張り出し、脚端部は、顕著ではないが外側に張り出す。器台は、口縁端部に平坦面を設けて、下方に垂下させる。

文様は、壺、甕、高杯の口縁部外面に凹線文を施文している。壺の頸部凹線には、螺旋と2本単位で施されているものがある。2本単位の施文は、大型高杯にも認められる。

器面の外面調整は、壺、甕、台付壺の胴部最大径下に帯状のヨコヘラミガキを施している。内面調整は、壺のヘラケズリが胴部下半までで、それから頸部に押圧とハケを用いている。甕は、胴部最大径近くまでタテヘラケズリを行っている。

Ⅲ期の中では、住居35a、同b、同c(第5図)である。

器種は、144～147は、146を壺としているが、他の3点は頸部から甕とされるであろうか。住居35aでは、甕口縁端部が鋭角にならずに肥厚させる。脚部と台部は、外方に拡張気味になるものと端部が立ち上がるものとが認められる。住居35bでは、口縁端部を上下に拡張させ、他は甕の口縁端部の内容を呈している。台付甕の口縁部は、上方に拡張させ、台端部は、住居35aと近い内容を呈する。住居35cは、壺の頸部を緩やかに外反させ、端部は上下に拡張させる。甕の口縁端部は、上方への拡張



第4図 才地遺跡重複遺構出土遺物3

志向が強く認められる。高杯は、口縁端面の凹線文施文の影響で肥厚気味となる。台部は、端部が外にはね気味と上下に肥厚させるものが認められる。直口壺の口縁端面は、丸く終わらせるものと凹部を形成させるものがある。底部は、張り出すものと上げ底のものが認められる。

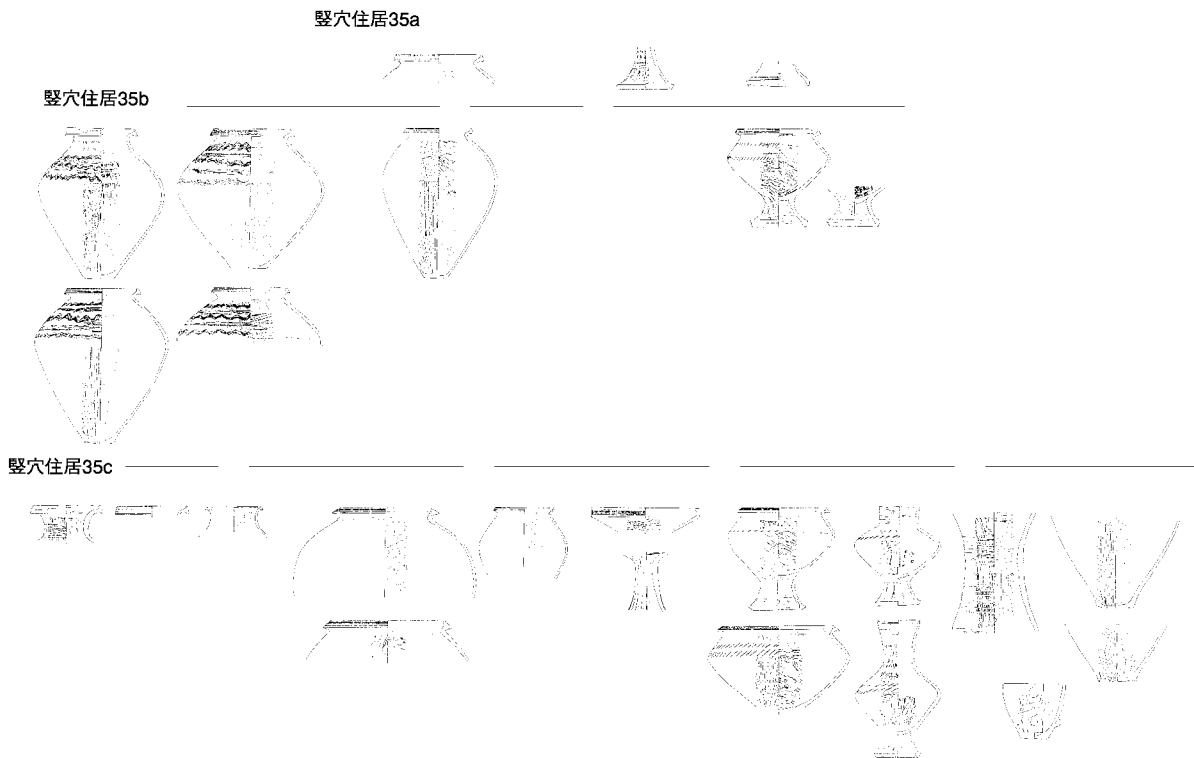
文様は、住居35bでは、肩部から胴部最大径にかけて櫛描文を施文している。住居35cの頸部凹線文は、螺旋により施されている。甕の口縁端部外面に凹線文を施しているが、156では凹線文施文後にナデを行っているのも認められる。住居35bまでは、台端部外面にナデによる凹部を形成させるのが認められたが、住居35cでは、凹線文が2本施文されている。台付鉢と直口壺の胴部には、刺突文が見られる。器台の凹線文間は、丸みを形成させている。

器面の外面調整は、住居35aで胴部に見られている帯状のヘラミガキが、ここではハケに変わっている個体が見られる。この帯状のヘラミガキは、住居35cの台付長頸壺に認められる。また、タテヘラミガキが密に施されていないことで、下地に用いられているハケが認められる。内面は、胴部最大径下まで押圧とハケで、以下タテヘラケズリを施している。住居35cでは、押圧のみでハケを用いていないのも認められる。なお、一部には、口縁部までヘラケズリが行われている。

Ⅱ期からⅣ期に及ぶ重複関係(第6～8図)にある遺構の土器について見ていくことにする。Ⅱ期は住居66aと住居62、Ⅲ期が土壙38、住居65、住居66a埋土中(以降埋土中とする)、Ⅳ期が住居66a集石周辺(以降集石とする。)である。

Ⅱ期の器形は、壺が住居66aと住居62の頸部が緩やかに屈曲し、撫肩から胴部に移行し、胴部最大径は中ほどになる。口縁端部は、下方に垂下させるものが認められる。甕は、頸部屈曲部から短く肥厚気味となり端部を拡張させる。高杯は、杯部が垂直と内湾気味に立ちあがる。大型高杯は、口縁端部が内側に肥厚させ、脚端部も肥厚させている。器台は、筒部屈曲の度合いが小さい。

文様は、壺頸部全体ではなく、肩部より下がる傾向にある。透かしは、貫通しないものが認めら



第5図 才地遺跡重複遺構出土遺物4

れる。器台では、篋描沈線文と凹線文の施文が認められる。

器面の外面調整は、壺胴部の帯状ヨコヘラミガキを境として上側にタテハケ、下方にタテヘラミガキを施している。内面は、壺、甕とも胴部中ほどかやや下方にタテヘラケズリ、それから上は押圧とハケを用いている。

Ⅲ期の器形は、壺の頸部が筒状に立ち上がる傾向を示し、肩の張る様相となり胴部最大径も上位になる。脚端部は、外側への拡張が見られるようになる。埋土中からは、頸部が外方に開くものが認められる。甕は、これ以降、外反部の肥厚がなくなり、端部における上下の拡張が際立ってくる。高杯は、口縁部が内側に肥厚させているも認められる。椀状の杯部を持つ高杯は、杯部内面が湾曲を形成する傾向にある。大型高杯は、口縁端部が内側に肥厚させ、口縁端面が拡張傾向となり、さらにT字状に拡張する内容を認める。器台は、筒部を弓状に大きく屈曲させ、また受け部の外反も強く、口縁端部を大きく垂下させるものも認められる。底部は、外に張り出すものの割合が多くなる。

文様は、頸部凹線文がⅡ期同様な傾向が見られる他に、ナデによる凹凸のみが認められる。甕は、口縁部の凹線文、棒状浮文の他に、刺突文が施されているのも認められる。脚部には、ヘラ描沈線が施され、一部は螺旋により施文されている。器台の透かしは、貫通するものとそうでないものが、同一個体で認められる。

器面の外面調整は、壺の胴部に施される帯状のヨコヘラケズリが、住居65では施されなくなるが、台付鉢や台付壺には残される。胴部のタテヘラミガキは、土壙38段階でヨコヘラミガキとの関係で胴部中ほどかそれより低くなるが、住居65では胴部上半の最大径まで認められる。甕においても、胴部最大径あたりまで認められる。椀状の杯部を有する高杯は、杯部外面に多角形のヘラミガキを施している。内面は、Ⅱ期と近い内容を示している。

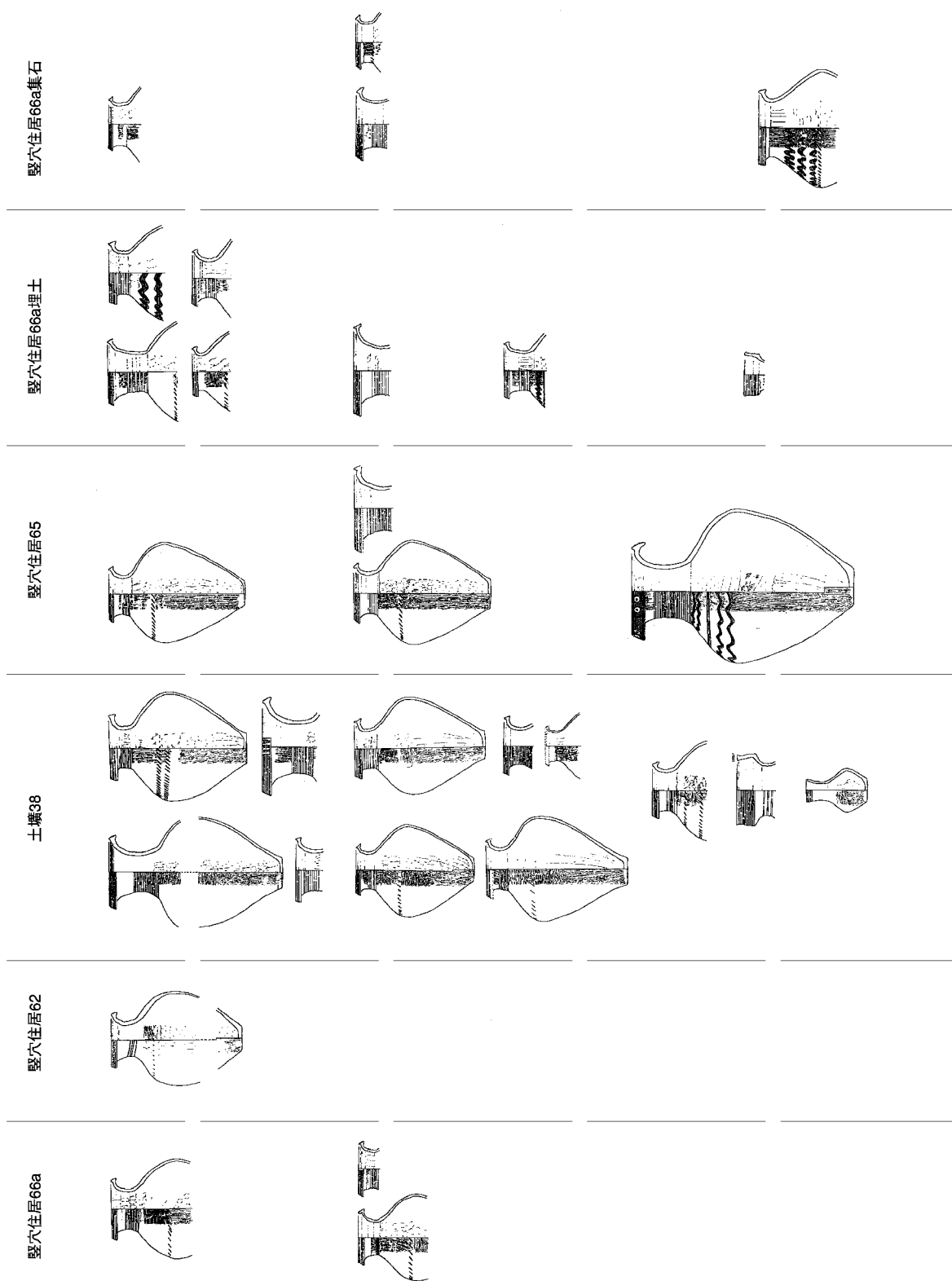
Ⅳ期の器形は、壺の頸部が短く直線的に立ち上がるものが認められる。高杯は、口縁端面を水平方向に拡張させる。椀状の杯部を有する高杯は、湾曲を失い肥厚気味となり、口縁部に向け薄くなっていくのが認められる。脚端部は、外側への拡張が大きく、その割合多くなる。台付鉢の胴部最大径は、上位中ほどから下方へと下がる。台付壺の口縁端部は、外方への拡張が顕著になる。高杯の口縁端面は、凹線文の多条化により拡張させている。

文様は、脚部の透かしで貫通しないものの割合が多くなる。器面の外面調整は、椀状の杯部を有する高杯で杯部外面のヘラミガキが多角形にならない。内面は、頸部の屈曲部にヨコヘラケズリが認められるものがある。

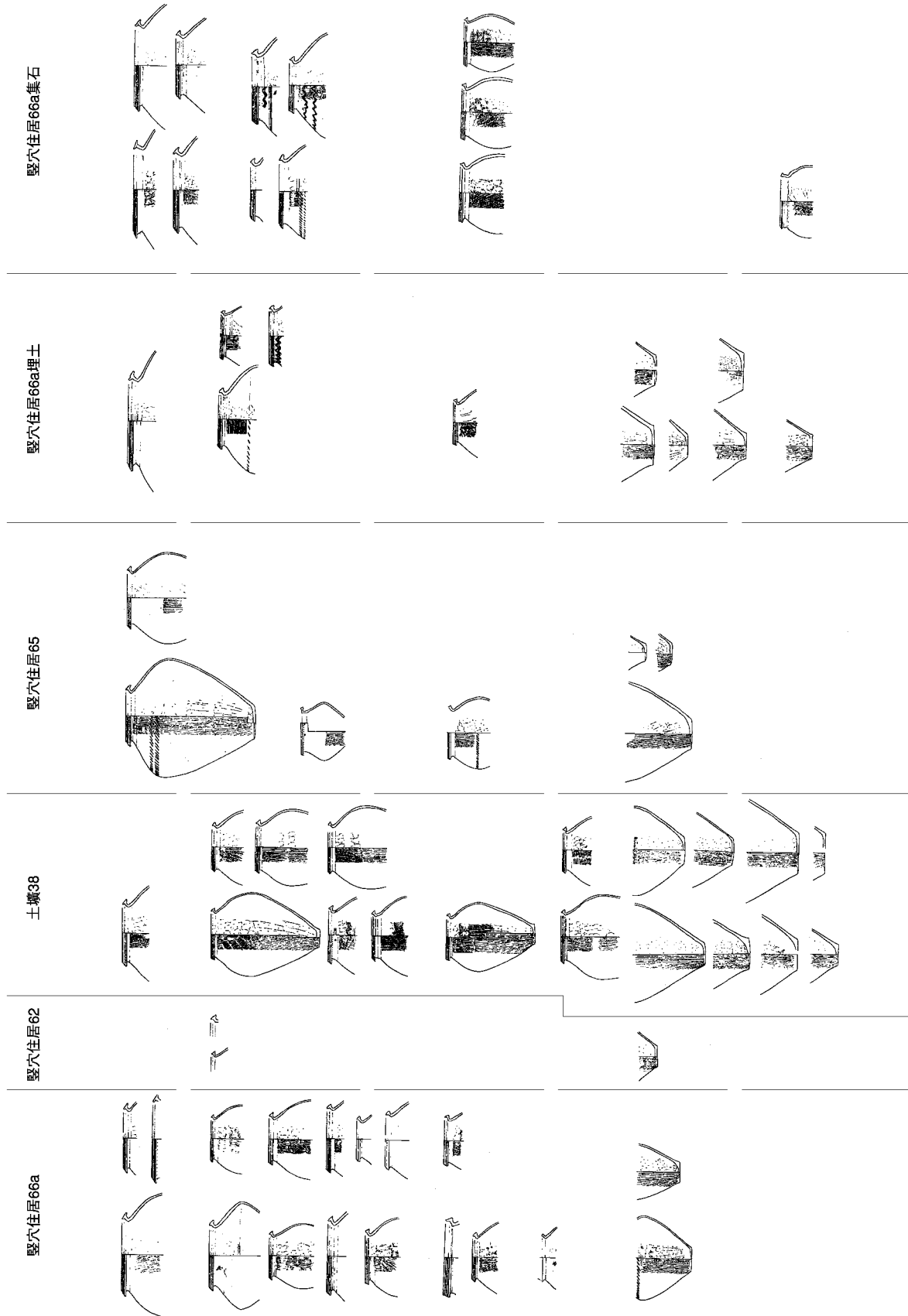
以上、Ⅰ期からⅣ期において重複する遺構から出土した土器の内容を見てきたのである。しかし、遺構以外に埋土及び流れ込んで堆積したと思われる部分に土器溜まりとして検出した土器などを同様に扱っている。このようなことを含めて、今回の調査でⅠ期からⅣ期とした土器が、周辺地域との関係における編年的位置付けについて、若干の検討を加えていくことにする。

Ⅰ期は、壺の口縁部外反が水平方向まで屈曲し、頸部に凸帯文と凹線文を施している。甕は、口縁端部の肥厚が顕著でない。高杯は、杯部から口縁部が内湾させる。また、ヘラケズリの内面調整が壺ではまだ用いられず、甕は胴部下方で認められる。このような内容を有する土器は、雄町遺跡の4類¹後に高橋護氏がⅣc期²としたものである。また、百間川兼基遺跡と同今谷遺跡では、中・Ⅲ新相³として詳細に検討されている。

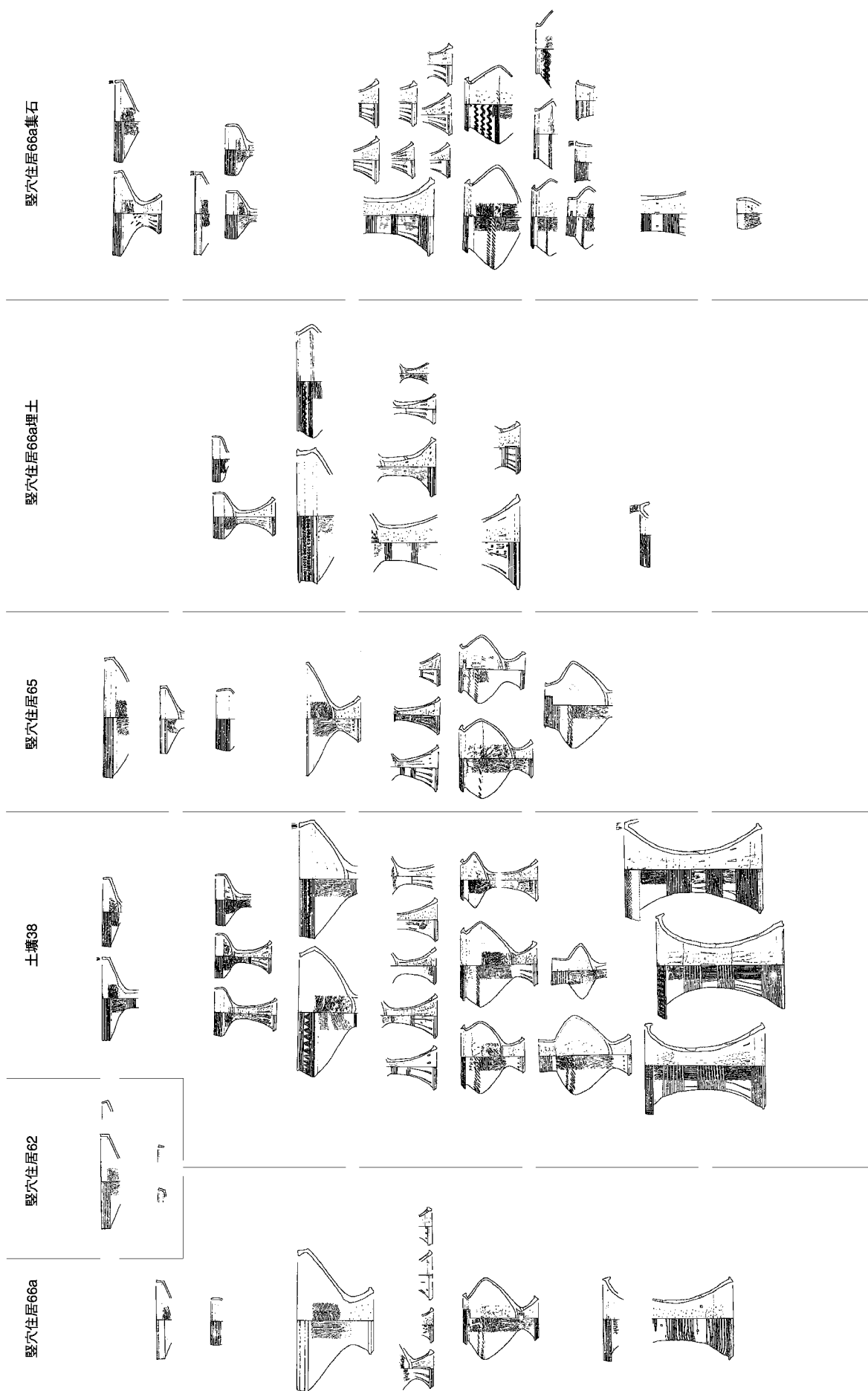
Ⅱ期は、壺の口縁部外反が弱まり、頸部の屈曲も緩やかなものとなる。さらに、口縁部が外に広が



第6図 才地遺跡重複遺構出土遺物5



第7図 才地遺跡重複遺構出土遺物6



第8図 才地遺跡重複遺構出土遺物7

るものが認められる。胴部最大径は、甕と同様に中ほどから上半のものまで認められる。甕の口縁端部の拡張は、肥厚させるのと粘土を折り曲げて拡張させるなどが含まれる。拡張の内容は、上方への傾向が強いのである。高杯は、内径気味のものから口縁部を内側に肥厚させるもの、直立させるものなどがある。椀状の杯部を有するものは、内面器壁が丸みをおびる。脚端部は、肥厚が認められるが、外方への顕著な拡張は認められないのである。文様は、凹線文を基本とするが、篋描沈線文と同一個体で施文されている。壺、甕、台付鉢、台付壺などには、胴部に帯状のヘラミガキを施している。壺及び甕の器面外面でのタテヘラミガキは、胴部最大径近くから下方に施されている。甕の内面ヘラケズリは、胴部最大径よりも下方になる傾向にある。このような内容を有する土器は、先の註3におけるVa期に、備前Ⅳ—1様式⁴に相当すると思われされる。

Ⅲ期は、壺の頸部が直口する器種が伴うようになるとともに、頸部凹線文が頸部下半に偏る。甕の口縁端部の拡張は、上下のそれが大きくなり、壺においては、大きく下方に拡張させるものも認められる。また、口縁端部を玉縁としたものが認められる。器台は、口縁端部を垂下させるものが伴っている。脚部を有する器種、器台も含めての脚端部は、肥厚させ凹線文や凹部を施している。壺の胴部に見られた帯状のヘラミガキは、この期の中で施されなくなるが、他の器種には継続される。外面調整は、壺でタテヘラミガキが胴部最大径よりも下に、甕においては胴部最大径まで達するようになる。底部は、張り出し状の不安定なものの割合が多くなる。このような内容を有する土器は、中期後葉から末葉にかけての注3におけるVb期からⅥa期に、また、註5の備前Ⅳ—2様式に相当すると思われされる。

Ⅳ期は、壺の頸部が直口し、凹線文を施さなくなる器種が出てくる。甕の口縁端部は、頸部を強く押し出すようなナデによる外面が強く屈曲することなく、T字状に拡張をさせるものが出てくる。椀状の杯部を持つ高杯は、内面器壁が肥厚気味となり、端部は細くなる。脚端部は、斜め外方に拡張傾向にある。透かしは、貫通しない割合のほうが多くなる。台付壺の口縁端部は、外方に拡張し端面に文様を施している。甕の内面ヘラケズリが、頸部まで達しているのが伴っている。このような内容を有する土器は、註3におけるⅥb期と思われされる。

県南部における編年における位置付けを見てきたが、ここで、当該遺跡の位置と検出された土器の中には、県北を分布の中心とする器種が認められている。このことから、若干の検討を加えておきたいである。

I期に相当するのは、勝央町高本遺跡で出されて高本Ⅱ式⁵の内容を含んでいる。また、西吉田Ⅰ式⁶とされた津山市西吉田遺跡の住居址⁴⁷から出土している24の鉢は、岡遺跡の住居5の23と近い内容を持っている。さらに、壺口縁端部の外反、頸部の凸帯文と凹線文、そして、甕口縁端部の肥厚が顕著でないなど当該期の内容を示している。

Ⅱ期は、西吉田Ⅱ式⁸よりやや先行すると考えられている津山市金井別所遺跡2号住居址出土遺物が編年の位置からは、この期に相当すると判断される。しかしながら、壺口縁部の外方への屈曲が短くなる器種が加わるなど新しい要素を認めるが、壺胴部の帯状のヨコヘラミガキ、甕の口縁端部の肥厚内容からは、当該期よりも古い内容を含んでいると思われされる。

Ⅲ期は、西吉田Ⅱ式における壺胴部の帯状ヨコヘラミガキが用いられなくなり、甕の外面ヘラミガキが胴部最大径にまで達するなど当該期の内容を含んでいる。また、『西吉田Ⅲ式の最も特徴的なことは、肩部に斜格子目文を有する壺の出現』⁹とされるものが、住居37で埋土から検出されている。そ

して、西吉田遺跡住居址10出土の12と才地遺跡土壙38出土の645の直口壺とが、口縁部文様、胴部の帯状ヨコヘラミガキなどが近い内容を示しているのである。

2 凹線文について

今回の調査においては、土器の主要な文様として凹線文が多用されている。凹線文については、「凹線文と凹線文とのあいだの部分もヨコナデする点が普通の沈線文と異なる。太い凹線文はまるみをもった線で終わっている。』¹⁰との見解がある。文様の中には、このような内容を有する凹線文に当てはまらないものがあり、沈線文と区別ができないものが認められる。

当報告書では、実測図をする過程において、凹線文と沈線文(ヘラ状工具を使用か)とを区別して用いている。このことから、あらためて、その区別について記すしだいである。

今回の報告で凹線文とされるのは、岡遺跡の40の頸部に施文される内容が基本であり、凹線文と凹線文の間でまるみをもった線となるのは、先の見解と異なることはないのである。さらに、今回、凹線文と判断する要件となったのは、凹線文が施される前段階の器面調整がこの施文により消失することと、凹線文と凹線文の間に膨らみを形成することである。そして、この間の部分にも前段階の器面調整が残らないのである。このことから、凹線文が器面調整の後に幅広のヨコナデ(凹部と凸部に条線が均一に認められる。)により施されたものと思える。

したがって、以下の3項目の要件を備えたものを凹線文としたのである。

- ・ 凹線文となる窪みは、まるみをもった線となる。
- ・ 凹線文と凹線文の間は、カマボコ状に膨らみを有する。
- ・ 器面調整の工具痕は、凹線文施文により消える。

この要件を満たしているのは、才地Ⅰ期の段階であり、才地Ⅱ期以降になると変化していくのである。このことが、凹線文と沈線文との判断を曖昧にしていると思えることから、才地Ⅱ期以降における凹線文と理解し判断した要件を示しておくのである。才地Ⅱ期以降における凹線文と沈線文の相違は、壺頸部と器台において具体的に知ることができる。才地遺跡638の頸部凹線文は、螺旋により施文され、凹線文間の膨らみと凹線文内の条線は認められるが、器面調整は消えていないのである。同550は、凹線文間の器面調整が残される部分と消えている部分があり、膨らみと条線も認められる。器台では、凹線文と沈線文の施文内容が明確に分離できたのである。才地遺跡484は、筒部から台部の破片である。筒部(写真図版18)は、凹線文間の膨らみが認められないのである。しかし、台部(写真図版18)では、膨らみと凹線文に条線が認められる。この個体においては、施文部分に異なる施文をするが、同270においては、同一部分で異なる施文をする。この施文は、筒部下端の台部移行する部分に認められる。下方の4本は、間の膨らみがあるが上方の5本は認められないのである。施文は、螺旋と思われるが破片のため不詳であるが、線の途切れた部分から異なる施文を行っていることが認められる。同545では、線の間膨らみと線内の条線は認められていないのである。また、同336においては、間に器面調整のタテハケが残り、膨らみがないが、線内の条線は認められる。

このようなことから、以下の3項目の要件を備えたものを沈線文としたのである。

- ・ 凹線文と凹線文の間は、膨らみがなく、平坦となる。
- ・ 凹線文内には、条線をもたない。
- ・ 器面調整痕が残される。

この要件は、3項目すべてを含むものではなく、その内の一つでも認められても沈線文とする判断材料としたのである。

この沈線文を施文する工具は、岡遺跡26、才地遺跡176、同660などの台部や脚部に認められる細い内容のヘラ状工具とは、異なるのである。具体的には、才地遺跡79、同102、同122にみられる、幅が広い内容のものである。ともかく、これらも先に示した沈線文とする内容を含んでいるものである。

次に、壺、甕(台付鉢で甕と同様の口縁部を有するものも含む)、高杯などの口縁部外面の凹線文について、触れておくことにする。才地Ⅰ期では、岡遺跡20、43、49、51に見られるように、凹線の太さは異なるが、先の凹線文の要件とほぼ同じ内容を示している。しかしながら、才地Ⅱ期以降において変化に富んだ施文内容を示すのである。

壺は、才地遺跡20で、3本の凹線文の内の上2本が単一のハマボコ状の両端が深くなることにより凹部を形成する。下の凹線文は、単独で施文される。これらは、膨らみと条線を認める。同561は、3本の凹線文の内の上2本が明瞭であるが、下の線は条線状となる。また、膨らみと条線を認める。この口縁部では、凹線文施文後にヨコナデを行っているのである。このことは、凹線文の間の膨らみが、凹線文側に被うよう状態を観察できたことによる。甕は、才地遺跡156で、4本の凹線文を施文した後にヨコナデを行うことにより、凹部が浅くなる。同309で、4本の凹線文を2本単位で施文するが、浅くなり消える部分を認める。同747で、上下端に凹部を施すが、その間にも途中で消える凹部が認められる。これらは、何れも膨らみと条線を観察できるものである。この他に、才地遺跡74は、5本の凹線文で上3本が幅広の凹部となる部分がある。同154は、4本の凹線文で、上端が深く明瞭であるが下に行くに従い凹線文の間が狭くなる。同233は、上下端に明瞭な凹線を施すが、その間は浅い条線状となる。同254は、幅の広い凹部に条線状に施している。同562は、5本の凹線上3本が明瞭であるが、以下は浅くなり不鮮明となる。

このように、施文内容が変化に富んでいるが、凹線文の要件とした内容を備えているのである。しかしながら、施文に用いる工具は、その種類及びあてがう強弱により表現される凹線文の内容が多様におよぶと思考されるのである。

なお、これまで記してきた凹線文の内容と様相の異なるものが認められている。この土器は、才地遺跡159の台付長頸壺の口縁部に施文されている凹線文である。実測図では明確に表現できていないが、凹線文と凹線文間との関係である。これは、凹線文の幅が狭いのに対し、その間の幅が広いハマボコ状を呈するのである。この部分の高さは、ほぼそろっていることが観察されている。また、内面は、ヨコナデにより文様施文部分が、凹む形状を示している。このことから、文様施文部分全体を外側に膨らみを持たせて形成した後に、凹線文となる線を施したと思考するのである。

凹線文は、施文する部位による内容の差異及び凹線文表現の多様性が、特に才地Ⅱ期になって認められるようになり、この期において一層顕著になる。また、高杯について触れていないが、ほぼこの内容において、記述してきている。しかしながら、具体的に資料を示すことができていないのである。このことから、このことを含め凹線文についての問題は、別の機会に譲る次第である。

3 接合遺物について

才地遺跡では、土器と石器において出土地点異なる箇所から検出された破片が接合(第9図)したものが確認されている。土器においては、137、187、224、351、413で、石器はS34である。

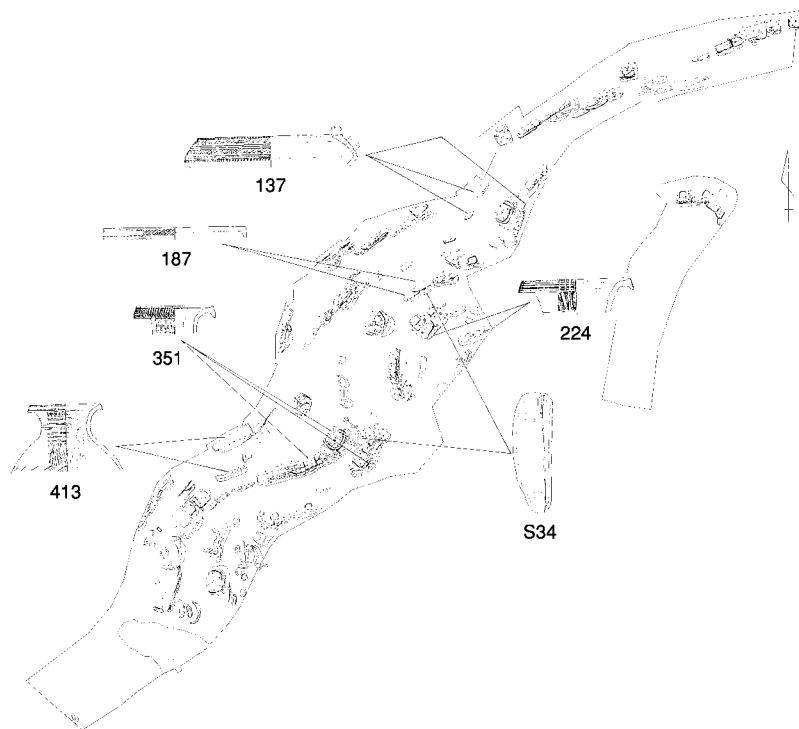
137は、住居29aとbの何れかに伴うか調査時において確認できなかった。第9図に示すように住居25aが最も高い位置にあり、そこから12mほど下方に住居29と同32が認められる。この両者は、ほぼ同じ高さで6mの間をもって横並びという状況にある。これら住居の時期は住居29が才地Ⅰ期で、住居32は才地Ⅲ期である。接合する土器を出土した住居の間には、住居28が存在している。この住居の時期は、才地Ⅱ期である。この内容からは、住居28が廃絶した後に上から崩落してきたものと思われされる。時間的な差を介在させているが、土器は埋土中からの検出であることから住居29の被覆状態は、窪み状であった可能性を窺わせるのである。

187は、住居37と同38の埋土中からの検出である。両者の住居の時期は才地Ⅱ期であり、重複している。この住居は、床面の段差および覆土からの明確な前後関係を把握することが不可能であり、結果的に同一床面上において重複を確認したのである。このようなことから、重複関係での接合として理解するのが妥当であると思われされる。

224は、住居42、43と段状遺構3の埋土からの検出である。住居からの出土は、重複が確認された前段階での覆土中からの検出であり、特定はできていない。これらから出土する土器は、他に検出されず、段状からは才地Ⅲ期が認められる。位置関係は、段状が斜面上方に位置し、10mほどやや斜め下方にある。先にも触れているが、丘陵斜面のきつい部分に相当し、上方からもたらされたと判断される。

351は、竪穴住居56bのピットa、同62の埋土、同66c上の集石からの検出である。住居56bからの破片は、土器として唯一明確な形で遺構から出土されたものである。時期は、才地ⅡとⅢ期である。位置関係は、住居56bが丘陵上方に位置し、1mほど下方に住居62があり、その5mほどの間をもって南西側に集石が存在する。

413は、住居59aと61bの埋土からの検出である。時期は、住居59aが才地Ⅱ期である。位置関係は、



第9図 接合遺物出土関係図

住居61bが丘陵上方にあり、住居59aが8mほど下方に位置する。住居59aは、重複していることからプラン確認時から覆土中においてもその前後関係の把握に努めたが、確認することはできなかった。遺物の取り上げは、プラン検出時で重複の可能性が認められたので、北東側と南西側で分けて取り上げていることから当該住居に伴うと判断している。

S34は、住居37床面と同66aの埋土からの検出である。実測図の右側の細い部分が、住居37からの出土である。時期は、何れも才地Ⅱ期である。相互の住居の位置は、床面の高さで住居37が140cmほど下方になる。しかしながら、この接合関係は検出した遺構が丘陵斜面での上方下方関係に大きく影響されることのない位置にある。これらの住居は、横方向に45mほど離れて存在するのである。したがって、先に述べた丘陵斜面の関係からの移動でないことが理解され、この移動が人為的な行動の結果によってもたらされたと判断しても許されるものと思えるのである。

4 特異な痕跡について

調査及び洗浄の過程では、まったく気がつかなかったのである。実測の段階になり、実測担当者から変な文様があるとの指摘を受けたのである。当初は、ヘラか何かが当たってできたのではないかと思ひ、たいして気にも留めていなかったのである。しかし、同様な痕跡と思われるのが認められる土器が意外と多く、実測が進むとともにそれらが基本的に同じ内容の痕跡であることが明らかになったのである。

痕跡は点々と、写真図版18-2の405では留まって、さらに写真図版18-2の659で連続している状態で残されている。痕跡は、非常に細く線状の内容を示し、先が細くなっていることが観察できるが、線の太いのも認められる。そして、先の痕跡の点々は飛んで、留まるのは同じところで這い回って、連続しているのは移動していることを示していると判断したのである。さらに、何れも、痕跡の非常に細く線状で、先が細くなることの内容は変わらない。さらに、のように付いた後から再度調整をしたことが認められるように、痕跡に粘土が被うような状態が観察できる部分が認められる。しかし、ほとんどの痕跡は、最終的な器面調整が終わってから付いたことは明らかである。このようなことから、意識的に文様として施されたものではないことが判断される。これが文様でなければ、どのようなことでこのような痕跡が付くことになったのであろうか、判断をしかねているのである。外部の鑑定を依頼していないので、直接的な見解は出せないが、先に述べたその内容から類推が可能であれば小形の昆虫によりもたらされたのではないかと考えているのである。

この痕跡は、どのような状況下において付されたのであろうか。このことについては、土器製作の焼成前の最終段階である乾燥段階で、粘土がまだ乾ききらないうちに小形の昆虫により付されたものと想定する。この痕跡が生乾きの状態で気が付けば、先に示したように再度の調整で消すことが可能である。しかし、ほとんど乾燥した状態で気が付けば、再度の調整は不可能である。このようなことから、この段階で仮に気が付いてもそのまま焼きに入ってしまう、痕跡が残される結果となったと思えるのである。

痕跡の器種は、壺、甕、高杯など主要なものにも認められる。付されている部分は、底部の内外面、口縁部外面など、部位や内外面を問わずに認められる。土器の時期は、才地Ⅰ～Ⅲ期に確認されている。

今回の調査では、遺構に伴う一括遺物とみられるものが比較的多く検出されていることから、その

比較検討が可能である。痕跡が最も古く遡って認められたのは、岡遺跡土壙7の13:3で検出されている。同じ時期である住居1では、14:5で検出されている。そして、土壙7の下層に位置する住居5からの土器には、痕跡は認められなかったのである。才地遺跡での当該期は、住居29で11:2、何れも甕に認められる。才地Ⅱ期になると遺構に伴う土器が少なく、具体的に比較する資料に恵まれないのである。出土点数が2、3点であっても痕跡が認められるのが存在し、この時期としては、比較的多く伴っている住居20で1点伴っている。才地Ⅲ期では、遺構に伴う土器の量が多く比較検討が可能である。住居35は、重複する住居であるが関係する住居との中で、最も新しくなる住居35cでは、16:5であるのに対し、他の住居の土器では痕跡が認められない。住居50も重複する住居であり、才地Ⅰ期の時期の住居も認められるが、最も新しくなる住居50aで6:5となり、重複関係で古くなる住居からの土器にその痕跡は認められていないのである。住居65では、23:8となる。土壙においては土壙30が13:6で、土壙38は58:5となる。また、比較的土器が多く伴う遺構においては、痕跡の残されている物が認められていないのが存在する。

才地遺跡で検出される遺構は、等高線に沿うように形成されているが、Ⅱc区の丘陵南東斜面上方側の遺構においては、住居、段状遺構、柱穴などが存在するが、これらに伴う土器からは認められていないのである。重複関係が多く認められるⅢ区の住居62～66においては、土壙を含めての前後関係が明らかな遺構に伴う点数縦穴住居66a-0、同62-1、土壙38-6、住居65-7、埋土-5、集石-8となり、新しくなるにつれて確認できる点数が増える傾向にある。しかしながら、先に触れたように才地Ⅰ期で認められたが、それ以降の時期には検出されていないことも確認している。いずれにしても、才地遺跡においては、Ⅰ区を含めて才地Ⅰ期、とりわけ才地Ⅱ期以降の段階において、このような特異な痕跡を付すことが可能な環境があったと想定されるのである。

さらには、この痕跡が同様の内容のものであると仮定するならば、岡遺跡を含めた集落の地域的な関係さらには、集落内での連続性を具体的に示す可能性を包含しているものと思われるのである。そして、土器製作における時季、住居50aでみられるように一括しての製作、器種ごとの製作なのかを明らかにすることができることが可能となる側面を内包しているものとも思考するのである。このことは、土器同士における関係を胎土や作り方から追求するのは、異なる側面から明らかにされる要素を得られたとも思考されるのである。しかしながら、この痕跡は、あくまでも偶然の結果であり、同種の資料の蓄積は困難であるのは当然である。

同様な痕跡は、室町期の杯の2個体に認められる。この杯は、留まり這い回った内容の第250図の793と移動した内容の同794であり、794は、内面口縁部にも認められる。痕跡は、線の太い部類に入り、793は405に、795は33と同じような内容を示している。また、内面にも認められることから、弥生時代と同じ状況下で生じたと判断しても許されるであろう。

この期における痕跡は、土器製作の同時性を具体的に示す判断材料になると思われる。さらには、先の時期における一側面を補うものとも思考するのである。

5 胎土について

土器実測の過程においては、色調を器面の内面と表面及び断面に変化がある場合についても表することとした。この過程において、外面と表面が同じであり断面が異なる色調を呈する例が多く認められたのである。内容は、内外面の器壁の色調が橙系を呈するが、断面のそれは黒褐色系を示し、あた

かもサンドイッチ状(以降この内容の断面を指す)となるのである。このようなサンドイッチ状の内容を示すのは、吉備南部の中枢となる沖積地に中期後半に分布する白色系のものが、サンドイッチ状を呈するのである。このサンドイッチ状となるのは、赤磐郡山陽町門前池遺¹¹からも検出されている。これらから出土した内容は、才地遺跡と同じであり、器面の色調が白色ならないのである。

このようなことから、サンドイッチ状を呈しながらも、器面の色調が異なるのは焼成時における技術と使用される胎土の二つの内容が考えられたのである。前者については、検討する方法がまったく出てこなかったのである。後者については、すでに白色系と後期の赤褐色系とを分析しているのである。このようなことから、岡山市津寺遺跡・門前池遺跡¹²・才地遺跡について分析を実施したのである。依頼にあたっては、それぞれの内面と外面及び器壁中心部(色調が異なる部分)について分けて分析をと考えていたが、そのようにしなくとも結果は得られることから、分けずに分析をお願いしたのである。

その結果、極めて注目する分析結果を得たのである。鑑定された白石氏が指摘されているように津寺遺跡と他²遺跡の土器では、Feの含有量により明確な差異が生じることが明らかになったのである。すなわち、Feの含有量の少ない胎土のものは、津寺遺跡のように白色系の色調を帯びることになり、それが多く含まれることにより橙色系の色調となる。

白色系の胎土を有する土器は、吉備中枢部の沖積地に分布域を設けている。このことから、すでに指摘¹³されているが、この粘土を占有し使用できうる立場にある集落の存在が想起される。そして、この集落の存在は、吉備中枢域の明確さを現す可能性を内包する側面を有すると思えるものである。サンドイッチ状となる焼成の技術的問題は、先に述べたように取り組み方法を思案中である。しかしながら、サンドイッチ状が出現する時期は、岡遺跡で把握することができた。住居1から出土した3と12である。この住居は、才地Ⅰ期とした時期のものである。白色系が出現するのは、Ⅴ期¹⁴とⅣ期¹⁵で岡遺跡よりも後出である。しかしながら、サンドイッチ状となるものが、すべて白色系の土器を目指していたのかについての判断をしかねるのである。ともかくも、Feの含有量の多い粘土を用いない限り白色系の土器は焼成できないのである¹⁶。

吉備南部の中枢部で集落を形成させている津寺遺跡、岡山市津島遺跡、倉敷市東上遺跡などでは、後期の赤褐色系または橙色系の色調を示す土器を伴う遺構が多く調査されている。このことについては、『中期末から後期初頭の過度的な変化の状況を示すと判断される。』¹⁷と『編年的に時期の異なるものが混在している』¹⁸などがある。才地遺跡では、中期末で集落が途絶えるため、具体的に検討できかねる。しかし、両者については、形式的に異なるものであるが、存在する時間軸を共有していたことが思考される。この時間軸の共有時期が、才地遺跡に存在しなかったと判断されるのである。

註

- 1 高橋護、葛原克人、正岡睦夫 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』 1972年
- 2 高橋護 『月刊考古学ジャーナル』173号、175号 1980年
- 3 平井泰男 「百間川兼基遺跡1」百間川今谷遺跡『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書51』 1982年
- 4 正岡睦夫 「備前地域」『弥生式土器の様式と編年』木耳社 1992年
- 5 山磨康平 「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(8)』 1975年
- 6 津山市教育委員会 「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』 88～89頁 1985年
- 7 註7の23頁
- 8 註7に同じ

第9章 結 語

- 9 註7の82頁
- 10 佐原真 『紫雲出』 真陽社 昭和39年
- 11 池畑耕一他 「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(9) 1975年
- 12 註11の12号住居址上部土器溜り下層出土遺物から抽出した。
- 13 大橋雅也他 「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』 岡山県教育委員会 1995年
- 14 註3による。白色系と明確ではないが『器壁は、薄手でよく焼きしめられたものとなる』がこれに相当すると判断される。
- 15 註5による。『色調は古相では灰褐色から灰白色を呈するものが多く、新相では浅黄橙色か白色に近いもの』がこれに相当すると判断される。
- 16 試料番号12の高杯は、Si(珪素)、Ti(チタン)、Fe(鉄)、Ca(カルシウム)4種類の元素が、才地遺跡と門前池遺跡と相違し、津寺遺跡に含まれる分析結果になっている。したがって、これまでの分析からすれば、器面の色調は白色系を呈することになる。しかしながら、当該試料である掲載番号541の高杯は、内外面の色調がにぶい黄橙(10Y R 6/4)で、断面色調は褐色(10Y R 4/1)となり、白色系を呈さないのである。このようなことから、焼成段階における何らかの焼成方法を用いたとも推測される。何れにしても、従前では、分析した試料で白色系の胎土を用いて才地遺跡のように橙色系の色調を示す例は知られていない。このようなことから、同様な試料の増加を待ちたい。
- 17 註13による。
- 18 平井泰男 「備中南部における弥生時代中期後葉から後期前葉の土器編年」『環瀬戸内海の考古学』—平井勝氏追悼論文集— 上巻 2002年
- ※ 当該遺物については付載1において、その分析結果を得ている。この内容から、この遺物が時期的に古くない可能性をいただいている。さらに、この分析前にも岡山県工業技術センターにおいての分析も同様であった。このようなことから、金属製遺物を報告から外すことを考えたのである。
- しかしながら、報告の通り、後世に人の手が全く入っていない状態が明らかかなことから判断し、報告した次第である。

付載1 才地遺跡出土金属製遺物の調査

独立行政法人 奈良文化財研究所

降幡 順子・肥塚 隆保

はじめに

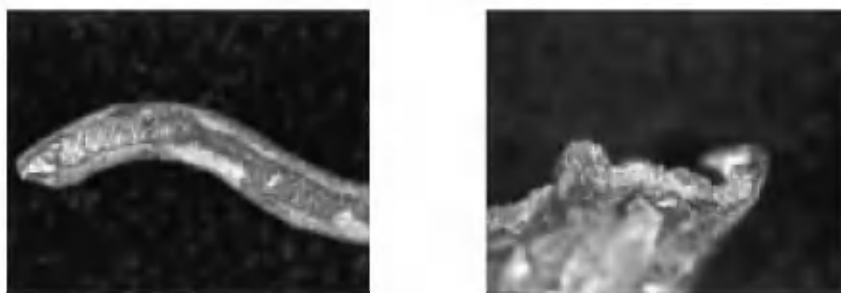
岡山県佐伯町才地遺跡から出土した金属製遺物、特に針金状を呈している試料については、当時のものか不明な点が多かったので、その状態と材質を知るために顕微鏡観察および蛍光X線分析を行った。

試料

金属製遺物は2点あり、形状は針金状の金属片と薄い板状の金属片各1点である。針金状金属片は径0.35mm、長さ3.0mmで、重さ0.03gで、板状金属片は、大きさ0.13×9.93mm、厚さ0.37mm、重さ0.40gである。試料は2点ともほぼ全体がさび層に覆われており、板状金属片の断面に僅かに金属光沢部分が観察できる程度である。表面がさび層で覆われているため、表面からの測定では試料本来の組成情報が得られないと考え、顕微鏡観察の後に、表面のさび層を部分的に除き、健全な金属部分で材質分析を行なうこととした。

顕微鏡観察

表面のさびの状態を観察する為に光学顕微鏡による観察をおこなった。試料はともに、付着した土層の下に緑色を呈する薄膜状サビの存在が観察できる。断面の観察からさび層の厚さは極めて薄く、下層には金属光沢を呈する層が確認できた。金属光沢層は、赤銅色～褐色を呈している。



写真：顕微鏡写真による表面観察

(緑色の薄い錆層の下に赤銅色を呈した金属光沢部分が観察できる)

蛍光X線分析

金属片の主成分元素を確認するためにエネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて定性分析をおこなった。測定は、Technos社製TREX650蛍光X線分析装置にておこない、測定条件は、管電圧45kV、管電流0.3mA、測定時間300秒、コリメータ1.0mm、ターゲットMoであり、大気雰囲気中にて測定を行

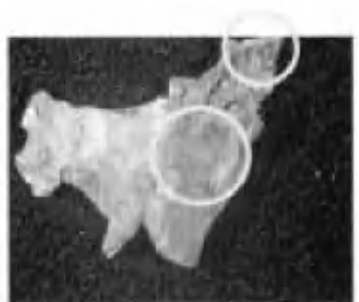
才地銅線・銅板



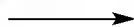
銅線 ×32



銅線 ×80



銅板 ×25



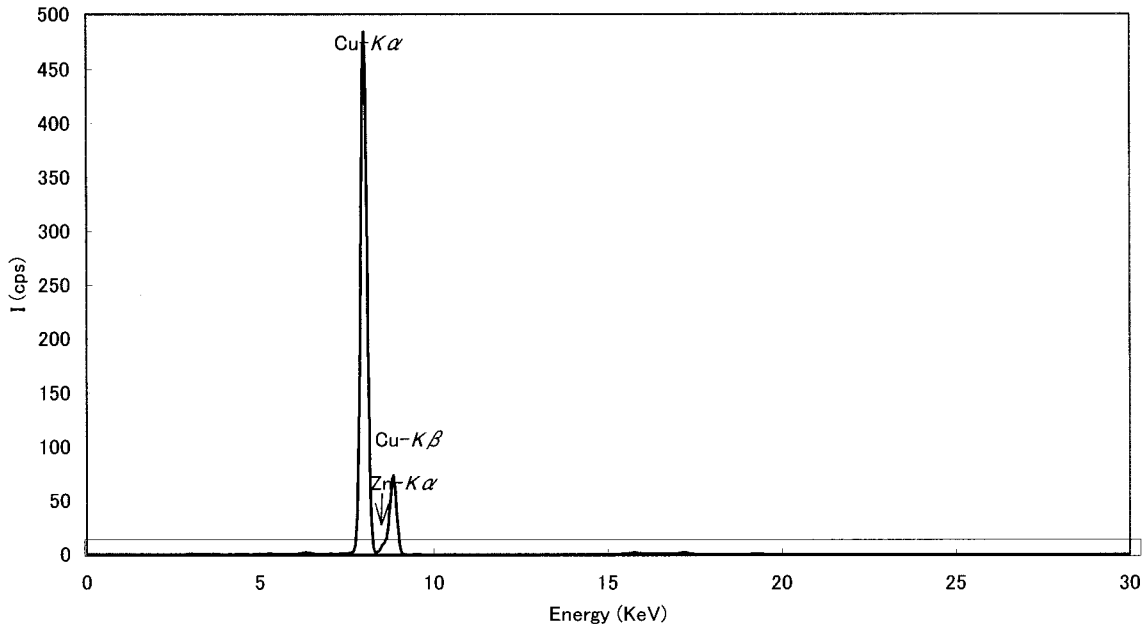
銅板 ×80



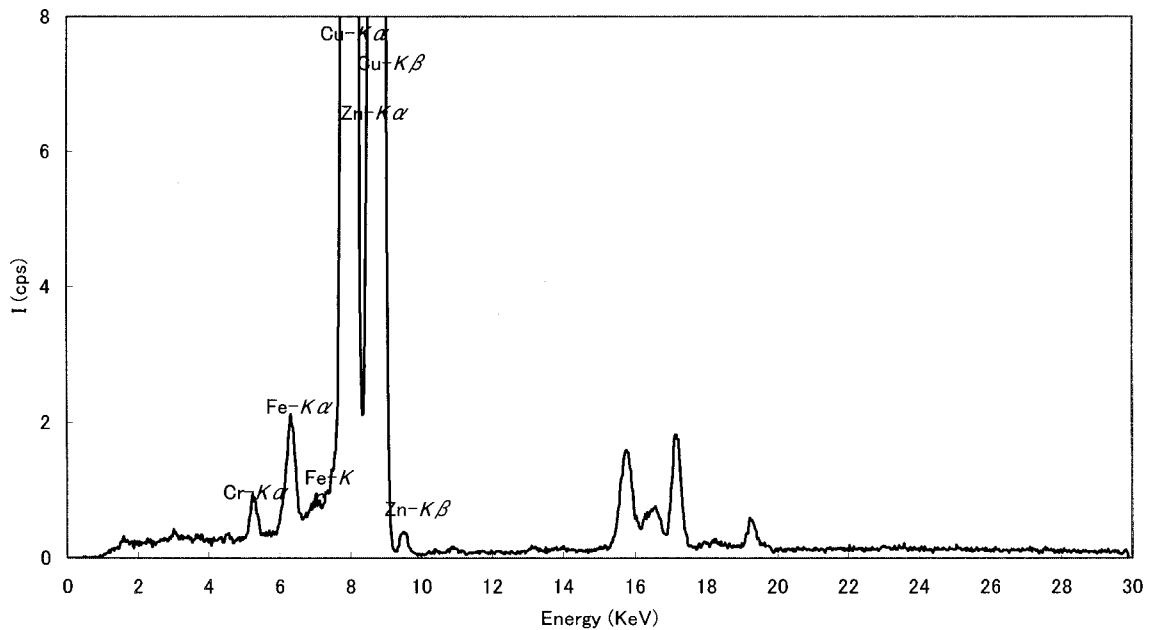
銅板 ×80

なっている。

金属光沢面にて分析を行った結果は図1に示す。図より主成分は銅(Cu)であることがわかり、錫(Sn)・鉛(Pb)は検出限界以下であったことから、これらは青銅製品ではなく、銅製品であることがわかる。古代の銅製品の多くが銀(Ag)を含んでいるが、今回の試料では検出されていない。また微量成分として、亜鉛(Zn)、鉄(Fe)、クロム(Cr)を検出した。銀を含んでおらず、亜鉛やクロムを含有していることなどから、これらの製品が古代の製品であるかどうかは疑問が残り、時代が下る可能性があると考えられる。



↓ (囲み部分の拡大図)



金属光沢部分の蛍光X線分析結果

付載2 才地遺跡出土の胎土分析 —土器表面の色調変化と胎土差について—

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

1. 分析目的

備中南部の弥生時代中期末(仁伍式)の土器には、土器表面を白色系に焼成する特徴がある。それに対して倉敷市上東遺跡の後期初頭の土器は、赤色系に発色する特徴がある。そして、この両者の土器発色の違いは、胎土中の化学成分によると推測されることがわかっている(註1)。しかし、才地遺跡および岡遺跡から出土した弥生時代中期後半から末の土器は、土器表面が白色系ではなく赤色系である。そこで、この色調が焼成技術ではなく、胎土の成分によるものかどうか検討した。比較した土器は、前述した備中南部の津寺遺跡から出土した中期末の土器(白色系)と、山陽団地遺跡出土の中期末の土器である(第1表)。

2. 分析方法、結果

胎土の成分は蛍光X線分析法で測定した。元素は、Si(珪素)、Ti(チタン)、Al(アルミニウム)、Fe(鉄)、Mn(マンガン)、Mg(マグネシウム)、Ca(カルシウム)、Na(ナトリウム)、K(カリウム)、P(リン)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)の13元素である。このうち従来の胎土分析で顕著な差がみられるのは、Ca、K、Rb、Srなどである。また、色調の変化にはFeが、かかわっていることがほぼわかっている。そこで、これらの元素を用いて、XY散布図を作成し違いを検討した。

まず、第1図K-Ca散布図では、白色系の発色をする津寺遺跡の土器と、赤色系の才地、岡、山陽団地の各遺跡とも胎土に顕著な差異はみられなかった。また、第2図Rb-Sr散布図も同じ結果となった。しかし、第3図Ti-Fe散布図では、Fe量が5.5%付近を境界として、才地、岡、山陽団地の各遺跡と津寺遺跡の2つに明瞭に分類できた。ただ、才地遺跡出土の番号12の土器のみが津寺遺跡に分布した。

3. まとめ

弥生中期後半～末の土器表面の色調が地域により違いがみられる。この色調の変化が胎土中の成分が関係しているかどうか調べた。その結果、津寺遺跡の白色系土器は、才地・岡・山陽団地遺跡の土器に比べ、Feの含有量が少ないことが判明した。土器表面の色調変化が何に起因しているかの研究は、いくつかみられる。筆者は津寺遺跡の胎土分析において、中期末(仁伍式)と後期初頭(上東式)の土器を比較したところ、色調の違いに胎土中のFe量が関係していることを指摘したことがある(註2)。また、松本直子らは九州縄文時代晩期土器の胎土分析から、焼成条件よりも、胎土中の鉄分含有量が赤みの強さをかなり規定しているとしている(註3)。丹羽野裕らも、弥生土器・土師器の胎土分析から、白色系のは鉄分が少なく、赤色系のものは逆に多いと述べている(註4)。以上のような、時期の

異なる土器での分析事例により、胎土中のFe含有量の違いが色調に影響していることは、ほぼ間違いないところである。

以上の分析結果より、弥生中期後半から末にかけて、土器表面の色調を白色系にする集団(地域)とそれ以外の集団(地域)があることがわかった。今後、類例を増やして土器の色調が、どのような意味を持つのか検討する必要がある。

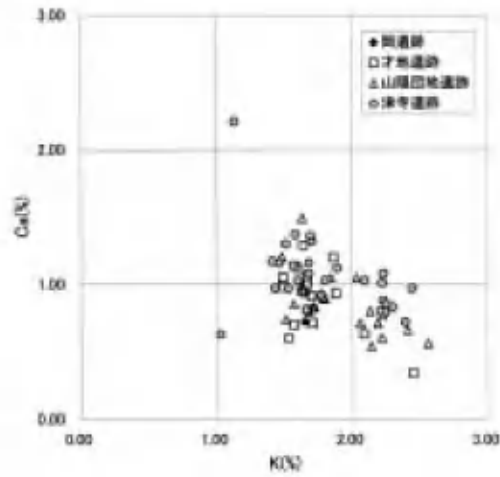
この分析の機会を与えていただいた、下澤公明氏をはじめ、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々には、お世話になった。末筆ではありますが記して感謝致します。

註)

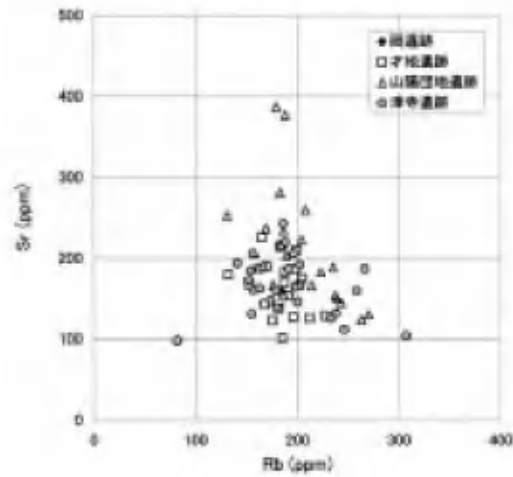
- (1) 白石 純 「津寺遺跡出土土器の胎土分析『津寺遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 1995.
- (2) 註(1)
- (3) 松本直子ほか 「九州縄文時代晩期土器の胎土分析」『日本文化財科学会』第15回大会 発表要旨集 1998
丹羽野 裕ほか「土器の色調と胎土分析—出雲地方における弥生土器・土師器の胎土分析とその解釈—」『古代文化研究』第8号 島根県古代文化センター 2000

第1表 才地遺跡出土土器の胎土分析一覧表(%) ただし、Rb,Sr,Zrはppm

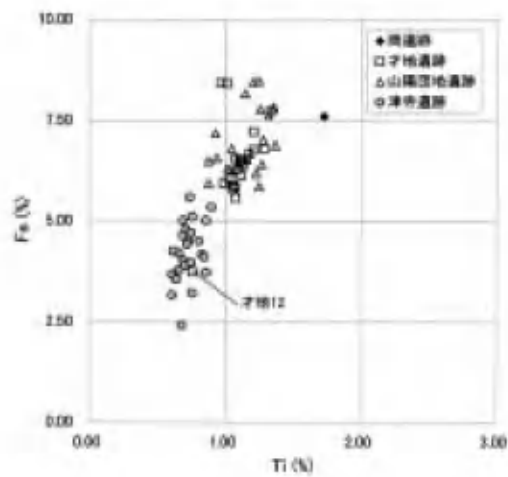
試料番号	遺跡名	掲載遺物番号	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	岡遺跡	26	66.46	1.73	16.78	7.59	0.07	1.77	0.72	2.92	1.65	0.06	185	159	366
2	才地遺跡	368	58.16	1.18	26.44	6.66	0.05	2.01	1.05	2.67	1.49	0.10	153	167	279
3	才地遺跡	614	61.86	1.21	21.85	7.21	0.11	1.88	0.93	2.88	1.88	0.03	165	226	329
4	才地遺跡	317	61.56	1.09	23.48	6.25	0.06	1.81	0.98	2.74	1.49	0.16	163	188	275
5	才地遺跡	322	61.76	1.06	24.20	5.77	0.05	1.86	0.70	2.66	1.57	0.15	182	138	303
6	才地遺跡	321	65.64	1.34	18.18	7.73	0.12	1.72	0.90	2.19	1.78	0.23	185	217	313
7	才地遺跡	544	61.44	1.06	23.81	5.88	0.06	1.90	1.14	2.54	1.57	0.31	183	214	262
8	才地遺跡	498	66.68	0.99	19.14	5.92	0.05	1.68	0.80	2.05	2.24	0.19	205	175	552
9	才地遺跡	475	58.99	1.02	23.92	8.41	0.08	1.99	0.79	2.77	1.68	0.08	191	154	330
10	才地遺跡	567	60.53	1.12	23.98	6.13	0.05	1.93	0.95	3.28	1.63	0.20	175	123	264
11	才地遺跡	568	60.93	1.03	24.58	6.03	0.08	1.91	0.81	2.28	1.67	0.40	168	143	383
12	才地遺跡	361	67.74	0.76	20.35	3.73	0.04	1.74	0.34	2.10	2.45	0.54	185	101	300
13	才地遺跡	653	61.85	1.08	23.05	5.56	0.05	1.99	1.06	2.92	1.67	0.40	199	210	280
14	才地遺跡	674	60.41	0.97	22.41	8.42	0.06	1.85	0.63	2.79	2.09	0.20	212	126	243
15	才地遺跡	681	62.05	1.08	22.95	5.83	0.06	1.93	1.12	2.73	1.60	0.32	170	190	221
16	才地遺跡	350	60.97	1.21	23.48	6.76	0.06	1.91	1.00	2.44	1.67	0.30	202	167	281
17	才地遺跡	398	61.87	1.14	23.66	6.41	0.05	1.74	0.94	2.22	1.65	0.07	187	170	305
18	才地遺跡	254	61.97	1.16	23.03	6.52	0.06	1.83	1.20	1.46	1.86	0.70	187	183	367
19	才地遺跡	147	61.19	1.08	23.65	6.53	0.05	1.88	1.29	2.40	1.64	0.07	198	186	293
20	才地遺跡	311	60.44	1.12	24.80	6.49	0.05	1.91	0.71	2.50	1.71	0.03	227	129	340
21	才地遺跡	243	59.45	1.11	25.72	6.48	0.06	2.02	0.60	2.71	1.53	0.06	196	127	313
22	才地遺跡	252	58.30	1.29	25.58	6.79	0.04	1.92	0.91	3.23	1.70	0.01	132	180	339
23	山陽団地遺跡	12号住居址下層	65.32	1.25	20.52	5.85	0.05	1.67	0.83	1.84	1.71	0.69	204	223	302
24	山陽団地遺跡	"	64.04	0.88	21.17	6.48	0.04	1.87	0.60	1.92	2.22	0.48	263	124	227
25	山陽団地遺跡	"	62.63	0.94	21.94	6.56	0.06	1.98	0.54	2.55	2.14	0.53	270	130	197
26	山陽団地遺跡	"	65.61	1.27	18.46	6.40	0.06	1.67	0.85	2.43	1.57	1.44	169	237	310
27	山陽団地遺跡	"	63.34	1.02	20.83	6.29	0.07	1.72	0.77	2.08	2.22	1.42	214	166	308
28	山陽団地遺跡	"	62.73	0.93	20.61	7.17	0.06	1.85	0.71	2.47	2.19	0.96	239	150	260
29	山陽団地遺跡	"	65.82	1.37	17.72	6.87	0.07	1.96	0.89	2.70	1.80	0.63	176	167	351
30	山陽団地遺跡	"	66.12	1.28	17.92	7.00	0.08	1.71	1.05	1.86	1.84	0.93	208	260	306
31	山陽団地遺跡	"	62.55	1.32	21.54	7.62	0.07	1.72	0.93	1.47	1.77	0.82	186	234	347
32	山陽団地遺跡	"	64.97	1.26	18.02	7.76	0.08	1.62	1.05	1.83	2.03	1.15	183	281	293
33	山陽団地遺跡	"	62.38	1.05	21.28	6.79	0.05	1.80	0.56	2.23	2.56	1.11	243	145	253
34	山陽団地遺跡	"	64.40	1.23	19.96	6.17	0.44	1.70	0.83	2.02	1.72	1.34	189	203	275
35	山陽団地遺跡	"	63.32	1.10	19.82	6.41	0.07	1.77	0.80	2.78	2.13	1.60	235	189	304
36	山陽団地遺跡	"	62.68	1.36	20.52	7.81	0.07	1.79	0.98	2.25	1.63	0.69	131	253	315
37	山陽団地遺跡	"	64.28	1.21	18.14	8.44	0.08	1.95	0.74	2.57	1.51	0.91	158	206	364
38	山陽団地遺跡	"	60.60	1.15	21.69	8.16	0.07	1.79	0.71	2.14	2.06	1.46	223	183	311
39	山陽団地遺跡	"	62.76	1.05	21.91	6.24	0.03	1.83	0.66	1.87	2.41	1.05	237	154	227
40	山陽団地遺跡	"	62.86	0.88	19.32	5.93	0.19	1.72	1.49	2.21	1.63	3.15	179	387	284
41	山陽団地遺跡	"	61.62	1.25	18.53	8.46	0.10	1.70	1.20	1.92	1.48	3.36	188	377	304



第1図 才地遺跡出土土器の色調による胎土成分の差異について (K-Ca散布図)



第2図 才地遺跡出土土器の色調による胎土成分の差異について (Rb-Sr散布図)



第3図 才地遺跡出土土器の色調による胎土成分の差異について (Ti-Fe散布図)

付載3 ハヶ奥製鉄遺跡出土製錬滓の金属学的調査

(株)九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己

概要

7世紀代が比定されるハヶ奥製鉄遺跡出土の製錬滓5点の金属学的調査を行って、次の点が明らかになった。3基の製鉄炉の操業が想定されて、それぞれに製鉄原料の違いが認められた。すなわち、No.1炉は高チタン塩基性砂鉄原料、No.3炉は焙焼磁鉄鉱(800~900℃空焼き、亀裂入り鉱石)原料、No.7炉は中チタン塩基性砂鉄を始発原料とする。

1. いきさつ

ハヶ奥製鉄遺跡は岡山県和気郡佐伯町小坂に所在する7世紀代の生産遺跡である。3基の製鉄炉の可能性をもつ遺構と横口付炭窯の検出があった。出土鉄滓を通して当時の製鉄事情の実体把握を目的とした金属学的調査を行う運びとなった。なお、当遺跡は吉井川下流域に位置し、過去にはこの方面からの製鉄遺跡の発見は少なかった地域である。近年になり熊山町の猿喰池遺跡や土井遺跡(出土鉄滓のみで製鉄炉未発見)それから前内池古墳からの供献砂鉄製錬滓など知られだして、その様相が次第に明らかになりつつある。

2. 調査方法

(1) 供試材

Table. 1に5点の製錬滓の履歴と調査項目を示す。

(2) 調査項目

①肉眼観察、②マクロ組織、③ピッカース断面硬度、化学組成分析

3. 調査結果

(1) HTG-1, 含鉄炉内滓(砂鉄系)

表層に顆粒状砂鉄を付着した不定形の炉内滓である。29gの小型破片で、扁平状を呈し、裏面に細かい木炭痕を刻む。色調は灰色光沢質の滓部と、茶褐色鉄銹発生部が混在する。焼結砂鉄をつけた含鉄炉内滓ともいえる。

Photo.1の①~⑧に顕微鏡写真を示す。今回の5点の供試材は土壌腐食を受けて組織の色調に異常感をもつ。①は滓の表層に付着した砂鉄粒子の1つである。格子組織のチタン鉄鉱(Imenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)で粒子面は虫喰い状の侵食を受けている。②は左側に半還元砂鉄粒子を付着した滓で、その内側の滓内部を併せて示す。右側白色粒子は未凝集金属鉄のフェライト(Ferrite: 純鉄)、灰色多角形結晶はウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、針状結晶はイルミナイト(Imenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)で、いずれも砂鉄製錬滓の晶癖を表わす。③は中央に砂鉄粒子、その周囲に片状結晶のイルミナイトが析出する。④は淡灰色白色に縁どられた不定形茶褐色結晶はシュードブルーカイト(Pseudobrookite: $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$)である。以上の各種鉱物相の析出する滓は、高チタン塩基性砂鉄を製鉄原料として、高温操業で製錬した場合の特徴を表わしている。^(注1)

次に⑤⑥⑧に硬度測定 of 圧痕を示す。⑤はウルボスピネルで642Hv、⑥はシュートブルーカイトで725Hv、⑧は金属鉄のフェライトで95Hvであった。それぞれは組織に対応した値を示している。^(注2)

Table.2に化学組成を示す。全鉄分(Total Fe)39.84%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は2.19%、酸化第1鉄(FeO)25.02%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)26.03%の割合であった。酸化第2鉄(Fe₂O₃)の多いのは表層付着の顆粒状砂鉄の影響であろう。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は16.89%さほど多くはないが、塩基性成分(CaO+MgO)を2.41%を含む。次に砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は24.02%と高めで、バナジウム(V)も0.36%の含有である。酸化マンガン(MnO)1.02%は高め傾向にあるが他の随伴微量元素は低めで、酸化クロム(Cr₂O₃)0.03%、銅(Cu)<0.01%であった。有害元素の硫黄(S)0.08%、五酸化燐(P₂O₅)0.34%も問題となる数値でなかった。

(1) HTG-2 炉内滓 (砂鉄系)

28g強の小型不定形炉内滓のほぼ完形品である。軽質な滓で残留鉄分が少なく、鉄収率は進んでいる。表裏に細かい木炭痕を残し、気孔も僅かに散在する。色調は大部分が暗灰色で、これに赤褐色金属鉄の錆化痕が観察される。

Photo.2の①～⑨に顕微鏡組織を示す。①～③は表層に付着したチタン鉄鉱砂鉄粒子である。こちらにも格子組織の基地に黒く風化腐食の侵食痕を残す。④～⑤は白色片状結晶イルミナイト、黒色長柱状はファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)の晶出した個所で風化侵食された跡である。⑥⑦にやはり黒色粒状連なりの未凝集金属鉄のフェライトが錆化消滅した跡を示す。これに少量のウルボスピネルが共存する。HTG-1炉内滓と同様に該品も土壤腐食の激しさが認められた。⑧はウルボスピネルとその周囲の不定形黒色部にファイヤライト推定の消滅痕を残す。最後の⑨はウルボスピネル結晶の硬度測定 of 圧痕で656Hvが測定された。ウルボスピネルに同定される。各鉱物相は砂鉄製錬滓の特徴を呈している。

Table.2に化学組成を示す。全鉄分(Total Fe)は30.52%に対して、金属鉄(Metallic Fe)<0.01%、酸化第1鉄(FeO)9.02%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)33.60%の割合であった。ガラス質成分は36.36%と高めで、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)を3.11%含む。二酸化チタン(TiO₂)は11.25%、バナジウム(V)も0.15%留まりである。酸化マンガン(MnO)0.82%など低下するが、前述HTG-1炉内滓に準じた砂鉄製錬滓の成分傾向が捉えられた。

(2) HTG-3 炉内滓 (鉱石系)

表面に流動状滑らか肌をもち、50g強の不定形炉内滓である。内面の一部に光沢質の強磁性部分を内蔵し、鉱石のマグネタイト化した個所を有した完形鉄滓である。

Photo.3の①～⑤に顕微鏡組織を示す。該品も各鉱物組成が風化侵食されている。①は未凝集金属鉄が錆化侵食を受けた組織、②は灰色基地が磁鉄鉱脈石で網目状亀裂で区切られて、その内部の島状灰白色部が磁鉄鉱(Magnetite:Fe₃O₄)部分である。弱く針状の離溶赤鉄鉱(Hematite: Fe₂O₃)が析出する。網目状亀裂は緻密質磁鉄鉱の分割目的で800～900℃空焼き焙焼を施した痕跡が想定される。③の白色雪花状結晶は、マグネタイトの局部的晶出である。一方、当鉄滓の主体と成る平均的な鉱物相は、⑤に示したファイヤライトで、鉱石製錬滓の晶癖である。この結晶の硬度値は695Hvでファイヤライトに同定される。④は白色粒状結晶の硬度測定 of 圧痕である。値は374Hvと低値である。白色粒状結晶はウスタイトが想定されて、硬度値は450～500Hvの文献硬度値をもつ鉱物相である。ウスタイト粒間のファイヤライトの風化剥落現象が起っているの、ウスタイトも内部は既に侵されている。

Table.2に化学組成を示す。全鉄分(Total Fe)が35.91%、ガラス質成分49.86%に対して、塩基性成分(CaO+MgO)8.82%と高めで、砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は逆に低めの0.68%、バナジウム(V)0.01%、更に酸化マンガン(MnO)も0.37%と少ない。鉾石製錬滓の成分系である。No.3炉は磁鉄鉱を原料とした製鉄がなされている。

(4) HTG-4 炉内滓(砂鉄系)

平面が不整形の炉底塊の端部破片である。表面は荒れ肌で、最大長さ2cm程度の木炭痕を残す。色調は暗灰色基地で、表面に褐色酸化土砂が覆う。破面は中小の気孔が多発するが重量感のある滓である。

Photo.3の⑥～⑧に顕微鏡組織を示す。⑥は平均的鉾物組成で、淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルと白色剥片状結晶のイルミナイト、これに淡灰色盤状結晶のファイヤライトで構成される。なお、ウルボスピネルは613Hvの硬度値が得られた。一方、⑦⑧は半還元砂鉄粒子のチタン鉄鉱で、その周囲からイルミナイト結晶の晶出している様相が捉えられた。以上の結果は砂鉄製錬滓の晶癖の提示となる。

Table.2に化学組成を示す。鉄分少なくガラス質成分の多い砂鉄系製錬滓の成分である。すなわち、全鉄分(Total Fe)24.12%、ガラス質成分44.15%に対して、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)4.50%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は18.41%、バナジウム(V)0.24%は高めである。また、酸化マンガン(MnO)0.95%も多くて、前述した砂鉄製錬滓のHTG-1、2の成分系に近似する。

(5) HTG-5 炉内滓(砂鉄系)

平面は不定形で30g強の炉内滓の破片である。表面は中窪みで流動状の肌をもつ。裏面は反応痕と弱く木炭痕を刻み、中央に1箇所垂下状の突起を発生。破面は茶褐色で小気孔を露出させる。

Photo.4の①～⑨に顕微鏡組織を示す。①～③が平均的鉾物組成である。淡茶褐色多角形結晶の大・小のウルボスピネルと淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトが晶出する。また④～⑨は半還元砂鉄粒子を示す。砂鉄粒子の外縁部よりウルボスピネルが晶出してゆく様相が観察できる。砂鉄を製鉄原料とした製錬滓の晶癖である。

Table.2に化学組成を示す。鉄分少なくガラス分の多い成分系である。全鉄分(Total Fe)は27.58%、ガラス質成分は52.02%で、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)を異常に高く11.0%含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)7.90%、バナジウム(V)0.10%、は少なく、前述してきたHTG-1,2,4の半分前後の値である。酸化マンガン(MnO)の0.85%をはじめ酸化クロム(Cr₂O₃)0.04%、硫黄(S)0.04%、五酸化リン(P₂O₅)0.54%、銅(Cu)<0.01%などは大差ない数値であった。該品はNo.7炉の排出滓であり、No.1炉のHTG-1,2,4と原料砂鉄の違いや、操業時期などに相違があるのだろうか。

1. まとめ

ハヶ奥遺跡から出土した5点の製錬滓の調査結果のまとめをTable.3に示す。No.1炉の3方向に排出された滓3点の鉾物組成はほぼ近似してウルボスピネルとイルミナイトが主体で、化学組成も二酸化チタン(TiO₂)が11.25～24.02%と高チタン塩基性砂鉄が想定できる。これに対してNo.3炉は鉾石製錬滓で、鉾物組成にファイヤライトを晶出し、二酸化チタン(TiO₂)は0.68%と減少傾向を呈す。製鉄原料は緻密質磁鉄鉱で、これには還元を容易にするための800～900℃での空焼きを施して亀裂を起し、かつ組織を粗大にしてやる。鉄鉾石は砂鉄と異なり、適当な大きさに分割して製鉄炉に入れないと、大塊であれば還元が遅れ、粉鉾になると通風を阻害し、炉況が不良となる。HTG-3炉内滓には未溶解

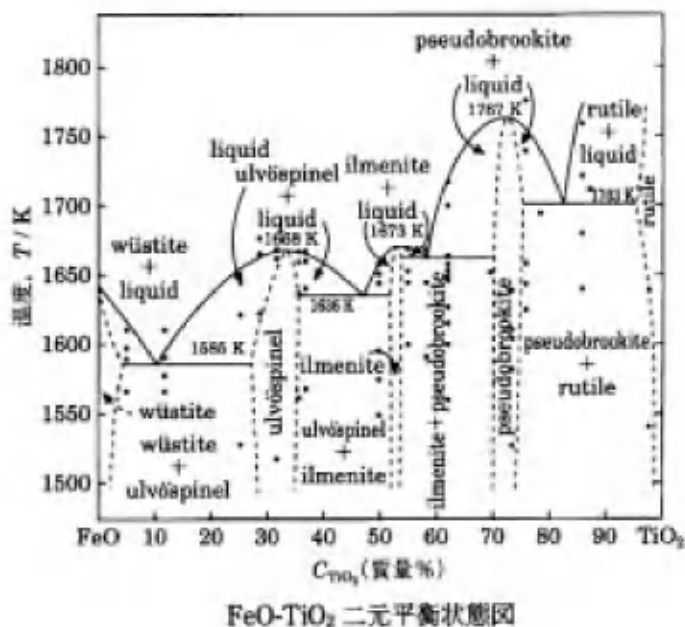
脈石が残存し、これに焙焼亀裂の痕跡が認められた。

吉備地域の鉱石製錬で焙焼を言及しているのに総社市所在の砂子遺跡(B地区)がある。ここではSX03遺構に焙焼炉の可能性が提示されていた。^(註3)一方、熊山町所在で猿喰池製鉄遺跡出土の鉄鉱石には、焙焼亀裂が走る磁鉄鉱が多く出土している。^(註4)これは7世紀前半の操業である。次にNo.7炉出土の炉内滓はウルボスピネル晶出で、二酸化チタン(TiO₂)7.90%とNo.1炉出土滓の1/2以下の低値であって、明らかに砂鉄産地が異なる原料であった。

以上の3基の炉の原料差は何に由来するのだろうか。同一製鉄集団の還元用木炭の育成を追った時間的なズレが原料事情の変化に遭遇した結果と解釈すべきであろうか。今後の検討課題としておきたい。

注

- (1) J,B,Mac chesney and A,Murau : American Mineralogist,46(1961),572 イルミナイト(Ilmenite)、シュードブルーカイト(Pseudobrookite)、ルチル(Rutile)の晶出はFeO-TiO₂二元平衡状態図から高温化操業が推定される。



- (2) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968.

ウスタイトは450~500Hv、マグネタイトは500~600Hv、ファイヤライトは600~700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン(Ti)を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ(Al)が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

- (3) 武田恭彰「山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(6)」『総社市埋蔵文化財調査年報11』総社市教育委員会 2001

- (4) 大澤正己「猿喰池出土製鉄関連の金属学的調査」『猿喰池製鉄遺跡一町道千株奥吉原線改良工事に伴う発掘調査一』熊山町教育委員会 2003

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目					備考	
					大きさ(mm)	重量(g)			顕微鏡組織	ピッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析		耐火度
HTG-1	ハヶ奥製鉄	No.1炉北東直近	鉄滓	7世紀代	51×26×18	29.0	錆化(△)		○			○			
HTG-2	ハヶ奥製鉄	No.1炉南西部	炉内滓	7世紀代	46×36×25	28.2	なし		○			○			
HTG-3	ハヶ奥製鉄	No.3西排滓溝	炉内滓	7世紀代	51×33×28	50.5	なし		○			○			
HTG-4	ハヶ奥製鉄	No.1炉南東直近	炉内滓	7世紀代	51×96×36	162.1	なし		○			○			
HTG-5	ハヶ奥製鉄	No.7	炉内滓	7世紀代	35×43×22	30.8	なし		○			○			

Table.2 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分 Total Fe	造滓成分 TiO ₂	注		
																									Σ*	
HTG-1	ハヶ奥製鉄	No.1炉北東直近	鉄滓	7世紀代	39.84	2.19	25.02	26.03	10.12	3.75	1.73	0.68	0.49	0.12	1.02	24.02	0.03	0.08	0.34	0.26	0.36	<0.01	16.89	0.424	0.603	
HTG-2	ハヶ奥製鉄	No.1炉南西部	炉内滓	7世紀代	30.52	<0.01	9.02	33.06	24.83	7.19	2.46	0.65	0.99	0.24	0.82	11.25	0.03	0.04	0.28	0.27	0.15	<0.01	36.36	1.191	0.369	
HTG-3	ハヶ奥製鉄	No.3西排滓溝	炉内滓	7世紀代	35.91	<0.01	32.37	15.35	32.96	6.34	4.76	4.06	1.38	0.36	0.37	0.68	0.01	0.06	0.34	0.11	0.01	0.01	49.86	1.388	0.019	
HTG-4	ハヶ奥製鉄	No.1炉南東直近	炉内滓	7世紀代	24.12	0.06	24.66	6.99	29.03	8.63	3.62	0.88	1.62	0.37	0.95	18.41	0.02	0.02	0.35	0.61	0.24	<0.01	44.15	1.830	0.763	
HTG-5	ハヶ奥製鉄	No.7	炉内滓	7世紀代	27.58	0.04	27.64	8.66	31.39	7.36	8.82	2.18	1.88	0.39	0.85	7.90	0.04	0.04	0.54	0.11	0.10	<0.01	52.02	1.886	0.286	

Table.3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	調査項目					所見			
					Total Fe	Fe ₂ O ₃	造滓成分 TiO ₂	V	MnO		ガラス 質成分 Cu		
HTG-1	ハヶ奥製鉄	No.1炉北東直近	鉄滓	7世紀代	39.84	26.03	24.02	0.36	1.02	16.89	<0.01	高チタン含有塩基性砂鉄原料	製錬滓
HTG-2	ハヶ奥製鉄	No.1炉南西部	炉内滓	7世紀代	30.52	33.60	11.25	0.15	0.82	36.36	<0.01	高チタン含有塩基性砂鉄原料	製錬滓
HTG-3	ハヶ奥製鉄	No.3西排滓溝	炉内滓	7世紀代	35.91	15.35	0.68	0.01	0.37	49.86	0.01	焙焼磁鉄鉱	製錬滓
HTG-4	ハヶ奥製鉄	No.1炉南東直近	炉内滓	7世紀代	24.12	6.99	18.41	0.24	0.95	44.15	<0.01	高チタン含有塩基性砂鉄原料	製錬滓
HTG-5	ハヶ奥製鉄	No.7	炉内滓	7世紀代	27.58	8.66	7.90	0.10	0.85	52.02	<0.01	中チタン含有塩基性砂鉄原料	製錬滓

U:Ulvospinel(2FeO · TiO₂), I:Ilmenite(FeO · TiO₂), Ps:Pseudobrookite(Fe₂O₃ · TiO₂), F:Fayalite(2FeO · SiO₂), M:Magnetite(Fe₃O₄), W:Wustite(FeO) Fe:Ferrite(純鉄 α-鉄)

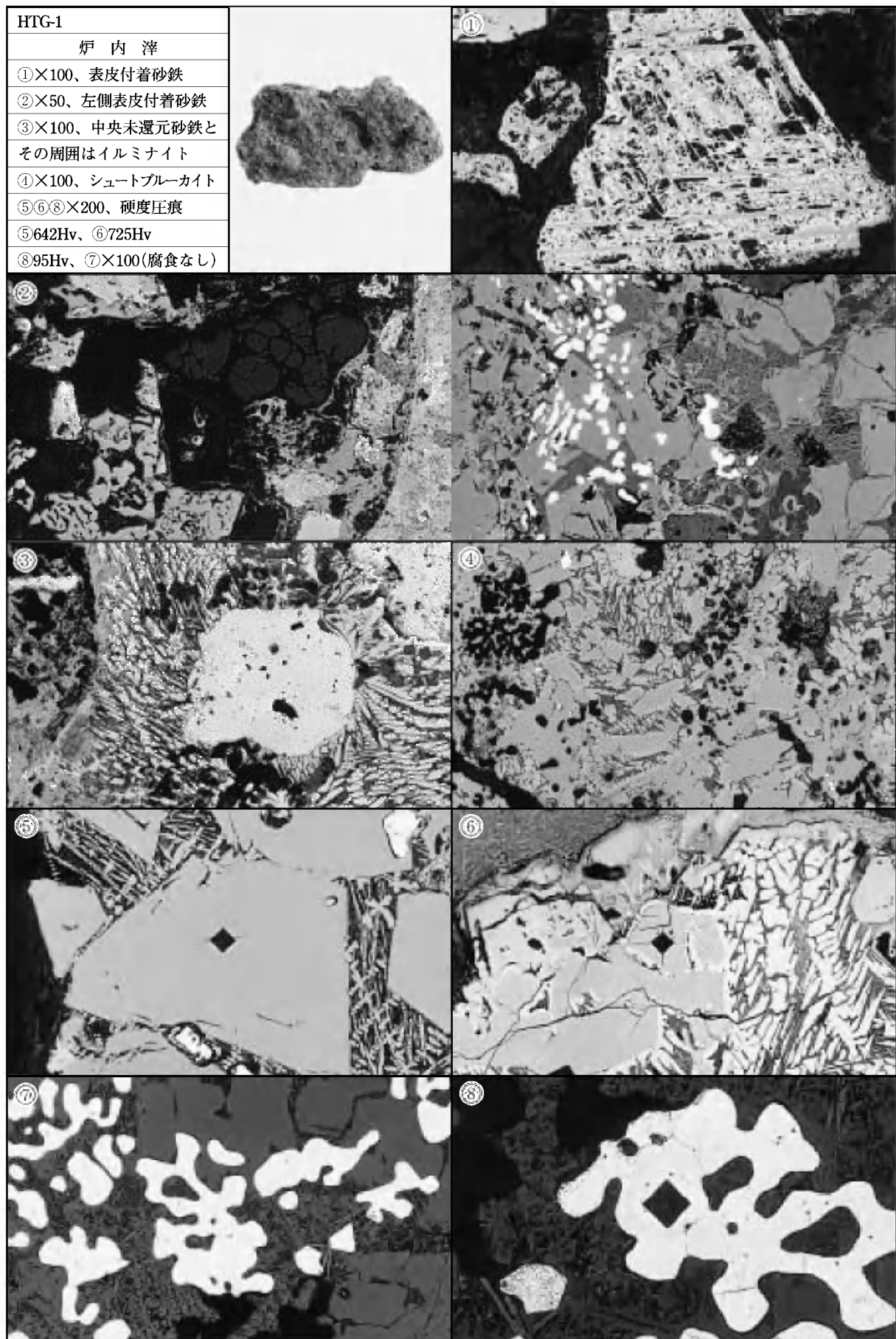


Photo. 1 炉内滓の顕微鏡組織

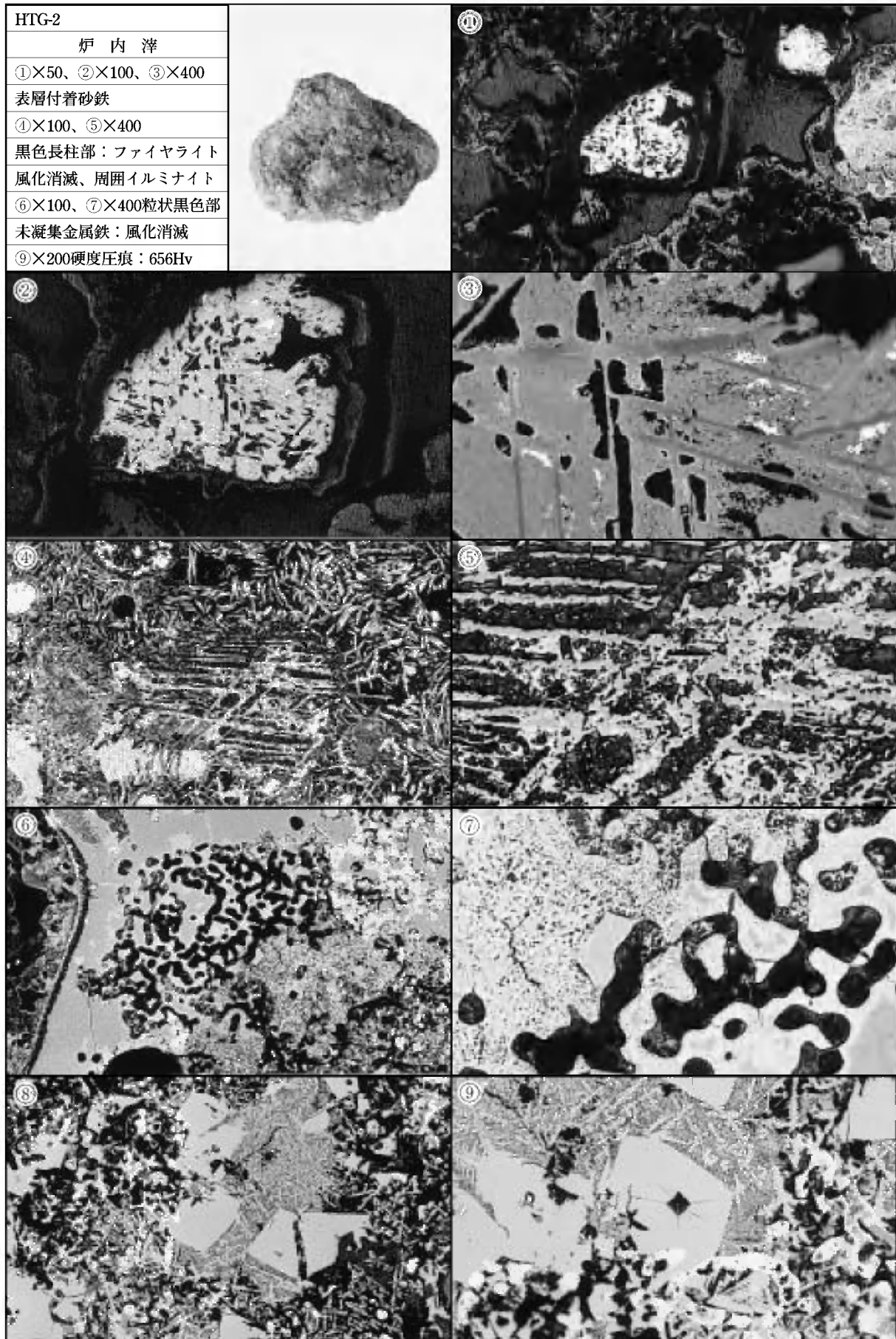


Photo. 2 炉内滓の顕微鏡組織

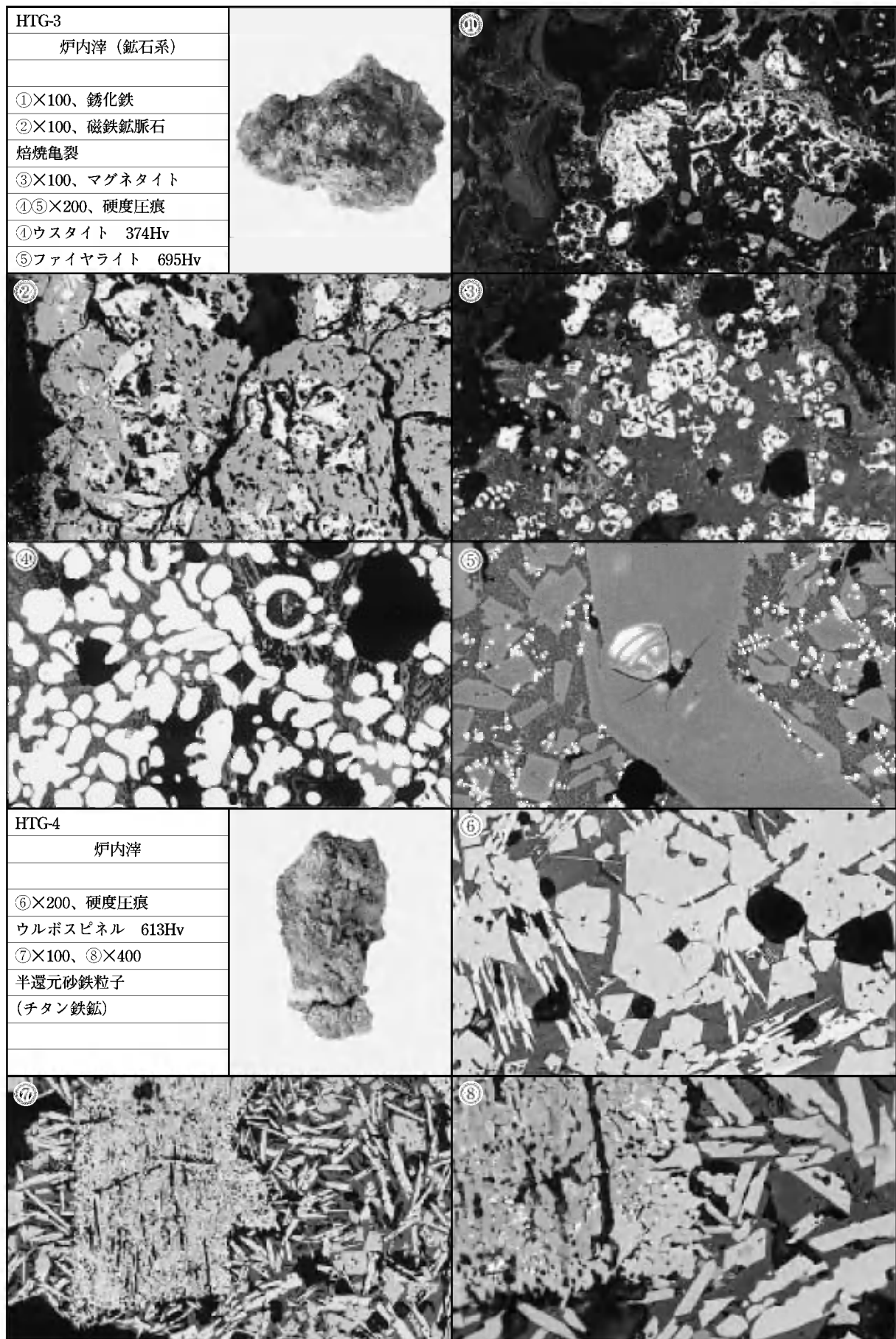


Photo. 3 鉍石炉内滓と砂鉄炉内滓の顕微鏡組織

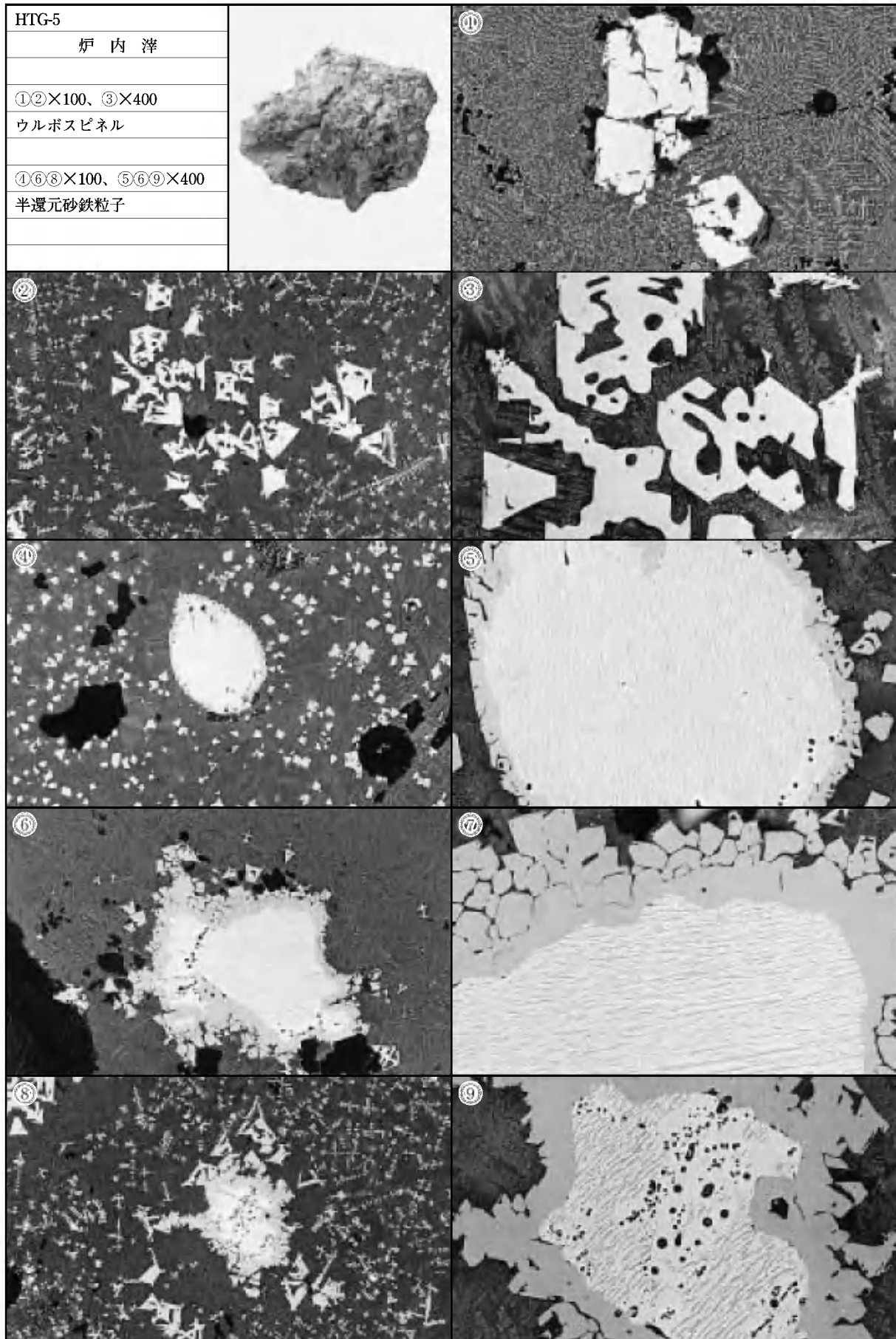


Photo. 4 炉内滓の顕微鏡組織



1 八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡調査前全景
(東から)



2 八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡調査後全景
(北東から)



3 八ヶ奥遺跡竪穴住居 1 (南から)



4 八ヶ奥遺跡竪穴住居 2 (南東から)



5 八ヶ奥製鉄遺跡製鉄炉 1 炉底検出状況
(北から)



6 八ヶ奥製鉄遺跡製鉄炉 2 (北から)



7 八ヶ奥製鉄遺跡炭窯 (北から)



8 八ヶ奥製鉄遺跡炭窯 (西から)

図版 2



1 岡遺跡
陥し穴1
(南東から)



2 岡遺跡
土壇7 (南から)



3 岡遺跡
竪穴住居10
(南東から)



1 小坂古墳群1・4号墳調査前全景
(北東から)



2 小坂古墳群1号墳(東から)



3 小坂古墳群1号墳石室(南東から)



4 小坂古墳群1号墳石室(北西から)



5 小坂古墳群1号墳周溝土層断面(南から)



6 小坂古墳群1号墳石室掘り方
(南東から)



7 小坂古墳群1・4号墳調査前全景
(北東から)



8 小坂古墳群4号墳主体部(北から)

図版 4



1 才地古墳群調査区遠景（北西から）



2 才地古墳群1号墳（南から）



3 才地古墳群1号墳石室掘り方（北西から）



4 才地古墳群1号墳石室（北西から）



5 才地古墳群1号墳石室内遺物出土状況（北西から）



6 才地古墳群1号墳奥壁（北西から）



7 才地古墳群1号墳奥壁側掘り方（南東から）



8 才地古墳群1号墳（南東から）

1 才地古墳群
4号墳石室検出
状況（西から）



2 才地古墳群
4号墳石室
（南から）



3 才地古墳群
土墳墓2下層
（南東から）



図版 6



1 才地遺跡Ⅰ・Ⅱ区全景（空撮）



2 才地遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全景（空撮）



1 才地遺跡Ⅲa区全景（空撮）



2 才地遺跡Ⅲb·c区全景（空撮）

図版 8



1 才地遺跡
竪穴住居35A-A'
土層断面（北から）



2 才地遺跡
竪穴住居65
（北から）



3 才地遺跡
竪穴住居75炭化材
検出状況（西から）



1 八ヶ奥遺跡出土遺物

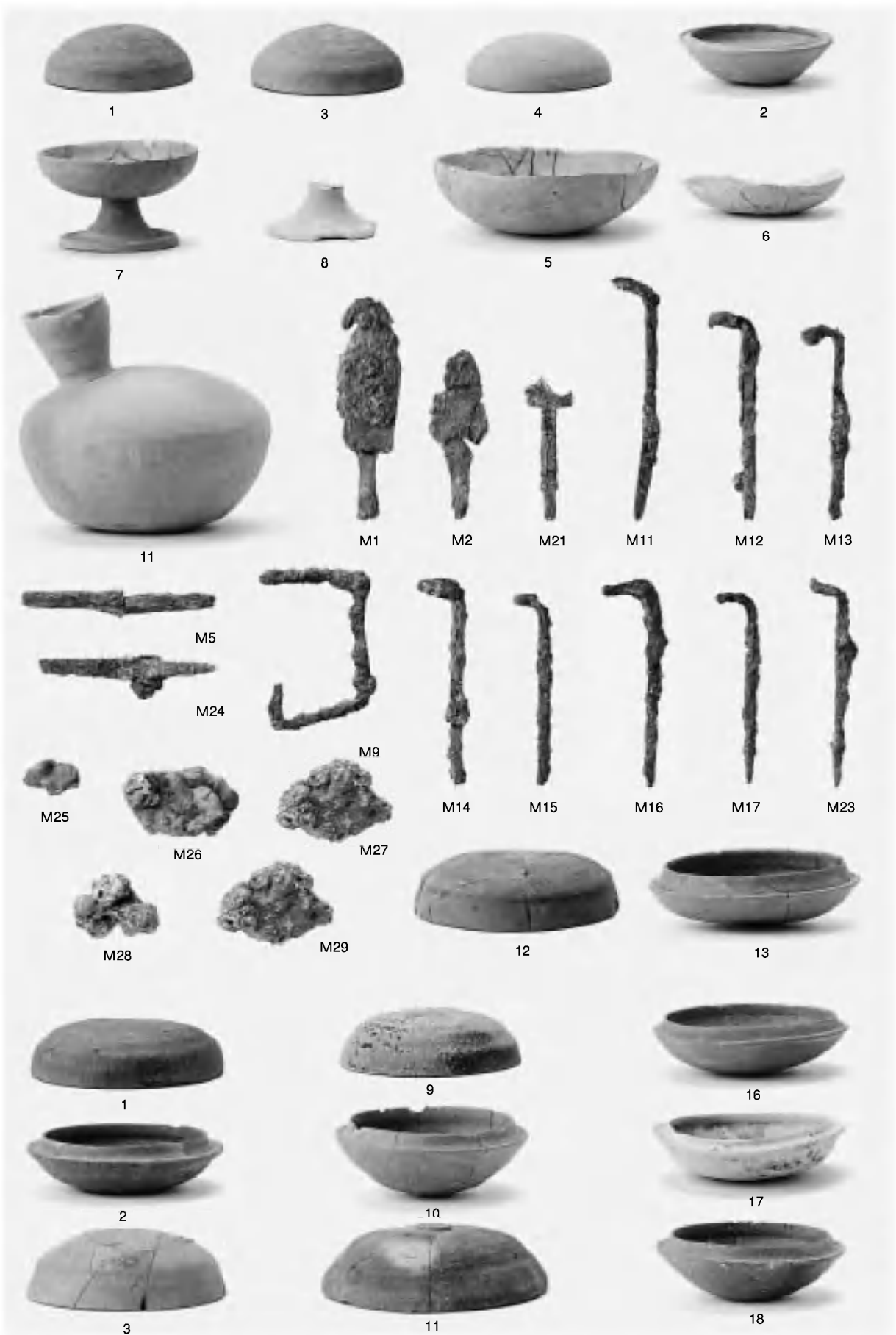


2 八ヶ奥製鉄遺跡製鉄炉 1 炉底

図版10



岡遺跡出土遺物

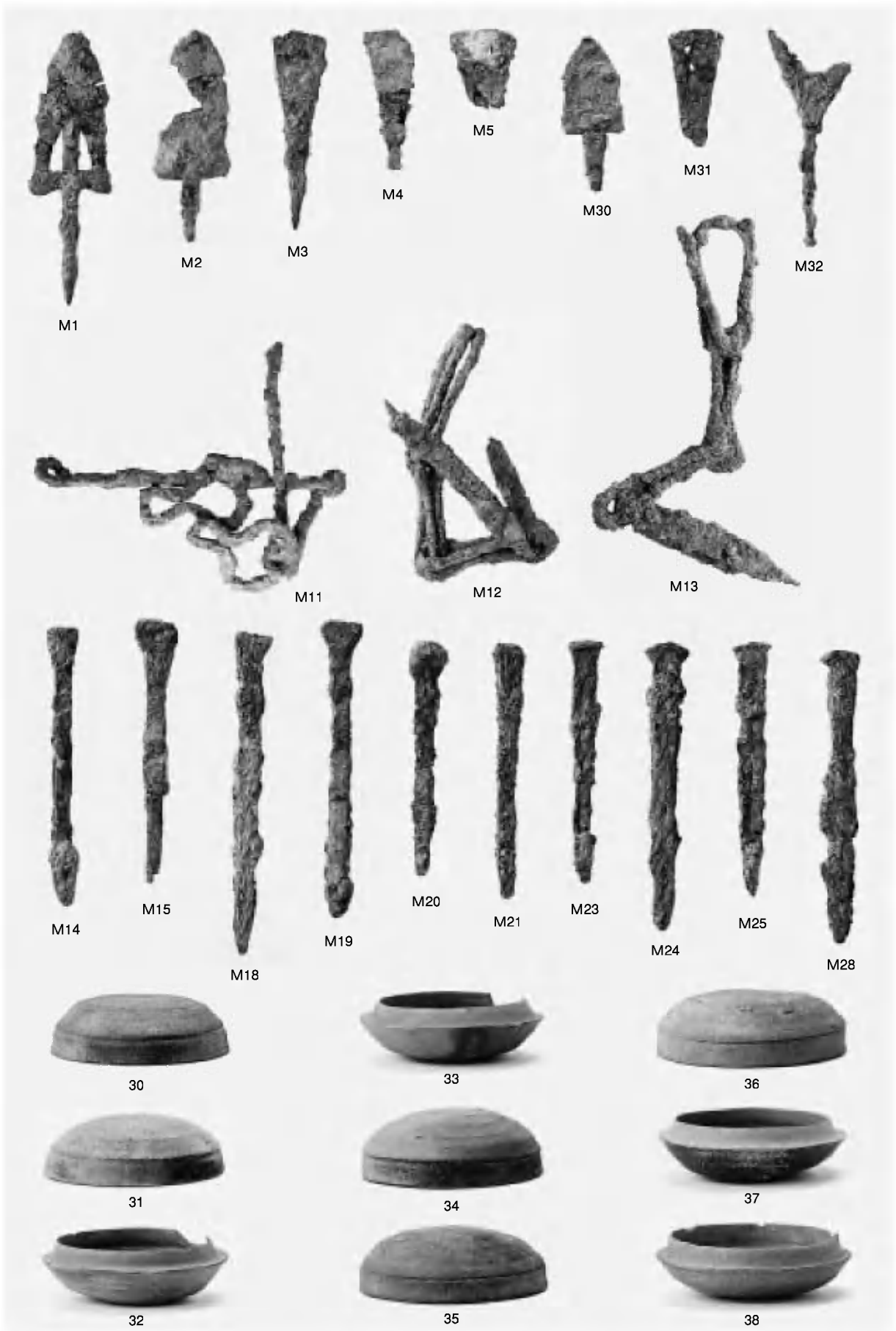


才地古墳群1・4号墳出土遺物

图版12

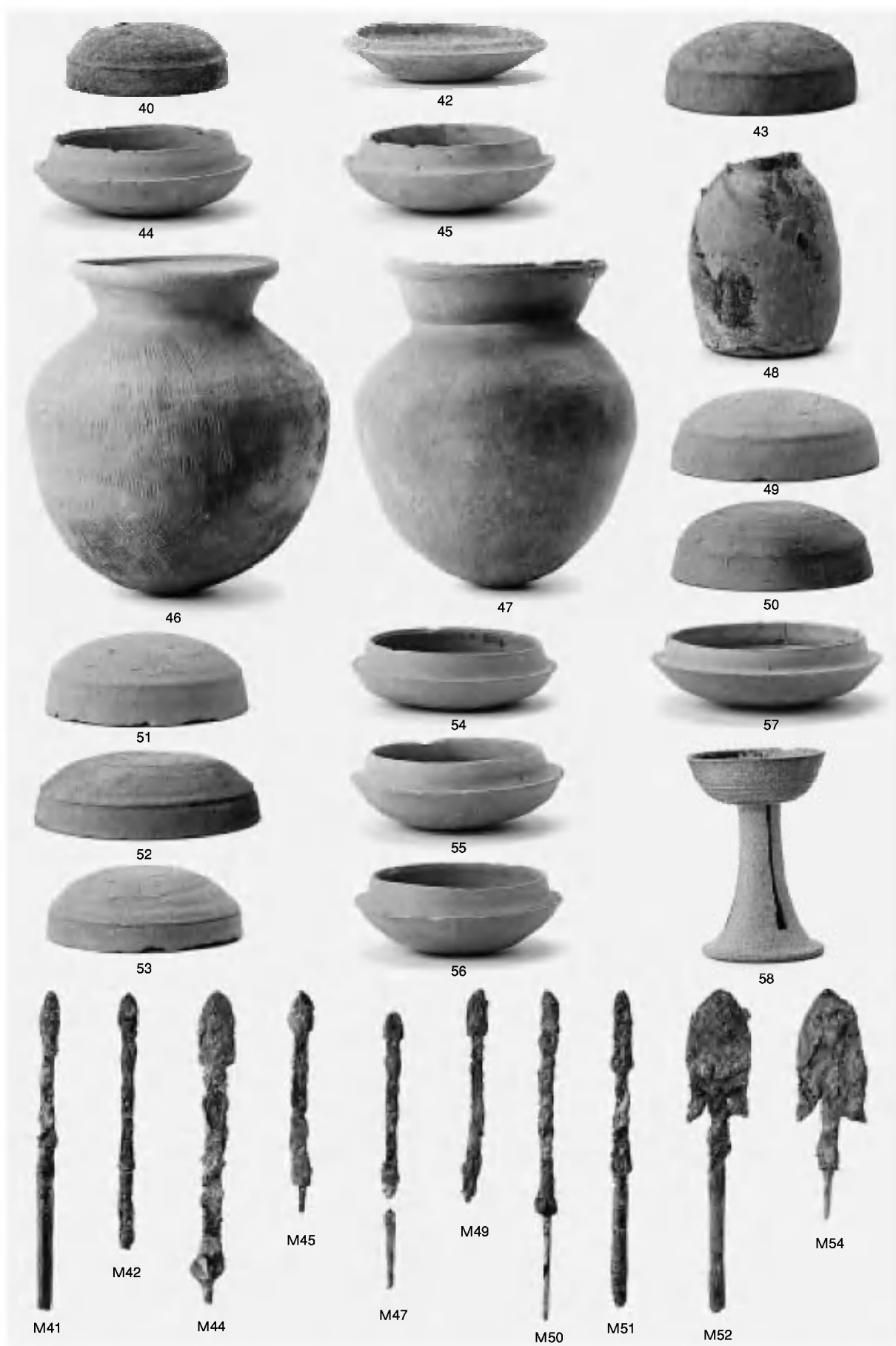


才地古墳群 1 号墳出土遺物



才地古墳群1・4号墳出土遺物

图版14



才地古墳群 6号墳、土墳墓 1・2 出土遺物



447

449

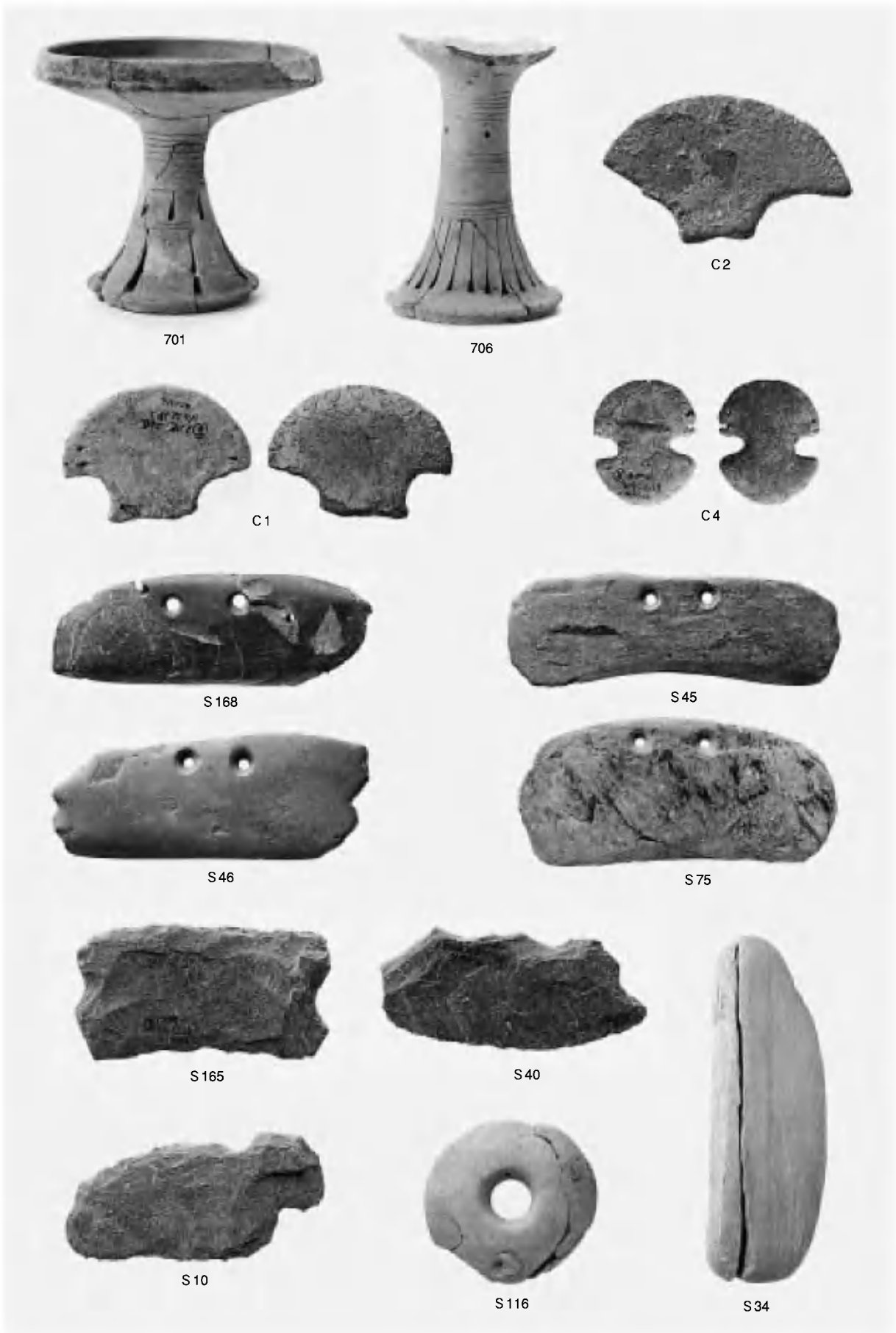
450

451

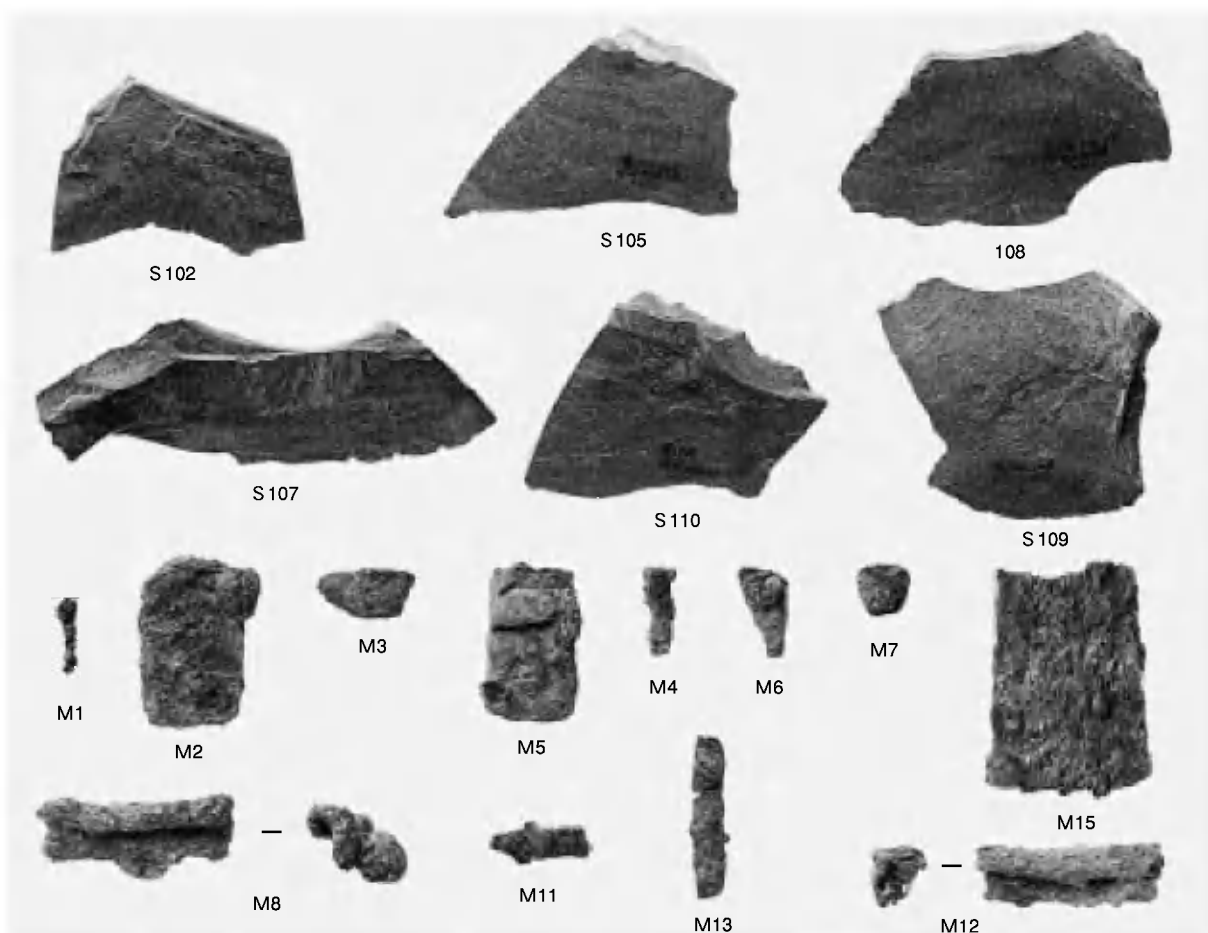
才地遺跡出土遺物 1



才地遺跡出土遺物 2



才地遺跡出土遺物 3



1 才地遺跡出土遺物 4



2 才地遺跡出土の痕跡



3 才地遺跡出土の凹線文

報告書抄録

ふりがな	やつがおくいせき・やつがおくせいていついせき・おかいせき・こさかこふんぐん・さいじこふんぐん・さいじいせき							
書名	八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡・岡遺跡・小坂古墳群・才地古墳群・才地遺跡							
副書名	主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査							
巻次	2							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	178							
編著者名	柳瀬昭彦・下澤公明・玉木秀幸・澤山孝之・光永真一・二宮治夫・浅倉秀昭・大澤正己・白石 純・降幡順子・肥塚隆保							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-0824 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	西暦 2004年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やつが 八ヶ奥遺跡	わげぐん 和気郡 さえきちやう 佐伯町小坂	33345		134° 3'40"	34° 3'40"	2000.11.4 ～2000.12.4	1,260	主要地方道 佐伯長船線 (美作岡山 道路) 建設 に伴う発掘 調査
やつが 八ヶ奥製鉄遺跡	わげぐん 和気郡 さえきちやう 佐伯町小坂	33345		134° 3'40"	34° 3'40"	2000.11.4 ～2000.12.4		
おか 岡遺跡	あかいわぐん 赤磐郡 くまやちやう 熊山町岡	33324		134° 4'	34° 48'30"	2000.4.1 ～2000.8.31	2,500	
こさか 小坂古墳群	わげぐん 和気郡 さえきちやう 佐伯町小坂	33345		134° 3'40"	34° 49'40"	2000.4.1 ～2000.7.4	514	
さいじ 才地古墳群	わげぐん 和気郡 さえきちやう 佐伯町小坂	33345		134° 3'40"	34° 59'20"	2000.9.1 ～2000.11.30	4,600	
さいじ 才地遺跡	わげぐん 和気郡 さえきちやう 佐伯町小坂	33345		134° 3'40"	34° 59'20"	2000.5.8 ～2001.12.27		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
八ヶ奥遺跡	集落	弥生時代後期	竪穴住居・土壙	弥生土器				
八ヶ奥製鉄遺跡	製鉄	古墳時代 ～古代	製鉄炉・横口付炭窯	須恵器・鉄滓				
岡遺跡	集落 古墳	弥生時代中期・ 弥生時代後期 古墳時代後期	陥し穴・竪穴住居・ 段状遺構・建物・土 壙・古墳	弥生土器・石器				
小坂古墳群	古墳	古墳時代後期	横穴式石室・石槨	須恵器・鉄器				
才地古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室・土壙墓	須恵器・鉄器・玉類・砥石				
才地遺跡	集落 墓	弥生時代中期 弥生時代後期 奈良 中世	竪穴住居・段状遺構 ・建物・土壙・溝・ 土器棺墓	弥生土器・線刻土器・石器・ 鉄器・銅線・玉類・ガラス 製勾玉・土師器				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告178

八ヶ奥遺跡
八ヶ奥製鉄遺跡
岡遺跡
小坂古墳群
才地古墳群
才地遺跡

主要地方道佐伯長船線(美作岡山道路)
道路改築に伴う発掘調査2

平成16年1月30日 印刷

平成16年1月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2